

大空とスクールアイドル

薔薇餓鬼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボンゴレファミリーの次期ボスである沢田綱吉が9人の女神たちと過ごした1年間の恋のお話。

<https://twitter.com/husuikadut>

目次

4月篇

標的 (ターゲット) 1 「マフィアとスクールアイドル」

1

標的 (ターゲット) 2 「新しい友達」

標的 (ターゲット) 3 「再会」

標的 (ターゲット) 4 「何者なの？」

標的 (ターゲット) 5 「高坂家の騒動」

標的 (ターゲット) 6 「高坂家の騒動2」

標的 (ターゲット) 7 「天使」

標的 (ターゲット) 8 「理由」

標的 (ターゲット) 9 「せっかくだから」

標的 (ターゲット) 10 「真実」

標的 (ターゲット) 11 「まさかの」

標的 (ターゲット) 12 「お誘い」

標的 (ターゲット) 13 「変わってる」

標的 (ターゲット) 14 「カラオケ」

標的 (ターゲット) 15 「雨」

標的 (ターゲット) 16 「俺は…」

標的 (ターゲット) 17 「思いついた」

標的 (ターゲット) 18 「宣言」

標的 (ターゲット) 19 「メンバー集め」

標的 (ターゲット) 20 「ランキング少年」

標的 (ターゲット) 21 「張り込み」

標的 (ターゲット) 22 「誘拐」

83

79

76

72

68

64

60

55

50

45

42

39

35

32

29

26

23

20

16

11

8

# 標的 (ターゲット)	4 6	「マフィアって何なんだろう？」	169
# 標的 (ターゲット)	4 5	「平行世界」	165
# 標的 (ターゲット)	4 4	「花見当日」	161
# 標的 (ターゲット)	4 3	「花見前夜」	157
# 標的 (ターゲット)	4 2	「神頼みと占い」	153
# 標的 (ターゲット)	4 1	「亜里沙」	150
# 標的 (ターゲット)	4 0	「寄り道」	146
# 標的 (ターゲット)	3 9	「また明日」	143
# 標的 (ターゲット)	3 8	「理想の女性」	139
# 標的 (ターゲット)	3 7	「お嫁に」	136
# 標的 (ターゲット)	3 6	「ビアンキ」	132
# 標的 (ターゲット)	3 5	「キャバッローネ」	129
# 標的 (ターゲット)	3 4	「夫婦」	126
# 標的 (ターゲット)	3 3	「にこの正体」	122
# 標的 (ターゲット)	3 2	「どこかで？」	118
# 標的 (ターゲット)	3 1	「迷子」	113
# 標的 (ターゲット)	3 0	「花見前日」	108
# 標的 (ターゲット)	2 9	「ナッツ争奪」	104
# 標的 (ターゲット)	2 8	「自分の正体」	101
# 標的 (ターゲット)	2 7	「呼び方」	98
# 標的 (ターゲット)	2 6	「二人だけの秘密」	94
# 標的 (ターゲット)	2 5	「信じてくれるか？」	91
# 標的 (ターゲット)	2 4	「信じてる」	87
# 標的 (ターゲット)	2 3	「助ける」	

#標的 (ターゲット)	71	「可愛いと思う」	261
#標的 (ターゲット)	70	「お菓子当て対決」	257
#標的 (ターゲット)	69	「気になる」	254
#標的 (ターゲット)	68	「動揺する穂乃果」	250
#標的 (ターゲット)	67	「ダンス対決」	247
#標的 (ターゲット)	66	「信じられない」	243
#標的 (ターゲット)	65	「生き残れるか？」	239
#標的 (ターゲット)	64	「殺し屋アイドル再来」	236
#標的 (ターゲット)	63	「恐怖の参加者」	233
#標的 (ターゲット)	62	「頭がよすぎな二人」	229
#標的 (ターゲット)	61	「クイズ対決開始」	226
#標的 (ターゲット)	60	「似た者同士」	223
#標的 (ターゲット)	59	「第3回戦」	220
#標的 (ターゲット)	58	「第2回戦」	214
#標的 (ターゲット)	57	「次の競技」	211
#標的 (ターゲット)	56	「第1回戦」	208
#標的 (ターゲット)	55	「スポーツ対決」	205
#標的 (ターゲット)	54	「ますます」	202
#標的 (ターゲット)	53	「同じような過去」	197
#標的 (ターゲット)	52	「大食い大会」	193
#標的 (ターゲット)	51	「おにぎり好きな二人」	190
#標的 (ターゲット)	50	「予知巫女」	185
#標的 (ターゲット)	49	「勇者ことり」	182
#標的 (ターゲット)	48	「いるかないか？」	179
#標的 (ターゲット)	47	「殺し屋アイドル」	176

# 標的 (ターゲット)	9 5	「温かい」	347
# 標的 (ターゲット)	9 4	「どうして?」	343
# 標的 (ターゲット)	9 3	「ダイエット2日目」	340
# 標的 (ターゲット)	9 2	「マフィア学」	336
# 標的 (ターゲット)	9 1	「音ノ木坂学院臨時教師リボ山」	332
# 標的 (ターゲット)	9 0	「死ぬ気弾」	328
# 標的 (ターゲット)	8 9	「ツインテール」	325
# 標的 (ターゲット)	8 8	「ダイエット」	321
# 標的 (ターゲット)	8 7	「10年後の花陽」	317
# 標的 (ターゲット)	8 6	「10年バズーカ」	313
# 標的 (ターゲット)	8 5	「μ'sのランキング」	309
# 標的 (ターゲット)	8 4	「意気消沈」	306
# 標的 (ターゲット)	8 3	「凜と花陽のランキング」	303
# 標的 (ターゲット)	8 2	「行くかどうか?」	300
# 標的 (ターゲット)	8 1	「何で?」	297
# 標的 (ターゲット)	8 0	「ラーメン好きのおじさん」	294
# 標的 (ターゲット)	7 9	「通りかかったら」	289
# 標的 (ターゲット)	7 8	「聞きたかったこと」	286
# 標的 (ターゲット)	7 7	「ファーストライブ」	283
# 標的 (ターゲット)	7 6	「最後のイベント」	280
# 標的 (ターゲット)	7 5	「コスプレ対決決着」	276
# 標的 (ターゲット)	7 4	「海未の覚悟」	272
# 標的 (ターゲット)	7 3	「決意」	268
# 標的 (ターゲット)	7 2	「コスプレ対決説明」	264

# 標的 (ターゲット)	96	「お礼がしたい」	350
# 標的 (ターゲット)	97	「初めての音ノ木坂学院」	353
# 標的 (ターゲット)	98	「伝えたいこと」	356
# 標的 (ターゲット)	99	「違和感」	361
# 標的 (ターゲット)	100	「疑い」	364
# 標的 (ターゲット)	101	「私の為に」	367
# 標的 (ターゲット)	102	「絶対に護る」	371
# 標的 (ターゲット)	103	「掟の番人」	374
# 標的 (ターゲット)	104	「名前で」	377
# 標的 (ターゲット)	105	「お詫び」	382
# 標的 (ターゲット)	106	「ボンゴレ体操3番」	385
# 標的 (ターゲット)	107	「仲良くなった?」	388
# 標的 (ターゲット)	108	「ツナという単語」	392
# 標的 (ターゲット)	109	「取り調べ」	395
# 標的 (ターゲット)	110	「新たな刑事」	398
# 標的 (ターゲット)	111	「告白」	402
# 標的 (ターゲット)	112	「真姫の家」	405
# 標的 (ターゲット)	113	「花言葉」	408
5月篇			
# 標的 (ターゲット)	114	「マフィアランド」	412
# 標的 (ターゲット)	115	「気遣いと服選び」	416
# 標的 (ターゲット)	116	「ツナ争奪」	420
# 標的 (ターゲット)	117	「お化け屋敷」	423
# 標的 (ターゲット)	118	「パートナー」	426
# 標的 (ターゲット)	119	「成仏できない殺し屋(ヒットマン)」	

# 標的 (ターゲット)	1 2 0	「誰なのか」	429
# 標的 (ターゲット)	1 2 1	「ジェットコースター」	438
# 標的 (ターゲット)	1 2 2	「死のジェットコースター(フェアラ レ・モンタンニャ)」	441
# 標的 (ターゲット)	1 2 3	「生き残ったのは」	444
# 標的 (ターゲット)	1 2 4	「目が覚めて」	447
# 標的 (ターゲット)	1 2 5	「コーヒーカップ」	450
# 標的 (ターゲット)	1 2 6	「コーヒーカップ2」	454
# 標的 (ターゲット)	1 2 7	「意外な再会」	458
# 標的 (ターゲット)	1 2 8	「コロネロ」	462
# 標的 (ターゲット)	1 2 9	「極限男と鬼教官」	466
# 標的 (ターゲット)	1 3 0	「匣(ボックス)アニマル」	469
# 標的 (ターゲット)	1 3 1	「コロネロとラルの関係」	473
# 標的 (ターゲット)	1 3 2	「襲撃」	477
# 標的 (ターゲット)	1 3 3	「襲撃開始」	481
# 標的 (ターゲット)	1 3 4	「最強の助っ人」	485
# 標的 (ターゲット)	1 3 5	「新たな力」	489
# 標的 (ターゲット)	1 3 6	「格闘組の戦い」	492
# 標的 (ターゲット)	1 3 7	「秘策」	496
# 標的 (ターゲット)	1 3 8	「新たな境地」	500
# 標的 (ターゲット)	1 3 9	「護りながらの戦い」	504
# 標的 (ターゲット)	1 4 0	「最後の一人」	508
# 標的 (ターゲット)	1 4 1	「新たな戦いの始まり」	511
# 標的 (ターゲット)	1 4 2	「スカルのΨ難」	516

# 標的 (ターゲット)	1 4 3	「雪穂の作戦」	519
# 標的 (ターゲット)	1 4 4	「運命のくじ引き」	522
# 標的 (ターゲット)	1 4 5	「観覧車」	525
# 標的 (ターゲット)	1 4 6	「夕食」	530
# 標的 (ターゲット)	1 4 7	「部屋割りとナッツ」	536
# 標的 (ターゲット)	1 4 8	「油断した真姫」	540
# 標的 (ターゲット)	1 4 9	「3人だけの秘密」	544
# 標的 (ターゲット)	1 5 0	「恋バナ」	547
# 標的 (ターゲット)	1 5 1	「恋バナ2」	551
# 標的 (ターゲット)	1 5 2	「恋バナ3」	556
# 標的 (ターゲット)	1 5 3	「決行」	560
# 標的 (ターゲット)	1 5 4	「ラルの教え」	564
# 標的 (ターゲット)	1 5 5	「押えきれない気持ち」	568
# 標的 (ターゲット)	1 5 6	「凜と希の戦い」	572
# 標的 (ターゲット)	1 5 7	「ツナの災難」	575
# 標的 (ターゲット)	1 5 8	「記念撮影とお土産」	579
# 標的 (ターゲット)	1 5 9	「さらばマフィアランド」	583
# 標的 (ターゲット)	1 6 0	「帰りの客船」	585
# 標的 (ターゲット)	1 6 1	「凜の教え」	588
# 標的 (ターゲット)	1 6 2	「爆弾発言」	591
# 標的 (ターゲット)	1 6 3	「獄寺と真姫の理論」	594
# 標的 (ターゲット)	1 6 4	「自信を持って」	597
# 標的 (ターゲット)	1 6 5	「ミナリンスキー」	600
# 標的 (ターゲット)	1 6 6	「初めてのメイド喫茶」	603
# 標的 (ターゲット)	1 6 7	「メイドことり」	607

# 標的 (ターゲット)	168	「ご注文はライオン(ナッツ)ですか？」	611
# 標的 (ターゲット)	169	「謎の女性との出会い」	614
# 標的 (ターゲット)	170	「目撃と衝撃」	618
# 標的 (ターゲット)	171	「もしかして」	622
# 標的 (ターゲット)	172	「尾行」	625
# 標的 (ターゲット)	173	「ツバサの正体」	629
# 標的 (ターゲット)	174	「A R I S E」	633
# 標的 (ターゲット)	175	「事件」	637
# 標的 (ターゲット)	176	「妙な影」	640
# 標的 (ターゲット)	177	「行方不明」	643
# 標的 (ターゲット)	178	「怒り」	647
# 標的 (ターゲット)	179	「VSオタク」	651
# 標的 (ターゲット)	180	「新たな強敵」	654
# 標的 (ターゲット)	181	「送られた写真」	657
# 標的 (ターゲット)	182	「やってみないか？」	660
# 標的 (ターゲット)	183	「バイト前日」	662
# 標的 (ターゲット)	184	「バイト当日」	665
# 標的 (ターゲット)	185	「違い」	669
# 標的 (ターゲット)	186	「クラスメイト」	673
# 標的 (ターゲット)	187	「常連客」	676
# 標的 (ターゲット)	188	「さらなる誤解」	680
# 標的 (ターゲット)	189	「宣戦布告」	683
# 標的 (ターゲット)	190	「軽蔑と脅迫」	688
# 標的 (ターゲット)	191	「誤解が解けて」	691

# 標的 (ターゲット)	2 1 3	「穂乃果の悪意なき復讐」	762
# 標的 (ターゲット)	2 1 2	「全員で夕食」	759
# 標的 (ターゲット)	2 1 1	「どちらが」	756
# 標的 (ターゲット)	2 1 0	「勉強合宿の始まり」	753
# 標的 (ターゲット)	2 0 9	「絵里からの誘い」	749
# 標的 (ターゲット)	2 0 8	「亜里沙の提案」	746
# 標的 (ターゲット)	2 0 7	「同じだった」	742
# 標的 (ターゲット)	2 0 6	「嘘つき」	739
# 標的 (ターゲット)	2 0 5	「勉強場所」	736
# 標的 (ターゲット)	2 0 4	「照れ隠し」	732
729 # 標的 (ターゲット)	2 0 3	「家庭教師 (かてきよー) 絵里」	
725 # 標的 (ターゲット)	2 0 2	「家庭教師 (かてきよー) 志願」	
# 標的 (ターゲット)	2 0 1	「噂」	722
# 標的 (ターゲット)	2 0 0	「恋の緊急会議」	719
# 標的 (ターゲット)	1 9 9	「バイト終了」	716
# 標的 (ターゲット)	1 9 8	「さらに大胆に」	713
709 # 標的 (ターゲット)	1 9 7	「女好きとやきもち焼き」	
# 標的 (ターゲット)	1 9 6	「ようやく」	706
# 標的 (ターゲット)	1 9 5	「二人で店番」	703
# 標的 (ターゲット)	1 9 4	「ツナの父親」	700
# 標的 (ターゲット)	1 9 3	「穂乃果の父」	697
# 標的 (ターゲット)	1 9 2	「母は語る」	694

# 標的 (ターゲット)	2 3 6	「助けたら」	842
# 標的 (ターゲット)	2 3 5	「つい勢いで」	839
# 標的 (ターゲット)	2 3 4	「にこの執着」	835
# 標的 (ターゲット)	2 3 3	「ユニとツバサの出会い」	830
# 標的 (ターゲット)	2 3 2	「喫茶店にて」	826
# 標的 (ターゲット)	2 3 1	「食欲との戦い」	822
# 標的 (ターゲット)	2 3 0	「バレた関係」	819
# 標的 (ターゲット)	2 2 9	「海未の手作り弁当」	816
# 標的 (ターゲット)	2 2 8	「本当にいいの？」	813
# 標的 (ターゲット)	2 2 7	「音ノ木坂学院の騒動」	810
# 標的 (ターゲット)	2 2 6	「無自覚なプロポーズ」	807
# 標的 (ターゲット)	2 2 5	「ユニの予言」	804
# 標的 (ターゲット)	2 2 4	「まさかの展開」	802
# 標的 (ターゲット)	2 2 3	「意外な展開」	799
# 標的 (ターゲット)	2 2 2	「新たなメイドの誕生」	796
793			
# 標的 (ターゲット)	2 2 1	「音ノ木坂学院臨時家庭科教師」	790
786			
# 標的 (ターゲット)	2 2 0	「昼休み」	782
# 標的 (ターゲット)	2 1 8	「進路」	779
# 標的 (ターゲット)	2 1 7	「こうなった経緯」	775
# 標的 (ターゲット)	2 1 6	「家出」	771
# 標的 (ターゲット)	2 1 5	「感謝」	766
# 標的 (ターゲット)	2 1 4	「ババ抜き」	

#標的 (ターゲット) 2 3 7 「海に行きたい」

#標的 (ターゲット) 2 3 8 「海(海未)と刺客(マフィア)」

849 #標的 (ターゲット) 2 3 9 「高速の戦い」

#標的 (ターゲット) 2 4 0 「XBUNER(とっておき)」

857 #標的 (ターゲット) 2 4 1 「ますます」

#標的 (ターゲット) 2 4 2 「二つの疑問」

#標的 (ターゲット) 2 4 3 「長いようで短い」

#標的 (ターゲット) 2 4 4 「音ノ木坂学院臨時美術教師」

870 #標的 (ターゲット) 2 4 5 「体育倉庫」

#標的 (ターゲット) 2 4 6 「最後のHR(ホームルーム)」

879

6月篇

#標的 (ターゲット) 2 4 7 「ツバサ襲来」

#標的 (ターゲット) 2 4 8 「自分の与えた影響」

#標的 (ターゲット) 2 4 9 「マフィアランド再来」

#標的 (ターゲット) 2 5 0 「リボンの企み」

#標的 (ターゲット) 2 5 1 「同じ部屋にて」

#標的 (ターゲット) 2 5 2 「修羅場(サプライズ)」

#標的 (ターゲット) 2 5 3 「スピリチュアルな二人の出会い」

904

#標的 (ターゲット) 2 5 4 「眼帯少女」

#標的 (ターゲット) 2 5 5 「気にいらぬ」

846

853

860

863

866

873

882

886

889

892

896

900

908

911

# 標的 (ターゲット)	2 7 9	「どちらも」	994
# 標的 (ターゲット)	2 7 8	「特別講師」	990
# 標的 (ターゲット)	2 7 7	「リボンからの妙案」	987
# 標的 (ターゲット)	2 7 6	「また来てくれる？」	984
# 標的 (ターゲット)	2 7 5	「考えてくれませんか？」	981
# 標的 (ターゲット)	2 7 4	「ピアノコンクール」	978
# 標的 (ターゲット)	2 7 3	「進んだ関係」	975
# 標的 (ターゲット)	2 7 2	「専属の執事」	971
# 標的 (ターゲット)	2 7 1	「風邪」	968
# 標的 (ターゲット)	2 7 0	「応援してくれる？」	964
# 標的 (ターゲット)	2 6 9	「さらなる共通点の発覚」	960
# 標的 (ターゲット)	2 6 8	「アルパカとの再会」	957
954			
# 標的 (ターゲット)	2 6 7	「雲雀恭弥 (理事長) との対面」	
# 標的 (ターゲット)	2 6 6	「居場所判明」	951
# 標的 (ターゲット)	2 6 5	「アルパカ脱走事件」	948
# 標的 (ターゲット)	2 6 4	「約束」	942
# 標的 (ターゲット)	2 6 3	「リボンと少女の出会い」	938
# 標的 (ターゲット)	2 6 2	「最高の誕生日会」	934
# 標的 (ターゲット)	2 6 1	「巫女服とスーツ」	931
# 標的 (ターゲット)	2 6 0	「殺され屋」	927
# 標的 (ターゲット)	2 5 9	「どっちだ？」	924
# 標的 (ターゲット)	2 5 8	「餃子と爆発」	920
# 標的 (ターゲット)	2 5 7	「やっぱりおかしい」	917
# 標的 (ターゲット)	2 5 6	「幻覚と拳」	914

番外編

穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ！

# 標的 (ターゲット)	280	「第1回 海未」	1001
# 標的 (ターゲット)	281	「第2回 ことり」	1004
# 標的 (ターゲット)	282	「第3回 花陽」	1007
# 標的 (ターゲット)	283	「第4回 凜」	1010
# 標的 (ターゲット)	284	「第5回 真姫」	1013
# 標的 (ターゲット)	285	「第6回 にこ」	1016
# 標的 (ターゲット)	286	「第7回 絵里」	1019
# 標的 (ターゲット)	287	「第8回 希」	1025

7月篇

# 標的 (ターゲット)	288	「テスト結果」	1022
# 標的 (ターゲット)	289	「デートの始まり」	1025
# 標的 (ターゲット)	290	「花陽の宣戦布告」	1028
# 標的 (ターゲット)	291	「花陽の好きな人」	1033
# 標的 (ターゲット)	292	「穂乃果とのデート」	1036
# 標的 (ターゲット)	293	「映画」	1039
# 標的 (ターゲット)	294	「突如現れた女性」	1042
# 標的 (ターゲット)	295	「帰ってきた」	1046
# 標的 (ターゲット)	296	「家光」	1049
# 標的 (ターゲット)	297	「恒例行事」	1052
# 標的 (ターゲット)	298	「穂乃果が見たもの」	1055
# 標的 (ターゲット)	299	「メイド服の力」	1058
# 標的 (ターゲット)	300	「泥酔穂乃果」	1061
# 標的 (ターゲット)	301	「優勝するのは誰だ」	1065
# 標的 (ターゲット)	302	「海未舞う」	1068

#標的 (ターゲット) 303 「愛寵恋時雨 (あいちようこいしぐ

れ)」

#標的 (ターゲット) 304 「山本と凜の出し物」

#標的 (ターゲット) 305 「爆食い」

107710741071

4月篇

#標的(ターゲット) 1 「マフィアとスクールアイドル」

これはマフィアのボスと元スクールアイドルたちが過ごした、1年間のお話。

時は高校3年生になる前の春休み。

ツナは並盛高校の終業式が終わり、春休みも終盤にさしかかっていた。ツナは春休みを満喫しているはずもなく…リボーンにネツチヨリ修行させられていた。

「はあはあ…も、もうダメだ…」

「そのぐらいでへばってんなツナ。そんなんじやネオボンゴレI世にはなれねえぞ。」

「だから！マフィアのボスになる気はないって！」

今ツナはリボーンの特訓で並盛から、隣町の音ノ木坂まで走らされていた。虹の代理戦争が終ってから敵が襲撃されることはないが、リボーンが「いつお前を狙う奴がいるかわかんねえから、これから毎日ネツチヨリ修行だぞ」と言い、最近になってからこんなこんな日々が続いていた。もちろんこんな特訓する前からも、ボンゴレ

式修学旅行、ボンゴレ式文化祭、強化プログラムなどさまざまなことがあったりしたので、少なくとも普通の生活を送れることはなかった。

「もうすぐお前は3年だ、高校生活もあと1年で終わりだ。高校が終ったらボンゴレを継ぐんだ、そろそろ覚悟を決めるときだぞ。」

「人の話を聞けよ！…って…も、もう…ダメ…」

リボーンにつっこむツナだが、隣町からずつと走

らされたので、さすがのツナもその場で倒れてしまう。そんなツナ

にリポーンはいつものように

「つたく情けねえな、ダメツナが」と言

い放つと、ツナの背中に強力な蹴りをいれる。

「グヘ!？」

「まあいい…今日はこのくらいにしといてやる。」

「ほ、本当に…?」

「ああ。だがそのかわり春休みの宿題をやるぞ。まだ全然やってないだろうが。」

「そ、そうだったー!忘れてたー!」

完璧に春休みの宿題をやるのを忘れていたツナ。この春休みはリポーンの修行もあつたりしたが、別に勉強ができなくなるほど修行はしていない。

「今回は俺がお前の自主性を重んじて、俺は何も言わなかった。別にわかんねえところを聞いてくれば、俺はちゃんと教えるつもりだったぞ。あと獄寺と山本には何も手出しするなと俺が言っておいた。」

「な、何でそんなことするんだよ!」

「わかんねえのか?」

「な、何がだよ?」

「獄寺はお前に甘いところがあるからな。最悪、自分の宿題をお前に写させるかもしれねえからな。」

「そ、それは…」

リポーンの言葉にグウの音もでないツナ。高校に入学してから何度か獄寺に宿題を写させてもらったことがある。といつてもそのことがバレてリポーンにネツチヨリとお仕置されたのだが…

「それに山本は今年で並盛高校の野球部引退するんだぞ。」

「そ、そうか…今年でもう引退…」

「今あいつは、死ぬ気で野球の練習してるんだ。」

それをお前は邪魔できんのか?あいつが野球を

どれだけ好きなのはお前だってよくわかって

るはずだろうが。」

「…」

今回ばかりはリボーンの見解は間違っていないので、ツナには反論の言葉すら出なかった。

「とにかくだ。この近くにファミレスがある。そこで宿題をやるぞ。安心しろちゃんとお前の宿題と教科書は持ってきてある。」

「ファミレスで!?!何で!?!」

「家だとアホ牛が邪魔したりするからな。ファミレスなら誰にも邪魔されねえし、エスプレッソが飲めるだろ。」

「それってお前がコーヒー飲みたいだけだろ!」

「ごちゃごちゃ言つてねえでさっさと行くぞ。エス…お前の宿題を終わらせるぞ。」

「今…エスプレッソって言いかけたよ…」

こうして二人は宿題を終わらせるために、近くのファミレスにまで移動する。

一方、ツナとリボーンが向かおうとしているファミレスでは…

「海未ちゃん!宿題写させてよー!」

「ダメです!何度言えばわかるんですかあなたは!なぜあなたはいつも宿題を早めにやらないのですか!」

「だってー!終業式が終わってから生徒会の仕事が忙しくて全然勉強ができなかったんだもん!」

「言い訳しないでください!私もことりも同じ生徒会なのに、ちゃんと宿題を終わらせているのですよ!」

子供のように駄々をこねる穂乃果に、幼馴染である海未が親のように叱る。

「う、海未ちゃん…そんなに怒らなくても…」

「ことりは穂乃果に甘すぎます!穂乃果、あなた

は生徒会長なのですよ！生徒会長であるあなたが

宿題の一つも提出できなくてどうするのですか！」

「生徒会長だからって言われても、わかんないものはわかんないんだもん！海未ちゃんが写させてくれれば、それで終わる話でしょ！」

「そんなことでどうするんですか！私たちはもう3年生になるのですよ！もう学校の廃校も免れて、sも解散したのです、これから私たちは進路のことを考えないといけないのです！これからは勉強が大切になってくるのですよ！」

「そ、そんなこと言われても…」

勉強嫌いの穂乃果は海未の言葉に耳が痛い様子だ。そんな中でファミレスに新しい客が入ってくる。

「いらっしやいませー。お客様何名様でしょうか？」

「二人だぞ。」

ツナの肩に乗っているリボーンが、人差し指と

中指を立てながら答える。赤ん坊であるリボーン

が喋ったことに店員は驚きを隠せなかったが、

店員は気を取り直して話を続ける。

「え、えっと…禁煙席と喫煙席のほうはどうされます？」

「あ、禁煙席でお願いします。」

「かしこまりました。」

ここはツナが答え、店員の案内のもと禁煙席に案内される。案内されら場所が穂乃果たちの隣の席だった。

「こちらの席へどうぞ。ご注文がお決まりになりましたら、そのボタンを…」

「もう決まってるぞ。ドリンクバー2つだ。」

「かしこまりました。ドリンクバー2つですね。ではご自由にご利用ください。」

リボーンがドリンクバーを二人分を注文すると、

店員はその場から去っていく。

「さて勉強を始めるぞツナ。まずは英語からだぞ。」

「無駄口を叩いてないで早く始めますよ穂乃果。まずは英語からで

す。」

リボーンと海未がそう言うと、まずは英語の宿題から始めていく。

「んじやまずこの英文を訳してみろ。」

「まずは、この英文を訳してみてください。」

「え、えつとー…彼が猫に噛みついた…?」

「えーと…彼女の犬の子供は…妖怪だった…?」

「ふざけてんのか?／＼ふざけているのですか?」

「ふざけてないって!／＼ふざけてないよ!」

ツナと穂乃果の答えに、リボーンと海未は二人は怒りを露にしていた。その見事なハモリっぷりに、ことりは少し驚いていた。

「なんか…あっちの席にいる人となんか同じようなことを言ってる…それより何であっちの人は赤ちゃんに勉強を教えてもらっているんだらう?」

ことりはリボーンに勉強を教えてもらっているツナを見て疑問符を浮かべていた。ことりがそんなことを考えていると、お互い次の問題にさしかかっていた。

「じゃあ、今度はこの文章を訳してみろ。」

「次はこの文章を訳してみてください。」

「えーと…彼は先週の日曜日に、宇宙人と出会うであらう…?」

「えつと…彼女は先週の土曜日に、地底人と戦うであらう…?」

「何で過去形と未来形がちやまぜになっただ(いるんですか)!」

「え…違うの?／＼ええ!?!違うの!?!」

自分たちの答えが間違っていたことに驚くツナと穂乃果。またまた珍回答をした二人にことりは、少し笑っていた。

「(この二人面白い…)」

「何で宇宙人が出てくるんだ!それにこの文章は現在進行形の文章だらうが!」

「何で地底人が出てくるのですか!それにこの文章は現在完了形の文章ですよ!」

ツナと穂乃果も似ているが、リボーンと海未も似たような口調と言葉で怒っている。そしてさらに勉強が続いていくと。

「(眠い…)」

中々宿題が進まず、ツナと穂乃果は眠くなつてしまい、数分前から顔が上を向いたり、下を向いたりし始めている。それを見たりリボーンと海未は二人の名前を叫ぶ。

「ツナ！／穂乃果！」

「は、はい！」

ゴン！

「いってー！／いったーい！」

リボーンと海未の声にびっくりして、ツナと穂乃果は店の壁に後頭部を打ち付ける。その様子にリボーンと海未は怒りを再び露にする。

「勉強中に寝るとは、いい度胸じゃねえかツナ。」

「勉強中に寝るとは、いい度胸していますね穂乃果。」

「ち、違うってリボーン！俺は寝てなんて…」

「ち、違うからね海未ちゃん！私は寝てなんて…」

ツナと穂乃果が言い訳するも、リボーンと海未は不気味なほど爽やか笑顔を浮かべてはいるが、ものすごい黒いオーラを放っている。

「誰のために勉強を教えてやっているとってんだ！」

「誰のために勉強を教えてあげていると思ってるのですか！」

「ごめんなさいー！」

教える側も教わる側も、なにかから何までそっくりという面白い光景である。そんな光景を見てことりは笑いを我慢できずに、おもいつきり笑ってしまう。

「プツ…アハハハハハ！」

「何が面白いのですかことり！」

「だ、だって！海未ちゃんと穂乃果ちゃん、さつきからあっちの席にいる人たちと同じこと言ってるだもん！」

「え？」

ことりがそう言うと、穂乃果と海未は隣の席のツナとリボーンを見る。ツナたちも同じくことりの言葉を聞いて穂乃果たちのほうを見ていた。

「すまねえな。勉強の邪魔しちゃったか？」

「あ、赤ちゃんが喋ってるー!?!」

#標的（ターゲット）2 「新しい友達」

流暢に話すリボーンを目の前に穂乃果たちは驚きを隠せなかったが…

「本当にツナの奴、いつつもテストは欠点ギリギリでな。」

「穂乃果もそうなんです、私も留年するんじゃないかと思っていつもヒヤヒヤしてるんですよ。」

リボーンと海未はお互いに、自分の苦勞について語りあう。お互い5分もかからずに、仲良くなっていた。

一方ツナと穂乃果も。

「いやー、勉強をやるうと思っただらっつい他のことに気が散るんだよねー。」

「あーわかるよ。なんか全然読まなくなった漫画

とかが目に入って、読んでみたらっつい面白くて読

んじやうんだよねー。」

「あーそれ私もある!」

勉強嫌いのツナと穂乃果もリボーンたちと同様、気があい、すぐに仲良くなっていた。そのあち互いの関係を打ち明け、そして話題は学校のことに移っていく。

「スクールアイドル?」

「ええ!?!知らないんですか!?!」

「うん…全然。むしろスクールアイドルなんてものがあることさえ、知らなかった。」

あまりアイドルとかに興味がないツナは、スクールアイドルという存在を初めて知る。ことりはツナがスクールアイドルを知らないことに驚く。

「こいつらは元スクールアイドルの☆sのメンバーだぞ。そんなこ

とも知らねえのかダメツナが。」

「お前も知らなかっただろ！」

ツナがつっこむと、リボーンの手にはスマホが握られていた。どうやらリボーンはネットで調べて、

μsのことをさつき知ったようだ。

「凄いなー穂乃果ちゃんは。アイドルもやって、その上に学校の生徒会長なんですよ？なんか尊敬しちゃうなー。」

「えへへ！尊敬だなんて…そんなに褒められると嬉しいな！」

ツナに褒められて穂乃果はほんのりと顔を赤らめる。別のツナに恋愛感情が芽生えたというわけではなく、ただ単に褒められて嬉しいだけである。

「そうは言っても、書類は貯まりにたまってこっちは苦労してますけどね。」

「酷いよー海未ちゃん！せつかくいい感じだったのに、何でそんなこと言うのー！」

「私は本当のことを言っただけです。」

「確かに本当のことかもしれないけど！今それを言う必要はないですよー！」

海未の言葉に穂乃果はかわいらしく頬を膨らませて怒る。

「アハハ…海未ちゃんと穂乃果ちゃんて仲が悪いの…？」

「ううん、むしろ逆だよ。そう言うツナ君も、リボーン君仲が悪いの？」

「仲が悪いわけじゃないんだけど…」

こどりに尋ねられて考えこツナ。リボーンには毎日蹴られたり、爆破されたり、急に銃弾を放ったりしているが別に心の底から嫌いというわけでもなく、戦闘においてはむしろ何度も助けられてきた。だがリボーン教育にはほとほと嫌気がさしているのも事実である。

「うくん…なんて言ったらいいかわかんないや…」

「私から見たら、いい生徒と先生に見えるんだけど。違うかな？」

「ええ!?そんなわけないよ！リボーンは先生なんかじゃないって！死神…いや死神よりも…」ダメツナのクセに言うようになったじゃねえ

か。「ひいひいひい！」

つい勢いでリボーンのことを死神より恐ろしい存在と言つてしま
いそうであつたが、そう言おうとしたことに気づいたリボーンがツナ
にドスの聞いた声でツナに言う。

「まあいい…そろそろ帰るぞツナ。帰ったらネツチヨリと勉強だ。今
日は宿題が全部終わるまで寝れると思うなよ。」

「ぞ、そんなー！」

リボーンに終わるまで寝れないと言われ、ショックを受けるツナ。
それを見た穂乃果は「大変そうだなー」と呟くが。

「あなたもです穂乃果。今日は宿題を終らせるまで寝れると思わない
てください。」

「えー！？」

リボーンと海未には逆らえないツナと穂乃果であつた。

#標的（ターゲット） 3 「再会」

午後5時。ツナとリボーンはファミレスで穂乃果、海未、ことりと分れ、それぞれの家に帰っていく。

「はぁーなんか面白い人たちだったなー。」

「だな。だが話しすぎて勉強が全然進なかつたぞ。」

「うっ…」

「んじゃ俺は先に帰ってるぞ。」

そう言うとりボーンは相棒である形状記憶カメ

レオンのレオンを翼に変型させて、空中へ飛ぶ。

「おい！リボーン！俺を置いていく気かよ！」

「道は覚えてるから大丈夫だろうが。さっさと帰ってこいよツナ、夕飯が冷めちまうぞ。」

「リボーン！待てよ！聞いてんのか！」

ツナの言葉を見無視し、リボーンは空を飛んで並盛にあるツナの家に戻っていく。

「まったくリボーンの奴…はぁ」

ため息をつくるとツナはとぼとぼと歩を進め、家に帰っていく。途中、相棒であるナッツに外の空気を吸わせてあげようと、ツナはまわりに人がいないことを確認してボンゴレギアからナッツを頭の上に乗せて歩いていく。

そして少し歩いていくと。途中でツナがとある店を見て立ち止まる。

「あ和菓子屋さんだ。せっかくだし買って帰ってあげようかな。」

ツナは母の沢田奈々、居候のイーピン、ランボ、フウ太、ビアンキのために和菓子を買ってあげようと思い、お店の中に入っていく。

「すいませんー。あ、そうだ！ナッツを戻さなきゃ！」

「はーいー！」

ツナが慌ててナッツを戻そうとすると、店の奥のほうから割烹着を着た穂乃果が出てきた。

「あれ！ツナ君！」

「ほ、穂乃果ちゃん何でここに!？」

「ここは私の家なんだけど…そういうツナ君こそ何で…？」

「お、俺は母さんたちに和菓子でも買って帰ろうかなあって思ってた…ま、まさか穂乃果ちゃんと同じ家だったなんて全然知らなくて…」

偶然寄った和菓子がまさか穂乃果の家だったことに驚くツナ。穂乃果も同様にツナとこんなにすぐ再会したことに驚く。穂乃果が驚いていると、穂乃果の視界にツナの頭に乗っているナッツが目にとまる。

「ねえ？ツナ君のその頭に乗ってる子…」

「あーごめん！お店の中なのに動物を連れこんじゃって！買ったらすぐに帰るから！」

「かわいいー！」

「え？」

ナッツを見て目をキラキラさせる穂乃果。どうやらナッツに興味津々様子である。まさかの穂乃果の反応にツナは目が点になってしまった。

「さ、触わりたいたんだけどいい!？」

「俺はいいけど…ナッツは臆病でさ。」

「ガウ…」

ツナがそう言うとナッツは目をキラキラ輝かせている穂乃果を見て怯えている。

「大丈夫だよ。怖いことはしないよ。」

「だってさナッツ。大丈夫だって穂乃果ちゃんは優しいから。」

「ガ、ガウ…」

穂乃果が笑顔でナッツに話しかける。そしてナッツはツナの言葉信じて、怯えながらも穂乃果のほうへ歩いていく。

「よーしよーし。」

「ガウ♪」

あれだけ怯えていたナッツだったが、穂乃果になでられてすぐになつき始める。

「そういえばさつきはいなかったよね。どこにいたの?」

「え!?!いや…その…この辺に知り合いがいて、そこで預かって貰って!」

「あー。なるほどね。」

「(よかった…信じてもらえた…)」

ボンゴレギアの中にずっといたとは言えなかったので、ツナとつきに嘘をついた。穂乃果が何も疑わなかったのでツナは内心ホツとしている。

「かわいい猫だねー。」

「(猫じゃなくてライオンなんだけど…って言えないよなー、いくら小さいとはいってもライオンを飼ってるなんて…)」

「ホノ太郎。おて。」

「ガウ!?!」

「(なんか勝手に名前つけられてる!?!ホノ太郎って何!?!)」

急にホノ太郎と呼ばれてナッツは驚いてしまう、一方ツナも穂乃果がナッツに勝手に名前をつけたことに驚く。

「あ、あの…ホノ太郎じゃなくてナッツ…」

「え?何か言ったツナ君?」

「い、いや…何も…」

「ねえホノ太郎はなにか特技とかないの?」

「と、特技…え、えつと…」

ナッツに何か特技がなにかあったかと考え始めるツナ。

ナッツは普段はおとなしい性格で、いつもボールで遊んでいたりと、ゴロゴロしてるので、すごいといえる特技はないとっていい。

「戦闘の時にマントやガントレットに変型するなんて言っても信じてもらえるわけないよなー…それ以前にそれは特技なのか…?」
カンビオ・フォルマ
形態変化は特技なのかと考え始めるツナ。形態変化が特技かどうかはわからないが、凄いいことなのは確かである。

「どうしたのツナ君?」

「い、いや!よくよく考えてみたら、これといった特技はなくてさ!」
「へー、そうなんだ。じゃあ、何か覚えさせ

ようよ。そうだ!燃えている輪っかをくぐる

やつとかどう?」

「ガウ!」

「(なんかめちやくちや難易度難しいのきたー!というか穂乃果ちゃんって天然?)」

「ホノ太郎、やってみようよ。何事もチャレンジだよ!」

穂乃果のハチャメチャな提案に、ツナもナッツも驚きのあまり、開いた口が塞がらない状況になっていた。

そしてツナはなにか話題を切り換えようと思い、穂乃果に尋ねる。

「ね、ねえ穂乃果ちゃん?宿題はいいの?海未

ちゃんが今日は終わるまで寝かせないとか言ってたけど?」

「もう少ししたら海未ちゃんが来るから、海未ち

ゃん来たら宿題を始めようかなって。」

「そうなんだ。」

「にツナ君が女の子で同じ学校だったら、写させ

てもらったのになー。」

「それって意味あるのかな…?」

学力が苦手な者同士が宿題を見せあっても、なんの意味もないどころか、マイナスになってしまうのではないかとツナは思ってしまう。

「あーあ。何で春休みなのに宿題なんてあるんだろうね。」

「本当だよねー。宿題さえなかったら、海未ちゃんにあんなにガミガ

ミ言われることもないのに。」

「俺も同感。」

「ガミガミ言ってますいませんでしたね。」

ツナと穂乃果の後ろから第3者の声が聞こえる。そこには黒いオーラを放っている海未と苦笑いしていることりがいた。そんな海未を見て、穂乃果となぜかツナとナッツまで体中から冷汗を流し、震えていた。

「う、海未ちゃん…?」

「さあ穂乃果? さっそく始めましょうか?」

笑顔でそう言う海未だったが、目が全然笑っていないかった。こんな思い空気に耐えられなくなったのか、ツナはここで言い訳をして帰ろうと決意したが…

「ツナ君? そう言えば、あなたも穂乃果の意見に同意していましたよね?」

「い、いやあれは! 海未ちゃんじゃなくて、リボーンのことです!」

ツナが「俺も同感」と言ったのは本当にリボーンのことを言ったのだろうが、海未にはそうは聞えなかったらしい。

「い、いや! 俺もう帰らないといけないし!」

「何か言いました?」

「イイエ…ナニモイッテマセン…」

こうしてなぜかツナまで海未の教育を受けることになってしまった。はたしてツナと穂乃果は無事でいられるのであろうか。

#標的（ターゲット） 4 「何者なの？」

「いいですか！宿題終わるまで休憩はないと思ってください！」

「ええ!?そんなあー!」

「ガタガタ言わないでください！元はと言えばあなたたちが宿題をやっていないかったのが悪いのでしよう?」

「うっ…!」

「ハハハ…」

海未の意見に何も言えなくなるツナと穂乃果。それを見てことりは苦笑いしていた。ちなみにナッツはことりの膝の上でゴロゴロしていた。ナッツはことりには全く怯えず、すぐになついた。

「(何でこんなことになったんだろう…まあリボーンの奴に教わるよりはマシだけどき…)」

ツナがそんなことを考えていると、海未がツナに話しかける。

「その前にツナ君。あなたのスマホを貸して欲しいのですがよろしいですか?」

「えっ?」

「家の方に連絡しておかないと、心配されるでしょう。事情は私のほうから話しておくので。」

「あ、そっか。はい。」

「どうも。」

「電話帳のアプリが右上のほうにあるから、そこを押して。」

「はい。」

ツナは海未に自分のスマホを渡す。そして海未がツナのスマホの電源をつけようとしたのだが。

「あれ?電源がつきません…」

「え、何で?」

スマホの電源をつけようとスイッチを押す海未だが、全く反応がな

く画面が真っ黒なままである。穂乃果とことりもツナのスマホを覗いて見る。

「充電がもうないとかじゃないの?」

「もしかして故障かな?」

「ええ!?!でも今日はあんまり使ってないし、別に調子が悪いっていうわけでも…ん?ちよつと待てよ…!」

ここでツナはあることを思い出す。このスマホは高校2年生の時にリボンがくれたもので、ボンゴレファミリーが最新の技術をつぎこんで作ったスマホであったことを。ボンゴレが作ったとあつて貰うのを止めようと思ったツナだったが、リボンに強制的に持たされたのだ。

「(そういえば死ぬ気の炎でも充電が可能だったりとか…なんか普通のスマホにはない機能をつぎこんでるとか言ってたような…)」

「ツナ君?どうしたのですか?」

「ちよ、ちよつと…貸してくれない?」

「は、はい…」

海未がツナのスマホをツナに渡すと、突然画面にイタリア語の文字が浮かびあがる。

『H o a u t i o n c a t o . T u n a y o s i S a w a d a
l a d e c i m a g e n e r a z i o n e d i V o n g
o l e (認証しました。ボンゴレファミリー十代目、沢田綱吉)』

文字が浮かびあがると、電源がはいり、ホーム画面に移行する。ちなみにこのスマホには死ぬ気の炎を感知するセンサーがついており、ツナ以外の人には使えないという代物である。

「な、なんか出たよ!」

「外国語かな…?」

「な、何なのですかこれ!?!」

急にイタリア語が出てきて驚く、穂乃果、ことり、海未。

「何だろうこれ…?」

「あなたのスマホですよね!?!」

「い、いや…そうなんだけど…」

「まあいいです…とにかく連絡を…」

そして再び海未がツナスマホに触れると、スマホの画面が真っ黒になり、再び画面にイタリア語が浮かびあがる。

『Non riesco a autenticare (認証できません。)』

「なぜですか!?!なぜまた画面が!?!」

「なんか…俺にしか使えないような機能がついてるみたい…」

「すっごーい!ツナ君のスマホって!」

ツナのスマホの機能に驚く穂乃果。ことりもツナのスマホの機能に関心していた。

ともかくツナにしか使えない機能だとわかり、ツナが電話をかけようとしたその時、ツナのスマホにLINEが入る。

ピンローン!

「あーLINEだ。リボーンから?」

『ちやおっすツナ。ボンゴレの携帯の機能は凄かっただろ?そいつにはお前の死ぬ気の炎を感知するセンサーがついてて、お前じゃないと使えないようになってるんだぞ。今後は気をつけるよ。』

18:15

「(何で知ってるんだよ!あいつ帰ったんじゃないのかよ!?)」

ツナが心のなかでつつこむと、再びツナのスマホにLINEがはいる。

ピンローン!

『何で知ってるんだよ!あいつ帰ったんじゃないのかよ!と思ってるツナに連絡だぞ。お前、今日は穂乃果の家で宿題やるんだってな。俺は全然構わないぞ。一応、ママンにもそのことを言ったら「わかったわ」って言うてくれたぞ。そんじゃ頑張れよツナ。チャオチャオ。』

18:16

「(あいつは何で全部知ってるんだよ!俺の心を読んだ上に、穂乃果ちゃんの家にいることまで!)」

何もかもリボーンに知られていることにツナは、

まだ辺りにいるのではないかと辺りをキョロ

キョロ見渡すがリボーンがいる気配はない。

「なんか親の許可は取れたよ…」

「まだ電話していませんよね!」

「なんか俺が電話する前に、もうこっちの事情をリボーンが把握して…」

「本当ですね…なぜ知っているのしょう…?」

「さあ…?」

ツナが海未にリボーンの送ってきたLINEの文章を見せると、海未は一応納得する。

「ゴホン!ともかくこれで親の許可はおりましたことすし。勉強を始めますよ。」

ともかく海未の指導のもと、宿題を始めていくツナと穂乃果。

だが海未には一つひっかかっていることがあった。ツナのスマホの機能と、さきほどツナがりボーンが送ってきたLINEの内容に書いてあった、死ぬ気の炎とボンゴレという単語に。

「(一体あなたは何者なのか…?)」

#標的（ターゲット） 5 「高坂家の騒動」

勉強を続けていくこと2時間と40分。ツナと穂乃果は海未の指導のもと勉強を続けていた。

一方、高坂家の別の部屋では。

「雪穂ー。」

「なーに？お母さん？」

「今、穂乃果が海未ちゃんことりちゃんが出来て宿題やつてるから、お茶を持っていってこない？」

穂乃果の母が、穂乃果の妹である雪穂に頼む。

「いいけど。お姉ちゃんまだ宿題終わらせてなかったの？」

「何回も言ったんだけどねー。あの子ったら、「あとでやるから大丈夫」って言っつとそのままなの。」

「まあ…それがお姉ちゃんだよねー。」

そう言いながら雪穂はお盆にお茶を乗せて、穂乃果たちが勉強している部屋に持っていく。

一方、穂乃果たちが勉強している部屋では。

「この問題はこの公式を使って解くのですよ穂乃果。ツナ君、さきほどの問題は解けましたか？」

海未が二人同時に宿題教えていた。あれから休憩なしでぶっ続けで勉強している。ことりはナッツのお世話をしたり、近くのコンビニで食べ物を買ってきてくれたりしていた。

すると部屋の扉の向こう側から、声がする。

「お姉ちゃん、お茶持ってきたよー。」

「ありがとう雪穂。」

穂乃果がペンを止めずに、返事をする。雪穂が「入るねー」と言うと、部屋の扉を開ける。

「お疲れーお姉ちゃん。勉強のほうは…ええ!？」
「あ…どうも。」

雪穂は部屋に男であるツナがいることにめちやくちや驚く。ツナは雪穂を見て、軽く頭を下げる。

「あ、あのーあ、あなたは!？」

「え、えっと…初めまして沢田綱吉です。穂乃果ちゃんの…
「えー…!？」 え? え? 何?」

「穂乃果ちゃんの妹さんですか?」と尋ねよ

うとしたツナだったが、雪穂の叫び声に遮られてしまう。

どうやら雪穂は何か壮大な勘違いをしているようだ。

「た、大変だ! すぐにお母さんに知らせないと!」

そう言うとき雪穂は母親のところに急いで行ってしまふ。

その様子を見て、ツナ、穂乃果、海未、ことりは啞然としてしまふ。

「えっと…今のは穂乃果ちゃんの妹さん…?」

「そうだよ。雪穂っていうんだ。でも何であんなに慌てるんだろう?」

「お…俺何か変なことしちゃったかな…?」

自分のことを見て、急に変な反応したのでツナは自分は雪穂になにかしてしなつたのではないかと不安になってしまう。

すると雪穂の声が高坂家中に響くぐらいに聞えてくる。

「お母さん! 大変だよー!」

「どうしたの雪穂? そんな大きな声を出して。ご近所の方が迷惑するじゃない。」

「大変なんだよ! お姉ちゃんが! お姉ちゃんが!」

「穂乃果がどうしたの?」

「お姉ちゃんが…彼氏連れて来てるんだよー!」

「何ですってー!？」

雪穂の報告を聞いて、穂乃果の母も高坂家中に響く声で驚く。

もちろんこの会話を聞いていたツナ、穂乃果、海未、ことりが驚い

たのも無理もない。

「えー！えー！えー！?! なななな何で?!」

「ゆ、雪穂ったら！な、何言ってるのよ！」

ツナと穂乃果は顔を赤くし、めちやくちや動揺していた。だが一番、動揺していたのはこの二人ではなく、なぜか海未であった。

「あ、あなたたち！本当はそういう関係だったのですか?!」

「海未ちゃん!? 違うよ！そもそもツナ君とは今日初めて出会ってるんだから！ありえないよ！」

「ハ、ハレンチです！」

「何でハレンチなの!? ちよつと落ち着いてよ海未ちゃん！俺は穂乃果ちゃんとは付き合ってたなんていないから！」

「海未ちゃん、一旦落ち着いて！」

ツナとことりが、なぜか一番動揺している海未を落ち着かせようとするも、海未は完全に支離滅裂な状態にある。

そんなてんやわんやの状況で、ドタドタと走る音が部屋に近づいて来る。

「ほ、ほら！あの人だよお母さん！あれがお姉ちゃんの彼氏だよ！」

「は、初めまして！ほ、穂乃果の母です！穂乃果がいつもお世話になっていきます！」

「ちよつとお母さん！止めてよ！恥ずかしいよ！」

ツナに向かって挨拶し始める自分の母に、恥ずかしさのあまり顔を赤くする穂乃果。

「こ、こんな娘ですが！よろしくお願いします！」

「ち、違いますからお母さん！誤解なん

です！」

「お、お義母さんだなんて！まだそういうのはちよつとまだ！」

「そういう意味ではなくてですね！」

「どうしましょ!?! とりあえずお父さんに!」

「だから違うんです！話を聞いてください！」

このあと誤解を解くのに凄い時間がかかりました。

#標的（ターゲット） 6 「高坂家の騒動2」

ツナたちは事情を説明し、雪穂と穂乃果の母の誤解を解いた。

「そうだったんだ…てつきりお姉ちゃんに彼氏ができたのかと思って…すいませんでした。」

「ごめんなさいね沢田君。お騒がせしてしまつて。」

「そ、そんなに謝らなくても！大丈夫ですから！別に全然怒つてませんから！」

雪穂と穂乃果の母がツナに謝罪するが、ツナは謝る必要はないと二人に言う。

「もう！雪穂もお母さんも、騒ぎすぎなんだつてばー！」

「だつてねえ。あんたと付き合つてくれる人がいるなんて聞いたら驚くわよ。あなたおつちよこちよいなだったり、うっかりして大惨事なことが多いんだから。正直、孫の顔を見られないんじゃないかと思つてるのよ。」

「もうお母さんつてば！そこまで言わなくてもいいじゃない！」

「いいえ、全く持つてその通りです。」

「海未ちゃんまで！」

「私はあなたのせいで！あなたのせいで…私は外国で…」

「そ、それは…もう終つたことだし…」

外国での出来事を思い出し、泣き始めてしまう海未。そんな海未を見てしまった穂乃果は、どうしたらいいのかわからなくなつてしまふ。

「な、何かあつたの海未ちゃん…？」

「実はね…」

「な、成程ね…そりや大変だつたんだね…」

ツナがこどりに尋ねると、こどりがツナの耳元で外国であつた出来事について話す。ツナはそれを聞いて海未に同情する。

（※ 何のことかわからない人は劇場版ライブを見てください）

「確かに穂乃果ちゃんにはそういう一面もあると思いますけど、でも穂乃果ちゃんはとつても優しく、前向きで、いいところもたくさん

あると思いますけど…」

「ツ、ツナ君…!!／／／」

「!!」

ツナのその一言に穂乃果は顔を赤くし明るい表情になりる。その一方で雪穂と穂乃果の母は衝撃を受けていた。

そしてさらにツナは続けていく。

「それに誰にだって欠点ってあると思うし、俺なんて勉強も運動もずっとダメで、欠点だらけの人間だし。それに比べたら穂乃果ちゃんなんて凄いじゃないですか、生徒会長もやって、スクールアイドルをやって学校の廃校を阻止したって聞き…「沢田君」は、はい…?」

穂乃果の母が、両手でツナの左右の肩をおさえてツナに顔を近づけていく。

「今付き合っている人とかいるの?」

「い、いませんけど…?それが何か…?」

「好きな女の子とかいるの?」

「い、今はいませんが…あのさつきから何を

…?」

穂乃果の母の聞いている質問の真意がわからないツナは、穂乃果の母の質問に疑問符を抱く。

「あなたになら穂乃果を任せられるわ。」

「任せる?穂乃果ちゃんを?それってどういう…?」

「もう!とぼけちゃって!そんなの決まってるじゃない!あなたと穂乃果が結婚するのよ!」

「ええええええええええ!!急に何を言ってるんですか!?!」

突然の穂乃果の母の言葉に顔を真っ赤にし、目玉が飛び出るほど驚くツナ。もちろん驚いたのはツナだけではなく。

「おおおおお母さん!何勝手なこと言ってるの!」

「だってあんたのことを、あんな風に言ってくれる子なんてなかなかいないわよ!チャンスじゃない!」

「そ、そういう問題じゃなくて!」

穂乃果もツナと同様に顔を赤くしめちやくちや同様していた。

だが一番動揺していたのは……なぜか海未であった。

「ほほほ穂乃果とツナ君が……ハ、ハレンチです……」

「海未ちゃん！しっかりして！」

海未は顔を真っ赤にして、そのまま気絶してしまった。

ことりが海未を起こそうとするも、海未は目覚めず気絶したままであつた。

「ちよつと！穂乃から何か言つてよ！」

「何つて……これからお姉ちゃんをよろしくお願いしますツナさん。」

「穂乃！そういうことじゃなくて！」

「あ、あのですね！穂乃果ちゃんは俺なんかよりもっと素敵な人がいるはずですよ！だから考え直してください！」

「遠慮しないでいいのよー。お父さんからは私は説得してあげるから！」

「お願いですから！人の話を聞いてくださーい！」

結局このあとは、穂乃果の母がどっちの家に住むかとか、子供の話などでテンションがあがり、なかなか言うことを聞いてくれませんでした。

#標的(ターゲット) 7 「天使」

あれから騒動は一旦落ち着き(といっても穂乃果の母はツナのことを諦めたわけではない)海未も復活したので宿題を再開する。途中、二人とも挫折しかけたこともあったが、二人死ぬ気でやってなんとか宿題を終らせることができた。

「終わったあー！」

宿題が全部終わり、後ろに倒れこむ二人。海未も教える役目を終えてホッとしていた。そんな3人に労いの言葉をかけることり。

「お疲れ様、穂乃果ちゃん、海未ちゃん、ツナ君。」

「お礼を言うのはこっちのほうだよ。色々

食べ物を買ってきてくれたり、ナッツの世話をしてくれたり。ありがとうことりちゃん。

海未ちゃんもありがとう。こんな遅くまで

勉強を教えてもらって。」

「ううん。気にしないで。ナッツちゃんと遊ぶのすつごく楽しかったから。」

「気にしないでください。元はといえば私があなたに教えてあげようかと言ったのですから。」

ツナがことりと海未にお礼を言うと、二人はそう言う。

そして穂乃果はことりが買ってきてくれたパンを食べていた。

「んー！今日もパンがうまい！宿題が終ってから食べるパンは格別だなー。」

「穂乃果。こんな時間に食べると太りますよ。」

「大丈夫だって！太ったら痩せればいいんだし。」

「穂乃果：以前、体重を減らすのがどれだけ大変だったか忘れたので

すか…」

以前ダイエツトした時の苦労を忘れている様子の穂乃果に海未は呆れてしまう。

「海未ちゃんって案外、家庭教師とか向いてるかもね。教え方すつごく上手だし。」

「そ、そんな！私はそこまで褒められるようなことは何一つしていませんよ！」

「そんなことないよ。あーあ、俺も海未ちゃん

みたいな人が家庭教師だったらよかつたんだけ

どなー。リボンだったら間違えるたびに、

蹴られたり、爆発させられるからなー。」

「ば、爆発…？」

爆発という単語が出て、海未は顔は驚きを隠せないでいた。ついりボーンの教育方法について喋ってしまったツナは「しまった！」と思いい誤魔化す作戦に移る。

「い、いや！爆発って本当に爆発するんじゃない！怒りが爆発ほうだから！」

「そ、そうですよね…おかしいと思いました…」

「（よ、よかつた…な、なんとか誤魔化せた！）」

なんとか誤魔化すことに成功し、内心ホツとするツナ。

「でも海未ちゃんみたいなのが家庭教師だったらなー。毎日楽なんだろうなー。」

「ええ!?私は嫌だよ！海未ちゃんはすつごく怖いんだよ！」

「え？そうかな？」

「そうだよ！海未ちゃんは鬼だよ！鬼！」

「穂乃果ちゃん…海未ちゃんが目の前にいること忘れてない…？」

海未が目の前にいるにもかかわらず、鬼だと連呼する穂乃果にことが言う。海未は少し怒ってはいたが、特に何も言わずに穂乃果をジト目で見ていた。

「俺から言わせれば海未ちゃんは、天使みたいな存在かな。」

「ててて、天使!?急に何を言っているのですかツナ君!?そ、そんなお世

辞に乗せられるような私ではありませんよ！」

「お世辞なんかじゃないよ。本当に天使みたいな存在だと思ってるよ。」

「な!?!/!/」

ツナの言葉に海未は顔を真っ赤にして動揺し始める。

穂乃果が海未のことを鬼と言っても、ツナにとって海未は天使にかみえないのだ。なぜならリボンという悪魔よりも死神よりも恐ろしい存在に比べたら、ツナにとって海未は本物の天使とかわらない存在だからである。

「だ、大丈夫!?!海未ちゃん!?!顔が赤いよ！」

「海未ちゃん大丈夫!?!」

「え!?!どうしたの急に!?!何か変なことしちゃった!?!」

顔を真っ赤にしている海未を心配する穂乃果とことり。一方でツナは自分がまた何か変なことをしてしまったにではないかと思いつニツクに陥る。

「ちよつとごめんね海未ちゃん…」

「!?!/!/」

ツナが一言断りをいれて海未の額に自分の手をあてる。

すると海未はツナの手が触れたことにより、さらに緊張し頭から蒸気を出しながら再び気絶してしまう。

「「海未ちゃんーん!」」

#標的（ターゲット） 8 「理由」

ツナの言葉で気絶してしまう海未。とりあえず布団に海未を寝かせて海未が目を覚ますのを待つ3人。

「大丈夫かな海未ちゃん…?」

気絶している海未を見て、ツナは一番心配している。さつきからツナの表情は曇ったままである。

「それにしても、海未ちゃん何で気絶しちゃったのかなー?」

穂乃果はまだ海未が気絶した理由がわかっていない。

一方でことりは海未がなぜ気絶したのかちゃんと理解していた。

「（海未ちゃん恋愛映画見るのも無理だったし…それが現実起こったから…）」

「ど、どうしよう！海未ちゃんがこのまま目覚めなかったら！俺のせいだ！」

「ええ!?海未ちゃんってそんなにやばい状況なの!？」

「い、いや…ツナ君、穂乃果ちゃん…海未ちゃんはそこまで深刻な問題じゃないよ…」

「え!?ことりちゃん海未ちゃんが何で気絶したのか知ってるの!?教えてよ!」

「そ、それは…」

穂乃果に尋ねられことりは一瞬チラツとツナのほうを見るが、ここで気絶してしまった原因を

答えてしまえば海未に悪いと思い、「やっぱ

り、わからないかな…?」と答えてしまった。

そして海未はあの後も目覚めず、なんと時刻は次の日の朝を迎えていた。

「う、うくん…?」

「あ！起きた！」

「あれ？ツナ君なぜまだここに？それよりもなぜ私は布団の上で？私は…は！」

海未は昨日あった出来事について思い出すと、顔を赤くしてしまふ。

「だ、大丈夫!?海未ちゃん！」

「だだだ大丈夫です！そ、それよりなぜここに!？」

「い、いや…海未ちゃんが気絶しちゃったから…心配だったから穂乃果ちゃんのお母さんに無理言つて、泊めてもらったんだよ。」

ツナがそう言うのと、海未はツナの目の下に隈ができていることに気づく。

「ま、まさか!?あれから一睡もせず私の看病を…」

「うん。穂乃果ちゃんのことりちゃんは途中まで起きてたんだけど、限界がきて寝ちゃったけどね。」

そう言うツナは、後ろで寝ている穂乃果とことりのほうを向く。

「な、なぜ…そこまで…?」

「海未ちゃんが倒れたのは俺のせいみたいだし、俺が寝るのは悪いかなって思ってたさ。」

「そ、そんな！別にツナ君のせいでは！」

「それでね、起きてる間にずっと考えてたんだ。何で海未ちゃんが気絶したのかなって。もしかして海未ちゃんさ…」

「そ、それは…!!／／／」

ツナが自分気絶した理由に気づいてしまった。そう思った海未は顔が再び赤くなり、鼓動がちよつとずつ速くなっていく。

ドクン…ドクン

「海未ちやってさ俺の…」

「(そ、それ以上言われたら! / / わ、私はもう! / /)」

「俺の宿題を見てくれたことで、無理が祟って、気絶したんじゃないかなって思ったんだけど違うかな?」

「え…?」

ツナの口から自分の思っていた違う答えが出てきて、海未は啞然し目が点になってしまう。

「いやー。やっぱり海未ちゃん一人で二人分の宿題を教えたのは無理があつたんじゃないかなーって思ってたさ。」

「は、はあ…」

「違うかな?」

「そ、そうかもしれないですね! 自分でも気づかないうちに無理をしていたのかもしれない!」

「まあ、とにかく海未ちゃんが…元気で…よかつ…た…」

「ツナ君!」

理由が聞けてホツとしたのか、ツナはその場で

倒れ、スウスウと息をたてて眠ってしまう。

「よかつた…眠ってるだけ…」

ツナが眠っているだけとわかつた海未は、ホツとする。

「(私のためにこんなになるまで看病してくれただなんて…ツナ君あなた不思議な人ですね…そしてどうやら私はあなたのことが…! / / /)」

#標的（ターゲット） 9 「せつかくだから」

海未の看病に疲れ、昼まで寝てしまったツナ。そして別れの時がやってきた。

「すみません。色々とお世話になってしまって。」

穂乃果の母に頭を下げて、お礼を言うツナ。手には母や居候のランボたちの為の和菓子の入った紙袋が握られていた。

「いいのよ沢田君。またよかったら遊びに来て」

頂戴。それと穂乃果とのこと考えておいてね。」

「もう！お母さんつてば！」

最後の最後まで穂乃果の母は自分の娘とツナをくつつけたいとうだ。すると穂乃果とある提案をする。

「そうだ！せつかくだしLINE交換しようよ。」

「え？LINE？いいけど。どうして？」

「だってせつかく友達になったんだし。なんかそうしないといけない気がしたの。」

「随分と曖昧だね…でもいいかもね。」

穂乃果の提案にツナは賛成する。そしてことりも穂乃果の提案に賛成する。

「私もいいよ。私もナッツちゃんともまた会いたい

し。海未ちゃんはどうするの？」

「へ!?そ、そうですね！わ、私は構いませんけど！」

ことりが尋ねると、海未は少し動揺しながら答える。

心の中ではツナとLINEを交換できることに少し嬉しかったりするのだ。

そしてツナと穂乃果と海未とことりはQRコードを使ってLINEを交換する。

「よしLINE交換ができたね。これでいつでも連絡できるね。」

「そうだね。もし暇があったら並盛にも遊びに来てよ。俺の友達を紹介

介するから。」

「うん。じゃあ私も今度、ツナ君が遊びにきたら私の友達を紹介するよ。」

ツナと穂乃果は友達を紹介することを誓いあう。

そしてツナは最後に改めてお礼を言うと言おうと並盛の

ほうへ歩を進めていく。

「じゃあツナ君！またねー！」

「さよならー。」

「また会いましょう。」

穂乃果、ことり、海未は手をふりながら叫ぶ。ツナもそれに対してツナも3人のほうを見ながら手をふりながら歩いていく。

そして3人の姿が見えなくなると、ツナは肩に乗っているナッツに話しかける。

「なんか偶然出会ったけど、とってもいい人だったなー。ナッツはどうだった？楽しかった？」

「ガウ♪」

「そっか。あ…俺の友達を紹介するよって穂乃果ちゃんに言っちゃったけど…よかったのかな？」

ツナはそのことを思い出すと、自分の友達を紹介

しても大丈夫なものかと思ってしまう。

「まあ…友達を紹介するって言っちゃったから、今更言いなおすのもな…」

多少後悔もあつたが、ツナは穂乃果たちと過ごした思い出を心にしまい、自分の家に帰っていく。

一方、穂乃果たちは。

「不思議な人でしたね。」

「そういえばずっと音ノ木坂学院は女子校だから男の子の友達は何
てだね。」

「そうだね。そういえばツナ君がいないから、聞くんだけど、やっぱり
海未ちゃんはツナ君のことが「ことり！」」

「ことりが海未がツナのことを好きなのかと確認しようとするど、海
未はことりの言葉を遮る。

「え？どうしたのことりちゃん？海未ちゃんがどうかしたの？」

「いいえ！何でもありません！」

穂乃果が尋ねるが、ことりが答える前に海未が先に答える。

「えー何なの？海未ちゃん何か隠してるの？」

「隠してません！」

「なんか怪しい：海未ちゃん私たちは友達でしょ？」

「ど、友達でも言えないことがあるんです！」

「やっぱり何か隠してるんだ！」

「い、今のは違います！とにかく何も隠してません！」

結局海未は最後の最後までツナのことが好きなのは言いません
でした。

#標的（ターゲット） 10 「真実」

長かったような短かったような春休みも終わり、ツナも穂乃果たちも高校3年生に進級する。

並盛高校も音ノ木坂学院も入学式も終わり、クラス発表もされた。

ツナは在校生なので午後から行われる入学式には出席せず家に帰ってゴロゴロしていた。

「はあ…終わったー…」

「おいツナ。」

「リボーン？何だよ？」

「お前、今から音ノ木坂行ってこい。」

「はあ!?何だよ!？」

急なリボーンの命令にツナは驚く。それと同時にツナはまたリボーンがまた何か変な企みを考え始めたのではないかと思ってしまう。

だが以外にもリボーンの口から伝えられたのは普通のことであった。

「お前、春休みに宿題を教えてもらったんだろ。」

とつと行ってお礼してこい。今日は午後から暇だろ?」

「あー…そうだね。でもお礼って言ってもどうしよう?」

「ママンがランボたちのために作ったおやつのスィートポテトが作りすぎたって言ってたぞ。それを持って行ってやればどうだ?ママンの作るおやつはうまいからな、絶対に喜ぶと思うぞ。」

「あ!それいいかも!」

「ついでにビアンキの作ったケーキでも持って行くか?刺激的だぞ。」

「刺激的すぎるからいらなくて!みんな死んじゃうよ!」

そもそもビアンキの料理を見た瞬間に食べたいと思うとは思えないのだが…

「なんか珍しいよな。お前がこんなまともなことを言うなんてな。」

「マフィアなら受けた恩を忘れちゃならないんだぞ。」

「マフィアは関係ないだろ！」

「あとついでにボンゴレに勧誘してこい。」

「しないよ！…とにかくLINEしてみよう。」

一方、音ノ木坂学院のアイドル研究部は部活勧誘の仕事を一通り終え、部室で休んでいた。

「終わったにゃー。」

「ど、どれだけの人たちが来てくれるでしょうか？」

「まあたくさん来るんじゃない？解散したとは言っても私たちは有名になったんだから。」

元々、sのメンバーの星空凜、小泉花陽、西木野真姫が勧誘の仕事を終えて休んでいた。

「たくさん来てるのはいいんだけど…この部室で入りきるかな？」

「その時はその時で考えたらいいよ！」

ことりが教室の心配をするが、穂乃果はなんとかなるだろうという感じである。

「でも後輩が入ってくるのは嬉しいのにゃ！」

「だ、大丈夫かな…？私、部長としてちゃんとやっていけるかな？」

後輩が入ってくるということが楽しみな様子の凜に対して花陽は部長としてやっていけるか不安になっていた。

「ねえ海未ちゃんはどう思う？」

「…」

「海未ちゃんってば！」

「は！何ですか？」

「海未ちゃん、学校が始まってからブーツとしてることが多いよ？なにか悩み事でもあるの？」

「そ、そういうわけでは…ちよつとトイレに行つてきます…」

穂乃果が尋ねると、海未はため息をつきながら部室から出ていく。海未がいなくなったのを確認して真姫が穂乃果に海未のことを尋ねる。

「いつもならブーツとすることなんて全然ないじゃない。何か心当たりとかないの？」

「心当たり…別にないな。」

「じゃあ何か変わったこととかは？」

「変わったことね…春休みの終わりぐらいにツナ君に出会ったことぐらいかなー？」

「ツナ君？」

聞きなれない名前を聞いて真姫、花陽、凜が疑問符を浮かべる。

「あーまだ言つてなかったね。春休みの終わりぐらいに出会った並盛に住んでる高校生なんだけど…」

穂乃果が春休みにあつた出来事を全て話す。その話を聞いて真姫、

花陽、凜は海未の様子がおかしい原因を理解する。

「それって…」

「ま、まさか…」

「海未ちゃんは…」

「…そのツナ君って子に恋してるの!？」

「えー!?!? そうなの!？」

「何であんたが一番驚いてるのよ…まさか気づいてなかったの…?」

海未がツナが好きだということに気づいていない穂乃果に真姫は呆れてしまう。すると穂乃果はこどりに尋ねる。

「こどりちゃんは気づいてたの!？」

「う、うん…一応…」

「うっそー!? 私だけ何で気づいてないの!？」

気づいてないのが自分だけという事実を知り、穂乃果は驚く。そんな穂乃果を見てみんなは「鈍感なんだな」と思っていた。

「何か隠しているとは思ってたけど…よし！海未

ちゃんに真実を聞きだそう！」

穂乃果は海未にツナのことを好きなことを確認することを決意する。はたして海未の運命は!?

#標的（ターゲット） 11 「まさかの」

一方海未は、部室に戻ろうと廊下を歩いていた。

「(はあ：私はどうしてしまったのでしょうか？あれからずっとツナ君のことばかり考えている…)」

ツナのことばかり考えてしまっている自分に、海未は大丈夫なのかと思ってしまう。

「(私はどうしたいのでしょうか？このまま彼に告白して…)」

すると海未は妄想してしまう。

『海未ちゃん！こっちこっち。』

『ごめんねーツナ君。遅れちゃった！』

『大丈夫だよ。今日はどこに行きたい？海未の行きたいところならどこにも連れて行ってあげるよ。』

『それじゃ：綺麗な紅葉が見えて：！二人つきりになれるところかな…!?!』

『いいよ。海未が望むなら。』

そう言うとツナはバイクの後ろに海未を乗せて、綺麗な紅葉が見えて二人つきりになれるところを目指す。

バイクで1時間ほど走ると、紅葉が見れて二人つきりになれる場所に着く。

『綺麗：よくこんな場所知ってたねツナ君。』

『海未の行きたい場所ぐらいわかるよ。いや：海未のことでわからないことなんてないよ。』

『ツナ君…！』

『海未…！』

そしてツナと海未はしばらく見つめあうと、互い

の唇を近づけていく。

「はああああああ！私はなんてハレンチなことを想像して…！／＼」

海未はツナとデートしている姿を勝手に妄想して、顔を真っ赤にしていた。

「と、とにかく！気持ち切り替えないと！これでは他のみんなにも迷惑が…」

海未は一旦気持ちを落ち着かせて、アイドル研究部の部室の扉を開く。すると部員のメンバー全員が真剣な顔で、姿勢を正して座っていた。

「ど、どうしたのですか？何かあったのですか？」

「うん。とにかく座って海未ちゃん。」

「は、はあ…」

真剣な顔をしている穂乃果を見て、海未はただごとではないと察しとのか、黙って椅子に座る。

そして海未が椅子に座ると、凜が部室の扉の鍵をかける。

「な、なぜ鍵を…？」

「海未ちゃんが逃げ出さないようにするためだよ。」

「に、逃げる…？一体これから何を…？」

みんなが一体、何を考えているわからず海未は一体何があったのだろうという思っていた。

そして妙な空気が漂う中、最初に口を開いたのは凜であった。

「今回は海未ちゃんに聞きたいことがあるにや。」

「私に？」

凜がそう言うと、穂乃果が「せーの」と掛け声と同時に全員が声を揃えてあのことを聞く。

「『今、恋してるって本当なの？』」

「なななななな何を!?!?!」

顔を真っ赤にしても、の淒くわかりやすい海未の反応に、全員「わかりやすいなー」と思った。

そして海未はここで墓穴を掘ってしまう。

「わわわわわ私は！別にツナ君に恋なんてしてませんし！ここ…告白して付き合いたいなんてこれぽっちも!?!?!」

「誰もそのツナ君って人を好きだなんて言っていないわよ…」

「しかも願望まで出てるにや…」

自分の願望まで出してしまった海未に真姫と凜は呆れてしまう。

「これで海未ちゃんがツナ君に恋してるっていうことが、よくわかったね。」

「だ、だから！私は別に！そ、そういう穂乃果もツナ君に褒められた時にまんざらでもない感じだったじゃないですか！そういう穂乃果もツナ君のことを好きじゃないんですか!?!」

「え？私は違うと思うよ？ツナ君に会えなくて寂しいと思ったり、ツナ君のことを考えたら心臓がドキドキしたりすることはあるけど…」

「『えー！』」「『えー！』」「『えー！』」

なんとまさか穂乃果もツナが好きだということが判明してしまう。

だが穂乃果は自分がツナに恋しているという自覚が全くないのだ。

「どうしたのみんな？そんなに驚いて?」

「穂乃果ちゃん！自分の気持ちに気づいてないの!?!」

「自分の気持ち?」

「穂乃果ちゃんも、ツナ君のことが好きなんだよ!」

「え?私が?そうなの?」

ことりが穂乃果にそう言うが、穂乃果は全く動揺する素振りすら見せない。

まさかの展開に誰もが驚いていると、穂乃果のスマホにLINEが送られる。スマホを見ると、LINEを送ってきたのはツナであった。

「あ…ツナ君だ」

#標的（ターゲット） 12 「お誘い」

穂乃果のスマホにLINEが届くと、全員穂乃果の携帯を覗きこむ。

『いきなりLINEしてごめんね穂乃果ちゃん。実は前に色々とお世話になったからお礼をしたいと思って。俺の母さんの作ったスイートポテトをがあるんだ。それを渡したいんだけど今日時間あるかな？もしなかったら俺が穂乃果ちゃんの家に行って、お母さんにでも渡しておくから。』

「スイートポテト！食べたい！私！」

スイートポテトという単語にめちやくちや食いつく、穂乃果。そんな穂乃果の顔を見て、他のメン

バーは若干呆れていた。

「律儀な人だね。わざわざお礼だなんて。」

穂乃果のスマホのLINEの文面を見て花陽が呟く。するとここで真姫が穂乃果に尋ねる。

「それで？会いに行くの？」

「もちろん行くよ！スイートポテトだよ！」

「スイートポテトのことしか頭にないの…？」

ツナに会うことよりスイートポテトのことしか頭にない穂乃果。本当にツナのが好きなのであろうか？

「じゃあ今からみんなで行こう！」

「ええ!? 私たちもかにや!？」

「うん。この前に約束したんだ。今度音ノ木坂こつちに来ることがあったら、ツナ君に私の友達を紹介するって。今からみんな用事とかある？」

「私はないわ。」

「私も。」

「凜もないにや。」

「私も大丈夫だよ。」

穂乃果が尋ねると、真姫、花陽、凜、ことりは用事はないとようなので一緒に行くことを決断する。一方で海未は…

「わ、私はよ、用事があるので…!」

海未は目を泳がせながら言うが、本当はただ単に

ツナに会うのが恥ずかしいので嘘をついただけである。

そんな海未の嘘も通じるわけもなく、全員海未をジト目で見ていた。

「そんなにツナ君と会うのが恥ずかしいの?」

「だ、だから!用事が…!」

「そつか用事があるんなら仕方ないか…」

そう言うのと穂乃果はツナに返信する。だが穂乃果がツナに返信した内容は…

『いいよ、ツナ君。それと私の友達を紹介したいんだ。友達を全員連れていくけどいいかな?』

「ちよ、ちよつと穂乃果!全員つてまさか私のことも入っているわけではありませんよね!」

「そりやもちろん入ってるよ。だって全員つて書いたんだから。」

「な、何を勝手に!私が用事があるとさつきから言つて!」

ピンローン!

穂乃果と海未が言いあっていると、穂乃果のスマホに再びツナからLINE入る。

『いいよ。それと集場所はどこにする?穂乃果ちゃんたちの学校は女子校だから、さすがに入るわけにはいかないし…』

「そうだな…じゃあ…」

『それじゃツナ君と私たちが出会ったファミレスでどう?』

『いいよ。それじゃあまたあとでね。』

こうして集場所も決まり、あとは穂乃果たちが

ツナと出会ったファミレスに集合するだけとなった。

「よし!集場所も決まったし!さっそく行こう!」

「ま、待ってください！私はまだ行くとは一言も…！」

「！もういい加減に覚悟を決めてよ海未ちゃん。」

往生際の悪い海未に穂乃果は呆れてしまう。一方で2年生メンバーは別の意味で気になり始めていた。

「そのツナさんって方、一体どんな方なんでしょう？」

「気になるにや。」

「私は別に…。」

凜と花陽はツナがどんな人か気になり始めていた。真姫は興味はなさそうな素振りを見せるが、内心では海未をあんな風にしたツナとは一体どんな人物なのか気になり始めていた。

すると今度は海未のスマホにLINEが送られる。

ピンローン！

「誰でしょう？…ツツツツツナ君？！な、なぜ?!」

LINEを送ってきたのがツナだったので、海未はめちやくちや動揺してしまう。

そして海未が送られてきた文章を見るとそこには、こんな文章が書かれていた。

『海未ちゃんあれから体調は大丈夫？もし体調が良くないなら無理に來なくて大丈夫だよ。』

「もも！ももも！もちろん！だ、ただ大丈夫じゃないです…！／／

／

ツナから送られてきたLINEを見て海未は、支離

滅裂の状態になってしまう。さっきまで体調は

良かったが、今は現在進行中で体調ではなく

思考回路がおかしくなってしまう海未であった。

#標的（ターゲット） 13 「変わってる」

ツナと初めてあったファミレス。アイドル研究部のメンバーは全員集合していた。もちろん海未も。（ほぼ強制的に連行されたとも言える方もいる。）

「まだ来ないねー、ツナ君。」

穂乃果が店内にある時計を見ながら呟く。一方で海未はさつきからそわそわし、落ち着かない様子を見せている。

「もう耐えられません！帰ります！」

「ちよつと海未ちゃん！ここまで来ておいてそれはないでしょ！」

「き、来たくて来たわけではありません！みんなが強制的に連れて来るから……！」

「だってそうでもしないと、絶対に来なかったでしょ！」

「お、落ち着いて！穂乃果も海未ちゃんも！」

穂乃果と海未が言いあっていると、それを止め

ようよことりが二人の間をわつてはいる。一方

で2年生メンバーは本当に海未に何があつたんだ

のかと心配してる。

そんなことをしていると。

「あのー…お取り込み中いいかな…？」

「あー！ツナ君！」

「ツ、ツナ君!?!」

いつの間にかツナが穂乃果たちの後ろにいた。穂乃果と海未が喧嘩？していたのを見て、すごく話しかけづらかったようだ。

「いやー、ごめんね。急に呼んじやって。」

「ううん、気にしないで。それより約束通り友達を連れてきたよ。」

「初めまして。沢田綱吉です。気軽にツナって呼んでください。」

「こ、小泉花陽です。」

「星空凜です。」

「西木野真姫よ…」

お互いに自己紹介すると、ツナは椅子に座ると紙袋とケーキの入っている箱をテーブル置く。

「これウチの母さんが作ったスイートポテトと、あと友達が並盛で美味しいって言ってたケーキ。全員分あるから。」

「私たちの分も!？」

「い、いいんですか…? 私たちまで…?」

「うん、全然いいよ。お近づきの印ってことで。」

自分たちの分まで用意してくれたことに驚く凜と花陽。

それに対して真姫は特に驚かず、冷静だった。

「まあ素直に受け取ってあげるわ。」

「ま、真姫ちゃん、失礼だよ!歳上だよ!」

「いいよ気にしなくて。普通に話してくれたんでいいから。」

ツナに対して敬語を使わない真姫を花陽が注意するが、ツナは全然気にしていなかった。

「ねえツナ君!今日はホノ太郎はいないの?」

「きよ、今日は家に置いてきたんだ!」

「そうなんだ…あとでまた触りたかったけどなー」

ホノ太郎…ナッツは家に置いてきたと嘘をついくツナ。

実際は今指につけているボンゴレギアの中にいるのだが…

するとホノ太郎という聞きなれない単語に真姫が穂乃果に尋ねる。

「ホノタロウって誰?」

「ツナ君の飼ってる猫だよ。すっごく可愛いのに!」

「え!見てみたいにや!今度見に行つていいかにや!？」

「い、いいけど…」

「やった!」

猫が好きな凜は、目をキラキラと輝かせながらツナに頼み込む。ツナは凜の勢いに押されながらも、凜の頼みを承諾する。

「(見にくるのはいいんだけど…ナッツは猫じゃなくてライオンなん

だよなー…!」

ナッツがライオンとは気づかれることはないだろうが、何か騙している気がしていてちよつと複雑な気分になってしまおうツナ。

すると今度はことりがツナに尋ねる。

「そういえばツナ君。今日はどうやってここまで来たの？並盛から歩いて来たら大変だよね？」

「今日はバイクに乗ってきたんだ。」

「バイクの免許持つてるのツナ君!？」

「うん。高校入ってから取ったんだ。」

ツナがバイクの免許を持っていると知って、海未以外は「い、意外…!」と言わんばかりの顔をしていた。正確に言えば取ったというよりはリボンに取らされたというのが正解である。

その中で海未だけは驚かず、とあることを思い出して顔を赤くし、下を向いて俯いていた。

「(バイク…!二人乗り…!)」

自分がツナとデートした時(妄想の中で)に、ツナの後ろに乗っていた時のことを思い出していた。

「(ああああああ!また私は…!)」

「あれ?海未ちゃん大丈夫?また顔が赤くなってるよ?」

「いいえ!何でもありません!そ、それよりも大丈夫なんですか!?!いつまでもここにいて!?!ご両親が心配されるのでは!?!」

「まだ全然時間たってないよ…海未ちゃん。」

ツナがこの場にいるせいか海未にとっては、もう2時間以上はこの店にいるような感覚であるが、実際はまだ30分もたっていないかった。

そんな海未にことりが言うと、海未は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしていた。それに対してツナは何も言わず、普通に答える。

「心配してくれてありがとう。大丈夫だよウチの母さん遅くなってもあんまり心配しないし、父さんはいないし。」

「あ…ごめんなさい…変なことを…」

父親がいないと聞き、海未はツナの父親が亡くなっていると思つて

しまい謝る。それを察したのかツナは、慌てて弁明する。

「い、いや！父さんがいないっていうのは、別に亡くなつたわけじゃない、海外で仕事をしてて、いないってことだから！」

「ツナ君のお父さんって、海外で働いているんだ。何の仕事してるの？」

「え、えっと…南極で石油を掘ってる泥の男…？」

穂乃果が尋ねると、ツナ顔に冷汗を流しながら答える。さすがにマフィア関係の仕事をしているとはいえないので嘘をついた。

南極で石油を掘っていると聞いて、全員がなんとも言えない気分になる中で真姫がツナに尋ねる。

「南極って…そもそも石油出るの…？」

「さ、さあ…？出るんじゃない…？」

「あんたの父親って変わり者ね…」

「そもそも父親って呼んでいいのかわからないところがあるんだよね…」

「何か問題でもあるのかにや？」

「仲が悪いとかですか？」

凜と花陽がツナの父親…家光のことについて尋ねると、ツナが家光のことを語り始める。

「仲が悪いわけじゃないんだけど…小さい頃に父

さんに何の仕事してるのって聞いてみたら、世界

中で交通整理をしてるって言って…」

「ユ、ユニークなお父さんなんですネ…」

「何でそんなこと言ったんだろう…？」

世界中の交通整理と聞いて海未とことりがそう呟く。

他のメンバーも再び複雑な気分になっていた。

そしてさらにツナの話は続いていき。

「中学の時に帰ってきた時には、朝4時ぐらいに俺の部屋に入ってきて「メシ取りに行かないか」って言ったのが、数年ぶりに帰ってきた息子に対して一番最初に言った言葉だった…」

「確かにそんな父親がいたら、父親って呼んでいいかわからなくなる

わね…」

「で、でも！家族のために海外で働いているなんて立派だと思います！」

「ありがとう花陽ちゃん…優しいんだね。」

ツナに同情する真姫に対して、花陽は少し無理して家光のことを褒めてくれる、そんな花陽にツナはお礼を言う。

「(別に父さんを認めてないわけじゃないんだけど…なんかなー…)」

そんなことをツナが考えていると、穂乃果が尋ねてくる。

「変わっているって言っても、お父さんが家にい

なくて寂しくないの?」

「父さんがいないのが当たり前だと思ってたから、寂しくはないかな?それに今は居候が5人いるし。」

「「「5人も!」「」」」

居候が5人もいることに驚く穂乃果たち。穂乃果、海未、ことりはリボンが知っていることを知っているが他の4人の居候については知らないため驚いていた。

「おかしいでしょ!1人や2人ならともかく!5人って!」

「いやー…なんかいつの間にか増えててさ…母さんも全然気にしてないし…」

「一体その居候させている人の親は何をしているんですか!」

「親…?いたっけ…?そういうえば全然知らないし…考えたこともなかったな…」

真姫と海未がつっこむが、ツナはこれが当たり前になっていたの
で、何も疑問に思っていないかった。

この時、みんなはツナの家は一体どうなっているのだらうと思った
のだった…

#標的（ターゲット） 14 「カラオケ」

ファミレスで少し話をしてっていると、穂乃果が急に提案してくる。
「ねえカラオケに行かない？」

「二「カラオケ？」三」

「うん！なんか思いつきり歌いたいんだー！」

「いきなり唐突ですネ…そ、それに！ツナ君が迷惑するのでは…！」

「え？全然いいけど…」

「え!？」

いきなりカラオケに誘って迷惑するのではないかと思ったが、ツナは全然いいと言ってくれたことに驚くツナ。

「あ…でも女子だけの中に入るっていうのも…」

「で、ですよね！」

ツナは一緒に来るのを躊躇ってしまう。その言葉を聞いて海未はこのままツナには帰って欲しいと心の中に思ってしまう。

別にツナが嫌いだからではなく、ツナとこれ

以上一緒にいたら自分が耐えられないからである。

「え？私はいいよ。ツナ君となら楽しそうだし！」

「私も大丈夫だよ。」

「私もいいよー。」

「私もいいですよ。」

「私も。」

「え!？」

穂乃果、ことり、凜、花陽、真姫はツナと一緒にカラオケに行くことに何も問題がないと言う。一方でみんなの意外の反応に海未は戸惑ってしまう。

「わ、私は家に帰って予習を…！」

「真面目なんだね海未ちゃんって。だからあんなに勉強できるんだ

ね。」

「ふえ?!いや…!その…!」

嘘をついてこのまま帰ろうとした海未だったが、逆にツナに褒められてしまい、顔を赤くして動揺してしまう。

「予習なんて当たり前でしょ?」

「「え…?」」

真姫がそう言うと、ツナ、穂乃果、凜の勉強の苦手な3人にとってこの言葉が衝撃的だった。

その3人の反応を見て真姫は呆れていた。

「何をそんなに驚いてるのよ…」

「い、いや…予習なんて…俺全然したことない…」

「わ、私も…」

「凜も…」

今までの人生を振り替えて見るが、予習なんて自分一人でした記憶は全くない。

「普段から予習と復習をしていれば、テストでも

満点取るなんて簡単でしょ。」

「ま、満点…?な、何言ってるの…?真姫ちゃんの言ってる言葉の意味がわかんないけど…?」

「何ですよ!」

満点なんて取ったことのないツナは、真姫の言っている言葉が全く理解できなかった。もちろん

んこの穂乃果と凜も…

「真姫ちゃん…ごめんもう1回言ってくれない…?」

「私にもわかりやすく…」

「だから何ですよ!」

勉強のできない3人が普段どれだけ勉強していかないかがわかったところで、ツナ以外はファミレスを出て近くのカラオケ店に行く。(ツナは穂乃果の母に許可をとってバイクを一旦穂むらに置いてからカラオケ店に向かった。あと海未も結局ついてきた。)

そしてカラオケボックスに入って歌い始める。

「すっごーい！花陽ちゃん93点だ！」

「さすがかよちんだにゃ！」

「えへへ…」

穂乃果と凜に褒められて花陽は照れていた。一方でツナはめっちゃくちや驚いていた。みんながみんな90点以上出していることに。

「（みんなうますぎ…カラオケは獄寺君たちと一緒にやったことはあるけど…俺そんないい点数は取ったことないんだけど…やっぱリスクールアイドルやってたからうまいのかな…？）」

他のみんながうますぎる中で自分はそれほどうまくないので、このあと歌いづらくなってしまうツナ。

「次はツナ君だよ。」

「え!?!いや、俺は!?!その…恥ずかしいというか…」

「じゃあ私と一緒に歌う?」

「え?」

「二人なら恥ずかしくないでしょ?」

「そ、それなら…いいかな…?」

穂乃果からマイクを渡されて二人で歌うこととなった。

だが一方で海未はというと…

「（な、なぜ私はこんなにもハラハラと…!?!別にカラオケで二人が一緒に歌うことなんて珍しくことではないのに…!?!）」

ツナと穂乃果と一緒に歌うと知って、海未は心の

中で嫉妬してしまっていた。

「じゃあこれどう？SPRING BLOSSOMの春ロック。」

「それなら歌ったことあるし。いいよ。」

二人は歌う曲を決めて歌い始める。歌っている途中でツナは心の中で…

「あれ？なんか穂乃果ちゃんと歌うとなんかいつもよりうまく歌えてる気がする…」

いつもよりうまく歌えている自分に内心驚いていた。

そして曲が終わると。

「穂乃果ちゃん！ツナ君！95点だよ！」

「息ピッタリだよ！」

「すごいです！」

「まあ、やるじゃない。」

ことり、凜、花陽、真姫が二人に称賛の声をあげる。

ツナと穂乃果は少し照れていた。そして穂乃果は自分の持っていたマイクを海未に渡す。

「今度は海未ちゃんがツナ君の二人で歌ってみてよ。」

「ええ!?わ、私はその…」

「ツナ君、海未ちゃんがツナ君と一緒に歌いたって！」

「ちよつと！穂乃果！」

顔を赤くして、必死に止めようとする海未。それに対してツナは…

「海未ちゃんがいいなら、俺はいいよ。」

「ツナ君はああ言ってるよ、ほら海未ちゃん！」

「だ、だから！私はその…！」

穂乃果は強引にツナと歌わせようとするが、海未は意識しすぎて顔を真っ赤にしていた。

ツナと歌うことに迷っていた海未であったが、結局ツナと歌うこととなった。

「じゃあ…M・N・DのMAN&WOMANでいい？」

「は、はい…大丈夫です…！」

このあと顔を真っ赤にしながらも、ツナと一緒に歌いきった海未。だが途中からツナと歌うのが、楽しくなってきたのか、後半は笑顔で

楽しそうに歌っていたのだった。

あれから2時間ほど歌って、全員カラオケ店から出た。

「いやー！歌った歌った！」

カラオケ店から出て穂乃果がおもいっり背伸びをしながら言う。

「いやー、みんなうまいよね。特に真姫ちゃんの歌声ってすっごく綺麗で、俺つい聞き惚れちゃったな。」

「な、何よ急に!?変なこと言わないでよ！」

「あ…ごめん」

真姫にそう言われて、少し顔を暗くするツナ。そんなツナを見て凜がこう言う。

「大丈夫だよ。本当は褒められて嬉しいんだけど、恥ずかしいだけだにや。」

「な、何に言ってるのよ凜！わ、私は別に…！」

凜に自分の本心を言われた真姫は恥ずかしさのあまり、少し顔を赤くする真姫。

すると今度は花陽がツナに真姫のことを教える。

「真姫ちゃんは歌だけじゃなくて、ピアノもうまいですよ。」

「へー。すごいねー。」

「花陽まで！」

「(ピアノもできるんだ真姫ちゃんって…そういうえば獄寺君はピアノをやってたって言ってたな…お母さんは将来を期待されたピアノニストって言われてたって…)」

真姫がピアノができるを知って、自分の友達である獄寺がピアノがひけることを思い出す。

ツナはそんなことを考えていると、穂乃果が

さつきから考え事をしているツナに話しかける。

「どうしたのツナ君？」

「あーいや何でもない…ちよつと考え事してて

さ…アハハ！」

「？」

変な様子のツナに穂乃果は疑問符を浮かべる。

ツナは獄寺の過去のことに関わることなので、

喋ることを断念する。

「(獄寺君のことを勝手に話すのは、良くないよ

な…それに獄寺君のお母さんは…)」

10年後の未来でリボンから獄寺の母は何者かに消されたと聞いていたツナだったが、実は中学3年の時に獄寺がツナにだけ自分の母親について真実を話してくれたのだ。獄寺の母は誰かの手によって殺められたわけではなかったが、それでも悲しい過去なので話すわけにはいかないので、ツナはそのことを心にずっとしまっていた。

ツナが暗い顔をしているとことりと海未が心配する。

「大丈夫ツナ君？顔色が悪いよ？」

「どこか具合が悪いのですか？」

「だ、大丈夫だよ…とにかくもう帰らないと！明日は学校だしさ！」

「「「「「？」」」」」」

ツナの妙な態度に穂乃果たちは疑問符を浮かべていた。

ツナの妙な態度に違和感を感じていたが、各々家に帰っていた。

ツナは穂乃果とことりと海未と一緒に帰る。途中海未とことりと分れ、ツナはバイクを置いてある穂むらに行くために穂乃果と二人で帰っていく。

二人が帰っていると、途中で雨が降ってくる。

「あ、雨だ…：そういういえば夕方から雨が降るって言ってるよ！」

雨が降ってきたのでツナはポケットからあらかじめ用意していた折り畳み傘を取り出す。

一方で穂乃果は…

「ど、どうしよう！私、傘持ってきてない！」

「え!?!じゃ、じゃあ俺はいいから穂乃果ちゃん俺の傘を使って！俺は濡れても平気だから！」

「え!?!それじゃツナ君が風邪ひいちゃうよ！」

「だ、大丈夫だよ！穂乃果ちゃんが風邪を引くほうが俺にとっては大変だよ！」

「でも…：あ！そうだ！私とツナ君と一緒に傘の中に入れていいんだよ！」

「え!?!いや…：それは…！」

穂乃果の提案にツナは顔を赤くする。それに対して穂乃果は「何でツナ君は躊躇ってるんだろう？」という顔していた。

だが結局…

「(女の子と相合い傘するなんて…：なんか変な気分だ…！)」

「ツナ君、肩が濡れてるよ？もつとこつちに寄ら

ないと濡れちゃうよ？」

「い、いや！大丈夫！俺はここでいいよ！」

「え？何で？」

「い、いや！な、なんかここが落ち着くから…！」

「？」

ツナが遠慮している理由がまだわからない穂乃果。このあともツナは穂乃果のほうに寄らず、穂むらに向かって歩いていく。

少しすると穂乃果はツナにあることを尋ねる。

「ねえツナ君。」

「な、何!?!」

「聞きたいことがあるんだ。」

「き、聞きたいこと？」

「うん。どうしてさっきあんな暗い顔してたの？」

「え…?」

「何か私がツナ君に変なことしちやっただかな?」

「ち、違うよ!穂乃果ちゃんのせいじゃないよ!」

「それならいいんだけど…でもどうしてあんな暗い顔してたの?」

「そ、それは…」

「ご、ごめん…私ったら余計なこと聞いちゃって…」

「穂乃果ちゃんが謝る必要なんてないよ!俺が暗い顔してたから悪いんであって…ただちよつと思いついてたんだ」

「思い出す?」

「うん。真姫ちゃんがピアノがひけるって話題に

なつた時に、俺の友達のことを思い出してさ

…その友達もピアノがひけてさ…」

「ピアノが上手なの?」

「さあね。俺も聞いたことないんだ。あまり詳しく

く言えないんだけど、その友達にとってピアノ

はあまりいい思い出じゃないらしくてさ…

それを思い出してたらなんか気持ちが暗く

なっちゃって…」

「そうだったんだ…」

「あ…ごめんね。なんか暗くなっちゃって…」

「ううん。聞いた私も悪いし…こっちこそごめんね…」

ツナと穂乃果はお互いに謝る。そして暗い話をし

たので、話しかけづらくなり何も話せなくなつて

しまう。

すると二人の後ろから車がかなりのスピードで向かってくる。その車を見て「このままでは穂乃果ちゃんが危ない」とそう思ったツナ

はとっさに…

「あ、危ない!穂乃果ちゃん!」

「え!」

急遽、ツナは穂乃果を自分のほうへ寄せて穂乃果を車から護る。車
が通り過ぎたのを見計らって穂乃果を見ると。

「危ないなーもう…大丈夫？穂乃果ちゃん…!?」

なんとツナは穂乃果を自分の胸の中に抱き寄せてしまっていた。もちろん意識してやったわけではない。

「ツ、ツナ君…!!／／／」

「あーごめん！穂乃果ちゃん！／／／」

ツナはすぐに穂乃果を離して、元の位置に戻る。

するとここでツナと穂乃果に変化が訪れる。

「(ど、どうしたんだろう私!?急にツナ君といるのが恥ずかしくなつて…!!も、もしかしてこれが…!!)／／／」

「(い、今…俺穂乃果ちゃんを…!!あれ?急に心臓が…!!この感じ…俺が京子ちゃんのが好きだった時と同じ感覚…!!)／／／」

この瞬間、二人は恋に落ちた…

#標的(ターゲット) 16 「俺は…」

突然のトラブルによって二人がいい雰囲気?になっていると。二人の横を1台の車が止まると窓が開くと。

「あら?穂乃果とツナ君じゃない。何してるのよ?」

「お、お母さん!?何で?!」

「ちよつと買い物の帰りで…あんたたちこそ何してるの?」

「え!?!いや!?!俺たちは…その!」

「なるほどねー。あんたたちもうそんな関係に?」

「違うよ!／＼違います!」

穂乃果の母がニヤニヤしながら言うと、二人は顔を真っ赤にしながら否定する。そんな二人を見て穂乃果の母さらに顔をニヤニヤさせながら言う。

「息ピツタリじゃない!やっぱり私の目に間違いはなかったわ!ツナ君、穂乃果のことを頼むわね!」

「だ、だから!その…!穂乃果ちゃんと俺は…!」

「(もうお母さんってば…!何でこういう時に…!)」

いつもならもう少し反論するツナと穂乃果だが、さっきの出来事を思い出してしまい、いつもより反論できないでいた。

このあと二人は穂乃果の母の車に乗せられて、穂むらに向かっていく。

そして和菓子屋に着く。

「はい。これで体を拭きなさい。」

「あ、ありがとうございます…」

ツナは穂乃果の母からタオルを受け取り、濡れた体を拭いていく。穂乃果は帰ってすぐにシャワーを浴びにいつている。

「なんか悪いわね。わざわざお礼をしてくれた上に、私たちの分まで頂いちゃって。」

「いえ！先日は色々とお世話になったんで、このくらい当然です！」

「それで…どうなの？」

「どうなのって…？何がですか…？」

「穂乃果のことに決まってるじゃない！やっぱり惚れちゃった？」

「え!?!いや！俺は別に…！」

「隠さなくてもいいのよ。今は穂乃果はここにいないんだから。」

「そ、それは…！」

穂乃果の母にそう言われてツナは恥ずかしさで黙りこんでしまいが、自分の気持ちを穂乃果の母に告げる。

「す、好きです…!!／／／」

「そう。前に穂乃果との結婚の話をした時と、反応が違うから変だなって思ってからそうなんじゃないかと思っただけど、やっぱりねー。」

「(バ、バレてた…！)」

「それで？何で穂乃果が好きになったの？」

「い、いや…!!それは…さっき…!!／／／」

「うんうん。さっき？」

「ほ、穂乃果ちゃんを…!!む、無理！は、恥ずかしい!!／／／」

「プツ！面白いわねツナ君って！大丈夫よ、無理に答えなくていいわ。」

顔を真っ赤にして顔を手で覆っているツナの反応が可愛いらしすぎて、穂乃果の母は笑ってしまう。

すると穂乃果の母は真剣な顔で語り始める。

「私ね、嬉しかったの。」

「嬉しかった？」

「あの子のことを、こんなにも褒めてくれる人がいてくれたことがね。」

こんな人が穂乃果の彼氏になってくれたらいいと思ったの。」

「そ、そんな！俺は穂乃果ちゃんが凄いなと思っただけで！生徒会長にスクールアイドルをやってる時点で俺なんかと全然違うじゃないですか！」

「そうね。でもいざっていう時は凄いなけど、普段はすっごいおっちょこちよいだったりするのよ。」

「おっちょこちよいななんて…俺なんて何もないと

ころで転んだり、階段から転げ落ちるなんてこと

が日常茶飯事ですよ！」

「変わってるわねツナ君って。そこまでして穂乃果のことを…？」

「そ、そういうわけじゃ…俺なんて昔から何をやってダメダメで、そんな俺に比べたら穂乃果ちゃんは…」

「そんなに自分のことをそんなにダメだと思ってるの？私はそんなことないと思うわ。」

「でも…それに…」

「それに…？」

「俺には中学の時に好きな人がいたんです。でも…一方的な片想いで終って…一応その子には自分の思いを伝えたくて…それに今だにその子のことが忘れられなくて…それなのに穂乃果ちゃんのことを好きになって…最低ですよね…」

「あーもう！少しは前向きに考えなさいよ！いくら前に好きな人がいたからって、また違う人を好きになったっていいじゃない！浮気してるわけじゃないんだから！」

「え？」

「私はあなたが穂乃果に相應しいと思ったから、私は色々と言ってるのよ！あなたは穂乃果をスクールアイドルとしてではなく、一人の女の子として好きになってるから！」

「一人の女の子として…」

「それに前に好きだった子のことを記憶喪失でもならない限り、忘れることなんて絶対にできるわけじゃないじゃない！それにその子に思いを伝えた時に、何か恨み言の一つでも言われた？」

「いいえ…私のこと好きになってくれてありがとうって…」

「普通はありがとうなんて言われないわよ。少なくともあなたがとてもいい人だと思ってるか」

その子だってそう言ったのよ。自信を持

ちなさいツナ君！あなたは最低なんかじゃない！」

「!？」

穂乃果の母に言われて、ツナはポロポロと涙を流していく。突然涙が出たことにツナは戸惑ってしまう。

「あれ？何で…俺…」

「ずっと気にしてたのね…大丈夫よ。今は好きだけ泣きなさい。」

#標的（ターゲット） 17 「思いついた」

ツナが穂乃果の母の言葉に感動し、泣いていると。「あーさっぱりした。」

お風呂場のほうから穂乃果の声が響いてくる。その声を聞いてツナは涙をぬぐう。

少しすると、ツナがいる部屋に穂乃果がやって来る。穂乃果はツナと顔をあわせると、少し顔を赤くして気まずい顔をしてしまう。

「あ、ツナ君…!」

「穂乃果ちゃん、あの…さっきはごめん。」

「あ、謝らなくてもいいよ!私のこと護ってくれたのに!こっちこそ護ってくれたのに、お礼の一つもいえなくて…!」

とりあえず二人はさっきのことを謝る。とりあえず気まずい雰囲気はなくなった。

そして穂乃果は自分の母のほうへ向き。

「お母さん、ツナ君に変なこと言っていないよね?」

「何よ穂乃果。私がそんなこと言うと思う?」

「さっき言ってたでしょ…?」

「あら?そうだったかしら?」

「もう…!」

自分の母の態度に、呆れてため息をつく穂乃果。

一方でツナは携帯の時計を見て。

「もうこんな時間だ。そろそろ帰らないと。」

「明日から学校が本格的に始まるからね。でも雨降ってるけど大丈夫?」

「大丈夫。バイクに雨具が積んでるから。」

そう言うツナは帰る準備を始める。そして外に置いているバイ

クのところへ向う。そして穂乃果と穂乃果の母は傘をさして、ツナを見送る。

「また、お世話になりました。」

「いいのよ。また遊びにきてねツナ君。」

ツナが穂乃果の母にお礼を言う。そしてヘルメットをちゃんと装着し、バイクのエンジンをかける。

「じゃね穂乃果ちゃん。」

「う、うん…!」

「今度…今度また暇があったら遊ぼうね。今度は俺の友達を紹介するよ。」

「え!?うん…!」

少し積極的なツナに少し戸惑ってしまう穂乃果。

そしてツナはバイクを走らせて並盛にある自分の

家に帰っていく。

「(なんだろう? な急にツナ君が変わったような…気がする…)」

「フフフ…たくましくなっちゃって。」

「ちよつとお母さん! やっぱりツナ君に何かしたの!?!」

「さてと。そろそろ晩御飯の準備しなくちゃね。」

「ちよつとお母さん! 教えてよ! ねえってば!」

穂乃果は母に問いつめるが、何も教えずに穂むらに戻っていく。

そしてツナが穂むらからバイクを走らせて20分。ツナは自分の家に帰る。

「ただいまー。」

「お帰りツナ。」

玄関に入っていると、台所から母である奈々の声が聞こえてくる。ツナは台所に行くと、奈々が晩御飯を作っていた。そして台所には居候の一人であるフウ太が座っていた。

「お帰りツナ兄。」

「ただいまフウ太。あれランボたちは?」

「ランボはらうじさんのところに遊びにいってるよ、イーピンとビア
ンキ姉は今お風呂に入ってるよ。」

「そう。」

フウ太から居候しているランボ、イーピン、ビア

ンキが何をしていたか聞くと、奈々にスイート

ポテトを渡したことを報告する。

「喜んでくれたよ、母さんのスイートポテト。」

「それはよかったわ。あ、ツナ。そろそろ晩御飯ができるからリボ

ン君を呼んでくれる?」

「うん、わかった。」

ツナは自分の部屋の屋根裏にいるリボーンを呼びにいこうとする

と、あることを思いつく。

「ねえフウ太。」

「何? ツナ兄?」

「ランキング能力って使えるよね?」

「うん! 使えるよ。」

ツナが尋ねるとフウ太はそう答える。一度は失ってしまったフウ太のランキング能力は、この3年で少しずつ回復していき、現在では何も問題もなく使えるようになった。

「あとでいいんだけどさ、フウ太のランキング

能力でさ…を調べてほしいんだけど。
「いいよ!」
ツナがフウ太に頼んだこととは!?

#標的 (ターゲット) 18 「宣言」

そして次の日

今日は新入生が体験入部に来て、アイドル研究部の説明とメンバーの自己紹介などで部活は終わった。

そして部活が終ってメンバーは近くのカフェでジュースを飲んでいた。

「今日は新入生が体験入部にいっぱい来てくれたね。」

「そうですね。μ^{私たち}、sは解散しましたが、スクールアイドルを目指したい人はたくさんいるということですね。」

ことりと海未がそう言うのと、花陽が穂乃果に尋ねる。

「そういえば雪穂ちゃんも入るんだよね?」

「うん。阿里沙ちゃんもね。あの二人はスクールアイドルを目指してるから。」

穂乃果の妹の雪穂と、元μ^sのメンバーで3月に卒

業した絢瀬絵理の妹である亜里沙が入部するこ

とを穂乃果は知っていた。

「そういえば私たちはどうするの?」

「そうだにや。μ^sは解散したのに、スクールアイドルとして活動するのは変だにや。」

真姫と凜が今後の活動について、素朴な疑問を答えると、そのことについて海未が答える。

「その点については問題ないですよ。これから私

たちはスクールアイドルを目指す後輩たちのサ

ポートをしていきたいと思います。私たちの

スクールアイドルとしての経験はきつと後輩

たちに役に立つはずですよ。」

海未の考えに全員「おー」と感嘆の声をあげる。そしてさらに海未

は続けていく。

「ですが私と穂乃果とことりは生徒会の仕事もありません。できるだけスクールアイドルを目指す後輩たちのために時間を費やすつもりではありませんが、どうしても無理な場合があります。なので花陽、凜、真姫、これからはあなたたちが中心となって後輩たちをひっぱっていかなければなりませんよ。」

「せ、責任重大…」

「大丈夫だよかよちん！私も協力するにゃ！」

「ま、仕方ないわね。」

海未の言葉に花陽はプレッシャーを感じるも、凜の一言に少し安堵の表情を浮かべていた。

そんな二人に対して真姫は凄く冷静であった。

するとここで穂乃果が…

「ねえ海未ちゃん。私ね海未ちゃんにちよつと言いたいことがあるんだけどいい？」

「何ですか穂乃果？」

「単刀直入に言うね。私ね…」

穂乃果は一旦深呼吸すると、真剣な顔つきになり海未にあのことを告げる。

「私ねツナ君のことが好きなの。」

「え!？」

「「「「?」」」」」

突然の穂乃果の告白に、一同は驚き何も言えなくなってしまうた。そしてさらに穂乃果は話し続ける。

「昨日初めて自分の気持ちに気づいたんだ。海未ちゃんはツナ君のことが好きだから、言っておいたほうがいいと思ったんだ。」

「いや…！私はい！」

「今まではスクールアイドルとして一緒に頑張ってきたけど、今度から恋のライバルだよ海未ちゃん。」

「!?／＼／＼」

穂乃果の突然の宣言に海未は顔を赤くし、何も言えずその場で固まってしまっていた。

「あー！緊張した！」

「ほ、穂乃果ちゃん…今のは本当なの？」

「うん。本当だよ。」

ことりが驚きながら尋ねるも、穂乃果は特に恥ずかしがることもなく答える。

すると穂乃果のスマホにLINEが入る。

ピンローン！

「あ！ツナ君からだ！」

『こんにちは、穂乃果ちゃん。また急にごめんね。実は並盛に桜が見える隠れスポットを見つけただ。せっかくだから休日にも、俺の友達と一緒に花見でもどうかかって思ったんだけど、穂乃果ちゃんたちもどうかな？無理なら全然大丈夫だから。』

「へー。隠れスポットかー。」

「「「「隠れスポット？」「」」」」

穂乃果の口から隠れスポットという単語が出て、穂乃果以外は疑問符を浮かべる。

「なんかツナ君が桜が見える隠れスポットを並盛で見つけたんだって。そこでせっかくだから私たちも一緒に花見でもどうかって。」

「花見ですか…」

「面白そうだよ。」

「花見…美味しいご飯…」

花見と聞いて海未は顎に手をやり考える。凜は興味ありげな様子である、それに対して花陽は完全に頭の中が白米のことで頭いっぱいである。

それに対して真姫は少し疑っていた。

「なんか話がうますぎない？花見の隠れスポットを知ってるなんて。」

「ツナ君なら信用できるよ。ツナ君が嘘をつくとは思わないよ。」

「私もそう思うな。それに花見なんてやろうと思

つてもどこも混雑してるから、むしろラッキー
だと思ふな。」

穂乃果とことりはツナの言っていた隠れスポットについて、何も
疑ってはいなかった。

するとここで、穂乃果があることを思いつく。

「そうだ！絵理ちゃんと希ちゃんにこちゃんも誘おうよ！」

「でも…忙しいんじゃない？」

穂乃果の提案に、花陽が絵理たちは忙しいのではないかと思い、無
理なのではと思ってしまう。

「ダメならしょうがないけど、もし行きたいって言ってくれたらいい
でしょ？みんなだって絵理ちゃんたちに会いたいでしょ？」

穂乃果がそう言う。もちろんみんなは絵理たちに会いたいという
気持ちは一緒であった。

「凜は会いたいにゃー！」

「わ、私も！」

「私も会いたいな。」

「確かにいいかもしませんね。」

「まあ…私もいいわ。」

凜、花陽、ことり、海未、真姫がそう言うのと、穂

乃果は「じゃあ、決定だね！」と言うとツナに

返信しようとするが…

「あ…でもいつにしよう？桜っていつまでも咲いてるわけじゃないし
…よし！今週の土日しょー！」

「ま、待ってください穂乃果！生徒会の仕事はどうするですか！」
「がんばって今週中に終わらせる！」

花見に行くことを決心する穂乃果！さてどうなる!?

#標的（ターゲット） 19 「メンバー集め」

その夜。穂乃果は絵理に電話していた。

「久しぶり絵理ちゃん。」

『久しぶりね、穂乃果。どう調子は？』

「うん元気だよ！絵理ちゃんは？」

『私も元気でやってるわ。それよりどうしたの？急に電話なんかしてきてっ。』

「実はね、私たち今週の休みにお花見しようと思ってるんだけど、絵理ちゃんたちもどうかなって思ったんだ。あ！無理なら全然いいんだよー。」

『花見ね…去年はそれどころじゃなかったわね。』

絵理は去年の出来事を思い出す。音ノ木坂学院は去年は廃校の危機で、穂乃果も絵理も花見なんてできる状況ではなかった。

絵理の言葉に穂乃果は1年前のことを思い出していた。

「そっかー。もうあれから1年立つんだねー。」

『少し話がそれちゃったわね。それで花見のことなんだけど、いいわよ。』

「本当に!？」

『ええ。別に用事もないし。希とにこには私から連絡しておくわ。』

「ありがとう絵理ちゃん！」

『それで花見のできる場所はあるの？』

「うん。並盛町にあるの。」

『並盛町？隣町じゃない？どうしてまた？』

「私の友達が、並盛町に花見の隠れスポットを見つけたんだって。」

『そんなところがあるのね。それよりも穂乃果、』

並盛に友達なんていたのね。』

「春休みにたまたま音ノ木坂に来てて知りあった

んだ。ツナ君っていうんだけど。」

『え!?男の子なの!?!』

男の子の友達と知り、絵理は驚いてしまう。その絵理の反応に穂乃果は疑問符を抱いていた。

「どうしたの絵理ちゃん?」

『いや：男の子だなんて思ってなかったから：』

「なるほどねー。大丈夫だよツナ君はとってもいい人だから。」

『穂乃果がそう言うなら、大丈夫ね。』

だが二人は知らない。ツナは普通だが、そのまわりの人はものすごく癖のある人物ばかりであることに。

「それと、ツナ君のほうも友達連れてくると思うけど大丈夫だよね?」

『私はいいわよ。希とにこはなんて言うかしら?』

希とにこが男性が来るといえばなんて言うか気になってしまう絵理。そのことはあとで二人に絵理が聞いてみることでこととなり。

「また時間とか決まったら、教えるね。」

『わかったわ。じゃあね穂乃果。』

そう言う二人は電話をきる。とりあえずあとは

希とにこの返信次第となった。

一方でツナは。とりあえず獄寺と山本を花見に行かないかとL I N Eで誘ったところ。

『面白そうだな。いいぜ。』

『ありがとうございますございます十代目!この獄寺隼人、必ず十代目のために花見を盛り上げてみせます!』

「やった!山本と獄寺君はOKしてくれたよ。」

この二人は特に何の問題なく承諾してくれた。一方クロームは。

『ごめんボス。私はみんなと幻覚を使って花見をするから。』

「幻覚の使い方…と、とにかくそういうことなら仕方ないよね…?」

幻覚を花見をするだけのために使うのはどうなのかと思ったツナだったが、少し便利だなと思ってもしまったのも事実であった。

そして炎真は。

『僕はいいよ。ただ全員では行けそうにはないんだ。』

「やった！炎真は来てくれるんだ！」

とりあえずツナは炎真に「わかったよ」と一言だけ返信した。

そしてなぜかこの男からLINEが来た。

『やつほー綱吉君。なんかスクールアイドルの女の子たちと花見するって聞いたら僕もいくねー。並盛の花見の隠れスポットにユニちゃんたち連れていくからねー。』

あとマシマロ大量に持っていくから楽しみにしててねー。』

「何で白蘭、俺のLINE知ってるんだよ！しかも花見のことまで！」
「一応、言つとくが俺は白蘭にお前のLINEも花見のことも教えてねえからな。考えられんのは…」

リボーンがそう言うと、ツナはなぜ白蘭が花見

のことは知っているかという理由はあれしかなかった。

「パラレルワールド平行世界の力…あいつ自分の能力を何でこんなことに使ってるんだよ…」

「これで、ジェットソファミリーとジツリヨネロファミリーが来ることが決定したな。」

呼んでもいないがこの二つのファミリーが決定する。

そしてリボーンが花見に来るメンバーを提案する。

「じゃあ次はヴァリアーか。」

「いやいや無理だつて！XANXASとかが絶体に来るわけがないつて！それに来たたら来たで大変なだつて。」

百蘭は恐ろしいところはあるが、普段は温厚なので安全だが、XANXASは普段から恐ろしいので「ドカスが！」と喋って憤怒の炎で全てを破壊しかねない。

「シヤマルは危ないし…バジル君とか無理そうだし、雲雀さんは群れるのとサクラクラ病のせいで桜嫌いになってるから無理そうだし…こんなものか…」

一応、身近なメンバーには一通り声をかけたので、花見のメンバーは決定する。

「それにしてもお前にしては、面白いこと考えたじゃねえか。フウ太のランキング能力で花見の隠れスポットを見つけて、そこで花見をするなんてな。まあ穂乃果にいいところを見せたっていうのが本音だろうがな。」

「悔しいけど否定できない…」

こうしてツナと穂乃果は花見に行くメンバーを集めることに成功する。花見まであと3日。

#標的（ターゲット） 20 「ランキング少年」

次の日。音ノ木坂学院の生徒会室では穂乃果は真面目に生徒会の仕事をこなしていた。

「ことりちゃんこの書類できたから確認お願い。」

「う、うん…」

できた書類を穂乃果はことりに渡す。いつもと違う穂乃果にことりは戸惑っていた。

そして次の書類を確認しながら海未に今度は尋ねる。

「海未ちゃん。生徒からの要望の話…なんだったけ？」

「え、えつと…生徒からの要望で、体育館の倉庫の扉のたてつきが悪いと…」

「そっか、あとで先生に報告しなくちゃね。」

そう言うのと穂乃果は再び、黙々と書類に目を通していく。いつもと違う穂乃果に海未もことりと

同様に戸惑っていた。

するとことりが穂乃果おそるおそる尋ねる。

「あ、あの穂乃果ちゃん…？もう2時間ぐらい頑張ってるけど、そろそろ休憩したほうがいいんじゃない…？」

「え？もうそんなに時間が経ったの？」

ことりがそう言うのと、穂乃果は生徒会室にある時計を確認する。本当に2時間も経っていたので穂

乃果は「あ、本当だ」と言うと、ペンを机の上に置く。

「気づいてなかったのですか…？」

「いやー集中してたからさ。全然気づかなくて。」

「花見のために頑張るのいいですけど、無理しすぎないでくださいよ。」

「そうだね。今日はこのくらいにしておくよ。」

海未がそう言うのと、穂乃果は今日生徒会の仕事はこれで終わること

にする。

このあと3人は下校する準備をし、学校を出て途中まで一緒に帰り、途中で各々自分の家の方角へ帰っていく。

「あー！疲れたー！今日は頑張ったなー！」

生徒会の仕事で疲れた穂乃果は、背伸びをしながら歩いていた。

「花見楽しみだなー。それに絵希ちゃんも希ちゃ

んもにこちゃんも来てくれるって言ってくれたし。」

昨日の夜、絵理と電話してあと少しして絵理から連絡があり、希とにこが来てくれることを教えてくれた。

穂乃果が歩いていると、ある場所を通りかかる。

そこは幼い頃に海末とことりが遊んだ公園だった。

「懐かしいな。そういえば二人で一緒に遊んだっけ…」

子供の頃遊んだ公園を見て、穂乃果は当時のことを思い出していた。

するとその公園に少し背の小さく、茶色の髪は少年が立っていた。穂乃果もその少年に気づく。

「何してるんだらうあの子？こんな時間に一人で。」

穂乃果が少年を見て眩くと、少年は上を向いてなにかブツブツと話し始める。すると少年の辺りに落ちていた石や葉っぱが急に宙に浮き始める。その光景に穂乃果は驚きを隠せないでいた。

「え!?…まわりのものが宙に…何で…?…」

そしてしばらくすると、少年の辺りを浮いていた

ものが地面に落ちる。すると少年は懐から巨大な本とペンを取り出すと、何を書きはじめる。

「音ノ木坂のハンバーグの名店ランキングはぼったりモンキーが一位つと…」

そう言うと、少年は本を懐にしまう。

「今日は音ノ木坂の和菓子の美味しいランキング

一位のお店に行ったから、明日はぼったりモンキーに行こ。あ！もうこんな時間だ、急がないとバスが出ちゃう！」

そう言うと少年はバスの停留所に走って行ってしまふ。

一方で穂乃果は…

「ゆ、夢じゃないよね…痛い！夢じゃない！」

頬をつねりさつき自分が見た現象が夢でないことを確認する。

そして穂乃果は確信してしまう。

「ま、間違いない！あの子は超能力者だ！」

#標的（ターゲット） 21 「張り込み」

次の日、アイドル研究部部室。今、穂乃果は昨日見たことを2年生メンバーに話していた。（海未とことりは穂乃果が朝、登校してきた時に話を聞いている。）

「何言ってるのよ……？」

「だから見たんだよ！昨日、超能力を使う男の子を！」

穂乃果が昨日見た出来事を語るが、真姫は信じられず呆れた表情で穂乃果の話を聞いていた。

もちろん真姫だけではなく凜も花陽も。

「生徒会の仕事のしすぎでおかしくなったのかにや……？」

「穂乃果ちゃん……少し休んだほうがいいんじゃない？」

「凜ちゃんも花陽ちゃんまで何でそう言うの！」

何で誰も信じてくれないの——！

可愛らしく頬を膨らませ怒る穂乃果。普通に考えれば超能力なんて言っても誰も信じてくれないだろう。

そんな穂乃果を見て、海未は嘆息しながら言う。

「やはりあなたは無理しすぎだったんです。だから物が宙に浮く幻覚まで見たのですよ。」

「そんなことないよ！私だって嘘だと思ったけど、ちゃんと頬つぺたをつねって確認したんだから！」

海未に意見する穂乃果だが、海未も他のみんなと

同様、信じようとはしていない。

海未の表情から絶体に信じてくれないと悟った穂乃果は、今度はことりのほうを向き……

「ことりちゃんは信じてくれるよね！」

「え!?……きゅ、急にそう言われても……わかんないな——」

穂乃果の勢いにことりは戸惑ってしまふ。ことりは超能力を信じ

ている穂乃果のためを思ったのか、わからないと答えた。

そして誰も信じてくれないならと思った穂乃果は…

「こうなったら！みんなで探そう！昨日見た超能力を使う男の子を！」

「ヴェエエ!?何でそうなるのよ!」

「だってみんなで信じてくれないんだもん!こうなったらちその男の子を見つければいいよ!」

「仮にその超能力者が本当にいたとしても、どこにいるかわかるの?」

「大丈夫!きつとあの男の子は昨日の公園に絶対に来るよ!」

「何でそう言いきれなのよ…?何か根拠でもあるの…?」

真姫が多少不安な気持ちで尋ねる。他のメンバーも同様である。

そして穂乃果は自信たっぷりに答える。

「犯人は現場に戻るっていう法則があるんだよ!」

なぜかここで刑事ドラマなどでよくある格言?を言う穂乃果。そしてみんなは「ああ…やっぱり…」と心の中で思ってしまった。

そして結局、全員穂乃果に無理やり付き合わされ、例の公園で全員張り込みをしていた。全員、公園の木の後ろから超能力の少年が来るのを待っていた。

「何で私たちがこんなことを…」

「仕方ないわよ…ああ言ったら止められないし…」

「本当に来るのかな…?」

「そもそも超能力者なんているのかにや…?」

海未、真姫、花陽、凜が呟く。一方で穂乃果は…

「みんな真剣にやってよ。いつ犯人が現れるかわかんないんだから。なぜかサングラスをかけて、パンと牛乳を持って張り込み?をして

いた。どうでもいいが穂乃果は結構ノリノリである。

「どこから持ってきたのですか：そのサングラス：そしてなぜパンと牛乳…？」

「穂乃果ちゃん：別に犯罪者じゃないんだし、犯人^{ホシ}っていう言い方は変じゃない…？」

穂乃果の格好と言葉の使い方^に海未と穂乃果は違和感を感じていた。

「よしアイビー、イキシア、エリカ。」

急に意味のわからない言葉を言い出す穂乃果。何のことかわからない他のメンバーは疑問符を浮かべていた。

「もう！返事ぐらいしてよ！」

「な、何ですか！急に意味のわからないこと言わないでください！」

「コードネームだよ！アイビーは凜ちゃん、イキシアは花陽ちゃん、エリカは真姫ちゃんだよ！」

海未が答えると穂乃果がアイビー、イキシア、エリカのことについて説明する。ちなみにこの3つの名前は花の名前である。

そして勝手にエリカというコードネームをつけられた真姫が穂乃果に尋ねる。

「何で…コードネームが必要なのよ…？」

「だって犯人^{ホシ}に私たちのこと知られるわけにはいかないでしょ？」

「別に知られても大丈夫でしょ…」

穂乃果の発言に真姫は呆れてしまう。そして穂乃果は…

「じゃあ私はジドリしてくるから。」

「ジドリ？」

「何だにゃ？」

花陽と凜が聞きなれない言葉に疑問符を浮かべる。すると穂乃果はジドリについて説明する。

「ジドリっていうのは警察用語で周辺の住民に聞き込みすることだよ。」

「穂乃果…なぜそういうどうでもいいことに関して詳しいんですか…？」

「穂乃果じゃないよ、ルピナス。私のことはホノさんって呼んでくれないと。」

「なぜあなたはコードネームじゃないんですか!というか勝手にコードネームをつけないでください!」

「アハハ…」

穂勝手にコードネームをつけられて怒っている海未は穂乃果に言う。そんな海未を見てことりは苦笑いしていた。

すると後ろから誰かが話しかけてくる。

「あの…お姉ちゃんたちさつきからそこで何をしてるの…?」

みんなが振り返るとそこには穂乃果が昨日見た、少年がいた。

「あーーーーー!昨日の子だ!」

「「「「えーーーーー!?!」」」」」

#標的（ターゲット） 22 「誘拐」

「お、お姉ちゃんたち誰…？怪しい人…？」

「あ、怪しくなんかないよ！」

「穂乃果…その格好で言っても説得力が…」

「あ…」

海未に言われて自分が今どういう格好をしている思い出す穂乃果。サングラスをかけて、パンと牛乳を持って公園でこそこそしてる時点で不審者とまでいかなくとも変であることは確かである。

穂乃果がサングラスをとると、少年がとあることに気づく。

「あ！もしかしてμ sの…！」

「わ、私たちのこと知ってるの!？」

「うん。最近ツナ兄がスマホで見てるし、それにお姉さんたちのことをツナ兄が前に言ってたから。」

「ツナ兄って…そういうことなの…？」

「もしかして…ツナさんの弟さん？」

「言われてみれば似てなくもないような…」

真姫、花陽、凜がその少年を見て眩く。3人の言葉を聞いて少年は首を横に振ってこう言う。

「僕とツナ兄は兄弟じゃないよ。僕はツナ兄の居候なんだ。」

「」「」「あー…」「」「」

少年の言葉を聞いて、全員前にファミレスで言っていた自分の家に5人の居候がいるというツナの言葉を思い出す。

そしてここで少年は自己紹介する。

「僕はフータ・デツレ・ステツレ。よろしくね。」

「ええ!?外国人!?ど、どうしよう!」

「穂乃果ちゃん…さつきから日本語で喋ってるよ…」

「あ!本当だ!」

フウ太の名前を聞いて外国人だとわかり、焦る穂乃果だったがことに言われてさつきからフウ太が日本語で喋っていることに気づく。

「面白いね穂乃果姉は。」

「わ、私の名前まで知ってるんだ…」

「穂乃果姉だけじゃなくて、他のみんなの名前も知ってるよ。」

「そうなんだ。ところで穂乃果姉って…は!もし

かして生き別れた私の弟…!?それとも隠し弟…!?」

「なぜそうなるのですか…?それに隠し弟って何ですか…」

穂乃果の至った変な結論に海未が呆れてしまう。他のメンバーも同様である。

そんな様子を見て、フウ太が謝る。

「紛らわしことを言ってごめんね。僕、年上の人たちをのことをそう呼ぶ癖があるんだ。」

「謝らなくてもいいよ!私の早とちりだから!」

「そうですね。ある意味フウ太君のほうが穂乃果よりしっかりしているかもしれないね。」

「ちよつと海未ちゃん!それどういう意味!?!」

「そのままの意味です。」

海未の言葉に穂乃果は頬を膨らませて怒る。二人が言いあいをしているとこりがあることをフウ太に尋ねる。

「フウ太君はどうしてツナ君の家に居候してるの?」

「僕ねマファイアから狙われたんだ。」

「」「マファイア…?」「」「」

急にフウ太がマファイアという言葉を出し、こりも、2年生メンバーも、言いあいをしていた

穂乃果と海未も驚きのあまり固まってしまっていた。

「それで、日本に来たのはいいけど誰も知りあいがいないから、とりあ

えず野望のないマフィアのボスランキングの1位のツナ兄を頼ってきたんだ。」

「「「「え…?」「」」」」

さらにフウ太がツナのことをマフィアのボスと言い始めて、全員頭の中が真っ白になってしまう。

「えつと…ツナ君がマフィアのボス…?」

「そ、そんなわけないでしょ…冗談に決まってるでしょ…?」

「そうだよ…ツナさんがそんな人だとは思えないし…」

「マフィアごつことかじゃないかにや…?」

「そ、そうですよ…そもそもこの辺にマフィアなんて…」

「だ、だよねー…」

穂乃果、真姫、花陽、凜、海未、ことりはフウ太の言っていることは嘘だろうと思っていた。しかしフウ太を見ると嘘をついているような素振りや表情をしていないので、本当にツナがマフィアのボスなのではないかという可能性が出てきてしまう。

すると穂乃果たちの前に一人の黒いスーツを着た男が現れる。

「こんなところに長年ウチのファミリー求めていた、奴に出会えるとは。」

「だ、誰…?」

「名乗るほどの者ではない。なあ?ランキングフウ太?」

「み、みんな逃げて!」

男がそう言うと、フウ太がこの男がマフィアだと

理解しみんなに叫ぶ。

だがその瞬間、男は懐から球体を取り出すとそれを地面に叩きつける。すると煙幕が発生する。

「な、何!?!」

「け、煙が…」

「な、何も見えないにや…」

「ど、どうなってんのよ…」

「一体これは…」

穂乃果、花陽、凜、真姫、海未が突然の煙幕に身

動きが取れずにいた。

そして少しすると煙幕が晴れて、辺が見えるようになってくる。そしてある異変に気づく。

「フウ太君とことりちゃんがいらない！」

突如、拐われてしまったフウ太とことり。二人はどうなってしまったのか!?

#標的（ターゲット） 23 「助ける」

謎の男にフウ太とことりが拐われてしまう事態が発生してしまつた。

突然のことに穂乃果たちはどうしていいやらわからず支離滅裂な状態である。

「ど、どうしよう！フウ太君とことりちゃんが！」

「け、警察に連絡しなくちゃ！」

「で、でも！警察に電話して、人質にでもされたら！」

「じゃあ！どうするって言うのよ！」

「一旦冷落ち着いて！とりあえず冷静になりましょう！」

穂乃果、花陽、凜、真姫が警察に電話するか否かで言いあつていて海未が冷静なれと穂乃果たちに言うが、みんなも自分も落ち着ける状況ではない。

そんな中で1台のバイクが穂乃果たちの前に止まる。

「あれ？穂乃果ちゃん？」

「何やってんだ？」

「ツナ君！リボーン君！」

バイクに乗っているツナとリボーンが叫ぶ。こんな大変な状況ではあるがリボーンを見て2年生メンバーは驚愕していた。

「「赤ちゃんが喋ってる!?!」」

「まあ…そういう反応するよね…」

リボーンが喋っていることに驚いている花陽、凜、真姫を見てツナが眩く。

すると海未がここでさつき起きた出来事についてツナとリボーンに話す。

「そんなことより！フウ太君とことりが誘拐されたんです！」

「ええ!?ゆ、誘拐!?!」

「もつと詳しく説明しろ海未。」

海未の話を聞いて驚くツナ。それに対してリボーンは冷静であり、海未にフウ太とことりが誘拐された時の状況を尋ねる。

「突然、私たちの前にスーツを着た男が現れて…そして煙幕を使って、私たちが身動きがとれない間にフウ太君とことりが…」

「そ、そんな…どうしよう…」

「落ち着けツナ、ただの誘拐犯だ。ここは警察に電話すんのが…」

リボーンが警察に電話することを勧めようとすると、穂乃果が男が言っていた言葉を思い出す。

「そういえば妙なこと言ってたよね、ファミリーが求めていたとか…」
「え…?」

ファミリーと求めていたという単語を穂乃果から聞いてツナは少し驚いてしまう。

すると花陽と真姫と凜ももう一つ、男の言っていた言葉を思い出す。

「あと、フウ太君のことを変な呼び方してたよね…」

「確か…ランキングフウ太って…」

「確かに言ってたにや！でも一体何のことなのかさっぱりだにや…」

「リボーン…これって…」

「ああ。どうやらそういうことらしいな。」

みんなの言っていた言葉から、ツナとリボーン

は男の正体と目的に気づく。

そしてリボーンはさらに尋ねる。

「おい！フウ太とことりが拐われてからどれくらいたった？」

「え、ほんの数分前ですが…」

「ならそう遠くにはいけねえはずだ…この辺りに

滅多に人が行かなねえよう場所とか、潰れた

工場とかないか？」

「潰れた工場なら、この近くに…」

「よし行くぞツナ！」

「うん！」

潰れた工場があると聞いて、リボーンとツナは急いでバイクに乗り二人を助けに行こうとする。

「ツナ君！どこに行くの!?!」

「フウ太とことりちゃんを助け行く！」

「無茶です！何を考えているんですか!?!」

「そうよ！警察に任せればいいじゃない！」

海未と真姫が二人を助けに行くと聞いて、海未と

真姫はツナに向かって叫ぶ。

「フウ太とことりちゃん俺の大事な仲間だ！友達なんだ！」

「ですが！」

「心配すんなお前ら、すぐに終わらせる。俺の生徒を信じろ。」

リボーンがそう言うと、ツナは真剣な眼差しでみんなのほうを向いてこう言う。

「警察には電話しないで大丈夫だよ。絶対に助けてみせるから。」

そう一言だけ言うと、ツナはバイクのエンジンをかけて、フウ太とことりが捕らわれているであろう

う廃工場にバイクで走っていく。

「い、行っちゃました…！」

「本当に何を考えてるのよ！」

「む、無謀にもほどがあるにや…！」

ツナの行動に花陽、真姫、凜は心配してしまう。そして

海未もスマホを取り出して警察に連絡しようとする。

「待って海未ちゃん！」

「な、何をするんですか!?!穂乃果！」

「ツナ君が言ったたでしよ、警察に連絡するなって。」

「そうですが！でも相手は誘拐犯なんですよ！ことりもフウ太君も拐われているのに警察を呼ばないわけには！」

「大丈夫だよきつと…ツナ君ならきつと二人を助けてくれる。私はそう信じてる。」

「ですが！もし何かあったら！」

「わかってる…でも私だって二人が誘拐されて何も思っただんかなくないよ。フウ太君は今日初めて友達で、ことりちゃんは小さい頃からの友達なんだよ…？」

「穂乃果…」

「ツナ君のあんな真剣な顔…なにかもの凄い覚悟を感じたんだ…だから私はツナ君を信じる！絶対に二人を助けにきてくれるって。」

ツナの覚悟を信じた穂乃果。ツナは二人を助け出すことができるにだろうか。

#標的（ターゲット） 24 「信じてる」

ツナとリボーンがに拐われたフウ太とことりを助けに向かっていたその頃、廃工場では。

「う、うくん…?」

「気づいたことり姉?」

ことりが目覚めると、横には両手首をロープで結ばれ、身動きが取れない状態のフウ太がいた。そしてことりもフウ太と同じように捕らえられていることに気づくと同時に自分に何があつたのかを思い出す。

「えつと…私…」

「変な男にことり姉は拐われたんだよ。僕が

妙な行動を起こさないための人質として。」

「人質…?」

「うん。それよりごめんね。ことり姉まで巻き込んだじゃつて。」

「フウ太君が謝らなくてもいいよ!それより私たちを誘拐した男は…?」

「今ここにはいないよ。この工場の外で何かしてみろみたいだけど、どのみちこのロープを外しても、逃げられないよ。」

「そ、そんな…」

フウ太から今、自分たちがどういう状況に置かれているかを聞いて、ことりの目から涙がこぼれる。

涙を流していることりを見て、フウ太が心配する。

「大丈夫?ことり姉?」

「ご、ごめんね…フウ太君だって怖い思いしてるのに…私ったら…」

「大丈夫だよ。絶対にツナ兄が助けにきてくれるから。」

「ツナ君が…?どうして…?それにツナ君は並盛に…」

「少なくとも穂乃果姉たちがツナ兄に連絡するはずだよ。一応、ツナ

兄の家に居候してるんだし。」

「あ、そっか…」

フウ太の言葉にことりは納得する。実際、家にはいないが二人を助けるために現在、この廃工場に向かっているのは事実である。

「でも…ツナ君が来ても…誘拐犯に…」

「そういえば、ことり姉はツナ兄の強さを知らないんだよね。ツナ兄はあんな誘拐犯に負けるほど弱くないよ。」

「ツナ君が…？」

「うん。さつき言ったでしょ？僕はマフィアに狙われたって。日本に来た時にもマフィアに拐われ

そうになったことが2回あったんだ。」

フウ太は日本に来てツナと初めてあった時にマフィアに拐われそうになった時のこと、骸に拐われ

た時のことを思い出す。

「ツナ兄はどんな時でも、自分がどんな目にあっても僕を…みんなを護ってきたんだ。だからツナ兄を心の底から信じられるんだ。だからことり姉、ツナ兄を信じて。」

「…」

フウ太の言葉にことりは驚きのあまり何も言えなかった。

すると二人を誘拐した男が再び、戻ってくる。

「おや？目覚めたようですねランキングフウ太君にお譲さん。今しがたウチのファミリーに君を捕らえたことを伝えた。1日もすればファミリーが迎えにくる。おっと妙なことをするなよ？妙なことをすればこのお嬢さんがどうなるか、君ならわかるはずだ。」

「妙なことはしないよ。それにツナ兄が助けにくるから。」

「ここには助けは来ない。私はこう見えても

術士でね。万が一を考えて幻覚でここに来れ

ないようにしてある。」

すると男の指にリングをつけており、そのリング

から藍色の炎…霧の炎がリングに炎に灯っていた。

その炎を見てフウ太は少しだけ驚いていた。それに対してことり

は見たことのない現象に珍しいものを見るような目で男のリングを見ていた。

「(何…?指輪から炎が…どうなってるの…?)」

「仮にこの場所を嗅ぎ付けたとしても、術士でもない限りここに来ることはできな「ドローン！」な、何だ!?!」

突然爆発が起こり、男は爆発した方向を見ると爆炎の中から2つの人影を視界に捕らえる。

「だ、誰だ!」

「派手にやりすぎだぞツナ。」

「お、お前がやれって言ったんだろ!」

男の言葉を見無視して、超死ぬ気モードの状態になっているツナとリボーンが話しながら工場の中に入ってくる。

「無視するな!貴様はら…な!?!」

男はツナと姿を見て驚愕する。そして男はツナをみたあとにリボーンの姿を見て再び驚愕する。

驚いていたのは男だけではなく、ことりもツナの姿を見て驚いていた。一方でツナの姿を見て、フウ太は明るい表情になっていた。

「ツナ君…?本当にツナ君なの…?」

「ツナ兄!」

「あ、あの額の炎…あの紋章…まさかボンゴレ…?!それになぜ最強の赤ん坊まで!?!なぜここに!?!」

「フウ太、ことり大丈夫か?」

「うん!」

「え…う、うん…」

明るい表情で答えるフウ太。それに対してことりは急に呼び捨てで呼ばれたことと、超死ぬ気モードのツナに戸惑い、返事するのがやっとだった。

二人が大丈夫だとわかったツナは、少しだけ微笑むとすぐに真剣な眼差しになり…

「絶体に助けてみせる。俺の命に変えても!」

仲間を助けるため、ツナの死ぬ気の炎が燃え上がる!

#標的（ターゲット） 25 「信じてくれるか？」

「俺の仲間を返してもらおうぞ。」

「ぐっ!？」

予想外の事態に男は焦ってしまっていた。一方でことりは超^{ハイパー}死ぬ気モードとなったツナを見て、今だにあれが本当に自分の知っているツナなのかと今だに信じられないことと、ツナの額の死ぬ気の炎を見てさっきのことを思い出す。

「（フウ太君が言った通りツナ君が本当に助けてくれた：けどツナ君のあの額の炎、色は違うけどさっき誘拐犯が見せてくれた炎に似てる：一体何だろう：?）」

「大人しく二人を解放しろ。そうすれば、何もせず逃がしてやる。」

「（相手がいくらあのボンゴレとはいえ：俺があんな餓鬼に！だがあの炎の純度から見て到底勝てる相手ではないし、この入口付近にかけていた幻覚も見破られた：だから幻覚を使って逃げることは不可能：仮に勝てたとしても、最強の赤ん坊^{アルコバレーノ}もいる：なにより次期ボンゴレに何かあったとなればボンゴレの怒りを買うことは確実：どうする!?)」

男は何とかこの場を凌ぐ方法を考えるが、どのみち自分どころか、ファミリィが消されるということにもなりかない。そう思った男が生き残るための手段は一つしか残されていなかった：

「ぎゃー！」

「う、動くな！この女がどうなってもいいのか！」

「ことり！」

「ことり姉！」

「ちっ！」

男は懐からナイフを取りだしナイフをことりに向ける。

ことりが人質に取られて、ツナとフウ太は叫び、リボーンは舌打ち

する。

「もしもの時を考えてこの女を拐っておいて正解だった。フウ太でも人質にはなるが、ウチのファミリーがマフィア界で這い上がるための道具なんぞでな、傷つけるわけにはいかないからな。」

「どうしようもない野郎だな。」

「なんとも言えアルコバレーノ。さあ！道を開ける！」

「(どうする!?!このままじゃことりとフウ太が…どうすれば!?)」

絶体絶命の状況。ツナはなんとか二人を助け出す

方法を考えていると、地面に落ちていた少し

大きめの石がツナの靴のつま先に当たる。

それを見てツナは二人を助け出す方法を思いつく。

するとツナはことりに向かって叫ぶ。

「ことり！」

「な、なにツナ君…?」

「俺のことを信じてくれるか?」

「え…」

急なツナに信じてくれるかと言われ戸惑うことり。だがさつき

フウ太が言っていた言葉を思い出す。

『ツナ兄はどんな時でも、どんな目にあっても僕

を…みんなを護ってきたんだ。だからツナ兄を心

の底から信じられるんだ。だからことり姉、

ツナ兄を信じて。』

フウ太の言っていた言葉を思いしたことりは、

ツナに向かつて言う。

「うん…信じるよー」

「わかった。」

「何をごちゃごちゃ言っている!とつと道を…「ナッツ!」

男の声を遮り、ツナはボンゴレギアから相棒のナッツを呼びよせる。何もないとところから出てきたと思っっていることりは突然ナッツが出てきたことに驚いている。

「え!?!ナッツちゃん!?!」

「ナッツ！形態変化！」
カンビオ・フォルマ

「ガウ！」

ナッツを形態変化させると、腕のパーツが変化する。

「き、貴様！この女がどうなってもいいというのか!？」

「Xカノン！」

「な!？」

ツナはXカノンを男に向けて発射する。弾丸と化した死ぬ気の炎が男に向かって放たれるが、Xカノンは男の頭上に放たれ、Xカノンは天井で爆発する。

「や、やっぱりな！こっちには人質がいるんだ攻撃できるわけ…な!？」

外れたXカノンを見たあとで、再びツナのほうを向いた瞬間に、先程ツナの近くに落ちていた石が目の前に迫っており、男はそれを避けられず石が額に当たる。

「が!?!ちよこぎいな…な!？」

「はあ！」

「ガハ！」

男に石を当てて、一瞬だけ怯んだ隙についてツナは死ぬ気の炎の逆噴射させ、いっきに男の前まで高速移動し男を蹴り飛ばした。

そしてことりをお姫様抱っこし、元いた場所まで高速移動でことりを安全なところまで運ぶ。

「怪我はないかことり?」

「う、うん…!!」

「よし次はフウ太を…「ツナ兄。」フウ太!？」

次はフウ太を助けようとするツナだったが、なぜかフウ太が隣にいた。

「フウ太!?!どうして!？」

「お前がことりを助けてる間に、俺がフウ太を解放したんだ。」

「そうだったのか…それよりあの男は?」

「起き上がってこねえところを見ると、どうやら気絶したらしいな。死ぬ気の炎を扱えても、たいした奴じゃなかったみてえだな。」

リボーンがそう言うと、ツナにお姫様抱っこされていることりが顔

を赤くしながらツナに言う。

「あ、あのツナ君…降ろして…!!／／／」

「あ！す、すまない…」

ことりに言われてツナはことりを降ろす。そして

ツナは超ハイパー死ぬ気モードの状態を

解除し、ノーマル状態に戻る。

「ふう…フウ太もことりちゃんも

大丈夫？」

「うん大丈夫だよ。」

「あれ？ツナ君呼び方が…」

「あ！それはその…！」

ノーマル状態に戻って、自分の呼び方が変わった

ことに違和感を感じることり。ことりにそう言

われて慌てるツナだったが…。

「ことりでいいよ。」

「え？」

「そのほうが統一してていいし…それに…!!／／／」

「それに？」

「ううん…!!／／／何でもない…!!／／／」

「？」

ことりが顔を赤らめているが、ツナは全然気づいていない。

そんなツナにリボーンが。

「本当に鈍いよなお前。」

「な、何がだよ！」

「とにかく帰えるぞ。みんなが待つてるからな。」

「リボーン！さっきのどういう意味だよ！ねえってば！」

無事、フウ太とことりを救出できたツナ。そして

ツナに好意を寄せることり。これからどうなるのか。

#標的（ターゲット） 26 「二人だけの秘密」

無事、事件も解決。そして4人は帰ろうとしたのだが、ここでツナは男のことについて尋ねる。

「って！あの男はどうするの?」

「心配ねえぞ。デイーノの奴に連絡しておいた。あとのことはデイーノに任せとけ。」

「デイーノさん日本に来てるの?」

「お前が花見に誘ったから、仕事を早めに終わら

せてキャツバローネファミリー総出で日本に来て

るらしいからな。」

ツナとリボンが会話していると、デイーノとキャバツローネファミリーという知らない単語が出てきて、ことりは疑問符を浮かべる。

「えっと…でいーの?きやつば…?」

「デイーノは俺の元生徒だ。キャバツローネファミリーはマフィアのことだ。」

わからない表情をしていたことりに、リボンがデイーノとキャバツローネファミリーのことについて気をきかせて説明する

そしてことりはツナのほうを見て尋ねる。

「マフィア…ツナ君もそうなんだよね?」

「ええ!?!何で知ってるの!?!」

「フウ太君が教えてくれて…穂乃果ちゃんたちも知ってるよ…」

「えー…!?!」

自分がマフィアのボスであることを全員に知られていたことに驚愕するツナ。

「最悪だー!穂乃果ちゃんたちには知られたくなかったのにー!!何で喋ったんだよフウ太!」

「んー?成り行き?」

「何で疑問形!？」

「でも、さっきのでツナ兄の正体はバレてたんじゃない…?」

「まあ…そうだけどさ…」

フウ太の言葉にツナは何も言えなくなるツナ。超^{ハイパー}死ぬ気モードの自分を見られた時点で自分がファイアのボスということをおおえなくなってしまうだろう。

そしてことりが超^{ハイパー}死ぬ気モードのことについて聞く。

「そもそもツナ君は…その…人間なんだよね…? 額に炎が燃えてたりしてたけど…」

「い、一応人間だよ…正真正銘人間だよ…?」

「そ、そうだよね…?」

「(そうだよなー…京子ちゃんやハルはあんまり言われることなかったけど…普通の人から見れば確かに俺が本当に人間かどうか疑いたくなるよなー…)」

改めて自分の能力について考え直すツナ。そしてツナはことりに自分能力についての話をする。

「あ、あのさ…あとでちゃんたちに俺がファイアのボスのことはちやんと話すよ。けどさっきの俺のことはことりちや…ことりと俺だけの秘密したいんだけど…いいかな?」

「(わ、私とツナ君だけの秘密…!!な、なんかちよつと恋人同士みたい…!!／／／)」

「あの…」

「へ!?う、うん!言わないよ!絶体に!死んでも言わないから!だから安心して!」

「い、いや…命までかけなくても…」

必死すぎることりにツナは少しひいてしまう。

そしてここでリボーンはとある提案する。

「ツナ、お前はバイクにことりを乗せて、穂乃果たちのところへ行け。」

「「え!？」」

突然のリボーンの提案にツナとことりは顔を赤くする。

「な、何で俺が!?それにフウ太はどうするんだよ!？」

「バイクならことりをすぐに送っていけるだろ。そしてフウ太は
ディーノの車で家まで送ってもらおう。そのほうが安全だろ。」

「そうだけどき…!!で、でも…!!」

「というわけだ。フウ太行くぞ。」

「うん。」

「ちよつと待ってよりボーン！フウ太も！」

ツナの制止も聞かずにリボーンとフウ太は廃工場を出て行ってしま
う。

そして

「し、しっかり捕まってるね…！」

「う、うん…！／＼／＼」

ツナがことりにそう言うと、ツナはバイクのエンジンをかけ、穂乃
果たちの待っている公園に向かう。

そしてツナの背中に捕まっていることりはというと…

「(男の子とこんなに密着するなんて初め

て…!!でもなんか穂乃果ちゃんと海未ちゃんに悪いな…)」

少し嬉しいと思う半面、自分と同じくツナに恋し

ている穂乃果と海未に申し訳ない気持ちになっ

てしまうことり。

一方でツナも…

「(お、女の子を後ろに乗せることになるなん

て…！リボーンの奴一体何を考えてるんだよ…！)」

女の子をバイクに後ろに乗せることなんて初めてのツナは意識し
てしまっていた。このあと二人は意識しすぎてお互いに会話するこ
とができなかった。

#標的（ターゲット） 27 「呼び方」

そしてツナとことりは公園を待っている穂乃果たちのところへ着く。

そしてみんなは驚愕していた。本当に誘拐犯からことりを救い出したことよりもツナとことりがバイクで二人乗りしていたことに。

「なななななぜ?! ツナ君とことりが…!?!」

「あああ…い…こ、ことりちゃん…!」

無事に帰ってきて感動することよりも、海未と穂乃果がバイクで二人乗りしていることにももの凄く動揺していた。

そんな二人を見てツナは「どうしたんだろう?」と心の中で思い、ことりは「ごめんね…」と心の中で思っていた。

「ほ、本当にことりちゃんを誘拐犯から…」

「す、凄いにや…」

「…」

ツナが誘拐犯からことりを救ったことに驚く花陽と凜。

一方で真姫は本当にツナがことりを救い出したのか疑っていた。

そして海未が多少、動揺しながらフウ太とリボーンのことを尋ねる。

「え、えっと…フウ太君とリボーン君は…?」

「大丈夫。俺の知り合いの人が俺の家まで送ってきてくれるらしいから。」

「そ、そうですか…」

「ごめんね。みんなに迷惑かけちゃって。」

「う、ううん…? だ、大丈夫だよ…?」

「あれ？さつきから穂乃果ちゃんと海未ちゃんが俺と目を合わせてくれないような…また変なことしちゃったかな…？」

さつきから様子が変な穂乃果と海未を見てツナは心の中で思ってしまう。

そしてさらに穂乃果と海未に衝撃が走る出来事が…

「ことりも本当に大丈夫？もし辛かったら家まで送るよ。」

「ううん。大丈夫だよ。」

「「「こ、ことり!？」」」

ツナがことりのことを呼び捨てにしていたことに全員驚いてしまう。特に穂乃果と海未は再び衝撃を受けてしまった。

みんなが驚いているのを見て、ツナがことりのことを呼び捨てにしたことについてことりが説明する。

「わ、私がそう呼んでつて言ったの…!!助けてくれたお礼というか…その!!」

「こ、これはまさかの…!」

「三角関係どころか…四角関係…」

顔を赤らめてそう答えることりに、花陽と真姫が

小声で呟く。

そして穂乃果と海未は…

「(な、何だろう…?ツナ君とことりちゃんがいい雰囲気になってる気がする…き、気のせいだよね…?)」

「(な、なぜ私がこんなに動揺して!?同じ年なんですから…呼び捨てなんて当たり前…!)」

心の中で自分に言い聞かせる穂乃果と海未。するとここでツナがさつきから自分に感じていた違和感について話す。

「ううん。なんかことりって呼び捨てにするのは違和感があるな。やっぱりことりちゃんって呼びたいんだけどいいかな?」

「え…?い、いいけど…」

「ごめんね、ことりちゃん。」

「う、ううん!き、気にしないで!」

ツナにそう言うことりだが、呼び捨てで呼ばれなくなったことに少

し寂しさを感じてしまった。

「(そうだよね…付き合ってもいないのに私だけ呼び捨てなんて変だよね…でも…)」

『大丈夫かことり?』

「(あの時のツナ君…目がキリッとして格好良かったな…!!それにお姫様抱っこされちゃったし…!!)」

さっつきのことを思い出してほんのり顔を赤らめることり。

ことりがそんなことを考えていると、ツナが真剣な顔つきで話し始める。

「あのさ…一応みんなに俺のことを話しておこうと思うんだけど…」

「もしかしてマフィアのボスだっていうこと?」

「うん。」

穂乃果が尋ねるとツナは首を縦にふりながら答える。

「じゃあ、とりあえず私の家にみんなが集まろう。」

「え…」

穂乃果の家に行くとなつてツナは若干嫌な顔をしてしまう。

そして穂乃果たちはツナがマフィアのボスのことをツナから聞いて、どういう反応をするのであろうか?

#標的（ターゲット） 28 「自分の正体」

そして全員は穂乃果の家であり、和菓子屋でもある穂むらにやって来る。

そして入って早々、穂乃果の母が迎えてくれる。

「あらツナ君！また来てくれたの！」

「え、ええ…ちよつと大事な話があるというか…その…」

「大事な話…もしかして穂乃果と結婚してくれることを決意してくれたの!？」

「違います！今回は別の話です！」

「別の…結婚式の日取りが決まったとか!？」

「全然違います！結婚の話は違うってさつき言い

ましたよね!？」

「ま、まさか…!?!子供ができたとか…!?!」

「だから人の話を聞いてくださいお母さん！」

「お、お義母さんだなんて！ツナ君ったら！前にそれはまだ早いつて言っただじゃない！」

「そうじゃなくて！もう絶対にわぎとでしよ！」

穂むら来て早々つつこみまくるツナ。その光景に穂乃果は顔を赤くし、穂乃果以外は唾然としました。

特に2年生メンバーはこの光景についていけなかった。

「えつと…これは…」

「どういうことだにや…?？」

「結婚とか言ってるけど…?？」

花陽、凜、真姫が呟くと、穂乃果が顔を赤くしながら説明する。

「お母さんはツナ君のことを気にいって…それで私と結婚させようと…べ、別に悪くはないけど…!!」

最後のほうの言葉は誰にも聞えないぐらいにボソボソと呟く穂乃果。

そしてこのあと5分ぐらいツナと穂乃果の母の会話が続く…

そしてようやく客間で全員集合しツナはマフィアのことについて話し始める。ボンゴレファミリーのこと、リボーンのこと、さきほど襲ってきた男もマフィアであることなど全てのことを話した。

ツナの話全員、驚きながらも真剣に聞いてくれた。

「というわけなんだ…」

「ツナ君はボンゴレファミリーの創始者の子孫で…」

「今、そのボンゴレファミリーを継げるのが自分しかない…」

「リボーン君がツナ君をマフィアにしようと

やってきた家庭教師兼殺し屋^{ヒットマン}…」

ツナの話聞いて、理解したことを穂乃果、

海未、ことりが呟く。

そして真姫が前に言っていたことを思い出す。

「じゃあ、前にあなたの父親が石油を掘ってるっていうのも…」

「うん、嘘なんだ。中学の時になって父さんが何の仕事してるか初めて知ったんだ。でも世界中の交通整理してた話と「飯取りにいかないか?」って言われたのは本当なんだけどね…」

「そこは嘘じゃないのね…」

どうでもいいところが本当だったので真姫は少し呆れてしまう。

そして凜と花陽は…

「それにしてもマフィアって本当にいたんだにや…」

「しかもこんな身近に…」

「まあ俺がマフィアなんて信じられないよね。あとちなみに今度の花

見のメンバーのほとんどがマフィア関係者なんだよねー…」

「ええ!?まさか海外に売られるとかないですよね!」

「お、落ち着いて花陽ちゃん!本気を出したらここら一带を壊滅できる力はあるけど、そんなことはしないから!」

「全然説得力がないにゃ!」

壊滅できると聞いて凜がつつこむ。ここら一带を壊滅できる力があると聞いて他のメンバーもさすがにビビっていた。

「ん?待てよう…世界征服ぐらいなら余裕できるかも…」

改めて自分のまわりにいる仲間たちの戦闘力を考えると世界征服ぐらい余裕でできるんじゃないかと気づく。

少なくとも未来の白蘭は1兆ある平行世界パラレルワールドを支配していた。

「もう話がついていけないです…」

「世界征服ぐらい余裕って…」

ツナの話聞いて海末と真姫は頭が混乱していた。一方で穂乃果は…

「でもマフィアと友達なんて、私たちすごいよね。」

「穂乃果ちゃん変わってるね。そんな風に言ってくれる人初めてだよ。」

「そうかな?ツナ君がマフィアだからってツナ君はツナ君だよ。」

穂乃果はツナがマフィアだと知っても、全然怖がったりしている様子もない。

そして他のメンバーも。

「それにことりを助けてくれたんです。たとえあなたがマフィアであろうと関係ありません。」

「ツナ君は私のことを助けてくれた。私は感謝してるよ。」

「別に怖い人とは思えませんし。私も平気です。」

「凜もかよちんと一緒にゃ!」

「まあ…別にあんたが誰であろうと私には関係ないわ…」

海末、ことり、花陽、凜、真姫も穂乃果と同じく怖がることはなかった。

「(話したらなんか怖がったりするかと思ったけど…そんなことな

「かったな……」

マフィアのことを話してみても、みんな普通に接してくれてホッと
するツナであった。

#標的（ターゲット） 29 「ナッツ争奪」

自分の正体を話したところでツナはあることを思いつく。

「（そうだ。せつかくだし…）」

するとツナは自分の指につけているボンゴレギアを見つめる。そしてツナは呟く。

「出てきて。ナッツ。」

するとツナの持っているボンゴレギアが光輝く。突如輝き始めたボンゴレギアを見て驚く。

「な、何!？」

「急にツナ君の指輪が!？」

「一体何だにや!？」

光輝き始めたボンゴレギアを見て驚く花陽と穂乃果と凜。そして輝きが収まるとツナの膝の上にナッツが乗っていた。

そしてナッツを見て穂乃果が叫ぶ。

「あー！ー！ー！ホノ太郎!」

「ガウ♪」

「指輪が光ったと思ったら…」

「これもマフィアの技術なの…?」

突然現れたナッツに海未と真姫は驚きを隠せなかった。

だがそんなことも気にせず穂乃果はナッツに会えたことに感激していた。

「ホノ太郎! 会いたかったよー!」

「ガ、ガウ…」

穂乃果はナッツを抱き寄せて自分の頬とナッツの頬をくっつけてスリスリさせる。急な抱き寄せられてナッツは少し苦しそうな表情をしていた。

そして凜が興奮しながらツナに尋ねる。

「も、もしかして！前に言った猫かにや!？」

「え？ま、まあね…？」

「か、可愛いにやー！」

「別に触っても大丈夫だよ。」

「え…それは…」

ツナがナッツに触ってもいいと言うが、急に凜は歯切れが悪くなる。

すると花陽が凜のことについて話す。

「凜ちゃん…実は猫アレルギーで…」

「え!?! そうなの!?! 猫が好きなのに!?!」

「はい…」

凜が猫アレルギーと知ってツナは驚いてしまう。ここでナッツのことについて隠していたことを話す。

「いや…ナッツは猫じゃないんだ。じ、実は…ライオンなんだ…」

「…「え?」「…」」

ナッツの正体を聞いて全員驚きのあまり固まってしまう。

そしてさらにツナは話していく。

「だいたいみんなナッツのことを猫って勘違いするだけ…でもライオンを飼ってるなんて言えなくてさ…」

「その話が本当だとして…一体どういう経緯で飼うことになったの…？」

「え…？それは話せば長いというか…まあ色々であって…」

ことりに尋ねると、ツナはナッツとの出会いについて話すことはできなかつた。

いくらマファイアのことを話したと言っても、未来の自分が今の自分に託し、未来からやってきたことをツナは言えるはずもなかつた。

だがライオンと言っても穂乃果は怖がることもなく…

「でも可愛いよーそれにライオンなら凜ちゃんも触れるんじゃないの？」

穂乃果がそう言うが、ツナはとあることに気づく。

「え？でもライオンってネコ化の動物じゃなかったけ？」

「ダメな可能性もありますが、絶対ではないという話を聞いたことがあります。」

「さすが海未ちゃん。詳しいね。」

「え!?いや、昔テレビでやっていたのを思い出しただけで…!!」

ツナに褒められて海未は顔を赤くしてしまう。実際心の中で嬉しかったりするのだ。

そして凜がナッツに触る時が来る。

「い、行くにゃ!」

凜おそるおそる手を伸ばし、ナッツに触れようとする。

そして凜の手がナッツの頭に触れる…

「だ、大丈夫だにゃ…」

「ガウ♪」

「やったにゃ!」

「ガウ!」

何も問題もなかったので凜は嬉しさのあまりナッツを抱き寄せる。

そして凜はツナにこんな話を切り出す。

「決めたにゃ!この子の名前は凜丸だにゃ!」

「ちよつと凜ちゃん!勝手に名前つけないでよ!」

「そうだよ。この子の名前はホノ太郎だよ!」

「穂乃果ちゃんも!ホノ太郎じゃないから!」

勝手にナッツに名前をつける凜と穂乃果にツナがつっこむ。

そしてさらに話はエスカレートしていき…

「これからは凜丸とずっと一緒にゃ!」

「あ!ずるい!これからホノ太郎は私とずっと一緒にゃ!」

「穂乃果ちゃんの家は食べ物扱ってるからダメだにゃ!凜の家なら問題ないにゃ!」

「凜ちゃんだって、もしかしたら猫アレルギーが発症するかもしれないから私の家で預かるよ!」

「いいや凜の家で!」

「いや!私の家で!」

なぜかここで凜と穂乃果がナッツを取り合って争いを始めていく。二人の言い争いにナッツは怖がって凜のところから脱走し、二人の言い争いに呆れていたツナのところへ逃げる。

「凜丸！／＼ホノ太郎！」

「二人とも、話を勝手に進めないでください。ナッツの飼い主はツナ君なのですよ。」

海未が注意すると、二人は大人しくなる…かと思われたが…

「ちゃんと私がお世話するよ！毎日パンを好きだけ食べさせてあげるんだよ！」

「そうだにや！凜だつてラーメンを好きだけ食べさせてあげるにや！」

「あなたたちとナッツを一緒にしてどうするんですか！」

海未が二人に向かって叫ぶ。この二人に動物を飼わせると一体どうなってしまうのだろうか…？

そして一方でツナは花陽と真姫にナッツを触らせてあげていた。そして二人に触られることにナッツはビビってはいなかった。

「ガウ♪」

「可愛いです！ライオンさんとは思えません。」

「べ、別に可愛いくなんて…！」

花陽は素直にナッツのことを可愛いと言う。それに対して真姫は素直に可愛いと言わなかった。実際、心の中ではナッツのことを凄く可愛いと思っている。

そしてことりがあることに気づく。

「そういえば海未ちゃんって、ナッツちゃんに触ったことがないよね？」

「そ、そうですね…」

「確かに…」

ことりに言われて海未とツナが初めて気づく。そしてツナが気をきかせて

「触ってみる？海未ちゃん？」

「い、いいのですか!？」

「うん。あれ？どうしたのナッツ？」

ツナ海未にナッツを触らせてあげようとしたのだが、ナッツはツナの背中に隠れてガタガタと体を震わせていた。

そしてことりと真姫がナッツの異変に気づく。

「な、何か…様子が変だよ…？」

「というより怖がつてない…？」

「海未ちゃん、ホノ太郎に何かしたの…？」

「し、してませんよ！変なことを言わないでください穂乃果！」

海未がそう言うと、ツナはナッツが海未に怯えている原因を理解する。

「もしかしてナッツ…前にここで勉強した時の海未ちゃんのあの笑顔がトラウマになってるんじゃない？」

『さあ穂乃果？さっそく始めましょうか？』

「そ、そんな！だ、大丈夫ですよ…！わ、私は怖いことなんてしませんよ…！」

「が、ガウ!？」

優しい言葉でナッツに手を伸ばす海未であったが、ナッツはさらに怯えてしまい部屋の隅に逃げ、ガタガタと体を震わせてしまう。

そして海未は…

「…」

ナッツと同じように部屋の隅で体育座りをし、顔を下に向けて落ち込んでしまった。どうやらそうとうショックだったようだ。

その光景に全員、何も言えなくなっただのであった。

#標的（ターゲット） 30 「花見前日」

ナッツの争奪戦？が終わって次の日。花見前日の

土曜日。

海未はスーパーで明日の花見用の弁当を買いに来ていた。

「これで明日の花見の材料はこれで全部買いましたね…」

買い物かごに明日の花見の材料をいれ、レジで会計を済ませる、エコバックに買った物を入れていく。

「これならツナ君…って私は何を!？」

エコバックに買った物をいれながら、海未はツナのことを考えてしまっていた。

「（こ、これはみんなの為に作るのであって、別にツナ君の為だけに作るだなんてそんな不純なこと私は…!）」

そう自分に言いかけながらも、海未はまた妄想を始めてしまう。

場所はとある桜の下。なぜか二人つきりで花見をしているツナと海未。

『今日はツナ君の為に弁当を作ってきたの!』

『海未の手作り弁当!? 本当に!?!』

海未の手作りと聞いてツナはわくわくしている。

どうでもいいことだが、海未の妄想の中では現実と違って喋り方や呼び方がなぜか違ってきている。

そして海未の作ってきた弁当を見てツナは…

『美味しそう! 食べてもいい?』

『うん！いいよ！』

海未がそう言うと、ツナは箸で海未の作った玉子焼きを食べる。

『美味しい！すっごく美味しいよ！』

『本当!?嬉しい!』

ツナが美味しいと言ってくれて海未は満面の笑顔で喜ぶ。そしてツナは海未の手作り弁当を食べていき…少し顔を赤らめながらこんなことを呟く。

『いつか…!!海未の料理が毎日食べられる日が来るといいな…!!』

『そ、それって…!!』

「(はあああああ!!ま、また私はそんなことを!!毎日私の弁当を食べたいって!!それじゃまるでツナ君と私が将来…!!ってまた私は!?)」

またツナとのことを妄想してしまいそうになってしまう海未。

余談であるがツナのことを思いながら作った料理は今まで海未の作った料理の中で一番美味しかったという。

一方その頃、ことりは自分の部屋にいた。

「明日はどんな料理を作ろうかな?」

ことりは料理のレシピ本を見ながらことりは何を作ろうかなと考えていた。

そしてことりも海未と同様にツナのことを考えてしまう。

「ツナ君はどんな料理が好きなのかな…!?!」

海未と同じく、場所は桜の木の下でツナとことりの二人きりで花見をしている。

『今日はツナ君の為にお弁当を作ってきたんだ。』

『本当に!?ことりの手作り弁当!?』

なぜかメイド服を着たことりがそう言うのと、ツナは嬉しそうな表情になる。

『ど、どうぞ…!!ご主人様…!!お、美味しくなーれ…!!』

『え…!?うん…!!』

ことりが急にご主人様と呼ばれ、ちよつと動揺しながらも、ツナは玉子焼きを食べる。

『うん!美味しい!』

『本当!?よかった…!!』

ツナに美味しいって言われてことりは、ホツとする。

そしてツナがことりの作った弁当を食べ終えると…

『こ、これからはメイドじゃなくて…!!一人の女性としてお、俺のそばにいてほしいな…!!』

『え…!?』

「(な、何でメイド服で!?それにメイドじゃなくて一人の女性として傍について…!!それより私、ツナ君だけのメイドになってるってこと!?)」
この後ことりはツナだけのメイドになった時のための練習をしたという。

一方穂乃果は、家で明日の花見の弁当をとりあえず作っていた。
「できた！名付けてホノ太郎饅頭！」
なぜかナッツの顔が描かれた饅頭を作っていた。そして名前は
ナッツ饅頭ではなくホノ太郎饅頭であった。
「これならツナ君も喜ぶよね！」

そして場所はまたまた同じく桜の木の下。

『今日はこんなお饅頭作ってみたんだ。』

『うわー凄い！ホノ太郎の顔が入った饅頭だ！』

ホノ太郎饅頭を見て感激するツナ。穂乃果の妄想の中ではなぜか
ツナはナッツのことをホノ太郎と呼んでいる。

そしてツナはホノ太郎饅頭を食べる。

『美味しい！』

『本当!?!』

『うん！すつごく美味しいよ！』

『よかった。ツナ君のことを思っ作っからうまくいったんだよ…
!!』

『え…!?!』

『え、えつと…!!』

『お、俺も穂乃果のことを考えるとその…!!』

『え…!?!』

「(なーんて言ってくれたらなー…!!)」

このあと穂乃果は1時間ほどその場で、ボーツとしていたという。

#標的（ターゲット） 31 「迷子」

花見前日。一方でツナは。

「うわー、今日は人が多いな。」

並盛のデパートにて花見にお菓子などの必要の物を買っいに来ていた。

するとツナの前を親子が通りかかる。

「お母さん早く早く！」

「慌てないの。まだヒーローショーまで時間があるんだから。」

小さな男の子が、母親の服の袖をひっぱっていた。どうやら屋上にヒーローショーが行われるらしい。

「へー。ヒーローショーか。だから今日は親子連れの人が多いのかー。」

親子の会話を聞いてツナは今日このデパートに人が多い理由を理解する。

「まあ俺には関係ないか。とにかく買う物を買わないと。」

そしてツナは花見に必要な物を買うに行く。

そしてこの20分後、屋上ではヒーローショーが行われる。

「頑張れー。」

黒髪の小さな男の子がピコピコハンマーを持って応援をしていた。そしてその横には左右対称のサイドテールの双子の女の子とツインテールの女の子が座っていた。

「虎太郎、喜んでますわね。」

「毎週テレビを見てたもんね。」

「そうね。」

応援している、虎太郎を見て双子の姉である矢澤こころとここあ、そして元々、sのメンバーの矢澤

にこが応援している虎太郎を見て微笑んでいた。

今日にこは母親が仕事の出張でおらず、妹と弟たちを並盛町に連れてきていた。この並盛のデパートに虎太郎の好きなヒーローショーが行われているからだ。

「(こうやって家族と過ごすのも悪くないわね…)」

スクールアイドルとして活動していた頃もとてもよかったが、家族とこうやっているのも悪くないと思うにこ。

そしてヒーローショー1時間ほどで終了する。

ヒーローショーが終わると、お客さんたちがデパートの中に一気に入っていく。

「混雑してるわね…(ここあ！…こころ！虎太郎！迷子にならないようにね！)」

「はい。」

「うん。」

「うーん。」

にこがそう言うところ、虎太郎が返事をする。4人は手を繋いで迷子にならないようにするが…

「あー！」

虎太郎と手を繋いでいたここあの手が人混みに押されて手が離れてしまう。

そしてにこたちはなんとか人混みの少ないところまで移動する。

「ふうっ！人混みだったわね。」

「あ、あの…お姉さま…」

「どうしたのころ？」

「ここあが…迷子に…」

「え…!？」

一方、迷子になったここあは。

「お姉ちゃん。ころ。虎太郎。どこー?」

デパート内にて迷子になっていた。今日、初めて並盛に来たここあはこのデパート内のこと
はわからないので、どこに行ったらいいのかもわ
からずに、デパート内をウロウロとしていた。

「ど、どうしよう…」

誰も知る人のいない場所で迷子になり、ここあ不安な気持ちにな
り、その場で立ち止まり涙を浮かべる。

すると…

「大丈夫?」

「え…?」

ここあが顔をあげると、そこには買い物を終えたツナがここあの前
にいた。

そしてツナはここあに尋ねる。

「どうしたの?」

「お、お姉ちゃんたちとはぐれちゃって…この町に来たのは初めてだ
から…」

「そっか。じゃあ一緒にお姉ちゃんたちを探そっか。」

「え?本当に?」

「うん。えっと…名前はなんていうの?」

「ここあ…矢澤ここあ…」

「ここあちゃんっていうんだ。」

「うん。お兄ちゃんは？」

「俺？俺は沢田綱吉。気軽にツナって呼んでここあちゃん。」

「うん。ツナお兄ちゃん！」

さつきまであんなに暗い顔をしていたここあ
だったが、ツナと会って笑顔になる。

そしてツナは迷子になった時の状況をここあに尋ねる。

「それでお姉ちゃんたちとはどこではぐれたの？」

「えっとね、屋上でヒーローショー見てたんだ

けど、終わったあとに迷子にならないように

手を繋いでただけ…人混みで手が離れちゃって…」

「成程ね。お姉ちゃんたちも今頃ここあちゃんを探してるはずだよ。
とりあえずデパート内をまわってみよう。」

「うん！」

迷子のここあと出会ったツナ。ツナは迷子の
ここあを無事ににこのもとへ返すことができ
るのであるか？

#標的（ターゲット） 32 「どこかで？」

ツナはここあの姉であるにこそここあと一緒に探している。

「この子のお姉さんを知りませんかー。」

ツナはデパート内を歩きながら声に出して、

ここあの姉であるにこそ探していた。

ツナはあることを思いつく。

「そうだー！ここあちゃん何かお菓子食べる？」

「え？」

「今日は明日の花見やるためにお菓子を色々買ったんだ。よかったら何かあげるよ。」

「え、でも…」

「大丈夫だよ、たくさん買ったから。というかたくさん買いすぎたぐらい…だから好きなを選んでいいよ。」

そう言うレジ袋に入っているたくさんのお菓子をここあに見せる。

「ほ、本当にいいの…？」

「うん。」

「じゃ、じゃあこれ…」

そう言うところあはレジ袋の中にあつた、クッキーを一つもらう。そしてクッキーを口にいれる。

「美味しい？」

「うん。ツナお兄ちゃんって、なんか私のお姉ちゃんみたい。」

「え？」

「私のお姉ちゃんも面倒見が良くて、とっても優しいんだ。」
「そうなんだ。」

ここあの姉が自分と似ていると言われて、ツナは「どんなお姉さん何だろう？」と想像する。

そしてしばらくデパート内を歩いていると…

「ここあ！」

「あ！お姉ちゃん！」

ここあの名前を叫ぶにこと傍にここあと虎太郎がいた。

ここを見た瞬間、ここあはこのところに走り、

ここはここあを抱き締める。

「お姉ちゃんごめんなさい！」

「謝らなくてもいいわ。お姉ちゃんのほうこそごめんね。大丈夫だった？」

「うん。ツナお兄ちゃんが助けてくれたの！」

「ツナお兄ちゃん…？」

「ほら！あそこにいる人だよ！」

ここあが指をさすと、ツナは二人が抱き合っている光景を笑顔で見守っていた。

そして4人はツナのところへ行くと、ここがお礼を言う。

「ありがとう。ここあを助けてくれて。」

「そ、そんなお礼を言うほどのことはしてないですよ！とにかく良かったですね。」

ここにお礼を言われて、少し照れてしまうツナ。

するとツナはここで見えて違和感を感じる。

「（あれ？この人どこかで見たことがあるような…）」

スマホでμ、sのことを見ているのにも関わらず、ツ

ナは目の前にいるのがμ、sの矢澤にこということに気づいていない。

実はツナはスマホで穂乃果のアイドルの衣装に夢中になりすぎて穂乃果ばかりを見てしまい、にこと絵理と希の顔はうろ覚えなのである。

そして自分のことを急に見始めたツナにここは…

「な、何よ…？さつきから人の顔をジロジロと見て？」

「い、いや！本当にお姉さんなのかなって思っちゃって！お母さんに見えてもおかしくないんじゃないかと思えて！」

「お、お母さん!？」

ツナが心の中で同時に思っていたことを言うと、
ここは驚くと同時に心の中で喜んでしまう。

今まで見た目で子供扱いされてきたので、ここに
とつてこの言葉は衝撃的であった。

といつてもツナは見た目ではなく、こころ、こころ

あ、虎太郎を連れている姿がお母さんに見えたのでそう言っただけ
なのだが。

そしてここはお母さんと呼ばれて、嬉しさのあまり顔が緩みまくっ
ていた。そんなここを見てツナが…

「あ、あの大丈夫ですか…?」

「へ!?!べ、別に大丈夫よ!」

「な、なら…いいんですけど…」

ツナが若干、引き攣らせながらそう言うと、虎太郎が…

「お腹すいたー!」

「もうお昼ね。このデパートで食べるついてもどこも混雑してそ
うね…」

このデパートに人がたくさんいるのを見て、デパート内の飲食店で
は待たなければいけないと思つたにこ。

するとツナが

「この近くにハンバーガーが食べれるところがありますけど。そこな
んでどうですか?」

「ハンバーガー!」

「食べたいです!」

ツナがそう言うと、ハンバーガーという単語を聞いてここあとここ
ろが反応する。

二人の反応を見てツナはこんな提案をする。

「良かったら一緒にどうですか?」

「で、でもあんたは…?」

「元々そこで食べる予定だったし。い、嫌なら別にいいんですけど…」
「いいわ。そこに行きましょう。」

μ sのメンバーと気づかず、ツナはにこと一緒に昼ご飯を食べる
こととなった。一体どうなるにしろうか!?

#標的(ターゲット) 33 「にこの正体」

ツナに案内され、近くのハンバーガーショップで昼食をとる。
そしてこころ、ここあ、虎太郎は美味しそうにハンバーガーを食べ
ていた。

「本当に助かったわ…あんだこの辺に住んでるの？」

「はい。明日、花見をやるんだけどそれでお菓子とか買いに。」

「へー奇偶ね。私も明日花見をやるのよね。」

「そうなんですか。本当に奇偶ですね。」

実は目の前にいるツナが花見の主催者であり、明日一緒に花見をす
ることになるとはにこはまだ知らない。

「そういえば、まだ自己紹介してませんでした

ね。俺、沢田綱吉です。」

ツナが自己紹介すると、一方でにこはいつものアレで自己紹介す
る。

「にっこにっこにー！あなたのハートににっこにっこにー！笑顔を届
ける矢澤にこにこー。にこにーって覚えてラブニコ♥」

「え…？」

「あ…」

急に変わった自己紹介を始めたにこに、ツナは顔を引き攣らせせな
がらただ笑うしかなかった。

「ハハ…ハハハハハハ…な、なんか面白いです

ね…にこさんって…ハハハ…」

「これ以上何も言わないでーなんかすっごく悲しくなるからー」

まさかここまで変な反応はされるとは思ってもみなかったので、に
こは恥ずかしくなってしまい顔を真っ赤にしてしまう。

「(い、一体…今の何だったんだろう…？お笑い芸人でも目指してい
るのかな…?)」

ツナがそんなことを思っていると、こころがツナ
に、にこのことを話す。

「お姉さまはスクールアイドルだったのですよ。」

「スクールアイドル…」

「知らないのですか？」

「あ、いや知ってるけど。といつてもスクールアイドルっていうにがあることに最近になって初めて知ったんだ。成程ね、さっきの挨拶はスクールアイドルの時の…」

さっきのにこの妙な挨拶の仕方がスクールアイドルの時のものだということをツナは理解する。

するとにこがジト目で尋ねる。

「それよりあんた、スクールアイドルを最近知ったなんて時代遅れじゃない？」

「いやー、アイドルとか元々そこまで詳しくなくて。それに高校の時はそれどころじゃなかったし。」

「何よ？勉強とか部活に忙しかったとか？」

「いや…修行させられて…」

「修行？」

「いやあれは修行じゃないよな…修行という名の拷問だ…」

「どんな高校生活を送ってたのよ…？」

「ハハハ…」

にこがそう言うのとツナはただただ苦笑いすることしかできなかつた。それと同時に高校時代にリボーンの数々の修行を思い出す。

そしてツナがスクールアイドルについて呟く。

「スクールアイドルか…最近はスマホで、sっていうアイドルを見てるんですよねー。」

「へ!？」

まさか、sの名前が出たことと、そして自分が、sのメンバーであったのにも関わらず全く気づく素振りさえ見せないツナにこは驚いてしまう。

そんなにこに気づかず、ツナは自分の世界に入ってしまう。

「(歌ってる時の穂乃果ちゃん可愛いんだよな…!!)」

「ツナお兄ちゃん！」

「ツナさん！」

「ブーツとしてるー。」

完璧に自分の世界に入っているツナにここところが叫ぶがツナは自分の世界から帰ってこない。虎太郎も自分の世界に入っているツナを見て言う。

するとここは虎太郎からピコピコハンマーを借

りるとツナの頭をピコピコハンマーで叩く。

「ちよつと！起きなさい！」

「は！」

「どうしたのよ急に？なんかブーツとしちゃって。」

「あ！すいませんー！」

「まあいいわ。それ・よ・り・も！私を見て何か気づかないわけ!?!」

「何って：あ！さつき食べたハンバーガーのレタスが顔についてますよ。」

「あ！私だったら！…じゃなくて！もつと他にあるでしょ！」

「他に…？」

ここにそう言われるが、ツナはにこがμ sのメンバーということに全く気づかない。

「ここにこころが気をきかせ…」

「お姉さまは、μ sのメンバーだったんですよ。」

「え…？」

こころの言葉にツナは衝撃で一瞬固まってしまうツナ。

だがにこの顔を見て、動画でにこが踊っていた姿を少しづつ思い出していく。

「あー…！…！…！…！…！」

「やっと気づいてくれたの…！」

「(と、ということは…：にこさんは穂乃果ちゃんたちと同じμ sのメンバーってことだから…明日の花見に来るってことじゃん!)」

穂乃果から絵理と希とにこが来ることは聞いてい

たが、まさかこんなところで会うとは思っても見

なかったの、ツナは驚きを隠せなかったのだった。

#標的（ターゲット） 34 「夫婦」

ようやくにこの正体に気づいたツナ。

「ま、まさか…こんなに鈍感だなんてね…」

「す、すいません…」

にこに謝るツナ。するとツナはにこに花見のことを尋ねる。

「あ、あのですね花見をやるって言ってましたよね？」

「そうよ。それがどうしたの？」

「並盛の隠れスポットがあるとか言ってますませんでした？」

「な、何で知ってるのよ!? は! まさか私をストーリーカーとかじゃないわよね!」

「ち、違います! じ、実はその花見を提案したの俺なんです!」

「ど、どういうこと…?」

「実はですね…」

ツナはにこに、春休みに穂乃果と出会ったこと、そこから友達になったこと、今回穂乃果たちも花見に誘ったことを話す。

「成程ね。それにしても偶然って凄いわね…」

「こつちも驚いてます…」

「穂乃果たちとの出会いが春休みの宿題をやっていないことで出会うなんてね…変わってるわよね…」

「そうですよねー…」

今日ここで明日の花見で初めて会うはずであろう人物にここで出会ったことに驚くツナとにこ。

二人がそんなことを話していると、にこは虎太郎の顔の回りにハンバーガーと同時に頼んでおいたフライドポテトの塩がたくさんついていることに気づく。

「虎太郎、ポテトの…「はいこれで綺麗になったね」え?」

にこがティッシュで虎太郎の顔のまわりについた塩をとってあげようとしたが、ツナが先に虎太郎の顔のまわりについたポテトの塩を

ティッシュで拭いてあげる。

「ありがとー。」

「どういたしまして。」

ツナがそう言うのと、ここはその光景に少し驚いてしまっていた。

「あんた…ここあの時といい、子供の扱いがうまいわね…あんたも兄弟とかいるの?」

「兄弟はいないんです。ただ家に5人ほど居候が

いて、そのウチ3人がこころちゃんと同じぐらい

の子供だから…」

「居候が5人って…あんたの家ってどうなってるのよ…」

他の4人のメンバーと同じ反応をするにこ。当たり前前の反応ではあるのだが…

するとこころあがこんなことを言う。

「お姉ちゃんとツナお兄ちゃんって何か似てるよね。なんか夫婦みたいだね。」

「ふ、夫婦!?!」

「な、何言ってるのよこころあ!」

急に夫婦と言いきり初めてたことに二人は動揺して顔を赤くする。

そしてこころあはさらに話していく。

「私はツナお兄ちゃんがお姉ちゃんのお嬢さんならいいな。それに二人だったら、子供が何人いてもちゃんと育て上げそうだもん。」

「あ、あのね!…こころあちゃん、にこさん…お姉ちゃんにはもつといいお嬢さんがいるはずだから。」

「私はツナお兄ちゃんがいいな。」

「ダメよこころあ。ツナさんが困ってるでしょ?」

こころあがこころあにそう言うとは「はい」と少し不満げに返事をする。

こころあはどうやらツナのことを気にいっているようだ。

するとこころあがツナに謝る。

「こころあが変なこと言っちゃ悪かったわね…」

「い、いや! 気にしないでください! それより、もう昼ご飯を食べたし、そろそろ出ませんか?」

「そうね。」

ツナがそう言うのと、にこはスマホの時計を見て時間を確認する。
するとここあが。

「えーもう帰っちゃうのー？私もつとツナお兄ちゃんと一緒にいたいー
いー！」

「僕もー。」

「ここあ！虎太郎まで！」

ツナとまだまだ一緒に居たいと言うここあ、そして虎太郎もここあ
と同じくツナを気にいったらしい。そんな二人ににこが叫ぶが…ツ
ナは。

「じゃあ、俺の家に来る？」

「え!?!いいの!?!ツナお兄ちゃん!?!」

「いいよ。俺と家で遊ぼうか。」

「うん!」

ここあと遊ぶことにツナは嫌な顔をせず、快く家に来ないかと誘
う。

そんな中でにこがツナに尋ねる。

「ちよ、ちよつと！本当にいいの!?!あんたの家、5人もいるんでしょ
!」

「大丈夫ですよ。5人のうち3人は遊びに行ってるし。」

「あ、あんたが…いいならいいけど…」

急遽、ツナの家に遊びに行くこととなったにこたち。

ツナの家にてどんな出会いが待っているのだろうか!?!

#標的（ターゲット） 35 「キャバツローネ」

そして4人はツナの家へと向かう。するとツナの家の前に黒いスーツを来た男たちがたくさんいた。

その男たちを見てにこは驚いていた。

「な、なに!?!あの男たち!?!」

「あー…たぶんディーノさんが来てるのかな?」

家の前にいたスーツの男たちを見て、キャバツローネファミリーのボスであるディーノとその部下たちだとツナは確信する。

するとツナたちの前に一人の男がやって来る。

「沢田さん!」

「ロマーリオさん!」

ディーノの右腕であるロマーリオがツナに挨拶する。

そしてロマーリオが花見のことについて話し始める。

「いやー、今回は花見に誘ってくださいますありがとうございます。ウチのボスも楽しみにしてますぜ。」

「いえいえ、せっかくの花見ですから。みんなでやったほうが楽しいと思ってます。」

ロマーリオがツナに花見に誘ってくれたことにお礼を言う。するとロマーリオはツナの後ろにいるにこたちに気づく。

「おや?そちらはガールフレンドか何かで?」

「え?いや…その…」

「ま、まさか!?!沢田さんとそこにいるお嬢ちゃんの子供!?!」

「ロ、ロマーリオさん!?!」

「い、いきなり何言ってるのよ!」

ロマーリオはこころ、こころあ、虎太郎を見てツナとにこの子供だと勘違いしてしまう。

そしてディーノの部下たちがざわざわと騒がしくなる。

「さすが時期ボンゴレ…」

「これがボンゴレの血筋…」

「もうすでに妻を…」

「それに子供まで…」

「しかも3人…」

「ボンゴレ11代目のボス候補が3人も…」

「ちよつと！みなさん！違いますからね！」

「壮大な勘違いをしているディーノの部下たちにつっこむツナ。すると騒ぎを聞きつけてツナの家から金髪の男が出てくる。」

「何だてめえら騒しいぞ。お？ツナじゃねえか。」

「ディーノさん。お久しぶりです。」

「な、何!?!めちやくちやイケメンじゃない!?!」

ツナとディーノが挨拶すると、ディーノを見たにこがあまりの格好良さに驚いていた。

そしてこころ、こころあ、虎太郎も。

「すつごく格好いいー…」

「金髪だー…」

「金髪ー。」

ディーノのあまりの格好良さに3人も驚いていた。するとロマーリオが先ほどの話を切り出す。

「そ、そんなことよりボス！大変ですぜ！沢田さんに妻と子供が！」

「何言っつてんだロマーリオ。イタリアじゃ男は

16、女は14で結婚できるが、日本は男は18、

女は16からだぞ。」

「え？そうなんですか？」

「ツナはまだ17だし、そつちのセニョリータは15つてところだ。だから結婚は無理だ。」

「失礼ね！私は18よ！」

ディーノに完全に見た目でツナより年下と判断されてにこがつっこむ。まさかツナより年上だと思わなかったディーノは驚くがすぐに、にこ

に謝罪する。

「すまなかつたな。美しいセニヨリータ。」

「わ、わかればいいのよ……!」

美しいという単語に、ここはさつきまでの怒りが完璧になくなり、デイーノのさつきの発言を許してしまう。

そしてツナはデイーノに尋ねる。

「そういえばデイーノさん。リボーンは?」

「ああ、リボーンならコーヒー飲みに言ってるぞ。」

「そうですか。」

リボーンの行方を尋ねると、こころがツナにデイーノのことを尋ねる。

「ツナさん。」

「何?こころちゃん?」

「この人たちとツナさんはどういう関係なんですか?」

「え……?」

こころにデイーノたちのことを尋ねられて、どう答えていいかわからなくなるツナ。さすがに子供にマフィアと言うわけにはいかないので、どう答えようかと考えていると、ツナの母である奈々が中から出てくる。

「あらツナ。帰ってたの。」

「母さん!」

「あら?可愛いらしい子たちね。ツナの新しい友達?」

「え……?う、うん!」

「せっかくだし上がって行って。今、ホットケーキ焼いたから。」

「ホットケーキ!?!」

「食べたいです!」

「ホットケーキー。」

ホットケーキという単語を聞いて、こころ、こころ

あ、虎太郎が反応する。

そしてツナは奈々が丁度いいタイミングで出てきたので、マフィア

はことを言わないですんで心の中でホツとするのだった。

#標的（ターゲット） 36 「ビアンキ」

ツナの家遊びに来たにこたち。全員、居間にて奈々の作ったホットケーキができるのを待っていた。

ちなみにディーノの部下たちは、近くの喫茶店に行った。

そして6人が台所で待っている間

「俺はディーノ。よろしくな。」

「や、矢澤にこよ。」

「矢澤こころです。」

「矢澤ここあです。」

「矢澤虎太郎。」

ディーノとにこたちは互いに自己紹介する。にこはツナの母である奈々がいるということと、さきほどのツナのような反応されると恥ずかしいので、今回は普通に挨拶した。

すると台所のほうから一人の女性がやって来る。

「あらツナ？帰ってたの？」

「ビアンキ。」

ツナの家の居候をしており、裏社会では毒蠍の異名を持つ殺し屋ヒットマンのビアンキがやって来る。

そしてビアンキは初めて見るにこたちを見てツナに尋ねる。

「その子たちは？」

「明日の花見に来る、スクールアイドルの矢澤にこさんとその姉弟たちだよ。並盛のデパートで偶然出会って…」

「そういえばスクールアイドルと友達になったとか、言ってたわね。そう、じゃあお近づきの印に私の作った料理を…」

そう言うとビアンキはどこからか、禍禍しい紫色

の物体を皿の上に乗せて、居間の机に置く。ビアンキのポイズンクッキングである。

それを見てツナ、デイーノ、ここは顔を引き攣らせていた。一方で「ここあ、こころ、虎太郎は…」

「うわー凄い！」

「何の料理でしょうか？」

「謎の料理ー。」

今までに見たことがない料理を見て3人は興味津々の様子であった。

一方でここはこの禍禍しい料理を見て叫ぶ。

「な、なによこれ!?!どう見ても食べたらやばいって感じの料理は!?!」

「失礼ね。これは私が作ったホットケーキよ。」

「どこがよ!?!原型どこにもないじゃない！」

「大事なのは形じゃないわ…愛よ！」

「何いい感じ風に言っているのよ！」

ビアンキに発言に対してにこがつっこむ。そしてここあ、こころ、虎太郎がビアンキの作ったホットケーキを食べようとする。

「こいつただつきまーす！」

「ま、待て！」

「た、食べちゃダメだよ！」

ビアンキの作ったホットケーキを食べようとするのを止めるデイーノとツナ。

必死の様子の子の二人にここあが尋ねる。

「どうしたのツナお兄ちゃん？デイーノお兄ちゃん？」

「これを食べたらもうこの世には帰ってこれないよ！」

「若い美空で命を無駄にするんじゃないやねえ！お前らが犠牲になる必要はねえんだ！」

「!?!?!」

どうしてツナとデイーノこんなに必死に止めようとするのかわからず疑問符を浮かべる3人。

そしてビアンキは部屋にある時計を見る。

「あら？もうこんな時間…そろそろ行かないと。」

「何だ？用事でもあるのか毒蠍？」

「(毒蠍?)」

ディーノがビアンキのことを毒蠍と呼んだことに疑問符を浮かべるにこ。

そしてビアンキは買い物バックを持つと。

「今からスーパ―の特売なのよ。明日の花見の弁当の食材を今から買いにいくのよ。」

「な!?!」

「楽しみにしててね。明日は腕によりにかけて最高の弁当を作ってみせるわ。」

そう言うときビアンキは花見の弁当の食材を買いに出て行ってしまった。

そしてツナとディーノは恐怖していた。

「や、やばいぞツナ…毒蠍が弁当が振る舞われたら…」

「花見に来た人たちがみんながああ世行きに…」

「あ、ああ世行き!?!どういうなの!?!とかああ女は一体何なのよ!?!」

ああ世行きという恐ろしい単語を聞いてにこは、ビアンキのことを尋ねる。

「ビアンキは俺の家庭教師の4番目の愛人で、作った料理が全て毒料理にしてしまう才能があるんです…これをポイズンクッキングと呼んで呼んでるんですけど…」

「愛人!?!ポイズンクッキング!?!」

愛人とポイズンクッキングという言葉に驚くにこ。そしてさらにツナは話を続けていく。

「あのポイズンクッキングのせいで、俺の友達にビアンキを見ただけで倒れるというところまで…」

「ひ…悲惨すぎる…」

にこは今までに会ったことのない人種に何も言えなくなるのであった。そして花見はどうなってしまおうのか!?!

#標的（ターゲット） 37 「お嫁に」

当日のビアンキがどんな料理を作るのか？それは明日の花見にならないとわからないので、それは一旦置いておくこととなった。

今、ツナたちは奈々の作ったホットケーキを食べていた。

「美味しいー！」

奈々の作ったホットケーキに絶賛するところ、

ここあ、虎太郎。

そしてこの3人だけではなくにも奈々の作ったホットケーキの味に絶賛してしまう。

「お、美味しい…」

「まだ焼いたらたくさんあるから、おかわりしていいわよ。」

「はいー！」

奈々がそう言うところ、ここあ、虎太郎が元気よく返事をする。するとここがディーノのほうを見て驚く。

「え…あんだ」

「どうかしたのか？」

「こ、こぼしてるわよ…」

「あ!?!本当だ!?!何でだ!?!」

ここがそう言うのと、ディーノのまわりには一口サイズに切られたホットケーキが大量にこぼれていた。

しかもそのことにディーノは気づいていなかった。

そんなディーノを見て、ここあと虎太郎が言う。

「ディーノお兄ちゃん、子供みたーい。」

「子供ー。」

「おいおい子供扱いは止してくれよ。俺は大人なんだぞ。」

ディーノが笑いながらそう言うが、ツナは苦笑いしながら見ている。そんな苦笑いしているツナを見てにここが尋ねる。

「どうしたのよ?」

「い、いや…そういういえばデイーノさんは今一人だったんだよなーって思ってた…」

「どういう意味よ…」

「実はデイーノさんは部下の人がいないと、運動音痴になったりするんです…」

「つ、つまり…部下の人がいないとダメダメになるってこと…?」

「そ、そういうことです…しかもそのことを本人は気づいていないんです…」

「な、何なの…あんたの知り合いって変じゃない…?」

さつきさんのビアンキといい、ツナのまわりの人は変な人が多いと思っ
てしまうに…。

するとデイーノは席を立ち上がると

「ツナ、ちょっとトイレ借り…ううお!」

トイレに行こうとするデイーノであったが、何もないとところで急におもいつきりこけてしまう。

「いつてえー!」

「デイーノさん、大丈夫ですか?」

「あ、ああ…ツナの家の床っていつつも滑るな…」

「こころが尋ねると、額を手で押えながら言う。その光景にツナとに
こは何ともいえなくなってしまう。

「何もないところで…しかも本当に気づいていないのね…」

「でしょ?」

ツナがそう言うのと、デイーノはトイレに行く。デイーノがトイレに行
っている間に奈々が呟く。

「デイーノ君って来るたびにこけてるわよねー。なぜかしら?ウチの
家の床ってそんなに滑るのかしら?イタリアの家と日本の家の床つ
て違うのかしら?」

デイーノがいつもこける理由があるのではないかと考える奈々だ
が、外国だからとかという問題ではないのである。

そしてデイーノが戻って来て、奈々が追加のホットケーキを焼いて

いると、にこが…

「あ！私も手伝います！」

「別にいいのよ。気を使わなくて。」

「い、いや…その…！ホットケーキすっごく美味しくて…よかつたら作り方を…」

にこがそう言うと、奈々は目を点にしてキョトンとしてしまうが、すぐに笑顔になり。

「いいわよ。じゃあ一緒に作って見る？」

「は、はい！」

そして急遽、にこは奈々のホットケーキの作り方を教わることとなった。

そして奈々はにこを教えていると。

「とつても上手ね。にこちゃん相当料理を作るのに慣れているのね。」

「い、いや…そこまでじゃ…！」

「にこちゃんが、ツナのお嫁さんになってくれたらとつても助かるわー。」

「お、お嫁さん!？」

「母さん！」

奈々の発言ににこツナは顔を赤くしてしまう。

そんな二人を見てディーノは苦笑してしまっていた。

そんな二人を気にせず、奈々が続けていく。

「だってそうでしょ？…こんなに可愛くて、料理もできるのよー。」

「だ、だからって関係ないだろ!？」

「でもツナ、お前子供の面倒を見るのがうまいし、案外にこと結婚してもいいんじゃないか？」

「ディーノさんまで！」

ディーノが顔をニヤニヤさせながらそう言うと、

ツナは顔を真っ赤にして反論する。

そしてツナは穂乃果の母のことを思い出す。

「（ウチの母さんと穂乃果ちゃんのお母さんて何か似てる気がする…すぐに結婚の話をするところとか…）」

ツナがそんなことを思っていると、ここはさっきの奈々の発言に動揺しまくっていた。

「おおおおお嫁とか……そそそそんな……！」

このあとにここが普通に戻るまで時間がかかったのであった。

#標的（ターゲット） 38 「理想の女性」

そしてあのあとツナは、こころ、こころ、虎太郎と一緒にツナ？部屋で遊ぶ。

デイーノは下で奈々と世間話をしている。

「このゲーム面白い！」

「次は僕もー。」

こころ、虎太郎はツナの持っているゲームを楽しんでいた。

一方でこころはツナの相棒であるナッツに触っていた。

「ガウ♪」

「可愛い猫ですね。名前はなんていうのですか？」

「ナッツだよ。あとナッツは…あいや何でもない…」

こころに「実はライオンだよ」って言おうとしたツナだったが、やっぱり言うのを止めてしまう。

するとこころがツナに尋ねる。

「5人も居候がいながら、さらにペットまで飼ってるなんて…あなたの家の家計は大丈夫なの…？」

「大丈夫だと思いますよ。母さんが家計で困ってる様子は見たことないし、父さんが海外で働いてますし。」

「あなたの父親って海外で働いてるの？」

「はい。ほとんど帰ってくることはないんですけど。」

ツナの父親のことを聞いて「へー」と呟くこころ。何の仕事をしているのか聞いてこなかったものでツナは内心ホッとしていた。

そしてツナは今度はこころに尋ねる。

「そういうのにこそさんこそ大変じゃないですか？」

姉弟が3人もいて。」

「まあね。でも、もう慣れたわ。」

「なんか俺にもわかります。」

姉弟はいなもの、居候しているランボ、イー

ピン、フウ太が姉弟みたいなものなので、にこの
気持ちがわかってしまうツナ。

そしてさらにツナはにこに尋ねる。

「明日、穂乃果ちゃんたちに会えますけど嬉しいですか？」

「そうね。嬉しくないといえば嘘になるわね。でも希と絵理は学部は
違うけど一緒の大学だから、たまに会うのよねー。」

「へー大学に通ってるんですか。（なんか知らない名前がでてきたけ
ど、にこさんの同級生かな？）」

「まあね。でもこうやって大学に通えるだけありがたいのよね。だか
ら大学生活に慣れてきたらバイトしようと思ってるわ。」

「にこさんなら、どんなバイトでもできそうですよね。」

「あ、当たり前じゃない！高校の時だって成績優秀でμ、sでもセン
ターだったんだから！」

ツナに褒められて、ちよつとだけ嘘をついてしまうにこ。だがツナ
はにこの言うことを全く疑う

ことなく、にこの嘘を信じてしまう。

「成績優秀でμ、sのセンター…それで料理も上手く

て姉弟の面倒見が良くて…にこさんと結婚する

人って幸せなんだろうなー。」

「へ!？」

「だってにこさんみたいな女性、男性から見ればすっごく魅力的だと
…あ！すいません！急に変なこと言っちゃって！」

「（な、何なのよこいつ…!!／／私の言葉を疑うどころか…そ、そん
なことより急に心臓が…!!／／／）」

ツナの言葉ににこは顔を赤くし、心臓がドキドキし始めてしまうに
こ。

急ににこが顔を赤くなってしまったにこを見て、ツナは疑問符を浮
かべる。

「だ、大丈夫ですか!?顔が赤くなってますけど!？」

「だ、大丈夫よ!ちよつと暑くて顔が火照ってきただけよ…!!／／／」

「そ、そうですか…」

「(いくら春になったとはいっても俺はまだちよつと肌寒いんだけど…にこさん暑がりなのかな?)」

「またまたフラグを立ててしまうツナだが、相変わらず鈍感なツナであった。」

#標的（ターゲット） 39 「また明日」

そして午後4時、ここあ、こころ、虎太郎は遊び疲れて寝てしまっていた。

「zzzz…」

「遊び疲れちゃったんだね。」

ここあと虎太郎の寝顔を見て、ツナは微笑んでいた。にこも同様である。

するとツナの部屋にディーノが入ってくる。

「ようツナ。もう遊び終わったのか？」

「はい、3人とも遊び疲れちゃって。」

「そうか。」

ディーノがそう言うと、こころの目が覚め、ゆっくりと体を起こしていく。

「起きたのここあ？」

「お姉さま？私寝ちゃって…」

「そんなことよりこころ、寝癖がついてるわよ。」

寝癖のついているところを見て、にこが言う。するとディーノがあることを尋ねる。

「にこ、お前並盛にはどうやって来たんだ？」

「え？バスで来たけど。それがどうしたの？」

「いや、せっかくだから車で家まで送ってやろうかと思ってな。どうだ？」

「え？いいの…？」

「ああ、いいぜ。明日の花見まで何も無いからな。」

ディーノが車に私たちを家まで送ってくれと聞いて、ここでツナはディーノに…

「あ、あの…デイナーさん…」

「何だツナ？」

「俺もついていっていいですか？」

「別に構わねえけど。どうしたんだ？」

「え!?!いや…虎太郎君たちを運ぶのに俺がいたほうがいいかなって思って…」

そう言うツナだが、本当は穂乃果の家に寄って穂

乃果に会いたいというのが本音なのである。

そんなツナの本音を知らずデイナーは承諾しよう。

「そうか。じゃあ行くか。」

「じゃあ、とりあえず虎太郎君を…」

そう言うツナは寝ている虎太郎を起こさない

ように持ち上げると虎太郎を背負う。

「あ、ありがと…」

虎太郎を運んでくれたことにお礼を言うにこ。

するとにこもここあを起こさないようにゆっ

くり持ち上げるとここあを背負う。

そしてデイナーがロマーリオを呼び、ロマーリオの乗ってきた車に乗る。余談だがロマーリオが運転してくれるとわかってツナは安心したのだった。

助手席にデイナーが乗り、後部座席に虎太郎を膝の上に乗せたツナと、ここあを膝の上に乗せたにここと、こころが乗せてにこの家に向かう。にこの家に向かう途中で

デイナーが…

「なんかお前ら、夫婦にしか見えないよな。」

「は!?!」

デイーノの言葉に二人は顔を真っ赤にさせる。二人が顔を真っ赤にしている顔を見てデイーノが笑いながら言う。

「だってよ、その姿を見たら夫婦だと間違えてもおかしくないだろ。」

このデイーノ言葉に二人は何も言うことができなかった。はたから見れば疲れて眠っている子供を、膝の上に乗せている父親と母親にしか見えないのだから。

その言葉にこころは…

「こころあの言ってた通り、お姉さまとツナさんは将来結婚するかもしれないわね。」

「こころ!?!」

「こころちゃん!?!」

急に結婚の話を始めたこころにツナとにこは顔を真っ赤にしてしまう。

だがにこはこころの言葉を受けて考えてしまう。

「確かに私たち子供の扱いがうまいし…って! 何を想像してるのよ私!?!)」

にこがちよつとだけツナとの結婚のことを考えていると、音ノ木坂の地区に入っていく。

そして運転しているロマーリオがにこに尋ねる。

「嬢ちゃん。嬢ちゃん家はこつちでいいのかい?」

「え!?!はい!」

多少動揺しながら答えるにこ。このあとにこの案内のもとに車はにこの家に向かっていく。

その20分後。にこの住んでるマンションの前につく。

そしてマンションに着くと、こころに鍵を渡して先に部屋に行ってもらい、ツナとにこはそのあとに虎太郎とこころをあを背負ってマンションのエレベーターに乗る。

「なんか偶然出会っただけなのに、なんかすごく仲良くなっちゃいましたね。」

「どのみち明日の花見で会ってたわよ。」

「そうでしたね。でも明日出会うはずでも俺は今日にこさんと会えて嬉しいですよ。」

「え？」

「たった1日でも、にこさんのことを知れて、友達になれたんです。なんか嬉しいですよ。」

ツナがそう言うのと、にこの住んでる階にエレベーターが止まる。そしてにこの住んでる部屋にツナは入って虎太郎をそっと寝かせると、ツナは玄関で靴をはいてデイナーたちの所へ行こうとする。

「それじゃ、また明日会いましょう。」

「ええ：明日は私も弁当を作っていくわ。」

「楽しみにしています。」

そう言うツナは玄関の扉を開けようとドアノブに触れようとした時、ツナはにこに…

「あ！にこさんのホットケーキ美味しかったですよ。また食べたいです。」

「え…!?!」

「それじゃ。」

そう言うツナはデイナーたちのところへ向かっていく。

そしてツナの言葉に、にこは顔をほんのり赤くさ

せその場で固まってしまふのだった。

#標的（ターゲット） 40 「寄り道」

ここをマンションに送ったあと、ディーノの車に乗りこむツナ。このあと穂むらに寄ってもらえないかと頼もうとしたツナであったが、突如ディーノからあることを尋ねられる。

「なあツナ。ちよつと聞きてえことがあるんだが。」

「何ですかディーノさん？」

「和菓子の美味しい店とか知らないか？」

「和菓子ですか？どうしてですか？」

急にディーノから和菓子のお店のことを聞かれて疑問符を浮かべるツナ。

するとロマーリオが説明し始める。

「実は花見の2日後に同盟ファミリーのボスと食事会をすることになってるんですが、そのボスが日本の和菓子が好きなものでして、それで手土産に和菓子を持っていこうと思っていました。」

「へーそうだったんですか。」

ロマーリオの説明を聞いて、二人がなぜ和菓子の店を探しているのか理解するツナ。

そして改めてディーノがツナに尋ねる。

「それでどこか、いい店知らないか？」

「知ってますよ。」

「本当か！」

「はい。和菓子屋穂むらつて言うんですけど。地元じゃ有名な和菓子屋さんで、明日花見に来る友達の家なんです。ここからそんなに距離もないですよ。」

「さすが俺の弟分だけ。じゃあその穂むらつてと

ころに行ってみるかロマーリオ。」

「OKボス。沢田さん案内のほう頼みますぜ。」

そう言うところロマーリオは車のエンジンをかけ、穂むらに向かっている。

穂むらに向かう間、ツナは心の中で。

「（偶然だけど、穂乃果ちゃんの家に行く用事ができて良かった。なんかちよつと言いつらかったんだよねー…）」

デイーノたちに何で穂むらの家に行きたいんだと尋ねられて、自分の想い人に会いに行きたいからと言えるはずもないので、ツナは内心ホッとしていた。

それでもデイーノたちは寄ってくれるとは思っただが。

そして車で移動すること10分。和菓子屋穂むらに到着する。そして穂むらに入るツナ、デイーノ、ロマーリオ。

「いらっしやいませー。あらツナ君…え…」

穂乃果の母がデイーノを見て固まってしまう。どうやら外国人であること、デイーノのあまりのかっこよさに驚いてしまったのだ。

「ツ、ツナ君!?そ、その人は!?!」

「えつと…その…」

デイーノのことを尋ねられて、答えようとしたツナだったがマフィアだとは言えないので、どう言おうと考えているとデイーノが…

「初めまして、デイーノと言います。いつも弟分がお世話になっていきます。」

「あ、あらー…ご丁寧にどうも!」

「それとこっちは、俺の右腕のロマーリオです。」

デイーノが穂乃果の母にロマーリオを紹介すると、ロマーリオは一礼する。

そしてデイーノは今回ここに来た理由を話す。

「実は近々、俺の会社と取引している会社と食事会をすることになっていまして、取引先に社長が日本の和菓子が好きでして。そしたらツナがこの穂むらの和菓子が美味しいと言うもので。」

「その若さで社長だなんて！え、えっと何にします!?」
「そうですね…」

緊張している穂乃果の母が尋ねると、ディーノはどの和菓子にするか考え始める。

そしてツナはディーノの大人の対応に感心していた。

「凄い…さすがディーノさん…」

「沢田さんも、あんな風なボスになれるといいですね。」

「お、俺はマフィアのボスにはなりませんって！」

穂乃果の母に聞こえないくらいの小声でロマーリオにつっこむツナ。

するとロマーリオのスマホが鳴る。

「おつと電話だ。」

そう言うとロマーリオは外に出ていく。ロマーリオが外に出ていくのを見計らって、ツナは穂乃果の母に穂乃果のことを尋ねる。

「あ、あの…穂乃果ちゃんは…!?」

「ごめんねツナ君。穂乃果は今、ちよつと出掛けてて。」

「そ、そうですね…」

「もしかしてプロポーズでもしに来たとか？」

「ち、違います!／＼／＼」

ニヤニヤしながら言う穂乃果の母に、ツナは顔を赤くして言う。

その会話を聞いてディーノは

「そういうことだったのかツナ。俺の車に乗りたかって言ったのは、その穂乃果って奴に会いたかったからか。」

「え?!いや…その…!?／＼／＼」

ディーノに自分の本音を言い当てられて何も言うことができなかつたツナであった。

#標的 (ターゲツト) 41 「亜里沙」

デイーノが何の和菓子にするか決めていると、店の奥から穂乃果の妹である雪穂と、もう一人の女の子がツナたちのところへやって来る。

「うわっ！すっごいイケメン!?あ！ツナさん来てたんですか？」

「雪穂ちゃん。あれ？そっちの子は…外国人…？」

雪穂の隣の女の子を見て、ツナが女の子が外国人だとわかり少し戸惑ってしまう。ツナの仲間には外人が多いがみんな日本語を喋ることができるので困ることがなかった。

ツナが困っているとデイーノが女の子のほうを見ると。

「Zdravstvuyt. Ya Dino. Kak nasche t vas? (初めまして。俺はデイーノ。あなたは?)」

突如ロシア語で女の子で始めるデイーノ。雪穂の横にいる女の子がロシア人であると理解しているようだ。

それに対して少女は…

「O, eto Ayase Arisa. Vse v porjadke. Yamogugovorrit, poiyaponski (あ、絢瀬亜里沙です。大丈夫ですよ。日本語は喋れますよ。)」

「Ponimayu. Yamogugovorrit poiyaponski. poetomu pozhaluysta, bud, te uveryeny (そうか。俺も日本語は喋れるから安心してくれ。)」

「…」

デイーノと亜里沙の会話にツナ、雪穂は何も言えず哑然としてしまっていた。

そんな哑然としてしまっている3人にデイーノが…

「いやパツと見てロシア人と思っただから、日本語喋れないじゃないかと思つて、ロシア語で喋っただけだ。」

デイーノがそう言うと、亜里沙が日本語で尋ねる。

「あの…デイーノさんはロシア人なんですか？」

「俺はイタリア人だぜ。」

「それにしてもロシア語も日本語でうまいですね！」

「よく仕事で他の国に行くことがあるからな。色んな国の言語も喋れるぜ。」

「ハラシヨー！」

デイーノが他の言語を喋れると知つて、亜里沙は驚いてしまう。

そして亜里沙が今度はツナのほうを見て

「えっと絢瀬亜里沙です。あなたは…」

「えっと…沢田…「お姉ちゃんの彼氏だよ。」雪穂ちゃん!？」

「ハラシヨー！」

ツナが自己紹介しようとする、ツナの言葉を

遮つて雪穂がニヤニヤしながら言う。その言葉

にツナは顔を真っ赤にさせる。一方で亜里沙は

穂乃果の彼氏だと知つて驚いていた。

「ゆ、雪穂ちゃん！俺は穂乃果ちゃんとはまだ付き合っていないって！」

「まだって…やっぱりお姉ちゃんのこと…」

「あ！いや！今のはそういう意味じゃなくて！」

自分で墓穴を掘つてしまいツナは顔を赤くして、

両手で顔を覆つてしまう。

そして雪穂はポケットからスマホを取り出すとさらにツナに追い討ちをかける。

「じゃあ、さっそくお姉ちゃんに連絡…」

「ちよつと！雪穂ちゃん!？」

スマホでツナが穂乃果のことが好きだということ連絡しようと

する雪穂を止めるツナ。

その光景に亜里沙とディーノはクスクスと笑っていた。そして今度こそツナはちゃんと亜里沙に自己紹介する。

「えつと…き、沢田綱吉です。気軽にツナって呼んでね亜里沙ちゃん。」

「はい、ツナさん。穂乃果さんと付き合えたらいいですね。」
「え?!いや?!?ありがとう…!」

顔を赤くしながらもツナは、亜里沙にお礼言う。そして雪穂が明日の花見のことについて話す。

「明日の花見、私と亜里沙も行くんですよ。」

「へーそうなんだ。」

「俺も行くぜ。明日は楽しくなりそう…ん?」

明日花見に行くことを告げるディーノだったが、

ここであることを思い出す。

それは…

「明日は楽しくなるかどうかはまだわからないな…毒蠍のポイズンクッキングがある限りな…」

「あ…そうでしたね…」

「止めようとすれば命に関わるし…こうなったら神頼みするしかないな…」

「そうかもしれないですね…」

ビアンキの弁当を作りさせるのは無理だと思った

ツナとディーノのは神頼みするしか道は残されて

いたのだった。

そしてツナは雪穂に尋ねる。

「この辺りに毒料理が普通の料理になる御利益の神社とかない…?」

「何を言ってるんですかツナさん…?」

「日本には変わった御利益の神社があるのね。」

ツナに変なことが尋ねられ、呆れた表情になる

雪穂。そして亜里沙はツナの言葉をそのまま信じてしまう。

そんな神社はあるわけもないので、雪穂はこの近くにある神社を教える。

「ありがとう。とりあえず行ってみるよ。」

こうしてツナとディーノは近くにある神社に向かっていく。はたして神頼みの明日の花見が無事に行われるのであろうか!?

#標的（ターゲット） 42 「神頼みと占い」

雪穂に教えられてやってきた場所はかつてμsのメンバーが練習がしていた神田明神だった。といってもツナとディーノがそのことを知るはずはなく…

「(どうか花見が普通に終わりますように…)」
「ガウ…」

賽銭にお金をいれて、目を閉じて手をあわせて明日の花見が無事に終わるように祈るツナとディーノとなぜかナッツ。祈りが一人（一匹）でも多いほうがいいと思ってナッツを出したのだ。

「これで無事に花見が済めばいいですね。」
「そうだな。」

花見の無事を祈るツナとディーノだが、ビアンキのポイズンクッキングのことで頭がいっぱいで花見をめちやくちやしそうな人ばかりであることを忘れていた。

ビアンキが仮にポイズンクッキングの弁当を作らなくてもリボンがいる限り花見が普通に終わるということとは絶対といってない。

そんな初歩的なことを忘れている二人は、下で待たせているロマリオのところへ帰ろうとするのだが。

「よし帰え…うお!!」
「ディーノさん!」

「いてて! 何だこの神社も滑りやすいな…」
「(すぐ神社に行ったらすぐ帰るから大丈夫だと思ったけど…やっぱディーノさん部下の人がいないとダメなんだ…)」

やっぱりいつもディーノには部下が常に傍にいないなければならないということを変更して認識するツナ。

一方神田明神の下では…

「懐かしいわね。ちよつと前までここで練習してたのに。」

「そうやね。なんか何年も前のことに感じるわ。」

神田明神の階段を見ながらそう呟くのは、sの

メンバーの絢瀬絵里と東條希である。二人は

ラブライブ優勝に向けてこの場所でもみんなで

練習した日々を思い出していた。

そして二人が懐かしんでいると、絵里が口を開く。

「今日は買い物に付き合わせちゃってごめんね希。」

「ううん、気にせんという。ウチもここに寄れた

いって言ったんやし。」

「それよりも明日の花見楽しみね。穂乃果たちに

会えるしね。」

「それも嬉しいけど、ウチは穂乃果ちゃんが友達になった男の子っていうのも気になるわ。」

「一体どんな子かしら？」

絵里と希が明日の花見のこと、穂乃果たちに久しぶりに会えることなど話していると、階段の上から人の声が聞こえて来る。そしてそれが段々と絵里と希のいる所に近づいてくる。

「いでーいでーと、止まんねえー！」

「だ、誰か助けてー！」

ツナとディーノが階段の上から転がり落ちてくる。そして勢いが止まらず、二人は階段の一番下のまで転がり落ちると、顔を地面にうちつける。

「いってー！」

顔を押しさえながら叫ぶツナとデイーノ。急に階段から転がり落ちてきたツナとデイーノに驚く絵里と希だったが、すぐに二人のところに駆け寄る。

「だ、大丈夫ですか!？」

「ああ…なんとかな…」

「俺も大丈夫です…」

絵里がそう言うと、デイーノとツナは大丈夫だと答える。

そして今度は希が尋ねる。

「いきなり階段から転がり落ちてきたけど、一体何があつたん…？」

「いや…参拜して帰ろうと思ったんだが、一番上の階段の一段目から踏み外してな…いてて」

「それで助けようとしたんですけど…俺も足を踏み外して…あいたた…」

自分たち起きた出来事を話すツナとデイーノ。顔以外にも腕や腰などうちつけたようで、痛む部分を押えながらもゆっくりと立ちあがる。

「あー死ぬかと思つたぜ…」

「本当ですよ…」

「いや…普通なら死んでもおかしくないわよ…」

「仮に死ななくても、骨とか折れてもおかしくないと思うんやけど…絶対に痛いだけじゃすまないと思うんやけど…」

ツナとデイーノの異常な打たれ強さに驚くの通り

こして呆れてしまう絵里と希。リボーン 교육を

受けているこの二人はこれくらいで死んだり骨が

折れるということはない。

すると階段の上からナッツが降りてくるとツナの頭に乗る。

「ガウ。」

「ナッツ。ゴメンね置いていちゃって。」

「あら。かわいいわね。」

「かわいい猫ちゃんやね。」

ナッツを見て絵里と希がかわいいと言う。ナッツは、sのメン

バーには人気のようである。

「全く：明日の花見が無事に終われるように参拝してきたのに、俺たちが死にかけてちや意味ねえな…」

「花見やるんですか？奇偶ですね、私たちが明日やるんですよ。」

「へーそうなんですか。」

絵里の言葉にツナは何も違和感を感じず答えるツナ。

にこの時と同じくツナは目の前にいるのが、sの絢瀬絵理と東條希だということに気づいていない。

そして希はカードを使つて占っていた。

「ウチの占いによると：明日の花見はただで終わりそうにないって出てる…」

「やっぱりダメか…」

「明日の花見：大量の死人が…」

「死人!？」

死人という単語が出てきて驚く絵理と希。二人が驚いているのでツナがフォローする。

「あ…いや：明日の花見のメンバーの中にももの凄く料理が下手な人がいます…それを食べたならもう終わりというか…」

「悲惨ね…」

「本当やね…」

ツナの説明を聞いてそう言う絵里と希であるが、その料理を明日食べるかもしれないということはまだ知らなかった。

そしてツナとディーノはロマーリオを待たせているのでそのまま車に向かって行った。そして二人の後ろ姿を見ながら希はカードで占っていた。

「こ、これは…」

「どうしたの希？」

「二人の運勢を占つてみたんやけど、あの茶髪の子なんやけど…今まで占ってきた人の中で一番運勢が悪いわ…こんな人初めてやわ…」

あまりの出来事に驚く希。花見当日にツナと出会うことを二人は知らないのだった。

#標的（ターゲット） 43 「花見前夜」

あのあとツナは家まで送ってもらい、家に帰宅する。

そして晩御飯を食べ、風呂に入ったあと自分の部屋にてくつろいでいた。いつもならμsの動画をスマホを見るツナであったが、明日は花見なので早く寝ようと考えていた。

「明日の花見だし、今日はもう寝ようかな。」

ツナが寝ようとしたその時、ツナのスマホにLINEの着信音が鳴る。誰かがLINEの電話機能でツナに電話したようだ。

「誰だろう…ほ、穂乃果ちゃんだ!」

電話してきた相手が穂乃果だと知ってツナは、慌てて電話に出る。

「も、もしもし?」

『あツナ君?ゴメンね急に電話しちゃって。』

「大丈夫だよ。それよりもどうしたの?」

『大したことじゃないんだけど、明日の花見の日時とか一応確認しておこうと思っただけ。』

「そうだね、一応確認しとこっか。」

二人は明日の花見の時間、場所、来る人や人数

などを改めて確認する。

そして一通り確認を終えると、穂乃果が…

『明日はマフィアの人たちがたくさん来るんでしょう?私、楽しみだなー。』

「え…怖くないの…?」

『全然!むしろ楽しみなんだ!』

「か、変わってるね…」

マフィアに会うことに恐怖するどころか、むしろ楽しみな様子の穂乃果にツナは驚いていた。

一方でツナは楽しみにしていることがあった。

「そういえば俺も楽しみなんだ。μ sの会ったことのない二人に。」
『三人だよツナ君。』

「あ！実は今日並盛のデパートでさ、μ sのにこさんに会っちゃったんだ。」

『えー!?!にこちゃんに会ったの!?!』

「うん。あとにこちゃんの姉弟にもね。」

『どうだった？元気にしてた？』

「俺が見る限りは元気だったよ。穂乃果ちゃんたちに会えるのが楽しみだって言ってたよ。」

『そっかー。』

にこが自分たちに会うのが楽しみだとツナから聞

いて穂乃果は嬉しそうな様子だ。

そしてさらにツナは話を続ける。

「それで、そのあとにこさたちが俺の家に来てさ。」

『に、にこちゃんがツナ君の家に!?!』

「うん、そうだよ。どうしたの穂乃果ちゃん？」

『な、何でもないよ!』

「そう。それでにこさんがホットケーキが作ってくれてさ、それがすっごく美味しくてさ。」

『に、にこちゃんのホットケーキ!?!』

にこがツナの家に来たということだけでも衝撃的なのに、にこの作ったホットケーキを食べたと聞いて穂乃果は動揺を隠すことができなかった。

さつきから少し変な穂乃果にツナは…

「大丈夫穂乃果ちゃん？なんかさつきから変じゃない？」

『だ、大丈夫だよ…じゃあ明日の花見でね…』

「う、うん。また明日。」

多少違和感を覚えながらも、ツナは電話を切る。

そして電話が切れたあと穂乃果は真つ先に海未に電話する。

「もしもし海未ちゃん！」

『どうしたのですか穂乃果？』

「あのねツナ君がね！にこちゃんと来てホット

ケーキと会ってね！それでね！」

『お、落ち着いてください穂乃果！何を言ってるかわかりません！』

海未がそう言うと、穂乃果は一旦気を落ち着かせてツナがにこと会ったこと、家に来てホットケーキを振る舞ったことを話す。

『へーツナ君がにこと…それにしても穂乃果、な

ぜ私にこんなことを言うのですか？』

「海未ちゃんだってツナ君のこと好きなんですよ！だったら羨ましくないの!?!にこちゃんがツナ君の家に行ったんだよ！ツナ君の部屋に入ったかもしれないんだよ！」

『だ、だから！私はツナ君のことは…!』

「それにツナ君、にこちゃんのホットケーキを食べてすっごく美味し
いって言ったんだよ！もしかしたらツナ君がにこちゃんのことを好
きになってもおかしくないよ！」

『ツナ君がにこを…』

穂乃果の言葉を受けて海未はツナとにこが付き合っただトする
姿を想像してしまう。そしてその

姿を想像して海未は動揺してしまう。

『(ま、また私は…!?!それに私はツナ君が誰と付き合っても別に私には
関係ないことで…!)]』

そう自分に言いかけせる海未だったが、穂乃果の言葉を真に受けて
顔を赤くし完全に動揺してしまっていた。

『と、とにかく！私には関係ないことです！明日は花見なので私はも
う寝ます！』

「あ！海未ちゃん！」

穂乃果の制止も聞かずに海未は一方的に電話を切ってしまう。すると今度はことりから穂乃果へ電話が入る。

『もしもし。穂乃果ちゃん?』

「こ、ことりちゃん…」

『どうしたの穂乃果ちゃん?』

「実はね…」

『え…?』

穂乃果の話聞いて驚愕することり。ことりは自分がツナのことを好きだということ穂乃果たちに話していない。

そして波乱の花見が始まるうとしていた。はたしてどうなるのであろうか!?

#標的（ターゲット） 44 「花見当日」

そして花見当日。花見の会場は並盛山の頂上。フウ太のランキング能力によれば、並盛山の頂上にある花見の隠れスポットは山の木々に隠れており、滅多にいく人がいないのだという。

そして並盛山の麓で集合する穂乃果、海未、ことり、真姫、花陽は卒業組であるにこ、絵理、希を待っていた。雪穂と亜里沙は二人であとで来るらしい。

そして今いる並盛山の麓にはたくさんのお車が止まっていた。

「それにしてもすごい車の量よね…マフィアってこんなにたくさんいるのね…」

「か、海外に売られないかな…?」

「大丈夫にゃ!何かあったらかよちゃんは私が護るにゃ!」

たくさんのお車を見て真姫が呟く。そして花陽は海外に売られるんじゃないかと再び不安になる

花陽に凜がそう言うが、さすがに無謀としか言えないようがない。

「私は楽しみだなー!どんなマフィアがいるんだろー!」

「穂乃果…マフィアって何かわかってますか…?」

「アハハ…」

マフィアに会う楽しみな穂乃果に、海未とことりは呆れていた。そんなことを話していると穂乃果が叫ぶ。

「あー!絵里ちゃんたちだー!おーい!」

遠目で絵里、希、にこを確認すると手を振る穂乃果。それに対して絵里、希は手を振る。にこは手を降らずそのまま歩いてくる。

そして感動の再会を果たす。

「久しぶりやねみんな。」

「元気にした？」

「スクールアイドルを止めて腑抜けたりしてないでしょうね？」

「うん！元気だよ！絵里ちゃん！希ちゃん！それでにこちゃん…」

「な、何よ…」

感動の再会を果たしたが、いきなり穂乃果はにこに顔を近づける。急に穂乃果に顔を近づけられてにこは顔を引き攣らせる。

「ツナ君の家に行つたつて本当？」

「な、何で知ってるのよ…？」

「ホットケーキをツナ君に振る舞つたつて本当…？」

「だから何で知ってるのよ！」

穂乃果はこの言うことを無視して、昨日あつた出来事を聞き出そうとする穂乃果。

そして穂乃果だけではなく海未とことりも。

「答えて！」

「答えてください！」

「にこちゃん！」

「ちよつと何であんたたちまで!?!」

海未とことりも顔を近づけて尋ねてきたのでにこは驚いてしまう。そして海未は「わ、私は何を!?!」と思ひ自分の行動に恥ずかしくなってしまう。

そして3人の行動に絵里は困惑していた。

「えつと…何があつたの…？」

「ちよつと…色々あつたというか…」

「四角関係というか…」

「四角関係!?!」

絵里が尋ねると花陽と真姫が答える。四角関係という言葉聞いて絵里は驚いてしまう。正確に言えば五角関係になっていることを誰も知らない。

そんなことをやっていると思わずと疑問に思っていたことを言

う。

「それにしても花見の隠れスポットやのに、車が多い気がするんやけど…」

「たぶんツナ君の知りあいのマフィアだよー」

「マフィア!?」

マフィアという単語を聞いて絵里、希、にこの

三人は驚いてしなう。

そしてにこが尋ねる。

「ちよつとどういうことよ!? 何であいつがマフ

ィアと関係あるのよ!」

「あれ? 聞いてないのにこちゃん? ツナ君はボンゴレファミリーっていうマフィアの十代目なんだよ。」

「はああああ!」

ツナがマフィアの十代目だということをバラす穂乃果。それに対してにこはもの凄い衝撃を受けていた。

そして驚いたのはにこだけではなく絵里も。

「じよ、冗談よね…?」

絵里がそう言うが、全員何とも言えない表情になってしまう。その表情を見て絵里、希、にこはマ

フィアの話が本当だということを理解する。

そして希が尋ねる。

「そもそも何でそんな子と友達になったん…?」

「元々は私たちはマフィアのことには知らなかったのですが、ある事件を機にマフィアだということを知って…」

「ある事件?」

海未の言葉に疑問符を浮かべる絵里、希、にこ。

そしてある事件について花陽が語り出す。

「実はことりちゃんがマフィアに誘拐されちゃ

って…その誘拐犯からツナさんはことりちゃん

を助けてくれて…それがきっかけで…」

「ほ、本当なの…?」

花陽の言葉を聞いて、にこはことりのほうを向いて尋ねる。そしてことりはほんのり顔を赤らめながらあの事件について語る。

「うん……ツナ君は私の為に戦ってくれて……あの時のツナ君がもの凄くかつこよくて……はっ！」

「ことりちゃん……？」

「ど、どうしたの穂乃果ちゃん……？」

「何か私に隠してない……？」

「さ、さあ……な、何のことかなあ……？」

ジト目の穂乃果に問いつめられて絶体絶命のピンチに陥ることり。そしてタイミングがいいのか悪いのかわからないが並盛山からツナが降りてくる。

「あ！穂乃果ちゃん！」

「ツナ君！」

「来てたんだね……あれ……？」

ツナが絵里と希を見て驚いてしまう。昨日会った

二人が今ここにいることに。そして絵里と希も

ツナと同じく驚いてしまう。

「「あ……」」「「あ……」」

まさかの偶然の再会。

#標的(ターゲット) 45 「平行世界」

「「あー！ー！ー！ー！ー！」」

「ど、どうしたのよ!？」

「び、びつくするにゃ！」

ツナ、絵里、希の叫び声ににこと凜が驚く。他のメンバーも声には出さなかったが3人の叫び声に驚いていた。

そして希が昨日のことを思い出しながら言う。

「き、昨日…神田明神の階段から落ちてきた人や！」

「「「はい!」「」」」

希の言葉に穂乃果、海未、ことり、花陽、真姫、凜が驚く。

そしてツナは苦笑いしながら絵里と希に挨拶する。

「き、昨日はどうも…」

「まさか同じ花見の人だったとはね…」

「まさかμ、sの人だとは思いませんでした…」

まさかこんなところで再会するとは思えなかったツナと絵里は驚いてしまう。

そして絵里と希がμ、sのメンバーだと知らなかったツナに、にこは呆れてしまっていた。

「あんた…また気づいてなかったの…?…」

「いやー…全くとっていいほど…」

にこの言葉にツナは苦笑いで左手で後頭部をかきながら言う。
そして希が言っていたことについて海未が尋ねる。

「それより神田明神の階段から落ちたというのは…?…」

「昨日、神田明神に参拝に行っただけけど、

参拝したあとに足を滑らせて一番上から落

ちちやつてさ…そしたら下に二人がいてさ。アハハハ…」

「笑いごとじゃありませんよ！」

「そうだよ！ツナ君大丈夫!？」

「え？大丈夫だけど…」

海未と穂乃果が話を聞いてツナを心配するが、

ツナはなんともない様子である。

「でも確かに色々と体中を撃って痛かったかなー…」

「あんた本当に人間…？」

「ええ!?酷いよ真姫ちゃん！」

「あそこから落ちて、痛いだけじゃすまないわよ

普通…病院で見てもらったら…？」

「いや本当に大丈夫だから…」

リボーンの修行や今まで戦いのお陰で、階段で落ちたぐらいでは全然問題はない。

ツナは大丈夫とは言うが、全員信じられないという様子の顔をしていた。

するとどこからかツナを呼ぶ声が聞こえる。

「綱吉君ー。」

「こ、この声は…」

どこからか男の音が聞こえてくる、全員辺りを探すが声の人物が見当たらない。

「こつちこつちー綱吉君。」

「白蘭！」

「やつほー。」

空中で翼を生やし、あぐらをかきながらマシユマロを食べている、ジエツソファミリーのボスである白蘭がいた。

そして空中に浮いている白蘭を見て全員驚愕して固まってしまっていた。

「白蘭！お前何でここにー！」

「いやー花見の準備を手伝うのがめんどくさくてさ。なんか綱吉君がこつちにいるって聞いてから。」

「お前なあ…」

白蘭の話を聞いて呆れた表情になるツナ。そして驚いているμ、sはメンバーはであったが、その中で絵里がようやく口を開く。

「ちよつとー!」

「どうしました?」

「どうしましたじゃないわよ!あの人、空を飛んでるわよ!」

「あー…あいつはいつもあんな感じ何で…気にしないでください!」

「気になるわよ!」

ツナの言葉につっこむ絵里。すると白蘭はツナたちのところへ降りてくる。すると勝手に自己紹介を始める。

「ジェツソフアミリーの白蘭だよ。初めまして…じゃないや、君たちは僕に会うのは初めてかもしれないけど、僕は初めてじゃないや。」
「「「「「?」」」」」

白蘭の意味のわからない言動にμ、sの全員は疑問符を浮かべる。そして二人はさらに話を続けていく。

「へー。やっぱりお前は穂乃果ちゃんたちに会ったことがあるんだ。」
「まあね。」

「それにしてもお前、花見のことをの為に能力を使って大丈夫なの?」
「大丈夫だよ。なんかどれだけやっても体に負担がかからないんだ。ユニちゃんのお陰かもね。」

「へー。」

「今は僕がもう一人いたらなーって思ってるんだー。」

「な、何恐ろしいこと考えてるんだよ!」

「冗談だよ。」

二人が話しているが、μ、sのメンバーは誰も話についていけないものはいなかった。

「ここで希が白蘭に尋ねる。

「色々と聞きたいことがあるんやけど…まず私たちに会ったことがあるってどういうことなん?」

「ああ、そのことね。僕は平行世界パラレルワールドを知識を共有できるんだよ。」
「パラレルワールド?って何かにや真姫ちゃん?」

「そ、そんなことを知らないの…!？」

凜に尋ねられてそう言う真姫だが、パラレルワールド平行世界のことについて説明はできない様子だ。

「ここで話すのも何だし、とりあえず上に行こうよ。」

#標的(ターゲット)46 「マファイアって何なんだろう?」

並盛山の頂上を目指すツナ、白蘭、μ sのメンバー。そして
平行世界^{パラレルワールド}について白蘭が説明する。

「簡単に言えば、もしもの数だけ世界があるってことだよ。君たちが音ノ木坂学院を救った世界もあれば、救えずに音ノ木坂学院が廃校になった世界っていうのも同時にあるってことだよ。」

「えー!? そんな世界もあるの!? なんか嫌だよー!」

白蘭の話を聞いて穂乃果は叫んでしまう。穂乃果だけではなく全員、少し暗い表情になる。

「そ、その世界の私たちはどうしてるんだろう?」

「なんか考えただけで、嫌だにや…」

「こればかりは私たちの力ではどうしようもできないわね…」

花陽、凜、真姫がそう言うのと、にこが白蘭に能力

について尋ねる。

「それより何でパラレルワールド?の知識を共有することができのよ?」

「さあ? そういう星の元に生れたとかそういうんじゃない?」

「そんな感じいいの…?」

なぜこの能力を得たのか正確な答えを知らない白蘭に、にこは呆れてしまう。

「結構この能力気に入ってるんだよねー。」

「その能力のせいで俺たちは未来で苦労させられたんだけどね…」

「やだなあー綱吉君。もう昔のことじゃん。」

「昔のことっていうか未来のことなんだけど…そもそもその能力使って平行世界^{パラレルワールド}を支配してたのはどこのどいつだよー!」

「それは未来の僕であって、今の僕じゃないよ。」
「まあそうなんだけどさ…」

白蘭の言葉に納得せざるおえないツナ。未来の世界を支配しようとしていたのは未来の白蘭であって、今ここにいる白蘭ではない。

二人の会話を聞いて、ことりが尋ねる。

「あ、あの…未来って…?」

「綱吉君は未来に行ったことあるんだよ。」

「…「未来!」「…」」

未来に言ったことがあるという言葉を聞いて、μ、sのメンバーは驚く。

そして穂乃果はもの凄くわくわくした顔で尋ねる。

「マファイアってすごい! 未来に行くことができるんだ! ねえねえ未来ってどんなだったの!」

「え…未来では…その…俺は死んでて…」

「え…?」

「正確に言えば…死んではないんだけど…それで

未来を支配しようとしたのが白蘭こいつで…」

「えへ。」

ツナが白蘭は指をさすと、白蘭はニコニコとしていた。

そして絵里と真姫が尋ねる。

「ちよつと待って! 本当なの!? 未来に行ったって!」

「それが本当だとして、そもそもどうやって行くのよ!」

「10年バズーカを使えば…」

「10年バズーカ…?」

「何だにゃ…?」

10年バズーカという聞いたことのない単語を

聞いて、海未と凜が疑問符を浮かべる。

そして10年バズーカについて白蘭が説明する。

「10年バズーカっていうのは、ボヴィーノファミリーっていうマファイアが作った兵器で、10年後の自分と今の自分を5分間だけ入れ替えることができる兵器だよ。」

「何でマファイアがそんな物を発明できるのよ…」

「スピリチュアル…というレベルは越えてるよね…」

白蘭の説明を聞いてにこと希がそう言う。他のメンバーも支離滅裂の状態にあったが、穂乃果だけはもの凄い興味を持っていた。

「凄いねマファイアって！私、マファイアになってみようかな！」

「穂乃果ちゃん!?ダメだよ！マファイアだけは！」

「なんか思ったよりイメージが違って面白そうなんだもん！」

「だったら僕のファミリーになる？」

「白蘭！」

穂乃果を自分のファミリーに勧誘する。そしてそれをツナが全力で阻止する。

そして他にメンバーは「マファイアって何なんだろう…?」と思ってしまう。

この瞬間から、sのマファイアのイメージが変わったのであった。

#標的（ターゲット） 47 「殺し屋アイドル」

そしてとうとう花見の会場である並盛山の頂上々に着く。そこは広々としており、その真ん中に巨大な桜があり、色んなファミリィがブルーシートをひいたり、

弁当を運んでいた。白蘭は自分のファミリィのところに戻ってしまふ。

「うわーすごいー！」

「綺麗ですね。」

「いっぱい人がいるね。」

桜やファミリィを見て穂乃果、海未、ことりが絶賛の声をあげる。そんなことを言っているとツナたちの前にリボーンがやって来る。

「ちやおっす。」

「あー！リボーン君！ちやおっす。」

リボーンの挨拶であるちやおっすを穂乃果が真似る。

そして絵里、希、にはリボーンを見て。

「あ、赤ちゃんが喋ってる!？」

「ス、スピリチュアルな赤ちゃんや…」

「どうなってるの…」

「今日はよく来てくれたな。楽しんでいってくれ。もうお前らも、sは解散はしたかもしれねえが、一応ライブができるステージを用意したぞ。」

リボーンがそう言うと、桜の木の横にライブができるぐらいのステージができていた。それを見てツナは「さっきまでなかったのに…」と心の中で思ったが何も言わなかった

「すごいー！ライブできるんだー！」

「ですが私たちはもう解散したんですよ…今更ライブをやるなんて…」

穂乃果と海未が建設されたステージを見て言う。そしてリボーンが新たなアイデアを提案する。

「確かにスクールアイドルとしてはお前らは確かに解散した、だが今度から裏社会アイドル^μ、sとして…」

「やらないわよ！」

「そもそも裏社会アイドルって何だにや！」

「私たちはそんな恐ろしいところでライブなんてやらないわよ！」

リボーンの提案に真姫、凜、絵里がつっこむ。そ

してツナもリボーンにつっこむ。

「穂乃果ちゃんたちに何をさせようとしてるんだよりリボーン！」

「裏社会のイメージをかえる為だ。」

「アイドルを取り入れたってもマフィアのイメージは変わらないだろ！」

そうリボーンにつっこむツナだが、もうすでに^μ、sの中のマフィアのイメージは完全に変わってしまったている。

するとリボーンはツインテールのカツラを被り、アイドルがよく着る衣装になると…

「リッポリッポリー！」

「ちよつと！何やつてるのよ！それ私の！」

「あなたの心臓に弾丸をぶちこむリッポリッポリー！あなたに永久の安らぎを与えるリボーンリポリボ！リポリーって覚えてねコロリボ！」

「怖すぎるわよ！私の自己紹介を何だと思ってるのよ！見てなさい！につっこにこにー！あなたのハートにつっこにこにー！笑顔を届ける矢澤にこにこー！にこにーって呼んでねラブニコ？」

「うぜえ。」

「何ですってー！赤ん坊クセにー！」

にこの自己紹介をうざいの一言で終らせるリボーン。そんなリボーンに対してにこはめちやくちや怒っている。

そんなにこの言葉を無視してリボーンは…

「これからは殺し屋アイドルリボリーとしてとして活躍していくわよ！みんな応援よろしくリボ？」

「ねえ？私、殺し屋になるかもしれないけどいいかしら？」

「お、落ち着いて！にこちゃん！」

「そうよ！相手は赤ちゃんなのよ！」

リボーンの行動に怒りの限界にきて、リボーンに手を出そうとするにこ。そしてそんなにこを花陽と絵里に押さえる。

そして希がツナに尋ねる。

「何なの…この赤ちゃん…？」

「俺の家庭教師で…殺し屋ヒットマンです…」

「家庭教師って…赤ちゃんに勉強を教えてもらってるん…？」

「まあ…そうなります…」

「いつもこんな感じなん…？」

「いつもどころか毎日です…」

「大変やね…」

こうしてツナの苦勞を知る希であった。

#標的（ターゲット） 48 「いるかいないか？」

そして花見の準備は進んでいく。リボーンは花見のイベントの準備があるといつてどこかに行ってしまった。

そこでツナは自分の同級生を紹介することにする。

「十代目！」

「ようツナ！こっちは準備できたぜ！」

「ツナさーん！」

「ツナ君。」

ブルーシートの上で座っている獄寺、山本、ハル、炎真がツナの名前を呼ぶ。

するとハルがいきなり…

「ツナさん！そ、その人たちはμ sの方じゃないですか!？」

「え？そうだけど…」

「何でツナさんとμ sの方が…まさか！μ sの方の一人と付き合ってそれで友達に!？」

「そ、そんなわけないだろ！」

ハルの言葉に顔を赤くして叫ぶツナ。そしてさらにハルはツナに抱きつき。

「酷いですーツナさーん！私というものがありませんー！」

「おいアホ女！十代目から離れやがれ！」

獄寺がハルを引き剥がそうとするが、ハルはツナから離れる様子はない。

そしてハルの大胆な行動に海未は…

「い、いきなりハレンチですよ！こんな人前で！」

「私とツナさんは将来を誓いあつたんです！それとも何ですか？まさか嫉妬してるんですか？」

「そそそ！そんなことは！と、とにかく離れてく

「ださい！」

ハルの言葉に動揺してしまう海未。そして動揺していたのは海未だけではない。穂乃果、ことり、にこもこの光景を見て動揺していた。

「(わ、私も…あ、あんな感じに…!)」

「(あ、あんなに密着してる…!)」

「(べ、別にあいつが誰と仲良くても私には…!)」

声には出さなかつたものの、穂乃果、ことり、にこ

はちよつとだけハルに嫉妬してしまっていた。

他のメンバーがなんとも言えない状況の中で、

山本が…

「なあ、みゅーずって何だ？野球のチーム名か？」

「この野球馬鹿！んなわけないだろ！ミュージズっていうのはギリシャ・ローマ神話に出てくる女神たちのことだ！」

「へー？そうなのか？俺、神話とか興味ないしなー。」

「違うよ獄寺君… μ s はスクールアイドルのことだよ。」

「スクールアイドル？」

炎真が μ s がスクールアイドルということを

教えると、山本と獄寺は疑問符を浮かべる。

そして獄寺は…

「アイドルなんて俺は興味ねえな、UMAのことを調べることのほうが面白いぜ。」

「UMA？あんたそんな非科学的ものを信じてるの？」

「あ!？」

UMAと聞いて真姫は呆れた表情になりながら獄寺に言う。

そして獄寺と真姫の言い争いが始まる。

「そんないるかもわからないものを調べて、何が面白いのよ？」

「何だど!?UMAは男のロマンだ！」

「イミワカンナイ…そういうあんたはUMAを見たことあるの？」

「あるに決まってるだろ！ツチノコと人間型のUMAだ！」

獄寺が未来で見た、バイシャナのボツクス兵器とシモンファミリーのしつとぴちゃんのことを言う。

すると獄寺はどこからかG文字で書かれたノートを真姫に見せる。そこにはしとつぴちゃんの状態についてぎつしりと書かれていた。

「何よこの文字…?」

「G文字だ。俺が中学の時に授業中に考えた。」

「イミワカンナイ…」

「とにかくだ!UMAはいるんだよ!」

「いいや!いないわ!」

そしてUMAがいるかないかで獄寺と真姫と議論が始まってしまふ。

そんな二人の議論を見て全員何とも言えなくなってしまふ。

「なんか意味のわからない戦いが始まったにや…」

「なんか見た目と性格が誤解されそうだけど、彼頭いいわよね…」

「自分で文字を考え出すぐらいだし…」

二人の議論を見て凜、絵里、にこが呟く。そして二人のことをツナと花陽が話す。

「獄寺君、成績は学年1位なんだよね。」

「真姫ちゃんも学校では優等生なんですよ。」

そしてこのあと、獄寺と真姫のUMAのいるかないかという議論は中々終わることはなかったという。

ちなみに決着はつかなかった。

#標的（ターゲット） 49 「勇者ことり」

あのあと互いに自己紹介し、交流を深めたツナたち。

そしてとうとう花見が始まる。ステージ上にはリボーンがマイクを持って花見の挨拶を始める。

「今日はよく集まってくれたなてめえら。今日は好きなかだけ食べて飲みやがれ！それじゃ第534回ボンゴレ式花見大会、始まりだぞ！」

「「「うおー！」「」」」

リボーンという言葉に会場全体が盛り上がる。そしてファミリーたちは弁当や酒を飲み始める。

その熱気にツナは若干引いていた…

「すげえ盛り上がってる…というか534回ってすっげえ嘘くさい…まあいいか…」

ツナがそう言うと、まず最初に山本が家から持ってきた寿司をみんなに見せる。

「親父に頼んで、寿司持ってきたぜ。よかつたらみんなで食つてくれ。」

「お寿司だー！いったただっきまーす！」

寿司を見て目を輝かせる穂乃果。そして他のみんなも寿司を食べると、海未があることに気づく。

「これって本当のお寿司屋の…」

「俺の家は寿司屋なんだ。」

「寿司屋…ということはお米が！」

「かよちゃん…」

「花陽…」

花陽のお米に対する執着心に凜と真姫は呆れてしまう。

そして後からやってきた亜里沙と雪穂は…

「これが日本のお寿司…えっと…」

「こうやって醤油をつけて食べるんだよ。」

寿司を食べたことのない亜里沙に雪穂は寿司の食べ方を教えてあげていた。

そしてハルはツナに手作り弁当を出す。

「はいツナさん！私が作ってきた弁当です。」

「これ全部、ハルが作ったの？」

「はい！早起きして作りました！」

「じゃあ、もううね。」

ハルの作った弁当を食べるツナ。そしてツナはハルの弁当を食べ「美味しい」と絶賛する。

そして他のみんなも作ってきた弁当を出す中、穂乃果、海未、ことり、にこは自分の作った弁当をツナに出そうとする。しかしハルのようにはいかなかった。

そして雪穂が穂乃果に小声で言う。

「お姉ちゃん！何でお弁当出さないの!？」

「だ、だって…！」

「ツナさんにアピールするチャンスだよ！」

「そ、そうだけど…！」

雪穂がそう言うが、穂乃果はツナの為に作った弁当を出す勇気がなかった。

そして海未とにこも。

「（こ、これはみんなの為に作ったのであって…！けっしてツナ君の為に作ったわけでは…！）」

「（べ、別にあいつの為に作ったわけじゃないんだから…！）」

3人が勇気を出せず迷っている中、ここでなんと

ことりがツナの近くに行くと、自分の弁当を差し出す。

「あ、あの…！ツナ君…！」

「どうしたのことりちゃん？」

「その…弁当作ってきたんだけど…！良かったら食べて…！」

「ことりちゃんが作ったの？」

「うん…！この前、私を助けてくれたお礼というか…！」

「そ、そんな！気にしないでいいよ！」

ことりの言葉に、両手を振りながら言うツナ。

そしてことりの勇気ある行動に続いて穂乃果、海未、にこが弁当を差し出す。

「二あ、あの！私も弁当をー…え？」

「凄い…ハモった…」

「本当だ…」

「以心伝心なのな。」

3人の息がぴったりあつたことにツナ、炎真、山本が驚く。

3人が弁当を作ってきたことを知ったツナはここで…

「じゃあ、せっかくだしみんなで食べようよ。」

「「え…？」」

ツナの為に作ってははずの弁当であったが、ツナの

提案に穂乃果、海未、ことり、にこはシヨックを

受けてしまう。そして他のμsのメンバーと炎真と

雪穂と亜里沙は心の中で「ドンマイ…」と思っていた。

そして獄寺と山本は…

「さすが十代目！自分だけでなく俺たちにまで！」

「いいなそれ！」

この二人は空気を読まずそう言ってしまう。そしてこのあと4人の手作り弁当はみんなで食べることとなった。

だがそれでも、ツナに美味しいと言ってもらえて

4人はもの凄く嬉しい様子だったという。

#標的（ターゲット） 50 「予知巫女」

ツナがみんなの弁当を食べていると、同級生である京子がいないことに気づく。

するとツナはハルに尋ねる。

「そういえばさつきから思ってたんだけど京子ちゃんは？」

「京子ちゃんはツナさんが山を降りたあとに、ユニちゃんのところに行きましたよ。」

「ユニのところには？」

「はい。」

ハルがそう答えると、穂乃果が京子とユニという知らない名前に疑問符を浮かべる。穂乃果はツナにそのことを尋ねようとした時だった。

「ツナ君。」

「沢田さん。」

「お？噂をすればだな。」

山本がそう言うと、ツナたちの前にクラスメイトである京子とジツジヨネロファミリーのボスであり、元アルコバレーノであるユニが立っていた。

そして二人は、sのメンバーのほうを見て、自己紹介をする。

「初めまして。笹川京子です。」

「初めまして、sのみなさん。私ジツリヨネロファミリーのボスのユニといいます。」

「「「えーーーーー!?」」」

ユニがファイアのボスだということを知って、驚く、sのメンバーたち。

「こ、こんな可愛い子がファイアのボス!?」

「し、信じられません!」

「凜たちより年下だにや!？」

穂乃果、海未、凜がユニを見て叫ぶ。そしてユニは笑顔で、sにメンバーに…

「あの、もし差し支えないようでしたらサインを頂けますか？私ずつとファンだったんです。」

「え…でも!?!私たちは解散して…」

「いいんです、それでも。ダメならいいんですが…」

「い、いいよ！ねえみんな？」

穂乃果が尋ねると、全員サインすることを承諾する。だがみんなユニがマフィアのボスと知って緊張しながら、ユニが持ってきた色紙にサインしていく。

そして一方で雪穂と亜里沙はマフィアのことを知らないので困惑してしまっていた。

「マ、マフィアってどういうこと…?？」

「ここにいる人、全員マフィア…?？」

「あー…雪穂ちゃん、亜里沙ちゃん…実はね…」

この二人にはマフィアのことを言っていなかったもので、ツナはここにいる人たちのほとんどがマフィアだということを説明する。そして自分がボンゴレファミリーの

時期ボス候補にあげられていることを言う。

そして雪穂と亜里沙は…

「ツ、ツナさんがマフィアのボス…」

「ハラシヨー！マフィアって本当にいるんですね！」

「(雪穂ちゃんがかくともかく…亜里沙ちゃんはお姉

さんの絵里さんと違って反応が全然違う…)」

雪穂と亜里沙の反応を見て、ツナはそう思う。

そして京子は雪穂と亜里沙に…

「ツナ君は優しいマフィアだから大丈夫だよ。」

「(京子ちゃん！マフィアはいらないからー!)」

優しいマフィアという京子の言葉にツナは心の中でつつこむ。そして京子の言葉に亜里沙と雪穂は…

「そうなんですか？なら安心できるね雪穂。」

「まあ、私の未来のお義兄さんだし。大丈夫だよね。」

「ゆ、雪穂ちゃん！」

未来のお義兄さんという言葉にツナは顔を赤くしてしまう。そして京子は雪穂と亜里沙と仲良くなつていく。

一方でユニはμ、sのメンバーからサインを貰い、残すは絵里だけとなった。

「はい。」

「ありがとうございます。」

「にしてもあなたがマフィアのボスだなんて…」

「よく言われます。」

「その…裏社会でもμ、sって人気なの…？」

「どうでしょう？私はパソコンでずっと見ていましたから。」

「そう…それにしても、なぜか私とあなたは他人に思えないのよね…」

「奇偶ですね。私もです。」

「どうしてかしら？」

「さあ？私にもよくわかりません。」

なぜかはわからないがユニと絵里は妙な親近感を感じてしまう。

すると獄寺がユニに尋ねる。

「そーいやユニ。γの野郎はどうした？」

「γは白蘭と飲み比べしています。白蘭がγを挑発してしまつて…」

「何やつてんだあいつら…」

ユニからγのことを聞いて、呆れた表情になる獄寺。

そしてユニはμ、sのサインが貰えてご機嫌だった。

「それにしても嬉しいです。ずっと好きだったμ、sのみなさんに会えて、サインまで頂けるなんて。」

「ユニちゃんもスクールアイドルやって見たら！すつごく楽しいよ。」

「ありがとうございます穂乃果さん。でも私はジツリヨネロファミリーのボスとしてみんなをまとめていかなければならないんです。」

「そっかー…」

「でもやつぱり寂しいですね、μ、sのみなさんが

海岸で解散を宣言した姿を見た時、私びつくりしましたから。」

「「「「!?」」」」」

ユニの言った言葉にμ、sの全員驚愕してしまう。海岸でμ、sの解散を宣言した時、辺りには誰もいかなかったのだから。

そして驚いているμ、sのメンバーにユニは…

「私の一族は未来を見る力…つまり予知能力が使えるんです。だからμ、sが解散することを、穂乃果さんたちが解散を決定する前から知っていました。」

「予知能力…!?!」

「私たちが解散を決める前から…!?!」

「マファイアが予知能力…!?!」

ユニの言葉に海未、花陽、真姫は驚く。そしてにこがツナたちに尋ねる。

「ねえ…本当なの…?」

「はい。」

「ああ。」

「本当だぜ。」

ツナ、獄寺、山本がそう答える。そして予知能力ができるユニに希は感激していた。

「予知能力を使える人がこの世におるなんて…」

ウチ感激や…!」

「希ちゃんの占いは予知しているぐらいよく当たるけど…」

「絶対に当たるといふわけではありませんから…」

「ことりと海未が、そう言うとな穂乃果がとあることを思いつく。それは…」

「あ!ユニちゃんの能力で次のテストがどんな問題が出るかわからないかな!」

「それいいにや!」

「え…?」

穂乃果の提案に凜も賛成する。そしてこの提案に

ユニは目を点になつてしまう。

この穂乃果の提案に海未は…

「何を考えているんですか…カンニングですよ。」

「カンニングじゃないよ！直接テストの問題を見たじゃなくて、予知能力でテスト問題を知つたんだよ！」

「そうだにや！カンニングじゃないにや！」

「はあ…」

穂乃果と凜の言葉に海未は額に手をやり、呆れてしまう。他のメンバ―も同様である。

「あ、あの…」

「やらなくていいのよ。」

ユニの肩に手を置いて、そう言う真姫。穂乃果の

提案に呆れてしまつていたツナだが、ここである

ことを思いつく。

「(ユニの能力で俺が穂乃果ちゃんが…!!って何考えてるんだ俺…

!?)」

ツナも穂乃果とあまり変わらないのだった。

#標的（ターゲット） 51 「おにぎり好きな二人」

あのあとユニは自分のファミリーに戻って言った。

そして花見を開始して数十分。全員、それなりにお腹が膨れてくる中、花陽は…

「はあ美味しいー！やっぱりお米は最高だよー！」

そう言いながら、特大サイズのおにぎりを食べていた。そんな花陽を見てツナ、獄寺、炎真は驚いていた。

「花陽ちゃんって結構食べるんだね…」

「人は見掛けに寄らないっていいますし…」

「どうかどうやって作ったんだろうあのおにぎり…」

3人が驚いていると、次のおにぎりを取り出そうとする花陽だったが…

「あれ？もうない…あんなにたくさん作ったのに…」

「は、花陽…そのぐらいにしておいたら…」

「そうだにや…前みたいに体重が…それにかよちん今あんまり運動してないんでしょ…？」

「そ、そうだね…」

真姫と凜に言われて、花陽はそう言うが、まだまだ食べ足りず、表情が暗いままである。

するとそこへ…

「良かったら拙者のおにぎりを食べますか？」

「バジル君！」

「お久しぶりです沢田殿。遅くなつてすみません。」

そこに現れたのはボンゴレ門外組織C H D E Fに所属しているバジルであった。最初は忙しいだろうと思つてツナはバジルを花見に誘うことを断念していたが、誘つたところ多少遅くはなるが、花見に来てくれるという返事が帰ってきた。

そして初めて見るμ、sのメンバーを見て、バジルは自己紹介する。

「初めまして。拙者はバジルと言います。どうぞよろしくお願ひします。」

「この時代に拙者つて…あんた何時代の人よ…」

拙者という一人称を使うバジルにこは呆れてしまう。

そしてμ、sのメンバーが自己紹介すると、バジルはバッグの中から弁当箱を取り出す。そこには少し大きめのおにぎりがぎゅうぎゅうに詰められていた。

それを見た花陽はもの凄く明るい表情になり。

「お、おにぎりがこんなにも!?輝いて見えます!」

「まだまだ、他の弁当箱にも入っていますよ。」

「ほ、本当に食べていいんですか!」

「はい、どうぞ遠慮なく。」

「い…いただきまーす!」

そして花陽とバジルは幸せそうな表情でおにぎりを食べていく。

そんな二人を見て、花陽とバジルが似た者同士だと思ってしまう。

「さっきまで花陽ちゃん、あんなに暗い顔してたのに…」

「一瞬で明るくなったわね…」

「お米に対する執着心がどっちも凄いにや…」

「っーか、おにぎりばかりで飽きねえのかよ…」

幸せそうにおにぎりを食べる花陽とバジルを見て、ツナ、絵里、凜、獄寺が呟く。

そして5分もせずに二人、バジルの作ったおにぎりも全部平らげってしまう。

そして食べ終わった二人は…

「まだ食べ足りないです…もつとお米を…」

「わ、私も…」

「まだ食べる気!」

花陽とバジルの言葉にツナがつっこむ。あまりの二人の食欲に全員驚愕していた。

「す、凄い食欲…」

「あれだけ食べて、まだ食べ足りないんだ…」

「どこまで食べたら気がすむんやろ…」

「そもそも二人の胃袋はどうなってるんでしよう…」

「どうしよう…もう弁当の残りもないし…」

「ハヒ…困りました…」

穂乃果、ことり、希、海未、京子、ハルが呟く。

するとステージ上からリボーンの声が聞こえてくる。

「このあとおにぎりの大食い大会を開催するぞ。自信のある奴はエントリーしてくれ。んじゃ待ってるからな。ちやおちやお。」

リボーンがおにぎりの大食い大会の開催を知らせる。

そしてこのお知らせを聞いた花陽とバジルは…

「おにぎり…?」

「大食い大会…?」

もの凄い死ぬ気の炎ならぬ、やる気の炎が出ていた。

そんな二人のに誰もが近づけなかった。

「な、なんか凄いプレッシャーを感じるんだけど…」

「ぼ、僕も…」

「ど、どうするにや?こ、これは止めたほうがいいのかにや…?」

「どう見ても無理ね…」

ツナ、炎真、凜、真姫がそう言うが、もうバジルと花陽はお米のこ
としか頭がない。

「行きましよう花陽殿。」

「はい!バジルさん!」

今二人の戦いが始まろうとしていた。この大食い

対決、一体どちらが勝つのであろうか!?

#標的（ターゲット） 52 「大食い大会」

そして15分後、ステージの上に机と椅子が用意され、机の上に大量のおにぎりに乗った皿が置かれている。

そしておにぎりの乗った皿の前に、花陽とバジルは早く食べたそうな表情をしていた。

そしてリボーンが実況を始める。

「さあ始まりました！大食い選手権！今回の挑戦者はボンゴレ門外組織CHDFEのバジル選手、元スクールアイドル、sの小泉花陽選手です！」

リボーンはいつもとは違う口調で、実況を始める。

そしてリボーンは今回の大食い選手権のルールを説明を始まる。「ではルールを説明をします。この大食い選手権は制限時間30分以内どちらがより多くのおにぎりを食べたかを競います。ちなみにおにぎりの具は梅干しやおかか、鮭に明太子などたくさん具材がランダムで入っております。」

リボーンが大食い選手権のルールを説明していく。そしてルールを聞いてツナたちはどちらが勝つか予想していた。

「どっちが勝つだろう？」

「どうだろな？俺にも予想がつかねえな。」

「普通に考えれば、花陽のほうが不利ね。自分の作ってきたおにぎりに加えて、バジルって子のおにぎりも食べたんだし。」

「でも、かよちゃんの実力はあんなもんじゃないや！」

ツナ、山本、真姫、凜がそう言う。そしてリボ

ーンは二人のプロフィールを話し始める。

「バジル選手はボンゴレ門外組であるCHDFEに所属しており、上司である沢田家光からは一目置かれて

いる存在です。」

「お？ツナの親父が一目置いているってよ。」

「やるなバジルのやつ。」

「なんか微妙…」

山本と獄寺はリボーンの言葉を聞いて感心するが、ツナは複雑な気持ちであった。

そして次にリボーンは花陽のプロフィールに

ついて話し始める。

「花陽選手はスクールアイドルである元々、sのメンバーだったそうです。趣味は絵を書くこと、子供の頃の夢は絵本作家だったそうです。」

「何でそんなことまで知ってるのー!?!」

リボーンの言葉に花陽は恥ずかしさのあまり顔を赤くしてしまう。

そして凜が驚く。

「な、何でかよちんのこと知ってるのにや!?!」

「気にしちゃダメだよ凜ちゃん…リボーンはいつもどこからか情報を手にしてくるから…」

「あなたの家庭教師って本当に何者!?!」

リボーンの情報収集力に絵里は驚いてしまう。そして大食い選手権が始まる。

「それじゃ始めるぞ。」

そう言うとりボーンは首に巻いていた笛で、開始の合図の笛を鳴らす。

ピーーーーー!!

「いただきます。」

バジルと花陽は両手をあわせてそう言うと、目にも止まらぬ速さでおにぎりを口にいれていく。

「は、早い!?!」

「なんて早さなの!?!」

「どちらも負けていません…」

「なんか花陽ちゃんもバジル君も今までにないぐらい幸せ表情な気がする…」

「それにしても気のせいかしら花陽…ラブライブの時より生き生きし

てない…?」

「ウチもそう思うわ…」

穂乃果、にこ、海未、ツナ、真姫、希が二人の
食べている姿を見て呟く。

そうこうしているうちに15分が立ち、残り時間
は半分になる。さすがのバジルも花陽も食べる
ペースが落ちてくる。

するとリボンが実況をする。

「残り時間が半分となりました。両者さすがに食

べるペースが落ちてきました。あ!言い忘れてい

ましたがこの勝負で勝った人にはお米1年分が贈

呈されます。」

「お米1年分!」

お米1年分と聞いて急に目を輝かせるバジルと花陽。さっきまで
食べるペースが落ちていたが、こ

こにきてまた食べるペースが早くなっていく。

「す、凄いです…ここでもた食べるペースがあがりました!」

「これがお米の力…」

「ハラショー…」

「この戦い、どうなるんだろう…?」

「予想できない…」

ハル、炎真、絵里、亜里沙、ことり、雪穂が驚く。

そして制限時間である30分が経過する。そして二人が食べたお
にぎりの数を集計されていく。

そしてついに結果が発表される。

「集計が終わりました、それでは結果発表です……」

「…」

「結果はなんと…引き分けです!」

「ええ!」

引き分けという結果を聞いて花陽とバジルは驚く。花陽の会場に
いる人たち全員も動揺である。

「というわけで賞品であるお米1年分は、二人で分けるということになりませう。」

「そういうことなら仕方ないですね…花陽殿はどうですか？」

「私もいいです。」

リボーンの提案にバジルと花陽は納得する。そしてここでリボンが大食い選手権の終わりを告げる。

「以上で大食い選手権を終わりだぞ。まだまだイベントはあるからな、楽しみにしてろよ。」

#標的（ターゲット） 53 「同じような過去」

大食い選手権を終えて、花陽とバジルはツナたちのところへ戻ってくる。

「いやー凄かったよバジル君。」

「ありがとうございます沢田殿。といつても食べて

ている時のことは覚えてないんですよね、勝つこ

とよりおにぎりを食べられることが嬉しかった

もので。」

「アハハ…」

バジルの言葉にツナはただ苦笑いすることしかできなかった。

すると穂乃果がツナに尋ねる。

「ねえツナ君。リボン君はまだまだイベントがあるって言ってたけど何があるの?」

「いや…知らないんだ…」

「え?知らないの?」

「うん。あいつそういうのは絶対に教えてくれないから。」

「そうなんだ。でも何があるかわからないっていうのも面白そうだなー。」

これから何のイベントがあるか楽しみな様子の穂乃果。

そんな穂乃果を見てツナは微笑んでいた。

すると辺りからいい臭いがし始める。

「この臭いは…ラーメンだにゃー!」

「でもどうして…?」

突然ラーメンの臭いがしてきたことに驚く凛と海未。

すると獄寺が辺りを見てあることに気づく。

「み、見てくださいー!十代目!」

「な、なにこれー!?!」

「すげえなのなこれ。」

獄寺、ツナ、山本が言うのと、なんといつの間にか花見会場に色々な屋台が立っており、花見会場はお祭りみたいになっていた。

するとりボンがステージからアナウンスする。

「えー、今日はボンゴレ式花見大会ということぞ

色々な屋台が出店しているぞ。ここに出ている

店は全部タダだぞ。代金はボンゴレが負担する

と9代目が言ってくれたぞ。」

「ボンゴレが負担…」

「9代目…人が良すぎでしょ…」

ボンゴレが負担してくれると聞いて炎真とツナは驚いてしまう。

そしてそれを聞いた穂乃果とハルは。

「全部タダ!? すっごーい!」

「あ! クレープ売っています!」

「本当!? 一緒に行こうハルちゃん!」

「はい!」

そう言うのと穂乃果とハルはクレープの屋台に言ってしまった。

そして二人のあとをことりが後を追う。

「ま、待って! 穂乃果ちゃん! ハルちゃん!」

「ちよ、ちよつと待っててください!」

そして穂乃果とハルを追ったことりを、さらに海未が追っていく。

すると亜里沙がとある屋台を見て驚く。

「あ! あそこの屋台! ボルシチ売ってるよ!」

「ええ!?!」

「行こうお姉ちゃん! 雪穂も!」

「ちよつと亜里沙!」

「そ、そんなに焦らなくても!」

そう言うのと亜里沙は絵里と雪穂の手を引っ張って行ってしまふ。

そして凜も花陽と真姫の手を引っ張って行く。

「かよちゃんも真姫ちゃんも一緒に行くにゃ!」

「ちよ、ちよつと凜ちゃん!」

「わ、私はまだ行くなんて言っていないわよ!」

凜、花陽、真姫の後ろ姿を見てにこも屋台に向
かっていく。

「あれ？にこさんも行くんですか？」

「悪い？それにせっかくタダなんだし、家族に何か持って帰ってあげ
るのよ。」

そう言うと、にこは再び屋台に向かって歩いて向かっていく。

「十代目！せっかくだし俺、何か買ってきますよー！」

「僕も何か買おうかな…」

「んじや俺も。」

「拙者も。」

「私はユニちゃんを誘って行ってくるよ。」

獄寺、炎真、山本、バジル、京子がそう言うと屋台のほうへ向かっ
ていく。

そしてツナと希だけが残る。

「みんな行っちゃった。」

「残っているのはウチらだけやね。」

「希さんはいいんですか？行かなくて？」

「ウチはもう少しあとで行く予定やから。」

「そうですか…あの…どうですか？楽しいですか？」

「うん。もちろん楽しいよ。」

「良かったです。」

楽しいと希が言ってくれて、内心ホッとするツナ。

すると希は高校の時のことを話し始める。

「スクールアイドルとして活動した日々も最高やったど、こうやって
何も考えずに遊ぶのも最高やね。」

「やっぱり高校の時は廃校の話があったから、こんな風に遊ぶ暇とか
はなかったんですか？」

「なくはなかったけど、どうしても廃校のことやラブライブ優勝とか
が頭から離れることがなかったから…」

「そうですよね。」

ツナがそう言うと、希は自分の過去について急に

話し始める。

「ウチ、小学校の頃から転校が多くて…それで高校まで友達が全然おらんかったんよ。」

「え？そうなんですか？」

「うん。でも高校になってエリチと出会って…穂乃果ちゃんたちと出会って…本当に楽しかったんよ…」

「希さん…」

「ウチったら何でこんなことを…ごめんねツナ

君。急にこんなことを話して。」

「気にしないでください。それに希さんの気持ちわかりますよ。」
「え？」

「俺、勉強も運動もダメでダメツナって呼ばれ

てて…そのせいで友達って呼べる人なんていま

せんでした。」

「そうなん…」

「でもあいつに…リボンと出会って色々と世界
が変わりました。凄いメチャクチャで、何度も

死にかけたりもしたけど…でも楽しくて。あい

つが家庭教師かてきょうで良かったって思えて。」

「(ツナ君って…ウチと少し似てる…)」

自分と似たような感じの過去を持つツナに、希は少し驚いていた。
すると希はクスクスと笑ってしまう。

「なんかツナ君と出会えて良かったわ。」

「きゅ、急にどうしたんですか…？」

「ううん。気にせんという。」

「はあ…」

「ねえツナ君って彼女とかおるん？」

「い、いませんけど…！」

少し顔を赤くしてそう答えるツナ。すると彼女がいないと知った
希は…

「ウチ、年下の男の子がタイプなんよ。」

「そうなんですか…それでそれが…?」

「それではつき言つてツナ君は、ウチからしたら
好みなんよ。」

「え!?!」

「だからウチと付き合つて欲しいって思つてるんやけど…」

「えー!?!?!?!」

「なーんてね。冗談。」

「で、ですよね! あーびっくりした…」

希の言ったことが冗談であるとわかつてホツとす
るツナ。

一方で希はツナの反応を見ながらこんなことを思っていた…
（年下がタイプなのは本当やけどね。）

#標的（ターゲット） 54 「ますます」

しばらくの間、ツナと希の二人つきりになるが、クレープを買い終えた穂乃果、ハル、海未、ことりが帰ってくる。

「ただいまー。」

「あ、お帰り。」

「あれ？他のみんなは？」

「俺と希さん以外はみんな屋台に行っちゃったよ。」

穂乃果が他のメンバーのことを尋ねるとツナが答える。
すると希が後ろからツナに抱きついてくる。

「その間はウチとツナ君の二人つきりやったんよ。」

「の、希さん!？」

「!?!?!」

急に抱きつかれて顔を真っ赤にするツナ。そしてそれを見た穂乃果、海未、ことりは動揺するが、その中でもハルは希に向かって叫ぶ。

「ちよつと！何してるんですか!」

「何って？ウチはただツナ君のことを驚かそうとしただけやん。」

「だったらツナさんから離れてください!」

「でもこんな可愛い反応するんよ。こんな反応させられたら離れたくなくなるやん。ねえツナ君?」

「だ、だから…!その…!えつと…!」

希がいたずらっぽい笑みで尋ねるが、ツナは希に抱きつかれことによって、緊張のあまり話すことすらままならない状況である。そんなツナを希は見て「可愛い」と呟く。

そしてここで今の今まで黙っていた穂乃果、海

未、ことりが希に言う。

「の、希ちゃん!このままじゃツナ君が死んじゃうよ!」

「そうです!そ、それにハレンチですよ希!」

「お、お願い希ちゃん！これ以上ツナ君を苦しめないで！」

動揺のあまり穂乃果、海未、ことりは意味のわ

からないことを言ってしまう。その3人の反応に

希は「仕方ないなあ」と言っつてツナから離れる。

だがこの時、希は気がついてしまった。この3人

がツナに好意を寄せているということに。

「本当に面白い子やね。穂乃果ちゃんやことりちゃんにだけじゃなくて、あの海未ちゃんまで…ますますツナ君のこと知りたくなつたわ。」

ここで希はさらにツナに対して興味を持つ。そして希から解放されたツナは。

「はあはあ…あれ？俺どうしてたんだっけ…？」

希抱きつかれたことによつて頭が真っ白になつてしまい、ツナはほんの少しだけ記憶を失つてしまつていた。

そんなツナをハルが心配する。

「あれ…ハル？それに穂乃果ちゃんも、海未ちゃんも、ことりちゃんも何でここにいるの？」

「ツナ君!？」

「記憶を失っているじゃないですか！」

「しつかりしてツナ君！」

「えっと…確か俺…!？」

穂乃果、海未、ことりがそう言うつとツナは何があつたかを思い出そうとするツナ。そしてさつき自分の身になにがあつたかを思い出すとツナは再び顔を真っ赤にさせる。

そして何よりツナにとつて悲惨だつたことは…

「(穂乃果ちゃんに見られてたつてことじゃん！

ど、どうしよう!)」

希が抱きついてた時に、そこに穂乃果がそこにいたこと、それを穂乃果に見られたことが何よりの災難だつた。

そんな様子のツナを見て穂乃果が…

「ツナ君、大丈夫？」

「い、いや…その…大丈夫だからー！」

「ツナ君?! どうして逃げるのー!? ねえってばー！」

恥ずかしさのあまりその場から逃げてしまうツナ。そして逃げたツナを追いかけいく穂乃果。

そんな二人を見て希は

「あちゃー…ちよつとやりすぎやったかな？」

ほんのちよつとだけ反省するのだった。このあとなんとか誤解は解けたそうです。

#標的（ターゲット） 55 「スポーツ対決」

そして全員、屋台から戻ってくる。リボーンがステージ上から次のイベントのお知らせをする。

「次はスポーツ対決だぞ。運動に自信のある奴は参加してみてください。さっきのイベント同様、賞品も用意してるぞ。」

「次はスポーツ対決か。山本、参加してみれば?」

「スポーツ対決…凧ちゃん参加してみたら?」

スポーツ対決と聞いてツナは山本に、花陽は凧に参加してみないかと尋ねる。

ツナと花陽にそう言われて山本と凧は…

「確かに面白そうだな。参加してみるか。」

「じゃあ凧も参加するにや!」

スポーツ対決に参加することを決意する。そして

二人はステージに向かって行き、リボーンに参加

することを伝える。

そして。炎真が呟く

「山本君、スポーツ得意だね。」

「スポーツが得意じゃなくて、スポーツだけが得意の間違いだろ。」

炎真の言葉をそう言うのと、獄寺がそう言う。この獄寺の発言にツナは「あいかわらずだな…」と黙ってしまう。

すると花陽が凧のことについて話す。

「凧ちゃんも運動神経抜群ですよ。バク転とか普通にできるし。」

「へーそうなんだ。一体どうなるんだろう?」

凧も運動が得意だと聞いて、ツナはこの戦いの行方が気になりはじめる。

そしてスポーツ対決が始まろうとしていた。

「さあ始まりましたスポーツ対決! 今回の参加者はボンゴレファミ

リーの山本武選手とスクールアイドルのメンバーである星空凛選手です！」

リボンが口調を変えて実況を始めていく。まず大食い選手権と同様にまず山本と凛のプロフィールについて話し始める。

「まず山本武選手はボンゴレファミリーの雨の守護者であり、並盛高校の野球部の主将キャプテンでもありプロ野球選手としての活躍を期待されています。また野球だけでなく剣術の心得もあり、生まれながらにして殺し屋ヒットマンとしての才能を持っており、裏社会での活躍も期待されています。」

「殺し屋ヒットマンとしての才能って…」

「それって凄いことなのかしら…？」

山本のプロフィールを聞いて、にこと真姫が複雑な気持ちになりながらつつこむ。

「やっぱり山本君ってあの山本君だったのね。」

「知ってるの絵里ちゃん？」

山本のプロフィール聞いて絵里が気づく。そして穂乃果が絵里に尋ねる。

「私が生徒会長をやった時に、廃校の阻止するために他の学校のことを調べてただけど、並盛高校のホームページを見た時に山本君かれと水野薫っていう人のことが書かれてたのよ。」

「へー。山本君って凄いんだねー。」

絵里の話を聞いて山本の凄さを知る穂乃果。すると炎真とツナが山本とシモンファミリーの水野薫の並盛高校野球部での活躍を話し始める。

「山本君と薫が入ってから並盛高校ウチの野球部って強くなったんだよね。」

「うん。1年の時にはもう二人とも大会に出てたよね。それで次の年から並盛高校ウチの野球部に入りたっていう人が増えたっていう話じゃなかったっけ？」

「そうそう。言ってたよね。」

ツナと炎真が山本と薫のことを話していると、リボンが凛のこと

について話し始める。

「星空凜選手は音ノ木坂学院の生徒であり、スクールアイドルμ'sのメンバーでもあります。スクールアイドルの中ではバネと運動神経はトップクラスでもあり、私の目が間違っていないければ、彼女も殺し屋ヒットマンしての才能があると私は睨んでいます。というわけで凜選手、殺し屋ヒットマンになってみませんか？」

「何でそうなるにや!? 凜は殺し屋ヒットマンにはならないにや!」

リボーンに殺し屋ヒットマンにならないかと誘われたが、凜は勧誘を断る。

そしてリボーンが今回のスポーツ対決のルールを説明する。

「今回は3つのスポーツで対決し、3種目のうち2種目勝ったほうが勝ちとなります。勝った選手には並盛ラーメンで使えるラーメン無料券5枚を贈呈します。」

「ラーメン無料券!?!」

「お? いいなそれ。」

ラーメン無料券と聞いて凜と山本は興味を持つ。

そして今、ボンゴレの中でトップクラスの運動神経を持つ山本と、

スクールアイドルの中でトップ

クラスの運動神経を持つ凜の戦いが始まるうとしていた。

はたして勝つのは山本か凜か!?

#標的（ターゲット） 56 「第1回戦」

「それではいきましょう！スポーツ対決1回戦

は…バドミントン対決です！」

「バドミントンか…俺やったことねえな。」

「凜もにや。」

リボンから第1回戦の競技がバドミントンだと

告げられる。だが山本も凜もバドミントンをや

ったことがないと言う。

それでも山本は前向きに考える。

「考えても仕方ねえか。別に大会とかじゃねえし気楽にいきましょう。」

「そうだにや！…こういうのは楽しんだほうが勝ちだにや！」

山本の言葉に凜も前向きに考えるようになる。

そしてリボンからバドミントン用のラケット

と羽を受け取る山本と凜。

そしてステージ上にネットが設置され、山本と凜はポジションにつく。

「ルールは普通のバドミントンと一緒だぞ。21点先を取ったほうが勝ちだぞ。ただし勝負は1セットマッチだ。それじゃ試合開始だ！」

ピーーーーー

リボンが試合開始の合図の笛が鳴らすと、山本が凜に向かって言う。

「気楽にはいくって言ったけど、でも負ける気はねえぜ。」

「それは凜も同じだにや！」

「じゃあいくぜ。そら！」

山本が羽を打つ、羽は普通で凜のコートに飛んでいく。そしてそれを凜は打ち返す。

「これくらいなら余裕だにや！」

そして再び、羽が山本のコートに飛んでいく。いくら運動神経が良

くてもバドミントンをやったこ

とのないので思ったより普通に終わるのだ

ろうと、この試合を見ていた人は思っていた。

だがしかしラリーを続けていくにつれて、山本と凜の中に眠っている力が解放されていく。

「そらそらそらそらー!」

「にやにやにやにやにやー!」

バドミントンの羽が目にも止まらぬ速さで、山本と凜のコートを رفتたりきたりしている。あまりの速さにツナと真姫は啞然としてしまう。

「す、すげえ…さすが山本…そしてそれに喰らいつく凜ちゃんもすげえ…」

「…というかあの二人、本当にバドミントンの初心者なわけ…?」

山本と凜のプレイに「本当にバドミントンを初めてしたのか?」と思ってしまうツナと真姫。

そして獄寺は…

「おい山本!負けてんじやねえぞ!負けたら果たすぞ!」

「ご、獄寺君!ダイナマイトだけはダメだから!落ち着いて!」

懐からダイナマイトを取り出して叫ぶ獄寺。そしてそれを止めるツナ。

そして獄寺のダイナマイトを見た後、Sのメンバーは…

「あ、あれって…もしかして…」

「ダ、ダイナマイト…?」

「ほ、本物かな…?」

「何で持つてるん…?」

「ば、爆発しないよね…?」

「爆発したら私たちも終わりよ…」

海未、絵里、ことり、希、花陽、真姫が獄寺のダイナマイトを見て
呟く。

そんな中で穂乃果が。

「うわー!それ花火だよね!」

「違うよ!?穂乃果ちゃん!」

「ねえねえ見せて見せて!」

「てめえ!離れろ!」

穂乃果がかつての山本と同じように、獄寺のダイナマイトを花火だと思ってしまう。穂乃果の行動に、sのメンバーは「あれを花火と思うなんて…」と心の中で思ってしまう。

そして試合は20-19でなんと凧がリードにしていた。

「はあはあ…あと1点だにや…」

「星空つていったつけ?お前凄い運動神経だよなー。」

「(す、凄いにや…あれだけ動いてあんまり息がきれてないにや…リードはしても油断できないにや…)」

「じゃあ、いくぜ!」

山本が羽を打つと、再び高速のラリーになる。そして途中で凧がスマッシュの打ちやすい高さに、羽を打ち返してしまう。

「しまったにや!」

「もらった!」

そして山本がスマッシュを叩きこむ。もうダメだと思つた凧だった…がしかし羽は凧の上空を飛ん

でいき、羽は完璧に場外に飛んでしまう。

「やべー!力いれすぎた!」

「え…」

一回戦、勝者は星空凧。

#標的（ターゲット） 57 「次の競技」

山本のミスによって、凧は第1回戦を勝ち抜く。

「スポーツ対決第1回戦、勝者は星空凧選手です！」

リボンが叫ぶと、会場中から拍手と歓声が送られる。

その歓声と拍手に凧は少しだけ照れていた。

凧が勝者したことに花陽は大量の涙を流していた。

「凧ちゃんが…凧ちゃんが勝ったよー！」

「泣きすぎよ花陽…全国大会で優勝したわけじゃないんだから…」

あまりの涙を流している花陽に、真姫は呆れてしまっていた。

そして山本と凧の試合をハル、バジル、炎真、京子、絵里、穂乃果が絶賛する。

「凄い試合でした！」

「さすが山本殿です。」

「二人とも凄かったね。」

「なんかこっちまでドキドキしちゃった。」

「さすが凧ね！」

「凧ちゃん！次もファイトだよー！」

みんなが絶賛する中、獄寺はダイナマイトを指と指の間に挟んで、自信の必殺技であるロケットボムを放とうとしていた。

「山本の野郎、十代目の顔に泥を塗りやがって！ロケット…」

「ま、待って獄寺君！」

ロケットボムを放とうとする獄寺を止めるツナ。

勝手な推測だが、このままロケットボムを山本

に放つてもバドミントンのラケットでダイナマ

イトを撃ち落としてしまうのではなからうか？

そしてツナと獄寺のほうを見て海未は思ってしまう。「なぜあんな

怖そうな獄寺がツナに従っているのだろうか？普通、逆ではないのか？」と。

そしてステージ上では、山本が笑顔で少し悔しがっていた。

「いやー。負けちまったぜ。」

「でも最後のスマッシュが決まったら、凧は負

けてかもしれないや。」

「そうかもしれねえけど、勝ったのは星空の実力だけ。ほら運も実力のうちって言うだろ。」

「それにしても、最後のは珍しい失敗だったにや。」

「あれか？あれは野球のクセでさ、あの時の羽が

野球ですつげえ打ちやすい球だって思ってたよ、

それでおもいつきり打ったら、力が入りすぎて

場外になっちゃったわけ。」

「なるほどにやー。」

最後の山本らしくないミスの原因がわかって、
納得する凧。

そしてリボンが2回戦の競技を発表する。

「じゃあ続いて2回戦を行います！第2回戦の競技は…」

「…」

「一体、次の競技がなんだろう？」と思い山本と

凧はドキドキしていた。

そして2回戦の競技は…

「2回戦の競技はレオン争奪戦です！」

「な、何だにや？」

レオン争奪と聞いて、凧は一体何のことかわからず疑問符を浮かべる。

そしてリボンが今回の競技について説明する。

「今から俺の相棒である形状記憶カメレオンを、

この並盛山に放ち、先にこのレオンを見つけた

ほうが勝ちというものです。」

そう言うとりボンはレオンをレオンターボに変形させると、レオ

ンターボとなったレオンは並盛山の中に走っていく。

そんなレオンを見て、凜は驚く。

「カメレオンが変形して走っていったにや!？」

「なお観客の皆さんには、二人の様子がわかる

ように並盛山に設置してある監視カメラからの

映像をご覧になってもらいます。」

驚いている凜を無視して、リボーンが説明を続けていく。

そしてレオン争奪戦のことについて聞いたツナと炎真は…

「レオン争奪戦って…スポーツなの…?」

「まあ山の中を走りまわるから、スポーツなんじゃない…たぶん?」

レオン争奪戦がスポーツなのかどうか話していた。すると穂乃果

がレオンのことについて尋ねる。

「ねえツナ君。ずっと思ってたんだけどリボーン君の帽子にいつつも

乗ってるカメレオンって何なの?なんかさっき変形したよね。」

「あれはリボーンの相棒のレオンだよ。確か形状記憶カメレオンで、

1度見たものなら何でも変形できるんだよ。」

「あのカメレオンは、そんなに凄いカメレオンだったのですか…」

「ただのペットかと思ってた…」

レオンがそこまで凄いカメレオンだと思わなかつ

たので、海未とことりは驚いた。

そしてレオンについて希は…

「スピリチュアルなカメレオンってことやね。」

「そもそもどこに生息してるのよ…?形状記憶カメレオンなんて聞いた

ことがないわよ。」

「世界にはまだまだ知らない生物が存在するってことじゃない。たぶ

ん…」

にこと絵里がそう言うが、結局のところレオンの

ことはツナでさえ詳しく知らない。

そして第2回戦レオン争奪戦が今、始まろうとしていた。

#標的（ターゲット） 58 「第2回戦」

そしてステージにモニターが設置され、レオン争奪戦が始まる。

「レオンには半径3km以内を走るように事前に言っておいた。だから半径3km以上の所へはいないからな。」

「OK。」

「わかったにや。」

レオンのことについてリボーンが山本と凜に教える。

そしてリボーンが笛を手にかけると、第2回戦開始の合図を鳴らす。

ピーーーーーー！

「いくぜー！」

「行くにやー！」

山本と凜はステージから走って、レオンターボのいる森の中に入っていく。そして二人は途中で山の中で別れて、レオンターボを探しに入る。

「それにしても山の中に監視カメラを用意してるって……どこまで準備してるの?」

「さあ……中学の時から一緒にいますけど、リボーンあいつの考えてることは全くわからないんですよ……ただ一つ言えるのは絶対にこの競技は普通に終わることはないってことです。」

絵里がツナに尋ねる。そしてツナはこの競技がただレオンターボを捕まえるだけで終わると思っただけではいかなかった。

そしてツナの予感的中する。

一方、レオンターボを探す凜は。

「半径3km以内って言ったけど、一体どこにいるのかにや?」
走りながらレオンを探す凜、すると遠目だがレオンターボが走って
いくのが見える。

「あー!いたにや!待つにやー!」

走っていくレオンターボを見つけて、追いかけていく凜。レオン
ターボを追いかけっていると突然、

地面が崩れる。どうやら落とし穴らしい。

だが落とし穴に、いち早く気づいた凜は落とし穴に
落ちずにすんだ。

「お、落とし穴!?何でこんなところ!?」

凜が驚いたのも束の間、凜の横から何かが飛んでいく。

それに気がついた凜はすばやくしゃがむと、近くの木に竹が突き刺
さる。

「一体、この森はどうなってるのにやー!?!」

そしてモニターから凜の様子を見つけたツナたちは。

「おーっと!急に凜選手に何かが襲う!一体この森はどうなっている
のかー!?!」

「絶対にお前がやったんだろ!」

ステージ上で実況するリポーンに向かって叫ぶツナ。やはりツナ

の嫌の予感は当たってしまった。

「やっぱりリボーンの奴、何か考えてたー！絶対に凜ちゃんをボンゴレに勧誘するつもりだー！」

「ええ!?凜ちゃんがマフィアになっちやうんですかー!?!」

ツナの言葉に花陽は驚いてしまう。他の^μsのメンバーも同様である。

だがここでバジルは違和感を感じる。

「ですがリボーンさんは女性には優しい人です。

なのにこんなことをするだなんて…」

「それほどリボーンさんは、あの凜の^{猫女}ことを高く評価してるってことじゃねえか?」

バジルの言葉に、獄寺はリボーンが凜のことを高く評価しているのではないかと推測する。

一方で山本も、凜と同じくりボーンの仕掛けた罠にかかっていた。「おっと危ね!」

無数の竹が山本を襲うが、山本はなんなく避けていた。そして飛んでくる竹を一本、素手で受け止めると。

「時雨蒼燕流特式十一の型、^{ベツカタ・デイ・ローン・デイネ}燕の嘴!」

いつもの時雨金時のかわりに、竹による高速の突きで全ての竹を打ち落とす。

「お?意外にいけたな。」

そしてモニターで山本の時雨蒼燕流を見ていたツナは。

「すげえ山本…刀のかわりに竹で時雨蒼燕流を…」

「もしかして山本さんは…侍なんですか!？」

「確かに剣は使えるけど侍じゃないよ…」

目をキラキラと輝かせさながら尋ねてくる亜里沙。それにしてもツナは違うと言う。

だが山本の時雨蒼燕流に穂乃果、海未、真姫、にこは驚いていた。

「凄いなー。山本君って本当に剣が使えるんだ。」

「いや…いくら何でも凄すぎですよ…」

「そもそも高校生よね…」

「さすが生まれながら殺し屋ヒットマン…？」

山本の時雨蒼燕流に驚いていると、ことりがツナのことを話す。

「でもツナ君も戦ったらかっこいいよね。額にほ…」ことりちゃんーん！それはダメー！あ…ごめんツナ君。」

「あ、超死ぬあ気モードれは二人だけの秘密だつて！」

「ご、ごめんねツナ君…つい…」

「ああ…ごめん！俺のほうこそ言いすぎちゃって…」

強い口調でことりを困らせてしまったツナは、す

ぐに我に帰ってことりに謝る。

すると穂乃果が二人に尋ねる。

「ねえ、二人だけの秘密って何?」

「え…」

「そういえばことりちゃん、何か隠してることがある感じがあったよね?もしかして今の二人だけの秘密と関係があるの?」

「(い、いつになく鋭い!)(」

ジト目で尋ねて来る穂乃果に、ツナとことりは驚いてしまう。

するとここで凜に動きがあり、そのことについてリボンが実況する。

「ここで凜選手に動きがあったようです！」

「あー凜ちゃんに何か動きがあったらしいよー！」

「ほ、本当だねー！な、何があつたんだろうー!?」

棒読みそう言うツナとことり。穂乃果にジト目で見られていることに気づいてはいたが、二人はずっとモニターを見ていた。

そして二人の秘密という言葉聞いて海未とにこは…

「ふ、二人だけの秘密!?!いい、一体何を…!?って私はまた!?!)」

「ま、まあ…同級生なんだし!秘密の一つや二つぐらい…!)」

平常心を装ってはいるが、海未とにこは心の中ではメチャクチャ動揺していた。

そして凜は。

「にやにやにやにやにや!」

次々に飛んでくる竹を、体術で次々と撃ち落としていた。

「にやちやー!」

そして竹を全て撃ち落とすと、「にやちやー!」と叫びながら謎のポーピングをとっていた。

「なんか凜ちゃんが…段々とおかしくなってる…」
「そもそも凜って…体術なんて使えたかしら…?」
「にやちやーって叫んだわよ…!」

段々とおかしくなっている凜を見て、花陽、絵里、真姫が呟く。

そして山本と凜は次々とリボーンの罠を突破していく。
すると二人は別の場所ではあるが、遠目でレオンターボを確認す
る。

「いたにゃ！今度こそ！」

「見つけ！」

凜と山本はレオンターボを見つけて走り出す。そ

して二人が合流する。

「あ！」

「よっ！」

「負けないにゃ！」

「競争だ！」

山本と凜は全力疾走でレオンターボを追いかける。そしてレオン
ターボにあと少しで近付くというところで、二人はヘッドスライディ
ングし、レオンターボを掴む。

そしてレオンターボを先に掴んだのは…

「よっしや！捕まえたぜ！」

レオンターボを捕まえたのは山本だった。

第2回戦 勝者は山本武。

第2回戦のレオン争奪戦は山本の勝利。そして第3

回戦が始まろうとしていた。

「いやー、それにしても面白い競技だったよな。」

「色々仕掛けがあつて面白かつたにや。」

山本と凜はレオン争奪戦を楽しんだ様子である。

最初はリボーンの仕掛け罠に、驚いていたも凜で

あつたが途中からは楽しんでしまつていた。

そしてリボーンは…

「（やはり俺の目は間違つてなかつたぞ。凜は山本にも負けねえぐらの殺し屋ヒットマンとしての素質があるぞ。ボンゴレに勧誘すれば、いい殺し屋ヒットマンになれるぞ。）」

普段なら女性を殺し屋ヒットマンにするなど言わないリボーンだが、どうやら凜は特別らしい。

そしてリボーンは次の競技を発表する。

「さて次で決着がつきます！第3回戦はバスケの

シュート勝負です！」

「バスケ!? やつたにや！」

「バスケか…体育でやったことがある程度だな。」

自分の得意な競技であるバスケであり凜は喜ぶ凜、それに対して山本は何も動じていなかった。

そしてリボーンが競技の説明にはいる。

「今回は短期決戦です。シュートを3本打つて、どちらが

多くゴールにいれられるかというものです。なお両選手が同点だった場合は、そこで試合終了で引き分けとなります。」

「(バスケットだつたら負けない…と言いたいけど油断はできないにや…)」

いくら自分の得意な競技といつても、凧は相手の山本が物凄い運動神経の持ち主であるということを忘れてはいなかった。

そしてステージにバスケットゴールとボールが用意される。

「それじゃ先行は山本選手から。」

「よっしゃー…ありや…？なんだこれ…？」

ボールを持ち上げる山本だが、ボールに違和感を感じる。そんな山本に凧が尋ねる。

「どうしたにや？」

「なんかこのボール…ちよつと重たいんだ。」

「へ？」

山本の言葉に凧の目が点になってしまう。そしてリボンこのボールについて説明する。

「このボールはボンゴレが作った物で、見た目はただのバスケットボールですが、3kgの重さがあります。」

そしてリボンの説明を聞いたツナ、絵里、真姫は…

「やっぱりただのバスケットじゃなかった…」

「3kgのボールって…飛ばせるの…？」

「無理でしょ…」

絶体に3kgもあるボールをゴールに飛ばせるわけないと思う3人。

だがここでも山本と凧はここでも潜在能力を発揮するのだった。

「そらー！」

「いくにや。」

二人とも1発目は外したものの、1発目で感覚を覚えると、2本目と3本目はボールをゴールにいれることに成功する。

そしてついにスポーツ対決に決戦がついた。

「両選手、二本目と三本目ともゴールを決めました！よってこのスポーツ対決は、大食い選手権と同様に引き分けです！」

こうしてスポーツ対決は幕を閉じた。なお景品である並盛ラーメンの無料券は、山本がラーメンは好きだけど、そこまで行かないといことで凜に譲った。

#標的（ターゲット） 60 「似た者同士」

スポーツ対決も終わり、次のイベントについてリポーンからステージ上からマイクで話す。

「次はイベントはクイズ対決だぞ。勉強に自信がある奴は挑戦してみてください。ちやおちやお。」

次のイベントがクイズ対決と知って、ツナは獄寺のほうを見てクイズ対決に参加してみてはどうかと尋ねてみる。

「クイズ対決かー。獄寺君、参加みれば？」

「お、俺がですか!？」

「うん。だって獄寺君、勉強得意でしょ？」

「じゅ、十代目がそういうなら…」

ツナに言われて、獄寺は参加する意思を見せる。

そしてそんな獄寺に山本が言う。

「頑張れよ獄寺。」

「当たり前だ！俺はお前のように引き分けになんかならねえよ！見ててください十代目！この獄寺隼人、十代目の右腕の名にかけて絶体に勝ってみせます！」

「あ…うん…頑張つて！」

あまりに獄寺の勢いにツナは戸惑ってしまうが、

一応頑張れと一言だけ言う。そんな二人の様子

を見て、μ'sのメンバーは「獄寺とツナには一体

何があつたんだろう…？」と思っていた。

そんな中で、凜が真姫のほうを向いて。

「じゃあ、こっちは真姫ちゃんだにゃー！」

「ヴェエエ!?!な、何で私が…!?!」

「真姫ちゃんだって、頭いいから絶体にいけるにゃー！」

「べ、別に参加する必要はないでしょ…!?!」

凜が真姫にクイズ対決に参加するように言うが、

真姫は少し顔を赤くしながら遠慮してしまっている。
すると獄寺が真姫を挑発する。

「何だ?びびってのか?」

「何ですって?どういう意味よ?」

「そのままの意味だよ。そんなに負けるのが怖いのか?」

「怖くないわよ。そういうあんなのほうこそびびってるんじゃないの?」

「んだと!?!」

「なによ!?!」

突如、獄寺と真姫は火花を散らし、言い争いを始めていく。すると真姫がクイズ対決に参加することを決める。

「いいわ!参加してやろうじゃない!言っておく

けど年上だからって私は容赦しないわよ。」

「上等だ!戦闘ならともかく、こういう勝負なら年上だろうが、女だろうと容赦しねえ!あとで吠え面かくんじやねえぞ!」

「あんたのほうこそ!」

獄寺と真姫が言いあうと、二人は火花を散らしながらステージ上にいるリボンにクイズ対決に参加することを伝えにく。

そしてそんな二人を見てツナは…

「す、凄いな…真姫ちゃん…獄寺君を怖がるどころか、立ち向かっていくなんて…」

獄寺に恐れるどころか、立ち向かっていく真姫にツナは驚いてしまっていた。

そして穂乃果が獄寺のことについて尋ねる。

「何で獄寺君はツナ君、以外にはあんな感じなの?」

「うーん…話すときちょっと長いんだよねー。でも獄寺君ってあんな感じだけど、ただ素直じゃないっていうだけなんだけどねー。」

「なんか真姫ちゃんとそっくりだにや。頭が良くて、素直じゃなくて

…」

「似た者同士だよな。」

「それは二人の前では言わないほうがいいですよ…」

「私もそう思うわ…」

凧と山本が獄寺と真姫が似ていると言う。だがそのことは言わないほうがいいと思つた海未と絵里。

そして海未と絵里の言葉に山本と凧は…

「え？何でだ？似てるって言つて何が悪いんだ？」

「そうだよ。」

何で獄寺と真姫が似ていると言つて何が悪いのかと、首を傾げて疑問符を浮かべていた。獄寺と真姫も似ているかもしれないが、山本と凧も十分似ているといえる。

「(い、いや…山本も凧ちゃんも十分似てるんだけど…)」

「(スポーツが得意で、ちよつと天然だし…)」

「(私から見れば獄寺君と真姫も似ていますが、

凧ちゃんと山本君のほうはもつと似ていると思う

のですが…)」

「(二人とも、実感がないのね…)」

ツナ、ことり、海未、にこが山本と凧を見てそう思う。

そんなことを思つているとも知らず、山本と凧は疑問符を浮かべたままであつた。

#標的（ターゲット） 61 「クイズ対決開始」

そしてクイズ対決が始まる。

「さあ始まりましたクイズ対決！今回の挑戦者は獄寺隼人選手と西木野真姫選手です！」

リボーンが叫ぶと、獄寺と真姫がクイズ番組などでよくある正方形の机の後ろに立っていた。

そしてリボーンがいつものように、参加する選手の紹介から始める。まずは獄寺のプロフィールをリボーンが紹介する。

「まず獄寺隼人選手は並盛高校の3年生で、ボンゴレファミリーの嵐の守護者であり、ボンゴレファミリー時期ボスである沢田綱吉の右腕でもあります。体中のいたるところにダイナマイトを持っていることから、裏社会ではスモークキングボム、ハリケーンボムの異名を持っています。ちなみに趣味はUMAについて研究することだそうです。」

「体中に持っているって…いつもですか？」

「うん…というか獄寺君がダイナマイトを持っていない日をほとんど見たことないよ…」

海未が尋ねると、ツナは獄寺がダイナマイトを切らした日がないか思い出してみるが、そんな日はほとんどなかった。

すると希があることを尋ねる。

「さつきから気になってたんやけど、雨の守護者とか嵐の守護者って何なん？」

「えっと…それはですね…」

希に尋ねられてツナはどう説明しようか考えるが、うまく説明できそうにない。そんなツナを見て、気をきかせてバジルが説明する。

「ボンゴレには大空、雨、嵐、雷、晴、雲、霧の7つの天候になぞらえ

た守護者がいるんです。そしてそれぞれの守護者には初代ボンゴレから脈々と受け継がれている使命があるんです。」

「へー。なんかかっこいいね。」

「え!?!」

穂乃果がそう言うと、その発言にツナは自分のことを言われていると勘違いして顔を赤くしてしまう。

そして今度はリボーンは真姫のプロフィールの紹介し始める。

「えー、西木野真姫選手は音ノ木坂学院の生徒であり、スクールアイドルμ'sのメンバーでもあります。家は西木野総合病院という病院を経営しており、高校を卒業したあとは病院を継ぐそうです。また趣味は写真と天体観測で、特技はテストで満点を取ることだそうです。」
「何で家のこととか趣味とかまで知ってるのよ…これ訴えても問題ないかしら…?」

リボーンによる自分のプロフィールを聞いて、そう呟く真姫。本当にリボーンは一体どこから、情報を手にいれているのだろうか？

「それではクイズ対決を開始します！では二人とも前の席にお座りください。」

リボーンがそう言うと、獄寺と真姫は解答席に座る。そしてリボーンがクイズ対決の説明を始める。

「このクイズ対決は正解数が多いほうの勝ちとなります。そして勝者には最新型の天体望遠鏡を贈呈したいと思います！」

「何!?!」

「べ、別にそんなの興味なんて…!」

UMAを観察をすることが趣味の獄寺と、天体観測が趣味の真姫は、最新型の望遠鏡と聞いて顔つきが変わる。

真姫は興味がないと言っているが、心の中ではメチャクチャ欲しいと思っっている。

「それではまずは数学の問題です。難しさは普通の高校のレベルです。それでは第1問です。今からモニターに出てくる計算問題を解いてください。」

リボーンがそう言うとモニターに計算式が出てくる。だがそこに

#標的 (ターゲット) 62 「頭がよすぎな二人」

リボーンのめちやくちやな問題を当たり前のように解いた獄寺と真姫。そのことにツナと炎真は…

「というか何で、獄寺君と真姫ちゃんはその問題が解けるの!？」

「もう勉強ができるとか、そういう問題じゃないよね…」

ツナと炎真が「二人は普段どんな勉強しているのか?」と思っつまう。

するとツナのにこのほうを見て尋ねる。

「にこさんでもわからないんですか?」

「あ、当たり前じゃない!何言ってるのよ!？」

「す、すいません。前に俺の家に来た時に高校時代は成績優秀だって言ってたから、もしかしたらわかってたんじゃないかなーって思っ…」

「え?!いや!あれは!？」

成績優秀だと言ったことを思い出してにこは困惑してしまう。そして困惑してしまうにこを、sのメンバー全員がジト目で見ていた。

そして希がいたずらっぽい笑みを浮かべながら言う。

「へー、にこっちが成績優秀やなんて知らなかったわー!」

「だ、だから…その…にこにっこにっこにっ!」

希にそう言われてにこは、無理やり笑顔を浮かべてごまかそうとする。だが、sのメンバーはジト目でにこを見ていた。

そしてそれを見て山本は。

「何だそりゃ?一発ギャグか?面白のな!」

「違うわよー!」

山本の発言につっこむにこ。そのおかげかさっき

までの気まずい雰囲気はなくなっていた。

そして続いて次の問題に移る。

「では次は外国語の問題にいつてみましょう。次にモニターに出てくる問題を日本語に訳してみてください。」

するとモニターには普通の人から見れば、わけのわからない外国語の言葉が出てくる。

モニターに出ている言語についてリボーンが説明する。

「ちなみにこの文字はマラヤーラム語で、南インドのケーララ州などで使われている用語です。」

(※本当にあります。)

「マラヤーラム…?」

「聞いたことない…」

「本当にそんな言語があるんですか…?」

マラヤーラム語と聞いて穂乃果、ことり、海未は頭が少し混乱して
る。

するとマラヤーラム語のことについて希がスマホ
で調べる。

「本当やね、インドのケーララ州などで使われている言語って書いてあるん…」

「本当だ…」

「全く読めないにゃ…」

「あの二人は解けるのかな…?」

希のスマホを見ながらツナと凜と花陽が呟く。そしてシンキング
タイムが終わる。

「それでは二人の解答をみましょう！」

リボーンがそう言うと、二人がホワイトボードに

書いた答えを見せる。そこには『リボーンはモテ

モテナ殺し屋ヒットマンである。』と書かれ

ていた。

「両者とも正解です！」

「よし…」

「この調子でどんどんいくわよ！」

この問題もなんなく突破する獄寺と真姫。そしてこの答えにツナ

がつっこむ…

「聞いたことのない言語を使つて、結局は自分のことを自慢しただけかよー!」

そんなツナのつつこみを無視し、リポーンは次の問題に移る。

「では次の問題です。次は星座に感ずる問題です。これから私が口頭で言う星座を答えてください。」

「星座か…これならいけるぜ。」

「私だつて!」

「では問題です。やぎ座の下にある新興星座は?」

「簡単だぜ!／簡単よ!」

ホワイトボードに問題の答えを書く獄寺と真姫。そしてこの二人以外にも、この問題の答えがわか

つていた人物がいた。

「けんびきよう座やね。」

「希さんわかるんですか!」

「うん。星座には詳しいんよ。」

「へー凄いですね、希さんつて。なんか尊敬しちゃうなー。」

「ありがとう。」

ツナにそう言われて希は、笑顔でお礼を言う。その光景を見た穂乃果、海未、ことり、にこはツナに褒められている希を見て「いいなー」と思っていた。

そして獄寺と真姫はホワイトボードにけんびきよ

う座と書いておりこの問題も正解する。

そしてクイズ対決は続いていく。

「次は地理の問題です。オーストラリア西部にある独立国家の名前は?」

この問題に獄寺と真姫はホワイトボードに「ハットリバー王国」と書く。

「正解です!」

この問題も二人はなんなくクリアする。そしてクイズ対決は続いていき、両者一步も譲らない戦いとなる。

そして…

「まだ勝負の途中ではありませんが、もう問題がなくなってしまうた為、これにてクイズ対決が終了です。」

「なに!?!」

「じゃあ望遠鏡はどうなるのよ!?!」

「その点は問題はありません、後日、同じ物を宅配便で送らせていただきます。ではみなさん、素晴らしい戦いをした二人に拍手をお願いします!」

リボーンがそう言うと、会場中から拍手が送られこれにてクイズ対決は終了するのであった。

#標的（ターゲット） 63 「恐怖の参加者」

そして怒涛のクイズ対決が終わり、次のイベントがリボンから伝えられる。

「次は料理対決を行うぞ。料理の腕に自信がある奴は参考してみてください。」

リボンがそう言うと、ツナがにこのほうを見て参加を勧めようとしたその時。あの人物が料理対決に参加することを決意する。

「料理対決…どうやら私の出番のようね。」

「ビ、ビアンキ！」

ツナたちのところへ突然ビアンキが現れ、いつの間にかいたビアンキは驚いてしまう。

そしてビアンキが現れたことによつて、獄寺の顔色が悪くなる。

「ア、アネキ…」

そしてお腹を押さえてその場で倒れてしまう。3年の月日がたつても獄寺は、ビアンキを克服することはできなかった。

そして倒れてしまった獄寺をツナは心配する。

「ご、獄寺君！」

「す、すいません…十代目…」

「隼人ったら…喜びで倒れるぐらい、私の料理を食べたいのね。」

「(違うって！)ビアンキの料理を死んでも食べたくないだけだつて！」

ビアンキの発言にツナは心の中でつつこむ。そしてビアンキは倒れている獄寺を見て言う。

「待つて隼人。私が腕によりをかけて、とびっきりの美味しい料理をご馳走してあげるわ。」

そう言うどビアンキはステージ上にいるリボンに参加することを伝えるべく。

そしてビアンキが去って行くと、ここが尋ねる。

「もしかして獄寺こいつがビアンキあを見ただけで倒れるっていう…?」
「そうです…」

にこが前にツナが言っていたことを尋ねると、ツナが頷きながら答える。

そしてビアンキのことを知らないにこ以外のμ'sのメンバーは今までに起こった出来事に啞然としてしまっていた。そんな中で海未が尋ねる。

「あの…一体あの人は…? 獄寺君はアネキと言っていましたけど…」

「えっと…何から説明しようか…」

とりあえずツナはビアンキが獄寺の姉であること、ビアンキが作った料理が全て毒料理になるポイズンクッキングの才能の持ち主であり、その毒料理を食べ続けたせいで獄寺はビアンキの顔を見るだけで倒れてしまうこと、裏社会では毒蠍ヒットマンの異名を持つ殺し屋であることを話す。

そしてその話を聞いてにこ以外のメンバーは…

「((((もうわけわかんない!))))」

ツナの話の内容についていけず、にこ以外は話についていけない状況であった。

すると今度はツナたちのところへディーノがやって来る。

「どうやらあの希セニョリータが言ったことが本当になったな。やっぱり神頼みぐらいじゃダメだったな。」

「ディーノさん!」

「あ、あなたは!あの時の!」

「ツナ君と一緒に神田明神の階段から落ちた人やん!」

ディーノを見て絵里と希が驚く。そして雪穂と亜里沙はディーノを知っているので普通に挨拶する。

「あ!ディーノさん!」

「こんにちわ!」

「昨日ぶりだな雪穂、亜里沙。」

「ええ!?雪穂知ってるの!?!」

「亜里沙この人を知ってるの!?!」

雪穂と亜里沙がディーノのことを知っていたことに穂乃果と絵里が驚く。

そしてディーノが自己紹介する。

「俺はディーノ。キャバロッローネファミリーのボスだ。よろしくな。」

「この人がキャバロッローネファミリーのディーノさん…」

ことりは誘拐された時にキャバロッローネファミリーとディーノのことをリボーンが喋っていたことを思い出す。

するとディーノが料理対決について話す。

「さて…問題の料理対決だが、にこを出場させる

しかもう助かる方法はねえ俺は思ってる。」

「な、何で私!?!」

「お前は料理が得意だ。だから毒蠍が戦意を失うほど美味しい料理を作って毒蠍を止めるんだ!」

「なんか凄い責任重大なんだけど!?!」

ディーノの提案ににこは驚愕してしまう。そして

ツナはにこに頼みこむ。

「お願いですにこさん!もうにこさんしかいないんです!にこさんが参加すればここにいる人たち全員を救えるんです!お願いします!」

「し、仕方ないわね…!やってあげるわよ…!」

「本当ですか!?!」

ツナが頼みこむと、少し顔を赤らめて料理対決に参加することを決意する。

だがツナが喜んだのも束の間、ステージ上からリボーンがアナウンスする。

「ツナ、ディーノ。お前らは審査員の役目をやってもらうぞ。ちゃんと料理を食べて判定しろよ。」

「な!?!」

ツナとディーノはリボーンの魔の手から逃げるとはできなかった。

恐怖の料理対決。はたしてどうなる!?!

#標的（ターゲット）64 「殺し屋アイドル再来」

そして恐怖の料理対決が始まる。ステージ上には簡易型のキッチンが置かれ、キッチンの前にことビアンキが立っていた。ツナとデイノはステージの横で審査員のとして座っていた。

そしてリボーンが実況を始める。

「さあ始まりました料理対決！今回の挑戦者はビアンキと選手と矢澤にこ選手です！」

リボーンがそう言うのとビアンキは何も緊張せず、普通に立っているのに対して、にこは少し緊張している様子であった。

そしていつものようにリボーンが選手の紹介をする。

「ビアンキ選手は毒蠍の異名を持つ一殺し屋〈ヒットマン〉がであります。特技は作った料理が全ての料理が毒料理になってしまうそうです。ちなみにビアンキは俺の女だぞ。」

「もうーリボーンったらー！」

恥ずかしさのあまりほんのりと顔を赤らめて、顔を両手で押さえるビアンキ。だがリボーンは親指以外を全部たてて4を現していた。

リボーンという言葉聞いて穂乃果は…

「リボーン君ってビアンキさんと付き合ってるんだ。赤ちゃんなのに凄いやねー。結構年の差があるのに。驚きだよー。」

「驚くところが違うわよ穂乃果ー！」

リボーンとビアンキが付き合っている？ことに何も違和感を感じていない穂乃果に絵里がツツコミをいれる。

そしてリボーンの指を見た真姫は…

「あの指の4って…そう言う意味なのかしら…？」

「たぶん…」

「知れば知るほどスピリチュアルな赤ちゃんや…」

リボーンが指が示している意味は、おそらく4番目の女だということとを理解する真姫、ことり、希。

そしてリボーンは次にこのプロフィールを紹介する。

「続いて矢澤にご選手はスクールアイドル、sのメンバーであり、音ノ木坂大学の1年生であります。とても家庭的な女性で料理も得意です。なにやら変わった一発ギャグを持っているとのことなので、やってみましょう。」

「ちよつと！急にムチャぶり!?私、一発ギャグなんて持ってないわよ！」

「あるじゃねえか、にっこにっこにーが。」

「あれは一発ギャグじゃないわよ！」

「それではどうぞ。」

「話を聞きなさいよ！」

ことごとく自分をこげにするリボーンにツツコミをいれるにこ。

そう言いながらも「仕方ないわね」と言いながらにこはあの自己紹介をする。

「にっこにっこにー！あなたのハートにっこにっこにっこにー！笑顔をお届けする矢澤にこにこー！にこにーって覚えてラブニコ！」

いつもの自己紹介するにこ。しかし会場の人たちは何のことかわからず、誰も喋らなくなってしまっていた。ただユニだけは何も喋ってはいなかったが目を輝かせていた。そしてツナとディーノはどうしていいかわからず顔を引き攣らせながら笑うことしかできなかった。

そして何ともいえない空気の中でリボーンは…

「はい。見事にスベりましたね。」

「スベってないわよ！というかこれは一発ギャグじゃないのよ！」

「ではスベったにご選手に変わりました私が変わりに…」

「何であんたがやるのよ！」

にこがりボーンにツツコミをいれると、リボーンはツインテールのカツラをかぶり、にこの自己紹介を真似る。

「リッポリッポリー！あなたの心臓ハートに弾丸ぶちこむリッポリッポリー！笑顔であなたに死を与える

リポーンリボリボ！リボリーって呼んでねヘルリボ！」

リポーンがにこの自己紹介を真似て自己紹介すると、会場中から笑い声が聞えてくる。マフィアだからかわからないがリポーンの自己紹介は面白かったようだ。

「だからそれ私の！そしてさっきより怖くなってるじゃない！笑顔で死を与えるって怖すぎるわよ！」

「どうだ？俺のほうがウケてるだろ？」

「だから一発ギャグじゃないのよ！」

最後の最後までリポーンに振り回されるにこ。ツナとディーノは心の中で「ドンマイ…」と思うのだった。

#標的（ターゲット） 65 「生き残れるか？」

そして料理対決についてリポーンが説明を始める。

「では料理対決の説明です。今回二人にはカレーを作ってもらいます。そして審査員のツナとディーノにカレーを食べてもらい、点数の高かったほうが勝ちとなります。ちなみに今回の料理対決で勝った方には調理器具セットを贈呈します。」

「調理器具ね、悪くないわね。」

「そうね。」

調理器具と聞いて、ビアンキとにこは興味を示す。そして料理対決が始まる。

「では料理対決！始め！」

ピーーーーー！！

リポーンが開始の合図の笛を鳴らすと、二人は凄いい勢いで野菜と肉を切っていく。

その光景にハル、京子が驚く。

「ビアンキさんにもこちゃんも早いです！」

「二人とも料理慣れしてるね。」

そう二人が言ったのも束の間、ビアンキの切っていく野菜から紫色の煙が出てくる。どうやらもうポイズンクッキングが発動したようだ。

その光景に海未と凜と絵里は…

「野菜が次々と毒々しくなってますよ!?!」

「凜も料理は苦手だけど、あんなことにはならないにや…!」

「な、なんて恐ろしいの…!」

ビアンキのポイズンクッキングの恐ろしさに3人は恐怖を覚える。

そして野菜を切り終わると、野菜と肉を炒めていくがビアンキの鍋

からの凄惨な紫色の煙が花見会場を襲っていく。

すると花見会場にいる人たちが次々と苦しみ始め、最初に倒れたのは…

「も、もう耐えられないにや…」

「凜ちゃん！しつかりして！」

「かよちゃん…凜の墓前には…カップラーメンを…」

「凜ちゃん！」

凜がそう言い残すと、そのまま凜は安らかな表情で気絶してしまふ。そんな凜を見て花陽が悲鳴をあげる。

凜は普通の人より、鼻が効くためビアンキのポイズンクッキングによる煙に耐えることができなかつた。

そしてここは…

「く、苦しい！でも負けられないわ！」

近くでポイズンクッキングの余波を浴びながらも、なんとか耐えぬきながら野菜や肉を炒めていた。

そしてツナとデイナーは…

「や、やばい…意識が…」

「耐えろツナ…なんとか耐えるんだ…」

お互いに励ましあいながら、ポイズンクッキングによる煙に耐えていた。

そんな苦しい二人にリボーンは

「その程度で死にかけちゃ世話ねえな。」

「呑気でいいよな！お前はよ！」

ツナとデイナーがリボーンにツツコミをいれる。リボーンはガスマスクを用意して、ビアンキのポイズンクッキングの影響を受けていながつた。

そして野菜と肉を炒め終えると、二人は水を入れて肉と野菜を煮込み始める。そしてしばらく煮込むとカレーをいれて交ぜ始める。

するとビアンキの紫色の煙が消え、花見会場にいい匂いがただよび始める。

「あれ？いい匂いになった…」

「本当だな。」

「もしかしてにこさんの料理が、ビアンキさんの匂いをかき消してるんじゃない…」

穂乃果、山本がそう言うのと炎真が急にいい匂いが漂い出した理由を考察する。

そしてバジルと花陽は…

「いい匂いですね、なんか拙者お腹がすいてきました。」

「私もです。」

「あんたたち…あれだけ食べてまだ食べたいと思えるの…?」

バジルと花陽の食欲に真姫は驚きを通りこして、呆れてしまっていた。

一方でツナとディーノは…

「こ、これはディーノさん…もしかして…」

「ああ！にこの料理が毒蠍の料理を上回ったんだ！」

「やったあ！これなら犠牲者が出ないですむ！」

作戦が成功し喜ぶツナとディーノ。だが二人は審査員なのでこのあと食べなければならぬといことを喜びすぎて忘れてしまっている。

だが二人が喜んだの束の間、ビアンキの料理魂に火がついてしまう。

「このぐらいで…負けないわ！」

ビアンキがお玉で鍋をかき混ぜていく。するとビアンキの作ったカレーが禍禍しくなっていく、さつきよりも強烈な匂いを放つ煙が花見の会場を襲う。

そして花見会場にいる人たちはそれに耐えられなくなり次々と倒れていく。

そして穂乃果たちは…

「く、苦しい…」

「も、もう限界です…」

「た、耐えられない…」

「だ、誰か助けて…」

「なんか綺麗な川が見えます…」

「うちも…」

「私は綺麗なお花畑が…」

「私も…」

穂乃果、海未、ことり、花陽、ハル、希、絵里、

真姫はそう言うど気絶してしまう。そして山本
たちも気絶してしまう。

そしてステージ上にいるにことツナとデーノも…

「…」

白目を向いて気絶してしまっていた。このビアンキのポイズン
クッキングに耐えられたのはガスマスクをしていたリボンだけ
だったという。

よって料理対決は、これ以上は続行不能により勝
者と生存者はいなかった。

#標的（ターゲット） 66 「信じられない」

料理対決が終ってから30分後。なんとか全員生き残りイベントが再開される。

そしてリボーンが次のイベントについてお知らせする。

「んじゃ気を取り直して次のイベントのお知らせ

だぞ。次はダンス対決だ。ダンスに自信がある奴は挑戦してみてくれ。」

リボーンがそう言うと、ダンス対決と聞いてディーノが反応する。

「ダンス対決か…面白そうだな。」

「え？ディーノさんダンスできるんですか？」

「まあな。一応社交ダンスは仕事でたまにやる時があるしな。あと日本のゲーセンのでやったことがあるぜ。」

「へーそうなんですか。」

「ゲーセンのは調子がいいときはパーフェクトで

いける時があんだけど、調子が悪い時は全然ダメ

なんだよな。何でだろうな？」

「さ、さあ…どうしてでしょう…？」

たぶん調子が悪かった時は「部下がいなかったのだろうと」心の中で確信するツナ。だが今回はキャバロッツ・ネファミリー総出で来ているので問題はない。

一方で穂乃果は絵里のほうを見てダンス対決に参加しないのかと尋ねる。

「絵里ちゃんも参加してみれば？」

「え、私？」

「うん！絵里ちゃん、踊るのすっごくうまいから。どうかな？」

「ほ、穂乃果がそう言うならやってみようかしら…？」

穂乃果に言われて、絵里は参加しようかと考える。するとディーノが絵里に…

「ま、別に負けたからって何かあるわけじゃないし、やるだけやってみようぜ。」

「それもそうね。」

デイーノが言われて絵里はダンス対決に参加することを決意する。

そして二人はダンス対決に参加することを伝えにリボーンのところへ行く。

そしてデイーノの後ろ姿を見て、雪穂が呟く。

「デイーノさんって凄いですよね。イケメンで外国語も話せて、ダンスもできるなんて。」

「そ、そうだね…」

「あれ？どうかしたんですかツナさん？」

「雪穂ちゃん…デイーノさんはかっこいいって思ってたほしいんだ…」

「え？どういう意味ですか？」

ツナの言っている意味がわからず、雪穂は首を傾げながら疑問符を浮かべる。雪穂はデイーノが部下がいないとダメダメになってしまうことを知らない。

そしてダンス対決が始まる。

「さあダンス対決の始まりです！今回の挑戦者はデイーノ選手と絢瀬絵里選手です！」

リボーンがそう言うのと、いつものようにプロフィールを紹介している。

「デイーノ選手はボンゴレファミリーの同盟ファミリーであるキャバロッツ・ネファミリーのボスであり、俺の元生徒でもあります。また裏社会では跳ね馬の異名を持っております。」

リボーンがデイーノのプロフィールを紹介すると、海未がツナに尋ねる。

「元生徒ということはデイーノさんは、ツナ君の兄弟子ということですか？」

「ま、まあ…一応…そうなるのかな？」

ツナは多少疑問系になりながらそう答える。すると今度はにこがツナにディーノのことについて耳元で小声で尋ねる。

「あいつ大丈夫なの…?」

「大丈夫ですよ。今回は部下の人がいますから。」

「今だに信じられないんだけど…本当に部下がいたら本領を發揮できるの?」

ディーノのへなちよこな部分しか見ていないにこは、本当に部分がいると本当にへなちよこじゃなくなるのか今だに信じられなかった。

さつきからココソコ話している二人に穂乃果がツナ尋ねる。

「ねえさつきから何話してるの?」

「え!?何でもないよ!?ね?にこさん!」

「え、ええ!」

別に隠すことほどのほどではないが、なぜかツナとにこはディーノの隠さなければならぬと思ってしまう、何でもないと答えてしまう。

するとリボンが絵里のプロフィールを紹介する。

「絢瀬絵里選手は音ノ木坂大学の1年生であり、スクールアイドル、sのメンバーでもあります。音ノ木坂学院に在住の頃が生徒会長をやっていたそうです。またロシア人の祖母を持つクォーターであり、幼少期にはバレエをやっていたそうです。」

「バレエをやっていたとこまで…本当にどこまで知っているのかしら…?」

幼少期にバレエをやっていたことまで知られていることに絵里は驚いてしまう。

するとステージの床が開くと、そこからゲームセンターにあるダンスゲームの機械が2台出てくる。

「こ、これは!?ゲーセンのダンスゲーム!」

「な、何でここに…?」

急に床からダンスゲームの機械が出てきて、ディーノと絵里は驚いてしまう。

「今回のダンス対決をやるから、特注で用意したんだぞ。」

「さすがリボン…」
「ハラシヨ…」

#標的（ターゲット） 67 「ダンス対決」

そしてダンス対決が始まろうとしていた。二人は機械の上へに立って、曲が始まるのを待っていた。

そしてリボーンがダンス対決の説明をする。

「今回のダンス対決は得点の高いほうが勝利となります。勝者にはイタリアの高級チョコレートが贈呈されます。」

「高級チョコか！いいな！」

「なんだかやる気が出てきたわ！」

高級チョコレートと聞いてデイーノと絵里はやる気を出す。

そしてデイーノは絵里に言う。

「言っておくが、俺は加減しねえぜ！」

「望むところよ！」

デイーノの言葉に対して絵里はやる気満々の姿勢を見せる。するとリボーンがここで…

「ちなみに難しさは1番難しいやつだからな。」

「な!?!そういうことは早く言えよ！」

今さらそんなことを言うリボーンにデイーノは驚くが、自分の部下たちが応援してくれているのを見て…

「ってあいつらの前で、カッコ悪いところ見せられねえよな…」

そう言うとデイーノは真剣な顔をで画面のほうを見て真剣な眼差しになる。そして真剣な表情になったデイーノを見て絵里も真剣な眼差しになる。

「それでは…ダンス対決始め！」

ピーーーーー！

リボーンが開始の合図の笛を鳴らすと曲が流れ始める。

そして曲にあわせてデイーノと絵里は踊っていく。

「さすがに難しいな！おつと危ね！」

「やるわね！でも負けないわ！はあ！」

絵里もデイーノも初めての曲で、振り付けも知らないはずだが、山本と凜と同じく自分の中に眠る潜在能力を發揮していく。デイーノも絵里も今のところ1回もミスしていない。

二人の活躍を見てツナとには…

「すごい二人とも…そして部下のいる時のデイーノさんってやっぱり凄い…」

「嘘でしょ…本当に部下がいるだけでめっちゃくちや動きが違うじゃない…」

絵里の凄さにも勿論、驚いてはいたが、部下のいる時のデイーノの凄さを改めて知るツナ。そして昨日あった時とは全然違うデイーノに、には驚いてしまった。

デイーノと絵里と踊りを見て凜と山本は…

「二人とも凄いにゃ！凜もやってみたくなつたにゃ！」

「なんか楽しそうだよな！俺も踊りたくなってきたぜ！」

デイーノと絵里のプレイを見て刺激され、山本と凜は自分たちもダンス対決をやりたい気持ちを押さえられなくなっていた。この二人がダンス対決をやったら一体どうなるのかと、これはこれで気にはなる。

そしてプレイは続いていき、曲は終盤にさしかかる。

「ラストスパート！」

「まだまだ！勝負は最後までわからないわ！」

デイーノと絵里は曲の最後まで油断せず踊き続ける、そして二人はノーミスで曲をクリアする。そして採点結果が発表されようとしていた。

「はあはあ…」

「結果は…？」

二人は少し息をきらせながら採点結果を待つ。そして採点結果が出る。

そして結果を見てリボーンが叫ぶ。

「おーっと！結果はなんと同点だ！そして両者とも1回もミスしていません！」

「同点か…やるな。」

「あなたのほうこそ。」

まさかの結果に互いにそう言いあうディーノと絵里。するとりボーンが二人にある提案をする。

「ここで終わってもいいが、どちらかが勝つまでやりてえって言うなら続けてもいいぞ。」

「俺はいいぜ。絵里、お前は どうする？」

「いいわよ。同点で終わるのはちよつと嫌だったし。」

「奇偶だな。俺もだぜ。」

リボーンの提案に絵里とディーノは続けることを決める。そしてダンス対決の2回戦が始まが2回戦も同点であり決着つかなかった。

そして3回戦、4回戦、5回戦と続くが一行に決着がつかないでいく。

「二人とも凄い…決着が全然つかない…」

「なんかプレイするごとに絵里ちゃんもディーノ

さんもダンスのキレがよくなってる…」

「こんなことは絶体ありえないですが、仮にラブライブであの二人が組んだら余裕で優勝しそうです…」

二人のプレイを見て眩くツナ、穂乃果、海未。このあともダンス対決は続いたが互いに体力と集中力がきれて決着はつかなかった。

#標的（ターゲット） 68 「動揺する穂乃果」

絵里とデイリーのダンス対決が終わり、次のイベントについてリボンが知らせる。

「次はお菓子当て対決だぞ。お菓子好きなやつは挑戦してみてくださいよな。」

「お菓子!? 私、行きたい!」

次のイベントがお菓子当て対決と聞いて、穂乃果は右手をあげて目を輝かせながら参加したいと叫ぶ。

すると海未が穂乃果に注意する。

「穂乃果、太りますよ。」

「大丈夫だって! お菓子の大食い対決じゃなくてお菓子を当て対決なんだし!」

お菓子の大食い対決ではないから大丈夫と言う穂乃果。確かに大食い対決ではないので海未は「それもそうですね…」と一言だけ言うつて納得してしまう。

すると雪穂が穂乃果の耳元に近づくと小声で言う。

「ねえ、お姉ちゃん。」

「何? 雪穂?」

「別に参加するのは自由だけど、もし仮に太ったらツナさんに「穂乃果ちゃんって太ったよね」って言われもるかもしれないよ…?」

「そ、それは…」

雪穂がそう言うと、さっきまで目を輝かせていた穂乃果だったが急に目から光が失われてしまう。そしてツナから「太ったね」と言われる姿を想像してしまい体中をプルプルと震わせて動揺し始める。

そんな穂乃果を見て全員驚いてしまう、

「ほ、穂乃果ちゃんどうしたの!?!大丈夫!?!」

「お、おい：大丈夫か：?」

「なんか急に変わったぞこいつ：!」

「穂乃果!どうしたんですか!」

「穂乃果ちゃん!」

「ど、どこか体調が悪いのかな?」

「びよ、病院に連絡したほうがいいでしょうか!?!」

急におかしくなった穂乃果を見て、ツナ、山本、

獄寺、海未、ことり、京子、ハルが言う。さすが

にここまで動揺するとは思っていなかったのだ

雪穂は心の中で「お姉ちゃんごめん：!」と思っていた。

そしてツナが穂乃果に話しかける。

「穂乃果ちゃん急にどうしたの!?!具合でも悪いの!?!」

「だ、大丈夫だよ：ちよつと太った姿をしちゃったらなんか精神的に

きちゃって：!」

「へ：?」

自分が思っていたより深刻な問題ではなかったものでツナは目を点
になってしまい、雪穂以外は全員すっこけてしまう。もちろん想い人
であるツナが目の前にいるので嘘をついたが、太った自分を想像して
ショックを受けてしまったのも事実である。

するとそんな穂乃果にツナは：

「太るのが嫌なのもわかるけど、でもそんなに

我慢する必要はないと思うよ。」

「え?」

「俺、穂乃果ちゃんがお菓子とか食べてる時の幸せそうな表情が好き
だよ。」

「す、好き!?!」

「あ!そんな深い意味じゃなくて!」

「そ、そうだよね!」

お互いに顔を赤くしながら動揺するツナと穂乃
果。つい本心が出てしまったことにツナは心の

中で「危ねー…」と黙ってしまおう。

「とにかく我慢する必要はないと思うよ、もし

太ったら俺もちゃんとダイエットに協力するからさ。」

「ツナ君…ありがとう！私、出てみるよ！」

ツナの言葉に穂乃果は、さっきまでの動揺がなくなり笑顔になる。

穂乃果の笑顔を見てツナは「かわいいなー」と黙ってしまおう。

するとツナとこころへ二人の人物がやってくる…

「君も参加するんだ。お菓子当て対決。」

「にゅにゅ。ライバル出現。」

「白蘭とブルーベル！」

ツナたちの前にやってきたのは白蘭と真リアル

六甲花の一人のブルーベルだった。

すると白蘭は、マシユマロの入った袋を取り出すと…

「マシマロ、食べる？」

「食べます！うーん！美味しい！」

白蘭からマシユマロを受取ると、穂乃果はマシユ

マロを食べて絶賛する。

すると白蘭とブルーベルもマシユマロの入った袋を取り出してマ

シユマロを食べ始める。

「今からお菓子食べるのに…」

「そんなに食べて大丈夫なん…？」

「というか白蘭あんたさっきもマシユマロ食べてなかった…？」

マシユマロを食べ始めた3人を見て絵里、希、にこが言う。

するとブルーベルが白蘭に

「ねえ白蘭。早く行かないと、受付終わっちゃうよー。」

「そうだね。じゃあ穂乃果ちゃんも僕たちと行こっか。」

「はーい！」

穂乃果が返事をする、ブルーベル、白蘭、穂乃果はお菓子当て対決に参加することをリポーンに伝えにく。

すると亜里沙がツナに小声でささやく。

「ツナさん。」

「どうしたの亜里沙ちゃん？」

「ツナさんは参加なくていいんですか？」

「え？何で？」

「穂乃果さんが、あの白い髪の人に取られるかもしれないから…」

「え!？」

「だってあの二人、凄く気があつてたし…」

「そ、そんなことって…!？」

亜里沙にそう言われると、確かにあの二人が気があっているように思い、もしかしたら付き合うんじゃないかと思ってしまう。

そして二人が付き合っている姿を想像すると、ツナはさきほどの穂乃果と同じようになってしまう。

「ほ、穂乃果ちゃんが…」

「十代目!どうしたんですか!？」

「ツナ君!顔色が!」

「大丈夫ですか沢田殿!？」

「きゅ、急にどうしたのよ!？」

「ツナさんが穂乃果ちゃんと同じように…」

「伝染したのかにゃ…?」

「ツ、ツナさんが!？」

さきほどの穂乃果と同じような状態になってしまったツナを見て、

獄寺、炎真、バジル、真姫、花陽、凜、ハルが叫ぶ。

結局のところツナと穂乃果は似た者同士であった。

#標的（ターゲット） 69 「気になる」

そしてお菓子対決が始まる。穂乃果、白蘭、ブルーベルはステージ上に置かれた椅子に座っている。

そしてリボーンが実況をする。

「さあ始まりました！お菓子当て対決！今回の挑戦者は高坂穂乃果選手、白蘭選手、ブルーベル選手です！ではまず選手の紹介から始めます！」

お菓子対決の開始を宣言すると、まずは白蘭のプロフィールを紹介する。

「まず白蘭選手はジュエツソファミリーのボスであり、平行世界《パラレルワールド》の知識を共有する力を持っています。また未来の世界では1兆ある平行世界を全て支配し、未来の恐怖のどん底に陥れた悪魔ともいえる存在です。」

「アハハ・リボーン君は相変わらず毒舌だねー。」

リボーンののプロフィールを聞いて白蘭は、自分のことでもあるにモかかわらずヘラヘラと笑いながらマシユマロを食べていた。

そして白蘭のプロフィールを聞いて雪穂は…

「み、未来とか…パラレルワールド？ってどういうことですか…？」

「あー…えつとね…」

ツナは白蘭の能力についてのこと、未来に行ったことがあることを説明する。その説明を聞いて雪穂は「もうマフィアがなんだかわからなくなってきた…」と呟く。その雪穂の言葉に、sのメンバーは黙って首を縦に振っていた。ただ亜里沙だけは「マフィアって凄いですね！」と言って、むしろ興味津々な様子であった。

そしてリボーンは続いてブルーベルのプロフィール紹介する。

「ブルーベル選手は白蘭が率いるジェツソファミリーの一員であり、真六弔花^{リアル}の雨の守護者でもあります。また修羅開匣という力を使い、人間を超えた超人になれる存在でもあります。」

「あいつら恐竜とかに変身できたよな。」

「ああ、本当に苦勞させられたぜ。」

「拙者もです。」

リボーンによるブルーベルのプロフィールを聞いて

て山本、獄寺、バジルが未来で修羅開匣に変身し

ていた真六弔花^{リアル}たちとの戦いを思い出しながら呟く。

山本の恐怖の変身という言葉聞いて、海未がツナに尋ねる。

「えつと…恐竜…？何を言ってるんですか…この時代に恐竜が存在するわけ…」

「なんか…DNAさえあれば恐竜でも何でも復元できるらしいよ…」

「もう何でもありですよね…前に世界征服が余裕でできるって言ってた意味がわかった気がします…」

「でしょ…？」

ツナの言っていた言葉を覚えていた、海未、ことり、凜、花陽、真姫は納得してしまう。絵里、希、にこも世界征服という言葉に驚いてはいたが、特に何も言わなかった。

そして続いて穂乃果のプロフィールをリボーンが紹介する。

「高坂穂乃果選手は音ノ木坂学院の3年生であり、スクールアイドル^{μ's}のリーダーでもあります。趣味はシール集めと水泳であり、特技は道でよくお金を拾うことだそうです。また家は穂むらという地元では有名な老舗の和菓子屋の娘でもあります。」

「すっごーい！リボーン君、私のことめっちゃ知ってるー！何で!?何で!?」

「企業秘密だ。」

「えー！?!教えてよー!」

自分のプロフィールを知っているリボーンに驚いている穂乃果だが、他のメンバーと違って自分のプロフィールが知られていることについてあまり気にしていなかった。

すると穂乃果の家が和菓子だということにブルーベルが反応する。「ねえねえ白蘭！和菓子だって！花見が終わったら買いにいこうよ！」

「そうだねー。みんなのお土産に買って帰ろっか。」

「いいよ！是非、寄って行ってよ！」

ブルーベルの提案に白蘭が賛成すると、穂乃果は歓迎ムードである。

3人がそんなことを言っていると、リボーンがさらに穂乃果のプロフィールを付け加える。

「ちなみに現在、想いを寄せている人物がいるそうです。名前は…「リボーン君!?!」」

いきなりリボーンが好きな人を言おうとしたこと

に、穂乃果は顔を真っ赤にしながら叫んで、

リボーンの声を遮る。

「冗談だぞ、さすがにそこまで俺は知らねえぞ。知っててもお前に恥をかかせるような真似は俺はしねえ。」

「だ、だよね！」

冗談だと聞いて穂乃果は安心する。だが想い人がいると聞いてツナは…

「(え!?!穂乃果ちゃんって好きな人いるの!?!本当に!?!誰!?!めちやくちや気になるー!?!)」

穂乃果に好きな人がいると知ってツナはめちやくちや気になってしまい、悶々とするのだった。

#標的（ターゲット）70 「お菓子当て対決」

そしてお菓子当て対決が始まる。まずはリボンがお菓子当て対決のルールを説明する。

「ではルールのほうですが、今から3人には目隠しをして色んなお菓子を食べて頂きます。そしてそのお菓子が何のお菓子か当ててもらいます。そして1番正解数が多かった選手が勝ちとなります。」

「シンプルなルールだね。」

「ちなみにこのお菓子当て対決に勝った人には、お菓子1年分が贈呈されます。」

「お菓子1年分!?!」

お菓子1年分と聞いて、穂乃果とブルーベルは子供のように目を輝かせる。一方で白蘭は「お菓子1年分かー。いいねー。」と呟くだけであつたが、楽しみにしている様子ではあつた。

そして3人は目隠し用のアイマスクをする、そして目の前に皿に乗ったチョコが置かれる。そして3人はチョコを口にに入れる。

「このチョコは…」

「うん。間違いないね。」

「ブルーベルもわかった。」

「それではアイマスクをとって、何のお菓子かテーブルの上に置いてあるホワイトボードにお書きください。」

穂乃果、白蘭、ブルーベルがこのチョコ何のお菓子か確信すると、リボンが指示する。

そして3人は書き終わったのを見計らってリボンが言う
「では正解を見てみましょう! 回答をオープン!」

リボンがそう言うと、3人のホワイトボードには
「アラフオート」と書かれていた。

そして3人の答えは…

「正解です! 正解は40歳の女性に特に人気のお菓

子、アラフオートでした。」

「やったー！」

「これチョココの中で一番好きだよ。」

「これ甘すぎなくて丁度いいんだよねー。」

正解して喜ぶ、穂乃果、白蘭、ブルーベル。

3人は再びアイマスクを装着する。

今度出てきたのは、リボーンの顔が入った饅頭だった。

そしてモニターでその饅頭を確認したツナは…

「何あれ！どう考えてたつてあんな饅頭売ってないでしょ！」

あきらかに正規のルートで売っているものではないということ
ツナは確信する。

そして3人の中で正解したのは…

「正解したのは白蘭選手です！」

「いえーい。」

正解して喜ぶ白蘭。おそらく自分の能力を使って、知っていたもの
だと思われる。

「正解はボンゴレ印のリボーン饅頭です！裏社会のお菓子職人がドス
黒い金を使って作った饅頭ですね。」

「ドス黒い金って…」

「なんか食べる気、うせるわね…」

ドス黒い金と聞いて絵里とにこが呟く。するとリボーン饅頭の購
入方法について説明し始める。

「なおリボーン饅頭をご購入頂きたい方は、裏社会通販サイトボンゴ
レファミリー購買部にてご購入ください。なおリボーン饅頭をご購
入の方には、このリボーンストラップを無料で差し上げます。」

「結局のところただの自分の宣伝じゃん！」

「裏社会通販サイトって本当にあるの…？」

「検索したけど、そもそも検索にひっかからないにや…」

「じゃあ、どうやって買うのよ…？」

リボーン饅頭の購入方法を聞いて、ツナ、花陽、

凜、真姫が言う。

そしてお菓子当て対決は続いていき。このあとは普通のお菓子が登場していく。

3人ともリボン 饅頭の問題のあとは全部正解していく。そして白蘭が一步リードする。

ここでリボンが…

「最後の問題は早押し問題です！この問題で正解した人には2ポイントさしあげます！では最後の問題です！」

そう言うと3人はアイマスクをし、目隠しをしてお菓子を食べる。だが穂乃果に異変が起きる。

「ひっく…」

「おやどうしました？穂乃果選手？」

「27番！高坂穂乃果！歌いまーす！」

いきなりテンションがマックスになる穂乃果。どうやら

さきほど食べたお菓子が原因だったようだ。

「これウイスキーボンボンだね、どうやら穂乃果ちゃんこれを食べて酔っちゃったみたいだね…」

このイベントの為に用意したウイスキーボンボンのせいで穂乃果が酔ったのだと確信する白蘭。

さすがにこれはリボンも予想外だったらしく…

「まさかこんなことになるとはな…」

リボンが呟くと、穂乃果がどこからかマイクを持ってくると、大声で叫ぶ。

「みんなー！乗ってるかーい!!？」

「う、うるさいにゃー！」

「鼓膜が破れるー！」

「穂乃果ちゃんが急におかしくなりました！」

「ど、どうするのよ!？」

耳を押さえながら凜、炎真、ハル、にこが叫ぶ。他のみんなも耳を押さええている状態である。

そして穂乃果は…

「裏社会アイドルの高坂穂乃果だよー！じゃあ私

の新曲今日もパンがうまい！聞いてねー！」
そしてマイクに向かって大音量で歌う穂乃果。こ
のあと酔いが覚めるまで歌は続き、会場で生き
残った人は誰もいなかったという。

#標的（ターゲット） 71 「可愛いと思う」

そして次のイベントのお知らせをリポーンがステージ上からお知らせする。

「次はコスプレ対決だぞ。コスプレ好きなやつは挑戦してみてください。だが今回は参加する上にあたって条件が2つあるぞ。今回の参加できる人数は6人までだ。もし人数が集まらなかったらコスプレ対決は中止して、次のイベントにいくぞ。以上だぞ。」

「コスプレ対決ですか！ハル出たいです！」

コスプレ対決と聞いてハルは、元気よく参加する意思を見せる。

「ハルちゃんコスプレ好きだもんね。自分で衣装を作ったりしてるよね。」

京子がハルが衣装作りをすることを言うと、ハルと同じく衣装作りが得意なことが反応する。

「ハルちゃんも衣装作るんだ。私もよく作るんだよ。」

「本当ですか！」

ことりも衣装作りをすると聞いてハルがそう言う。そして二人は共通の趣味を持つていることを知って、

さらに気があい、衣装作りについて話し始める。

そしてハルとことりはコスプレ対決に参加する

ことを決意する。

すると京子と希が…

「ハルちゃんが出るなら私も出てみようかな。」

「じゃあ、ウチも出てみようかな。」

「ええ!?京子ちゃんと希さんも!?!」

京子と希がコスプレ対決に出ると行ったことに
驚くツナ。

すると希はツナにカードを見せるながら言う。

「カードがゆうてるんよ。このイベントに出るべきやって。」

「へー。そんなこともわかるんですか面白いですね。」

「ちなみにツナ君と炎真君は今まで占ってきた人

の中で一番運勢が悪いんよ。こんなに運勢が悪い

人は初めてなんよ。」

「一番運勢が悪いんですか…俺たち…」

「でも当たってるよね…」

希がそう言うのとツナと炎真は自分の運勢の悪さを思い出ししていく。すると京子はある提案をする。

「そうだ！ユニちゃんも誘ってみようよ！」

「賛成です！さっそく行きましよう京子ちゃん！」

ハルと京子はコスプレ対決に誘いにユニのところへ行く。これで京子、ハル、ユニの3人一組のチームが結成される。

そして、s側のメンバーはあと一人になる。そこでことりが海未にコスプレ対決に参加しないかと誘う。

「海未ちゃんも出てみようよ。」

「わ、私ですか!?し、しかし…!」

ことりに誘われて海未は出ることを躊躇っていた。なぜなら…

「(たださえ人前に出るのは苦手なのに…それに

ツ、ツナ君にコスプレした姿を見られるなんて…

!…ってまた私はツナ君のことを考えて…!)」

人前に出るのが苦手であることもあるが、ツナに自分のコスプレした姿を見られることがなにより恥ずかしいのである。

ほんのりと顔を赤らめそんなことを考えている海未を見て、ツナは

…

「海未ちゃん、どうしたの?」

「え?!いや!ひ、人前に出るのが恥ずかしいというか…そ、それに私が出ても…」

「海未ちゃん、可愛いからいいと思うけどんだけどなー。」

「かかかかかかわいい!?!」

ツナに可愛いと言われて、海未は顔を真っ赤にしてめちやくちや動揺してしまう。

そしてツナが海未に対して可愛いと言ったこ

とに、穂乃果、ことり、にこ、希は…

「(い、今ツナ君が海未ちゃんに可愛いって!／＼／＼)」

「(いいなー…海未ちゃん…!／＼／＼)」

「(な、何で動揺してるのよ私…!／＼／＼)」

「(あの海未ちゃんがあんなに動揺してる…本当にツナ君のことが好きなんやね。)」

穂乃果、ことり、にこは動揺していたが、希は動揺せず冷静であった。

そしてツナにかわいいと言われた海未は…

「かわいい…かわいい…かわいい…!／＼／＼」

「海未ちゃん!大丈夫!」

顔を真っ赤にし頭から煙をあげ、「かわいい」という言葉を連呼している海未を見て、ツナは驚いてしまう。

「ど、どうしたの海未ちゃん?!すっかり!」

ツナは海未に呼びかけるが、海未は今だに「かわいい」という言葉を連呼するだけであった。

そしてそれを見た絵里と真姫は…

「あの海未が…それにツナは全く気づいていないの…?」

「そうなのよ…すごい鈍感なの…」

ツナがもの凄く鈍感であることに驚く絵里。ツナが鈍感であることに呆れる真姫。

もちろん絵里と真姫だけではなく、全員がツナが鈍感だと心の中で思っていた。

#標的（ターゲット） 72 「コスプレ対決説明」

ツナに褒められた海未は、顔を赤くしながらもコスプレ対決に出ることを決意した。やはり想い人であるツナに褒められて、嬉しかったのである。

そしてコスプレ対決が始まる。

「さあ、始まりました！コスプレ対決！今回の参

加者は笹川京子選手、三浦ハル選手、ユニ選手、

園田海未選手、南ことり選手、東條希選手です！」

リボーンがそう言うと、いつものように参加する選手のプロフィールを紹介する。

「笹川京子選手は並盛高校に通う、3年生です。並盛学校ではマドンナ的な存在であります。また笹川選手の兄はボンゴレファミリーの晴の守護者でもあります。趣味はスイーツを食べに行くことだそうです。」

リボーンが京子のプロフィールを紹介すると、今度はハルのプロフィールを紹介する。

「続いて三浦ハル選手は、笹川選手と同じく並盛高校に通う3年生です。趣味は衣装作りとスイーツを食べにくことだそうです。また笹川選手とも仲がよく、よく二人でスイーツを食べにくことがあるそうです。」

「京子ちゃんは私の一番の友達です！」

「ありがとうハルちゃん。」

ハルがそう言うと京子はお礼をいう。リボーンが京子のプロフィールを紹介すると続けてユニのプロフィールを紹介する。

「続いてユニ選手は、ジツリヨネロファミリーのボスであり、元最強の赤ん坊アルコバレイノの一人でありると同時に、元最強の赤ん坊アルコバレイノのボスでもあります。そして未来を見る力…つまり予知能力を持っています。また、sのファンであり、推しは絢瀬絵里さんだそうです。」

「ご丁寧な紹介してくれてありがとうございます。おじさま。」

「「お、おじさま?」」

リボーンのことをユニがおじさまと呼んだことに

驚く海未、ことり、希。

驚いたのはこの3人だけではなく、穂乃果たちも動揺である。そんな中で絵里が尋ねる。

「ねえ、あるこぼれのって何なの?」

「アルコバレーノというのはマファイア界に存在する7人の赤ん坊のことです。裏社会では最強の赤ん坊、呪われた赤ん坊などと呼ばれているんです。リボーン殿もその一人だったんですよ。」

絵里の問いに、バジルがアルコバレーノについて

説明する。その説明を聞いて全員「あんな奇妙

な赤ん坊が他にもいるのか?」と思ってしまうた。

だが穂乃果はユニを見て違和感に気づく。

「え!?でもユニちゃんは全然赤ちゃんじゃないよ!」

「ユニはちよつと特殊なんだよね、でもユニは

呪いのせいであちよつとまで短命…長く生きられ

なかつたんだ。今はもう大丈夫なだけだね。」

「私たちより年下なのに…」

「大変だったんだにや…」

ツナが長く生きられないのは大丈夫だと言ったものの、花陽と凜はステージ上のユニを少し悲しそうな表情で見る。

すると今度はリボーンが海未のプロフィールを紹介する。

「続いて園田海未選手は、音ノ木坂学院に通う3年生であり、スクールアイドル[☆]のメンバーでもあります。音ノ木坂学院では弓道部に所属し、生徒会の副会長をしています。また家は日本舞踊の家元だそうです。」

「もう私はつっこみませんよ…」

リボーンが自分の家のことなどを知っていることに、海未は動じずに冷静でいた。

次はリボーンがことりのプロフィールについて紹介する。

「続いて南ことり選手は音ノ木坂学院に通う、3年生であり、スクールアイドル^μ、sのメンバーでもあります。スクールアイドルとして活動していた頃は、衣装作りを担当していたようです。また秋葉のメイドカフェのバイトをしており、伝説のメイド、ミナリンスキーとして有名です。」

「な、何でそんなことまで知ってるの!？」

メイドカフェでバイトしていることやミナリンスキーのことまでリボーンに知られていることに、

ことりは顔を赤くしながら驚く。

そしてこたりのプロフィールを聞いてツナは…

「え?ことりちゃんがメイドカフェのメイド…?伝説のメイドみなりんすき…?」

驚きを隠せずツナは戸惑ってしまっていた。そんなツナを無視して、リボーンは希のプロフィールについて紹介する。

「続いて東條希選手は音ノ木坂大学に通う、1年生であります。スクールアイドル^μ、sのメンバーであり、音ノ木坂学院に在任の頃は生徒会で副会長だったそうです。また運勢がよく、くじ引きでハズレを引いたことがないそうです。」

「本当にスピリチュアルな赤ちゃんやね。私のことも知ってるん。」

海未と同じく希は全く動揺していなかった。そしてリボーンがコスペレ対決のルールを説明する。

「今回は個人戦です。各個人ごとに私の用意した衣装をどれか選んで着てもらい、会場のみなさまに評価してもらい得点の高い人が勝ちとなります。ちなみに採点方法はみなさまのスマホに送られてるアプリにて投票できます。」

リボーンがそう言うのとツナたちはスマホを見ると見たことのないアプリがいつの間にかダウンロードされていた。どうやらこのアプリから投票できるらしい。

「あー!本当に入ってるー!」

「気づかなかったのな。」

「さすがリボーンさんだな。誰にも気づかれずにこのようなことを

…」

「何で驚かないのよ！勝手にアプリがダウンロードされてるのよ！」

「もつと他にリアクションとかあるでしょ！」

勝手にアプリがダウンロードされているのにも関わらず驚かない穂乃果、山本、獄寺に「こと真姫がツッコミをいれる。ツナも驚いてはいたが、リボーンは「いつの間にも!?」ということをよくやるので特に何も言わなかった。

するとリボーンは今回のコスプレ対決の景品について話す。

「今回のコスプレ対決に勝った人には、人気恋愛漫画である「僕の彼女がピュアすぎてかわいい件」全巻セットをさしあげます！」

「あ、あのだこの本屋に行っても売り切れの人

気恋愛漫画！この漫画を読んでツナ君と距離を縮

められるかな…！」

「(恋愛漫画…これで恋愛について勉強を…って私はなんでこんなことを…!?)」

この優勝商品の恋愛漫画にことりと海未はツナともつと距離を縮めることを考える。

はたして勝つのはどっちのチームか!?

#標的（ターゲット） 73 「決意」

京子、ハル、ユニ、海未、ことり、希をステージの裏に

案内する。そこにはたくさんの衣装が並べられていた。そして衣装の横に服屋にあるような試着室が6つほど用意されていた。

「すごいです！こんなにたくさん！」

「色んな衣装があるね。」

「これから選んでいいの!?!」

たくさんある衣装を見てハルと京子とことりは目を輝かせる。

ことりがリボーンに尋ねると、リボーンは「ああ、構わねえぞ」と言う。

そんな中で海未、希、ユニは衣装を見てあることに気づく。

「こ、これは…」

「海未ちゃんも気づいたん…?」

「おじさま、これってμ、sの…」

「ああ、μ、sの衣装もあるぞ。ファーストライブ、

学校説明会、地区予選、ラブライブ決勝、海外

でのライブの衣装まで全部あるぞ。」

「よく用意できましたね…」

「ボンゴレの力を使えばこのくらいどうってことねえぞ。」

「本当にマフィアなんですよね…?」

マフィアがこんなにもたくさんの衣装を用意していることに、本当にボンゴレがマフィアなのか疑ってしまう。

するとリボーンが付け加える。

「今回、μ、sの衣装は用意したが絶対に着る必要はねえぞ。準備ができたなら呼んでくれ。んじゃあな。」

それだけ言い残すとリボーンはその場から去っていく。

そして残された6人はそれぞれ衣装を選んでいく。

「私はこれかな。」

「ハルはこれにします!」

「じゃあ、私はこれにします。」

京子、ハル、ユニはパツと見てすぐに衣装を選んで試着室に入る。

一方で海未、ことりは何を着るか迷っていた。そんな中で希は着る衣装を決める。

「ウチはこれにしてみるん。」

「の、希!ほ、本当にそれを!」

「せっかくのイベントなんやし。それにツナ君にアピールチャンスやん。」

「え!」

「そ、それって:!?」

希がウインクしながらそう言うと、海未とことりは驚いてしまう。そして希は続けていく。

「海未ちゃんもことりちゃんもツナ君のこと好きなんやろ? ツナ君と付き合いたいなら、ここでアピールする必要があるとウチは思うんですよ。」

「わ、私は別に!?!そ、それよりもことり!あ、あなたも!」

「え!?!いや!そ、それは:その!」

自分がツナのことを好きだということが、希によってばらされてしまいことりは顔を真っ赤にしてしまう。

すると希はさっきの海未の言葉を聞いて、ニヤニヤしながら言う。

「あなたもっていうことは、海未ちゃん自分がツナ君のことを好きって認めたってことやね。」

「い、いや!それはそう意味じゃなくて!ほ:いえ!他にもツナ君のことが好きな人がいるという

人がいるのを知ってるだけであって!」

穂乃果がツナのことを好きだということのを危うく言いかけそうであったが、うまく誤魔化すが希は穂乃果がツナのことを好きだということを知っているので、海未の言葉に騙されることはなく:…

「へー、穂乃果ちゃんと海未ちゃんのことり

ちゃんがツナ君のことを好きやったやねー。
知らんかったわー。」

ニヤニヤしながら棒読みでそう言う希。そして
海未とことりは顔を赤くしてしまう。そしてこ
こでことりは失言してしまう。

「穂乃果ちゃんのことまで！あー！」

「3人ともわかりやすぎるんよ。さっきツナ君に私が抱きついた時
に、もの凄く動揺してたやん。だからツナ君のことが好きなのは一目
瞭然。もうこれで言い逃れはできんよ。」

「い、いや…だから…！」

「そ、それは…！」

希に反論しようとするが、海未とことりは顔を赤くしたまま何も言
えなかった。

そして可愛いらしい反応をする二人に希は…

「ウチは相手が誰であつても手加減する気はない
んよ。ツナ君にどんどんアピールしていつて、
必ずツナ君のハートを射止めてみせるんよ。」

そう言い残すと、希は試着室に入っていく。そして海未とことりは
希の大胆な宣言に驚いて動けずについてしまった。

そしてことりにが海未に…

「ツナ君のこと…好き？」

「…はい…ことりもそうなんですな…」

「うん…不思議だね…同じ人を好きなるなんて…」
希の言葉に影響を受けたのか二人は、ツナのことを好きだといふこ
とを否定しなかった。

そして二人は決意する。

「これからは恋のライバル…ということですね。」
「そうだね。」

「負ける気はないですよ。たとえ相手が幼馴染であつても。」

「うん！私もだよ！」

ツナのことを好きだということ告げた海未とことり

り。
今ここで恋の戦いが始まる。

#標的（ターゲット） 74 「海未の覚悟」

そして6人は着替え終わり、いよいよコスプレ対決が始まろうとしていた。6人はステージの横にスタンバイしていた。

そしてステージ上でリボンがマイクで宣言する。

「どうやら用意ができたようです！ではまず笹川選手、東條選手！お願いしますー！」

リボンがそう言うと、ステージの袖のほうからコスプレした京子と希が出てくる。

そして二人の選んだ衣装は…

「は、恥ずかしいかな…」

「ウチもちよつと恥ずかしいかな…」

京子は警察官の衣装を、希はナース服を着ていた。

その姿に会場中から感嘆の声があがる。そして

穂乃果も二人を見て感嘆の声をあげる。

「うわー！京子ちゃんも希ちゃんもかわいいー！」

「希ったら…だ、大胆ね…」

「ナース服って…」

絶賛する穂乃果に対して絵里、真姫は希のナース

服姿に驚いてしまった。

二人の姿を見てツナは…

「(やっぱり京子ちゃん可愛いな…でも…)」

やはりかつての想い人である京子を見て可愛いと思ってしまうツナ。だがツナは無邪気に笑っている穂乃果ほうを見る。

「(やっぱり今は…)」

「十代目？」

「ツナどうしたんだ？」

「沢田殿？」

「ツナ君？」

穂乃果のほうを見てボーツとしているツナを見て獄寺、山本、バジル、炎真が疑問符を浮かべながら言う。

「ううん。何でもない。」

首を横に振りながらツナはそう答える。この瞬間、ほんの少しだけツナの中にある何かが変わった。

そしてリボンが次に出てくる二人を呼ぶ。

「それでは三浦選手！南選手お願いします！」

ステージの袖のほうからハルとことりが出てくる。ハルとことりが着ていた衣装は…

「ツナさーん！見えますかー！」

「やっぱり私はこの衣装が一番かな。」

ハルは黒いスーツを着て、サングラスを装着していた。おそらくマフィアのイメージしたのだと思われる。一方でことりの衣装はメイド服であった。

そしてハルが叫ぶ。

「ツナさーん！これで私もマフィアの一員ですよー！」

「何言ってるんだよハル！お前はマフィアじゃないだろ！」

「十代目のおっしゃる通りです！おいアホ女！まずはファミリー入団試験に合格してから言いやがれ！」

「そういう問題じゃないから獄寺君！」

ハルに向かってそう叫ぶ獄寺にツナがつっこみをいれる。するとここで穂乃果が…

「マフィアに入るのも試験があるんだねー。でも面白そうだから私、受けてみようかなー。」

「穂乃果ちゃん！ダメだって！受けたらもう終わりだよ！人生が！」

穂乃果にツッコミをいれるツナ。するとバジルがとある話を思い出す。その内容は…

「ならCHDFEに入ってみたらどうでしょう？最近親方様が諜報員を増やしたいと言っていましたから、穂乃果殿をCHDFEの諜報員として拙者が推薦してみましようか？」

「バジル君！真面目に答えなくていいから！」

「諜報員ってスパイのことだよね！私やりたい！」

「なんかめっちゃくちや興味持ってるー!？」

「諜報員スパイと聞いて目を輝かせる穂乃果。興味津々な様子の穂乃果を見てツナが叫ぶ。

ここでさらに山本が…

「じゃあ、ヴァリアーとかどうだ？」

「それ一番ダメなやつだから！」

ヴァリアーに入団することを穂乃果を提案する。山本の提案にツナがツツコミいれる。あの見るからにやばい集団に穂乃果が入ったら一体どうなってしまうのだろうか？

「ばりあーって何ですか？」

「障壁のことじゃないわよね？」

「そんなわけないと思うわ…」

花陽が炎真にヴァリアーのことを尋ねる。絵里がヴァリアーのことを障壁のことだというのが、にこは絶対にそうだと思っていなかった。

「ヴァリアーていうのはボンゴレファミリーが誇る最強の暗殺部隊のことだよ。」

「あ、暗殺!？」

「だ、大丈夫!?花陽ちゃん!？」

暗殺という単語に顔を真っ青にして驚く花陽。

急に顔を真っ青になった花陽を見て炎真は驚

いてしまう。

そんな中で山本が凜のほうを向いて…

「案外、星空とかいけるんじゃないか?才能あるし。」

「暗殺部隊は嫌だにや!でもスパイなら…」

「凜!？」

「ちよっと何考えてるのよー!」

ヴァリアーに入るのは嫌だが、スパイとしてならいいかなと思いはじまる凜。どうやらレオン争奪戦のせい少しマフィアに興味を持ち

始めた凜。そしてマフィアに少し興味を持ち始めた凜に絵里にこが驚く。

「星空殿は確かに山本殿にも負けないぐらいの才能がありますし、いけると思いますよ。ラル殿の修行を受ければ眠っている力を引き出せるかもしれませんね。」

「だから真面目に答えなくていいからバジル君！」

それにラルの修行は……」

未来で受けたラルの修行を思い出すツナ。リボーンにも負けないぐらいのめちやくちやスパルタな修行であったことを。

そんなことを話していると、ユニと海未の出番となる。

「ではユニ選手！園田選手！お願いします！」

「だ、大丈夫ですか……？海未さん……？」

「は、はい……！な、なんとか……！」

リボーンがそう言うのとユニと海未がステージの袖のところから登場する。ユニが着ている衣装はオレンジ色の着物であり、そして海未が来た衣装はなんと少し露出の高い青いチャイナドレスであった。

顔を赤くして恥ずかしがっている、海未のほうを見てユニは心配する。

普段なら絶対に着ることのない衣装を着た海未。はたしてコスプレ対決はどのような展開になるのか!?

海未がチャイナドレスを着たことに、穂乃果たちにも動揺が走る。

「う、海未ちゃんが…」

「あ、あんな露出の多い衣装を…」

「う、嘘でしょ…」

チャイナドレス姿の海未を見て穂乃果、絵里、には信じられないという表情をしながら驚愕してしまっていた。

そしてツナも驚いていたが、なぜあんな衣装を海未が着ているのかわからなかった。

「あ、あの真面目な海未ちゃんが…どうしてあんな衣装を選んだんだろう…?」

「本当にわからないの?」

「え? どういうこと真姫ちゃん?」

「はあ…もういいわ…自分で考えなさい。」

「えー!? 何でそうなるのー!? 教えてよ!」

「(何で穂乃果も海未もことりもこんな鈍い男を好きになったのかしら…? 本当にわからないわ…)」

嘆息しながらどう答える真姫。どこまでも鈍感なツナをなぜを好きになるのか、真姫にはわからなかった。

そしてステージに全員が揃うと、リボンがステージ上から花見の客に向けて言う。

「さあこれで全員出揃いました! それでは皆様、アプリから誰が一番いいか投票してください!」

リボンがそう言うのと、花見の会場にいる人たちはさきほどスマホに勝手にダウンロードされたアプリから誰がいいか投票していた。

一方で海未は、今だに顔を赤くして恥ずかしがっていた。

「や、やはり…は、恥ずかしいです…!」

「大丈夫、海未ちゃん?」

「耳まで真っ赤ですよ?」

「無理しないでいいんですよ?」

「い、いえ!大丈夫です…!大丈夫ですから…!」

京子とハルとユニが顔を赤くして恥ずかしがっている海未を心配するが、海未は大丈夫だと自分に言い聞かせるように言う。

さすがの海未の大胆の行動に希もことりも驚いてしまっていた。

「今さらやけど…まさか海未ちゃんがここまで大胆な行動に出るとは思わなかったわ…」

「希ちゃんがあんなこと言ったから…海未ちゃん真に受けて…」

「ごめんね海未ちゃん…」

悪いと思ったのか、希は海未に聞こえないぐらいの小声で謝る。

そして10分ほど経過すると、集計結果がリボーンのスマホに届く。そしてとうとう中コスプレ対決に決着がつこうとしていた。

「さて集計結果が出ました!優勝したのは誰なのでしょう!それでは結果発表です!」

リボーンが叫ぶと、どこから「ドロドロロ」というドラム音が鳴り始める。

そしてリボーンからコスプレ対決の優勝者が発表される。

「では発表します!コスプレ対決の優勝者は…」

「「「「「…!」」」」」

リボーンがそこまで言うと、京子、ハル、ユニ、海未、

ことり、希は緊張な顔つきになる。

そして…

「園田海未選手です!」

「え…私…?」

なんと優勝したのは海未であった。そして優勝するとも思っていなかったので海未は目を点にして驚く。そして

会場中から拍手が送られる。

そして参加していたメンバーからも称賛の声があがる。

「おめでとう海未ちゃん！」

「おめでとうございます！」

「さすが海未ちゃんやね。」

「すごいね海未ちゃん。」

「さすがはスクールアイドルです！」

「え…いや…あ、ありがとうございます…！」

ことり、ユニ、希、京子、ハルがそう言うとき海未は照れてしまい顔を赤くし、後頭部を右手をかきながら6人にお礼を言う。

「それでは優勝した園田海未選手、一言感想をどうぞ。」

「へ!？」

急にリボーンに感想をと言われて、海未は戸惑ってしまう。それでも海未はリボーンからマイクを受けると感想を述べる。

「え、えっと…！投票してくれて皆様ありがとうございます…！」

そう言う一言だけ言うと、海未は頭を下げる。そして会場中から再び拍手が送られる。こうしてコスプレ対決を

幕を閉じる。

そして6人は元の服に着替えて戻り、元のところへ戻る。

「ツナきーん！私の勇姿を見てくださいましたかー！」

「このアホ女！さっきの言葉は聞きすぎてならねえ

ぞ！何ボンゴレの一員になった気でいやがる！」

「獄寺さんには聞いてないです！そこをどいてください！」

いつものように喧嘩を始めるハルと獄寺。それに対して山本はいつものように笑いながら言う。

「まあいいじゃねえか、獄寺。」

「よくねえ野球馬鹿!」

いつものようなやりとりを繰り返す山本と獄寺。一方で穂乃果は海未に…

「まさか海未ちゃんがあんな格好をするとは思わなかったな。ねえ どうしてどうして!?!」

「べ、別にどうでもいいではないですか!」

「どうでもよくないよ!海未ちゃんがあんな格好をするなんて絶対何か理由があるはずだよ!」

「ほ、ほっておいてください!」

どうやら穂乃果だけは、海未があんな衣装を着たのかわかっていなかったようだ。そういうところはツナと似ているようだ。

そしてツナは海未に…

「お疲れ様、海未ちゃん。優勝おめでとう。」

「え!?あの…あ、あんな衣装を着て…その…!」

「うん、驚いたよ。でもすっごく似合ってたよ。」

「そ、そうですか…!」

自分がチャイナドレスを着たことにツナに変な目で見られるんじゃないかと思った海未であったが、ツナは何も思っていないかったので海未は安心する。

そしてツナは投票結果のことについて話す。

「実はさ俺、海未ちゃんに投票したんだよね。」

「そ、そうなんですか!?!」

「うん。だってとつても魅力的だったから海未ちゃん。」

「み、魅力的!?!」

このツナの一言にやはり海未は顔を真っ赤にして気絶してしまう。そしてツナはいつものようになぜ海未が気絶したのかわからなかった。そして他のメンバーもいつm1のように呆れてしまっているのだった。

#標的（ターゲット） 76 「最後のイベント」

そしてこのあとも様々なイベントが行われた。そして楽しい時間もあつという間に終わっていき。とうとう最後のイベントととなる。するとリボーンからこんな提案がされる。

「次が最後のイベントだぞ。だが最後のイベント

は特に何も考えてねえ、だから何かイベントをや

りたいっていうやつは言ってくれ。待ってるからな。」

「もう終わりかー。なんかあつという間だったなー。」

「本当だな。でも最後のイベントは何かやりたい奴って言ってたけど、どうするんだ?」

最後のイベントについてツナと山本が呟く。

そんな中で穂乃果があることを思いつく。

「そうだ！ライブやればいいんじゃない！雪穂と亜里紗ちゃんが！」

「え!?!」

「私たちが!?!」

穂乃果の提案に雪穂と亜里紗が驚いてしまう。そして本当はさらに続ける。

「うん！春休みにダンスの練習とか歌詞作ってたからさ！せつかくのチャンスだよ！」

「で、でも…」

「まだ私たちには…」

穂乃果がそう言うが、雪穂と亜里紗は迷ってしまう。するとそこに

…

「やってみたらいいじゃねえか。」

「リボーン！」

ツナが驚くと、いつの間にかツナたちのところへリボーンがやって

来ていた。するとリボーンは雪穂と亜里紗に言う。

「衣装もあるし、ステージのあるんだ。ファーストライブには最適じゃねえか。それに失敗したって、いいじゃねえか。これはラブライブのでもね

えし、ネットにアップされるわけじゃねえしな。仮にそういう奴がいたら…俺がそいつの頭に銃弾コイツをぶちこんでやるから安心しろ。」

「安心できないって!」

リボーンが相棒であるレオンを銃に変形させながら言うと、ツナがつっこみをいれる。そして再びリボーンが雪穂と亜里紗に言う

「大事なのは結果じゃねえ。やろうとする勇氣だ。」

「やろうとする…」

「勇氣…」

リボーンの言葉を受けて雪穂と亜里紗の心が動く。そして二人は決意する。

「やってみようかな。」

「亜里紗も!」

「いい返事だぞ。」

「あ、でも曲をダウンロードしたCDは家に…」

「問題ねえぜ。俺がお前の家まで連れて行ってやるよ。」

亜里紗がCDを家にあることを思い出すと、そこへディーノが車の鍵を持ってやってくる。

「ディーノさん!」

「話は聞かせてもらったぜ。さっそく行こうぜ。」

「はい!」

そう言うのと雪穂とディーノは麓にあるディーノのフェラーリのところまでいき、穂むらまで戻っていく。そしてリボーンに亜里紗は…
「んじや亜里紗には、衣装を選んでもらうぞ。ついてこい。」

「はい!お姉ちゃん!みなさん!私たちのファーストライブ見てくださいー!」

そう言うのと亜里紗はリボーンについていき、衣装を選びに行く。

そしてリボーンのことについて穂乃果が…

「なんか凄いね、リボン君って。雪穂と亜里紗ちゃんあんなに迷ってたのに、やるって決意させるなんて。さすがツナ君の家庭教師だね。」

「まあね。俺も、みんなもリボンのああいう一言に助けられたから。」

そう言うとツナは今までの戦いでリボンに助けられたことを思い出す。

雪穂と亜里紗ファーストライブが始まろうとしていた。

#標的（ターゲット） 77 「ファーストライブ」

1時間後そして雪穂がディーノと、一緒に戻ってくる。ディーノが部下の人を連れていなかったので雪穂は大変な目に遭ったらしい。

それはともかくとして雪穂と亜里紗のファーストライブが始まるうとしていた。

「皆様、大変長らくお待ちいたしました。これより最後のイベントである高坂雪穂さん綾瀬亜里紗さんによるファーストライブを行います。それではどうぞ。」

リボンがステージ上からマイクでそう言うと、雪穂と

亜里紗が衣装に着替えて登場する。二人は多少恥ずかしがりながらもステージの真ん中に立つ。

そんな二人の姿を見て穂乃果と絵里は…

「うわー！雪穂も亜里紗ちゃんも可愛いー！」

「亜里紗…」

雪穂の衣装を見て穂乃果は目を輝かせ、絵里は亜里紗の姿を見て少し感動してしまっていた。

そして雪穂と亜里紗は挨拶する。

「え、えっと…今日はこのようなステージを用意してもらってありがとうございます。私たちはスクールアイドルとして活動しています。といってもこれがファーストライブなんです…」

「まだまだスクールアイドルとしては未熟なところもたくさんあります。短い期間ではありますが私たちはラブライブに向けて練習してきました。だからその成果を見てください。」

「それでは聞いてください、『未来へと歩き出す一步』」

雪穂と亜里紗が曲のタイトルを言うと、ステージ上から曲が流れ始める。そして二人のファーストライブが始まり、曲にあわせて二人は踊り始める。

「亜里紗ちゃんと雪穂ちゃんこの短時間であそこまで…」

「スクールアイドルとして、先が楽しみですね。」

雪穂と亜里紗のライブを見てことりと海未が呟く。

そしてツナはあることに気づく。

「そういえばアイドルのライブを生で見るのは始めてだなー。μ'sのライブは動画でいつも見てるけど。」

「それなのにあんた、私たちのことを気づかなかったわよね。」

「そのことについては本当にすいませんでした…」

μ'sのことを動画で見ているのに全く気づかれなかったことをここがツナに言う。そしてそのことについて心の底から謝るツナ。

そしてライブは最終局面を迎え、雪穂と亜里紗のファーストライブが終了する。そして会場中から拍手が送られる。

「雪穂！成功だね！」

「うん！」

無事にファーストライブが成功したことを喜ぶ亜里紗と雪穂。ファーストライブが無事に終えたの束の間、突如メキメキという音が会場の奥から響きわると、突如巨大な怪獣が現れる。

「ウオオオオオオオオ！」

「あ、あれは十代目！跳ね馬の！」

「エ、エンツイオ！な、何で!?!」

デイーノ相棒の亀であるエンツイオが巨大化したことに獄寺とツナが驚く。そして突然巨大したエンツイオを見て全員驚いてしまう。そしてにこと真姫がエンツイオのことについて尋ねる。

「な、なんか現れたわよ！」

「な、何なのよあの怪獣！」

「デイーノさんのペットの亀で、水をかぶると巨大化するスんです！」

「ま、またこういうなんですか！どうしてツナ君のまわりはこんなありえないことばかりなのですか!?!」

「え!?!俺のせいなの!?!俺のせいなの!?!」

海未がツナに文句を言うのと、ツナは目玉が飛び出るほど驚きながら叫ぶ。

そして全員、会場から逃げる。だがエンツイオはなぜかツナのほうへ向かってくる。

「な、何で俺のほうに!?!」

「十代目!・今行きます!」

獄寺がエンツイオに追われているツナをのどころへ行くこうとする。がエンツイオは途中でつまずいてツナはほうへゆっくりと倒れていく。

「ちよ…あ…!」

「十代目!」

「ツナ君!」

獄寺と穂乃果の叫ぶも虚しく、ツナはエンツイオは踏み潰されてしまふ。

こうして花見は（ツナだけ）無事に終わらなかったのであった。

#標的（ターゲット） 78 「聞きたかったこと」

花見も終わり、全員家に帰宅する。そしてツナは…

「身体中が痛い…」

エンツイオに踏み潰されて身体中を痛めていた。中1の頃はこれで入院してしまっただが、あれから修行していたので痛いぐらいですんでいた。

するとツナのスマホからLINEの無料電話がかかってくる。

「電話だ。穂乃果ちゃんからだ！」

相手が穂乃果だとわかって、スマホを手に取ると電話をとる。

「もしもし？穂乃果ちゃん？」

『あ！ツナ君？ごめんね夜遅くに。』

「ううん大丈夫。それよりどうかしたの？」

『体のほうは大丈夫かなって思っただけ。大きい亀に踏み潰されちゃったからさ。』

「まだ体は痛いけど大丈夫だよ。」

『そっかー。なら良かった。』

大丈夫だと聞いて安心する穂乃果。普通ならありえないと言うところだが穂乃果はそんな細かいことは何も気にしていなかった。

そしてこのあと今日の花見こと、明日からまた学校が始まるということ話す。そしてツナはずっと気になっていたことを穂乃果に尋ねる。

「ねえ穂乃果ちゃん。聞きたいことがあるんだけどいい？」

『何？』

「穂乃果ちゃんって好きな人がいるって花見のイベント時に言ってたけど…本当なの？」

「え…それは…その！」

「ご、ごめん！変なこと聞いて！やっぱり今のは忘れて！」

穂乃果が戸惑っていたことと、急に答え聞くのが怖くなったツナはやっぱり聞くのを断念する。ツナの質問に戸惑って穂乃果だったが…

『いるよ。』

「え？」

『名前は言えないけど、私には好きな人がいるよ。』

「そ、そうなんだ…どんな人なの？」

『とつても優しいんだ。そして一緒にいるとすつごく楽しいんだ。その人といるとありえないことか起きたりとかして。』

「そっか…」

『それにしてもツナ君。どうしてそんなこと聞くの？』

「え!?!いや！興味本位だよ！イベントの時にいるって聞いてずっと気になってたんだ！」

穂乃果に何故こんなことを尋ねるのかと聞かれて、ツナは焦って嘘をつく。本当は興味本位とかではないのだが。

すると今度は穂乃果がツナに同じことを尋ねる。

『そういうツナ君は好きな女の子とかいないの？』

「お、俺!?!いいいや！いないよ…!?!」

『なんか嘘ついてない…？私ほちゃんと云ったんだよ！』

「ご、ごめん！穂乃果ちゃん！」

穂乃果はツナが嘘をしていると思ったのか、少し強い口調で尋ねるとツナは穂乃果に謝る。そしてツナも自分に好きな人がいることを話す。

「お、俺にも好きな人はいるよ…」

『へーやっぱりいるんだ。それでどんな人なの？』

「とつても笑顔が素敵で、明るくて、前向きで…俺の好きだった人に似てるんだ…」

『え!?!ツナ君って好きな人いたの!?!』

「うん…告白はしたんだけど一方的な片想いで終わっちゃったんだ…俺のことは友達としては嫌いじゃないけど、恋愛的にはちよつとわか

らないって言われて…」

『そっか…』

「未練がないわけじゃないけど、今は告白した子より今好きな女の子のことが好きだよ。でも怖いんだ…」

『怖い?』

「うん、俺がマフィアの十代目なのは知ってると思うけど、そのせいで前に好きだった子をマフィアの戦いに巻き込んだりやって…それでもた今好きな女の子に巻き込んだりやったらと思うと…」

『そうなんだ…』

「暗い話になってごめんね。」

『ううん大丈夫だよ。それよりも明日からお互い学校だから頑張ろうね。ファイトだよ!』

「そうだね。また何かあつたら遊ぼう。」

『うん。』

そう言うと穂乃果は先に電話を切る。そしてツナ

の話を聞いて穂乃果は…

「ツナ君にも好きな人がいるんだ…相手は誰かはわからないけど、私だって負けるないよ!絶対にツナ君を振り向かせてみるよ!」

ツナに好きな人がいると聞いて穂乃果はツナを振り向かせることを決意する。だが穂乃果は知らなかった、ツナの好きな人が自分であるということに。

#標的（ターゲット） 79 「通りかかったら」

そして花見から2日後。今日、音ノ木坂学院は職員会議の為、午前中で授業で終わる。

そして2年生の教室では凜が花陽をラーメンを食べに行かないかと誘っていた。

「ねえねえかよちん！ラーメン食べにいかないかにや！」

「ラーメン？急にどうしたの凜ちゃん？」

「今日はもう全員下校だから、前に花見のイベントでもらったラーメンの無料券があるから、行くなら今がいいかなって思ったにや。」

「そういえばもらってたね…あ！でも花見でもたくさん食べちゃったから体重が…」

花見の大食い大会で食べすぎたことを思い出して

花陽は体重のことを気にしてしまう。すると凜が

残念な表情をしながら言う。

「確にかよちん花見でたくさんおにぎり食べてたし、無理だよね。これ以上、お米を食べたら本当に太っちゃうにや。」

「え？ラーメンを食べにいくんだよね？どうして

お米が関係があるの？」

「並盛ラーメンは12時から2時の間までに来店した人にはちよつとしたバイキングがあるんだにや。その中にご飯がおかわりし放題があつたんだにや。だからかよちんが喜ぶかなって思ったんだにや。」

「ご飯おかわりし放題…」

「ご飯おかわりし放題と聞いて花陽は迷ってしまふ。食べたいという気持ちとこれ以上食べたらず太ってしまうという気持ちに。」

そして花陽の下した決断は…

「着いたね！凜ちゃん！」

やはりご飯おかわりし放題ということだ。花陽は我慢できずに凜と一緒にバスに乗って並盛町にきたのだった。

「じゃあさっそく並盛ラーメンに行くにや！」

「凜ちゃん。並盛ラーメンがどこにあるのか知ってるの？」

「大丈夫にや！ちゃんとスマホに場所が乗ってるにや！」

「本当だね！じゃあ行こっか！」

そう言うのと花陽と凜はワクワクしながら並盛ラーメンへと向かっていく。そしてスマホの地図を見ながら歩いて並盛ラーメンへ向かっていくこと15分、住宅街に入っていく。

すると花陽はあることを思い出す。

「そういえばツナさんの家ってどの辺なのかな？にこちゃんは家に行ったことがあるって言ってたけど。」

「さあ？わかんないにや？」

ツナがどの辺に住んでいるかと凜と花陽が話していると…

ドーーーーー！

「ぎゃーーーーー！」

「な、何だにや!？」

「ば、爆発!？」

二人の横にある家の2階から爆発音と誰かの悲鳴が聞こえ、凜と花陽は驚いてしまう。するとそして2階から黒い煙があがり、そこから…

「リボーン！何でいつつも答えを間違っただけで爆発されなくちゃいけないんだよ！」

「これが俺のやり方だって言ってんだらうが。」

「だから間違いだろ！そのやり方！」

「じゃあ、爆発じゃなくて電気ショックに変えてやる。」

「そういう問題じゃない！」

「あれ？この声って…」

「まさか…」

聞いたことのある声に凜と花陽は驚いてしまう。どうやらこの家がツナの家であることを花陽と凜は確信する。

すると玄関先から誰かが出てくる。

「あれ？花陽姉と凜姉だ。何してるの？」

「あ！フウ太君！」

「やつぱりこの家って…」

「うん。ツナ兄の家だよ。それよりもどうしたの花陽姉も凜姉も？学校があるんじゃないの？」

「今日は学校が早く終わったんだにや、だからこの前の花見で貰ったラーメン無料券があるから並盛ラーメンに行く途中だったにや。」

「へーそうだったんだ。並盛高校もそうらしくて、ツナ兄も早く帰ってきたんだよ。」

フウ太がそう説明すると、再びツナの家の2回から爆発音とツナの断末魔が聞えてくる。

ドーーーーー！

「ぎやーーーーー！」

「えつと…爆発音とツナさんの断末魔が聞えてるけど大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、いつものことだから。たぶん勉強で間違えたからリボーンに爆発させられたんだよ。」

「そ、そうなんだ…」

「普段からあんな感じなのかにや…」

爆発音とツナの断末魔のことについてフウ太が説明すると、花陽と凜は顔を引き攣らせながら言う。

そして今度は…

「これは前にやったはずだらうが！」

「グヴェ!？」

リボーンがツナを屋根蹴り飛ばす、そしてそのままツナは2階から庭に落ちてしまう。そして頭部を強打し頭を押えながらツナは叫ぶ。「グビヤ!?! いったえー!！」

「だ、大丈夫ですかツナさん!！」

「頭から落ちたにや!！」

「あれ? 何で花陽ちゃんと凜ちゃんがここに?！」

2階から落ちたツナを心配して、花陽と凜がツナのところに駆け寄る。そして花陽と凜が自分の家に

いることに驚くツナ。

するとフウ太がかわりにツナに説明する。

「今日は学校が早く終わったから、並盛ラーメンにラーメンを食べにきたんだって。」

「そういえば並盛ラーメンの無料券もらったね凜ちゃん…ラーメンか…そういえばまだ昼食べてないや…」

「じゃあ、凜たちと一緒にいこうにや!！」

「え? いいの?！」

「無料券は5枚あるし、花見を楽しませてくれたお礼だにや!！」

「じゃ、じゃあ…「逃げられると思うなよツナ」ひiiiiiiiiiiii!！」

凜と花陽と一緒にラーメンを食べに行こうと返事をしようとするツナだったが、リボーンがドスの聞いた声で2階からそう言う可悲鳴をあげる。

そしてリボーンが2階から、庭へ飛び降りる。

「ちやおっす花陽、凜。お前らボンゴレに入る決心はついたか?！」

「会って一言目がそれかよ! それと二人をボンゴレに勧誘するなって!！」

いきなり花陽と凜をボンゴレに勧誘しようとするリボーンにツナがツツコミをいれる。

「凜はちよつと、マフィアに興味が出てきたにや! 思ってたイメージと違って面白そうだにや!！」

「凜ちゃん!?!！」

ワクワクした表情をしながらそう言う凜に、ツナと花陽は驚いてしまふ。

そして話題はラーメンのことにになり、凜がリボーンとフウ太を誘う。

「リボーン君もフウ太君も一緒にラーメン食べにいかないかじゃ？」

「僕、行きたい！」

「ツナの宿題もあるが、行つてやるか。そのかわ

りツナ、今日の夜はネツチヨリ勉強だからな。」

「えー！？！そんなあー！」

かくして凜、花陽、ツナ、リボーン、フウ太と一緒に並盛ラーメンに行くこととなった。

#標的(ターゲット) 80 「ラーメン好きのおじさん」

ツナ、リボーン、フウ太、花陽、凜の5人は並盛ラーメンの入口前につく。

「美味しそうな匂いにだにや!」

「お米食べ放題…」

「あ、そっか! 並盛ラーメン^こって12時から2時までご飯の食べ放題やってたっけ…」

ラーメンのいい匂いに凜はワクワクし、ご飯食べ放題に期待に胸を膨らませる花陽。もちろんラーメンが食べられることも楽しみではあるのだが。そしてツナは花陽の言葉を聞いて、並盛^こラーメン^店がご飯食べ放題だということを思い出す。

そしてフウ太がここで並盛ラーメンについて話す

「この並盛ラーメンは並盛町で美味しいラーメン屋さんランキングで1位だからね。」

「そうなのかにや!?! 楽しみだにや!」

「そ、そんなランキングがあるんだ…」

並盛町で美味しいラーメン屋さんランキングという言葉に凜はさらにワクワクし、花陽はそんなランキングがあることに驚いていた。

そしてリボーンはフウ太のことについて話す。

「フウ太にランキングつけさせたら右に出る者はいねえんだ。フウ太は裏社会ではランキングフウ太と呼ばれてるんだぞ。フウ太を手に入れれば世界を手にいれたも同然なんだぞ。」

「そ、そんなにフウ太って凄い人だったんだにや…」

「だから前に誘拐犯がフウ太君を…」

リボーンからフウ太のことについて聞いて聞いて凜と花陽はフウ太がす

「ごい人物だと知って驚いてしまう。」

そして5人は店内に入る。

「いらつしやいませー。お好きな席へどうぞ。」

店員がそう言うとき5人はカウンターの席に座ろうとするがツナとリボンがカウンターに座っている席の人を見て驚いた表情をする。驚いている表情をしているツナとリボンを見て凧が尋ねる。

「どうしたにや?」

「い、いや…あそこに座っている丸眼鏡をかけたおじさんが知り合いです。」

ツナはカウンターに座っている、丸眼鏡をかけたおじさんを指をさす。すると丸眼鏡をかけたおじさんはツナたちに気づく。

「おや? 沢田綱吉君にリボン君じゃないか。」

「お、お久しぶりですチエ: 川平のおじさん。」

川平のおじさんが挨拶すると、ツナも挨拶する。この男は世界の礎であるトウリニセツテの元管理者であり、リボンたちを赤ん坊の姿にした川平の

おじさんことチエツカーフェイスである。

「君はフウ太君だね。そちらのお嬢さんたちは?」

「え、えっと…隣町の音ノ木坂学院に通っている俺の友達です。」

「星空凧です。」

「小泉花陽です。」

「どうも初めまして、この近所に住んでいる川平です。」

凧と花陽が自己紹介すると、それに続いて川平のおじさんも一礼しながら自己紹介する。すると川平のおじさんが並盛ラーメンの店のおすすめを教えてください。

「並盛ラーメンの店はしょう油ラーメンがお勧めだよ。是非、食べてみるとうい。」

「本当かにや!? 食べてみるにや!」

しょう油ラーメンがお勧めだと聞いて凧はしょう油ラーメンを食べることを決める。そしてフウ太と花陽はとりあえず他のメニューを見ていた。

そしてツナが川平のおじさんに小声で尋ねる。

「あの…何してんるんですかこんなどころで？」

「何って？ラーメンを食べに来ているだけだが。」

「いえ…そういう意味じゃなくて…」

「トウリニセツテの管理する仕事もなくなったんだ。だから暇でね、だからこうしてラーメンを食べにきているんだ。ラーメンは好物なんだね。」

「そ、そうなんですか…」

そう言うとツナは10年後のイーピンが川平のおじ

さんにラーメンの出前を頼んでいたこと、未来で

ラーメンを食べていたことを思い出す。

すると川平のおじさんはリボーンに尋ねる。

「どうだい？呪いがなくなっただけからの生活は？」

「変わったのは長く生きられるっただけだ。呪いがなくなってもツナをボンゴレのボスにするっていう使命は変わんねえ。」

「君らしいね。」

リボーンという言葉に川平のおじさんはそう呟く。そして川平のおじさんはラーメンの汁を飲み干すと、立ち上がると店から出ようする。

「それじゃ私はこれで。あ！お嬢さんたち、この店はたまに大食いチャレンジが開かれたりするから、もしよかったら挑戦してみるといい。それとここは炒飯も絶品だから、お勧めするよ。」

そう言い残すと川平のおじさんは店から出ていくのだった。

#標的（ターゲット） 81 「何で？」

そして全員それぞれ違うラーメンを注文し、ラーメンを食べながらツナたちは、話をしていく。

「凜ちゃんと花陽ちゃんって幼馴染なんだ。」

「そうだにや！かよちんとはずつと一緒だにや！」

「幼馴染かー、そういうの俺にはいないなー。」

「それどころか、俺が家庭教師かてきょうとして来るまで友達がいなかっただろお前。」

「一言余計だよ！まあ…事実だけど…」

リボーンに本当のことを言われて叫ぶツナだが、本当のことなのでちよつとシユンとしてしまう。

そして花陽がツナのことについて尋ねる。

「ツナさんって、中学の時ってどんな人だったんですか？」

「逃げ腰でチワワにビビってたな。あとは勉強も運動もダメダメだったな。これは今も変わんねえけどな。」

「チワワが怖いって…」

「あ、あんなに可愛いのに…」

チワワにビビっていると聞いて凜と花陽は驚いてしまう。そしてリボーンに自分の過去をばらされてツナは顔を赤くしながら言う。

「もうそれは昔の話だろ！それに運動はともかく、中学の時に比べたら勉強はできるようになっただろ！」

「どこがだ。確かに中学の時より点数が上がったって言っても、いつもテストは欠点ギリギリじゃねえか。そんなんでもボンゴレのボスになれると思うなよ。」

「だから！マフ…ボンゴレは継がないって言ってるだろ！」

まわりに人がいるのでツナはマフィアとは言わず、ボンゴレという単語を使ってリボーンにツツコミをいれる。

するとフウ太は凜と花陽に尋ねる。

「凜姉と花陽姉はどうしてスクールアイドルを始めたの？」

「あ、それは俺も知りたい。」

フウ太がスクールアイドルになったきっかけについて尋ねると、ツナもフウ太の質問に興味を示す。

すると花陽からスクールアイドルになったきっかけについて話す。「え…えつと私は穂乃果ちゃんたちに誘われて…元々私はアイドルは好きだったんだけど、自分がスクールアイドルをやるってなったら勇気がなくて…でもそんな時、凜ちゃんと真姫ちゃんが背中を押してくれたんだ。」

「そうなんだ。なんかいい話だね。」

「そうだね。」

花陽がスクールアイドルになったきっかけを聞いてツナとフウ太は感動する。

それに対してリボーンは…

「んじゃ、俺が殺し屋ヒットマンになったきっかけを…」

「言わなくていいって！というか誰が聞きたいんだよそんな話！」

「え？凜はちよつと興味があるにや。」

「凜ちゃん!?!なんかちよつとおかしくない!?!」

興味があると言った凜に驚くツナ。少しずつではあるがマフィアに興味を持ち始めている凜である。そしてリボーンが殺し屋ヒットマンになつたきっかけを語る…のかと思われたが…

「なんてな。殺し屋ヒットマンは自分の素性を明かすことはしねえんだ。だから秘密だぞ。」

「結局言わないのかよ！別に聞きたくはないけど！」

結局のところ自分の素性について話さないリボーンにツナがツッコミをいれる。そしてリボーンの殺し屋ヒットマンになつたきっかけは語られずに終わる。

そして次は凜が自分がスクールアイドルになつたきっかけを話す。

「凜はそもそもスクールアイドルになる気はなかったにや。」

「え？…そうなの?」

「うん。凜って女の子ぽくないし、アイドルなんて向いてないって思ってたから…」

「え？どこが？」

「え？」

女の子ぽくないという凜の言葉にツナは疑問符を浮かべるツナ。そしてツナの言葉に凜は驚いてしまう。

「だって凜ちゃんはどこから見ても普通の女の子だし、普通に可愛いと思うんだけど。何で凜ちゃんがそんなことを言うのか俺にはわからないよ。」

「え…!?／／／」

ツナの言葉に凜は顔を赤くしてしまう。今まで男の子にこんなことを言われたことのない凜はこの言葉は衝撃的であった。

そして凜の心臓がドキドキし始める。

「(し、心臓がドキドキするにや…!／／／も、もしかしてこれが恋…!?／／／)」

「凜ちゃん？」

「い、いや！何でもないにや！」

「？」

凜の様子がおかしくなったことにツナは首を傾げる。そんなリボンにツナとフウ太が…

「またやりやがったな…」

「ツナ兄、もっと乙女心を勉強したほうがいいよ。」

「え!?何で!？」

またまた気づかないうちにフラグを立ててしまうツナ。超直感でも乙女心を見透かすことはできないツナであった。

#標的（ターゲット） 82 「行くかどうか？」

ツナたちは並盛ラーメンを出す。あれから花陽が
ご飯をおかわりしツナたちやお客さんや店員が驚
いたのは言うまでもない。

「美味しいかったねツナ兄。」

「そうだね。ありがとう凜ちゃん、俺たちを誘ってくれた上に無料券
を使かわせてもらっちゃって。」

「へ?!別に問題ないにゃ!」

あれからツナを意識してしまつて、凜はどうして
も変な態度になつてしまう凜。あのあとあんなに
好きだつたラーメンがツナを意識してしまいラー
メンの味がほとんど感じなかった。

「急にツナの顔が見られなくなったにゃ…!それにあんなに好き
だつたラーメンが全然味がしなかつたにゃ…!／＼／＼」

『だつて凜ちゃんはどこから見ても普通の女の子だし、普通に可愛い
と思うんだけど。何で凜ちゃんがそんなことを言うのか俺にはわか
らないよ。』

「（それにあんなこと言われたのは初めてだにゃ…!／＼／＼）」

小学校の頃、スカートをはいて男子にからかわれ
て、少なくとも男子からは自分のことを女の子と
思われていないのだと思うことが何度かあった。
だがツナは自分のことを純粹な心で何の躊躇いも
なく「可愛い」と言ってくれた。そのことが凜
にとつては衝撃的だった。

そんなことを凜が考えていると花陽が心配して小声で話しかける。
「凜ちゃん大丈夫?」

「う、うん…！ねえかよちん…!？」

「何？凜ちゃん？」

「穂乃果ちゃんたちが何でツナを好きになったかわかった気がする
にや…！／／／」

「凜ちゃん…やつぱり…」

顔を赤くしながら言う凜を見て花陽は、小学校の頃に凜が男子にか
らかわれたことを思い出す。そしてさっきのツナの言葉が凜にとつ
てどれだけ嬉しかったのか理解する。

するとツナが凜と花陽にこれからのことを尋ねる。

「ねえ二人はこれからどうするの？」

「どうするって…特に何も…」

「家ウチに来ない？せっかくだからさ。ナッツもいるよ。」

「本当かにな?!あ…！」

ナッツが家にいると聞いて凜は目を輝かせながらツナのほうを見
るが、意識してしまつて顔を赤らめながらツナのほうから視線をそら
す。また変な様子になつた凜を見てツナは首を傾げる。

そして花陽が尋ねる。

「でも急に行つて迷惑じゃないですか？」

「大丈夫だよ。あ！無理なら別にいいんだよ！」

「私はいいですけど、凜ちゃんは…つて凜ちゃん!？」

「ツナの家…！」

花陽が凜のほうを見ると顔を赤くし、頭から蒸気を出していた。凜
はツナの家に行く緊張して行くかどうか迷っているのだ。さらに
ナッツに会いたいという気持ちもあり、行くかどうかさらに迷つてし
まっている。

そんな様子の凜を見てツナが心配する。

「凜ちゃん大丈夫!？」

「だ、大丈夫だにな…！」

「本当に!?顔が赤くなってるよ!？」

「本当に大丈夫だにな!と、とにかく行くこうにや!」

叫んで誤魔化そうとする凜。するとリボンと

フウ太が凜に気を使つてこんなことを言う。

「んじや、俺たちは近くのカフェでも行くかフウ太。」

「そうだね。花陽姉も一緒に行こうよ。」

「え…でも…」

「二人とも気を使わなくていいにや！かよちゃんも行かないで！」

リボンとフウ太が二人つきりにさせようと気を使いこだしたことに凜はすぐに気づいて、顔を真っ赤にさせながら叫ぶ。

気を使うという凜の言葉にツナは疑問符を浮かべる。

「気を使うってどういうこと？」

「へ?!いや…!?!/ /」

ツナに尋ねられて、さつき言った言葉の意味を答えられなくなってしまふ凜。

このあと凜はなんとか誤魔化して、ツナの家に向かうだった。

#標的(ターゲット) 83 「凜と花陽のランキング」

並盛ラーメンから歩いて15分、ツナの家に着く。

そして家の玄関に入るとツナの母である奈々が迎えてくれる。

「ツナ、リボン君、フウ太君おかえり。あら？そちらは新しい友達？」

「こ、小泉花陽です。」

「ほ、星空凜です。」

奈々が花陽と凜のほうを見ると、二人は少し緊張しながら自己紹介する。

奈々は二人を見て喜んでしまう。

「花陽ちゃんに凜ちゃんね。またツナにこんな可愛いお友達ができたのね、嬉しいわ。にこちゃんに続いてツナにお嫁さん候補がこんなに。」

「おお、お嫁さん!?!」

「母さん!変なこと言うなよ!」

お嫁さんという言葉に凜は顔を真っ赤にし、花陽は普通に驚いてしまっていた。そして奈々の発言にツナがツツコミをいれる。

そんなことも気にせず奈々はリボンに言う。

「そうそうリボン君、コーヒーが余ってるけど飲む?」

「ああ、貰うぞ。」

コーヒーの余りがあると聞いてリボンは先に台所へ向かう。そして奈々は「ゆっくりしていいってね」とそう言い残すと台所へ戻っていく。

そしてツナ、花陽、凜、フウ太はツナの部屋に行く。

部屋に入ると、ベッドの上でナッツがゴロゴロとしていた。そしてゴロゴロとしているナッツを見て凜は目を輝かせる。

「凜丸——会いたかったにや——！」

「ガウ!？」

突然、凜が現れて叫んだことにナッツは驚いてしまう。そして凜はナッツを抱き寄せると自分の頬

とナッツの頬をくつつけてスリスリさせる。

ナッツは少し苦しそうな顔をしていたが、

凜はナッツに再会できてもの凄いい嬉し様子で

あつた。

ナッツを抱いて幸せそうな凜を見てツナはと花陽は笑顔その光景を見ていた。

「本当に凜ちゃんはナッツのことが好きだよね。」

「ナッツちゃんはライオンだけど、猫に近いですから。凜ちゃん嬉しいんだと思うんです。」

とツナと花陽が言うと、フウ太が自分が調べたランキングを記録したランキングブックを取り出すと、凜のランキングについて発表する。

「凜姉は猫への愛が強い女子高校生ランキング71465人中12位なんだよ。」

「すげえ…凜ちゃん…」

「そんなに猫が好きだったんだね…」

「凜は猫が大好きだよ！」

フウ太のランキングを聞いて、ツナと花陽は凜の猫への愛がどれだけ凄いのか理解すると同時に驚いてしまう。

すると花陽はフウ太のランキングのことに尋ねる。

「それよりフウ太君はランキングが得意って聞いたけど…どうやって調べてるの?？」

「ランキング星と交信して、ランキングを調べるんだ。」

「ランキング星…?？」

「とうとうマファイアも宇宙へ行つたのかにや…?」

ランキング星という単語を聞いて、凜と花陽はどう反応していいかわからず戸惑ってしまう。花陽と凜の反応を見てツナも「わかるわけではないよな…」と心の中で思ってしまう。

フウ太はさらにランキングブックのページをめ

くると今度は花陽のランキングについて発表する。

「花陽姉のランキングもあるよ。」

「ほ、本当に!?!」

「うん。アイドルについて詳しい女子高生ランキング85574人中、1位だよ。」

「わ、私が1位!?! 本当に!?!」

「さすがかよちゃんだにや!」

まさかの1位だったことに花陽は感激のあまり涙を流してしまう、そしてランキング1位だと知って凜は笑顔で花陽を褒める。

さらにフウ太は花陽に関するランキングを発表する。

「あとお米をこよなく愛する人ランキングで、ぶっちぎりの1位だよ。」

「それって全人類の中でトップってことじゃん!?!花陽ちゃん凄すぎでしよ!?!」

「かよちゃんのお米に対する思いは凄いからにや…」

フウ太のランキングを聞いてツナと凜は花陽のお米に対する愛がどれだけのものか知ったのであった。

#標的（ターゲット） 84 「意気消沈」

花陽と凜がツナの家遊びに行っている頃、一方で穂乃果、海未、ことりは穂むらにて生徒会の仕事をやっていた。

「あー…終わんないよー…」

「穂乃果！やる気を出してください！前みたいなやる気はどこにいったんですかー！」

「そうだけどさー…というかそういう海未ちゃんだつてさつきから全然進んでないじゃん！」

「え!?そ、それは!？」

穂乃果に注意する海未だが、当の海未もさきほどから生徒会の仕事が全然進んでいない。

そして同じくことりも…

「…」

さつきからずっと、ボーツとしてしまっており穂乃果や海未と同じく生徒会の仕事が進んでいない。原因は3人とも同じである。

「二（ツナ君に会いたい…）二」

ツナに会えない寂しさで穂乃果、海未、ことりは完全に意気消沈してしまい生徒会の仕事が全然進まないのだ。

すると穂乃果のスマホにLINEに通知が入る。

ピンローン！

「あーもしかしてツナ君かな!？」

「え!？」

ツナからのLINEだと思った穂乃果はすぐにバックからスマホを取り出し即座にスマホの電源をいれる。海未とことりは穂乃果の後ろに即座に移動し、穂乃果のスマホの画面を見つめる。

「あ…ツナ君じゃないや、凜ちゃんだ。どうしたんだろう?…こ、これは

…！」

「！」

凜からのLINEを見ると、穂乃果、海未、ことりは
衝撃を受ける。

『今、ツナの家にいるにや。みんなと写真を取ったから穂乃果ちゃんに送るにや！』

1：25

そう凜がLINEで送ってくると、ツナ、フウ太、

花陽、凜と凜の膝の上に乗ったナッツの4人

と1匹が写った写真が文章の下に送られる。

これを見て穂乃果は焦ると同時に怒りを覚える。

「えー！?!何で凜ちゃんと花陽ちゃんがツナ君の家にいるのー!?!しかも私のホノ太郎が凜ちゃんの膝の上にー!?!ずるいー！」

「お、おおお落ち着いてください穂乃果！それにナッツはツナ君のペットです！」

そう言う海未も動揺してしまっている。ことりも後ろのほうで穂乃果のスマホのLINEの画面を見て動揺してしまっている。

凜から送られた画像を見て穂乃果はいてもたってもいられなくなる。

「こうしちゃいられない！私、ツナ君の家に行ってくる！」

「穂乃果！生徒会の仕事はどうするんですか!?!」

「そんなのあとでいいよ！とにかくツナ君の家に行かなきゃ！」

「よくありません！それに穂乃果、ツナ君の家の場所を知っているんですか！」

「あ…」

海未に言われて穂乃果はツナの家場所を知らなかったことを思い出して止まってしまう。だが穂乃果は諦めようとはせず…

「でも並盛町に住んでいるのはわかってるから、並盛町中を探せばなんとかなるよ！そうとわかればさっそく！」

「ダメです！まだ生徒会の仕事が残っているんですよ！」

ツナの家場所がわからないのにも関わらず、まだ諦めようとせ

ずツナの家に行こうとする穂乃果を海未が取り押さえる。

「離してよ海未ちゃん！海未ちゃんは羨ましくないの!?!にこちゃんに続いて凜ちゃんと花陽ちゃんがツナ君の家に遊びに行ってるんだよ！」

「理由になっていません！生徒会長であるあなたがそんなことでどうするんですか！これでは生徒に示しがつきません！ことりも見えないで何か言ってください！」

「え…？」

穂乃果を取り押さえながら、ことりにそう言う海未だがことりは書類をバックにしまいツナの家に行く準備をしていた。どうやらことりもツナの家に行きたいと思っっているらしい。そんなことりを見て穂乃果と海未は止まってことりのほうをジト目でジーツと見つめる。

「ことりちゃん…？」

「ことり…？」

「え、えつと…！穂むらじや仕事が進みそうにないから他の場所で行くかなあって…アハハ…」

「…」

なんとか誤魔化そうと言い訳することりだが、穂

乃果と海未はこのあともジト目でことりを見ていた。

このあとなんとも言えない雰囲気になってしまった。

場面は再びツナの家。凜が穂乃果に写真を送ったあと、フウ太のランキング能力を見てみたいというのでフウ太はランキング能力を披露していた。そして凜、花陽、ツナ、ナッツは部屋の中で宙に浮いていた。

「うわー宙に浮いてるにやー！これが穂乃果ちゃんの言ってた超能力だにやー！」

「か、体が勝手に…誰か助けてー！」

「お、落ち着いて花陽ちゃん！大丈夫だから！」

フウ太が何かをランキングする時、フウ太の体内に凝縮されたエネルギーが磁場を狂わせてフウ太のまわりの引力を無効化させる。その影響で3人とナッツは浮いているのだ。

凜は宙に浮くことに何の疑問も抱かずに楽しんで
いるが花陽は急に宙に浮いていることに驚き混乱
していた。そんな花陽にツナが心配するが花陽は
混乱したままである。

「真姫姉は素直じゃない女子高生ランキング74674人中20位だね。」

「やっぱり真姫ちゃんは素直じゃないにや。」

「これ…真姫ちゃんが知ったら怒るんじゃないや…」

「俺もそう思う…」

真姫のランキングを聞いて凜、ツナ、花陽がそう

言うとなつ太がランキングモードを解除すると

磁場が元に戻り3人とナッツは宙から落ちる。

「痛いー！」

「ガウ…」

床に叩きつけられて、それぞれ強打した部分をさす。

そして凧がさっそくスマホを取り出すとランキング能力で浮いている時の写真とランキングの結果を真姫に送ろうとする。凧は宙に浮いている時に自分たちが浮いている時の状況をスマホを使って自撮りしていた。

「今の画像とランキング結果をさっそく真姫ちゃんに送るにや！」

「凧ちゃん止めたほうがいいんじゃない？」

「どんな反応をするか見てみたいにや。とりあえず送信だにや！」

花陽が制止するも凧は3人とナッツが浮いている画像とランキングの結果をLINEを使って真姫に送る。

その頃、真姫は家で真面目に勉強していた。

「これで明日の予習は終わり、次は今日の復習ね。」

ピンローン！

「凧からだわ、一体何かしら？」

机に置いてあるスマホが鳴ると、真姫はスマホを手に取るとLINEをしてきたのが凧からだとわかり送られてきたメッセージと画像を見る。

『今、ツナの家にかよちんと一緒にいるにや。真姫ちゃんは素直じゃない女子高生ランキング74674人中20位だにや！』

1:43

「どういう状況よこれ！なんか凧たちが空飛んでるし！それに素直じゃない女子高生ランキングって何よ！色々の意味わかんない！」

宙に浮いている画像と謎のランキング結果にツッコミをいれる真姫であった。

そして再びツナの家。

「真姫ちゃんが必要な反応するか楽しみだにや。」

「絶対に意味わかんないって思ってると思う…」

真姫どんな反応をするか楽しみにしている凛に、ツナがそう言う。

花陽は「明日学校で真姫ちゃんに色々と言われるんだろうなー」と心の中で思っていた。

するとフウ太がこんな提案をする。

「穂乃果姉たちにも送ってみたら？」

「それいいにや！じゃあ他のメンバーのランキング調べたほしいにや！」

「任せてよ凛姉！」

凛がそう言うのとフウ太は快く他のμ'sのメンバーのランキングを調べてくれると言ってくれる。結構、フウ太もノリノリな様子である。

「これ止めたほうがいいんじゃないか…？」

「さあ…？」

花陽とツナがそう言うのと、フウ太が再びランキング能力でμ'sのメンバーのランキングを調べる。そして凛はランキング結果と例の3人とナッツが浮いている写真をLINEで送る。

まずは結局穂むらに残って生徒会の仕事をしている穂乃果、海未、ことりのスマホにランキング結果と例の写真がLINEで送られる。『穂乃果ちゃんはおちよこちよいな女子高生ランキング58654人中3位だにや！』

1：45

『海未ちゃんは鬼のように怖い女子高生ランキング64655人中5位だにゃ!』

1：46

『ことりちゃんはメイド服が似合う女子高生ランキング69845人中1位だにゃ!』

1：47

「これだよ!これが前に言ったフウ太君の超能力だよ!」

「これが…ってそれよりも何ですかこのランキング!」

「メイド服が似合う女子高生ランキング1位…なんか嬉しいな。」

穂乃果、海未、ことりはそれぞれ違う反応であったが結構驚いていた。ちなみに次の日、凜は穂乃果たちに色々と言われたのは言うまでもない。

#標的（ターゲット） 86 「10年バズーカ」

ツナたちが遊んでいると、ツナの家の居候であるランボが帰ってくる。ランボのツナの部屋に入ってくる。

「ただいまだもんね。」

「お帰りランボ。」

「あ！前に言っていた居候かにや？」

ランボとイーピンを見て、以前ツナが言っていた5人の居候のうちの2人であると理解する凜。

そしてランボがツナのところへ走ろうとすると…

「ツナ！遊ぶんだも…グピャ!?!」

フウ太のランキング能力によって床に散らかった漫画につまづいて転んでしまう。そして転んだ拍子にランボの頭の中から紫色のバズーカから飛び出すとランボの頭上に落ちるとバズーカのスイッチが入ると、ツナの部屋が煙で覆われる。

ドーーーーー

「ゲッホゲッホ！何だにや!?!」

「一体何が…!?!」

煙を吸い込んで咳き込んでしまう凜と花陽。そして煙がなくなると、そこには…

「やれやれ、せっかくケーキを食べていたのに…!」

「だ、誰だにや!?!」

「急に知らない人が!?!」

背の高くゆるい天然パーマで、牛柄のシャツを着た青年が現れ、凜と花陽は驚いていた。

「大人ランボ!」

「若きボンゴレ、お久しぶりです。そちらのお嬢さんたちは…初めて

見る人たちですね…」

「お、お前誰だにや！」

いきなり見たことのない青年が出てきたことに
凜は警戒する。

そして大人ランボは自己紹介する。

「初めましてお嬢さん、10年前の俺が世話になってます。10年バズーカによって10年後の未来からやって来たランボです。」

「10年前バズーカ…なんか聞いたことがあるにや…」

10年バズーカという単語を聞き覚えがあるが、どんなものだったか思い出せない凜。凜が思い出そうとしていると大人ランボが10年バズーカのことについて説明する。

「10年バズーカは10年後の自分と10年前の自分を5分だけ入れ替えるボヴィーノファミリーに伝わる兵器のことです。」

「そ、それだにや！」

「と、ということは…あの子の10年後の姿ってことですか…？」

「うん…まあ…そういうこと…」

「えーーーーー!?!」

花陽がツナに尋ねるとツナが凄く言いにくそうな表情をしながら言う。そしてさきほどの小さいランボが10年経つと、こんな格好良い青年になることに凜と花陽は驚いてしまう。

すると凜と花陽の驚いた声を聞いて階段から足音が聞えてくる。

「うるさいわよ。あら？あなたたち…」

「あーーーー！毒料理で凜たちを死に追いやった女だにや！」

「あわわ…」

やって来たのはビアンキであった。そしてビアンキを見て凜はポイントクッキングの匂いによって死にかけたことを思い出し、大人ランボはビアンキを見て体を震わせる。

「失礼ね、私の料理には愛がこもっているのよ。」

「どこがにや！どう考えても愛じゃなくて毒と殺意がこもってたにや！」

「あなたに私の愛は…ん？」

「あ！」

ビアンキは大人ランボに気づく。ビアンキが大人ランボに気づいてしまったことにツナは「まずい」と思ってしまう。

そしてビアンキが大人ランボを見て殺意を放ちながら、どこからか毒々しいケーキを取り出すと両手に乗せると：

「ロメオー！」

「ひええええええ！」

「待ちなさいロメオー！」

恐ろしい形相したビアンキにビビって大人ランボは窓の外から飛び出して逃げる。そしてビアンキは大人ランボを追いかけていく。

急に恐ろしい形相で大人ランボを追いかけたことについて花陽に尋ねる。

「あ、あの…なんかすつごい恐ろしい顔をしてましたけど…？」

「大人ランボはビアンキの元彼に似てるんだ…それでその元彼と別れる寸前すつごく険悪で…その元彼と大人ランボをビアンキは勘違いしてて…」

「か、かわいそう…」

ビアンキが大人ランボを追いかける理由を知って、花陽は大人ランボに同情してしまう。

すると凜が10年バズーカを触り始める。

「10年バズーカ面白いにや！今度真姫ちゃんの誕生日会があるからその時誕生日会にやってみたら面白いそうだにや！ツナ！今度10年バズーカ貸してほしいにや！」

「ええい！」

まさか10年バズーカを貸してくれという言う凜に

ツナは驚いてしまう。すると凜は10年バズーカ

のスイッチを押してしまう。そして10年バズーカ

の弾が花陽に当たってしまう。

「え？！」

ドーーーーーン

「かよちん！」

「花陽ちゃん！」

10年バズーカに被弾してしまった花陽。一体どんな姿の花陽が出てくるのか!?

#標的（ターゲット） 87 「10年後の花陽」

10年バズーカに被弾した花陽。ツナの部屋には煙が充満すると、煙の中からの背の高く髪の長い女性が現れる。

「あれ…？ここは…？」

「こ、これが10年後の…」

「花陽ちゃん…」

10年後の花陽を見て驚く凜とツナ。すると10年後の花陽はツナと凜に気づく。

「あれ凜ちゃんにツナさん？何でこんなところに…というか二人が幼く見える…というかここどこ…？」

急に見知らぬ場所にやって来たこと、幼いツナと凜が目の前にいることに戸惑っている。すると戸惑っている10年後の花陽にツナが10年バズーカのこと、そしてここが10年前の世界であることを説明する。

「10年バズーカ…：そういうえばそんなのあったよね、懐かしいな。」

「それにしてもかよちゃん、髪伸ばしたんだね。」

「うん。今から3年後に伸ばすんだ。」

「どうして髪を伸ばしたんだにや？」

「え!?!それは!?!／／その…!!／／／」

凜が髪を伸ばした理由を10年後の花陽に尋ねると、10年後の花陽は顔を赤くし、ツナのほうをチラチラと見てしまう。すると花陽は話を誤魔化して10年後の凜のことについて話す。

「り、凜ちゃんも…10年後には髪を伸ばしてすっごく可愛くなるんだよー!」

「り、凜がかにや!?!ほ、本当かにや!?!」

「うん！」

「(今から頑張ったら：!!ツナが私のこともう少し見てくれるかにや…!?)」

10年後に自分が可愛くなるかと10年後の花陽に言われて嬉しい様子の凜。そして凜は顔を少し顔を赤らめながらツナのほうをチラチラと見ながらそう思う。

すると10年後の花陽は10年前のことを思い出す。

「10年前かー。μ s が解散してツナさんたちに出会った頃だよね。ツナさんたちに出会ってから色々大変なことやありえないことがたくさんあったなー。」

「ごめんなさい…」

「ええ!?何で謝るんですか!？」

「いや…なんとなく…」

急に謝り出したツナに10年後の花陽は驚いてしまう。ツナはなぜかはわからないが謝らなければならぬと思ってしまう。謝罪した。

そして10年後の花陽はさらに語る。

「でもツナさんたちに出会ってから、スクールアイドルとして活動していた時とは違った楽しさがありました。それに…!!」

「それに?」

「い、いや…!!／／何でもないです!／／／」

「?」

急に顔を赤らした10年後の花陽を見てツナと花陽は首を傾げる。そしてそうこうしているうちに5分が経過しようとしていた。

「あとちょっとで5分だね。そろそろ10年バズーカの効力がきれるよ。」

部屋の時計を見てツナがそろそろ5分経過することを確かめる。

そして10年後の花陽とも別れの時がやってくる。

「短い時間だったけど10年前の二人に会えてよかった。」

「凜も10年後のかよちゃんに出会えて嬉しかったにや!10年経っても凜とかよちゃんはずっと友達だにや!」

「うん！ずっと友達だよ！」

凜と花陽は別れの言葉をそう言うと、お互いに互いの手を握る。そして握っていた手を放すと同時に10年バズーカの効力がきれて、花陽が10年後の世界から戻ってくる。

「おかえりかよちん！」

「ツナさんの家だ：戻ってこられたんだ！よかったあ！」

無事に元の世界に戻ってこられたことに安心し、

花陽は少し涙を流す。

「ごめんねかよちん。凜のせいで…」

「凜ちゃんのせいじゃないよ。戻ってこられないんじゃないかって思ってたけど、10年後の未来って凄かったよ！」

凜が謝ると、花陽は10年後の未来がどんな世界だったかを話す。

そして楽しい時間があっという間に過ぎていき夕方になる。

「あ、もう夕方だ。」

「そろそろ帰えないといけないにや。」

「そうだね。」

ツナ、凜、花陽が部屋の窓を見ながら言うと、部屋にリボーンが入ってくる。

「凜、花陽。ママが夕飯食べていかなかったって言ってるぞ。」

「え…でも…」

「悪いんじゃない…」

奈々が夕飯をご馳走してくれるというが、迷ってしまう凜と花陽。するとリボーンがさらにこう言う。

「さっきマママンが、買い物に行ったときに商店街のくじ引きでお米を当てたって言ってたぞ。」

「お米…」

「かよちん…?」

「花陽ちゃん…?」

お米という単語に反応する花陽。そんな花陽を凜とツナは「ま、まさかまだ食べるのか…?」と心の中で思ってしまう。

そしてこのあと花陽と凜は夕飯にご馳走になった。もちろん花陽はご飯をめちやくちやおかわりした。それに対して奈々は「花陽ちゃんをよく食べるのねー」とそう言うだけであった。

だが花陽はまだ気づいていなかった。自分の体に異変が起きているということに…

#標的（ターゲット） 88 「ダイエット」

凜と花陽がツナの家遊びに行った次の日。時刻は朝の6時30分。そんな早い時間に起きて走っている人物がいた。

「はっはっはっ…」

そう何を隠そう花陽である。なぜこんな朝早くから走っているのかというと、

時はツナの家を出て、花陽が家に戻った頃に遡る。

「はー、ツナさんのお母さんの夕飯美味しかったなー。ついご飯をおかわりしちゃったよ。」

自分の部屋のベッドで幸せそうな表情でお腹をさする花陽。だがここで花陽は最近食べすぎていることを思い出し、お風呂場にある体重計で体重を測る。そして花陽は体重計に出た数値を見て…

「きゃー………!」

そして現在に到る。

「(またダイエットすることになるなんて…ラブライブに出場するわけじゃないけど体重管理はしっかりしておかないと…でもまた食事制限かあ…)」

花陽そんなことを思っていると、かつて練習場である神田明神の階段の前に着く。「とりあえずこの階段を登ろう」と花陽が心のそう決めた時。

「いで…いで…だ、誰か助けてー!」

階段から聞き覚えのある声が段々と近づいてくる。何を隠そうツナである。ツナは絵里と希と初めて出会った時のように階段から転がり落ちていた。

そしてツナは一番下まで転がり落ちると、前と同じように顔面を床に打ち付ける。

「いつてえー!」

「え…? ツナさん…?」

「あ、あれ? 花陽ちゃん? 何でここに?」

「そ、そういうツナさんこそ…どうしてここに?」

「俺? いやリボーンに叩き起こされて…朝練だつて言われて音ノ木坂までランニングだつて言われて…それで神社の上まで行ったら、リボーンが階段から蹴り落としてきて…」

「そうだったんですか…それより大丈夫なんですか…? 階段から転がり落ちてきてましたけど…」

「なんとか大丈夫…体が所々が痛いけど…」

「な、ならよかったです…」

若干、顔を引き攣らせながらそう言う花陽。「ツナさんは本当に体が頑丈なんだな…」と花陽が思

っているとりボーンが上から降りてくる。

「情けねえぞダメツナ。このぐらいで痛いって言ってるようじゃマフィアのボスにはなれねえぞ。」

「マフィアのボスは関係ないだろ! それに何で階段から落とす必要があるんだよ!」

「なんかむかついた。」

「お前の気分かよ！」

「アハハ…」

ツナとリボーンの会話を聞いて、花陽は苦笑いするしかなかった。するとリボーンはツナの横にいる花陽に気づく。

「花陽じゃねえか。どうしたんだこんな時間に？もしかしてボンゴレに入りたいのか？」

「そんなわけないだろ！花陽ちゃんをマフィアの世界に入れようとするなよ！」

リボーンの発言にツナがツッコミをいれる。すると花陽がこんな朝早くから何をしているかというリボーンに問いに答えようとするがダイエツトしているとは恥ずかしくて言えずにいた。

「えつと…その…！」

「なんだ。ダイエツトか。」

「ええ!?どうしてわかったんですか!?!」

「俺は読心術が使える。だからお前の考えてることぐらいわかるぞ。」

「！」

リボーンによってダイエツトとされていることを見抜かれて、花陽は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤して両手で顔を覆ってしまう。

「リボーン！むやみに人の心を読むなよ！花陽ちゃんが可愛そうだろう！」

「俺は本当のことを言っただけだ。」

「お前なあ…」

リボーン発言にツナは呆れてしまう。そうは言いつつもリボーンは花陽にちゃんと謝り、花陽にとある提案をする。

「すまなかつたな花陽。そのかわり俺がとっておきのダイエツト方法を教えてやるぞ。」

「え!?本当ですか!?!」

「ああ。食事制限も一切必要ない上に、3日で痩せられるダイエツトだ。」

「ほ、本当にそんな方法が!?!」

「(胡散臭え…)

そんなダイエット方法があると聞いて花陽は目を輝かせながらリボーンを見るが、ツナはもの凄い不安そうな表情でリボーンを見ていた。

「ボンゴレファミリーに代々伝わるダイエット、その名もボンゴレ式ダイエットだ。」

「久々に来た！ボンゴレ式のイベント！」

ボンゴレ式ダイエットと聞いて驚くツナ。こうしてリボーンによるボンゴレ式ダイエットが始まろうとしていた。

#標的（ターゲット） 89 「ツインテール」

こうしてボンゴレ式ダイエットが始まる。まずはリボーンがボンゴレ式ダイエットについて説明する。

「ボンゴレ式ダイエットとはその名の通り、ボンゴレファミリーに伝わるダイエツト方法だ。歴代のボンゴレのボスも太った時にはこの方法でダイエツトしたと言われていたんだぞ。」

「絶対に嘘だろ…」

「それで今回は数あるボンゴレ式ダイエットの中でも女性向けの方法をやるぞ。その名もツインテールダイエットだ。」

「意味わかんねー!?!」

「ツインテールダイエット…?」

ツインテールダイエットという聞いたこともないダイエット方法にツナと花陽は「何を言っているんだ?」という表情になってしまう。

「ツインテールダイエットは、髪型をツインテールにして運動することによって体重を減らすダイエツトだぞ。」

「何でツインテールなんだよ!」

「謎だ。」

「迷宮入り!?!」

「これはボンゴレ式ダイエットの7777不思議の一つだ。」

「どんだけあるんだよ!そもそも髪型を変えただけで痩せられるわけないだろ!」

「そんなことねえぞ。歴代の唯一の女性のボスであるボンゴレ^{オッターヴオ}Ⅷ世もこのダイエツトで痩せたことがあるとボンゴレの文献に印されているんだぞ。」

「信じられるか!」

あまりにもリボーンが言っていることが信じら

れず、ツナはリボーンにツッコミをいれる。

だが花陽は…

「私やってみますー!」

「花陽ちゃん!?」

こんな胡散臭すぎるダイエットをやってみようと決意した花陽にツナは驚いてしまう。

そしてリボーンは花陽のやる気な表情を見て、不適な笑みを浮かべる。

「いい返事だぞ花陽。じゃあさっそく始めるぞ。」

そう言うとりボーンはどこからかハンドクリームを取り出す。リボーンの持っているハンドクリームを見て疑問符を浮かべる。

「これはボンゴレが最新の技術を使って作った、超活性ハンドクリームだ。これを傷口に塗ると疇の活性の成分が発動して傷が一瞬で治るんだぞ。今回はこれを花陽の頭皮に塗って髪の毛の成長速度を活性させて、髪の毛を一気に伸ばす。そのあと俺が花陽の髪の毛を適当な長さに切ってツイントールを作る。」

「出たよ…無駄に凄いボンゴレの技術…」

「こ、これを塗るだけで髪の毛が伸びる…」

超活性ハンドクリームの説明と使い方を聞いてツナは若干呆れてしまい、花陽は一気に髪の毛が伸びると聞いてビビっていた。

多少ビビリながらも花陽は地面に座り、リボーンは花陽の肩に乗って超活性ハンドクリームを塗る。すると花陽の髪の毛が一気に伸びる。

「ぎゃー！ー！ー！ー！本当に髪の毛が一気に伸びたー！なんか気持ち悪いー!」

「きゅ、急に目の前真っ暗に！誰か助けてー!」

ツナは急に花陽の髪の毛が伸びたことに驚き、花陽は目の前が真っ暗になり何も見えなく

なってしまうことに慌ててしまう。

そしてリボーンが花陽の髪をハサミである程度の長さまで切つて

いき、最後に耳の後ろで髪を束ねてナイロンゴムで結びツイントールが完成する。

「できたぞ。」

そう言うとりポーンはレオンを手鏡に変型させると、手鏡を花陽に渡す。そしてツイントールになった自分を見て花陽は嬉しそうな表情になる。

「こ、これが私…」

「名づけてツインテかよちんだな。」

「そのままじゃん…それに勝手に名前をつけるなよ…」

りポーンのネーミングセンスにツナは呆れてしまうツナ。そしてりポーンがツナと花陽に練習メニューを言い渡す。

「んじや。練習メニューは μ s がやっていたのと同じメニューでいい。まずは階段ダッシュだぞ。」

「何で μ s の練習メニューをお前が知ってるんだよ…」

「ただしツナ。お前はボンゴレの作った特製の5kgの重りをつけながら走れ。」

「ええ!? 何で俺だけ!？」

「お前がマファイアだからだ。」

「納得できるか! そもそも俺はマファイアじゃないし!」

「いいからさっさとしやがれ。やらねえって言うなら…」

「わかった! やるよ! だから死ぬ^せ気弾^れは止めろって!」

りポーンがボンゴレに伝わる特殊弾である死ぬ気弾をツナに撃とうする。ツナは死ぬ気弾を撃たれるのを恐れて5kgの重りをつけることを承諾する。

「あ、あの…私も何かするんでしょうか…?」

「お前は何かもしなくていいぞ。その髪型を解除せずに練習メニューをこなせばいいだけだ。」

「はあ…」

これで本当に痩せられるのか? そう思ってしまう花陽。

果たしてツイントールダイエットは効果があるのであろうか?

#標的（ターゲット） 90 「死ぬ気弾」

まずは階段ダッシュから始めるツナと花陽。

「（はあはあ…なんか久しぶりだなこうやって走るの…）」

少し前までみんなで練習していた頃のことを思い出しながら階段ダッシュをする花陽。

「はあはあ…」

階段の上まで一気にかけあがり、膝に手を当てて息切れする花陽。一方でツナは…

ダンダンダンダン！

「おいりボーン！撃つの止めろって！」

「これぐらい死ぬ気で避けながら登ってこい。」

「できるわけないだろ！」

階段の上からりボーンが5kgの重りをつけているツナに容赦なく狙撃していく。なんとかつナは銃弾を避けているがツナのつけている重りから「ピピピー…ピピピー…」という音が聞えてくる。

「な、なんか変な音が聞えてくるんだけど…？」

「言い忘れたがその重り一定時間経つと爆発する仕組みだ。もうあと1分ぐらいで爆発するぞ。」

「ん？！」

「爆発を止めたいなら俺の狙撃を避けながらさっさと登ってこい。そしたらリモコンこいっでお前の重りに仕掛けてる爆弾を止めてやる。」

「無茶いうなよ！」

「（め、めちやくちやすぎる…ツナさんっていつつもこん教育を受けてるのかな…）」

ツナとりボーンの会話のやりとりを聞いて、花陽は顔を引き攣らせて

ながらそう思う。こんなのはまだまだ序の序の口なのであるが。すると1分もたたずにリボーンがリモコンのスイッチを押す。そしてツナのつけている重りが爆発する。

ドーーーーー！

「ぎゃーーーーー！」

「ええ!? まだ1分経ってないですよね!」

「モタモタしてるのツナを見てたらイラついた。だから爆発させた。」
「…」

リボーン言葉に花陽は驚きすぎて、もう何も言えなくなってしまう。まっていた。

そして爆発されたツナは…

「し、死ぬかと思った…」

「(普通なら死んでる気がする…)」

爆発によって倒れているツナを見て花陽はそう思う。そして倒れているツナに向かってリボーンはさらに発砲していく。

ダンダンダンダンダン!

「ちよ!? 待って!!」

「るせえぞ。そのぐらいでへばってんじゃねえ。」

「(もう修行じゃないよ! これただの拷問だよ!)」

リボーンあまりに容赦ない教育に、花陽は自分のダイエットのことなど忘れていたのだ。そして

そして特訓は続いていき、時刻は8:20分になる。ツナも花陽も学校に行く時間になってしまう。花陽はスマホの時計を見る。

「そろそろ学校に行かないと…」

「あーもうこんな時間! 今から急いでも間に合わないよー!」

さすがに隣町なので今から急いでも並盛高校まで遅刻せずに登校するのは無理だと…そう思ったツナであったが。

「んじゃ、死ぬ気弾しかねえな。」

そう言うリボーンはレオンを銃に変型させると、銃口をツナの額に定める。

「ま、待って!!」

「いっぺん死んでいい。」

ダン！

ツナの制止も聞かずにリボーンは死ぬ気弾をツナの額にぶちこむ。そして死ぬ気弾がツナの額に当たると「ドサツ」という音と共にツナは倒れてしまう。

「きゃー……！」

ツナが撃たれたことに花陽は顔を真っ青にして悲鳴をあげる。そして顔を真っ青にしている花陽にリボーンが言う。

「落ち着け花陽。」

「落ち着けるわけじゃないですか！何で撃っておいて平然としているんですか！ツナさんはあなたの生徒じゃないんですか！」

花陽がリボーンに叫ぶと、ツナの額にオレンジ色の死ぬ気の炎が灯る。

「復活！」

「きゃー！」

突然パンツ一丁で蘇ったツナを見て、花陽は顔を

赤くして両手で顔を覆う。

「俺は死ぬ気で並盛高校に登校するー！」

そう叫ぶとツナはダッシュで神田明神の階段を降りて並盛高校に登校していく。

「イツツ死ぬ気タイム。」

「あ、あの……え……あれ……その……」

色んなことがありすぎて、花陽の頭では処理できず頭から煙をあげて混乱してしまう。混乱している花陽にリボーンが説明する。

「今のは死ぬ気弾。これを脳天に当たった者は1度死んで死ぬ気になって蘇る。死ぬ気になる内容は死ぬ前に後悔したことだ。」

「は、はあ……」

「んじやな花陽。ダイエットが終わるまでその髪型を変えんじやねえぞ。」

「え……は、はい……」

そう言うとりボーンは神田明神の階段から降りていく。
そしてリボーンが去ったあと花陽はあまりの出来事に腰をぬかし
てしまうのだった。

#標的(ターゲット)91 「音ノ木坂学院臨時教師リボ山」

色々なことがありながらも花陽は、学校に登校しているその頃、花陽のクラスでは凜が自分の席で。

「にゃー!!」

凜が顔を赤らめながらスマホの画面を見つめ、うつとりとしていた。その画面に映っていたのはナッツを抱っこしてるツナであった。ツナの家遊びに行った時に凜はツナに「ナッツと一緒に映っている写真が取りたいにゃ」と頼んだ。そして凜はツナとナッツだけが映った写真を待ち受け画面にしている。

大好きなツナとナッツが映っている画面を見て、凜がうつとりしているとき…

「凜!」

「真姫ちゃん!おはようだにゃ!」

「おはようじゃないわよ!昨日のあのLINEは何よ!」

「何って?フウ太君のランキング能力で宙に浮いてただけだにゃ。」

「何、当然のように言ってるのよ!そもそも素直じゃない女子高生ランキングって何よ!」

「フウ太君のランキング能力で調べてもらった結果だにゃ。フウ太君の能力は百発百中なんだにゃ!」

「ランキング能力って何よ…本当にツナあいつに出会ってから変なことばかりだわ…」

ツナに出会ってから変なことばかりで真姫の中の常識が崩れていつている。

すると教室に花陽が入ってくる。

「凜ちゃん、真姫ちゃん。おはよう。」

「おはよう…かよちゃん…」

「おはよう…」

若干顔を引き攣らせながら花陽に挨拶する凜と真姫。髪型を変えただけなら少し驚く程度だが、あきらかに花陽の髪が一晩で伸びている。そのことに凜と真姫はめちやくちや驚いていた。

「花陽…その髪どうしたの…？」

「ちよつと色々あつて…イメチェンしたんだ。」

「そこじゃないわよ！あきらかに髪が一晩で伸びてるじゃない！」

「そうだにや！何があつたにや！」

「あ…やつぱりバレちゃつた…？アハハ…」

髪が急激に伸びたことについて真姫と凜に指摘

されると花陽は苦笑いしてしまう。

そしてこうなつた成行きとダイエットしている

ことについて二人に話す。

「ツインテールダイエツト!？」

「うん…なんかボンゴレファミリーに伝わるダイエット方法らしくて…」

「また変なのが…それでどうやって髪を伸ばしたわけ？」

「確か超活性ハンドクリームだったかな…？ボンゴレファミリーが作つたハンドクリームを塗つたら髪が一気に伸びて…」

「もう何でもありねマフィアって…」

花陽の話を聞いて、また真姫の中の常識が崩れてしまう。一方で凜は花陽の話を聞いて複雑な気分になつてしまつていた。

「(かよちん、ツナと一緒に朝練したのかにや…羨ましいにや…)」

「凜ちゃん？どうかしたの…？」

「へ?!いや何でもないにや!」

「？」

少しだけ様子の変な凜に花陽は疑問符を浮かべるが、特に凜にこれ以上聞くことはしなかつた。

「そもそも髪型を変えただけで、痩せられるなんて思えないんだけど…」

「私もそう思つただけけど、ボンゴレファミリーのボスの人も太つた

時にはこのダイエット方法で痩せたってボンゴレファミリーの文献に載ってるんだって。」

「それ本当なの…?」

「それはよくわからないけど…でもこれで痩せられたらそれでいいし、痩せられなかつたら別の方法で頑張ってみようと思うんだ。」

「まあいいわ…頑張りなさいよ。」

「凜も応援してるにゃ!」

真姫と凜がそう言うと、ホームルールの開始を知らせるチャイムが鳴る。

そしてホームルームが終って1時間目が始まる。

すると一人の教師が教室に入る。

「お前ら静かにしろー。」

なんと教室に入ってきたのは茶色いスーツを着たりボーンであった。そしてリボーンは教卓の上に乗る。リボーンを見てクラスのみんながざわつき始める。

「だ、誰あれ?…」

「すつごい小さい…」

「そもそも1時間目は英語じゃなかったけ…?」

「あー、お前らの英語の先生はどこかの殺し屋ヒットマンの作った毒料理を食べた急遽入院した。なので今日の授業はこの俺が担当することになった、よろしくな。」

「なにそれ!」

「どこかの殺し屋ヒットマンって!」

「変なの!」

リボーンという言葉にクラス中の女子が笑ってしまう。そしてリボーンを見て花陽、真姫、凜は…

「あれって…」

「どう見ても…」

「面白い先生だにゃ！」

花陽と真姫はあの先生がリボンであることに気づいているが、凜だけは気づいていなかった。

そしてリボンは自己紹介を始める。

「音ノ木坂学院臨時教師のリボ山だ。よろしくな。」

今、リボ山による授業が始まる！

#標的 (ターゲット) 92 「マフィア学」

「いつもと先生は違うかもしれねえが、いつも通りで授業を受けてくれてかまわねえからな。一応、俺は英語も教えられるが、今回は英語の授業じゃなくて別の授業をやるぞ。」

「やったにや!」

リボーンの話聞いて、凜は喜ぶ。凜は英語が苦手なため英語の授業をやらないというリボーンの言葉に喜んでしまう。

「星空、声に出てるぞ。そういうことは心の中だけにとどめておけよ。」

「え!?凜の名前を知ってるのかにや!」

「このクラスの顔と名前はもう覚えてるからな。だから居眠りとかスマホをいじっててもすぐに名前はわかるからな。気をつけろよ。」

リボーンがそう言うのと花陽と真姫を除く全員が口を揃えて「はい」と言う。

「(何でツナの家庭教師がこんなところに…というより何でこんな胡散臭い奴に授業させるなんて学校側は何を考えてるのよ…)」

「(何で凜ちゃん気づいてないんだろう…?)」

真姫と花陽がそう思っていると、リボーンはさっそく授業を始めていく。

「今日教えるのはこれだぞ。」

そう言うとりボーンは黒板に「マフィア学」と書く。そしてそれを見た生徒たちは唾然としてしまう。普通の反応ではあるのだが。

「今日教えるのはマフィア学だ。今日はマフィアについて勉強してもらうぞ。」

「先生。」

「何だ?」

「あの…何でマフィアのことについて勉強しなくちゃいけないんです

か…?」

生徒の一人が手を挙げながらリボーンに質問する。生徒の質問に対してリボーンはこう答える。

「いい質問だぞ。これからお前らはいずれ社会に出なくちやいけなくなる。仮にマフィアに就職しなければならなくなった時、もしくはマフィアに襲われた時のためにこのマフィア学が役に立つはずだ。」

「(絶対にないわよ…)」

「西木野、絶対にないって思ったかもしれねえが、世の中には絶対はねえんだ、覚えておいて損はねえぞ。」

「ヴェエエ!? な、何で私の考えてることが!?!」

「俺は読心術が使える。お前が考えてることぐらいわかるぞ。」

読心術が使えると聞いて真姫だけではなく、クラス全員が驚いてしまう。そしてリボーンは授業の続きを始める。

「今日はマフィアの中でも有名なボンゴレファミリーについて勉強するぞ。」

「凜知ってるにや! イタリアにあるマフィアだにや!」

「ボンゴレファミリーについて知っているとかな。星空、やるじやねえか。」

「えへへ!」

リボーンに褒められて後頭部をかきながら照れる凜。だが今の発言によってクラスがざわつき始める。

なぜ凜がマフィアのことについて知っているのかと…

「(凜! 空気読みなさいよ! この状況でマフィアのことについて言ったら学校で変な目で見られるわよ!)」

「(気づいて凜ちゃん! あの先生はツナさんの家庭教師だよ!)」

全く空気を読まない凜の発言に真姫と花陽は心の中でそう思ってしまう。

クラスがざわつく中、リボーンは気にすることなくボンゴレファミリーの説明を続けていく。

「星空の言う通りボンゴレファミリーはイタリア

にあるマフィアだ。ボンゴレファミリーは元々は

市民を護るために作られた自警団だったんだが

、今は10000近い傘下に置く世界最強のマフィア
になったんだ。」

「一体何があったら、自警団から世界最強のマフィアになるのよ!?」
リボーンの本ゴレフアミリーについての説明を聞いて真姫が心
の中でツツコミをいれる。そして授業は続いていくとリボーンは歴
代ボンゴレのボス、CHDEF、ヴァリアーのことなどについて説明
する。最初は戸惑っていた

生徒たちであったが、なぜか途中から真剣に授業を聞きそして最後
には…

「ボンゴレフアミリーってすごいんだー…」

「なんか面白かったね。」

となぜか、意外にもリボーンによるマフィア学の

授業は盛況であった。

そして最後にリボーンは…

「俺の授業はこれで終わりだ。つーわけでお前ら、ボンゴレに入って
みねえか?」

「はい!はい!凛は入ってみたいにや!」

「星空はボンゴレに入ってみてえのか?いいぞ。」

「やったにや!かよちゃんも真姫ちゃんも入ろうよ!二人もボンゴレ
フアミリーのことはよく知ってるから一緒に入ろうにや!」

「凛!声が大きいわよ!」

「凛ちゃん!」

凛の発言によって真姫と花陽も巻き込まれてしまう。そしてクラ
ス全員が真姫と花陽もボンゴレフアミリーについて知っていたこと
にざわつき始める。

そしてこのマフィア学の授業は穂乃果のクラスでも行なわれ…

「俺の授業はこれで終わりだ。お前らボンゴレに入ってみねえか？」

「はいりボ山先生！私入りたいです！」

「高坂はボンゴレに入ってみたいのか？いいぞ。」

「やったあ！そうだ！海未ちゃんもことりちゃんも一緒に入ろうよ！」

ボンゴレファミリーのことはよく知ってるし！」

「ほ、穂乃果！」

「穂乃果ちゃん！」

真姫と花陽と同様、海未とことりも穂乃果の発言

によって巻き込まれてしまう。そしてクラス

全員がざわつき始める。

そしてこのあと穂乃果と凜のせいでμ'sのメンバーはマフィアに通じているのではないか？という噂が流れてしまうのだった。

#標的（ターゲット） 93 「ダイエット2日目」

リボーンが音ノ木坂学院臨時教師として来た次の日。

早朝6：00。ツナとリボーンと花陽に神田明神集合していた。

「それじゃ修行開始だぞ。その前に花陽、ツインテールダイエットの効果はあったか？」

「はい！少しだけありました！」

「マジで!？」

リボーンが花陽にダイエット効果について尋ねる。そして本当に効果があったことにツナは驚いてしまう。

「そうか。ポニーテールダイエットだったらダメだったかもしれねえが、やっぱりツインテールダイエットにして正解だったな。」

「それ：そんなに違いがあるの：？」

ポニーテールダイエットとツインテールダイエットに違いがあるのかと疑問符を浮かべるツナ。

するとリボーンはどこからかラジオを取り出す。

「まずは準備体操からだ。準備体操はしっかりやっておかねえいけな
いからな。」

そう言うと、ラジオをのスイッチを押す。するとラジオから音楽が流れてくる。

『ボンゴレ体操第一!』

「ボンゴレ体操って何!?!っかお前の声じゃん!」

「ボンゴレ体操はボンゴレに伝わる由緒ある体操

だ。このボンゴレ体操は多くのマフィアが戦いに出る前には必ず
とっていいほどやってるんだぞ。」

「普通のラジオ体操でいいだろ!」

リボーンにツナがツツコミをいれると、さっそくラジオから最初の
体操の指示がされる。

『まずは両手に札束を持って、賄賂を渡す運動ー。』

「何の体操!？」

「こ、こうでしょうか…?」

「やらなくていい!やらなくていいから花陽ちゃん!」

真面目に賄賂を渡すような動きをしようとする花陽のツツコミを
いれるツナ。

そしてボンゴレ体操は続く。

『次は敵の背後にまわり、銃弾で敵の命タマを取る運動ー。』

「ただの人殺しだよ!」

「わ、私にはそんなことできません!」

ラジオをの指示を聞いてツナと花陽がツツコミいれる。

さらにボンゴレ体操は続く。

『右手の手の平と左手の手の平をあわせて四角形を作り相手の死ぬ気
の炎を吸収する運動ー。』

「死ぬ気の零地点突破改!本当にこれマファイアたちがやってるの!？」

「死ぬ気の…えつと…?」

体操が自分の技であることにツツコミをいれるツナ。そして死ぬ
気の零地点突破改という聞きなれない単語に花陽は戸惑ってしまっ
ていた。

さらにボンゴレ体操は続く。

『手の平に炎を纏って、「ドカスガ!」と叫びながら全てを破壊する運
動ー。』

「それXANXAS!」

「ド、ドカ…」

「それだけはやっちゃダメだよ花陽ちゃん!」

こうしてボンゴレ体操は2番まで続いていきとりあえず準備体操
が終了する。

「よし、これで準備体操は終わりだ。」

「これ準備体操って言えるのか…?」

「本当は15番まであるんだが、今回は時間の都合上2番までだ。」

「多いな無駄に!」

「じゃあ、とりあえずお前ら走ってこい。」

「はーい。」

リボーンが命令するとツナと花陽は二人は階段を降りて走っていく。そして走っていく二人の後ろ姿を見て、二人が見えなくなったのを確認すると。

「いつまでそこに隠れてる気だ凜？」

「バレてたかにや…」

リボーンがそう言うのと、後ろのほうから隠れていた凜が出てくる。

「いつから気づいてたにや？」

「ここに来た時からずっとだ。それより何してんだ？ツナと一緒に朝練してえんじゃねえのか？お前ツナのことが好きなんだろう？」

「全部お見通しかにや…さすがツナの家庭教師だにや。」

「別に俺はお前がツナと一緒に朝練することに反対はしねえぞ。」

「いや…その…!! 恥ずかしいにや…!!」

「ま、そんなことだろうとは思ったぞ。それでどうするんだ？」

「え、えつと…!!」

「好きにすりゃあいい。といつてもここにいるのはお前だけじゃないしな。」

「え!?!」

「出てこい穂乃果、海未、ことり。いるんだろ？」

リボーンがそう言うのと、それぞれ別々の場所から穂乃果と海未とことりが出てくる。昨日、花陽がツナと朝練をしていることを聞いて3人はやって来たのだ。

「やっぱり私のこともバレてたか…って海未ちゃんのことりちゃんまで何でいるの!?!」

「い、いや! 私は!」

「えつと…!」

結局、みんな似た者同士であった。

#標的（ターゲット） 94 「どうして？」

一方、リボーンの命令で走りに行つたツナと花陽は走しりながら喋っていた。

「花陽ちゃん体力あるよね。やっぱリスクールアイドルやってたからかな。」

「そういうツナさんも、全然余裕って感じに見えますけど。」

「まあ…リボーンのお陰で体力だけはすごいだったんだ…色々あったから…」

「ツナさんって毎日、あんな風に鍛えられてるんですか？」

「鍛えられてるんじゃないよ…あれはただ単に拷問を受けてるだけだよ…」

「それはなんとなくわかる気がします…」

昨日のリボーンのエラーを見て花陽は、ツナの気持ちをなんとなくあるが理解する。

そしてツナはリボーンの数々の修行と中学時代の頃を思い出す…

「色々あったよな…：デスマウンテンで野宿したり、エンツイオに潰されたり、鮫のいる海に落とされたり、ビアンキの料理で死にかけたり、不治の病で死にかけたり、イーピンの筒子時限超爆で死にかけたり、雲雀さんに噛み殺されたりし、絶壁を登らされたり…未来に行つて帰ってきたと思つたらまた色々戦つて…」

「そ、そんなに…今まで大変だったんですね…」

「これは中学の時の話なんだけど…」

「ええ!？」

「高校に入ってから…」

「(ま、まだあるの!?)ツナさんの青春ってあまりにも悲惨すぎるよ!)」

ツナの青春があまりにも悲惨すぎて、花陽はそう思ってしまう。そしてツナの悲惨な高校生活を聞いたあと花陽はツナに尋ねる。

「そんなに大変なのに、何で逃げようとか思わないんですか？」

「逃げようなんて何度も思ったよ…でもどんなに逃げてもしリボーンは絶対に俺を逃がすなんてことはしない…というよりも絶対に逃げられないよ…たとえ地の果てまで逃げてても絶対に追ってくるから…」

「アハハ…」

ツナが絶望的な表情でそう言うと、花陽はもう苦笑いすることしかできなかった。

するとツナは絶望的な表情から、清しい表情で大空を見ながらリボーンのことを語る。

「でもリボーンがいなかったら俺は変わることはできなかったんだ。それだけは確かだよ。」

「そうなんですか…」

「うん。」

「(よくはわからないけど…ツナさんとリボーン君には絆とは違う何かがあるんだろうな…)」

ツナとリボーンのことを考えていると、花陽は考えるのに夢中になりすぎたせいか、道路に落ちていた石につまずいてこけてしまう。

「ぎゃー！」

「花陽ちゃん！」

「あいたた…」

「大丈夫!?花陽ちゃん!？」

「は、はい…痛っ！」

花陽の元に駆け寄るツナ。花陽は大丈夫だと言って起き上がろうとするであつたが、右足に痛みが走る。どうやら足を捻ってしまったらしい。

「どうしたの花陽ちゃん!？」

「すみません…足を捻ってちゃって…」

「気にしないで。ともかくリボーンの所まで戻ろう。リボーンならきっと何とかしてくれるはずだから。とりあえず俺が花陽ちゃんを運ぶよ。」

「え?!でも…」

「大丈夫。一人ぐらいならなんとか運べるよ。」

そう言うのとツナは花陽をおんぶして、リボーンたちがいる神田明神へと戻っていく。

「す、すいません…私がこけたばかりに…ツナさんに迷惑を…」

「謝らなくなつていいよ。」

「あ、あの…！重たくないですか…!?今、私体重が…！」

「ううん、全然平気だよ。」

「な、ならよかつた…！」

「俺のことは気にしなくて大丈夫だから。とりあえず今はリボーンのところへ戻つて花陽ちゃんの足を応急処置してもらうのが大事だよ。」

「は、はい…!!」

「それより花陽ちゃんのほうこそ大丈夫？ 足に痛みが響かないように運んでるつもりだけど、痛くない？」

「だ、大丈夫です…!!」

ツナがそう言うと、花陽は顔を赤らめてしまう。

そしてツナの優しさに花陽の心臓の鼓動が速く

なつていく。

「(自分のことより私のことを心配してく

れて…!!／／ツナさんって本当に優しいんだな…!!／／)」

「花陽ちゃん。」

「へ!?何ですか!？」

「ごめんね。」

「え!?」

「もつと俺が注意深くしてれば花陽ちゃんがこける前に助けてあげられたかもしれない…そうすれば花陽ちゃんが怪我をすることなんてなかったかもしれないのに…」

「何でそんなことを言うんですか…!?こけたのは私がせいなんですよ…!?謝らなくちゃいけないのは私のほうなのに…」

自分のせいでこうなったのにも関わらず、ツナが逆に自分に謝つてきたことに花陽は驚いてしまう。

「だって…こんなに近くにいたのに…俺は何もできなかったから…友

達なのに…」

「(何でツナさんがそんなに責任を…どうして…?)」

なぜツナがそんなに責任を感じているのか花陽は理解することができなかつた。だが1つだけ花陽にはわかつたことがあつた。それは…

「(穂乃果ちゃんたちは、ツナさんのこういう所に惹かれたんだな…!!

／／／)」

#標的（ターゲット） 95 「温かい」

一方で神田明神にいるリボーンたちはツナと花陽の帰りが遅いの
で心配していた。

「おせえなあいつら。」

「どうしたんだらう?」

「何かあったのでしようか?」

リボーン、穂乃果、海未が二人の帰りが遅いことに違和感を感じて
いると、神田明神の階段から花陽の顔の部分だけが見える。

「あー帰ったきたー…にや!」

「あ、あれって…!!」

ツナが花陽をおんぶしているのを見て、凜とことりが顔を赤くして
動揺する。穂乃果と海未も動揺し、リボーンは面白そうな表情でその
光景を見ていた。

「はあはあ…あれ?何で穂乃果ちゃんたちがいるの?」

「(ど、どうしよう…!!なんか気まずいよ…!!誰か助けてー…!!)」

走りに行く前にはいなかったはずの穂乃果、海未、ことり、凜がい
ることにツナは少しだけ驚く。

一方で花陽はツナに想いを寄せるメンバーがいることので驚くと
同時にもの凄いい気まずい気持ちになってしまう。4人が動揺して
る中、リボーンがツナに花陽に何かあったのかを尋ねる。

「どうしたんだツナ?何かあったのか?」

「実は花陽ちゃんが足を捻ってちやって、それでお前ならなんとかし
てくれると思ったから、とりあえず花陽ちゃんを運んで戻ってきたん
だ。」

「そうか。とりあえず見せろ。」

ツナは花陽をゆっくりと降ろすと、リボーンはどこからか救急箱を
取り出すと花陽の足を応急処置をする。応急処置をしながらリボ
ーンはツナに言う。

「よくやったぞツナ。部下を見捨てずにここまで運ぶなんて、マフィ
アのボスとして成長したじゃねえか。」

「何でもマフィアに結びつけるのを止めろって！それよりも何で穂乃果ちゃんたちがいるの？」

「え?!いや…花陽ちゃんがダイエットしてって聞いたから応援に来たんだよね!ねっ、みんな!？」

「そ、そうです！」

「わ、私も！」

「り、凜もだにゃ！」

この場所に戻って来てからツナがずっと疑問に思っていたことを尋ねると、穂乃果、海未、ことり、凜が動揺しながら答える。

そしてリボーンが花陽の足の応援処置を終える。

「とりあえずはこれで大丈夫だ。」

「ありがとうございます。」

「気にすんな、俺は当然のことをしたまっだ。怪我のほうは安静にしていれば治るはずだ。恋の病のほうは安静にしても治らねえがな。」

最後の言葉ほうは花陽にしか聞えないぐらいの小声でニヤニヤしながらリボーンが言うのと、花陽は顔を真っ赤にしてしまう。

「へ!?!私は…!!いや…その…!!」

花陽は顔を真っ赤にして顔を俯く。するとリボーンはツナに命令する。

「んじゃツナ、もう1回走ってこい。」

「ええ!?!何で!？」

「いいからとっど行ってこい。行かねえっていうなら…」

「わかったよ!行けばいいんだろ！」

ドスの聞いた声でリボーンが銃を取り出したで

ツナは何かされる前にとっど走りに行ってしまう。

そして穂乃果、海未、ことりはツナと一緒に走り

たいと思う、ツナのあとを追いかけてしまう。

ツナたちがいなくなったあと、この場所に残った凜が花陽に尋ねる。

「かよちゃん大丈夫かによ？」

「うん、大丈夫だよ。ツナさんが運んでくれたから…それに…」

「それに？」

「男性の背中って、とつても温かいんだね…!!」

「か、かよちゃん…!？」

突然花陽が顔を赤めてそんなことを言い始めたことに凜は心の中で「まさか…」と思ってしまう。

そして花陽は顔を赤くしながら続けていく。

「足を捻ってたのは私がつまずいたせいなんだ…でもツナさん私は全然悪くないって言うてくれて…!!それどころか自分が悪いって言うて…!!ツナさんって本当に優しいんだなって思っちゃって…!!」

「やっぱり…!!かよちゃん…!!」

凜が確信すると、花陽は顔を真っ赤にしながら黙って顔を縦にふるだけだった。

こうしてツナを想う人物が増えた。

#標的 (ターゲット) 96 「お礼がしたい」

時は一気に進んで花陽が足を捻って怪我したその夜。

—花陽の家—

「今日は大変だったな…：当分、体育はできそうにないけど…：でも悪いことばかりじゃなかったかな…!!」

そう呟くと花陽はほんのりと顔を赤らめて、ツナにおんぶしてもらったことを思い出す。

すると花陽のスマホに電話が入る。

「誰だろう？あ！ツナさんからだ。」

電話をかけてきたのはツナであった。ちなみにツナは花見の時に穂乃果、海未、ことり以外の4人のメンバー+雪穂、亜里沙とLINEを交換している。

「もしもし？」

『もしもし花陽ちゃん？ごめんね、こんな時間に。』

「いえ。それよりもどうしたんですか？」

『花陽ちゃんの足の怪我が心配でさ、大丈夫かなって思って…』

「大丈夫ですよ。リボン君がちやんと応急処置してくれましたから。体育は当分の間は見学になりましたけど、それでも普通にすれば1週間で治るってリボン君も言っていましたから。」

『そっか…：それならよかった。』

よかったと言うツナだが、本当に心の底からよかったとは思っていない。それを感じとったのか花陽はずっと気になっていたことをツナに尋ねる。

「あのツナさん…」

『何、花陽ちゃん？』

「…どうしてツナさんがそこまで責任を感じるのんですか？」

『え…？』

「あれから色々と考えてたんですけど、私にはどうしてもわからなくて…どう考えても私のせいなのに…」

『それは…』

花陽の問いにツナは言葉を詰まらせてしまう。だがそれでもツナは花陽の問いに答える。

『誰かが傷つくのを見たくないんだ。たとえそれがどんなに小さくても…だから今も後悔してるんだ。あの時、花陽ちゃんを助けられれば花陽ちゃんが怪我することはないんじゃないかなかったかって…』

「優しいんですね…」

『そう？俺はずつと感じてたことを言っただけだよ。』

「なんかツナさんって不思議な人ですね。」

『え？不思議ってどの辺が？』

「秘密です。」

『ええ!?教えてよ花陽ちゃん!』

秘密と言われてツナは花陽の言う不思議な人ということが余計に気になってしまう。花陽はツナの反応に少し微笑んでいた。

そして話題は別の話になる。

「ツナさん。明日って何か予定ってありますか？」

『予定？特にないけど…どうかしたの?』

「明日、家庭科の授業で調理実習があるんですけど、その授業でクッキーを作ることになってるんです。調理実習で作ったクッキーをツナさんに昨日のお礼としてプレゼントしたいんで、明日学校の校門の前まで来てくれませんか？」

『お礼なんて俺はそこまでのことはしてないよ!べ、別に行きたくないわけじゃないんだよ!』

「ツナさんがそう感じてなくても、私は助けられましたから…それに…!!」

『それに?』

「な、何でもありません!それで来てもらえますか!?む、無理にとは言

「いません！」

『いいよ。学校の校門の前でいいんだよね？』

「はい！」

『じゃあ、学校が終わったらすぐに行くよ。花陽ちゃんのほうこそ足を怪我してるから無理しないでね。』

「あ、ありがとうございます…!!」

『それじゃ、明日の学校の校門の前で。着いたらLINEするから。』

「はい、わかりました。」

『それじゃあ花陽ちゃん。お大事にね。』

そう言っているとツナは電話を切る。そして花陽は決意する明日はツナが喜ぶようなクツキーを作ってみせると。

はたして花陽はツナを満足させることができるのであろうか!?

#標的（ターゲット） 97 「初めての音ノ木坂学院」

またまた時は一気に進んで、次の日の夕方。ツナは学校が終つて家に帰ると、すぐにバイクに乗って音ノ木坂学院に向かつていた。

「学校がちよつと早く終つちやっただけど、大丈夫かな…早く着いたらどこかで時間を潰すしかないな…」

バイク乗りながらそんなことを呟くと、ツナはちよつとした重要なことを思い出す。

「あ…バイクどこに置こう…」

バイクの置く場所を考えていなかったツナ。さすがに女子高の前でバイクに乗って待ち伏せるのはあまり良くないのでは思つてしまふ。

「あの場所しかないかな…」

そう言つてツナがやつて来たのは穂乃果の家でもあり、和菓子のお店でもある穂むらであった。

「やっぱり穂むらしかないよな…」

若干、嫌な顔をしながら穂むらの看板を見るツナ。そしてため息をつきながら穂むらに入る。

「いらつしやい…あらツナ君！」

「ど、どうも…ちよつとお願いがあつて来たんですが…」

「お願いって…もしかして穂乃果と結婚させてほしいとか!？」

「違います!…」

「じゃあ、結婚を前提にお付き合いさせてくださいとか!？」

「それも違います!…」

いつものように穂乃果の母は穂乃果と結婚や付き合い合う話のほうに

話を持っていき、その発言にツナがいつものようにツツコミをいれる。

このままではいつものように穂乃果の母のペースに乗せられてしまうので、さっさと話を終わらせてツナは穂乃果の母にお願いをする。

「あのですね！ちよつと音ノ木坂学院に用があるんでバイクを置かせてほしいんです！」

「あら、そうだったの。全然いいわ…は！まさか学校で穂乃果に告白!?!」

「もう勘弁してください！」

結局、最後の最後まで穂乃果の母のペースに乗せられてしまったツナ。とりあえずバイクを穂むらに置いてスマホを見ながら音ノ木坂学院を目指す。

そしてツナは音ノ木坂学院の校門の前に着く。下校する生徒がツナを物珍しそうな顔で見ると、ツナは音ノ木坂学院を見つめていた。「ここが音ノ木坂学院か…そういういえば初めて来るな…」

今まで何度か音ノ木坂に来ることはあったが、音ノ木坂学院に来るところか、見るのも初めてであった。初めて見る音ノ木坂学院にツナは新鮮さを感じていた。

「音ノ木坂学院学校のに穂乃果ちゃんたちは毎日通っているのか…あ！花陽ちゃんに連絡しないと！」

着いたら連絡するという花陽との約束を思い出して、ツナはポケットからスマホを取り出して、LINEで花陽に連絡しようとする。

すると灰色の髪をした女性がツナに話しかける。

「あの…」

「は、はい…」

「何か学校にご用でしょうか？」

「あ！いえ！学校に用があるというか、この学校の人とここで待ち合わせしてるというか！けっして怪しい者じゃないんです！」

両手を前に出して、ツナは怪しい者じゃないと主張する。すると女性性はこんなことをツナに尋ねる。

「もしかしてあなた…沢田綱吉さん？」

「え!?!何で俺の名前を…!?!」

「やつぱり。娘からよくあなたのことは聞いています。私はこの学校の理事長で、ことりの母です。」

「こ、ことりちゃんのお母さん?!い、言われてみれば似てる…」

「いつも娘がお世話になってます。」

「い、いえ！こちらこそ！いつもことりちゃんにはお世話になっていきますー！」

ことりの母が丁寧に礼をしてきたので、ツナも慌ててツナも丁寧に礼をする。

「そう言えば、待ち合わせと申していましたけど…?」

「今日、この学校の古泉花陽さんと学校の校門の前で会う約束してまして。」

「あらそうだったの。なら部室に行つて会つて見る？」

「ええ!?!ここ女子高ですし！さすがにそれは！」

「理事長の私がいいって言っているんだから、問題ないわ。」

「いや…それは理事長として問題がある気がするんですが…」

ことりの母の発言にツナはほんの少しだけこの

学校は大丈夫なのかと思ってしまう。

ツナはことりの母の案内のもとアイドル研究部に向かうこととなった。

#標的（ターゲット） 98 「伝えたいこと」

ことりの母の案内のもと、アイドル研究部に行くツナ。

「誰だろうあの男の子…？」

「理事長の知りあいか何かな…？」

「でもかわいいー。」

「あ！あの制服知ってる、並盛高校のじゃない？」

「本当だ。」

ツナを見て、音ノ木坂学院の生徒たちは小声でヒソヒソと話す。生徒たちは驚いてはいたが、以外にも変な目で見られることはなかった。

ヒソヒソと話をする女子生徒の会話に、ツナは凄い気まずくなっていた。

「（やっぱり気まずい…！そりやそうだよなー…女子高に男の俺がいるんだし…！）」

恥ずかしさのあまりツナは顔を赤くし、下を向き

ながら歩いていった。なんとか恥辱に耐えながら

ツナは、ことりの母についていき、なんとか

アイドル研究部部室前につく。

「ここがアイドル研究部の部室よ。」

「ここが…。」

「じゃあ開けるわね。」

そう言うと、ことりの母がアイドル研究部の部室

の扉を開ける。

「みんなちよつといいかしら？」

「あ！理事長！」

「お母さん！」

理事長であることりの母が部室が入ってきて、驚く穂乃果とこと

り。もちろん他のメンバーも急に

ことりの母が入ってきて「何かあったのか？」

という表情をしていた。

「実はあなたたちに会わせたい人がいるの。」

「「「会わせたい人？」」「」」

ことりの母の言葉にアイドル研究部のメンバー全員、疑問符を浮かべる。そしてことりの母が「入ってきていいわよ」と言うところツナが恐る恐る部室に入ってくる。

「こ、こんにちわ…」

「ツツツツツツツナ君！」

「あああああああああ！」

「ど、どうしてここに!?!」

「ほ、本物かじゃ!?!」

「や、約束が…!!」

まさかツナが来るなどと思っていなかったもので、穂乃果、海未、ことり、凜、花陽は顔を真っ赤にしてめちやくちゃ動揺してしまっていた。

「じゃあ私は仕事があるからこれで。」

そう言うところりの母は動揺しているメンバーを見て微笑みながら、アイドル研究部部室を去っていく。

「ツナさん、こんにちわ。」

「こんにちわ。」

「こんにちわ雪穂ちゃん、亜里沙ちゃん。アイドル研究部に入ったんだね。」

ツナがやって来たことに全く動揺していない雪穂と亜里沙は普通に挨拶する。それに対してツナも普通に挨拶する。

そして動揺こそしてはいないが、ツナがここにいることに驚普通に驚いている真姫がツナに尋ねる。

「というか何でここにあなたがいるのよ!?!ここ女子高よ!」

「昨日花陽ちゃんとLINEでこの学校の前で待ち合わせの約束してただけ、俺が校門前に待ってたらことりちゃんのお母さんが、俺

がことりちゃんとの友達だつて知ったら入ってもいいって言うてくれ
て。」

「そんな理由で入れているの…?」

「それは俺も思った…」

いくら娘の友達だといつても、女子高に男性をいれていいのかと
思ってしまう真姫とツナ。

すると亜里沙がツナに尋ねる。

「ツナさん。さっき花陽さんと約束とか言っていましたけど何なんです
か?」

「今日は花陽ちゃんと」きよ、今日はいいい天気だなー!」花陽ちゃんど
うしたの!」

顔を真っ赤にしながらツナの言葉を遮る花陽。急に大声を出す花
陽にツナは驚いてしまう。

すると花陽はツナにこう言う。

「あ、あのツナさん!ちよつと屋上に行きませんか!?例の物を渡した
いんで!」

「え?別にここで…!いいですから!」う、うん…!」

花陽の勢いに押されて、ツナは花陽と一緒に屋上に向かう。花陽は
学校のバッグを持っていく。

—屋上—

「こ、これ!頑張つて作りました!受け取ってください!」

「あ、ありがとう…」

花陽はバッグから調理実習で作ったクッキーをツナに渡す。ツナ
が花陽にお礼を言うと、疑問に思っていたことを花陽に尋ねる。

「でも何でわざわざ屋上に?別に部室で渡してくれてもよかったん

「じゃ…?」

「えつと…!!／／それは…!!／／」

「それは?」

「ツナさんに伝えたいことがあるから…!!／／」

「伝えたいこと?」

「はい…!!／／屋上ここでしか伝えられないことがあるから…!!／／

／

「屋上ここでしか?」

ツナがそう言うのと花陽は顔を赤くしながら黙って首を縦に振る。二人つきりで、他には誰にもいない状況であるにも関わらずツナは花陽が何をしようとしたのか全く気づいていない。

そして花陽は顔を真っ赤にさせながら言う。

「あ、あの!私…!!その…!!／／ツ、ツナさんのことが…!!／／」

花陽がツナに想いを伝えようとしたその時…屋上は扉が開き、そこからアイドル研究部全員がバランスを崩して雪崩れ込んでいく。どうやらツナと花陽のことを尾行していたらしい。

「な、何してるのみんな…?」

「い、いや!ツナ君と花陽ちゃんが何をしに行くのか気になるか尾行してみようって雪穂が言うから!」

「それ言い出したのは、お姉ちゃんでしょ!」

「ごめんねツナ君、花陽ちゃん…」

「悪気はなかったんです…」

自分が言い出したことを雪穂のせいにする穂乃果。そんな中でこりと亜里沙はちゃんと二人に謝る。

「だからこんなこと止めましようって言ったんです!」

「本当よ!」

「そう言いながら海未ちゃんも、真姫ちゃんもじつくりと見てたにや。」

海未と真姫の言葉を聞いて凜がそう言うのと、二人は恥ずかしさのあまり顔を赤くしてしまう。

そして告白しようとしたところをみんなに見られて花陽は顔を

真っ赤にし、そのまま倒れそうになる。

「あ、危ない花陽ちゃん！」

倒れそうになる花陽を見て即座にツナは花陽の体を支えて地面に倒れて足の怪我がこれ以上、悪化させないことに成功する。

「あ、危なかった…大丈夫？花陽ちゃ…って大丈夫じゃない!？」

ツナが花陽の顔を見ると、花陽は顔を真っ赤にし

たまま気絶してしまっていた。

「ちよつと花陽ちゃん！しっかりして！ねえ！」

このあとツナが花陽を保健室までツナが運び事なきを得た。だが後日その話を聞いて花陽は「どうしてそんな大事な時に気絶してたの私!？」と花陽は思ったらしい。

#標的（ターゲット） 99 「違和感」

告白しようとした現場見られて気絶した花陽を保健室に運んだツナ。そのあとなんとか花陽は意識を取り戻した。

そしてツナは用が終ったので帰ることになった。校門前にてアイドル研究部の部員全員でツナを見送りをする。すると穂乃果が少し寂しそうな表情で言う。

「もつとゆっくりしていけばいいのに。」

「そうしていききたい気持ちもあるけど、音ノ木坂学院は女子高だし、いくら理事ことりちゃんのお母さん長が許可してくれたとは言っても長居はできないよ。それに穂乃果ちゃんの家にはバイクを置かせてもらってるしね。」

「そうなの!?!じゃ、じゃあお母さんがまた変なこと言わなかった!?!」

「あー…えつと…」

「やつぱり言ったんだー!もう!お母さんのバカー!」

ツナの反応を見て、自分の母がいつものように結婚の話をしたんだなということを理解すると、穂乃果は恥ずかしさのあまり顔を赤くしてしまう。そんな穂乃果の姿を見て全員、穂乃果に同情してしまう。だがツナは同情すると同時に顔を赤くしている穂乃果を見て「かわいい」と思ってしまった。

そして穂乃果が一旦落ち着いたのを見計ったあと、ツナは花陽にお礼を言う。

「花陽ちゃん、美味しかったよクッキー。ありがとう。」

「あ、ありがとうございます…!!」

実は気絶している間に花陽のクッキーを全部食べていたツナ。ツナがお礼を言うと花陽は顔を赤くしてしまう。

するとなぜかツナの手にはもう一つ、クッキーの入った透明な袋が握られていた。

「凜ちゃんもクッキーありがとう。」

「どういたしましてだにゃ。」

「へ…?」

なぜか調理実習で作った凜のクッキーをツナが持っていることに花陽は驚いて目が点になってしまう。

実は凜もツナに調理実習で作ったクッキーを後日渡そうとしたが、今日ツナが音ノ木坂学院に来たので花陽が気絶している間にクッキーを渡したのだ。

「凜は料理は下手だけど、それでも一生懸命作ったにゃ!」

「そうなんだ。まだ食べてないから食べてみようかな。」

そう言つて凜の作ったクッキーを一口食べるとツナは笑顔で言う。

「美味しい!」

「本当にゃ!?!」

「うん。」

「よつかたにゃ…凜の料理を食べたらみんなお腹を壊しちゃうから心配だったにゃ…でも上手くできたみたいでよかったにゃ…」

「…」

自分の作ったクッキーが美味しくできていたことにホツとする凜。そんな中で真姫だけがツナのことを疑うような表情で見ている。

そして凜の作ったクッキーを全部食べ終えると、ツナはバイクを置いている穂むらに向かって歩いていく。

「じゃあね!みんな!」

ツナは信号を渡ると、校門の前にいる穂乃果たち

に手を振る。ツナが手を振ると真姫以外の全員

が手を振る。

そしてツナの姿を見えなくなったあとで、穂乃果がみんなに向かって言う。

「さてツナ君も帰ったことだし、部室に戻ろつか。」

「ちよつといい穂乃果?」

「どうしたの真姫ちゃん？」

「私、用事を思い出したから先に帰るわ。」

「え？用事って？」

「別に大した用事じゃないわ…とにかく私、帰るから。」

「ちよつと真姫ちゃん！」

穂乃果の制止も聞かずに真姫はツナと同じ方向へと走って行ってしまふ。

急にこんなことを言う真姫に海未とことりは違和感を感じていた。

「急にどうしたのでしょうか？」

「何かちよつと怒ってた感じがしてたけど…」

走ってどこかに行ってしまった真姫の背中を見てそう呟く二人。

「真姫ちゃんのことだし、別に何も心配しなくていいと思うにや。」

「そうだよ。真姫ちゃんだもんね。」

凜と花陽は真姫の行動に多少、違和感を感じてはいたものの、真姫はしっかりともののなので何も問題はないだろうと思う。

「とりあえず部屋に戻ろうよ。それに色々と聞きたいことがあるしね。」

雪穂がニヤニヤしながら花陽と凜のほうを見てそう言う。ニヤニヤしている雪穂を見て亜里沙は「アハハ…」と苦笑いしていた。

このあと花陽と凜は部屋にてツナのことが好きだということをはらされてしまふのだった。

#標的（ターゲット） 100 「疑い」

その頃、穂むらに向かって歩いてるツナは…

「ちよつとだけ口の中が苦い…」

歩きながらツナが呟く。実は凜の作ったクッキーがお世辞にも美味しいとは言えなかった。しかしツナは凜が一生懸命作ったクッキーを美味しくないとはいえなかったので、あの時ツナは嘘をついた。

「ビアンキのポイズンクッキングに比べれば、どうってことないか…」

凜は自分の料理を食べた人はお腹を壊すと言っていたが、ツナはそういうレベルを越えた料理を食べさせられたお陰で普通の人より耐性ができてしまっており、凜の料理を食べても少しまずいと思えるぐらいに胃が頑丈になってしまったのだ。

すると後ろから…

「やっぱり嘘ついてたのね。」

「真姫ちゃん!? どうしてここに!?!」

「さつき凜のクッキーを食べた時のあなたの反応が変だったから、後をつけて来たのよ。」

「あ…バレてた…?」

「当たり前じゃない。第一、自分が料理が下手だって言ってる人が急に料理が上手くなるなんて思えないわ。まあ…たまたま上手くできたっていうのも考えられるけど…」

「さすが真姫ちゃん…でもその為だけにわざわざ俺のあとをつけてくるなんて、真姫ちゃん友達思いなんだね。」

「べ、別に…あなたの対応が気にいらなかったから一言、言いに来ただけよ…!」

少しツンツンしながらそう言う真姫。真姫が自分を尾行してきた理由を聞いてツナは、表情を曇らせて謝る。

「ご、ごめん…でも美味しくなくて言ったら、凜ちゃんがショック受

「けちやうかなって思ったから…」

「まあ…気持ちかわかるけど…」

「お願い真姫ちゃん！凜ちゃんにはこのことは言わないで！」

ツナは両手の手の平を重ねて祈るように、真姫に頼みこむ。すると真姫はため息をつきながらツナの頼みを承諾する。

「はあ…わかったわよ…」

「本当!?ありがとう真姫ちゃん！」

真姫がそう返事をする、ツナは顔を明るくさせる。

そんなツナを見ながら真姫は思ってしまう。

「穂乃果たちはこんな男のどこがいいのかしら…?悪い奴じゃないのはわかってるけど…私には理解できないわ…それに…」

なぜみんながツナのことを好きなのか真姫にはわからなかった。そして真姫にはもう一つわからないことがあった。

「(ことりがフウ太って子が誘拐されたあの事件…本当にツナがああ二人を助けたのかしら…?あの事件のあとニュースでも言っただかかったし、新聞も見ただけどあの誘拐事件のことは一切載ってなかったからツナが二人を助けたかもしれないけど…それでもツナがそんなに強いとはどうしても思えない…)」

前にあつた誘拐事件で、本当にツナがフウ太とことりを助け出したとは真姫にはどうしても思えなかった。

そして真姫はそのことについてツナに尋ねる。

「ねえ、ちよつと聞いていい?」

「何?真姫ちゃん?」

「前のことりとフウ太って子が誘拐された事件覚えてるわよね?」

「覚えてるけど…それがどうかしたの?」

「本当にあんたがああ二人を助けたの?」

「え…?」

真姫がそう尋ねるとツナは驚いてしまう。そしてさらに真姫はさらに続ける。

「あんたがそんなに強いとは私にはどうしても思えないわ。」

「まあそう思われて当然だよね…でも別に真姫ちゃんが俺のことを

疑ってるんならそれでいいよ。」

「何よそれ…」

「だってフウ太とことりちゃんは無事だったんだし、それでいいんじゃないかな？」

「それはそうだけど…少しぐらい反論とかないわけ？」

「特にないけど。」

「本当にわからないわ…あなたが悪い奴じゃないのはわかってる。でも正直に言って私はあんたを信用できないところがあるわ。」

「そつか…俺って真姫ちゃんから信用されてないのか…」

真姫の言葉に少しショックを受けるツナ。すると真姫の背後から少し体の細めの男が近づいてくる。男はいきなり真姫の口をハンカチで押さえつける。真姫は突然のことに驚き、身動きが取れなくなってしまう。そして真姫は男から離れようとするが、意識を失ってしまうぐったりとしてしまう。

「な、何してるんですか!」

「邪魔だ。」

「ガハ!」

男はツナを蹴り飛ばすと、手に巻いてあるリングから霧の炎を出すと一瞬で消えてしまう。

「い、今のは死ぬ気の炎…それに真姫ちゃんが…」

突如、拐われてしまった真姫。一体どうなる!?

#標的（ターゲット） 101 「私の為に」

一方で拐われた真姫はことりの時と同じように、潰れた工場に拐われてしまった。

「うくん……ここは……」

「お目覚めのようだねお嬢さん。」

「だ、誰よ!?! って動けない!?!」

手と足が縛られてたことに気づく真姫。そして目の前にいる謎の男は勝手な自己紹介を始める。

「私の名前はアトロチア。科学者だ。」

「科学者が私に何の用よ……私を拐って身代金でも要求しようって言うの!?!」

「そんなことに興味はない、私が一番興味のあるのは君の傍にいたあの男さ。」

「あんたまさか……マファイア……?」

「まさかマファイアのことを……いやあの男の正体知っていたか。」

「それで何が目的なわけ?」

「言うなれば革命だよ。私がマファイア界の頂点に君臨するための。だからボンゴレ十代目……つまり沢田綱吉をおびき寄せる為に君を利用させてもらったのさ。」

「革命……? ナニソレイミワカンナイ……」

「一般人である君に、私の崇高な目的が理解できるはずはない。それに君も私の計画に嫌でも協力することになるのさ。」

「ど、どういう意味よ!」

「簡単さ。君と沢田綱吉を人体改造し、私の目的の為だけに働く殺戮マシーンとして働いてもらうのさ。」

「!?!」

アトロチアの計画を聞いて真姫は顔を真っ青になってしまう。それと同時に真姫の目から涙が零れ落ちる。

「(じゃ、じゃあ…私…もうみんなと会えない

ってこと…?一生こいつのいいなりになるの私…?)」

「いい反応だ。だが安心したまえ、今にその恐怖も悲しみもなくなる。私の改造によって君は感情もなくなただ単に殺戮を行うだけの、殺戮マシーンになるのだから。フハハハハハハ！」

自分の計画の成功した想像をしながら、アトロチアは高笑いする。

「そんなことはさせない。」

「来たか沢田綱吉…いない!?どこだ!？」

アトロチアが工場の入口を見るがそこにツナの姿はなかった。すると工場の上からツナの声が聞えてくる。

「こつちだぜ。」

「上か!？」

「飛んでる…!?それに燃えてる…!？」

ツナの声が聞えた上のほうを見るアトロチア、そこには超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナがいた。そして

真姫はツナが空中がいること、額が燃えていることに驚く。

そして二人が驚いたのも束の間、ツナは死ぬ気の炎を逆噴射させて一瞬でアトロチアの背後に移動し、アトロチアの背中に強力な蹴りをいれると、アトロチアを吹っ飛ばす。

「はあ！」

「ガハ!？」

アトロチアを吹っ飛ばしてアトロチアが倒れているのを見たあと、ツナは真姫のほうを見る。

「大丈夫か真姫?」

「え!?!ええ…」

「そうか。」

急にツナに真姫と呼び捨てにされて真姫は戸惑ってしまふ。そしてツナは真姫が無事であることにホッとす。

そしてツナの顔を見て真姫が尋ねる。

「それより凄い汗かいてるわよ…どうしたの…?」

「お前が拐われて、町中の人気のない場所を走りまわったからな。」

「え…!？」

「それよりすまなかったな。早く見つけれなくて…」

「どうして…?？」

「?」

「どうして私の為にそこまで…あんな酷いこと言ったのよ…」

「お前は俺の大事な友達だ。友達を助けるのに理由なんていらぬい。」

「友達…」

真姫は驚いていた、あんなに酷いことを言ったのにも関わらず助けに来てくれた上に友達だと言ってくれたことに。

そしてツナはアトロチアに向かって言う。

「いつまでそうしてるつもりだ?」

「バレていたか。」

ツナがそう言うと、アトロチアはゆっくりと起き上がる。どうやら倒れていたフリをしていたらしい。

「攻撃した瞬間、手応えが感じなかったからな。お前のその服は何か仕込んでいるのだろうか?」

「その通りだ。この服のは俺が特別製で、少々攻撃したぐらいじゃ、俺にダメージは与えられない。そしてさらに死ぬ気の炎を吸収することができるのさ。仮にお前がパンチを繰り出しも、死ぬ気の炎を吸収することによって死ぬ気の炎の破壊力をゼロにして、ただのパンチに変えることも可能なのさ。」

「厄介だな。」

「そうだろう?これで死ぬ気の炎を封じたも同然。」

「だがそんな小細工では俺は倒せないぞ。」

「強がりな…貴様とこの女は私がマフィア界の頂点に君臨する為の道具になるといふのに…」

「そんなことの為に真姫を拐ったのか…?」

「その通りだ。あと貴様を呼び寄せる餌としてだが。それにこのアトロチア様の改造人間になれるんだ、光栄だろう。」

「ふざけるな!真姫は俺の友達だ!真姫は誰よりも優しい女の子なんだ!それをお前のくだらない野望は為に!」

「怒ってる…こんなに怒ってるの初めて見た…」

アトロチアの言葉にツナの額の炎が激しくなる。そして初めて怒るツナを見て真姫は驚いていた。

「アトロチア！俺はお前を絶対に許さねえ！」

#標的（ターゲット） 102 「絶対に護る」

「許さないだど？笑わせる。それに私は科学者だぞ。何も考えずにこへ来たとても思っているのか？」

そう言うアトロチアは懐から注射器を取り出す。そして袖をめくり腕に刺すと、アトロチアの体に異変が起き、細かった体がどんどん大きくなり、それに応じて服も伸びていく。

「いくら貴様でも人知を越えたこの私に勝てないだろう？」

「な、何よあれ…」

「増強か。」

急に姿が変わったアトロチアを見て真姫が驚く。そして姿の変わったアトロチアを見て、ツナは冷静にアトロチアの身に何があったかを理解する。

「そうだ。これは私が開発した増強剤だ。これでパワーもスピードも防御も何倍にも上がる。」

「見てくれが変わったただけじゃ俺には勝てないぞ。」

「な、なに挑発してるのよ！どう見てもやばそうじゃない！」

「俺は本当のことを言っただけだ。それに安心しろ真姫。俺はお前を絶対に護る、俺の命に代えてもな。」

「え?!/!/」

ツナの言葉に少し顔を赤くする真姫。するとアトロチアは一瞬でツナの背後に移動し、背後からツナに攻撃しようとするが…

「遅い。」

「ガハ!？」

ツナは一切振り返らずアトロチアの顔面にパンチを喰らわせ、アトロチアを吹っ飛ばす。

「あ、ありえん!?人知を越えた私の動きに!？」

「その程度でか?」

「調子に乗るな!」

今度は背後ではなくアトロチアは、一瞬でツナの横から攻撃をしよ

うとするもまたも顔面にパンチを喰らわせられる。その後もアトロチアは高速で移動しながらツナに攻撃しようとするが、攻撃する前に顔面にパンチを喰らわせる。顔面には死ぬ気の炎を吸収する物もないのでアトロチアに攻撃が効くのだ。

「な、なぜだ!?なぜ私の動きについて来られるんだ!?!」

「簡単だ。お前が遅いからだ。」

「な、何だと!?!」

ツナの言葉を聞いて衝撃を受けるアトロチア。いくら増強したと言っても今まで戦ってきた相手に比べれば、アトロチアの動きはツナにとつてはゆっくり見えるのだ。

「(あいつあんなに強かったの:!?じゃあ本当に誘拐事件の時に二人を助けたってこと:!?!)」

アトロチアを圧倒するツナを見て真姫は、あの誘拐事件でツナが本当にとりとフウ太を助け出したのが本当であるということを理解する。

「終わりだアトロチア。」

「(クソ!私の計画が!こうなったらあの女を人質に!)」

アトロチアは捕らわれている真姫のほうをチラッと見ると、今度は真姫の目の前まで一瞬で移動する。

がしかし…

「そうくると来ると思ったぜ。」

「な、何!?!私の動きを読んだだと!?!」

真姫に手を伸ばそうとしたアトロチアだったが、ツナに腕を捕まわてしまう。ツナは超直感でアトロチアが真姫を人質に取ろうとしたのを察知したのだ。

「死ぬ気の零地点突破初代エディション^{ファースト}」

ツナがそう言うのとアトロチアの腕が凍っていき、そして腕だけではなく、首から下も凍っていく。

「こ、凍だと!?!」

「死ぬ気の炎を吸収する装備もこれで使えなくなったな。これで終わりだアトロチア。」

「ま、待ってくれ！」

「はあ！」

ツナはアトロチアの顔面を殴り、工場の入口までおもいつきりぶつ飛ばす。そしてアトロチアは気絶する。

「終わったな……」

こうしてアトロチアとの戦いは幕を閉じる。

#標的 (ターゲット) 103 「掟の番人」

「終わった…」

「殺したの…?」

少し不安そうな表情で真姫が尋ねると、ツナは首を横に振りながら答える。

「加減はした。気絶してるだけだ。」

「それであの男はどうするの…?」

「とりあえずリボーンに…この炎は!?!」

リボーンにこのことを知らせようとスマホを取り出そうとするツナであったが、攻撃的な死ぬ気の炎を感知する。

すると何も無いところから黒い炎が現れ、その中から黒いコートと帽子を被り、顔を包帯で隠している赤ん坊と長身の男が現れる。

「復讐者…」

「な、何よあいつら…!?ま、また敵なの…!?!」

「いや…復讐者はマフィア界の掟の番人だ。法で裁けない奴らを裁くんだ…ということはアトロチアはマフィア界の掟を破っていたのか…」

復讐者を見て真姫は少し顔を青くさせて恐怖してしまう。ツナは恐怖こそしてはいないが復讐者がここにやって来たことに驚きを隠せなかった。

そして復讐者の創始者であり、元最強の赤ん坊であるバミューダがツナに話しかける。

「久しぶりだね、綱吉君。代理戦争以来だね。」

「バミューダ…マフィア界の掟の番人としての仕事は止めていなかったのか…」

「まあね。いくらチェッカーフェイスに復讐する為の仮の仕事だったけど、マフィア界で掟を破った者を裁けるのは僕たちだけだからね。」

ツナとバミューダが話していると、ヴァインディチェ復讐者最強の戦士であるイエーガーが凍ったアトロチアを担いでバミューダの所へ戻ってくる。

そしてバミューダとイエーガーが炎を通つて、ヴァインディチェ復讐者の牢獄へと戻ろうとすると、バミューダが真姫に言う。

「そこのお嬢さん。今回は一般人である君を巻き込んでしまつて悪かつた。マフィア界の掟の番人として謝罪させてもらうよ。」

そうバミューダが一言だけ言う**と**バミューダとイエーガーは夜の炎を通つて復讐者の牢獄へヴァインディチェと帰つていと何事もなかつたのように夜の炎が消える。

「き、消えた…あの男は一体どうなるの…?」

「罪を裁かれて、罰を受ける。そして絶対に逃げるのでできない牢獄に捕られるんだ…」

真姫が尋ねると、ヴァリアーと戦つた時に頭の中に入ってきた、骸が捕らえられていた光景を思い出す。

ちよつとだけそのことを思い出したあと、ツナは真姫を拘束しているロープを外していると、真姫はツナに謝罪する。

「さつきは悪かつたわねあんなことを言つて…」

「さつきのこと?」

「あんたのことを信用できないつて言つたことよ…」

「気にするな。そんなことよりお前が無事で良かった。よし、ほどこけた。立てるか?」

「ええ…あれ…?」

ツナがロープをほどいて、立ち上がろうとする真姫だったが、頭がクラクラしてうまく立てなくなる。

「あ、頭がクラクラする…」

「おそらくアトロチアがお前を拐おうとした時に、ハンカチに何か薬品を塗つてたんだらう…たぶんその薬品の影響が出てるんだ。」

「そういうええなんか変な匂いがしたような気がするわ…」

ツナがそう言う**と**、誘拐された時のことを思い出す真姫。

そして真姫が立てそうにないと理解したツナは…

「とりあえず、俺がお前を抱えて神田明神まで飛んでお前を運ぶ。」
「ヴェエエ!?」ど、どうしてそうなるのよ!？」

「い、いや…バイクがあれば後ろに乗せればいいんだが、バイクは穂乃果の家に置いてるし、さすがにお前をこんなところに一人残すのもアレだし…でも困ったな他に方法が…」

他に何かいい方法がないかと考えるツナ。だが真姫は顔を少し赤らめながら言う

「し、しようがないわね…!!／／他に方法もなさそうだし…!!／／
／

「いいのか?」

「他に方法がないんだから仕方なくよ、仕方なく…!!」

「そうか…それよりも真姫、顔が赤いぞ?大丈夫か?」

「う、うるさい!／／早く運びなさいよ!／／」

「あ、ああ…」

真姫の強めの口調にちよつとだけ困惑してしまうツナ。そして真姫はアトロチアとの戦いの時のツナの言葉を思い出す。

『安心しろ真姫。俺はお前を絶対に護る、俺の命に代えてもな。』

「(べ、別にかっこいいなんて思っていないんだから…!!／／)」

#標的（ターゲット） 104 「名前で」

「いくぞ。」

そう眩くとツナは真姫を左手でを抱え、真姫はツナの首に手を回す。そしてツナは右手のグローブから死ぬ気の炎を逆噴射させて空を飛び、神田明神を目指す。

「た、高い！お、降ろして！」

「あ、暴れるな真姫！落ちるぞ！」

「も、もっと低く飛なさいよ！」

「あ、あんまり低く飛ぶと、一般人に俺たちの姿が見えてしまうから仕方ないだろ！」

あまりの高さに恐怖してしまい、真姫はジタバタしてしまい空中でフラフラして今にも落ちそうになってしまう。

そしてフラフラしながらもなんとか10分後、なんとか神田明神に着く。

「よし…人はいないな…」

人がいないのを確認すると、ツナはゆっくりと神田明神に降りていき、真姫を降して壁に立てかける。

そしてツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードを解いて、ノーマル状態に戻る。

「あ、危ねえ…落ちるかと思ったけど…なんとかなった…」

「悪かったわね、私のせいで。」

「いや！そういう意味じゃなくて！別に真姫ちゃんが重たかったからとかじゃないから！」

「ちよつと！今のことという意味よ！」

「あーいやーその！」

ツナはうつかり失言してしまい両手で口を塞ぐが、真姫は聞き逃す

はずもなかった。

そして話は死ぬ気モードのことになる。

「聞かないの?」

「何がよ?」

「いや…さっきの俺の姿というか…その…」

「別に。驚いてないって言えば嘘になるけど、あんたと出会ってからありえないことばかり起こってから、そこまでは驚かないわ。それに秘密なんですよ?」

「え?」

「ことりとあんたがだけの秘密よ。あの姿のことなんですよ?」

「うん…」

「隠す必要なんてないんじゃない?別に私たちは怖がったりしないわよ。」

「それはわかってるんだけどね…でも秘密にしておきたいんだ。」

「そう…わかったわ。秘密にしといてあげるわ。」

「ありがとう真姫ちゃん。」

「ええ!」

さっきまで真姫と呼び捨てにしていたが、急にいつもの呼び方に戻って真姫は驚く。

「どうしたの真姫ちゃん?」

「な、何でもないわ…」

「?」

急に真姫が驚いたことにツナは疑問符を浮かべるツナ。そしてこのことですつと疑問に思っていたことがここで判明する。

「(前にちよつとだけ、ことりのことを呼び捨てにしたのはこういうことだったのね。)」

そして20分ほど休憩すると、嗅がされた薬の後遺症がなくなり、真姫はなんとか動けるようになる。

そして二人は神田明神の階段を降り、真姫は家に帰ろうと、ツナはバイクを置いている穂むらに行こうとする。

「本当に大丈夫?」

「ええ。」

「ごめんね。今日は巻き込んだじゃって。」

「別にあんたのせいじゃないでしょ。それに…あんたがいなかったら私は助からなかったわ…!!」

そう言うのと真姫は、少し顔を赤らめながらボソボソと呟き始める。

「けて…れて…がと…ナ…!!／／／」

「え?何か言った真姫ちゃん?」

「た、助けてくれてありがとう…!!／／／ツナ…!!／／／」

「え!?今、名前を…!?」

「な、何よ!?名前で呼んじやいけないわけ!」

「ううん、そんなことないよ。むしろ嬉しいよ。」

首を横に振りながらツナがそう答えると、後ろからツナと真姫を呼ぶ声がする。

「あれ?ツナ君と真姫ちゃんやん。」

「希さん!」

「希!?」

急に希に話しかけられて驚いてしまうツナと真姫。そしてツナは希に尋ねる。

「希さん…どうしてここに?」

「どうしてって?大学が終わったから家に帰ろうとしただけやけど…そういう二人こそどうしたん?もしかしてデートとか?」

「違います!／違うわよ!」

ニヤニヤしながら尋ねる希に、ツナと真姫は顔を赤くしながら否定する。

すると希はツナに近づくと、希はツナの腕にからみついてくる。

「の、希さん!」

「ねえツナ君。今からウチの家で晩御飯でも食べに来ない?」

「へ!」

急な希の誘いにツナは顔を真っ赤にしてしまう。そしてツナの腕にからみついた希を見て嫉妬したのか、急に真姫は

「希!何してるのよ!離れなさいよ!」

「あれー？もしかして真姫ちゃん嫉妬してるん？」

「そ、そんなわけないでしょ！ツナが困ってるでしょ！」

「あれー？真姫ちゃんツナ君のこと名前で呼ぶようになったやねー。知らんかったわー。」

「べ、別にいいでしょ！名前で呼んだって！」

希が顔をニヤニヤしながら、棒読みでそう言う

真姫は顔を赤くして強がるが、実際心の中では

めちやくちや動揺している。

「それじゃ行こうか。ツナ君？」

「ええ!?俺まだ行くななんて一言も言っていないんですけど!？」

「ウチ一人暮らしやし…誰もいないから寂しいんよ…」

「え…？」

「ダメ…？」

「え、えつと…」

希が目元を潤わせて言ってきたので、ツナはもの凄く誘いを断れなくなってしまう。

「い、行きます…」

「ちよつとー！しっかりしなさいよー！」

明らかに希の演技だというのに、ツナが希の演技騙されてしまったことに真姫は叫んでしまう。そして希は舌をペロツと出す。

「ツナ君も行くって言ってくれたし、行こうか。じゃあね真姫ちゃん。」

「待ちなさいよ！私も行くわ！」

「えー？真姫ちゃんも来るん？」

「な、何よ!?悪い!？」

「やっぱり真姫ちゃん、ツナ君を私に…」

「希！それ以上言ったら怒るわよ！」

「もう怒ってるやん。」

「う、うるさい！」

こうしてまた新たにツナに想いを寄せる人物が増えた。

ちなみにこのあとツナと真姫は希の家で晩御飯を食べたのであつ

た。

#標的（ターゲット） 105 「お詫び」

時はアトロチアとの戦いが終わって次の週。花陽の怪我也治ったのでダイエットを再開することになった。

―神田明神―

「はあはあ…やっとな着いた…まだ花陽ちゃんもいないや。」

リボーンを肩に乗せたツナが神田明神の階段を登ったあと辺りを見渡すがそこには誰もいなかった。

「（穂乃果ちゃんも一緒に来てくれないかなー…）」

「穂乃果と一緒に朝練やりてえなら、電話すりゃいいじゃねえか。」

「だから人の心の中を読むの止めろって!」

リボーンに自分の心の中を読まれてツナは顔を赤くしながら言う。
すると階段のほうから誰かが上がってくる。

「あら? ツナじゃない。」

「あれ真姫ちゃん? どうして神田明神に?」

「雪穂と亜里沙のスクールアイドルの特訓よ。私たち^μsを止めたから、これからは二人をサポートすることになったのよ。それにこうやって朝早く起きて、運動するのはいいことだし。」

「成る程ね。」

「そういうツナは…マフィアの特訓…?」

「ああ。」

「違うからね!」

真姫が尋ねるとリボーンが勝手に答える。リボーンの言葉にツナは否定するが、強制的にこの朝練をやらされているので、結局のところ

ろマフィアになる為の特訓になってしまっている。

するとリボーンが以前の事件のことについて話す。

「ツナから聞いたぞ真姫。お前、マフィアに誘拐されたんだってな。」

「え……」

「すまなかつたな。お前はまだ一般人なのに

巻き込まれて。」

「まだって何よ……その言い方だといずれ私がマフィアになるみたいじゃない……」

「その通りだぞ。」

「私はマフィアなんてならないわよ！私は家を継ぐんだから！」

「なら裏社会で闇医者として働くななんてどうだ？」

「嫌よ！しかも何で闇医者なのよ！」

「闇医者なら、医者としてもマフィアとしても働けるじゃねえか。」

「もつと嫌よ！それに私がマフィアになりたいっていう感じで話を進めないで！」

リボーンはいずれ真姫がボンゴレファミリーに入ること前提にして話を進めていくが、真姫は騙されずにリボーンにツツコミをいれていく。一方でリボーンと真姫のやりとりを聞いてツナは「なんかごめん真姫ちゃん……」と心の中で思っていた。

そして話は以前の事件の話に戻る。

「前の事件のことを9代目に報告したら、9代目がお前を巻き込んでしまったことに関して、お詫びをしたいって言ってきたぞ。」

「いいわよ別に。無事だったんだから。」

「つても、俺が真姫はトマトが好物だって9代目にもう言ったんだがな。」

「勝手に話を進めないでよ！というか何で私がトマトが好きなのを知ってるのよ！」

「つーわけで、そのうちお前の家にトマト100年分が送られるぞ。」

「そんなにいらぬわよー！」

なぜかリボーンに自分の好物を知られていること、そして勝手にトマト100年分が自分の家に送られることになったことに真姫は驚

く。

「んじやスタンウェイのピアノから好きなピアノを一つってというのはどうだ？」

「いきなり変わりすぎでしょー！」

「えつと…スタンウェイって…何…？」

リボンがそう言うのと真姫はめちやくちや驚いてしまう。一方でツナはスタンウェイという単語がわからず頬をかきながら尋ねる。

すると真姫がスタンウェイについて説明する。

「知らないの!?! スタンウェイは世界で一番有名な高級ピアノのメーカーよ! 物によっては1台1000000円以上するのよ!」

(※スタンウェイは本当に実在するメーカーです。)

「えーーーーー!?!」

一台1000000円と聞いてツナは驚いてしまうと同時に真姫がさつきめちやくちや驚いてた理由を理解する。

家が金持ちである真姫も、世界的に有名なピアノメーカーであるスタンウェイのピアノを貰うのはさすがに

無理であった。

#標的（ターゲット） 106 「ボンゴレ体操3番」

そしてツナ、真姫、リボンが神田明神で待つこと15分。アイドル研究部全員が集まる。そして海未と

なぜかりボンとが仕切り始める。

「では今日から本格的に特訓を始めたいと思います。」

「目指すはラブライブ優勝だぞ。雪穂、亜里沙。」

「はいー！」

「何でお前まで仕切ってるんだよ…それに雪穂ちゃんも亜里沙ちゃんも何で受け入れちゃってるし…」

ちやつかりリボンが仕切っていること、雪穂と亜里沙が真面目に返事をしていることにツナは疑問に思ってしまう。

「まあいいか…これからは穂乃果ちゃんと毎朝、一緒に練習できるんだし…!!)」

顔を少し顔を赤らめながら隣に並んでいる穂乃果をチラッと見ながら、ツナがそう思う。

一方で穂乃果もツナと同じことを思っていた。

「（これからはツナ君と朝練できるんだ、嬉しいな…!!)」

ツナと同じように穂乃果も、顔を少し赤らめながらをチラッとツナのほうを見る。

そしてまずは準備体操から始まる。

「んじゃまずは恒例のボンゴレ体操から始めるぞ。」

「」「」「ボンゴレ体操?」「」「」

ツナと花陽以外がボンゴレ体操という聞いたことのない

単語に疑問符を浮かべる。一方でツナと花陽は「やつぱるやるのか…」と心の中で思っていた。

「ボンゴレ体操はボンゴレファミリーに伝わる体操だ。

ボンゴレ体操は多くのマフィアが戦いに出る前には必ずといっていいほどやっている体操だ。」

「おぉー！」

「なんか面白そうだにやー！」

「マフィアにはそんな体操があるんですね。」

リボーンがボンゴレ体操について説明すると、穂乃果、凜、亜里沙は目を輝かせる。

リボーンはさらにボンゴレ体操について説明する。

「ボンゴレ体操は全部で15番まであるんだが。前にツナと花陽がやったから3番からスタートしてみるぞ。」

そう言うとりボーンはラジオのスイッチを押す。そしてラジオからリボーンの声が聞こえてくる。

『ボンゴレ体操第三ー！まずはライフルを持って、640メートル先ターゲットにいる標的を狙撃する運動ー。』

「どんな運動ですか！ただの人殺しじゃないですか！」

「そもそもライフルなんて持つてるわけ…」

海末と真姫がラジオから指示されたことにつっこんでいると…
「ターゲット標的を確認…」

「いつでもいけるにや…」

なぜかサングラスをかけて、どこからライフルを持った穂乃果と凜が、誰もいないであろう遙か遠くのビルの屋上のほうをにライフルを向けていた。

「何であるの…」

「どこから持ってきたんだらう…？」

穂乃果とことりがライフルを構えている穂乃果と凜を見て、ちよつと呆れた表情をしてしまう。

一方で亜里沙は…

「ど、どうしよう…私持ってないよ…」

「俺のを貸してやる。」

「貸さなくていいから！というかやらなくていいから！」

亜里沙がライフルがなくて困っていると、リボーンが自分のライフルを貸そうとするが、ツナがそれを阻止する。

そしてボンゴレ体操はさらに続く。

『次は手にリングにはめて、炎を灯す運動ー。』

「絶対に無理だろー！そもそも体すら動かしてないよー！」

こうして謎のボンゴレ体操は続いていくのであった。

#標的（ターゲット） 107 「仲良くなった？」

ボンゴレ体操を終えて、アイドル研究部部員は普通にまず外周を走っていく。

一方でツナも外周を走っているのだが…
ダンドンダンドンダンドン！

「うわーーーーー！」

ツナは足に重りをつけ、絶叫しながら外周を走っていた…というよりも、ただ単にリボーンに狙われて逃げ回っているというほうが正しい。

「おそえぞツナ。マファイアの銃撃戦なら体中に風穴が空いて即あの世逝きだぞ。もっと早く走れ。」

「無茶言うなよ！足に10kgの鉄球つけてるんだぞ！それからマファイアにはならないって言ってるだろ！」

そう言いながらも、さつきかツナはなんとかリボーンに狙撃を紙一重で避けている。

前を走っている…というよりリボーンに襲われて

いるツナを見たアイドル研究部部員は…

「あれって間違いなく実弾だよね…」

「よく死なないよねツナさん…」

「前も巨大な亀に潰されても、ほとんど無傷だったし…」

「本当に私たちと同じ人間なのかしら…？」

ことり、雪穂、花陽、真姫はリボーンに襲われているツナを見て咳く。

「え？あれって本物の銃なんですか？」

「そんなわけないよ。いくらリボーン君が殺し屋だからって。」
ヒットマン

「そうだにや。きつと当たっても大丈夫なんだにや。」

「私にはどうしてそう思えないですが…」

「私も…」

亜里沙、穂乃果、凜は実弾ではないと言っているが、海未とことりにはどうしてもアレが実弾にしか見えなかった。

そしてこのあとも階段ダッシュや筋トレやダンスレッスンをやる。みんな「疲れたね」などと言って一息をついているなか、ツナだけは…

「も、もう無理…し、死ぬ…」

一人だけ地面に倒れて、最早虫の息であった。体中から煙が出ており、服はところどころ焦げており、髪の毛はボサボサになってしまっている。

そんな倒れているツナに真姫が…

「ほら大丈夫？」

「あ、ありがとう…真姫ちゃん…」

真姫が倒れているツナに手を差し伸べると、ツナは真姫の手を握り、なんとか起き上がる。

そしてさらに真姫はツナにタオルを渡す。

「あとタオルで汚れを拭いきなさい。」

「あ、ありがとう…助かるよ…やっぱり真姫ちゃん優しいね…」

「べ、別に…!!今の姿があまりにも酷かったから仕方なく貸してあげただけで、ツナのことを心配したわけじゃないんだから…!!」

顔を赤らめながら真姫がそう言うのと、真姫がツナのことを名前で呼んだことに穂乃果が気づく。

「あれ？真姫ちゃんツナ君のこと名前で呼んで…」

「べ、別にいいでしょ！／＼／＼」

「何かあったのかにやー？」

「ないわよ！私がツナのことを名前で呼んで悪いわけ…!?!?!」

「そうは言っていないにやー…もしかして真姫ちゃん…」

「そ、そんなわけないでしょ!?!?!」

「まだ何も言っていないにやー。」

「!!?!?!」

ニヤニヤしながら凜が尋ねると、真姫は墓穴を掘ってしまい、顔を赤らめながら俯いてしまう。

そして穂乃果とツナは…

「なんかツナ君と真姫ちゃんって仲良くなつたんだね。」

「そうかな？別に名前で呼んでくれただけで、他は何も変わってないと思うけど…」

穂乃果は真姫がツナのことを好きだと気づかず、ツナは真姫が自分に好意を寄せていることに微塵も気づいてはいなかった。ちなみに穂乃果以外のメンバーは真姫がツナに好意を寄せていることに気づき、表情が少し強張っており動揺してしまっていた。

そしてそれを見た雪穂と亜里沙は小声で話す。

「なんか修羅場になってる…」

「でもツナさんと穂乃果さんは両思いなんだよね…?」

「うん…」

「それじゃ他のみなさんが…」

「ダメだよ亜里沙。それだけは言ったら。」

少し暗い表情をしてうる亜里沙に、雪穂がそう言う

うとりボーンが亜里沙に言う。

「雪穂の言う通りだぞ。いくらツナと穂乃果両思いでも、まだどうなるかわからねえ。ツナが他の奴らの魅力に気づく場合だってあるしな。それに…」

「「それに?」」

「ツナと穂乃果が両思いだって言ったら、こんな面白い光景見られなくなるからな。」

「「…」」

完璧に恋愛フラグが建ちまくっているこの状況を楽しんでいるり

ポーン。そんなリポーンを見て雪穂と亜里沙はなんとも言えなくなってしまうのだった。

#標的 (ターゲット) 108 「ツナという単語」

真姫がツナのことを好きなのではないかという疑惑が上がるが、朝練が終わってしまいツナも穂乃果たちも学校に通う時間になってしまう。

—教室—

真姫は教室にてタメ息をつきながら、机に座って朝練のことを考えていた。

「(はあ：ツナのことを名前で呼んだだけで何であんなに驚かれるなんて：別に私はツナのことなんて：)」

『安心しろ真姫、俺はお前は絶対に護る。俺の命に変えてもな。』

そう思いながらも真姫は、誘拐された時にツナに言われた言葉を思い出して顔を赤くしてしまう。

「(な、何を考えてるのよ私ったら：!!そりゃほーんのちよつとはかつこいとか思ってたけど、

だからってツナのことを好きだとかいうわけじゃないんだから：!!)」

真姫が心の中でそう思っていると、学校が始まるチャイムが鳴る。

H Rが終って1時間目の授業である日本史が始まる。

「(とりあえず授業に集中集中：)」

「教科書112ページを開いてください。今日の

授業は徳川家5代将軍である、徳川綱吉

について勉強します。」

「つ、綱吉…!?!」

「どうかしましたか西木野さん?」

「い、いえ…!!何でもありません…!!」

ツナという単語に反応して変な声を出してしまう真姫。そんな真姫に先生が違和感を感じて、どうかしたのかと尋ねると真姫は顔を赤くして下を向いてしまう。

そして4時間目の地理の授業。

「南シナ海にあるナツナ諸島は…」

「ナ、ナツナ諸島!?!」

そして昼休み。花陽と凜と一緒に昼ご飯を食べている時。

「今日の真姫ちゃん、なんか変だにや。」

「何かあったの?」

「な、何でもないわ…!!本当に大丈夫だから…!!」

1時間目の日本史と4時間目の地理の授業で変な態度になった真姫を凜と花陽が心配するが、真姫が今だに顔が赤くなってしまったいた。

すると花陽が昼ご飯のおにぎりを取り出すと、凜が花陽のおにぎりについて尋ねる。

「かよちゃん、今日のおにぎりの具はなんだにや?」

「今日はいつもと具を変えてみたんだ。今日のおにぎりは具はツナなんだ。」

「ツ、ツナ!?!」

またまたツナという言葉に反応し顔を赤くしてしまい動揺してしまいう真姫。

そしてさらに凜が…

「そういえば凜の昨日の晩ご飯は、ツナスパゲッティだつたにや。」
「ツ、ツナスパゲッティ!?!」

またまたまた真姫はツナスパゲッティという単語に反応してしま
う。

そして凜と花陽が今日の真姫の様子がおかしい原因に気づき始め
る。

「真姫ちゃん…」

「もしかして…」

「な、何よその目は!?!」

花陽と凜がジト目で見てくると、真姫は絶体絶命のピンチに陥って
しまう。

するとクラスの女子の会話が聞えてくる。

「昨日、新しい曲をダウンロードしたんだー。」

「へーどんな曲なの?」

「セツナ系の歌なんだけど…」

「セ、セツナ系!?!」

セツナ系という言葉にさつきより反応してしまう真姫。

セツナ系はツナという単語が入っているだけでなく恋愛の切なさ
や、やりきれない思いを込めた歌のことなので、余計に真姫は意識し
てしまう。

そして今の会話に反応した真姫を見て、凜と花陽は異様なプレッ
シャーを放ちながらさらに真姫をジーツと見つめる。

「真姫ちゃん。」

「べ、別に…!?!」

絶体絶命のピンチの真姫。一体どうなる!?!

#標的（ターゲット） 109 「取り調べ」

なんとか花陽と凜の尋問から逃れた真姫。だが真姫がツナのことを好きだという疑惑がなくなることはなかった。

そこで凜は穂乃果を屋上に呼んで、真姫がツナのことが好きなのではないかということを言う。

「えーーーー!? 真姫ちゃんもツナ君のことが好きなのー!?」

「やっぱり気づいていなかったのかにや…」

どこまでも鈍感な穂乃果に凜は呆れてしまっていた。

そして真姫がツナのことを好きだということを気づいていないのはアイドル研究部で穂乃果だけだということを凜が告げると…

「えーーーー!? 気づいてないの私だけなの!?!」

やっぱり普通に驚く穂乃果。そして凜はタメ息をつきながらも、本題に入る。

「真姫ちゃんがツナのことを好きなのは確かだにや。でも真姫ちゃんはそのことを絶対に認めようとしないうにや。だからなんとか真姫ちゃんの口から、ツナのことを好きだっていうことをなんとか自白させられないか相談してきたにや。」

「成程ね。わかったよ、私に任せて! いい方法があるよ!」

「本当かにや! さすが穂乃果ちゃんだにや! それでどんな方法だにや!?!」

「それはね…」

穂乃果が凜の耳元でささやくと、凜は首を縦に振りながら穂乃果の作戦を聞く。

「ほ、本当にそれでうまくいくのかにや…?」

「大丈夫だよ! 絶対にうまくから! とりあえず真姫ちゃん以外の部員にこのことを伝えてきて凜ちゃん。」

「わ。わかったにや…」

若干顔を引き攣らせながらも、凜は穂乃果の作戦を真姫以外のアイ

ドル研究部部員に伝えにく。

そして時は過ぎて放課後。真姫が日直の当番が終えてバッグに教科書をいれて、部室に向かおうとしていると。

「真姫ちゃん。」

「どうしたの凜？」

「真姫ちゃんが遅いから向かえにきたにや。」

「しようがないでしょ日直だったんだから。」

「早く行こうにや！」

「ちよ!?!何を急いでるのよ!?!」

凜が真姫の手を引っ張って、アイドル研究部部室に連れていく。

そしてアイドル研究部部室。

「ちよつと何よ…こんなに急いで…」

「いいから早く入るにや！」

凜にせかされて真姫は部室に入ると、そこには姿勢をよくして座っているアイドル研究部部員がいた。

そして穂乃果だけスーツを着て、部室の窓から外を見つめていた。そんな穂乃果に凜は敬礼しながら報告する。

「高坂警部！容疑者を連れてきましたにや！」

「ご苦労だったわね、凜。」

「よ、容疑者!?!」

いきなり容疑者呼ばわりされてしまい真姫は驚いてしまう。

すると穂乃果は真姫のほうを向くと、ポケットから生徒手帳を取り

出すと、自分の写真が載っているページを真姫に見せながら、口調を変えて自己紹介する。

「私は音ノ木坂警察署、スクールアイドル取締り課の高坂穂乃果です。単刀直入に言います。西木野真姫さん、あなたは今、恋愛隠匿罪の疑いがかけられています。」

「こ、恋愛隠匿罪?!」

「あなたは並盛高校の沢田綱吉さんに恋しているのにも関わらずそれを隠しているという噂が流れています。これが本当なら、音ノ木坂警察署として見逃すわけにはいきません。」

「何ですよ!そんなの私の勝手でしょ!それよりも何よこれ!?なんとか言いなさいよ!」

「……」

真姫が叫ぶが雪穂と亜里沙は苦笑いし、他の部員は下を向いてただ黙るだけであった。雪穂と亜里沙以外は真姫が本当にツナのことを好きだということを実姫の口から聞くことができるチャンスかもしれないと思い、全員穂乃果の作戦に協力したのだ。

そして部員の反応に真姫が怒る。

「いい加減にしてよ!私はツナのことなんて何とも思っていないって言うてるでしょ!」

「私語を慎んでください。あなたの発言は世界中に放送されています。」

「何ですよ!それにことりだつて……高坂警部!さっそく取り調べを!」
「ずるいわよことり!」

今だにツナのことを好きだということを実姫に隠していることには、真姫の言葉を遮る。

そして穂乃果による取り調べが始まろうとしていた。

そして取り調べが始まる。

「ではいくつか質問していきます。」

「はあ…わかったわよ…」

穂乃果がそう言うと、ため息をつきながら真姫は取り調べに応じることを決意する。

「(まあ…適当に答えればいい話だし…)」

「では質問していきます。西木野さん…沢田綱吉のさんのことが好きですよね?」

「なななな何言ってるのよ!?そ、そんなわけないでしょ!?!」

いきなり核心をつく質問を穂乃果がすると、まさかド直球でこんなことを聞いてくるとは思ってもいなかった真姫は顔を真っ赤にして動揺してしまう。他の部員も穂乃果のした質問に呆れてしまい、頭を抱えてしまう。

この反応で充分、真姫がツナのことを好きということは一目瞭然なのだが、今回の目的は真姫を告白させることが目的なのでこれではダメなのである。

「いきなりそんな質問してどうするのお姉ちゃん!」

「お姉ちゃんじゃない!穂乃果刑事!」

「そんなのはどうでもいいから!こういうのは遠回しに聞いていて、得た情報を元にして真実を突き止めなきゃ!」

「えー…そういうまわりくどいの苦手なんだよね…!」

雪穂の言葉に穂乃果は嫌そうな表情をしてしまう。まだ取り調べを始めたばかりであるにも関わらず、お先真っ暗の状態である。

すると穂乃果はことりに…

「ことり刑事！アレを出して！」

「え？う、うん…」

穂乃果がことりに頼むとことりはある物を用意する。それは美味しそうな匂いがするどんぶりであった。

そのどんぶりを見て真姫は顔を引き攣らせるどんぶりの蓋を開けると。

「か、かつ丼…？」

それはよく一昔前の刑事ドラマの取り調べのシーンによく出てくる、かつ丼であった。

「家庭科室を借りて作ってみたの。」

「なんでこういうことに無駄に力をいれてるのよ…」

ことりの言葉に呆れてしまう真姫。そして穂乃果は表情をキリツとさせると、口調を変えて真姫に言う。

「とりあえずかつ^そ丼^れを食べなさい。」

「食べないわよ！」

「そんなじゃ田舎のお母さんは泣くわよ。」

「泣いてないわよ！」

一昔前の刑事ドラマでよく言われるセリフを言う穂乃果だが真姫には全く効果はない。こんな状況でこんなセリフを言われても真姫でなくても全く効果でないであろうが。

そんな状況の中で花陽が…

「お、美味しそう…」

「かよちん…」

「花陽…」

かつ丼を見て食べたそうな表情をしている花陽を見て凜と海未は呆れてしまう。もう取り調べはグダグダになってきている。

するとアイドル研究部から一人の声が聞えてくる。

「まったくお前ら。そんなんじゃ一生、容疑者を自白させることはできねえぞ。」

「え…？」

穂乃果が驚くと、アイドル研究部の天井が自動ドアのように開き、

そこから警察官のコスプレをしている

リボーンが飛び降りると、部室の机に着地する。

「だ、誰?!」

「俺はボンゴレ警察署、マフィア兼殺し屋取締り課のリボ堂だ。」

警察手帳（おそらく本物の警察手帳を真似てリボーンが勝手に作った物であるが、ボンゴレのマークがはいっている）をアイドル研究部部員全員に見せながらリボーンが自己紹介する。

そしてリボーンが自己紹介すると…

「おおー！本物の刑事さんだー！」

「かっこいいにゃー！」

「ハラショーー！」

この刑事？がリボーンだということに気づかず、

本物の刑事だと思いこんでしまっている穂乃果

と凜と亜里沙は目を輝かせる。

「どこか刑事よ！どう見てもツナの家庭教師じゃない！」

「何言ってるの真姫ちゃん？リボーン君なんてどこにもいないよ。」

「そうだにゃ。」

「これが日本の刑事…」

この刑事？がどう見てもリボーンであるという真姫だが穂乃果、凜は全く気づいていない。亜里沙はリボーンをジロジロと見てはいるものの全く気づいていない。

すると海未がリボーンに言う。

「そもそも何であなたが音ノ木坂学院にいるんですか!？」

「音ノ木坂学院で取り調べがあるという情報を入力して来たんだぞ。

そしてその様子を天井からこっさりと見てたわけだ。」

「一体どこからその情報を…」

「簡単だ。音ノ木坂学院にある俺のアジトから、お前らが取り調べをやるという情報をキャッチしたんだ。」

「アジト!?何を勝手に作ってるんですか！即刻、撤去させてもらいます！」

「無駄だぞ。俺のアジトは学校中に張り巡らされている。」

「いつの間にそんなことを…」
リボーンのアジトが音ノ木坂学院この学校のに作られていたことに海未は驚いてしまう。

そして話は取り調べの話に戻る。

「お前らの取り調べを見させてもらったが、全然なつちやいねえな。俺が本物の取り調べてやってやつを見せてやる。」

「おおー…さすが本物の刑事が言うとなんか違うなー…」

「なぜ気づかないんですか…」

「そもそも刑事どころか…殺し屋ヒットマンだよね…」

「完全にマフィアと敵対してる職業だよね…」

リボーンという言葉に感嘆の声をあげる穂乃果に対して、海未、雪穂、花陽は複雑な気持ちになりながら言う。

「今日は真姫が嫉妬している現場を見たっていう

人物を連れてきてる。まずはそいつの証言を聞いてみるぞ。」

「な、成程…第三者の意見を…」

「入ってきていいぞ。」

リボーンがそう言うときとアイドル研究部部室の扉が開かれる。リボーンが連れてきた証人とは一体誰なのであろうか!?

#標的 (ターゲット) 111 「告白」

「お邪魔しまーす。」

「希ちゃん!？」

部室の扉から入ってきたのは希であった。希が入ってきたことに驚く穂乃果。

「目撃者って希ちゃんだったの!？」

「まあ、そういうことになるね。」

「(さ、最悪だわ…!!)」

まさか希が来るとは思っていなかった真姫は心の中でそう思うてしまう。正確に言えば真姫を嫉妬している現場を目撃した人物というよりは、真姫を嫉妬させた犯人だと言ったほうが正しい。

「よく来てくれたな希。」

「気にせんといて。そんなことよりも今日、私は昨日あったことを証言すればいいわけやね?」

「ああ。昨日見たこと全部な。」

「了解やん。」

リボンと希が顔をニヤニヤさせながら会話する。リボンと希はSなどところがあるので、ある意味似た者同士なのかもしれない。

「そやねえ…確かアレは昨日、大学の帰りやったねー。」

「(の、希ってば…!わざとらしく…!)」

希は人差し指を口の下にあてながら、わざと棒読みで昨日のことを思い出すフリをする。そんな希に真姫はちよつとイライラしてしまった。

「神田明神の下でツナ君と真姫ちゃんが会話してところに私がたまたま通りかかったんやけど、その時に私がちよつとツナ君の腕に抱きついたらんやけど…」

「だ、抱きついた…?」

「ツ、ツナさんの腕に…?」

「の、希ちゃんが…?」

希の言葉を聞いて穂乃果、花陽、ことりの3人が動揺してしまう。もちろん他の雪穂と亜里沙以外のメンバーも黙ってはいたものの表情を見ただけで動揺したのが見てわかる。

雪穂と亜里沙は希の余裕の表情を見て「希さんって恐ろしい…」と心の中で思っていた。

動揺しているメンバーの表情を見て、楽しめそうな表情をしながらさっきの続きを話す。

「そのあと真姫ちゃんが」そ、それ以上言わないで!」あら? どうしたん真姫ちゃん?」

あの時の真姫のセリフを言おうとした希だが、そのセリフは顔を真っ赤にしている真姫の声によって遮られる。

「い、いや…!! その…!!」

「ようやく認めたんやね?」

「わ、私は…別に…その!」

「希! 離れな…」や、止めてって言ってるでしょ!」

「じゃあ認めるんやね?」

「だ、だから別に…!!」

「離れなれ」しつこいわよ希!」

「しつこいのは真姫ちゃんやん。真姫ちゃんが認

めれば終わる話なのに。」

「絶対に認めないわよ! 私がツナのことを好きだ

なんて絶対に認めないんだから!」

何回も同じやりとりが続いたせいかわ、真姫はイライラしてしまいおもしろい自分の気持ちをおもしろい叫んでしまう。

「ま、真姫ちゃん…」

「い、今…」

「はっ!」

凜と花陽が驚くと、真姫は自分の言った発言を思い出すと顔や耳を真っ赤にさせ、口を両手で塞いでしまう。

「ようやく告白したな。」

「そうやね。」

「やったー！作戦大成功だね！」

「作戦というか…もうほとんど希の手柄ですけど…」

顔を真っ赤にした真姫を見ながら、リボン、希、穂乃果、海未が
呟く。

そして顔を真っ赤にした真姫はさっきの発言を取り消そうとする
が…

「ち、違うわ…！今は…！」

『絶対的認めないわよ！私がツナのこと好きだなんて絶対に認めな
いんだからー！』

「安心しろ真姫。お前の発言はこの録音機に録音してあるぞ。」

「へ!?!」

そう言うとりボーンの手には録音機に変形したレオンからさっき
の、真姫の発言が録音される。

「この録音した真姫ちゃんの発言をツナ君に…」

「ツナと電話が繋がったぞ。」

「や、止めてー!」

ドSなりボーンと希に振り回される真姫。こうして真姫を告白す
ることに成功したのであった。

#標的（ターゲット） 112 「真姫の家」

時は真姫の取り調べが終わって2時間後。音ノ木坂学院の生徒たちは下校時間になる。

一方でその頃ツナは。

「でけー……ここが真姫ちゃんの家か……」

なんとツナは真姫の家の前にいた。なぜ真姫の家の前にツナがいるのかというと、今朝の朝練で貸してもらった真姫のタオルを返し忘れたので返しにきたのである。

そして真姫の誕生日が近いということを知り、リボンから聞いて、リボンが真姫の誕生日用のプレゼントに用意した赤いチューリップの花束を渡す為にツナは真姫の家に行って来たのだ。

「でも……マフィア城とか継承式の時はもっと凄かったっけ……」

ツナは中学の時に言ったりゾートアイランドであるマフィアランドにあるマフィア城や、継承式を行った時に貸し切った城のことを思い出す。

「それにしてもリボンの奴……一体どこから真姫ちゃんの家住所を手に入れたんだろう……それと何で真姫ちゃんの誕生日が近いって知ってるんだ……」

そう言っただけでツナはリボンに渡された、真姫の家の住所の書かれた紙とリボンに持たされた赤いチューリップの花束を見ながら呟く。「真姫ちゃんに連絡してないけど……でもタオルと花束を渡すだけだし……いなかったら家族の人に渡してもらえればいいか……」

そう呟くと、ツナはおそるおそる真姫の家のインターホンを入差し指で押す。ちよつとするとインターホンから女性の声が聞えてくる。

『はい……どちら様でしょうか？』

「あ、あの！真姫ちゃんの子の友達の沢田綱吉といます！実は真姫ちゃんに返したいものがあつて来たんですけど！」

『少々お待ちください。』

インターホンに向かつてちよつと緊張しながら答えるツナ。しばらくすると家の中から一人の女性が出て来る。

「あなたが沢田綱吉君？」

「は、はい！そうです！」

「初めまして、真姫の母です。あなたのことはいつも真姫から聞いています。いつも真姫がお世話になっております。」

「こ、こちらこそ！いつも真姫ちゃんにはお世話になっていきます！」

真姫の母が丁寧で自己紹介してきたので、ツナも丁寧に挨拶したあと一礼する。

すると真姫の母がツナに言う。

「ごめんなさいね、真姫はまだ家に帰っていないんですよ。」

「あ！それなら別にいいんです。真姫さんにこのタオルとこの花束を渡してほしいんです。」

「このタオルと花束は…？」

「あ、タオルは真姫ちゃんが朝練の時に貸してくれたんですけど返すを忘れてしまつて…この花束は真姫ちゃんの子の誕生日が近いって聞いたんで、ちよつと早いんですけど誕生日プレゼントにあげようと思ひまして…」

「ご丁寧ありがとうございます。」

「い、いえ！そんな大したことは！」

「それにしても真姫つたら、こんな男の子に…ウフフ。」

「え？」

ツナの持つている赤いチューリップの花束を見て、真姫の母は嬉しそうな表情で微笑んでいた。ツナはどうして真姫の母が微笑んでかわからず、首を傾げて疑問符を浮かべる。

すると真姫の母はツナに言う。

「そろそろ真姫が帰ってくる時間だし、せつかくだから上がっていつ

て沢田君。」

「え!? そ、そんな! 悪いですよ! 俺はただ返し忘れた物を返しにきただけですし!」

「気にしなくて大丈夫よ。」

「け、けど…」

「それに直接、渡して伝えたいことがあるんでしょ?」

「え…? まあ…あるような…ないような…?」

多少、疑問形になりながらツナは答える。だが真姫の母が言っている伝えたいことと、ツナが思っている伝えたいことの意味が全然違うことだということにお互い気づいていなかった。

#標的 (ターゲット) 113 「花言葉」

真姫の母に家の中に案内されツナはリビングのソファに座る。まだ真姫が帰らないので、ツナは真姫の母は話している。

「いつも真姫からあなたのことは聞いてるんですよ。」

「そうなんですか。」

「あなたといると普通ではありえないことばかり起こるって。」

「そ、そうですか…」

真姫の母の言葉を聞いてツナは若干、顔を引き攣らせてしまう。

「(普通ではありえないっていうか…もう科学とかそういうレベルを越えてるんだよな…)」

そう言うとツナは自分のまわりでいつも起こっている、普通ではありえない現象を思い出す。

「それに真姫にこんな男の友達ができるなんて。嬉しいわ。」

「女子校だから、男の人と接する機会とかそんなにないですよねー。」

「沢田さんは並盛町に住んでるんですよね。」

「は、はい。そうですけど…それが何か？」

「いえ、並盛町って変な噂を色々聞くものですから。よく爆発が起こったりだとか、女性にセクハラをする人や、裸で町を走る男がいるとか…」

「へ、へー…そうなんですか…住んでるけど知らなかったな…ハハハ…」

真姫の母がそう言うと、ツナはただただ苦笑いするしかなかった。今真姫の母の言った並盛町の噂はほとんどがおそらく自分の知りあい、そして最後のほうにいたっては死ぬ気弾に撃たれた自分である。

さらに真姫の母は続ける。

「そういえば、数年前に並盛中学の生徒が襲われる事件があったとか…」

「そ、そういえば…ありましたねー…」

「ちょうどその時、沢田さんも中学生だったんですよね？大丈夫だったんですか？」

「え!?!別に俺は大丈夫でしたよ…?なんか事件もすぐに解決したらしいですし…?」

まさかあの事件のことについて、真姫の母の口から聞くことになると思わなかったツナはすごく複雑な気分になってしまう。

「まさか敵の本拠地に乗り込んだなんて絶対に言えないよな…:そしてその襲ってきた犯人と今は知りあいだとかもつと言えねー…:」

ツナがそう思っていると、玄関のほうから「ただいまー」という声が聞こえてくる。どうやら真姫が帰ってきたらしい。

「どうやら帰ってきたみたいね。」

「ただいまー。誰か来てる…:ヴェエエ!?!な、何でツナがここにいるの!?!」

真姫がリビングに入ると、ツナがいることに驚いて顔を真っ赤にして動揺してしまう。

「ごめんね真姫ちゃん。お邪魔してるよ。」

動揺している真姫のことを何も違和感を感じず、普通に挨拶する。そして真姫の母は気を使い、「じゃあ、私はこれで」と微笑みながら言う、リビングが去っていく。

そしてリビングにはツナと真姫の二人つきりになってしまう。

「そ、それで何の用よ…!?!」

「いや、朝練の時にタオルを借りたままだったから返しに来ただけだよ、真姫ちゃんがいなかったからお母さんに渡して帰ろうと思ったんだけど、お母さんがせっかくだから上がって行ってくれって言ってくれてさ。あーこれ返すね。ちゃんと洗濯したから。」

「あ、ありがとう…:って!そんなことよりも何で私の家知ってるのよ!?!教えた覚えはないわよ!」

「いや…:なぜかリボーンが真姫ちゃんの家住所を知ってて…:それで教えてもらって…:」

「まあいいわ…:もうつつこんで仕方ないわ…:」

ため息をついて、これ以上リボーンのことについてつつこむのを止める真姫。

するとツナは真姫に渡す花束を出す。

「あーそれとこれ。」

「は、花束!?!いい、いきなり何よ!?!」

「いや…真姫ちゃんの誕生日が近いってリボーンが言ってたから…」

「だから何で知ってるのよ…」

「それでこのチューリップを持って行けって言うから持ってきたんだ。あ、嫌だった…?」

「そ、そんなことないわよ…!!あ、ありがとう…!!」

いつもならツンツンした態度で返事をする真姫だが、今回は素直な態度で赤いチューリップの花束をツナから受け取る。

するとツナはあることを思い出す…

「(そういえば真姫ちゃんのお母さんが、「伝えたいことがあるんでしょ?」って言ってたけど、誕生日おめでどうって伝えるだけで、家で入れてくれたんだろう…?)」

さつき真姫の母が言っていた言葉の意味を全然理解していなかったツナ。

そして真姫は受け取った赤いチューリップを見て…

「(チューリップね…ん?チューリップの花言葉って確か…ピンクのチューリップが愛の芽生え。白いチューリップが不滅の愛。黄色のチューリップが望みのない恋。赤いチューリップは…はあああああ…!!)」

チューリップの花言葉を思い出していく真姫。そしてツナが渡した赤いチューリップの花言葉を思い出して顔を真っ赤にさせプルプルと体を震わせる真姫。

そう赤いチューリップの花言葉は愛の告白なのである。

リボーンはこれを狙ってツナに赤いチューリップを持たせたのである。

「あれ?どうしたの真姫ちゃん?顔を真っ赤だよ?」

「ナの…カ…!!」

「え？何か言った？」

「ツナのバカー！」

「え!？」

「バカバカバカバカバカバカバカー！」

そう言うのと真姫は顔を真っ赤にさせて、ツナを追いかける。そしていきなり追いかけてくる真姫からツナはわけもわからず逃げる。

「え!？ちよつと真姫ちゃんどうしたの!？」

「こ、こんなので!!私に…するなんて!!」

「な、何で怒ってるの!？真姫ちゃん!？」

「う、うるさい!!うるさい!!うるさい!!」

このあとツナはリボーンの策略にまんまとはまってしまい真姫に色々投げつけられてボロボロされてしまうのであった。

このあと誤解は解けました。

5月篇

#標的（ターゲット） 114 「マファイアランド」

4月も終わり、5月に入る。そして時はゴールデンウィークに近づこうとしていた。

―アイドル研究部部室―

「明日からゴールデンウィークだね。」

「ですがゴールデンウィークが終わればすぐに、テスト週間です。」

「あー！もうそれを言わないでよー海未ちゃん！」

「そうだにやー！」

海未がテストのことを話題に出すと、勉強の苦手な穂乃果と凜が叫ぶ。

すると穂乃果が提案する。

「そうだ！せっかくのゴールデンウィークだしみ

んなでどこか行こうよー！」

「けどゴールデンウィークはどこへ行っても多いわよ。」

「そうだよお姉ちゃん。せっかくのゴールデンウィークなんだし勉強したらっ？」

「えー嫌だよー！」

真姫と雪穂がそう言うと、穂乃果はものすごい嫌な表情をしながら叫ぶ。

すると花陽がスマホをコソコソいじっているのを凜が目撃する。

「かよちん、さつきから何してるにや？」

「へ!?!な、何でもないよ!?!」

「なんか怪しいにや…そのスマホを見せるにや！」

「あ！ちよ、ちよつと待って！」

凜は花陽からスマホを奪うと、花陽のスマホの画面を見て凜がそこに書いている文章を読む。

「明日、ツナさんの家に遊びに行ってもいいですか？もしよかったら二人で一緒に昼御飯でも食べに行きませんか？」

「はああああああ…!!」

花陽がLINEでツナ宛てに送ろうとした文章を凜が、読むと花陽は顔を真っ赤にしてしまう。

そしてそれを聞いた、穂乃果、ことり、凜、海未、真姫はもの凄くプレッシャーを放ちながら花陽をのほうを向く。

「花陽ちゃん？」

「かよちゃん？」

「花陽？」

「だ、誰か助けてー!」

「ゆ、雪穂…みなさんがすつごく怖いよ…」

「う、うん…」

恐ろしい表情になっている穂乃果たちを見て

、亜里沙と雪穂が体をガタガタ震わせていた。

するとアイドル研究部部室に声が聞こえる。

「そんなにツナとデートしてえなら、いい場所に連れて行ってやろうか?」

「あれ?この声って…」

「ちやおつす。」

「やつぱりリボン君!」

穂乃果がアイドル研究部部室の窓のほうを振り向くと、そこには窓の縁に立っているリボンがいた。

そしてリボンのさっきの言葉を聞いて穂乃果が興味を示す。

「ねえツナ君とデートできるって場所に連れていってくれるって本当?!」

「ああ。」

「それでどこにあるの?!ツナ君とデートできる場所って?!」

「マフィアランドだ。」

「『マファイアランド?』」

リボーンからマファイアランドという聞きなれない単語に全員、疑問符を浮かべる。

するとリボーンはマファイアランドのことについて説明する。

「マファイアランドはマファイアがまっさらな気持ちで休めるように、色々なファミリーがドス黒い金をつぎこんで作ったスーパードリームリゾートアイランドだ。」

「リゾートアイランド!?!」

「凜、行きたいにゃ!」

リゾートアイランドと聞いて、穂乃果と凜は目を輝かせる。

一方で海未、真姫、花陽は…

「リゾートアイランドはいいんですが…」

「ドス黒い金をつぎこんでいるっていうのがねえ…」

「それにマファイアが作ったっていうのが…」

リボーンの説明を聞いて、3人はなんとなく不安になってしまう。するとリボーンはさらに説明を続ける。

「安心しろ、マファイアランドはボンゴレなどの麻薬に手を出さない善良なマファイアが金を出してる。それに島の警備も万全だぞ。」

「善良なマファイアって…」

「マファイアに善良も悪もあるの…?」

リボーンは安心しろというが雪穂と真姫は不安になってしまう。

「俺のコネがなかったらマファイアランドは10年先まで予約いっぱいなんだぞ。」

「そうなの?」

「ああ。それでどうするんだ?行くのか?」

「私は行くよ!なんか面白そうだし!みんなは?」

穂乃果がみんなに尋ねると、他のメンバーも首を縦に振り、マファイアランドに行くことを決意する。

「そうか。それと絵里と希とにここにも招待券は送っておいた。たぶんあいつらも来るだろ。」

「さすがリボーン君!用意がいい!」

「集合場所は後日連絡するぞ。あーこれは大したことじゃねえんだが、ツナの好きな奴はμ，sのメンバーの中にいるぞ。んじゃあな。」
「「「「え!?!」」」」

リボーンはさらつと重要なことを言い残すと、窓から去ってしまふ。そしてリボーンの言い残した言葉に穂乃果、海未、ことり、花陽、凜、真姫はめちやくちや驚いてしまふ。

「い、今リボーン君…なんて言った…!?!」

「ツナさんの好きな人がμ私たち，sの中にいるって…!?!」

「みゆ、μ，sって凜たちのことだよね…!?!」

「あ、当たり前じゃない…!?!」

「で、ですが…今のが本当だという確証は…!?!」

「で、でも…もし本当だったら…!?!」

穂乃果、花陽、凜、真姫、海未、ことりはあまりの衝撃にめちやくちや動揺してしまっていた。

今、波乱の旅行が始まろうとしていた。

#標的（ターゲット） 115 「気遣いと服選び」

穂乃果たちにマフィアランドのことを伝えるに言ったその夜。リボーンはマフィアランドに穂乃果たちに行くことをツナに伝えると。

「ええ!?穂乃果ちゃんたちをマフィアランドに!?!」

「ああ。そうだぞ。」

「何勝手なことしてんだよ!前に行った時、みたいにマフィアランドに襲撃されたらどうするんだよ!」

「大丈夫だぞ。今回はちゃんと警備もいるし、

なによりコロネロがいるんだぞ。」

「まあ…確かにコロネロがいれば…」

リボーンがそう言うと、前にマフィアランドをカルカツファミリーに襲撃された時に敵の戦艦をライフルだけで沈めたコロネロの強さを思い出すツナ。

そしてもう一つ、ツナには不安なことがあった。

「それで前みたいに俺だけ裏マフィアランドで特訓とかじゃないよな…」

「心配すんな、今回は俺がマフィアランドの入島手続きをする。お前は存分に穂乃果とデートでもしてる。」

「なななな、何言ってるんだよ!!」

リボーンの口から穂乃果とデートという単語が出ただけで、ツナは顔を真っ赤にして動揺をしてしまう。

「遠慮すんなツナ。獄寺たちにもツナは穂乃果のことが好きだから、気を使うよう言っておいてやるからな。」

「そこまでしなくていいって!」

獄寺たちに穂乃果のことが好きだということ、バレてしまうので、さすがにこのリボーンの提案にはツナも遠慮してしまう。

「んじゃ今回泊まるホテルの部屋を穂乃果と一緒に部屋にしてやろう

か。」

「だから気を使わなくていいって！」

リボーンの提案に顔を真っ赤にしながら遠慮するツナ。だが心の中では本当はそうしてほしいとちよつとだけ思ってしまったている。

だがいつになく穂乃果との時間を作ろうとするリボーンにツナは違和感を感じる。

「にしても…」

「何だ？」

「なんかお前が、こんなに気を使ってくれるなんて…なんか気持ち悪いな…」

「考え過ぎたぞツナ。生徒のことを第一に考えるのが家庭教師つてもんだぞ。」

「よく言うよ…」

当たり前のように言うリボーンだが、「本当に生徒のことを第一に思っているなら、むちゃくちゃな修行を止めてほしい」と思ったツナである。

「とにかくだ。とりあえずこのゴールデンウィークはマフィアアランドで1泊2日だぞ。」

「まあ…いいか。」

いつになく気を使うリボーンにツナは怪しむが、とりあえずマフィアアランドに行くことを決意するツナ。

そして一方でリボーンは…

「(ま、穂乃果とデートできればいいがな…)」

不敵な笑みを浮かべながらリボーンは心の中でそう思う。音ノ木坂学院に行った時にツナの好きな人が、sのメンバーの中にいると言ったので、穂乃果たちがどんな行動を起こすかりボーンは楽しみにしているのだ。

—穂乃果の家—

「こっちの服のほうがいいのかなあ…？ねえ雪穂どっちのほうがいいと思う？」

「お姉ちゃんさつきから、そればかりだよ…」

「だってえ！」

穂乃果はどの服がいいか迷ってしまっていた。もちろん穂乃果だけではなく海未、ことり、花陽、凜、真姫、にこも同じであった。

—海未の家—

「どっちのほうがツナ君が喜んでくれるでしょうか…」

海未が明日何の服を着ていくか迷っていると、また海未は妄想してしまう。

『海未ちゃんなら何を着ても似合うよ。』

「は！私はまた変なことを考えて…!!」

—ことりの家—

「この服ならツナ君も…!!」

ことりはなんとツナに可愛いと思ってもらえる服を自分で作っていた。さすがに、sの衣装を作っていた人物である。

—花陽の家と凜の家—

「どっちがいいと思う凜ちゃん？」

『凜はそっちのほうがいいと思うにゃ！かよちゃんはどっちのほうがいい

いと思う?』

「私はそっちのほうがいいと思うな。」

花陽と凜はスマホのテレビ電話を使って、どっちの服がいいかお互いに見せあって決めていた。

—真姫の家—

「べ、別に…!!ツナのことを意識してるわけじゃ…!!」

—にこの家—

「お姉さま、さっきから何をしていますか?」

「え!?何でもないのよ!?!」

「?」

服を懸命に選んでいるにこを見てここあが尋ねるがにこは何でもないと言う。

こうして乙女たちの戦いが始まろうとしていた。

#標的（ターゲット） 116 「ツナ争奪」

そして次の日。ツナたちはマファイアランド行き豪華客船に乗って、マファイアランドに向かう。

そしてスーパードリームリゾートアイランドのマファイアランドに着く。

「うわー！すごいー！」

「遊園地だにやー！」

「ほ、本当に：遊園地だわ…」

「思ってた何倍も凄いです…」

「本当にこれをマファイアが作ったの…？」

マファイアランドを見て目を輝かせる穂乃果、凜。一方で思っていたよりもマファイアランドが凄くて、絵里、海未、にこは驚いてしまっていた。

「また来ることになるなんてな。」

「そうだよなー。懐かしいよな。」

「そうだったねー…」

前にマファイアランドに獄寺、山本、ツナは前に来た時のことを思い出す。獄寺と山本は楽しかった思い出が多かったがツナは楽しかった思い出はあまりなかった。

するとリボンが全員に1枚の黒いカードを渡す。

「これを渡しておくぞ。」

「何これ？」

「マファイアランドのアトラクションが全部無料で遊べるカードだ。」

「」「」「おおー！」「」「」

アトラクションが全部無料で遊べるカードと聞いて、全員驚きの声をあげる。

「俺はマファイアランドの入島手続きがあるから行ってくる。お前らは存分に楽しめよな。」

そう言い残すと、リボーンはマファイアランドの入島手続きに行ってしまう。

そしてリボーンがいなくなると、さっそく希がツナの右腕に抱きついてくる。

「じゃあツナ君。さっそくウチと一緒にデートでもしよつか。」

「の、希さん!？」

「てめえ!十代目から離れろ!」

希に抱きつかれて顔を赤くするツナ。いきなり抱きついた希に獄寺がすばやくダイナマイトを取り出して怒る。

そしていつものように穂乃果、海未、ことり、花陽、凜、真姫、そしてにこも動揺する。

「ツナと希さんって仲いいのな。」

「山本さん…どう見ても違いますよ…」

相変わらず天然な山本に、雪穂が呆れた表情をしながら言う。

一方でこの光景を見た絵里は…

「ちよつと会わないうちに、色々とおったのね…海未だけじゃなくてあの真姫までもツナ君を…」

花見が終わってから、穂乃果、海未、ことり以外のμ、sのメンバーがツナに好意を寄せてしまっていることを理解し、驚いていた。にこだけは花見の前だったのだが、その時にはまだ絵里は気づいていなかった。

すると亜里沙が小声で絵里に尋ねる。

「お姉ちゃんはツナさんのこと好きじゃないの?」

「な、何言ってるの亜里沙!？」

急に変なことを言い始めた亜里沙に、絵里は驚いてしまう。

「だってμ、sのみなさんがツナさんに好意を寄せてるから、もしかしたらお姉ちゃんもツナさんのこと好きなんじゃないかなって思ってた。」

「他のみんながツナ君は好きだからってそういうことにはならないの

よ亜里沙：別にツナ君のことは友達としては嫌いじゃないけど、恋愛
的には好きかって言われたら違うわ…」

「そうなんだね。じゃあこれからツナさんのことを好きになるかも
ね。」

「まさか…」

亜里沙の全く根拠のない推理に、絵里は「そんな都合のいいことが
あるわけ…」と心の中で思ってしまう。

二人が話していると、凜がここで勇気を出してツナの左手を握って
くる。

「ツナ！凜と一緒に行くこうにや！」

「ええ!？」

「凜も希も十代目から離れろ！」

凜は勇気を出してなんとかつナの左手を握ってツナを誘う。そし
て凜まで参戦してきて獄寺はさらに怒る。

さすがの凜も希みたいにツナの腕に抱きつくのは無理だったよう
だ。

「お姉ちゃん、何やってるの！お姉ちゃんも行かないと！」

「で、でも…!!」

雪穂が穂乃果にそう言うも、穂乃果は緊張してし

まっていた。

一方で海未、ことり、花陽、真姫も穂乃果と同じく…

「ほ、本日はお日柄もよく…!!」

「ど、どうしよう…!!」

「な、なんて言ってツナさんを…!!」

「べ、別に二人つきりで遊びたいなんて…!!」

ツナと一緒にまわろうにも、緊張とどうやってツナを誘えばいいか
わからず混乱してしまっていた。

結局、このあと全員でまわることになったのであった。

#標的（ターゲット） 117 「お化け屋敷」

まず全員はマフィアランド内ををまわっていく。途中、ポップコーンやジュースなどを買う。

「うーん！美味しい！」

「穂乃果、行儀が悪いですよ。」

買ったポップコーンを歩きながら食べる穂乃果を見て注意する。が穂乃果は海未の注意を気にせずそのまま美味しそうな表情でポップコーンを食べる。

すると獄寺があることを思い出すとツナに言う。

「そういえば十代目。マフィアランドには

コロネロの奴がいるんだしたよね。」

「うん。たぶんだけど。」

「コロネロ？」

「誰よ？」

ツナと獄寺の会話を聞いて、コロネロという知らない単語を聞いて、絵里とにこが疑問符を浮かべる。

「リボーンアルコバレーノの友達…じゃなくてライバルかな？前に言った最強の赤ん坊アルコバレーノの一人です。」

「そういえば、花見の時にそんなこと言ってたわね。」

「一体どんな人なんだろう？」

「会ってみたいにゃ！」

ツナがコロネロのことについて説明すると、にこ、花見、凧はコロネロという人物がどんな人なのだろうかと想像する。するとことりが、あるアトラクションを見つける。

「あ。あそこにお化け屋敷があるよー。」

少し遠くにあるお化け屋敷を見つけて、ことりが指をさしながら棒読みで言う。そうことりはマフィアランドをまわる前にマフィアランドのパンフレットでお化け屋敷があることを確認していたのだ。

『きゃー！』

『大丈夫？ことりちゃん？』

『う、うん…!!ちよつと怖くて…!!』

『大丈夫だよことりちゃん、俺がいるから。』

『ツナ君…!!』

「(なんてならないかな…!!もしくは超死ぬ気モードで…!!)」

ことりがお化け屋敷に入つて、ツナと一緒に歩く姿を想像して顔をほんのりと赤くする。だが、ことりと同じようなことを考えていたのはことりだけでなく…

「(わ、私はまたこんなことを…!!)」

「(お化け屋敷は怖いけど…!!で、でもツ、ツナさんとなら…!!)」

海未と花陽もことりと同じように、お化け屋敷で怖いと言ってツナに抱きつき、ツナが優しい言葉をかけてくる姿を想像していた。

「お、お化け屋敷…」

「よ、幼稚ね…」

「ほ、本当よ…」

お化け屋敷と聞いて、絵里は顔を青くし体を震わせる。一方で真姫とには強がつてがいるものの、体がガタガタと震えてしまっているのがよくわかる。この真姫とには恐怖のあまりツナと距離を縮めることすら想像できていなかった。

一方で穂乃果と凜は…

「どうしたのみんな？」

「早く行こうにや！」

ツナのことなどを考えずに、ただただお化け屋敷を楽しもうとしていた。

そして全員はお化け屋敷に向かっていく。そしてお化け屋敷の前まで行くとまたまた希が…

「ツナ君、怖いー！」

「希さん!？」

「てめえは、いちいち十代目にベタベタするんじゃないやねえ！」

怖くもないのにも関わらず希は、怖いと言ってツナに抱きつき、それを見た獄寺が怒る。

「ウチこういうの苦手やから…ツナ君、一緒に行こう?」

「え、えっと…」

前に自分の家に誘おうとした時みたいに、希は目を潤わせながらツナを誘惑する。希の誘惑にツナは前の同じように困惑してしまう。「いい加減にしなさいよ希! こういうの苦手でもなんでもないでしょ!」

「真姫ちゃんの言う通りだにや!」

「ずるいよ希ちゃん!」

「どうかハレンチです!」

希の行動に真姫、凜、穂乃果、海未は嫉妬し叫ぶ。

だが希は一步も引く様子もなく…

「ウチだって女の子なんやし…こう見えてもお化けとか苦手なんよ…ツナ君はわかってるよね…?」

「え、えっと…」

さらに希は誘惑し、さらにツナを困惑させてしまう。

「(ど、どうしよう…穂乃果ちゃんの前で…!!俺は穂乃果ちゃんと一緒にお化け屋敷に…!!)」

穂乃果がいる前で、希に抱きつかれる姿を見られてツナは焦ってしまふ。だが希も怖いと言っているのでツナはどうしたらいいのかわからずにいた。

「やっぱりツナと希さんって仲がいいのな。」

「だからどこかですが…」

「これが乙女の戦い…」

この光景を見て、山本は相変わらず仲がいいと言う。雪穂は山本の発言に呆れ、亜里沙はこの状況を見て変な知識を得ていた。

#標的 (ターゲット) 118 「パートナー」

このあと、お化け屋敷は二人組みのペアで行くこととなった。とりあえず即席で紙に自分にくじを書いてそれを全員で引いてペアを決めることとなった。

「それじゃペアを決めるよー。」

みんなの名前を書いた紙を縦に2回折って、細長くしたものを手に握りながらそう言う。

「(穂乃果ちゃんとペアに…!!)」

「(ツナ君と…!!)」

「(ツナ君と…って私はまた…!?)」

「(ツナと…!!)」

「(ツナさんと…!!)」

「(た、ただのくじ引きなんだし…!!)」

「(ツナと一緒に、なりたいたなんて思ってないんだから…!!)」

ツナ、穂乃果、ことり、海未、凜、にこ、真姫は心の中でそう思いながらくじを引いていく。

そしてくじ引きの結果は…

「よろしくお願いいたしますにこさん。」

「よ、よろしく…!!」

ツナのパートナーになったのは、なんとにこであった。

にこは少し顔を赤らめながら言う。だがツナは穂乃果とパートナーになれず心の中でちよっぴり残念な気持ちになっていた。

そしてにこがツナのパートナーになることが決定すると…穂乃果、海未、ことり、凜、花陽、真姫はもの凄い羨ましそうな表情でにこのことを見ていた。

ちなみに他のメンバーのパートナーは、穂乃果は海未、ことりは花

陽、山本は凜、獄寺は真姫、

雪穂は亜里沙、絵里は希という組み合わせになった。

一方で獄寺と山本は…

「つたく、何でよりによって真姫あいつとなんだよ…」

「俺は星空とか。」

自分のパートナーが真姫であることに少し嫌な顔をする獄寺と、パートナーが凜であることに特に何も思わない山本。

一方で亜里沙と雪穂は…

「私たち、一緒だね雪穂。」

「そうだね。」

亜里沙と雪穂はパートナーになれて嬉しい様子である。

それと同時に雪穂は心の中で「ツナさんかお姉ちゃんのを引いてたら、譲ってあげられたのになー」と心の中で思ってしまった。

そして希はツナとパートナーになれずちよっぴり、がっかりしていた。

「残念。ツナ君と一緒にたかったやんけど、くじ引きやし、しようがないか。」

「希も…その…ツナ君のことが…好きなの?」

若干言いくらい表情で絵里が尋ねる。すると希は一瞬きよとんとしてしまいが、すぐにいつもの表情に戻って絵里の問いに答える。

「もともとウチは年下がタイプやし、ツナ君すっごく可愛い反応するやん。ウチにとってドストライクなんよ。」

「そ、そう…」

ちよつと以外な希の答えに、絵里は少しだけ驚いてしまう。するとさらに希は続ける。

「それに…」

「それに?」

「ツナ君はウチと似たような過去を持って、男の子で初めてウチの気持ちを理解してくれた人やから。」

「え?ツナ君が?」

「ずっと勉強も運動もできないから馬鹿にされてて、そのせいで友達

がいなかったやけど、リボン君と出会って全てが変わったって花見の時に言ってたんよ。」

「そうなの…」

希がそう言うのと、ツナにそんな過去があったことに少しだけ絵里は驚いてしまう。

そんなことを絵里と希が話していると…

「じゃあ、次は順番を決めようよ。」

穂乃果がお化け屋敷に入る順番を決めようといういい始める。

そして一番最初にお化け屋敷に入るのは…

「俺たちか…」

各パートナーの代表がジャンケンで順番を決め、最後に負けたのはツナであった。

「あ、あの…にこさん大丈夫ですよ？こういうお化け屋敷とか…」

「へ!?!ただ大丈夫に決まってるじゃない!?!」

「よ、よかったあ…俺こういうの苦手なんですよ…」

にこがお化け屋敷が平気だと聞いてツナはちよつとだけ安心してしまう。がにこの体が震えていることにツナは全く気づいていないのであった。

#標的 (ターゲット) 119 「成仏できない殺し屋
(ヒットマン)」

そしてツナとにこは係員にリボンから貰ったカードを見せると、おそろおそろお化け屋敷の中に入る。

「うわー、薄暗いなー…」

「な、何よ? ビビってるの?」

「だってすつごく薄気味悪いし…」

「と、とにかく行くわよ。」

「あーちよつと待ってください!」

にこがそう言うと、先に歩を進めてしまう。そして先に進んだにこを追いかけるツナ。

そしてツナがにこに追いつきそうになったその時、にこの目の前に、ロープでくくりつけられた骸骨が天井から落ちてくる。

「ぎゃー!」

骸骨を見てツナとにこは、涙目になりながら悲鳴をあげてしまう。

「ひいひいひいひい! 骸骨!」

「無理! やっぱ無理!」

ツナとにこが恐怖していると、骸骨は天井に引き上げられていく。

骸骨がいなくなったのを確認するとツナはにこに尋ねる。

「はあはあ…大丈夫ですか、にこさん…?」

「だ…大丈夫よ…ハハハハ…」

「あれ? にこさん?」

やっとツナはこの様子が変わだということに気づく。もしかしてにこさんは、お化け屋敷が苦手なのではないかということに。

「あ、あの…にこさん…もしかして…」

「な、何よ！お化けが怖くて何が悪いのよー！」
「ええー!?」

涙目になりながらにこがそう言うと、ツナは驚いてしまう。そしてにこは続ける。

「そういうツナこそ、男のクセにビビってるんじゃないわよ！男なら女の子を護りなさいよ！」

「だ、だって…俺こういうの苦手で…ハハハハ…」

にこの言葉にツナは反論できず、ただただ後頭部をかきながら苦笑いすることしかできなかった。

とりあえずツナとにこは先に進むこととなる。少し進むと井戸があり、二人もそれを確認する。

「い、井戸だ…」

「も、もしかしてここから…」

この井戸から「お化けが出るのではないか」とツナとにこが思っていると、井戸から男の声が音が聞こえてくる。

「うーらー…」

「や、やっぱり…」

「出てくるのね…」

ツナとにこは井戸から「うらめしやー」と言いながらお化けが出てくる来ると確信するが…

「しやーかーい。」

「リポーンかよー！」

「何よ裏社会つてー！うらめしやじやないの！」

井戸から出て来たのは、白装束を着て額に謎の三角形の布をつけてお化け役になっているリポーンだった。

「何やってんるんだよりポーン！」

「違うぞ、俺はこの世に未練が残って今だに現世をさ迷い続けているただの殺し屋ヒットマンの幽霊だぞ。」

「何よその設定…」

「俺の未練はたった一つ…茶髪のお前がボンゴレファミリーのボスになること、そしてその黒髪のツインテールのお前がボンゴレファ

ミリーに入れば俺は成仏することができる…」

「何まわりくどいやり方で、にこさんをマフィアに勧誘しようとしてるんだよ！こんなやり方で言われたからって、俺はマフィアのボスにならないって言ってるだろ！」

「そうよ！私は絶対マフィアにならないわよ！」

成仏する内容を聞いてツナとにこはリボーンにツツコミをいれる。

「俺がこのまま現世をさ迷い続けてもいいのか？」

「そもそも死んでないだろお前！」

「お前がボンゴレのボスになるって言うまで、俺はお前を呪い続けてやる。これから毎日、お前が寝る時につこにつこにーという死の呪文を唱え続けて、眠れなくしてやるぞ。」

「何その地味な嫌がらせ!？」

「それよりも勝手に私につこにつこにーを死の呪文にしないでくれるー！」

呪いの内容を聞いてツナとにこは、再びリボーンにツツコミをいれる。

そして同時にツナは心の中でこんなことを思ってしまう。

「俺から言わせればお前が家庭教師かてきよになったこと事態がある意味、呪いなんだけど…」

「それよりお前ら、後ろを見なくていいのか？」

「後ろ?」

リボーンが後ろのほうを指をさしながらそう言う

と、ツナとにこは後ろを振り向く。

そこには…

「あー…」

「あの時の怨みー…」

「覚悟…」

「ぎゃーーーーーー!？」

スーツを着て、モデルガンやおもちやのナイフを持ったマフィアのゾンビ?がツナとにこの後ろに数人立っており、今にも襲いかかりそうな雰囲気であった。二人をそんなゾンビたちを見て涙目になりな

がら絶叫する。

「に、に…さん…つち！」

「え!?ちよつと！」

ツナはとつさににこの手を握ると、そのままにこの手を引いてゾンビから逃げていく。

そして二人はゾンビたちが来なくなったところまで逃げる。

「はあはあ…大丈夫ですかに…さん？」

「ちよ、ちよつと…!!」

「あーご、ごめんなさい！」

にこが顔を赤らめながらそう言うと、ツナは手を握っていることに気づいてとつさに手を放す。

「す、すいません！に…さんを護らなきゃって思っちゃって！」

「え!?!」

「いや…男なら女の子を護れって言われたから…」

「そ、そう…!!あ、ありがとう…!!」

ツナの言葉を聞いて顔を赤らめながら、にこはツナにお礼を言う。

(ちよつとは男らしいところあるじゃない…!!)

自分も怖いはずなのに、自分のことを護ろうとしてくれたツナに、にこはちよつとだけかっこいいと思ってしまう。

するとツナの後ろの壁からたくさんの手が出現する。それを見てにこは悲鳴をあげる。

「ぎゃー…!!」

「どうしたんです…ぎゃー…!!」

にこが悲鳴をあげたので、後ろのほうを向くとツナも大量の手を見て悲鳴をあげる。

そしてとつさににこを護ろうと、にこに近づいて再び手を引いて逃げようとするツナだったが…

「ぎゃー…」

ツナはにこにぶつかってしまい、そのままにこを床に押し倒してしまう。

「いてて…」

「ちよ!?!」

「あー!」

そしてお互い顔があとちよつとでキスできるのではないかと
ところまで近づき、ツナとこは顔を赤らめてしまう。

あまりの突然の出来事にツナもにこも動けずにいると…

「ツナ君…?」

「にこちゃん…?」

タイミングがいいのか悪いのか、海未と穂乃果の

ペアが追いついてきてしまう。

そして今のツナとにこの状況を見て海未と穂乃果はその場で固
まってしまう。

「ハレンチです!何をやってるんですか!」

「い、いやこれは事故というか!」

「そうよ!誤解よ!」

顔を真っ赤にさせながら言う海未に、ツナとこは必死で弁解す
る。

一方で穂乃果は…

「へ、へえ…ツナ君とにこちゃんって…そういう関係だったんだ…し、
知らなかったな…!」

「穂乃果ちゃん!違うから!」

体をプルプルと震わせながら、もの凄い動揺してしまっていた。誤
解を解こうとツナが穂乃果に向かって言うが無駄であった。

そしてここでさらに…

「ツナ君?」

「ツナさん…?」

「ことりちゃん!?!花陽ちゃん!?!」

ことりと花陽のペアが来てしまい、二人は穂乃果と海未と同じく動
揺してしまう。

このあと誤解を解くのに物凄い、時間がかかったのであった。

#標的（ターゲット） 120 「誰なのか」

お化け屋敷でにこと騒動あったが、ツナたちは次のアトラクションへ行くこととなった。

「いやー、すつげえ面白かったよな、このお化け屋敷。特にあの井戸から出てきた奴。」

「凜も面白かったにや。うーらーめーしーやーじゃなくて、うーらしやーかーいって言って、出てきたあの殺し屋^{ヒットマン}お化けにや。」

「確かボンゴレに入ったら成仏できるとか、リボーン^{小僧}みたいなこと言ってたよな。」

山本と凜は特に怖がった様子も見せず、お化け屋敷を普通に楽しんでいた。ちなみに山本も凜も、井戸から出てきお化けがリボーンだということに気づいてはない。

「（やっぱり山本と凜ちゃんって似た者同士だよな：運動神経抜群でちよつと天然で：それにあのお化けがリボーンだって気づいてないし…）」

改めてツナは山本と凜が似た者同士だということを再認識する。

一方でもう一組の似た者同士である獄寺と真姫は…

「あの程度で驚くなんて、情けねえな。」

「そういうあんただって、「崇りだー」とか叫んでたじゃない。」

「んだと？」

「何よ？」

獄寺と真姫は火花を散らしている。相変わらずこの二人はは犬猿の仲である。

「（獄寺君と真姫ちゃんは、素直じゃなくて、頭が良くて、家がお金持ちで：似た者同士がこんな身近に2組もいるなんて…）」

獄寺と真姫の様子を見ながらそう思うツナ。本人は気づいていないがツナと穂乃果も似ているところがある。勉強が苦手で、おつちよこちよいで、人の上に立つ資質があるという点はツナと穂乃果もある

意味似た者同士である。

すると雪穂がツナに小声で話しかける。

「ツナさん。」

「何？雪穂ちゃん？」

「いや、何か考え事してたからどうしたのかなって思っちゃって。」

「ああ：別に大したことじゃないよ。」

「もしかして、お化け屋敷でお姉ちゃんと一緒になれなかったのが残念だったとか？」

「ち、違うよ！お、俺は別にそんなこと…!!」

表情をニヤニヤさせながら雪穂がそう言うとなツナは顔を真っ赤にしてしまう。本当に穂乃果と一緒になれなかったことを考えていたわけではないが、実際に残念に思っていたのは事実である。

「さっきのくじで、私がお姉ちゃんのを引いたらツナさんと交換してあげられたんですけど。」

「そこまで気を使わなくていいから！」

穂乃果と一緒にしてあげようと気を使ってくれる雪穂にツナがそう言う。

そして雪穂はさらに続ける。

「それでツナさん。せっかくリゾートアイランドに来たんですから、もちろんするんですよ？告白。」

「こ、告白!?そ、それは!!まだ早いというか…!!その…!!」

雪穂の口から告白という単語が出ただけで顔を真っ赤にして動揺してしまう。ツナの反応を見て雪穂は「告白できるのはまだ無理そうだな…」と心の中で思ってしまう。

一方で穂乃果は雪穂と話している、ツナの後ろ姿を見ながら考えていた。

「うくん…」

「どうしたの穂乃果？」

「さっきからずっと唸ってるわよ。」

「何かあったん？」

さっきから様子がおかしい穂乃果を見て、絵里、にこ、希が尋ねる。

「いやー…大したことじゃないんだけどねー…ちよつと気になることがあつて…」

「もしかしてツナさんの好きな人がμ、sの中にいる

ってリボン君が言つてたことですか？」

「な、何でわかつたの亜里沙ちゃん!？」

亜里沙に自分の考えていることを当てられて、穂乃果は驚いてしまう。そして亜里沙の言葉を聞いて、海未、ことり、花陽も反応してしまふ。

一方でこの話を初めて聞いた、にこ、絵里、希は…

「え!?ツナの好きな人がμ私たちsの中にいるの!？」

「それよりもツナ君って好きな人いたのね…」

「へー、ツナ君の好きな人がμウチらsの中に…」

絵里とにこはこの話を聞いて驚きを隠せずにはいたが、希だけは全く動揺してはいなかった。

「ですが…それは本当かどうか決まったわけでは…」

「もし本当だったら、ツナ君が海未ちゃんのことを好きだつていうことも…」

「ま、まさか…!!」

希が表情をニヤニヤさせながらそう言うと、海未は希の言葉を真に受けて顔を赤くする。

すると穂乃果は希の話を聞いて勘違いする。

「ええ!?ツナ君って海未ちゃんのことを好きなの!？」

「違います!それに声が大きいです穂乃果!」

穂乃果の勝手な勘違いに海未は顔を真っ赤にする。幸い今の会話は穂乃果、ことり、花陽、絵里、希、にこ以外には聞かれていなかった。

「可能性の話だよ、穂乃果ちゃん。」

「え?…そうなの?」

ことりが可能性の話であることを説明すると、穂乃果は理解する。

そして穂乃果はあることを思い出す。

「そういえばツナ君の好きな人って確か…とつても笑顔が素敵で明る

くて、前向きな人だって…」

「ええ!? 何で穂乃果ちゃんそんなこと知ってるの!?!」

「前にツナ君と電話した時に聞いたら、教えてくれたよ。」

以前、花見が終わったあとにツナの好きな人の特徴を言っていたことを思い出す穂乃果。ツナの好きな人の特徴を知っていることに花陽は驚く。もちろん花陽だけでなく海未、ことり、にこ、絵里も驚いた。そしてこれらの特徴に当てはまるメンバーを考えるが…

「別にみんな暗いわけでもないし、後向きでもないし、笑顔はみんな素敵やし、ある意味、全員に当てはまるよね。」

希がそう言うと、首を縦に振ってうなずいてしまう穂乃果たち。

だが亜里沙だけは知っていた。

「(ツナさんは穂乃果さんのことが好き。でもこれを言ったらダメ：それにまだどうなるかわからないってリボン君も言ってたから…)」

この事実を心の中にしまいこむ亜里沙。結局のところツナの好きな人が誰なのかわからなかった。

#標的（ターゲット） 121 「ジェットコースター」

引き続きツナたちはマファイアランドのパンフレットを見ながら、次は何のアトラクションに乗ろうか考えていた。

「ねえ次はどうする?」

「そうだねー、次は何に乗ろうか?」

穂乃果とツナがパンフレットを見ながら呟いていると、凜が提案する。

「凜はジェットコースターに乗りたいたいや!」

「ジェットコースターか?面白そうだな。」

「そうね。」

「私も乗ってみたいです!」

凜のジェットコースターに乗りたいたいという要望を聞いて山本、絵里、亜里沙は賛成する。

そしていつものように希は…

「じゃあウチは、ツナ君と…」

「ひいいい!」

「あら?」

いつものように希はツナに抱きつこうとしたのだ

が、ツナはブラッド・オブ・ボンゴレの血である超直感が危険を察知し、すばやく希の攻撃?を避ける。

「何で避けるんツナ君?照れなくてもいいやん。」

「い、いや…照れてといういよりも…なんか背筋が凍りつくような予感がしたので…」

体をガタガタと震わせながらツナがそう言うと、希はちよつとだけ残念そうな表情になる。

「さすが十代目、たった2回受けただけで希占い女の攻撃を避けるとは。」
「いや：そんなに凄いことなの…？」

「その言い方だと、希が敵みたいよ…」
「そもそもあれは攻撃なのですか…？」

獄寺の発言に聞こ、真姫、海未は、呆れた表情になりながら言う。だが恋のライバルという意味では、希はラスボス級の敵であるといえるかもしれない。

この光景を見た雪穂は穂乃果に小声でささやく…

「ジェットコースターのあとに酔ってフラフラしてるフリをして、ツナさんに抱きつくとかありかもね。」

「ゆ、雪穂!?!何言ってるの!?!」

「あ！逆にツナさんが酔ってたら、お姉ちゃんが膝枕してあげるっていうのもありかも。」

「も、もう雪穂！余計な気をまわさなくてもいいから！」

雪穂の提案に穂乃果は顔を真っ赤にさせながら言う。

一方で花陽とことりは…

「わ、私…こういう絶叫系はちよつと…」

「わ、私も…」

絶叫系であるジェットコースターに乗ることに、多少抵抗があった。するとツナが…

「花陽ちゃんもことりちゃんも絶系苦手なんだね。実は俺もそうなんだよねー。」

「え？ツナさんもですか？」

「うん。俺たちは乗らずに一緒に待ってよつか。」

「え!?!」

ツナの発言に花陽とことりは顔を赤くして反応してしまう。これでみんながジェットコースターに乗っている間は二人きりとはいえずとも、ツナと一緒にいることができるのだから。

だが現実はそう甘くなく…

「だ、大丈夫だよ！かよちゃんには凜がついてるから何かあったら護つ

「てあげるにゃー！」

「そ、そうね！わ、私もついてるわ！」

「ことりちゃんには私がついてるから！」

「そうです！一緒に行きましょうことり！」

必死にツことりと花陽がツナと一緒になるのを阻止しようと、凜、真姫、穂乃果、海未がそう言う。急にそんなことを言い出した4人にツナは疑問符を浮かべる。

「必死ね…」

「μ，sのみなさんは面白いです。」

「本当やね。」

あまりの光景に絵里は若干引いてしまう。一方で亜里沙と希はこの光景を微笑みながら見ていた。

「急にどうしたんだあいつら？」

「どうしたんだらうな？」

「ほ、本当よね…一体何があったのかしら…!？」

急に変になった4人を見て獄寺と山本は、何があったかわからないでいたが、ここは4人が必死な理由をわかった上で気づいていないフリをしていた。

結局、ジェットコースターもお化け屋敷と同様、

全員で乗ることとなった。

#標的 (ターゲット) 122 「死のジェットコースター (フェラーレ・モンタンニヤ)」

ツナたちはマフィアランドで人気のジェットコースターである
死のジェットコースターフェラーレ・モンタンニヤに乗ることとなった。

「人気のアトラクションだけに混んでるね。」

「どれくらい待つのかしら?」

ジェットコースターに並んでいる行列を見て穂乃果と絵里が呟く。

一方でツナはマフィアランドのパンフレットを見て…

「えっと…フェラーレ・モンタンニヤ…どういう意味?」

「普通に直訳すると、死のジェットコースター意味ですね。」

「死の…?」

「ジェット…?」

「コースター…?」

ツナがフェラーレ・モンタンニヤの意味をわからずに考えていると、
獄寺がその意味を教える。そして意味を聞いたツナ、花陽、ことりは
顔を真っ青になる。

するとリボーンはどこから声が聞こえてくる。

「死のジェットコースターフェラーレ・モンタンニヤはマフィアランドで一番人気のアトラク
ションなんだぞ。」

「リボーン! って何で死神!?!」

なぜか黒いフードを被り、相棒であるレオンを鎌に変形させて死神
のコスプレをしているリボーンがいた。

「俺はマフィアランドのマスコットのリボッタ君だぞ。」

「面白いにゃ!」

「マフィアランドにもマスコットキャラっているんだね!」

「小さくて可愛いです！」

「マスコットキャラなんてくだらねー。」

「そうか？俺は面白いと思うぜ。」

リボーンが自己紹介？すると凜、穂乃果、亜里沙、獄寺、山本はこの死神がリボーンであることに全く気づかず、本当にマスコットキャラだと信じてしまう。

「ねえツナ君。」

「どうしたんですか絵里さん？」

「死神がマスコットって変わってるわね。」

「（絵里さんも気づいてないの!?!）」

まさか絵里までもが気づいてないことにツナは心の中で驚いてしまう。

「案外、エリチは抜けてるところがあるんよ。」

「そ、そうなんですか…?？」

「いくらそうだとしても気づくでしょ普通…！」

絵里の性格を教える希。それに対してツナはしつかり者のイメージがあつたので絵里の性格を聞いて「い、以外」と心の中で思ってしまう。それでもこはリボーンだと気づかない絵里を見て呆れていた。

「前に音ノ木坂学院に授業をしにきた時に穂乃果が同じような反応です…！」

「え!?!リボーンが音ノ木坂学院に!?!何で!?!」

海未からリボーンが音ノ木坂学院に授業をしにきたという事実を聞いてツナは驚いてしまう。

「なんかマフィア学っていう授業をやってくれたよ。」

「なんかボンゴレファミリーの歴史とか教えくれましたよ。」

「結構、盛況だったわよ。」

「最後にボンゴレファミリーに入ってみないかとか言われましたよ。」

「（リボーンの奴、俺の知らない間に音ノ木坂学院まで行ってファミリー候補探してたのかよ!?!何考えてるんだよあいつ!?!）」

ことり、花陽、真姫、雪穂からリボーンが音ノ木坂学院で授業をし

たことを聞いて驚いてしまうツナ。

するとリボーンが死のジェットコースターについて説明をする。

「この死のジェットコースターは乗った奴の8割以上が気絶するジェットコースターなんだぞ。」

「怖すぎだろー!」

「中にはこの世のものと思えぬ綺麗な川が見えたっていう奴もいるんだぞ。」

「それ完璧に三途の川が見えてるよね!?そんな恐ろしいジェットコースターに誰が…」

「私乗りたいーい!」

「凜もー!」

「なんか面白そうだよな。」

「私も興味あるわ。」

「この世の物と思えぬ綺麗な川…見てみたいです!」
「嘘!」

穂乃果、凜、山本、絵里、亜里沙はリボーンの説明を聞いてむしろ興味を持ってしまう。まさか興味を持つとは

思わなかったツナは驚いてしまう。

するとツナの服の袖を誰かが引っ張る。

「ツ、ツナさん…!!」

「どうしたの花陽ちゃん?」

「あ、あの…!!私も頑張って乗るので…!!その…隣に座ってもらえませんか…!?!」

顔を赤らめながら花陽がツナにそう言う。するとツナは笑顔で花陽に言う。

「いいよ。」

「ほ、本当ですか!?!」

「うん。」

こうして花陽はツナの隣に座ることを約束した。

#標的（ターゲット） 123 「生き残ったのは」

ツナたちはジェットコースターに乗るために行列に並ぶ。以外にも行列は早く進み、15分ほどでツナたちの番がまわってくる。約束通りツナは花陽の隣に座る。

そして全員、座席に座ると…

「かよちゃん…」

「花陽ちゃん…」

「花陽…」

凜、穂乃果、ことり、海未、真姫、にこがツナの隣に座っている花陽を後ろから異様なプレッシャーを放ちながら見ていた。

「（み、みんなの視線が怖いよー！で、でもツナさんと一緒になれたんだし…!!）」

後ろから感じる異様なプレッシャーに花陽は体をビクビクと震わせていたが、内心ではツナと一緒になれてもの凄い嬉しい花陽である。

すると体をビクビクと震わせている花陽を見てツナは…

「大丈夫、花陽ちゃん？体が震えてるけど…」

「だ、大丈夫です…」

「本当に？無理しなくて大丈夫だよ。今ならまだ引き返せるし。」

「本当に大丈夫です！そ、それに…ツ、ツナさんが一緒にいてくれるから…!!」

「ごめん花陽ちゃん、最後のほう聞こえなかったんだけど、何か言った？」

「な、何でもないです！気にしないでください！」

花陽は「ツナさんが一緒にいてくれるから」という部分はツナに聞こえないぐらい小さい声で言う。聞こえなかった部分のところについてツナは尋ねるが、花陽は顔を赤くして誤魔化す。

すると安全バーが自動で降り、完全にロックがかかる。するとアナウンスが始まる。

『みなさんようこそマファイアランド名物、死フェラーレ・モンタンニャのジェットコースターへ！』

「またリボンお前かよー！」

アナウンスの聲がリボンだった為、ツナがツツコミをいれてしま
う。

さらにリボンは続けていく。

『この死フェラーレ・モンタンニャのジェットコースターは世界中の絶叫マシンの要素を取り入れたジェットコースターだ。8割以上の奴が気絶するが、楽しんでこい。』

「楽しめるか！」

『それじゃ元気に逝なってこい。』

「意味が違ちがうだろー！」

リボンが明らかに行くではなく、逝くという単語を使ったことにツナがツツコミをいれる。

そしてジェットコースターが一気に動いていく。最所は時速230キロの超スピードで真っ直ぐ進み…

「誰か助けてー！ー！」

マファイアランド中にツナと花陽の叫び声が響く。そして

二人の悲鳴はむなしく、次は弧を描くように急上昇していく。

「む、無理…」

「い、意識が…」

開始30秒も経たないうちにすでにツナと花陽はグロッキーな状態な二人。そしてジェットコースターが頂点にまで上がると、そこからジェットコースターは一気に地面スレスレまで落ちていく。

「…」

そしてこの時すでにツナと花陽の意識はなかった。このあともツナと花陽以外にも脱落者は増え続ける。

そして気絶せずに普通に最後までいられたのは。

「いやー、面白かったね。」

「本当な。」

「凜はもう一回、行きたいにや!」

「面白かったねお姉ちゃん。」

「ええ、凄いスリリングだったわ。」

「こんなに刺激的なのウチは久しぶりやね。」

穂乃果、山本、凜、亜里沙、絵里、希は何事もなく普通に楽しんでいた。

一方で…

「あ、あいつら化け物なの…?…ウウ…」

「気持ち悪い…」

「ど、どうした…?…顔色が悪いぜ…?あの程度でへばったのか…?」

「そ、そういうあんたこそ…顔色悪いわよ…」

にこ、雪穂、獄寺、真姫は気絶するまではいかなかったが、顔色を悪くしていた。獄寺と真姫に至ってはこんな状況でも敵対視していた。

そして気絶したのは…

「「…」」

やはり絶叫系が苦手なツナ、花陽、ことりであった。3人はベンチで横になってしまっていた。

こうして死のジェットコースターの恐ろしさを知るメンバーと面白かったメンバーに別れるのであった。

#標的（ターゲット） 124 「目が覚めて」

死フェラーレ・モンタニャのジエツトコースターによって気絶してしまったツナは花陽とことりより先に目を覚まし、眠ってる花陽とことりの様子を伺う。

「あー：頭がクラクラする…それに気持ち悪い…」

「大丈夫ですか？十代目？」

「うん、なんとか…」

「この程度でまいってるようじゃ、マフィアのボスにはなれねえぞ。」

「マフィアのボスにはならないって…うう…気持ち悪い…」

顔を悪くし右手で頭を押さえるツナを見て、獄寺が心配する。一方でリボーンはコスプレを止めていつもの黒いスーツを着て言うが、ツナはリボーンの発言にいつものように反抗しようとするが、気分が悪くなり反抗しようにも反抗できなくなる。

「あのジエツトコースターに乗って気絶していないお前らは、マフィアとしても充分やっていけるだろうな。」

「本当に!？」

「やったあ！」

リボーンからマフィアになれると言われて、穂乃果と凜だけは普通に喜んでいた。

「よかったな、マフィアとしてやっていけるってよ。」

「よくないんだけど…」

「私も…」

「というか穂乃果と凜は何で喜んでるのよ…」

「ウチらにはわからんけど、あの二人にとってはすっごく嬉しいことなんやろうな。」

リボーンという言葉にも何も違和感を感じていない山本という言葉に真姫、絵里、にこ、希は複雑な気分になってしまう。

「花陽とことりも気絶しちやいるが、俺がちよつと教育してやればマフィアになれるだろうな。」

「本当に女の子にはどこまでも甘いなお前は！それに花陽ちゃんとかとりちゃんをマフィアにしようとするなよー！」

自分にはあれだけ厳しいが、女の子にはどこまでも甘いリボーンにツナはツツコミをいれる。そしてリボーンにツツコミをいれたことよって、気分が悪いのが吹っ飛んでしまう。

すると亜里沙がリボーンに尋ねる。

「私もマフィアになれるんでしょうか？」

「亜里沙?!」

「亜里沙ちゃん!」

ここでなんと亜里沙がマフィアに興味を持ってしまう。まさか亜里沙がこんなことを言うと思つてもみなかった

ツナ、雪穂、絵里は驚いてしまう。

「もちろんなれるぞ。お前はちよつと抜けているところがあるが、洞察力もあるし、飲み込みも早い。俺の目が間違っていないけりや凜の次ぐらいに殺し屋ヒットマンとしての素質があると思うぞ。」

「ハラシヨー！私が殺し屋ヒットマンに！」

殺し屋《ヒットマン》になれると聞いてなぜか亜里沙は目をキラキラと輝かせる。

「あ、亜里沙が…殺し屋ヒットマン…」

「絵里さん！しっかりしてください！」

亜里沙に凜の次に殺し屋ヒットマンになれる素質があるという言葉聞いて絵里は、亜里沙が殺し屋ヒットマンになった姿を想像してしまいちよつとだけショックを受けてしまう。

そんなことを話していると、気絶していた花陽とことりが目覚める。

「うくん…?」

「あれ…(こ)こは?」

「ことりちゃん！花陽ちゃん！」

「どうやら目覚めたようですね。」

花陽とことりが目覚めたことに気づいた、穂乃果と海未が二人の元に駆け寄る。

そしてツナも花陽とことりに駆け寄る。

「大丈夫？花陽ちゃん、ことりちゃん？立てる？」

「は、はい…」

「私もなんとか…」

ツナが尋ねると、花陽とことりは頭を右手で押さえながらゆっくりと立ち上がる。

だがまだジェットコースターに乗った反動で、足元がおぼつかないず、二人はそのまま前にこけてしまう。

「ぎゃー！」

「え？」

そして二人はこけた反動でそのままツナを押し倒してしまう。そして花陽とことりの顔がツナの顔に一気に近付いてしまう。

「ちよ!?」

「はああああー！」

ツナ、花陽、ことりは押し倒された状態で顔を真っ赤にしてしまう。

そしてこれを見て…

「こ、今度は花陽ちゃんとかことりちゃんが…!!」

「か、かよちゃん…!!」

「はあああああ…!!」

「大胆やね、花陽ちゃん、ことりちゃん。」

「やるじゃねえか花陽、ことり。」

穂乃果、凜、海未は顔を赤くして動揺し、希とりポーンは面白そうな表情でこの光景を見ていた。

「てめえらー！早く十代目から離れやがれ！」

すばやくダイナマイトを取り出して怒る獄寺。獄寺の言葉で花陽とことりはすばやくツナから離れる。

「(ま、また穂乃果ちゃんの前で…!!)」

お化け屋敷の時と同様、穂乃果の目の前でこんなことになってツナは心の中で嘆くのであった。

#標的（ターゲット） 125 「コーヒーカップ」

そして次のアトラクションを探すツナたち。

「もう絶叫系のは無理…」

「私もです…」

「私も…」

死のジェットコースターに乗って気絶してしまったツナ、花陽、ことりはもうもう勘弁してほしいという表情で呟く。

そんな3人を見て、リボンが提案する。

「じゃあコーヒーカップとかどうだ？」

「コーヒーカップか…確かにあれなら回転速度さえあげなかつたら体に負担がないし…みんなはどう？」

「十代目がいいなら俺もいいですよ。」

「俺もいいぜ。」

「私もいいです。」

「私も。」

「じゃあ私も。」

ツナがコーヒーカップに乗りたいかどうか尋ねると、獄寺、山本、雪穂、絵里、亜里沙は乗ることに賛成する。

一方で

「（コーヒーカップ…!!これならツナ君と…!!）」

「（ツナ君と一緒に…!!はっ！なぜ私はこのようなことをすぐに…!!）」

「（うまくいけば…!!）」

「（進展のチャンス…!!）」

「(ツナにアピールするチャンスだにゃ…!!)」

「(ツナと一緒にになりたいだなんて…!!)」

「(私はもう一緒になったんだし、これ以上は何も望んでなんか…!!)」
穂乃果、海未、ことり、花陽、凜、真姫、にこは顔を赤らめながら、心の中でツナとコーヒーカップで一緒になることを想像していた。

「あれ?どうしたのみんな?もしかしてコーヒーカップ嫌だった?」

「そ、そんなことないよ!ねえみんな!」

顔を赤くして黙っている穂乃果たちを見てツナが尋ねる。穂乃果は海未、ことり、花陽、凜、真姫、にこに尋ねると全員、猛スピードで首を縦に振る。猛スピードで首を縦に振る海未たちを見てツナは「な、ならいんだけど…」と呟きながら、少しだけ引いてしまっていた。

そしてツナたちはパンフレットにある、マフィアランドの案内図を見ながら、コーヒーカップのある場所を目指す。

そしてきつそく希が…

「それじゃツナ君、ウチと二人つきりで乗ろうか?」

「二人つきり!」「二人つきり!」

「え…!?いい、いや俺は…!?」

さきほど抱きつく攻撃?が効かないことを学習した希はツナの目の前に移動しツナの手を握りコーヒーカップに乗ろうと誘う。

「やっぱりウチとじゃ嫌…?」

「え、えつと…」

抱きつく攻撃?は効かないので、希目を潤わせてツナを困惑させようとする。そして希の思惑通りツナはいつものように困惑してしまふ。

「毎度毎度ずるいわよ希!ツナも毎回、同じ手に困惑してるんじゃない」

ないわよ!」

「あらー?真姫ちゃんがとうとう嫉妬して、怒りが爆発しちゃったやん。」

「し、してないわよ!同じやりとりを見せられてイライラしただけなんだから!今回はジャンケンで勝った順番で残りの二人を決めたんでいいじゃない!」

「ま、仕方ないか。ジャンケンで決めよっか。」

真姫の提案に希は同意する。そしてツナたちは5人ずつに別れてジャンケンし、一番最初に勝った3人を選出する。

そして勝った3人は…

「真姫ちゃん、運がいいやん。」

「希のほうこそ。」

「なんか勝っちゃったぜ。」

ジャンケンに勝ち残ったのは希、真姫、山本であった。

「そんじゃ始めようぜ。ジャンケンー…」

「「ポン!」」

山本の掛け声と共に真姫と希は同時に手を出す。

そして結果は…

「か、勝った…」

真姫が自分の出した手を見て驚く。真姫がチョキを出し、山本と希がパーを出していた。

「あちゃー、負けちゃったね。」

「ま、しゃあねえな。んじゃ西木野から一緒に乗る奴を決めてくれよな。」

山本がそう言うと、真姫はメンバー全員を見渡してコーヒーカーップに乗る二人を決める。

「じゃ、じゃあ海未と…ツナ…!!」

「わ、私がツナ君と!」

「え?俺?」

まさか自分が選ばれると思ってもみななかった海未は顔を赤くし、ツナは何で俺?みたいな表情をしていた。

こうしてコーヒーカップに乗るメンバーが決まった。

#標的 (ターゲット) 126 「コーヒーカップ2」

そしてそれぞれ3人組に別れて、コーヒーカップに乗りこむ。そしてコーヒーカップがゆっくりと回っていく。

「あの…真姫ちゃん…海未ちゃん…?」

「な、何よ…!?／／／」

「な、何ですか…!?／／／」

「い、いや…二人とも窮屈じゃない…?もつとこつちに來たら…?」

ツナがそう言うと、真姫と海未は顔を赤らめて、顔を下に向けながらツナの真正面に座っているのだが、二人とも体がくっついて少し暑苦しさな様子である。

「い、いや…どう見ても暑苦しそうだし…無理せずもつと近くに來ようよ…」

「し、仕方ないわね…／／／」

「ツナ君がそういうなら…／／／」

ツナに言われて、移動する真姫、海未。

「近くない!」

ツナが驚くと、真姫は左隣、海未は右隣に座っていた。それも至近距離で。さすがのツナも二人が至近距離に移動するとは思わなかったたので、ちよつとだけ顔を赤らめてしまう。

「な、何よ…!?／／／近くに來いって言ったのはツナでしょ!?／／／」

「い、いや…確かにそう言ったけど…だからって近くない…?」

「う、うるさい!黙って乗ってなさいよ!」

「えー…」

顔を真っ赤にして言う真姫に、ツナは戸惑ってしまう。

一方で海未は…

「わ、私は何をしているのでしょうか…!?／／／近くに來いと言われ

て、こんなツナ君と密着する

までの位置に移動するなんて：／／／

顔を真つ赤にして自分の起こした行動に、驚くと同時に心臓の鼓動がいつもよりどんどん早くなり、胸が苦しくなっていく。

「(な、何よ!?!／／／ツナと近くにいただけで心臓がドキドキなんてしてないんだから：／／／この胸が苦しいのも気のせいなんだから：／／／)」

海未と同じく真姫も、ツナと密着することでもより心臓の鼓動が早くなり、胸が苦しくなっていた。

「真姫ちゃん、海未ちゃんなんか顔が赤いよ？」

大丈夫?」

「何でもないわ!／何でもありません!」

「え…でも…」

「大丈夫って言ってるでしょ!」

「本当に大丈夫ですから!」

「そ、そう…」

あまりの二人の勢いに押されてツナは何も言えなくなってしまうていた。

そしてしばらく沈黙の時間が続く。

「(き、気まずい…)」

「(な、何か会話を…)」

二人が何を話せばいいか迷っていると、ツナが話を切り出す。

「あの真姫ちゃん。」

「な、何!?!」

「赤いチューリップの花なんだけど、なんか色々ごめんね。」

「いいわよ、もう済んだことなんだし。悪いのはリボンなんだし。」

「何の話ですか?」

「ああ実はね…」

何の話のことかわからず海未は尋ねると、ツナは真姫の誕生日(正確にいうと誕生日前であるが)の出来事について海未に話す。

「あ、愛の告白…!?!／／／」

「だからそれはリボーンの作戦で！」

「そ、そうでしたね…私ったらつい…」

愛の告白という単語を聞いてしまい、海未は顔を赤くして動揺してしまふ。

「(チューリップの花言葉は愛の告白なのです…ってまたすぐに私はこういうことを!?)」

『海未ちゃん、好きだよ。これ受けとってほしいな。』

「言ったそばから!ツナ君と出会ったから何でハレンチことばかり想像してしまうのですか私は!?)」

いちものように想像して、顔を真っ赤にし頭から煙をあげる。

そして急に海未はコーヒーカーップの机に頭をうちつけ始める。

「ちよつと何やってるのよ海未!」

「海未ちゃん!?!どうしたの!?!」

「気にしないでください…邪念を祓っているだけだなので…」

「邪念って何!?!とにかく止めてよ海未ちゃん!」

ツナと真姫は海未を取り押さえて、なんとか頭を打ちつけさせるのを止めさせる。

そして海未をなんとか落ち着かせると、再び沈黙に訪れる。

「(はあ…私は何をやっているのでしょうか…?二人に迷惑までかけてしまつて…)」

頭を打ちつけた部分を左手で押さえながら心の中で、自分の行動を反省する。

そして海未が左手を降ろすと…

「あ…」

「ああああ!!／／／」

ツナの右手に海未の左手が触れてしまふ。海未は自分の手がツナの手に触れていることに気づいて、再び顔を真っ赤にさせて動揺する。

「ツナ!早く海未から手を離して!」

「え、え?」

「いいから早く!」

そう言うとき真姫は、ツナのもう一方の手を引っぱり強制的に海未からツナを引き剥がそうとするが…

「あああああ！／＼／＼」

真姫もツナの手と自分の手が触れてしまったことに気づいてしま
う。

そして…

「ツナのばかー！ー！」

「何で!?!」

恥ずかしさのあまり真姫はツナにおもいきりビンタしてしまう。
「何でコーヒーカップに乗っただけでこんな目に…」と怒ってしま
うツナであった。

#標的 (ターゲット) 127 「意外な再会」

このあともマフィアランドのアトラクションを楽しんだツナたち。

そうこうしているうちに時間は昼近くになる。

「いっばいまわったねー。」

「もうお昼だ。」

「あ、本当だね。」

マフィアランド内にある時計を見てツナ、雪穂、穂乃果が眩く。するとグウーという音が響き渡る。

「あ…。」

「どうやら花陽は腹がペコペコのようにだな。」

「はううううー！」

「ハハッ気にすんなよ古泉。俺だって野球の練習終わったらいつつも腹が鳴ってるぜ。」

お腹をすかしている花陽を見てリボンが言うと、花陽は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤してしまう。山本はそんな花陽を見て優しくフオローする。

「んじや、焼肉でも食いにいくか。俺が知ってるマフィアランドにある食べ放題の焼肉店を紹介してやる。」

「さすがリボンさん！気前がいいっす！」

リボンの提案を聞いて称賛する獄寺。

そしてさらに花陽にとって、嬉しいニュースを告げる。

「ちなみにご飯も食べ放題だぞ。」

「ご飯食べ放題!?!」

「ご飯食べ放題って聞いただけで花陽ちゃんの目が、もの凄い輝いてる!?!さすがお米をこよなく愛する人ランキング1位!」

「また太りますよ花陽…」

「無駄よ海未…もうああなつた花陽を止めることは誰にもできないわ…」

「もし今年ラブライブに出ることになってたらどうなったのかしら…?」

「ご飯食べ放題という単語を聞いてかかってないほど生き生きとしている花陽を見て、ツナ、海未、絵里、にこが呟く。

「大丈夫だ、また太ったら今度はツンデレダイエットで痩せりゃいい。」

「なんだよそれ…」

新たなボンゴレ式のダイエットの方法を聞いてツナは「また変なのが出たよ…」と心の中で思ってしまう。

そしてリボーンのご案内のもと一同は、食べ放題の焼肉店まで歩いていく。

「ここがマフィアランドで有名な焼肉店だ。」

「うわーいい匂いがするー。」

「ご飯食べ放題…ご飯食べ放題…」

「落ち着きなさい花陽。」

焼肉店から漂う匂いに穂乃果は食欲をそそられていた。そして花陽はご飯食べ放題という言葉をさつきから呪文のように唱えており、それを見た真姫がそう言うが花陽は止まりそうにない。

すると誰かが後ろから話してくる。

「あれ? 沢田殿?」

「え?! バジル君?!」

声のするほうへツナが振り向くとそこには、ボンゴレ門外顧問組織であるCHDEFチエデフに所属している

バジルがいた。

「みなさんお久しぶりです。花見の時、以来ですね。」

「何でマファイアランドいるんだ？」

獄寺がバジルになぜマファイアランドにいるのか尋ねる。

「今日は裏マファイアランドに修行にきてるんです。それで昼になったので昼食でも食べようと歩いてたら沢田殿たちを偶然見かけたもので。」

「「「裏マファイアランド？」」」

獄寺の問いにそう答えるバジル。

一方で裏マファイアランドという聞きなれない単語を聞いて、μ'sのメンバーと、雪穂、亜里沙は疑問符を浮かべる。

「裏マファイアランドというのは、この島で不法浸入をみなされた者が鍛える修行場なんです。といっても拙者は不法浸入したわけではなく、ただ純粹に修行に來ただけなんですが。」

「ということはやっぱりコロネロも…」

「コロネロ殿だけじゃありませんよ。ラル殿と笹川殿も來ていますよ。」

「え!?ラルにお兄さんまで來てるのー!?!」

バジルと同じくCHDEFに所属しており、未来の世界で自分を鍛えてくれたラル・ミルチと京子の兄である了平がこのマファイアランドに來ていることに驚く。

そして笹川という苗字を聞いてことりが気づく。

「あれ?確か笹川って京子ちゃんと同じ苗字…」

「はい、京子殿の兄上です。」

「そういえばボンゴレの晴の守護者とかいってたね。」

花見のイベントの時に、リボーンが京子のプロフィールを紹介した時に京子の兄である了平がボンゴレの晴の守護者であるということを書いていたことを思い出す希。

「とりあえず今は昼飯を食べるのが先だ。バジル、お前も一緒にどうだ?」

「そんな…ご迷惑なのでは…」

リボーンと一緒に飯を食べないかと誘うが、バジルはせっかく観光に來ているのを邪魔してはいけないと気を遣う。

すると花陽がバジルに言う。

「バジルさん、このお店はご飯食べ放題なんですよ。」

「それは本当ですか花陽殿!？」

花陽がご飯食べ放題ということを教えたと、バジルもさきほどの花陽のように目をキラキラと輝かせる。

そして焼肉店に入ると

「すいません、おかわりお願いします。」

「あ、拙者もお願いします。」

もうすでに大盛りのご飯5杯以上おかわりをしている花陽とバジル。

「」「」「ハラショー……」「」「」

相変わらず異常な二人の食欲にリポーン以外は、この言葉しか出なかったのであった。

ちなみにこの店のお米の在庫がなくなるまで二人はご飯をおかわりしたのであった。

#標的 (ターゲット) 128 「コロネロ」

焼肉を食べ終えてツナたちは店を出る。

「いやーやつぱり白いご飯最高ですねー!」

「本当ですね。」

幸せそうな表情で、ご飯で膨れたお腹をさすりながら呟く花陽とバジル。

「ねえバジル君。」

「何ですか穂乃果殿?」

「私、裏マフィアランドに行つてみたいんだけどいいかな?」

「え?裏マフィアランドにですか?いいですけど…」

「やったあ!」

裏マフィアランドに行つてもいいと言われて、喜ぶ穂乃果。

「丁度いい機会だ。将来のことを考えて穂乃果たちをラルとコロネロに鍛えて貰うのも悪くないかもな。」

「リポーン!穂乃果ちゃんたちをマフィアにしようとするのは止めろつて!あの二人の修行を受けたら死んじゃうよ!特にラルはスパルタなんだぞ!」

そう言うツナは未来の世界で受けたスパルタな容赦のないラルの教育を思い出す。

「でもリポーン君のあの修行を受けてるんですから、平気じゃないんですか?」

「正直、あの修行よりスパルタなものがあるとは思えないのですが…」

「実際毎日、死にかけてるし…」

「!どんな修行を受けてるのよ!」

「ツナ君って本当に一体どんな毎日を通(こ)してるんやろ…」

朝練のリポーンの修行を見ている雪穂、海未、こ

とりの言葉を聞いて、リポーンの修行を見たことのない絵里、にこ、希は驚いてしまう。

このあとツナはリボーンに穂乃果たちを修行させないということ
を条件に島の裏側にある裏マフィアランド行き地下鉄に乗って裏
マフィアランドに向かうことになった。

―裏マフィアランド―

「着いたぞ。」

「ここが裏マフィアランドです。」

リボーンとバジルがそう言ったその時…

「よく来たなコラ！」

大きな叫び声と共に、迷彩服を着て頭に鷹を乗せている赤ん坊が現
れる。

「うわ!? 本当に赤ちゃんだ！」

「本当にこんな奇妙な赤ん坊が他に存在したのね…」

「スピリチュアルやね…」

「かわいいですね。」

コロネロを見て穂乃果、真姫、希、亜里沙が言う。

「久しぶりだなヘボライバル。」

「それはこっちのセリフだけクソライバル。」

そうリボーンとコロネロが言うのと、久しぶりの再会であるにも関わ
らず、いつものように二人は互いの額に頭突きをかます。

「出た！ 挨拶代わりの頭突き！」

「い、痛そう…」

リボーンとコロネロの挨拶の仕方を見て、ツナはいつも通りつつこ
み、花陽はとても見てられないという表情で見っていた。

そして挨拶代わりの頭突きを終わると…

「それにしても、今日はこんなに不法浸入者がいるのかコラ！」

「違うんです。こちらの穂乃果殿が裏マフィアランドを見てみたいと

言ったんです。それでみなさんは裏マフィアランドの見学に。」

「そういうことか。」

バジルから事情を聞いて納得するコロネロ。

するとリポーンがコロネロの紹介をする。

「改めて紹介するぞ。こいつはコロネロ。俺のライバルであり、元イタリア海軍潜水奇襲部隊COMSUBINコムスビンの隊員だ。」

「おむすび?」

「コムスビンだコラー!」

「す、すいません!」

コムスビンという単語をついおむすびに変換してしまう

花陽。そんな花陽にコロネロが訂正する。

「とうかこいつ軍人なの…?」

「確かに迷彩服は着てるけど…」

「ますますマフィアって謎だわ…」

コロネロが軍人だという事実を受け入れることができないうに、絵里、真姫。

一方で穂乃果と凜だけは…

「軍人かかっこいいね!」

「憧れるにゃ!」

コロネロが軍人であるという事実を素直に信じ、少しだけ目を輝かせていた。

「そういえば平とラルがいるって聞いたが本当か?」

「ああ、今は昼食を食いにいってないがな。もう少ししたら戻ってくると思うぜ。」

「じゃあそれまで、ツナを教育するか。」

「そうだな。」

「ええ!? どうしてそうなるのー!?!」

まさかここで自分を教育するという話になるとは思わなかったツナは驚いてしまう。

「とつとと行ってこい。」

「ぎゃー!」

「「えー！　えー！　えー！　えー！　えー！」」

リボンとコロネロがそう言うと、二人はツナを蹴り飛ばし、渦潮が発生している海へ蹴り飛ばす。

そしていきなりツナが海に落とされたことに、山本とバジル以外は驚いてしまう。

「誰か助けてー！」

「十代目ー！　今、行きますー！」

「ちよー！　何、考えてるのよ!?」

真姫の制止も聞かず獄寺は崖から飛び降りて、ツナを助けに行ってしまう。

そしてツナが獄寺と共に帰ってくると…

「大丈夫ですか!?　十代目!?」

「な、なんとか…」

「んじゃもう1回行ってこい。」

「ぎゃー！　ぎゃー！　ぎゃー！」

「十代目ー！」

戻ってきたと思っただけなのにリボンとコロネロがツナを蹴り飛ばし、再びツナを海へ落とす。そしてもう1度獄寺はツナを助けに海に飛び込む。そしてこのやりとりが何度も続いていく。

「さすが沢田殿。こんな時でも修行を怠らないとは。流石です。」

「やっぱツナってすげえよな。」

「どこがですか！　あなたたちの目は節穴なんですか!？」

バジルと山本の発言に、海未がおもいきりつつこむ。

「わかった？　これがツナの家庭教師の教育よ。」

「「…」」

真姫がそう言うと、絵里、希、にこはただただ黙って首を縦に振るだけであった。

こうして3人はツナが毎日どんな生活を送っているのかだいたい理解すると同時に同情するのであった。

#標的(ターゲット) 129 「極限男と鬼教官」

このあともリボーンとコロネロに鍛えられてボロボロになったツナ。

「だいぶ鍛えられたな。」

「だな。」

「俺たちが。」

「アホーーーー！というかこのやりとり4年前と同じなんだけど！」

ガッツポーズしながら言うリボーンとコロネロにツツコミをいれると同時に、このやりとりが4年前と全く同じだということに気づくツナ。

「大丈夫…？ツナ君…？」

「心配してくれてありがとう穂乃果ちゃん…でも大丈夫じゃない…」

「だ、だよねー…」

さすがの穂乃果も今回ばかりはツナが大丈夫ではないことを理解する。

すると裏マフィアランドに電車がやって来ると、電車の扉が開き中から二人ほど出てくる。

「沢田に山本ではないか！それにタコヘッドも！」

「リボーンに沢田？それに誰だこいつらは？」

元気よく叫ぶ了平と、初めて見る^々sのメンバーと

雪穂と亜里沙を見て疑問符を浮かべるラル。

「あれが京子さんのお兄さんと、ラルさんって人ですか？」

「うん。そうだよ。」

亜里沙が尋ねると、ツナは首を縦に振りながら答える。

そして了平は自己紹介を始める。

「俺は並盛大学ボクシング部所属、笹川了平だ！座右の銘は極限だーーーー！」

「あ、熱い方ですね…」

「京子ちゃんと全然似てない…」

「本当に兄妹なのかしら…」

了平の自己紹介を聞いて、海未、ことり、絵里は思っていた人物像と全然違った為、かなりと行っていいほど引いてしまっている。

「相変わらずうるせえんだよ芝生！自己紹介ぐらい静かにできねえのか！」

「できん！これが俺の極限道だタコヘッド！」

「意味わかんねえこと言ってるじゃねえ！」

いつものように獄寺と了平は喧嘩を初めてしまう。

この光景に一同は呆気に取られてしまう。

そんな二人を無視してリボーンがラルを紹介する。

「こいつはラル・ミルチ。元イタリア海軍COMSUBINの軍人でコロネロの上司だ。」

「フン…」

「なんか雰囲気我真姫ちゃんみたいな人だにや。」

「ちよつと！変なことを言わないでよ凜！」

クールな反応を見せたラルを見て、凜はどこか真姫と同じような雰囲気を感じてしまう。

「それで、俺は誰を鍛えればいいんだ？」

「お前には凜を鍛えてもらうぞ。凜は山本に匹敵するほど殺し屋としての素質があるんだ。」

「何言ってるんだよりボーン！さっき俺の言ったことを忘れたのかよ！」

さっきの言った約束をあつさり破ったりボーン

に、ツナは言う。

一方でラルはリボーンの発言に興味を示していた。

「山本に匹敵するだど？それは鍛える余地がありそうだな。」

「なんかラルも興味持ってるんですけど!?というか勝手に話を進めるなよ！凜ちゃんがやりたいって言うわけないだろ！」

「凜はやってみたいにや！」

「えーーーーー!?!」

まさか凧がやりたいと言うとは思ってもみなかったツナは驚いてしまう。

「俺の修行はきついぞ。ついてこられるか?」

「勿論だにゃ!」

「よしいいだろう。ついて来い。」

「イエッサー!」

そう言うツナと凧は電車に乗って、どこかへ行ってしまう。おそらく別の場所で修行するものだと思われる。

「行っちゃった…」

「凧ちゃんどうなるんでしょう…?」

ツナと一緒に言ってしまった凧の後ろ姿を見ながらツナ、花陽は眩くのであった。

#標的(ターゲット) 130 「匣(ボックス) アニマル」

凜がラルと共に去ったあと：

「それにしても、ツナ君もリボン君もコロネロ君も動物飼ってるよね。マフィアって全員そうなの？」

ここで穂乃果がリボンの帽子に乗っている形状記憶カメレオンのレオン、コロネロの頭の上に乗っている鷹のファルコを見て気づく。

「マフィアだからってわけじゃないけど…」

「まあ、俺たちも含めてほとんどの奴らが持つてるよな匣ボックス アニマル。」
「成行きだがな。」

「だが極限に大切な相棒だ。」

「え!?!他にもいるの!?!」

ツナ、山本、獄寺、了平の会話から匣ボックス アニマルが他にもいるということを知り、目をキラキラと輝かせる穂乃果。

「せっかくの機会ですから、みなさんに匣ボックス アニマルを紹介してみてもどうでしょう? 将来的にも知る必要があると思いますので。」

「バジル君、その言い方だと穂乃果ちゃんたちがマフィアになるって言ってるみたいなんだけど…」

「え? 違うんですか? リボン殿が「いずれあいつらはボンゴレファミリーに入ることになる」って言っていたのですが…」

「何、勝手なことを言ってるのよ!」

「マフィアにはなりませんよ!」

「そうよ！」

「勝手に話を進めるの止めてもらえー！」

ツナとバジルの会話を聞いて真姫、海未、絵里、にこがりボーンに向かつて叫ぶ。

「そうだぞ。マファイアになるぐらいならボクシングを始めんかー！」

「お兄さん！それも違うー！」

相変わらずボクシングをやらないかと勧誘する了平。そして相変わらずの了平にツッコミをいれるツナ。

そして…

「ナッツ。」

「瓜。」

「次郎、小次郎。」

「我流。」

「アルフィン。」

ツナは大空のリングレオネ・デイ・チエーリ大空ライオンのナッツ、獄寺は嵐のバツクルから嵐ガット・テンペスタ猫の瓜、山本は雨のネックレスから雨ローン・デイ・ネ・デイ・ピオツジャ燕カーネ・デイ・ピオツジャの小次郎と雨カングーロ・デル・セレーノ犬の次郎、了平は晴のバングルから晴カンガルーの我流、バジルはアニマルリングから雨デルファイノ・デイ・ピオツジャイルカデルファイノ・デイ・ピオツジャのアルフィンを出す。

「うわー、すごーい！」

「猫もいるんですね。凜ちゃんが喜びそう。」

「え…どこから出てきたの…？」

「ついていけてないウチらだけやね…」

「もうつつこまいわよ…」

匣ボックスアニマルたちを見てことり、花陽は感激していた。

一方で絵里、希、にこはいきなり出てきた匣ボックスアニマルたちに戸惑ってしまっていた。

「見て！イルカもいるよ！」

「イルカって海の生物だよね…何で空飛んでるの…」

いきなり出てきた匣ボックスアニマルにも全く動じず、目をキラキラと輝かせながらアルフィンを見ていた。

その一方で雪穂はボックス「アニマルに出たことよりも、空を舞っているアルフィンに驚いていた。」

「やっぱりホノ太郎はモフモフしてて気持ちいい…」

「ナッツは前にいたツナ君の猫ちゃんやね。」

「ナッツは猫じゃなくて、ライオンです。」

「「え…?」」

希がナッツをモフモフしている穂乃果を見て、ナッツがライオンだということをツナが説明する。

ライオンと聞いて絵里、希、にこは驚いてしまう。

「この瓜って名前…もつといいのはなかったわけ?」

「うるせえな。十分いい名前だろ。」

「んにゃー!」

「いででで!瓜!ひつかくんじゃねえ!」

「どうやら気にいってないようね…」

瓜に顔をひっかかかっている獄寺を見て、瓜という

名前を気にいっていないということを理解する真姫。

出会って3年は経過するが、今だに瓜は獄寺はなつかないようである。

一方でことりは我流に触れていた。

「うわーかわいい。」

「こ、ことり…危ないですよ…」

「心配いらん、我流はおとなしい性格だ。パンチをしてもすばやく避けるぞ。」

「何をしてるんですか!?!」

了平の言葉にツツコミをいれる海未。

一方で花陽は…

「く、くすぐりたいです。」

「次郎は人懐っこいんだ。きつと古泉のことを気にいったんだと思うぜ。」

ボックス 山本のボックス「アニマルである次郎が甘えてきて、ちよつとだけ戸惑っていた。」

そして亜里沙は…

「亜里沙！危ないよ！」

「大丈夫だよ雪穂。」

「あ、亜里沙！何やってるの!?!」

「凄いですね亜里沙殿。アルフィンをこうも容易く乗りこなすとは。」

雪穂が空を見て驚いていると、亜里沙はアルフィンの背に座り宙を舞っていた。

そんな亜里沙を見て絵里は慌ててしまい、バジルは普通に関心してしまっていた。

こうして穂乃果たちは匣^{ボックス}アニマルたちと戯れたのであった。

「マフィアランドの位置を特定することに成功しました。」

「よし全艦に伝えろ。出撃の準備だど。」

「はっ！」

「見ている、今度こそ必ずマフィアランドを…」

今、邪悪な影が動こうとしていた。

#標的 (ターゲット) 131 「コロネロとラルの関係」

ボックス
「匣 アニマルとしばらく戯れる穂乃果たち。そして花陽は帰ってこない凜を心配していた。」

「凜ちゃん遅いな…大丈夫かあ…?」

「どうだろう…ラルの教育はスパルタだしな…」

未来のラルの教育を受けことのあるツナは、「たぶん無事ではないだろうな…」心の中で思っていた。

「大丈夫だぜコラ。ラルは俺の惚れた女だからな。きつと凜を強くさせるに決まってるぜコラ。」

「ええ!?惚れた女!?!」

「ど、どうということ!?!」

コロネロの言葉に驚く花陽と穂乃果。

するとリボンがコロネロとラルの関係について語る。

「コロネロはCOMSUBINにいた頃、上司であるラルを口説いたんだ。そしてラルとコロネロは上官と生徒でありながら禁断の恋に落ちたんだぞ。」

「…え…?」

リボンから二人の関係を聞いた μ 、sのメンバーと雪穂と亜里沙はもの凄く驚いてしまった。

「そーいや、結婚式の招待状がきてたっけ。」

「…け、結婚!?!」

ツナが虹の代理戦争が終わったあとに、コロネロとラルの結婚式の招待状が来たことを思い出す。

そして結婚という単語を聞いて、再び μ 、sメンバーと雪穂と亜里沙は驚いてしまう。

「俺のところにも招待状きてたぜ。」

「確かコロネロ殿とラル殿が喧嘩して結婚式は延期になったはずだと聞いていますが。」

「しかし延期って聞いてもう4年は経ってるぞ。」

「結局のところどうなってるんだ？」

コロネロとラルの結婚について、山本、バジル、了平、獄寺が言う。

そしてコロネロがラルとに結婚について話す。

「一応仲直りはしたんだが、ラルの奴、結婚の話になると口を聞いてくれないんだ。」

「それはまた…大変だね…」

「だが俺の愛する女はラルだけだ。絶対に結婚して俺がラルを幸せにしてやるぜコラ。」

「せ、積極的だねコロネロ君…」

「イタリアの男ならこれくらい当たり前だぜコラ。」

積極的なコロネロに穂乃果は関心してしまう。

一方でコロネロはこれくらい当然だと言わんばかりの表情で言う。

「ツナ、お前も半分だがイタリア人の血を引いてんだ。ちよつとはコロネロを見習えよな。」

「な、何でそういう話になるんだよ！俺には関係ないだろ！」

リボーンの言葉に顔を真っ赤にしてしまうツナ。

その一方で穂乃果、海未、花陽、ここは…

『俺が好きな女の子は穂乃果ちゃんだけだよ。』

『俺が好きな女の子は海未ちゃんだけだよ。』

『俺の好きなのは女の子は花陽ちゃんだけだよ。』

『俺が好きな女性はにこさんだけです。』

「(ツ、ツナ君の積極的な姿…!!／／／)」

「(わ、私はまたこのようなことを…!?!?!／／／)」

「(ツナさんが…!!ツナさんが…!?!?!／／／)」

「(な、何よ!?!積極的になったからっていつて別に…!?!／／／)」

ツナが積極的になった姿を想像して、顔を赤くしてしまっていた。

一方でことりと真姫は…

『俺が愛してるのはことり、お前だけだ。』

『俺が愛しているのは真姫、お前だけだ。』

「(こんな風に言われたら…!!／＼)」

「(な、何考えているのよ私ったら…!?これじゃまるでこんな風に告白してほしいと言ってるみたいじゃない…!?／＼)」

ことりと真姫はツナが超ハイパー死ぬ気モードの状態で積極的になった姿を想像して、顔を赤くしてしまっていた。

「ちなみにこれがCOMUSUBINにいた頃のコロネロの写真だぞ。」

「何でお前が持つてるんだコラ!」

リボーンがどこからかCOMSUBINにいた頃のコロネロの写真を取り出す。

リボーンが自分の写真を持っていることについてコロネロがつっこむ。

「これがコロネロ師匠の呪われる前の姿…」

「の、呪い…?」

「すっごいいケメン。」

「ハラショー!」

コロネロのCOMSUBINにいた頃の写真を見て、了平、希、雪穂、絵里、亜里沙が呟く。了平の呪いという言葉に希は少し驚いてしまふ。

すると…

「おい、何だあれ?」

「船艦ですね。」

「こっちに向かってきてるぜ。」

遠い海のほうからファイアランドへたくさんの船艦がやって来るのを、山本、バジル、獄寺が発見する。

3人がそう言うと、全員船艦に注目する。

「あれってまさか…」

「どうやら招かざる客がやってきたらしいな。」

突然現れた船艦を見てツナとリボーンは確信する。

波乱の予感。一体どうなる!?

#標的（ターゲット） 132 「襲撃」

「何よあの船？」

「マフィアランドのイベントか何か？」

突然現れた、たくさんの船艦を見て真姫、穂乃果が言う。

二人の問いにリボーンは険しい表情で答える。

「いや、襲撃だ。」

「！！」「しゅ、襲撃！！」「！！」

襲撃という単語を聞いて、sメンバーと雪穂と亜里沙は驚いてしまう。

「ど、どういうことですか襲撃って!？」

「そうよ！何でマフィアランドが襲撃されるのよ!？」

「このマフィアランドはマフィアが金を出しあつて作られたんじゃないんですか!？」

「このマフィアランドは麻薬に手を出さない善良なマフィアが作つたって言っただろ。だがその一方で、このマフィアランドを面白くないと思つている連中もたくさんいるんだ。」

慌てながら尋ねる海未、にこ、花陽が尋ねるとリボーンが問いに答える。

そして船艦についてるタコの旗のマークを見て獄寺は敵の正体に気づく。

「リボーンさん、やはりあのマークは4年前と同じくカルカツファファミリーの連中ですね。」

「ああ、その通りだな。」

「スカルの奴、まだ懲りていなかったのかコラ。」

敵の正体が元最強の赤ん坊の一人であり、カルカツファファミリーの軍師であり不死身のスタントマンであることを確認する。

「誰？リボーン君の友達？」

「いや俺のパシリだ。」

「やつぱりパシリなんだ…」

穂乃果が尋ねるとリボーンは、何のためらいもなくパシリと言いつ切る。

そして相変わらずスカルをパシリだと言うリボーンにツナは「4年経っても変わらないんだ…」と心の中で思ってしまう。

「だがこのマフィアランドは4年前にスカルが襲撃してから場所を移動したはずだ。どうして

このマフィアランドの場所がわかったんだ？」

「い、移動…?」

「え…まさかマフィアランドの島って動くんですか…?」

「とことん規格外やね…」

リボーンの言葉から、このマフィアランドが動くと知って絵里、雪穂、希は驚いてしまう。

そして船艦がマフィアランドの近くに止まると、拡声器から高い声が聞こえてくる。

『あー、あー。マフィアランドにいる愚かな者たちよ。今からこのマフィアランドは我がカルカツファミリーの物となる。抵抗する者は皆殺しだ、だがおとなしく降伏するなら我がカルカツファミリーの奴隷として生かしておいてやる。どちらか好きなほうを選ぶがいい。どちらも地獄に変わりはないがな、アーハッハッハッハッ!』
拡声器で伝えると、拡声器を手から離さずバカ笑いをするスカル。

そして会話を聞き終えたとリボーンは相棒のレオンを拡声器に変形させると、ドスの効いた声でスカルに向かって喋り始める。

「おいスカル。俺のパシリのクセに襲撃するとはいい度胸じゃねえか。いつからそんな偉くなった?」

『り、リボーン先輩!? な、なぜマフィアランドに!?!』

『G Wを利用して、遊びにきたんだ。文句あんのか?』

『い、いえ…あ、ありません!』

リボーンのドスの効いた声を聞いて、さつき宣戦布告していた時とは態度が変わる。

そしてリボーンとスカルの会話を聞いて…

「リボーン…」

「先輩…?」

「なんかさつきまでと態度が変わったわよ…」

ことり、にこ、絵里は明らかに態度が変わったスカルの声を聞いて複雑な気持ちになる。

『ま、まさかりボーン先輩がいるということは沢田綱吉も…』

「ああ。獄寺も山本も了平もバジルもラルもいるぞ。あと、わかっているだろうがコロネロもいるぞ。」

『な?! 沢田綱吉にその守護者が3人に門外顧問にさらにラルの姐さんまで!』

リボーンからツナたちがいることを聞いて、驚くスカル。

リボーンがいることだけでも予想外なのに、さらにツナたちがいると聞いてスカルは絶望的になってしまう。

『コロネロ先輩は一人ならなんとかかなると思っていたが…』

「それでどうするんだ? さつき抵抗する者は皆殺しにするって言つてたよな。ということとはこれは宣戦布告だと思つていいんだな?」

『え…いや…それは…』

「マフィアランドから大人しく撤退するなら

見逃してやる。だがそれでも戦うっていうなら、てめえも死ぬ覚悟はできてんだろうな?」

『ひいひいひいひい…』

リボーンがさつきよりもさらにドスの効いた声で言うときスカルはリボーンに対する恐怖と精神的に追い詰められて、悲鳴をあげてしまう。

「リ、リボーン君がいつになく怖い…」

「こんなリボーン君、初めて見る…」

「こ、これが世界最強の殺し屋…」

いつもと違いドスを効かせて喋るリボーンに穂乃果、花陽、真姫はリボーンに恐怖してしまう。

そしてスカルが下した決断は…

『えーい！ここまで来て引き下がれるか！これを期にパシリから脱却してやるー！見てろよりボーン！コロネロ！』

「どうやら…」

「やる気みたいだなコラ。」

半分やけになりながら言うスカルの言葉を聞いてリボーンはレオンを銃に変形させる。一方でコロネロは背中にある対戦車ライフルを構える。

今カルカツサファミリーとの戦いが始まろうとしていた。

#標的（ターゲット） 133 「襲撃開始」

カルカツファミリーとの戦闘となったツナたち。

そしてコロネロは相棒のファルコに持ちあげられて空中で対戦車ライフルを構えると、カルカツファミリーの船艦に戦車ライフルの標準を向けると5、6発弾丸を発射する。

「開戦の合図だぜコラ！SHO^{ショット}T！」

ドガアーレン！

「やっぱすげえー！」

「さすがコロネロ師匠！」

「おー！格好いいコロネロ君！」

コロネロの弾がカルカツファミリーの船艦に直撃したのを見てツナはコロネロの相変わらずの強さに驚くツナ。

その一方で平と穂乃果はコロネロの強さに感激していた。

だが船艦は沈むどころか、傷一つ、ついていなかった。

「何!？」

『この船艦^{ふね}は以前より強化してあるんだ。そんなナマクラ弾なぞ効くか。』

「だったら…SHO^{ショット}T！」

コロネロがもう一度、対戦車ライフルを構えると今度は1発だけ発射する。

そして発射された弾丸は…

「え…ぎゃー！ー！ー！ー！ー！」

船艦ではなく甲板にいたスカルにおもいつきり直撃し、スカルの悲鳴がマファイアランド中に響く。

「直でいったー！」

「鬼ね…」

「これ死んだんじゃ…」

船艦ではなくおもいつきりスカルを殺りにいったコロネロを見てツナ、絵里、海未は驚いてしまう。

だが不死の肉体を持つスカルはすぐに立ちあがり拡声器を拾って叫ぶ。

『対戦車ライフルで人を撃つか普通!?それでも軍人なのか!』

「襲撃して来た奴の言うセリフかコラ!それにお前に軍人がどうこう言われたくないぜコラ!」

スカルの発言にツツコミをいれるコロネロ。

確かにいきなり襲撃しに来ておいて、何を言っているんだという話である。

「よく生きてるよね…」

「普通は死んでると思うのですが…」

「なんか可哀想です…」

ことり、海未、花陽が対戦車ライフルで撃たれたスカルに同情する。「俺は今よりも強力なライフルを取ってくるぜ。あのふざけた船艦を沈めてやるぜコラ!」

そう言うところコロネロは相棒のファルコと共に空に飛び立っていく。

それと同時に警報が鳴り、爆発音が響き始める。どうやらカルカツサファミリーが船艦から攻撃を始めたようである。

「とりあえずここから避難するぞ。今からトンネルを通ってマフィアランドの象徴のマフィア城に向かうぞ。そこに他のファミリーたちも避難しているはずだからな。」

そう言うところ全員黙って首を縦に振り、リボーンの指示に従う。

ツナ、獄寺、山本、バジルは匣アニマルを戻す。

そしてリボーンの先導のもと、トンネルを通ってマフィア城に向かう。

「あーあ…これじゃ4年前と同じだよ…」

「え？4年前も襲撃してきたの？」

「うん…まあ…というか何でこういう時に襲撃してくるのかなあ…」

走りながら嘆くツナに穂乃果が尋ねると、ツナはため息をつきながら答える。

すると花陽は凜のことを心配する。

「凜ちゃん大丈夫かな…」

「心配するな。凜にはラルがついてるからな。」

「ラルは強いから大丈夫だよ。」

「きつと星空の奴を護ってくれてるぜ。」

凜のことを指示する花陽にリボン、ツナ、山本が言う。3人の言葉に花陽は少しだけ安心するが、それでも不安も隠せない様子である。

「あの…私たちはどうすればいいんでしょうか…？」

「まさか私たちも戦うんですか？」

「その必要はねえぞ。だがその代わりお前ら非戦闘員には、後方で飯を作ってもらおう大事な役目があるぞ。」

亜里沙と雪穂が尋ねると、リボンが戦わない人の役目を教える。

「なによその役目…戦うよりはいいけど…」

「なんか気が抜けるね…」

思っていたより普通の役目だったので、にこと希は複雑な気分になっってしまう。

「大丈夫だよ！とびっきりの美味しい料理を作っただけだから任せて！」

「お？そりや楽しみだな。」

こんな時でもマイペースな穂乃果と山本。

そしてこの二人の会話を聞いてリボンが言う。

「なら絶対に勝たなきゃならねーな。ツナ、覚悟はできてるんだろうな？」

「う、うん！」

リボンが尋ねるとツナは若干、不安になりながらも返事をする。

「大丈夫つすよ十代目！前と違って俺たちは強くなっただんですから！」

「そうだぜツナ！」

「うむ。極限に任せておけ。」

「拙者たちの力、見せてやりましょう！」

「（そうだよね…今は俺には仲間がいる。それに穂乃果ちゃんたちを護ってあげなきゃ！）」

獄寺、山本、了平、バジルの言葉を聞いてツナは覚悟を決める。

そしてトンネルの出口が見え、そこを抜けると大きな城が見えてくる。

「これがマフィアランドの象徴シンボルのマフィア城だ。」

「すごい！」

「大きいですね…」

「本当に城だ…」

「ハラショー…」

マフィアランドの象徴シンボルであるマフィア城を見て驚く、穂乃果、海未、ことり、絵里。

他のメンバーも口を開けたまま、ただただマフィア城を見つめて固まっていた。

とその時…

ガシャン！

ガシャンという音と共にマフィア城の入り口や窓のシャッターが閉まっていき、マフィア城の中に入れなくなってしまう。

一体これが意味することとは!?

#標的（ターゲット） 134 「最強の助っ人」

マフィア城の扉や窓に次々にシャッターが閉まっていき、マフィア城の中に入れなくなってしまうツナたち。

「な、何だこれは！」

「ここから出せー！」

「開けろー！」

マフィア城の中からシャッターを叩く音や、城中にいるマフィアたちの声が聞こえてくる。

この光景を見てリボーンは舌打ちする。

「ちっ！スカルの野郎、考えやがったな。」

「どういうことつすかりボーンさん？」

「おそらく襲撃すれば、このマフィアランドにいるマフィアたちはこのマフィア城に集まることを予想したんだろう。それで警備システムを乗っ取って、マフィアたちをこの城に閉じ込めて戦力を減らしやがったな。」

「そ、そんな…」

獄寺が尋ねると、リボーンはスカルの考えた策略を読む。そしてリボーンの言葉を聞いて、ツナは不安な表情になる。

そしてツナたちを武器を持ち紫色の服を着た人たちがツナたちを囲む。

そして…

「その通りだ。どうだリボーン？俺の策略は？」

同じく紫色の服を着て、ヘルメットを被り、リボーンやコロネロたちと背丈が同じぐらいの赤ん坊が現れる。

そしてその後ろにはスカルの相棒である巨大鎧ダコが現れる。

「うわー！大きいタコ！」

「夢です！これは夢に決まっています！」

「ハラショー！」

「ス、スピリチュアルやね……」

「もうそういうレベルは越えてるわよ……」

スカルの巨大鎧ダコを見て穂乃果は珍しそうな表情で見つめる。海未は巨大鎧ダコを見てこれは夢だと自分がいい聞かせ、ここは希のスピリチュアル発言にツツコミをいれる。

「やっぱりまだ食ってなかったのかそのタコ。いい加減、刺身にして食べたらうまいのにな。というわけでどうだスカル、一杯やらねえか。」

「馬鹿を言うな！相変わらずコケにしやがって！」

リボンが人さし指と親指でアルファベットのCの形を作りながら言うリボンに、スカルがツツコミをいれる。

「やっぱりタコと言ったらタコ焼きだよね！」

「俺はやっぱりタコのにぎり寿司だな。」

「私は酢ダコかな。」

「私もそうですね。」

「俺は極限にタコの唐揚げだな。」

「拙者はタコ飯です。」

「あ、私も。」

「ウチはタコの煮物やね。」

「私はタコのカルパッチョかしら。」

「亜里沙も！」

「私はタコのおでん。」

「私はタコ入りのパスタね。」

「私はタコのアヒージョ。」

「(なんか話が変わってきるんですけどー!?)」

なぜかここで穂乃果、山本、ことり、海未、了平、バジル、花陽、希、絵里、亜里沙、雪穂、にこ、真姫、がそれぞれ好きなタコ料理を発表していく。

突然好きなタコ料理を発表し始めたことにツナは驚いてしまう。

「おいお前ら！俺のタコを食う話で盛り上がるんじゃない！」

「だって美味しそうだし…」

「ヨダレを垂らすな！それに俺は襲撃に来てるんだぞ！し・ゆ・う・げ・き・に！」

ヨダレを垂らしている穂乃果にスカルは初対面であるにも関わらず、ツツコミをいれてしまう。

そしてスカルは一旦、呼吸を整えると

「まあいい…とにかく今回はマフィアランドが目障りだと思っている勢力を吸収し、船艦も最新鋭の物を揃え、死ぬ気の炎を使える戦闘員も揃えた。今度こそマフィアランドを乗っ取らせてもらうからな。」

スカルがそう言うのと、スカルのまわりにいた戦闘員が武器を構える、ところどころ武器に死ぬ気の炎を灯す戦闘員もいた。

そしてスカルの巨大鎧ダコの足が伸び…

「きゃー！」

絵里が捕らえられてしまう。

「絵里ちゃん！」

「エリチ！」

「絵里さん！」

「お姉ちゃん！」

「亜里沙！ダメ！」

スカルの巨大鎧ダコに捕らえられた絵里を見てツナ、希、穂乃果が叫ぶ。

亜里沙が捕らえられた絵里を助けに行こうとするが、雪穂がすばやく止める。

「野郎！」

「卑怯な！」

「正々堂々、勝負せんか！」

絵里を捕らえられたのを見て獄寺はダイナマイトを構える、バジルは三角定規のような形をした武器であるメタルエッジを構え、了平はボクシングの構えながら叫ぶ。

「後は任せたぞ。」

「はっ！」

スカルが部下にそう言うと、スカルは煙幕弾を地面に叩きつけると辺りを煙幕を充満する。

そして煙幕が晴れると、スカルと巨大鎧ダコだけがいなくなっていた。

「ちっ！スカルの奴、絵里を拐っていきやがった。最所からそのつもりだったのか。」

「どうしようお姉ちゃんが！」

「早く助けに行かないと！」

舌打ちしながらリボーンが言う。亜里沙とツナは絵里が拐っていたことに慌ててしまう。

「ここから先には行かせんぞ！」

スカルの部下たちがスカルのところに行かせまいと通せんぼする。

「（こんな奴らツナたちなら余裕で倒せるが、穂乃果たちを護りながらだとちよつと厄介だな……）」

リボーンが今の状況を冷静に分析する。

その時であった。

ぼうじゃれっば
「暴蛇烈覇！」

「ぎやーーーーー！」

突如、蛇の模様が彫られた鉄球が烈風が生み出しながら、もの凄い勢いで飛んでくるとスカルの部下たちを吹っ飛ばしていく。

「あ、あの鉄球って……」

「お、おい今のって……」

「ああ、間違いないないぜ……」

飛んできた鉄球を見てツナ、山本、獄寺が確信する。

「やれやれこんなところでまた会うとはな。」

ボンゴレ。」

「ランチアさん！」

最強の男、来たる！

#標的（ターゲット） 135 「新たな力」

「元気そうだなボンゴレ。」

ツナたちのところへ現れたのは、北イタリア最強と恐れられ、ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーとの戦いでツナたちを救ってくれたランチアであった。

「ランチアさんも！でもどうしてここに？」

「なに、旅費稼ぎにマフィアのランド島の護衛

として働いているだけだ。」

まさかのランチアと再開にツナは表情を明るくする。

「ラ、ランチアだと!？」

「ランチアってあの!？」

「な、なぜランチアちゃんがこんなところに!？」

一方でカルカツファミリーのメンバーはランチアという単語を聞いて動揺し、ざわつき始める。

「だ、誰なの…？あの人もツナの知り合い…？」

「なんか敵が急に動揺し始めましたけど…」

「そんなに凄い人なの…？」

「奴の名はランチア。かつて北イタリア最強と恐れられた男だ。」

ざわつき始めたカルカツファミリーの様子を見て真姫、海未、穂乃果がそう言うトリボンがランチアのことを説明する。

「せっかくの再開だが、話は後だ。まずはこいつらをどうにかしないと。」

そう言うランチアは服のポケットの手を入れると、中から動物の模様が彫られたリングを取り出す。

「あ、あれは—」

「アニマルリング!？」

「なんであいつが!？」

アニマルリングを取り出したランチアにバジル、ツナ、獄寺が驚いてしまう。

驚いた様子の3人を見てランチアが説明する。

「旅の途中でいつの間にかこのリングと1枚の紙が俺の傍に置いてあってな。その手紙は未来のお前が俺に宛てた手紙で、そこにリングの使い方も書いてあってな。」

「え!? 未来から!?!」

未来から届いたと聞いてツナは驚く。

そしてランチアのアニマルリングに雷の炎が灯る。リングが輝くと、そこからランチアの匣ボックスアニマルが出てくる。

「ウォーン!」

遠吠えと共に現れたのは雷の炎を纏った黒い狼であった。

「雷の炎を纏った狼…」

「ああ。ルーボ・フルミネ雷 狼のガルムだ。」

いくぞガルム。」

そう言うとランチアは右手で自身の武器である蛇鋼球じやこうきうちゅうを持って軽々と振り回す。そして蛇鋼球に雷の死ぬ気の炎を纏わせる。

「な、なんか凄い…」

「というかあの鉄球を片手で…」

「どんだけ力があるのよ…」

ランチアの蛇鋼球を振り回す姿を見てことり、雪穂、にこは驚いてしまう。

するとカルカツファミリーの一人が背後から武器を持って花陽を狙ってやってくる。

「女を人質に取れば奴らも!」

「え…」

「いかん! 逃げろ!」

「花陽ちゃん!」

花陽を狙う敵を見て叫ぶ了平、ツナ。もうダメだと思った花陽は目をつぶってしまう。

だがその時…

「かよちんに手を出すにやー!」

「ぐわあ!」

なんと凜がやって来て、カルカツサファミリーの一人の顔面に見事な真空飛び膝蹴りを決めると、敵を吹っ飛ばす。

「凜ちゃん!?!」

「かよちん、大丈夫かにや?」

「う、うん…」

「後は凜に任せるにや! あんな奴ら凜が全員、倒してやるにや!」

「え…う、うん…」

突如、戦う構えを取る凜を見て花陽は戸惑ってしまう。

もちろん花陽だけでなく、他のメンバーは戸惑ってしまう。

「えー!?! どうなってるの!?! 凜ちゃんがなんかたくましくなってるんだけど!?!」

突如たくましくなっている凜を見てツナは驚きの声をあげる。

すると凜と一緒にやって来たラルが説明する。

「俺は凜が山本に匹敵するほどの殺し屋^{ヒットマン}としての素質があると聞いてとりあえず、サバットの基礎を教えてやったんだが、すぐに習得してな。それでサンボ、空手、ムエタイ、ジークンドー、テコンドー、CQCなどの体術を色々教えてやったんだが、それも全て習得していったな…」

「すげえ凜ちゃん!」

「マフィア^{マフィア}城に来るまでに敵とも遭遇したが

凜は戦うたびに技のキレや感覚が鋭くなって、戦いの中で成長していったんだ。正直、ここまでとは思わなかったぞ俺は…CED^ウDEF^チに欲しいくらいだ。」

「…」

多少、驚いたラルの説明を聞いてツナは最早、何も言うことができなかつたのだった。

#標的（ターゲット） 136 「格闘組の戦い」

ランチア、ラル、凜の登場により戦力が上がったツナたちは。戦闘員は穂乃果たちを護るような配置につく。

そしてバジルが拐われた絵里のことについて話す。

「沢田殿！早くここを抜けて絵里殿を！」

「そうだ！早くしないと絵里さんが！」

「絵里ちゃんに何かあったのかにや？」

ツナとバジルの会話を聞いて凜が尋ねる。

すると絵里のことについてリボーンが説明する。

「絵里をスカルの野郎が拐いやがってな。」

「え!? そうなのかにや!？」

リボーンから絵里が拐われたことを聞いて凜は驚く。凜も別の場所にはいたが、スカルとリボーンの拡声器で喋っているのを聞いていたので、スカルが敵であるということは理解している。

「なら沢田、先に行け。ここは俺と凜でなんとかする。」

「凜だって強くなったにや！心配はいらないにや！」

「俺も残ろう。ここにいるお前の仲間のことなら心配するな。必ず護ってやる。」

「だったら俺もここに残るぞ！極限に行つてこい沢田！」

ラル、凜、ランチア、了平の格闘組がここに残り穂乃果たちを護ることを決心する。

「ラル、凜ちゃん、ランチアさん、お兄さん…ありがとうございます！」

「行こう！みんな！」

「はい十代目！」

「いこうぜツナ。」

「はい沢田殿！」

ツナがそう言うのと獄寺、山本、バジルが元気よく返事をする。

「待ってて亜里沙ちゃん。絶対に絵里さんを助けて戻ってくるから。」

「は、はい…」

亜里沙にツナが絵里を助けて戻ってくるって言う。

そしてツナ、獄寺、山本、バジル、リボーンは絵里の救出に向かう。

「追えー！逃がすなー！」

「ボンゴレの元には行かせん！らいじゃれっば雷蛇烈覇！」

「ぎゃー！ー！」

ランチアは即座に雷の炎を纏った蛇鋼球を両手で弾き飛ばし、ツナたちを追おうとする敵を一気に吹っ飛ばす。さらに雷蛇烈覇によって発生した烈風で雷の炎が辺に飛び散り、他の敵にもダメージが加わる。

「凄い一撃だにや！」

「余所見をするな凜。俺たちいくぞ！」

「了解だにや！」

「よし！俺も行くぞ！」

ランチアが雷蛇烈覇を放ったのに続いて凜、ラル、了平も続いていく。

そしてランチアは雷ルーボ・フルミネ狼のガルムに指示する。

「ガルム。こいつらにバリアを張ってやってくれ。」

「オオーン！」

ガルムが遠吠えすると、穂乃果たちのまわりに雷の炎によってできたドーム場のバリアができる。

「こ、これは一体…？」

「バリアだ。この中にいれば弾丸が当たろうと全て防いでくれる。そのかわりこのバリアに触れれば感電するから気をつけろ。」

「あ、ありがとうございます。」

「礼には及ばん。お前たちはボンゴレの大切な仲間だからな。これくらい当然だ。」

海未がランチアにお礼を言う。

そして海未の言葉にランチアは少しだけ笑うと、ガルムと共に敵に

つつこんでいく。

「極限連射！」
ラッシュ

「遅い！」

「隙だらけだ！」

「にやにやにやにやにやにや！」

「ワオーン！」

了平とランチアはラッシュで次々と敵を倒していき、ラルと凜は敵の動きをかるやかに避け、敵の急所にパンチやキックを喰らわせ一撃で倒していき、ガラムは回転しながら体当たりしていき敵を感電させていく。

「す、すごい…！」

「あの人数相手にたった4人で…！」

「というか凜も凄すぎよ…あの短時間で何があつたのよ…！」

「そういえばさつき真空飛び膝蹴りしましたよね…！」

ことりと花陽は4人の戦闘力に驚き、にこと雪穂は明らかにパワーアップしている凜に驚いてしまっていた。

一方で穂乃果はツナたちのことを心配していた…

「ツナ君たちも大丈夫だよね…？」

「大丈夫に決まってるじゃない。他の3人は知らないけど、ツナは戦ったら強いんだから。負けるはずがないわ。」

不安そうな表情で言う穂乃果に、超ハイパー死ぬ気モードになったツナの強さを知っている真姫が言う。そして希が尋ねる。

「何で真姫ちゃんそんなこと知ってるん？もしかしてツナ君の強さを見たことがあるん？」

「べ、別に！／／／みんながツナのことを信じているから、そう思っただけよ！／／／」

希の問い真姫は顔を赤くして焦ってしまう。

真姫の反応を見て穂乃果、海未、花陽、にこはジト目で真姫を見る。

「…」「本当…？」「…」

「な、何よその目は…！／／／」

こんな状況にも関わらずツナのことになると態度が変わる4人。

一方でことりは…

「(真姫ちゃん、もしかして…)」

さきほどの真姫の言葉で、ツナの超^{ハイパー}死ぬ気モードのを見たことがあるということを確認する。

そして了平、ランチア、ラル、凜の戦いに決着がつく。

「極限!」

「これで終わりだ!」

「はあ!」

「にやちや!」

それぞれの4人のパンチが敵の腹部に決まり、気絶してしまう。
こうしてマフィア城前の決戦は幕を閉じた。

#標的（ターゲット） 137 「秘策」

一方でツナ、獄寺、山本、バジルはスカルに拐われた絵里救出に向かっていた。

「絵里さん無事かな…」

「さあな。とにかく今は海岸に向かうぞ。おそらくスカルの海岸から離れた場所に船艦があるはずだ。そこにも絵里がいるはずだ。」
「うん。」

リボーンの言葉にツナは真剣な眼差しで返事をするツナ。
するとリボーンが山本に話しかける。

「山本。」

「何だ小僧?」

「時雨金時の変わりだ。受け取れ。」

「お、おいこれって…」

山本の愛刀である時雨金時がない為、リボーンが山本に野球のバットを投げると、山本はそれを受け取る。

山本が受け取ったのはヘッドスピード300kmを越えると日本刀に変形するバット、通称山本のバットであった。

「サンキュー小僧。」

「いつから持ってたんだよ…」

山本がリボーンにお礼を言う。

そしてあんな大きなバットを今の今まで誰にも気づかれずに持っていたことにツナは驚く。

すると4人の前にカルカツファミリーの戦闘員が現れる。

「スカル様のところには行せんぞ!」

「なんとしてでも、ここで食い止めろ!」

「どうやら、簡単には行かせてもらえそうもないようですね!」

「だが突破しねえとな。」

敵が現れるとバジルは武器であるメタルエッジを構え、山本はバジルを日本刀に変形させると二人とも自分の武器に雨の死ぬ気の炎を灯す。

そして獄寺が大量のダイナマイトを地面に落とすと、ダイナマイトから煙幕が発生する。

「こ、これは!？」

「煙幕か!？」

「し、視界が!」

煙幕の発生に敵は視界が遮られた動揺し始める。

「獄寺君。これって…」

「十代目。先に行ってください。道は俺たちが作ります。」

「え…でも…」

「こんな奴らさっさと蹴散らして、また遊ぼうぜ。」

「この野球馬鹿!俺のセリフを取るんじゃないぞ!」

「拙者たちは大丈夫なので。沢田殿は絵里殿を早く救出しにいつてく
ださい。」

言いたいセリフを山本に取られて怒る獄寺。バジルは冷静にツナに言う。

「みんな…ありがとう!」

「ここは任せたぞお前ら。」

ツナとりボーンは煙幕の中、海岸に向かう。

そして煙幕が晴れ、ようやく辺りが見えるようになってくる。

「ようやく視界が…」

「アルフィン!」

「ロケットボムverX!」

「時雨蒼燕流特式十の型スコントロ・デイ・ローン・デイネ 燕 特 攻!」

「ぎゃー!」

バジルのアルフィンが雨の炎のできた鎮静弾を撃ち、鎮静によって相手の動きが止まったらとところを形態変化カンビチ・フォルマした獄寺と山本がたたみかける。

「では拙者もアルフィン！形態変化！」カンピオ・フォルマ

今度はバジルが形態変化カンピオ・フォルマさせる。するとアルフィンがバジルのメタルエッジと合体する。

トウランチャン・ピオツチャ
「雨 十手。」

バジルのメタルエッジが十手に変化し、衣装も羽織にかわり、それは江戸時代にいた同心の格好となる。

「ここで全員、倒させて頂きます。」

「言い方だけじゃなくて、とうとう格好まで古くなったな…」

「ハハ！やっぱ面白いなバジルつて。」

バジルの格好を見て獄寺はちよつと複雑な気持ちになり、山本は笑いながら言う。

「カルカツサファミリーの名に懸けて奴らを止めろー！」

「やってみな！ボンゴレおれたちの力を見せてやる！」

獄寺、山本、バジルが敵を食い止めているその頃、ツナとリボーンは海岸につくことができた。

「あれだぞツナ。あの船艦に絵里がいるはずだ。」

「よし！行こう！」

遠くにいる船艦をリボーンが発見すると、ツナは27と書かれた手袋をはめる。

だがここでリボーンが…

「待てツナ。」

「な、何だよりボーン！早く行かないと！」

「んなことはわかってる。だがあの船艦には死ぬ気の炎を関知するレーダーがついてるはずだ。ステルスのない今じゃ敵がどんな手を使うかわからねからな。」

「じゃあどうするんだよ！」

「その為にこの4年で見つけた、死ぬ気の零地点突破が見つけたもう一つの可能性があるじゃねえか。」

「それって…もしかして…」

「ああ。アレを使うぞツナ。」

#標的（ターゲット） 138 「新たな境地」

一方でスカルの船艦に捕らわれた絵里は…

「ちよつと離しなさいよ！」

「う、うるさいぞ！大人しくしてろ！」

「大人しくできるわけないでしょ！捕まえられてるのよ！」

スカルの巨大鎧タコに捕まえられながらも、絵里はたじろぐこともなくスカルに文句を言う。

「それに何なのよ！リボン君やコロネロ君を見返すって言うて、あなたは結局戦わないわけ！」

「戦えるわけないだろ！リボンあんなとコロネロ化物と！さらに沢田綱吉ボングレがいるんだぞ！正攻法でやって勝てるわけがないだろ！」

「ボングレ：ツナ君が…？穂乃果たちが確かに誘拐犯からことを救ったって聞いてたけど…」

絵里にはスカルがなぜツナを恐れているのかわからなかった。誘拐犯からことを救っていたと聞いていたとはいえ、正直ツナがそこまで強いとは思えなかった。

そう絵里が思った時…

ドボーン

突如スカルと絵里の目の前に大きな水しぶきが上がる。

水しぶきと共に、海中から全身が水に濡れたツナが飛び出し甲板に現れる。

「ツ、ツナ君…？」

「な、なぜだ!?この船艦ふねには死ぬ気の炎を

関知するレーダーがあるはず!?それにお前は本当にボングレなのか!？」

絵里とスカルは突如現れたツナに驚く。

そしていつもと違うツナを見てスカルは驚いていた。ツナはいつ

もの超^{ハイパー}死ぬ気モードと違い、額とボンゴレギアに大空属性をオレンジ色の炎は灯っておらず、銀色の冷気が灯り、瞳の色も銀色にかわっていた。

「大丈夫か絵里…？」

「え!?!ええ…」

ツナに呼び捨てにされてことりや真姫の時と同じく戸惑ってしまいう絵里。

「お、おい！お前の属性は大空のはずだろ！なのにお前のその姿は何だ!?!」

「…」

そしてスカルの言葉を聞いてツナは目を瞑り、思い出す。

それは遡ること4年前…

—並盛山—

「いいかつな。これから死ぬ気の到達点の修行だけじゃねえ、新しい新技も開発するぞ。」

「何でそうなるんだよ！そもそも修行するなんて一言も言っていないだろ！」

「将来ボンゴレのボスになるんだ。修行は必要だぞ。」

「だからマフィアのボスにならないって言ってるだろ！」

「仮にお前がマフィアのボスにならなくてもだ。」

「え…?」

「今ボンゴレファミリーの正当後継者はお前しかいねえんだ。その肩書きがある以上、たとへお前は望まなくてもお前を狙う奴はたくさんいる。それにいくらバミューダを倒したとはいっても、死ぬ^{きつ}気^か弾^かがな^けくちや死ぬ気の到達点になれねえようじゃダメだ。」

「でもバミューダは…」

「ああ、よっぽどのがない限りバミューダと戦うことはないだろうな。だがバミューダ以上の敵が現れないっていうことも絶対ないとは言い切れねえ。そんな敵が現れたらどうすんだお前？」

「どうするって…」

「仲間を失うことになってもいいのか？」

「嫌に決まってるだろ！」

「その為の修行だ。だから修行はこれから必ず行うぞ。」

「わ、わかったよ…でも修行っていつても何をするんだよ…？」

「まずは超^{ハイパー}死ぬ気モードになれ。そして

死ぬ気の零地点突破をするんだ。」

「死ぬ気の零地点突破？改じやなくて？」

「ああ、死ぬ気の零地点突破でお前の新たな可能性を引き出す。お前が初代エディションを^{フェイス}目指そうとして、死ぬ気の零地点突破改というお前専用の技を導き出したようにな。」

そう言うとりボーンはレオンを銃に変形させる。

そしてツナを^{ハイパー}超死ぬ気モードにさせる特殊弾である小言弾をツナの額にぶちこむ。

そして超^{ハイパー}死ぬ気モードになったツナは目を閉じて、両手の親指と人さし指と中指をくっつけて三角形を作り集中する。そして額の死ぬ気の炎が不規則にノッキングし始める。

「いいぞツナ。その調子だぞ。」

こうしてしばらく同じ修行が続いていき…

「!？」

「どうやら見つけたらしいな。」

ツナの表情を見てリボーンは不敵な笑みを浮かべる。

リボーンはツナの超直感が何かを見つけたのだということを確認する。

そして場面は再びスカルの船艦。

「…」

「おい黙ってないで答えろ！」

4年前の修行を思い出して黙っているツナにスカルがしびれを切らして叫ぶ。

「超^{ハイパー}マイナスモードだ。」

「リ、リボーン先輩!？」

いつの間にか船艦に乗り込んでいたりボーンを見てスカルが驚く。そしてリボーンを見た恐怖したのか呼び方がリボーン先輩に戻っていた。

「この4年でツナが見つけた新たな境地だ。超^{ハイパー}死ぬ気モードとは逆の状態にあるモードだ。この

状態になると死ぬ気の炎が消えて、冷気が灯るようになるんだ。だから死ぬ気の炎を閔知するレーザーに反応がなかったんだ。」

「そ、そんなことまでできるようになっていたのか!？」

「それだけじゃねえぞ。今のツナは死ぬ^{きっ}気^{かけ}弾^なしでも死ぬ気の到達点の状態になれる。」

「な!？」

ツナの力をリボーンから聞いてスカルは驚いてしまう。

そして今の今まで黙っていたツナが口を開く。

「スカル、できればお前とは戦いたくなかった。」

だが…」

するとツナの額とボンゴレギアは冷気が消え、大空属性のオレンジの炎が灯る。

「目の前で大切な友達を失ったら死んでも死にきれねえ！」

#標的（ターゲット） 139 「護りながらの戦い」

そしてツナの額とボンゴレギアに大空の死ぬ気の炎が灯ると、スカルの部下たちがやって来ると死ぬ気の炎を纏った武器を持ってやってくる。

「スカル様大丈夫ですか!？」

「スカル様を護れ!」

「生きて帰れると思うな!」

「ま、待てお前ら!」

スカルの制止も聞かずスカルの部下の何人かが、武器から嵐属性の死ぬ気の炎を発射すると、嵐属性の死ぬ気の炎がツナに直撃する。

「ツナ君!」

死ぬ気の炎が直撃したのを見て絵里が叫ぶ。

するとスカルの部下たちが放った死ぬ気の炎が球体の形になる。そして球体がだんだんと小さくなっていくと、ツナは右手の手の平と左手の平の甲を組み合わせて四角形を作っており、その四角形の部分に嵐属性の死ぬ気の炎が吸収されていく。

「死ぬ気の零地点突破改。」

そう言うとツナの額とボンゴレギアに灯っている大空の死ぬ気の炎が大きくなっていく。

「ほ、炎が!？」

「吸収された!？」

「今度はこっちの番だ。」

スカルの部下たちが驚くと、ツナはボンゴレギアに灯っている大空の死ぬ気の炎を逆噴射させ目にも止まらぬ超高速移動で一瞬でスカルの部下たちを気絶させる。

「さて次は絵里を…」

ツナがスカルの巨大鎧タコに捕らわれた絵里を救おうと考えたその時、スカルの巨大鎧タコが絵里を捕らえている以外の足全てを使って攻撃してくる。

だが…

「遅い。」

ツナは縦横無尽に繰り出される巨大鎧タコの攻撃をその場から一歩も動くことなく、全て紙一重でかわす。

そして巨大鎧タコの縦横無尽の攻撃の一瞬の隙について死ぬ気の炎を逆噴射させ、額の部分に高速移動すると…

「はあー！」

「!?」

巨大鎧タコの額パンチを繰り出すと、巨大鎧タコは気絶する。

「きゃー！」

巨大鎧タコのが気絶したことによって、絵里を捕らえていた足の力が弱まり、絵里が落ちてしまう。

するとツナは絵里が落ちるであろう落下点に即座に移動すると、落ちてきた絵里をキャッチする。

「大丈夫か絵里？」

「え…ええ…本当にツナ君なの？額が燃えてるけど…」

「ああ。それよりすまない、助けに来るのが遅くなってしまった。」

ツナが大丈夫かと尋ねると超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナの姿に戸惑いながらも、絵里は答える。

するとさつきまでいたスカルがどこにもいなくなっていた。

「い、今のうちに…」

「どこに行くつもりだスカル？」

「リ、リボン先輩!？」

泳いで逃げようとしたスカルだったが、リボンに見つかってしまい、体を震わせる。

するとレオンを3と書かれたハンマーに変形させると、ドスの効いた声で言う。

「てめえも死ぬ覚悟はできてるんだろうな？って俺が言ったことを忘れてねえだろうなスカル？」

「あああ…いや…その！」

「歯を食いしばりやがれスカル。」

「いや！まだ覚悟が…ぎゃーーーーー！！」

言い訳してなんとか逃げようとしたスカルだが、そんなことを無視してリボーンはハンマーをスカルに容赦なく何度も降り下ろす。そしてスカルの絶叫が海上に響く。

「相変わらず酷い…」

「容赦なしね…」

リボーンの無慈悲な制裁を見てツナと絵里は、少しだけ恐怖してしまふ。

するとスカルの悲鳴を聞きつけたのか、他の船艦がツナたちのいる船艦に近づいてくる。

そして他の船艦から橋がかかり、橋を渡って援軍がやってくる。

「スカル様！」

「よくもスカル様を！」

リボーンの横でヘルメットが割れ、タンコブがいくつもできているスカルを見て、部下たちが怒りを露にしながら武器を構える。

「援軍か…厄介だな。」

「ど、どうするの…？」

「安心しろ絵里。お前には指一本触れさせない。俺が絶対にお前を護る。」

「え…!?!/~/」

ツナの心強い言葉に絵里は少しだけ顔を赤くする。

そして敵がいつきに刀でツナを斬りかかってこようとしていた。

「しつかり捕まってる。」

「は、はい…!」

ツナがそう言うと、絵里をお姫様抱っこしたまま敵の攻撃をかわしていき、蹴りでスカルの部下たちを次々と海へ落としていく。

「撃て！撃て！」

今度は死ぬ気の炎のレーザーが飛んでくる。だがツナはそれもなくかわしていき、敵と武器を蹴りで海に落としていく。

そんな攻防が続く中、絵里は…

「（お姫さま抱っこしながら私のことを護って、しかもあんな言葉まで

…こんなことされたら誰だって惚れちゃうじゃない…！／＼／＼」
こんな状況ではあるが、自分で心臓の鼓動が速くなつていくことに
気づいていた。

#標的（ターゲット） 140 「最後の一人」

そして船艦での攻防戦が続いていく。ツナは絵里に傷一つつけることなく、スカルの部下を次々に海へと落としていく。

がツナはスカルの部下たちに囲まれてしまう。

「包围したぞー！」

「これでもう逃げきれられないぞー！」

「覚悟しろボンゴレー！」

スカルの部下たちが武器を構えながら叫ぶ。

そしてツナは絵里に言う。

「すまない絵里。一瞬で終わらせるから我慢してくれ。」

「終わらせる？ どういう…きやー！」

ツナの言っていることの意味がわからず、尋ねようとした絵里だが、ツナはおもいつきり絵里を上に向けて投げる。

「投げただと!？」

「はあー！」

突然ツナが絵里を投げたことにスカルの部下たちは驚いてしまう。その驚いた一瞬の隙について、ツナは大空の死ぬ気の炎を逆噴射させ、高速移動して残りの敵を全員を気絶させる。

そして元いた場所に戻ると、ツナは落ちてきた絵里をキャッチする。

「よし…なんとかうまくいったな。」

「うまくいったじゃないわよ！いきなり空中に投げ飛ばすなんて聞いてないわよー！」

「す、すまない…正直、他に方法がなくて…」

「ま、まあ…いいわ…／＼／＼助けてくれてありがとうツナ君…／＼／＼」

「気にするな。それよりどうした絵里？顔が赤いぞ？」

「き、気のせいよ!?!／＼／＼」

「そ、そうか…?」

顔を赤くしながらお礼を言う絵里に違和感を覚えるツナだが、何でもない絵里が言ったので気にしないようにした。

するとリボーンが表情をニヤニヤさせながら、二人のもとにやって来る。

「イチヤイチャしてるところ悪いんだが。」

「イチヤイチャしてない（わよ!）」

リボーンに言われて顔を真っ赤にさせながら叫ぶツナと絵里。

そんな二人の反応を楽しんでいるリボーンが、ここでコロネロから連絡があつたことを伝える。

「コロネロから連絡だ。「このふざけた船艦ガタクダを海の藻屑にしてやるから、船艦ここから早く離れるコラ!」だそうぞぞ。」

「そうか。」

「それと「ちゃんとお絵里お姫様を無事、マフィアランドまで連れていけよ沢田綱吉王子様コラ」だそうぞぞ。」

「余計なことを言われなくていい（わよ!）」

リボーンからコロネロからの伝言を聞いて、ツナと絵里は顔を真っ赤にしながらかぶ。

「とにかく逃げ。早く逃げねえとコロネロの弾丸たまの餌食になるぞ。」

そう言うリボーンはレオンを翼に変型させると、空へ飛ぶと、マフィアランドのほうへ飛んでいく。

「さて俺たちも行くか。」

「行くつて…まさか泳いで…?」

「いや、飛んで帰る。」

「と、飛ぶ!」

飛んで帰ると聞いて驚く絵里。

とりあえず真姫の時と同じく、絵里はツナの首に手をまわし、ツナは左手で絵里を支えて、右手の大空の死ぬ気の炎を逆噴射させてマフィアランドに帰っていく。

「前に白蘭さんだっけ?あの人を空を飛んでいるのは見たことあつた

けど、まさかツナ君も飛べるなんてね…」

「まあ：俺や白蘭以外にも飛べる奴は他にもたくさんいるんだがな…」

「ハラシヨー…」

他にも空を飛べる人物がいると知って、驚く絵里。

また絵里の中のマフィアのイメージが崩れていったのだった。

「すまない絵里。俺の服を濡れてるから気持ち悪くないか？」

「だ、大丈夫よ！／＼／」

「そうか…」

ツナが尋ねると絵里は顔を再び赤くしてしまう。服が濡れていることよりも、こうしてツナに密着していることに意識しすぎて、服が濡れていることなど気になっていないのである。

「ねえツナ君。一つ聞きたいんだけどいい？」

「何だ絵里？」

「どうして飛べるのに、海の中から来たの？」

ずっと疑問に思っていたことを尋ねる絵里。

「空から行けば敵に俺の姿がバレて、お前に危害が加わる可能性があったからな。だから海中から進むしかなかった。」

「私の為にそこまで…!?!／＼／」

「ああ。まあ多少寒かったが、どうってことはない。お前を無事に助けることのほうが大事だったからな。とにかくお前が無事でよかった。早くみんなのところへ帰ろう。みんなお前が拐われて心配してたからな。」

「え、ええ…!／＼／」

ツナの言葉を聞いて絵里はそう言うがやつとであった。

自分の為にここまでしてきて助けて来てくれたツナに、絵里は惚れてしまう。

「(亜里沙の言ってた通りね：私もツナ君に恋しちゃったみたね…!!
／＼／そして他のみんながツナ君を好きになった理由も…!!
／＼／)」

こうして、sの最後の一人、絵里もツナに恋したのであった。

#標的(ターゲット) 141 「新たな戦いの始まり」

なんとかツナは絵里をマフィアランドの海岸まで、連れていくことができた。

「降ろすぞ。」

「え、ええ…」

そう言うとツナはゆつくりと絵里を降ろす。

そして額とボンゴレギア大空の死ぬ気の炎が消え、ノーマル状態に戻るとボンゴレギアがただの手袋に戻る。

「ふう…終わった。絵里さん大丈夫ですか?」

「え!?ええ、大丈夫よ。」

また絵里さんと、さん付けで呼ばれたことに、ことりと真姫と同じく戸惑いながらも答える絵里。

「あのツナ君…?」

「何ですか絵里さん?」

「ツナ君はその…二重人格とかじゃないのよね…?」

「ち、違いますよ…そう言いたくなる気持ちも分かりますけど!」

ノーマル状態の時と超^{ハイパー}死ぬ気モードの時あまりにも違いすぎてツナが二重人格ではないのかと思ってしまう絵里だが、ツナは二重人格ではないということを使う。

すると海岸の空に弾丸が真っ直ぐ飛んでいく。弾丸はスカルの船艦の手前で複数に分散していき、船艦に直撃する。そして弾丸が直撃すると共に複数あつた船艦が全て海の中へ沈んでいく。

「あれはコロネロの…相変わらず凄い…」

「本当に海の藻屑にしたのね…どんだけ強いんだよ…」

沈んでいく船艦を見ながら、コロネロの強さを再認識するツナと、コロネロの強さを初めて知る絵里。

「あれ？　そういえば先に行ったりリボンがない…それにマフィア^島ランドが静かだ…もう終わったのかな…？」

先にマフィアランドに帰ったはずのリボンがないこと、そして絵里を救出に行く前と違ってマフィアランドの中が静かだということに気づくツナ。

「たぶん戦いはもう終わってるから大丈夫かな？　とりあえず行きましよう絵里さん。もしまだ敵がいるなら俺が絵里さんを護りますから。」

「わ、わかったわ…」

まだ敵がいるかもしれないと聞いて絵里は緊張してしまう。

さらにツナは続ける。

「あーそれとこんな時にアレなんですけど、絵里さんにお問い合わせがあるんですけど…」

「何かしら？　ツナ君？」

「さっきの俺の姿のことが秘密にしておいてほしいんですけど…」

「さっきのって…あの額が燃えてたあの…？」

「はい。」

「わかったわ。また質問なんだけど、私の他にもμ sのメンバーの中で知っている子もいるの？」

超^{ハイパー}死ぬ気モードのことを秘密にすることを了承すると、絵里は超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナのことを知っているかどうかを尋ねる。

「あー、μ sの中で絵里さんの他に二人知ってます。でも名前を言うのはちよつと…」

「あ！　別にいいのよ！　ちよつと興味単位で聞いてみただけだから！」

ちよつと言いにくそうな表情をしているツナを見て、絵里が慌てて弁解する。

すると海岸の向こうから足音と声が聞こえてくる。

「十代目ー！」

「ツナ君！　絵里ちゃん！」

「お姉ちゃん！」

「あ！　獄寺君！　みんな！」

獄寺、穂乃果、亜里沙が叫びながらみんなと一緒に走りながらやつ

て来るのを見て、安心した表情になるツナ、それと同時に戦いが終わったことを理解する。

そして亜里沙はそのまま絵里に抱きつく。

「お姉ちゃん！大丈夫だった!？」

「ごめんね亜里沙。大丈夫よ、ツナ君が助けてくれたから。」

抱きついてきた亜里沙の頭をそつと撫でる絵里。

そしてツナが助けてくれたと聞いてことりと真姫は…

「(これで私とツナ君だけの秘密が…)」

「(も、もしかして絵里も…!?ま、まさかそんなわけ、って…べ、別にそうだったとしても私には関係ないんだから!／／)」

ツナと自分だけの秘密だったのが、絵里も知ってしまったことで二人だけの秘密ではなくなってしまう残念な気分になってしまうことり。正確に言えば既に二人だけの秘密ではなくなっているのだが…

一方で真姫は超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナに助けられたと聞いて、絵里もツナのことを好きになったんじゃないかと思ひ始める。

「やっぱり凄いいねツナ君！絵里ちゃんを助けるなんて!」

「当たり前だ！十代目ならこれくらい当然だ!」

絵里を助け出したツナを称賛する獄寺と穂乃果。

するとツナがさつきから見当たらないランチア、バジル、ラルについてリポーンに尋ねる。

「そういえばランチアさんとバジル君とラルは?」

「あいつらならカルカツファミリーの奴らを拘束してる。」

「そうなんだ。」

リポーンがランチア、ラル、バジルが何をしているか答える。

すると亜里沙が…

「ツナさん。お姉ちゃんを助けけてくれてありがとうございます。」

「気にしないで亜里沙ちゃん。俺は護りたいものを護っただけだから。」

頭を下げてツナにお礼を言う。ツナは亜里沙に向かって笑顔でそう言う。

するとツナの体に寒気が走り…

「ハックシヨン！」

おもいつきり、くしやみをする。どうやら海の中に入ったせい、体が冷えてしまったらしい。

「大丈夫っすか十代目？」

「どうしたのにや？」

「もしかして風邪か？」

「ちよつと水の中に入ったから…ちよつと寒気が…ハックシヨン！」

くしやみをしたツナを見て心配する獄寺、凜、山本。

すると再びツナはくしやみをだす。

そんなツナを見て絵里が…

「これよかったら使つて。」

「あ、ありがとうございます絵里さん。」

絵里がティッシュを渡すと、ツナは鼻をかむ。

そしてさらに絵里はハンカチを渡す。

「それから小さいけど、これで体を拭いて。」

「あ、ありがとうございます。」

絵里にお礼を言うと、ツナは絵里から貰ったハンカチで水に濡れた体を拭き始める。

そして絵里とツナの間にいい感じな雰囲気を感じたのか穂乃果たちは…

「「絵里ちゃん？」」

「「絵里？」」

穂乃果、花陽、ことり、海未、真姫、にこが異様なプレッシャーを放つ。

「え、えつと…別にこれは違うのよ／＼／！」

異様なプレッシャーを放つ6人に、絵里は顔を少し赤くしながら戸惑ってしまう。

「な、何かもの凄い殺気のようなものを感じるぞ…」

「どうとうエリチまで。」

「やっぱりお姉ちゃんもツナさんが。」

「まさかとは思ったけど…。ツナさん、μ sのメンバー全員を…」

「ごりやまた面白くなってきたな。」

この光景を見て了平、希、亜里沙、雪穂、リボーンが言う。
こうして新たな戦いが幕を開けるのであった。

#標的（ターゲット） 142 「スカルのΨ難」

ともあれカルカツファミリーとの戦い終わる。
ちなみにスカルはあの後、海岸に流れ着く。

「はあはあ…酷い目に…」

「あ！スカル！」

「てめえまだ！」

スカルが流れついていたことに驚くスカル。一方で獄寺はスカルを見て警戒し即座にダイナマイトを取り出す。コロネロに船艦を海に落とされた時、気絶していたのでスカルは海の中で目が覚めて、なんとかここまでやって来たのだ。

「げ!?ボンゴレにリボーン先輩！」

「あ！ヘルメットが取れてる。」

「メイク濃っ！」

「こういう素顔だったんだ…」

ヘルメットが取れて初めて素顔を見る穂乃果、にこ、ことりはちよつと驚いてしまう。他のメンバーも声には出さなかったものの、スカルの素顔に驚いていた。

「ちやおつすスカル。今回も俺たちの勝ちだな。というわけで今から1時間以内にファミリー総出でマフィアランドの修復しろ。もちろんお前らの金で。」

「な、何で俺が！そんなこと！」

「はい？」

「い、いえ！何でもありません！」

左耳に手を当てて聞こえてない仕草をしながらそう言うと、スカルは体を震わせながら、リボーンの命令を聞くことを了承する。

さらにリボーンは続ける。

「あとエスプレッソ買ってこい。お前の金で。」

「クツソー！結局こうなるのか…」

結局リボーンにパシリになってしまったスカルは、もの凄く悔しい表情を浮かべる。

そんなスカルに穂乃果が…

「じゃあ私はオレンジジュース。」

「おい待て！何でお前の分まで買わないといけないんだ！」

手を上げながらオレンジジュースを頼む穂乃果に、スカルはツッコミをいれる。

そして穂乃果のあとも…

「凜はアップルジュースがいいにや！」

「じゃあ俺は牛乳な。」

「俺はコーラだ。」

「俺は極限にスポーツドリンクだ！」

「私は緑茶をお願いします。」

「私はアイスコーヒーで。」

「じゃ、じゃあ私はイチゴ・オレを…」

「私はジンジャーエールをお願いね。」

「ウチは烏龍茶。」

「私はサイダーよ。」

「私はアイスココアをお願いします。」

「私はメロンソーダね。」

「私は桃のジュースをお願いします。」

「（みんなまでスカルをパシリに使ってるんだけど!?しかもみんなバラバラだし!）」

凜、山本、獄寺、了平、海未、ことり、花陽、真姫、希、にこ、雪穂、絵里、亜里沙が当たり前のようにスカルに飲みたいものを注文したことに驚くツナ。

「お、おい待て！そんなにバラバラの物を、一気に言われて覚えられるか！というか何で俺が買いに行く感じになってるんだ！」

「うるせえ、とつとと買いにいきやがれ。じゃねえと風穴開けるぞ。」

「ち、ちくしよー！お、覚えてろー！」

リボーンがレオンを銃に変型させ、スカルの頭に銃口を向けながら言う、スカルは走って全員が頼んだ飲み物を買いにいくのだった。

そしてなんとかスカルが全員分の飲み物を買って帰ってくる。

「はあはあ……やっと帰った来られた……」

「おせえぞスカル。」

「しようがないだろ！全員バラバラの物を注文してきたんだ！時間もかかるに決まってるだろ！それにこうやって全員分買ってきてやったんだ！ちよつとぐらいお礼の一つぐらい言ったらどうなんだ！」

「お前は俺のパシリだぞ。何でパシリのお前に礼なんて言わなくちやいけねえんだ。」

「こ、この……」

「何だ文句でもあんのか？」

「い、いえ！滅相もございません！」

リボーンという言葉に怒りを覚えるスカルだが、ドスの効いた声にどうしても逆らえず従わざるおえなくなってしまう。

すると

「あスカル君。次はパンが食べたいんだけど。」

「な!?!」

「(一番酷いのは穂乃果ちゃんだー!)」

さらにスカルに注文する穂乃果に、ツナは一番、人使いが荒いのは穂乃果だと理解する。そして当の本人はそのことに一切、自覚がない。

そしてこのあともスカルはツナ以外にパシリにされるのであった。

#標的（ターゲット） 143 「雪穂の作戦」

そして1時間後に本当にマフィアランドの修復が終わる。リポールの命令ということもあって、カルカツファミリーが総出死ぬ気で直した。

了平とバジルと凜は裏マフィアランドでまた修行しにいき、ランチアはマフィアランドの警備に戻っていった。一応、夕食を食べる時にまた再会する約束をした。

そしてカルカツファミリーは…

「覚えてろー！絶対マフィアランドを制圧してやるからなー！」

「ちつとも懲りねーなスカルのやつ。これに懲りて諦めりゃいいものによ。」

カルカツファミリーのメンバーとスカルは船艦がない為、吠え面をかきながら泳いで帰って行った。

そんなスカルの言葉に獄寺が言う。

「ばいばい！スカル君、おごつてくれてありがとー！」

襲撃されたことを忘れていたわけではなかったが、学校帰りに友達に別れるぐらいのノリで、穂乃果はスカルのほうに手を振りながら叫ぶ。そんな穂乃果を全員、呆れた表情を見ていた。

「はあ…まさかこんなことになるなんて本当についてないよなー…」

「まあ全部、修復したんだし遊べるからいいじゃねえか。」

ため息をついているツナに、山本が笑いながら言う。

そんなため息をついているツナを見て、希が表情をニコニコしながら…

「まあそんな悪いことばっかりじゃなかったやん。エリチはツナ君のこと…」

「の、希！／／／」

「え？俺がどうかしたんですか絵里さん？」

「何でもないので！／＼／＼気にしないで！／＼／＼」

希の言葉に顔を真っ赤にしながら、慌てて希の口を塞ぐ絵里。自分の話題が出たのでツナは尋ねが、絵里は顔を真っ赤にして否定する。

そしてツナは穂乃果たちのことも尋ねる。

「そういうえば穂乃果ちゃんたちも大丈夫？ケガとかしてない？」

「大丈夫だよ。ランチアさんと了平さんとラルさん、あと凜ちゃんが護ってくれたから。」

「ええ。まあ…凜があんなに強くなってしまったのは以外というかその…」

「わかるよ海未ちゃん…その気持ち…」

穂乃果と海未が特にケガをしていないということ聞いて安心して一方で、凜の劇的な変化にツナは海未と同じく複雑な気持ちを抱いてしまう。

「これからどうしよう…まだもうちょっと時間があるし…」

「そうだね。」

花陽がそう言うと、ツナはマフィアランドに設置してある時計を見るツナ。時刻はあと午後4時30分であり、まだもう少し遊べる時間であった。

「一応ホテルはもうチェックインできるぞ。」

「でもまだもうちょっと時間があるし…」

リボーンという言葉聞いてツナはまだ遊びたいという願望があるツナ。

その理由は…

「(穂乃果ちゃんと二人っきりで遊びたかったな…でもみんながいる前じゃ誘う勇気が…)」

マフィアランドに来る前日にリボーンに「穂乃果とデートでもしてろ」と言われたツナだったが、マフィアランドに来てからくじ運や襲撃のせいもあって穂乃果と二人っきりになれなかったことにちよつと後悔しているのだ。

もちろん他のメンバーと遊んだことが楽しくなかったわけではな

い。

その一方で：

「ツナ君と二人つきりになりたかったな…でもみんなもいるし、くじ引きだったら絶対じゃないけどツナ君と一緒にになれる可能性が低くなるし…」

ツナと同じく穂乃果と二人つきりになれなかったことを残念に思っていた。

ツナも穂乃果もお互いのことをチラチラと見ていた。

そんな光景を見て雪穂は二人がどんなことを思っているのかすぐに見抜くと：

「(しようがない…私が協力してあげよう。やっぱり二人つきりになって、誰にも邪魔されない空間といたらあのアトラクションしかないよね。)」

雪穂の作戦とは!?

#標的 (ターゲット) 144 「運命のくじ引き」

ツナと穂乃果を二人つきりにするアトラクション
である観覧車に乗せることに思いついた雪穂。

さっそく観覧車のある場所をマフィアランドのパンフレットの地
図で確認する。

「(えつと観覧車は…あつた!ここから遠くない!)」

観覧車のある場所を判明すると、雪穂はすぐさま
行動に出る。

「あの、観覧車とかどうですか?高いところから景色が見渡せていい
と思うんですけど。」

「「「「観覧車!?!」」」」」

雪穂から観覧車という単語を出ただけでツナ、穂乃果、海未、こと
り、花陽、真姫、にこ、そして絵里は顔を真っ赤にしてしまう。どう
やら全員、観覧車と聞いて二人つきりになる想像をしたようである。
「観覧車か、そういうやまだ乗ってなかったよな。」

「そっさいやそうだな。」

「亜里沙も乗りたい!」

「へー観覧車か。面白そうやん。」

山本、獄寺、亜里沙は観覧車と聞いて普通の反応であったが、希は
表情をにやつかせながら言う。

そしてリボーンは雪穂の考えていることを知ったのか…

「マフィアランドの観覧車は人気アトラクションの一つだぞ。マフィ
アランドの景色と海を一望できるからな。行ってみる価値はあると
思うぞ。」

「そ、それなら行かなきゃねー!」

「そ、そうですね！行かないと後悔するかもしれせんし！」

「じゃ、じゃあ決まりだねー！」

本当は二人つきりになりたいというのが本音であるが、そんなことは言えないので穂乃果、海未、ことりはリボーンという言葉に便乗してそう言う。

そしてこの3人の言葉にツナ、花陽、真姫、にこ、絵里は「ナイス！」と心の中で思ってしまう。

そして一同は観覧車に向かうこととなり、その道中でリボーンが雪穂の肩に乗ると話しかける。

「観覧車とは考えたじゃねえか雪穂。」

「いや…今日は色々とからツナさんとお姉ちゃんが二人つきりになれる時間を作ってあげようかなって…まあ乗るのはくじ引きになるから二人が一緒になるのは運だけど…」

「ま。他の奴がツナと一緒にになったらなつたで面白いけどな。」

「どことん楽しんでるよねりボーン君…」

不敵な笑みを浮かべてこの状況を楽しんでいるリボーンに雪穂が言う。

そして一同は観覧車の前につく。

するとリボーンの手には細長い色つきの紙が握られていた。

「くじ引きを始めるぞ。今回は凜がいねえから奇数になっちゃうから俺は乗らねえ。この紙の下の色と同じ色を引いた2人が観覧車に乗れるぞ。二人つきりぞ。」

リボーンがそう言うのと、ツナ、穂乃果、海未、花陽、真姫、にこ、絵里は固唾を飲み込む。そんな中で希は一切、緊張していなかった。そして運命の時が来る。

「じゃあ一斉に引け。」

リボーンがそう言うのと全員、リボーンの手握られている14枚の紙を一人一枚ずつ引いていく。

そして結果は…

「赤色…」

「私も赤色…」

ツナと穂乃果が同じ赤色の色くじを引く。

そしてよほど信じられなかったのか二人は…

「えっと…本当に赤色だよな？似た色とかじゃないよね…？」

「そ、そのはずだけど…」

同じ色を引いたのにも関わらず、穂乃果とツナは本当に自分の引いたくじが同じ色かどうかわからなくなってしまっていた。

こうしてツナと穂乃果は観覧車と一緒に乗ることとなった。はたしてどうなる!?

#標的 (ターゲット) 145 「観覧車」

見事同じ色のくじを引いて、観覧車と一緒に乗ることが決まったツナと穂乃果。

そして今、二人は観覧車に乗っていたのだが…

「!!//」

ツナと穂乃果は顔を真っ赤にして、顔を俯けてただただ黙ったままであった。

「(ど、どうしよう…!!//せつかくツナ君と一緒になれたけど…!!//)」

「(緊張して話すことが…!!//)」

急に誰も邪魔されない空間に二人つきりになったことで話すことができなくなってしまうていた。

それでもなんとかツナは会話を切り出す。

「きよ、今日は大変だったね!まさか襲撃されるなんて!//」

「そ、そうだね!//でもちゃんと楽しかったよ!//も、もちろん襲撃じゃなくて、みんなと遊べたことだよ!//」

「そ、そっか!ならよかったよ!」

お互い意識しすぎて、会話がぎこちなくなってしまう。

そして今度は穂乃果が話し始める。

「もう出会ってそろそろ1ヶ月になるね。」

「そういえばそうだね。」

「今思えば変わった出会いだったよね。偶然出会った男の子が、まさかマフィアのボスなんて。」

「お、俺はマフィアのボスになる気はないよ!」

「えへへ。ごめんごめん。」

「え…!?!//」

左手を後頭部に置き、下をペロツと出す穂乃果の仕草を見て、心

臓がドキドキしてしまい、ツナは顔を赤くしてしまう。

「ツナ君？」

「な、何でもないよ！／＼／＼」
「？」

顔を赤くしてちよつと様子のおかしいツナに、穂乃果は首を傾げ疑問符を浮かべる。

するとツナは穂乃果に謝る。

「今日はごめんね。せっかく遊びにきたのに。」

「ううん、大丈夫だよ。ツナ君のせいじゃないし、ツナ君がいなかったら絵里ちゃんは助けられなかったよ。それに謝るこっちのほうだよ。ことりちゃんの時も助けってもらって…私にもツナ君みたいに力があつたら…」

「そのままでもいいよ。」

「え？」

「穂乃果ちゃんは強くなる必要なんてないよ。穂乃果ちゃんに人を傷つける苦しみを知る必要なんてない。」

そう言うツナは今まで戦いを思い出す。

ツナは今まで戦ってきて相手が誰だろうといつも眉間にシワを寄せ祈るように拳を振るってきた。時には傷つけるだけでなく命を奪ってしまったことがあつた。そんな苦しみを穂乃果に知ってもらいたくはなかった。

「穂乃果ちゃんは、俺の大切な友達でいてほしいんだ。」

「大切な友達…」

「きゅ、急にごめんね！変なこと言って！」

「ううん、嬉しいよ。でも…私はそんなツナ君の悲しい顔を見たくないよ。」

「え？」

ツナが今までの戦いのことを思い出していた時に穂乃果は、ツナがを悲しそうな表情を見たのか急に真剣な眼差しで言う。そして穂乃果の以外な返答にツナは驚いてしまう。

「さつきツナ君、すつごく悲しそうな表情をしてたよ。」

「そ、そんなこと…」

「してたよ！ツナ君とっても苦しそうだった！今までツナ君がどんな苦しいをしてきたかはわからない！でもツナ君の苦しみを知って、友達として一緒に背負うことはできるよ！」

「な…」

穂乃果の言葉に驚きのあまり固まってしまうツナ。

その時だった…

ガコン！

「きゃー！」

突如、観覧車が一番てっぺんで止まってしまい、その止まった反動で観覧車が揺れて穂乃果がバランスを崩してツナのほうへ倒れてしまう。

そして…

「ほ、穂乃果ちゃん…!?／／／／」

「ツナ君…!?／／／／」

穂乃果はツナの胸の中に飛びこんでしまう形になり、穂乃果の体とツナの体が密着してしまう。そして前に相合傘をした時と同じようなことがあったのを思い出し、顔を赤くしてしまう。

「ご、ごめん!!／／／／」

「だ、大丈夫だよ!／／／／」

穂乃果はすぐにツナから離れるとツナに謝る。

するとアナウンスが流れる。

『申し訳ありません。ちよつとトラブルで観覧車が止まっています。今、復旧の作業にあたっていますので、少々お待ちください。』

アナウンスの言っていた言葉が聞こえていなかったわけではなかったが、ツナと穂乃果はそれぞれどころではなかった。

「あ、あの時と同じ…!!／／／／」

「(ツナ君と私の体が!!／／／／あの時と同じで温かった…!!／／／／)」

顔や耳までもが真っ赤になり、心臓が鼓動が今ままでより早くなっ
ていくのがわかっていた。

そしてツナは…

「(今ここに穂乃果ちゃん以外誰もいない…!!／／／それに観覧車は止まった…だからチャンスは今しかない…!!／／／)」

なんとか頭の中を整理し、穂乃果に告白することを決意する。

「あ、あの！／／／穂乃果ちゃん！／／／」

「な、何?!／／／ツナ君…?!／／／」

まださっきのことを思い出してドキドキしている穂乃果に話しかけると、穂乃果は少しびびりしてしまう。

そして…

「ほ、穂乃果ちゃんに伝えたいことがあるんだ!／／／お、俺…ほ、ほ、穂乃果ちゃんが…!!／／／」

ツナが穂乃果に自分の想いを伝えようとする。

その時であった…

ヒュー…ドゥ…ドゥ…

「え?」

突如、ツナたちの目の前に一発の大きな花火が上がる。

そしてその花火にツナと穂乃果が見とれていると次々に花火が打ち上がっていく。

「綺麗…」

「そうだね…」

次々に打ち上げられていく花火に見とれてしまう穂乃果とツナ。すると観覧車が復旧し、再び動き始める。

すると穂乃果がさっきのことについて尋ねる。

「それでツナ君? さっき私に伝えたいことがあるって言ってたけど、何?」

「え?! いやーその! あ、あの花火だよ! マファイアランドには花火が上がることを教えたくて! 穂乃果ちゃんが喜ぶかなって思ってた!」

「へー そうなんだ。」

さっきまで穂乃果に告白しようとしたツナであったが、ここにきてやっぱり恥ずかしくなってしまう誤魔化してしまう。そしてツナの発言に穂乃果は何の違和感も感じず、そう答える。

そして嘘をついたツナは…

「俺のバカー！せつかくの告白のチャンスだったのにー！」
めちやくちや心の中で後悔するのであった。

#標的（ターゲット） 146 「夕食」

穂乃果と一緒に観覧車に乗ることができたツナは告白のチャンスだと思い、穂乃果に想いを伝えようとするもあえなく失敗に終わった。

そして全員が観覧車に降りると、リボーンが全員を今日泊まるホテルに案内し、そしてホテル中にある食堂に入る。

そこにはたくさんの椅子とテーブルがあり、たくさんの料理が並べられていた。

「今日の夕食はバイキングだ。ここでは世界中の料理が食べ放題だ。好きなだけ食べ。」

「た、食べ放題!?!」

「ああ…また花陽ちゃんが…」

「もうどうなっても知らないわよ…」

世界中の料理が食べ放題と聞いて、昼食を食べた時と同じく花陽は目をキラキラと輝かせていた。

いつも通りツナと真姫は、本当に大丈夫なのかという表情で花陽を見つめていた。

そして全員、トレーや食器を取り料理を取り椅子に座った。

すると…

「お腹ペコペコだにやー!」

「拙者もです。」

「今日は極限に食うぞー!」

「食いまくるぜコラ!」

「まあ、たまにはいいか…」

「もう全員、揃っているのか。」

修行を終えた凜、バジル、了平、コロネロ、ラル、そしてマフィアランドの護衛の仕事を終えたランチアと一緒にやって来た。

5人もツナたちと同じく料理を皿に取り、ツナたちの座っている場

所に座った。

「これで全員揃ったな。んじや食うか。」

リボーンがそう言うのと、全員両手をあわせて同時にいただきますと言い、料理を食べ始める。

「ああ…幸せ…」

「やっぱり修行のあとのご飯は最高です！」

「どれもこれも極限にうまい！」

特に普段からよく食べる花陽、そして修行の後ということもありもの凄いお腹の空いてるバジルと了平は次々と料理をたいらげていく。すると絵里がある違和感に気づく。

「ねえ私たち以外に人がいないのはどうして？」

絵里が尋ねると、みんなのまわりには厨房のシェフ以外この場所には誰もいないのだ。

そして絵里の問いにリボーンが答える。

「今日は俺とツナの名前を出して貸し切りにした。だから俺たちの以外はここには人はいねえぞ。」

「俺の名前を出してるってどういうことだよリボーン！」

「こんな広い場所を貸し切り…」

「とことん規格外…」

ツナはリボーンが自分の名前を出したということに驚き、にこと雪穂はこの場所を貸し切りすることのほうに驚いてしまっていた。

「ボンゴレとリボーンアルコバレーノの名前を出したんなら、このマファイアランド島自体を貸し切りにできるんじゃないのか。」

「リボーンはマファイアランド島では有名人だ。さらに現ボンゴレのボスボンゴレIX世ノッノがもつとも信頼する殺し屋ヒットマン、沢田は裏社会では名を知らないボンゴレファミリーの次期ボスだ。それくらいはできるだろ。」

リボーンの言葉を聞いてランチアとラルはマファイアランド貸し切るくらい余裕ではないのかということに気づく。

「まあな。そこまでやると、他のファミリーに迷惑がかかるからな。さすがにそれは止めたぞ。」

「ええ!? 本当にできるの!?!」

ツナはマファイアランド自体を貸し切りることができることを、当たり前のように言うリボーンに驚いてしまう。

「ツナ君とりボーン君って凄いなだね!」

「当たり前だ!十代目は裏社会の頂点に立つお方だぞ!」

「獄寺君!俺はマファイアのボスにならないって!」

穂乃果にツナの凄さを伝えている獄寺にツナが言うが、獄寺の耳にとまっていなかった。

さらに話は続いていき。

「そんなに謙遜しなくていいのにな。」

「そうだぞ沢田。俺はお前がどんなに凄い男か知ってるぞ。」

「沢田殿以外にボスに相応しい人はいません。」

「男ならドンと胸を張れコラ。」

「い、いや…だから…」

山本、了平、バジル、コロネロ勝手にボンゴレファミリーのボスになりたいと思つて話ををしていくのでツナは反論しようにも反論できない。

「大変なのですねツナ君は…」

「ツナ君自身ははなりたくないと思つてるのに…」

「なんか可哀想ね…」

「苦労してるんやね…」

海未、ことり、真姫、希は反論できずにいるツナに同情しながら料理を口に運んでいく。

するとツナはなんとか話題を変えようと、ランチアにずっと聞こうと思つていたことを尋ねる。

「そういえばランチアさん!何でマファイアランドで警備の仕事をしてるんですか?」

「旅の途中で金がなくなりそうになつてな、そんな時にお前の親父に出会つてな。お前の親父がマファイアランドの警備の仕事を紹介してくれたんだ。」

「えーーーー!?父さんがー!」

まさかランチアの警備の仕事を紹介してくれたのが自分の父であ

る家光であるとは思わなかったツナは驚きの声をあげてしまう。

「そういえばバジル君の上司が確か沢田家光って、前に言ってたけど、やっぱりツナ君のお父さんのことなん？」

「ああ。ツナの親父の家光はボンゴレファミリー門外顧問組織のCH E D E Fのボスだ。CH E D E Fは平常時は部外者だが、非常時にはボスに次ぐ権限を発動できる。」

希が前に花見で言っていた言葉を思い出し尋ねると、リボンが家光のこと、門外顧問組織であるCH E D E Fのことについて説明する。

「え…それってツナ君のお父さんがボンゴレのNo. 2だったことでは…？」

「そういうことだぞ。理解が早いな海未。」

「どんだけ凄いのよ…父親が世界最強のマフィアのNo. 2って…」

「確かツナさんの祖先はボンゴレファミリーの創始者…」

「凄い家系だよね…」

ここに、花陽、ことり、ツナの家の家系がもの凄いことだということに驚きを隠せなかった。

「凜はツナのお父さんがマフィアだったことすっかり忘れてたにや。」

「忘れるな凜。いずれお前の上司になるんだからな。」

「了解だにや！」

「え!?凜ちゃんが父さんの部下になるの!?というか凜ちゃんもうマフィアに入ること決定してるの!？」

ツナの父親がマフィアだったことを忘れていた凜にラルが注意すると凜は敬礼して了解の意志を見せる。

そしてツナは凜がボンゴレファミリーに入ること、自分の父親の部下になることに驚いてしまう。

「俺もいつか旅を終えたらCH E D E Fウチに来ないかと誘われたな。もしその時が来たら一緒になるかもな。」

「その時はよろしくだにや！」

「ランチアさんも!?!というか凜ちゃんとランチアさんが一緒に仕事するの!?!」

ランチアも家光に誘われてたことにツナは驚いてしまう。

そしてリボーンが…

「凜はCHEDFEで決定だな。あとは奴らは普通にツナの部下として…」

「だから勝手にマフィアにしようとしなくてももらえる!？」

「マフィアにはならないって言ってるでしょ!」

「そうです!そもそもなぜマフィアにならないといけないんですか!？」

「私たちはマフィアになりたくないのよ!」

「まだそんなことを考えてたのかよ!みんなを巻き込むなって!」

勝手に凜以外はツナの部下として働いてもらうようになるという言葉に、絵里、真姫、海未、にこ、ツナは全力でツッコミ入れる。

「ツナ君の部下か、面白そうだよね。」

「ツナさんなら安心です。」

「亜里沙もお姉ちゃんも…マフィアって本当に何かわかってる…?」

雪穂はこの二人が本当にマフィアって何であるのかわかっているのかと思ってしまう。

「ツナ。これだけ可愛い奴らがお前の部下になるんだ。絶対に幸せにしろよコラー!」

「9人も愛人ができてよかったな。」

「なななな!／／何言ってるんだよ!／／／」

コロネロとリボーン発言に顔を真っ赤にするツナ。

そしてツナだけでなく、希以外のμ、sのメンバーが顔を真っ赤にさせてしまう。

「何だボンゴレ?その若さでもうこんなに愛人がいたのか。中々やるな。」

「ランチアさんまで!?!／／違いますよ!／／／」

「ったく。どいつもこいつもガキだな。」

顔を真っ赤にさせているツナと希以外のμ、sのメ

ンバーを見てガキだと言い捨てるラル。

「じゃあ今からコロネロがラルのどこに惚れたか発表していくってい

うのはどうだ？」

「リボーン！／＼／＼何を言っている！／＼／＼」

リボーンが口元をニヤニヤさえながらそう言うと、さっきまでツナたちをガキだと言っていたラルの顔が真っ赤になり動揺してしまう。

「いいぜコラー！俺のラルの好きなどころは……」

「だ、黙れー！／＼／＼」

ズドーーーン！

コロネロがラルの惚れたところを言おうとすると、ラルは顔を真っ赤にしながら自分の武器であるショットガンを連射していく。

このあと食堂はめちやくちやになったとき。

#標的（ターゲット） 147 「部屋割りとなッツ」

夕食を食べ終えたツナたち。了平、コロネロ、バジル、ラルはもう少し修行を続けるのため裏マフィアランドに戻っていった。凜は今回は修行に参加しなかった。

ランチアは護衛の仕事があるので、再び護衛の仕事に戻っていた。

リボーンはバジルたちと別れたあと、全員に部屋のカードキーを渡す。

だが…

「何で俺だけ一人なんだよ！」

「そうですよりボーンさん！十代目に何かあったらどうするんですか！」

ツナだけは一人で寝なければならなかった。

自分だけが一人だということに納得できないツナはリボーンに文句を言い、獄寺もこのことに納得していない様子である。

ちなみに部屋割りは穂乃果海未、ことり、雪穂が601号室、花陽、凜、真姫が602号室、絵里、亜里沙、希、にこが603号室、山本と獄寺は604号室、そしてツナは穂乃果たちの階より二つ上の802号室であった。

「ツナはボンゴレファミリーのボスだからな。だから支配人がスイートルームを用意してくれたんだ。別にツナ以外のみんなも高級ホテル並の部屋だぞ。」

「別にスイートルームじゃなくてもいいのに…」

「確かに十代目の凄さならそれくらい当然か…」

ツナは支配人のありがたいような、ありがたくないような気遣いに

複雑な気持ちを抱いてしまい、獄寺はツナが凄い存在だからということとで納得してしまう。

(まあナッツがいるからいいか…)

ツナは一人でも相棒のナッツがいるから大丈夫だと思い、これ以上何も言わないことにした。

だが…

「ツナ君！お願いがあるんだけど！」

「何？穂乃果ちゃん？」

「ホノ太郎を貸してほしいんだけどいい？」

「へ？」

穂乃果のまさかのお願いにツナは目を点にさせてキョトンとさせてしまう。

さらに穂乃果は続ける。

「私、ずっとホノ太郎をモフモフさせながら寝てみたかったの！ね？お願い？」

「え、えつと…」

自分の想い人である穂乃果の頼みということもあって、ツナはどうしようかと迷ってしまう。

すると…

「穂乃果ちゃんだけじゃないにや！凜も凜丸をモフモフして寝たいにや！」

同じくナッツのことが大好きな凜がここで穂乃果に対抗してくる。そして穂乃果と凜はナッツを巡っていい争いを始める。

二人の争いを全員、呆れた目で見てみると、絵里がツナに尋ねる。

「ホノ太郎？凜丸？」

「あー…ナッツのことです。穂乃果ちゃんと凜ちゃんはナッツのことを気にいって…それで勝手に名前を…」

「自分のペットだとも思ってるのかしら…？」

「あいつら十代目のナッツに勝手な名前を…」

「でもホノ太郎と凜丸って、あの二人はネーミングセンスって面白いよな。」

ツナから事情を聞いて、絵里は呆れてしまい、獄寺はナッツに勝手に名前をつけたことに怒りを覚えてしまう。

山本は二人のネーミングセンスが面白いと言うがあまり人のことは言えない。

すると穂乃果が提案する。

「じゃあみんなでジャンケンして、勝った人がホノ太郎と一緒に寝れるっていうことにしない？」

「どうしてそうなるんですか…」

「というかもうナッツが誰かと寝ることが決定してるし…」

穂乃果のなぜか全員を巻き込んだ提案に、海未とツナは呆れてしまう。

結局、全員でジャンケンをしてナッツと寝ることができる人を決めることとなった。

そしてジャンケンの結果は…

「私の勝ちね。」

ナッツと一緒に寝れる権利を得たのは真姫であった。

そして負けた穂乃果と凧は…

「うう…ホノ太郎…」

「凧丸…」

ナッツと一緒になれなかがよほど悔しかったのか、ガチで泣いてしまっていた。

「全員でジャンケンしなかったらよかったのに…」

「どうして二人とも気づかないんですか…?」

「こいつらアホだろ…」

ことり、海未、獄寺はガチで泣いている二人を見て呆れら表情を見ている。

そしてツナはナッツを出すと、真姫にナッツを渡す。

「じゃあ、お願いね真姫ちゃん。」

「本当にいいの？別に私はいいのよ。」

「せっかくジャンケンまでしたんだし、まあ今日の夜だけだし。」

本当にいいのかという真姫だが、ツナはナッツを真姫に預けること

を決意する。

こうして部屋割りとナツツと寝る人が決まる。

「お前の部屋はスイートルームだ。他に誰もいねえしベッドも一人でも余るぐらいの広さだからな。」

「リボーン？何でそんなことを言うんだよう？」

誰もいないということ、ベッドが広いことをわざと強調して言うリボーンの言葉をツナは理解していなかった。

そして

(へー。それはいい情報を聞かせてもらったやん。)

今、最強の刺客が動こうとしていた。

#標的 (ターゲット) 148 「油断した真姫」

凜、花陽、真姫がいる602号室。

「うう…凜丸…」

「もういい加減諦めなさいよ凜…」

隣のベッドに座っている真姫の膝の上に乗っている、ナッツを見て、凜は真姫をうらやましいそうな表情で見ている。ナッツを見

すると花陽はずっと気になっていたことを凜に尋ねる。

「ねえ凜ちゃん。今日はどんな修行してたの？」

「別に大したことはしてないよ。格闘術を教えてもらったり、潜入の基本とか、暗殺術とか、ちよつとした爆弾の解除方法とかを教えてもらったただけだよ。あとハッキングとかもあったけど、凜はさっぱりだったにや。」

「どこが大したことがないよ！十分すぎるわよ！」

凜から修行内容を聞いてツツコミをいれる真姫。

どう考えてもこの修行は、普通の女子高校生がやることがないであろう修行である。

「でもツナはお前の何十倍も強いってラル教官は言ってたにや。」

「ラル教官?」

「どうしたのにや?」

「い、いや…何でもないわ…」

「わ、私も…」

「?」

ラル教官と聞いて真姫と花陽がなぜ驚いたのかわからず凜は首を傾げながら疑問符を浮かべる。

みんなが知らない間に凜とラルは完璧に師弟関係になってしまっていた。

「でも本当に凄いやねツナさんって。ことりちゃんに続いて、絵里ちゃんも助けるなんて。でも…絵里ちゃんもツナさんのことを好き

になつて…」

「仕方ないわよ。あの姿のツナに助けられたら誰だつて惚れちゃうわよ。」

「あの姿?」

「あ…いや!今のは!」

真姫はうつかり超ハイパー死ぬ気モードのツナのこと言つてしまい、あの姿と聞いて凜と花陽は疑問符を

浮かべる。

「あの姿つて何なのによ?」

「な、何でもないわよ!／＼／＼」

「あの姿で助けられたら誰だつて惚れちゃうつてことは真姫ちゃん自身、ツナに助けられてそれでツナのことを好きになつたつてことかによ?」

「ち、違うわよ!／＼／＼それに別に私はツナのが好きじゃないつて言つてるでしょ!／＼／＼」

凜の推理に真姫は顔を赤くしながら否定しようとするが、あきらかに凶星である。

だが凜は…

「まあいいにや。かよちんジュース買いに行こ。」

「え?う、うん…」

真姫がツナのことを好きなのは知つているので特これ以上は何も追求せず、花陽を連れてジュースを買いに部屋を出ていってしまう。

二人が出ていったのを確認すると、真姫はホツとため息をついてナツツの頭を撫で始める。

「はあ…私つたらツナの秘密をうつかり…まあ実際見ないとわからないなainだけど…」

口で説明しても超ハイパー死ぬ気モードツナのことはわからないが、それでも真姫はうつかり喋つてしまったことを反省する。

そして頭を撫でられて幸せそうな表情をしているナツツに真姫は話しかける。

「ねえツナは私たちのsの中に好きな人がいるつて

リボーンは言ってたけど…あんたは知ってるの?」

「ガウ?」

「私は…ずっとみんなには好きじゃないって言ってるけどツナのこと
が好きなの…／＼／＼私の為に町中を駆け回って助けに来てくれて…
／＼／＼酷いことを言ったのに私を大切な友達って言ってくれた…
／＼／＼そしてあの時のツナは優しく、とつてもかっこよくて…
／＼」

ナッツが動物であること、そして部屋にナッツ以外に誰もいないの
で真姫はツナへの本当の気持ちを語っていく。

「って私はナッツに何を言ってるのかしら?ごめんね変なこと言っ
ちやつて。」

「ガウ?」

「なーにナッツ?もつと撫でて欲しいの?」

「ガウ〜♪」

「しようがないわね。」

すると真姫はナッツの仰向けにすると、お腹のあたりを優しく撫で
始める。

するとナッツは真姫の撫でられて骨抜きになり、さつきより気持ち
よさそうな表情になっていく。

「ガウ〜♪」

「どう〜?気持ちいい〜?」

鼻にかかった優しい、甲高い猫なで声で真姫がナッツに話しかけ
る。

そんな時だった…

(し、視線を感じる…)

部屋の扉の辺りから誰かに見られていることに気づくと、真姫はお
そるおそる部屋の扉のほうを見る。

すると扉が少しだけ開いており、そこには…

「あーせっかかないところだったのに…」

「わ、私は何も見てないよー!」

表情をニヤニヤさせながらスマホを構えてる凛と、視線をそらして

猫なで声でナッツを撫でていた光景を見ていないと主張する花陽がいた。

もちろんこんなところを見られた真姫は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしてしまう。

「い、いやー！こ、これは！」

「何も言わなくていいにや。さっきの真姫ちゃんの姿はばっちり動画で撮ったにや。」

「勝手に撮らないでよ！」

「さっそくこれをみんなに見せにくにや！」

「や、止めてー！」

取った動画を他のみんなに見せに行こうとする凛を、顔を真っ赤にしながら真姫は追いかける。

ツナのことを好きだと言った部分は撮られていなかったが、さっきの猫なで声でナッツを撫でいたところはこのあと他の人に見られてしまったのだった。

もちろんツナにも…

「ツナ！これを見てほしいにや！」

「え、えつと…これは…」

「見ないでツナー！／／／」

一番、恥ずかしかったのは想い人であるツナに見られてしまったことであつたそうだ。

#標的（ターゲット） 149 「3人だけの秘密」

凜のせいで恥ずかしい場面を見られてしまった真姫はナッツを肩に乗せて、ホテル一階のロビーの前にある自動販売機にジュースを買いにきていた。

そして真姫が自動販売機で何を買おうか決めていると…

「あ、真姫ちゃん。」

「真姫もジュースを買いに来てたのね？」

同じくジュースを買いにきたことりと絵里がやって来る。

すると絵里がさっきの動画のことについて話す。

「さっきは…その…大変だったわね…」

「もう言わないで！／＼／＼」

「でもナッツちゃんって可愛いから、私もつい撫で撫でしなくなっちゃうんだよねー。」

「ガウ♪」

そう言うところりは真姫の肩に乗っているナッツの頭を撫でるとナッツは幸せそうな表情になる。

3人が自動販売機でそれぞれジュースを買おうと、近くにあるソファアーに座る。

そして今度は絵里の膝の上にナッツが乗る。

「最所見た時はネコかと思ってたけど、まさかライオンだったなんてね。」

ナッツの頭を撫でながら、絵里が言う。

すると真姫は…

（こ、この3人はツナのあの姿を知ってるのよね…じゃあ話してもいいのよね…？）

ちよつとだけ自信はなかったが、真姫はツナの超^{ハイパー}死ぬ気モードのことについて話そうと心の中で決意する。

「ことりと絵里は知ってるのよね…？」

「知ってるって…?」

「何のこと?」

「その…あの燃えてるツナのこと…」

「!?!」

言いにくそうな表情で真姫が言うと、ことりと絵里は真姫が超死ぬ気モードのツナのことを知っているのだということに驚くと同時に、知っているのだということを理解する。

すると絵里がツナの言っていた言葉を思い出す。

「ツナ君が言ってたわ、μsの中であの姿を知っているのは私以外にも二人いるって。ことりは前に拐われてツナ君が助けたって話を前に聞いてたから、あの姿のツナ君を知っているのはことりと誰かだとは思ってたけど、まさかそのもう一人真姫だったなんてね…でも言われてみれば納得だわ。ツナ君のあの姿ぐらいじゃないと真姫が人を好きになるんてありえないもの。」

「へ、変な言い方しないでよ!／／／」

最後の部分は恥ずかしくて言えなかったのか、真姫は口ごもってしまふ。

するとことりが尋ねる。

「いつから知ってたの?」

「ツナが音ノ木坂学院ウチの学校に来た時よ。あのあとツナを追いかけて行ったでしょ。その時にことりと同じようにマフィアに拐われたのよ。そしてツナが拐われた私を助けてくれたのよ。」

「そうだったんだ…」

「か、隠してるつもりはなかったのよ!ただ…その恥ずかしくて…!／／／」

「ううん、気にしないで。むしろ真姫ちゃんがツナ君のことを好きになった理由がわかってスッキリしたよ。」

「だ、だから!／／／別に私はツナのことは…!／／／」

首を横に振りながら言うことりに、いつものように真姫は顔を赤くしながら反論する。

だが…

「ごめん…!!／／／もうわかってると思うけど私はツナのこと好きなの…!!／／／」

「ま、真姫ちゃんが!?」

「す、素直に!?」

真姫は顔を赤くしながら、ここで初めて他の人にツナのことを好きだということを言うと、真姫が正直に自分の気持ちを言ったことにとりと絵里は驚いてしまう。

「わ、悪い!?／／／ことりも絵里だってツナのが好きなんでしょ!!／／／」

「そ、それは…!!／／／」

「そ、そうだけど…!!／／／」

真姫の意見に反論できずことりと絵里は顔を赤くし、顔を俯けてしまふ。

「だ、だってしようがないじゃない…!／／／あんな助けられたら…!!／／／」

「どんな女の子だって好きになっちゃうよ…!!／／／」

ことりと絵里は顔を真っ赤にしながら、超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナに助けられた時のことを思い出す。

そしてしばらく沈黙は続くと絵里が口を開く…

「と、とにかくツナ君はあの姿のことを秘密にしてくれて言ってくれたわ。とりあえずこのことは私たち3人だけの秘密ね。あと真姫がツナ君のことを好きだと言ったこともね。」

「最後のは余計よ絵里!」

「そうだね。絶対に秘密にしないとね。」

「ことりまで!」

さつき真姫がツナが好きだと言ったことについて、絵里とことりが笑いながら言う。

こうして超^{ハイパー}死ぬ気モードのことは3人だけの秘密になると同時に、恋のライバルになったことを認識することとなった。

#標的 (ターゲット) 150 「恋バナ」

ツナの超ハイスピード死ぬ気モードのこのことについて秘密にすることを改めて決意した真姫、絵里、ことりはそれぞれの部屋に戻る。

そしてことりの部屋の前に立つと、ある決意をした。

(真姫ちゃんも言ったんだし、私も…)

そう穂乃果に自分もツナのことが好きだということである。多少、怪しんでいた部分はあるが、それでもおそろく気づいていないだろう。

ことりは一旦、深呼吸すると、カードキーを扉に差し込むと、部屋の扉を開ける。

「あ、帰ってきた。」

「おかえりことりちゃん。」

「遅かったですね。」

「絵里ちゃんと真姫ちゃんもジュース買いに来てて、それでちよつと話しこんじゃって。」

ことりが部屋に入ると、寝間着姿の雪穂、穂乃果、海未がベッドの上に座ってテレビを見ていた。どうやらマフィアランドでも日本の番組は映るらしい。

ことりも同じく寝間着に着替えて、ベッドの上に座ってテレビを見る。

(言うって決めたけど…でもどうやって話を切りだそう…)

ツナのことが好きだということを言うかと決意したことりだが、なんと言って話を切り出していいかわからないでいた。

すると海未がことりの様子が少し変だということに気づく。

「どうしたんですかことり?どこか具合でも悪いのですか?」

「へ!?違うよ!色々あってちよつと疲れちゃっただけだよ!」

「そうですよね。今日は色々ありましたしね。」

とつさに嘘をついたであったが、海未は特に疑わず、今日あったことを思い出す。

すると雪穂が…

「今、思えばお姉ちゃんたちがツナさんとリボン君に、出会ったお陰だよ。こうやってこんなリゾートアイランドに無料で遊びに来られたのも。」

「そうですよね。何かお礼をしなければいけないかもしれませんね。」

「じゃあ、海未さんがツナさんの唇にキスでもしたらどうですか？」

「「な!?!／／／」」

(フフツ…ちよつとりボン君の気持ちかわかるかも。)

雪穂が表情をニヤニヤしながら提案すると、穂乃果、海未、ことりは顔を真っ赤にさせる。

そんな3人を見て雪穂は、いつもこういう光景を見て楽しんでいるリボンの気持ちを理解する。

そして3人が落ち着いたところで、穂乃果が口を開く。

「ねえ海未ちゃん、ことりちゃん。海外のライブを終えた時、μ sをもし続けるって言うてたらどうなってたかとか考えたことある？」

「まあ…少しくらいはありますけど…」

「どうしたの穂乃果ちゃん…?」

穂乃果が急にμ sを続けるかどうか考えた時のことを話し始めたことに、海未とことりは違和感を覚える。

「もしあの時にμ sを続けてたらさ、ツナ君たちに出会うことはなかったじゃないかなって思っ…もちろんあの時にみんなが続けたって言うたら、それはそれで楽しかったと思うよ。白蘭さんが前に言っ…たそういう世界…平行世界もあるんだと思うんだ。でもね…あの時に続けるって言うてたら、こんな風に過ごすことはできなかったんじゃないかって…」

「「…」」

穂乃果の話を海未、ことり、雪穂はただただ黙って聞いていた。

「ツナ君と出会ってまだ1ヶ月だけど、遊んだり、不思議なことが起こったり、色んな人に出会ったよね。そしてなによりみんながツナ君に恋して…ちよつと前までスクールアイドルとしてたくさんの人を笑顔にさせたって頑張ってきた私たちだけど、今はたった一人の男

(やっぱり気づいてるよね、いくら穂乃果ちゃんが鈍感だといつても。)

いくら穂乃果が鈍感でも、何度か怪しいところがあったので、気づいてるとことりは思った。

が…

「ん？ことりちゃんがツナ君のことが好き…？えーーーーー！？」

穂乃果は時間差でこたりの言っていることの意味を理解して驚きのあまり叫んでしまう。

「声が大きいです穂乃果！」

「だってことりちゃんが！」

(やっぱり気づいてなかったか…)

穂乃果が叫び声をあげたことに海未は注意し、ことりと雪穂は穂乃果の鈍感さを改めて実感したのだった。

このあと穂乃果がこわりに色々と尋ねたりした。

そして穂乃果の質問攻めも終わると雪穂が…

「あ！私は知ってるよ。ツナさんの好きな人。」

「「え!?／／／」」

「じゃあ、おやすみ。」

「ちよつと雪穂！…どういふこと!?何で雪穂がツナ君の好きな人を知ってるの!？」

そう言うとき雪穂は穂乃果の言葉を無視し、布団をかけて、眠りにつくようにする。

そしてベッドの中で…

(お姉ちゃんとツナさんが両思いだけど、これからどうなるか面白そうだな。)

なにげにリボーンの影響を受けている雪穂であった。

#標的 (ターゲット) 151 「恋バナ2」

時は真姫が部屋に戻った頃に遡る。

真姫がカードキーで部屋の扉を開けると、凜と花陽が寝間着姿で一つのベッドに座ってトランプをしていた。

「ただいま。」

「遅かったね真姫ちゃん。」

「ことりと絵里もジュースを買いに来てて、それで話しこんじやったわけ。」

そう言うとき真姫は、寝間着に着替え自分のベッドでナッツを撫で撫でしながら、凜と花陽がトランプしているのを見守る。

すると凜が…

「なんか一足早く、修学旅行に来たみたいだにや。」

「そういえば私たちも今年、行くんだよね。今年も沖縄かな？」

「今までそうだったし、たぶん今年も沖縄だと思うわ。」

凜、花陽、真姫は修学旅行のことについて話し始める。

3人は2年生になったので、穂乃果たちと同じなら秋ごろに沖縄に行くことになるはずである。

「修学旅行でマファイアランドに来られないかにや?。」

「まあ無理でしょ。予算的にも…というかマファイアランドはマファイアが作ったリゾートアイランドだし、仮に予算があつて、マファイアが作ってなかったとしても、予約がいっぱいで来られないわよ。」

凜の言葉に、真姫はマファイアランドに来るのは色んな意味で無理だということを実姫は冷静に分析する。

「でも…リボン君に言ったら来られそうというか…それどころかこのマファイアランドに来るだけじゃなくて、修学旅行で世界一周旅行とかになりそう…」

「それぐらいボンゴレの力があればやってやれなくはないぞ」とか言

「いそうね…」

リボーンの性格とボンゴレファミリーの財力を考えれば、本当にそれぐらいできるのではないかと花陽と真姫は思ってしまう。

「そうだったら凜は嬉しいにゃー!」

「確かに悪くはないけど、今まで修学旅行に行った先輩たちに悪いというか…」

「特に穂乃果は、「私も行くー!」とか言いそうね…」

もし仮に今年の本当に修学旅行が世界一周旅行になったたことを考える3人。凜は嬉しいというが、花陽と真姫はそうなった時の問題を考える。

とりあえず修学旅行の話はここで終わる。

「まだ寝るまで時間があるにゃ。」

「そうだよね。修学旅行なら消灯時間とかがあるけど今回は普通の旅行だし…修学旅行だったら枕投げとか…あと恋バナとか…!?／／／／」

花陽が修学旅行ならではのイベントである恋バナを顔を赤くしながら言うと、凜と真姫も顔を赤らめてしまう。

すると花陽は恋バナ提案してツナのことを考えて頭がおかしくなったのか…

「わ、私はその…!!／／／ツナさんが好きというか…その…!?／／／」

勝手に恋バナを始めてしまう。

「かよちゃん!?」

「私たちは言えとは言っていないわよ!」

花陽が想い人である、ツナのことをいきなり話し始めたこと、凜と真姫は驚いてしまう。

「あーごめんね…」

「別に謝らなくてもいいわよ。」

「そうだよ。かよちゃんは何も悪くないにゃ。」

「でもツナさんって…優しいんだよ…／／／」

「また語り出した! (にゃー!)」

再びツナの魅力を語り出した花陽に凜と真姫は再び驚いてしまう。

(かよちんってこういうのは恥ずかしがって、言わないタイプだと思っただけ、意外に喋るんだにや…)

(そういえばツナをお昼ご飯に誘ったり、一番最初にツナに告白しようとしてたっけ…花陽って自分じゃ気づいてないかもしれないけど意外に大胆なのよね…)

花陽の意外な一面に凜と花陽は驚くと同時に、ちよつとだけ見習わなければいけないと思った。

そして花陽の話は続き…

「私がこけたて迷惑かけたのに、何も言わずにに私のことおんぶしてくれて…／＼／＼その時のツナさんの背中が温かくて、そしてツナさんって優しいんだなって思っただけ…／＼／＼」

「お、おんぶ?!?!／＼／＼」

花陽がツナを好きになつたきっかけを話すと、真姫がおんぶされたということを知り顔が赤くして動揺してしまう。

あの時、真姫はいなかったので花陽をツナがおんぶしたという事実を知る。だがおんぶどころか真姫は超死ぬ気モードのツナにお姫様抱っこされた

のにも関わらず、動揺するのはどうなのだろうか？

すると花陽に触発されたのか凜も…

「じゃ、じゃあ凜も言うね…!!／＼／＼」

「えっ!」

自分の想い人であるツナのことを語ろうとする。

そして真姫はここでまさか凜が参加するとは思っていなかったのだ驚くと同時に、この流れでいくと自分も言わなければならぬのではないかと思う。

「凜はツナが私のことを可愛いって言うてくれて…／＼／＼それでツナのことを…／＼／＼」

「そ、それだけ…?」

「だって凜、今まで男の子に間違われたり、小学校の頃男子にスカートを履いてからかわれたりして、男子から見れば凜は女の子だと思われてないって思ってた…でもツナはどこから見ても普通の女の子で、普

通に可愛いって言うてくれたにや／＼／＼あれは凧がスクールアイドルやってたからそう言ったとかじゃなくて、私のことを一人の女の子として見て可愛いって言うてくれたんだにや／＼／＼

「ツナなら…そう言うわよよね。」

凧のツナの好きになつたきつかけを聞いて、真姫は納得する。

そしてとうとう真姫の出番になる。

「あとは真姫ちゃんだけだにや。」

「待ちなさいよ！そもそも恋バナをやるとか言っていないじゃない！花陽と凧が勝手に話し始めただけでしょ！」

「ずるいにや！凧とかよちは言ったんだよ！」

「そもそも私には好きな人はいないわ！だから話せることは何もないの！」

さつき絵里とことりの前でツナのことを好きだと言っていた真姫だが、ここでまたいつものように戻ってしまう。

そしてそんな真姫をナッツはジト目で見つめる。

「ガウ…」

「な、何よその目は!？」

まさかナッツにそんな目で見られると思ってもみなかった真姫は驚いてしまう。

「ほら！凧丸も真姫ちゃんがツナのことを好きになつたきつかけを言わないから、呆れてるにや！」

「何でナッツの言ってることがわかるのよ！それにツナのことは好きじゃないって言うてるでしょ！」

凧が勝手にナッツの言っていることを翻訳したことに真姫がツツコミをいれるが、あながち間違っていない。

そのうち凧は動物の言っていることがわかるようになるのではないだろうか。

「凧ちゃんもう止めてあげようよ…」

「ダメだよかよちん！ここで引き下がるわけにはいかないにや！」

「じゃ、じゃあせめてツナさんと何かあったぐらいにしようよ…」

「それなら…まあ…いいわ…花を貰ったわよ。誕生日プレゼントで

ね。」

花陽がそう言うのと、真姫はツナから赤いチューリップをもらったことを話す。正確に言えば、リボーンの策略であつたのだが。

赤いチューリップと言わなかったのは赤いチューリップ花言葉を二人が知ってるかもしれないので、あえて言わなかった。

「それから本当に大変だったわ。誕生日で花を貰っただけなのにママがツナのことを私の彼氏だと勘違いして。さらにママがツナのことを気にいっちゃうし、本当に大変だったわ。」

「花を貰った?」

「ツナさんから?」

「り、凜…?は、花陽…?」

ツナから花を貰ったと聞いて、凜と花陽は異様なプレッシャーを放つ。

そしてそれを見た真姫とナッツは恐怖するのであつた。

#標的（ターゲット） 152 「恋バナ3」

時は絵里が部屋に戻った頃に遡る。

絵里がカードキーで部屋を開けると、希、亜里沙は寝間着姿でベッドの上で髪をドライヤーで乾かしたり、にこ顔パックをはったりしていた。

「おかえりお姉ちゃん。」

「遅かったじゃない。」

「何かあったん？」

「ちよつと真姫とことりと出会って、話こんじゃってね。」

亜里沙、にこ、希がそう言うのと絵里も寝間着に着替え、髪をおろすと、バッグからくしを取り出すと髪をとかし始める。

「今日は色々とあったわね。まさか襲撃されるなんて思わなかったわ…」

「でもエリチはツナ君のこと好きになったんやし、そう悪いことばかりでもないやん。」

「へ!?!////そ、それは!////」

希が表情をニヤニヤさせながら言うと、絵里は顔を赤くして挙動不審になってしまう。

そんな絵里を見てにこが言う。

「ま、まあ…勝手にすればいいじゃない。せいぜい頑張りなさいよね。」

「他人事みたいに言ってるけど、にこっちもツナ君のこと好きなんやから、他人を応援してる暇なんてないんやない?」

「なななな!何言ってるのよ!?!////わ、私は関係ないでしょ!////」

「にこ…他の人は知らないけど、私は気づいてるわよ。なんか穂乃果たちと一緒に、禍禍しい殺気を放ってたし。」

「亜里沙も気づいてたよ!」

「な!?!／／／」

ずっと隠していたつもりであったが、希だけではなく絵里と亜里沙にもバレていたことに、ここは驚き顔を赤くしてしまう。

「そ、そういう希はどうなのよ!?!」

「あ、誤魔化した。」

「ご、誤魔化してないわよ! いいから言いなさいよ!」

「そうやねえ。ツナ君は男の子で私の気持ちを理解してくれた人やし、なにより抱きついた時の反応が可愛くて…!!／／／そんなツナ君の顔を見てたらもうゾクゾクしちやつて…!!／／／」

「の、希…?」

「本当に希って魔性のドSよね…」

希はツナの可愛い反応をした時のことを想像し、顔を赤くしながら興奮していた。

どこからどう見ても危ない人にしか見えない希を見て、絵里とここは若干どころか、かなり引いてしまう。

「そういえばツナ君の好きな人って、ウチらμ'sの

中にいるんやろ。誰なんやろうね。」

「占なってみればいいじゃない。」

「どうしたんにこつち。ツナ君の好きな人がそんなに気になるん?」

「ち、違うわよ!／／／こういう時はいつも占ってるじゃない!／／／」

「ウチの占いはよく当たるけど、100%じゃないし、ユニちゃんみたいに未来が見えるわけじゃない。仮に占って、占いが当たってたとしたら、にこつちどうするん? ツナ君の好きな人が自分じゃなかったら。」

「そ、それは…って私は別に関係ないわよ!」

希の言葉を聞いて、ここは再び顔を赤くして誤魔化した。
すると亜里沙が…

「私は知っているよ。ツナさんの好きな人。」

「ほ、本当なの亜里沙!?!」

「うん。」

「じゃ、じゃあツナ君の好きな人なは本当に私たちs 中にいるの!？」
「それは内緒だよ。これから頑張つてね、お姉ちゃん。」

亜里沙がウインクしながら言うと、絵里、にこはもの凄い気になつてしまう。一方で希は真剣な表情でツナの好きな人は誰なのか考へる。

すると部屋の扉が開かれる。

「ちやおつす。お前ら起きてるか。」

「せ、先生!？」

帽子をとり、青いジャージを着て、相棒のレオンを竹刀に変形させ、修学旅行で部屋を見回る先生になりきっているリボーンを見て、絵里は学校の先生だと勘違いしまつていた。

「俺だぞ。」

「リボーン君!？」

「き、気づかなかつた…」

「何で気づかないのよ…?」

青いジャージすばやく脱いで、いつもの黒いスーツの姿に戻ると、絵里と亜里沙が先生のコスプレをしていたのがリボーンだということにやっと気づく。

そして正体に気づかない二人に、にこは呆れ果ててしまう。

「どうしたんリボーン君?何かあつたん?」

「ただ様子を見にきたただけだ。何か困つたこととかないかと思つてな。」

「別にないわよ。」

「私も。」

「ウチも。」

「亜里沙も大丈夫。」

「そうか。ならいいんだ、邪魔したな。」

絵里、にこ、希、亜里沙の返答を聞くとリボーンはすぐに部屋の扉を出ていく。

「何だったのかしら?」

「さあ?」

リボーンが来たと思つたら、すぐに帰つたことに、にこと絵里は疑問符を浮かべる。

すると扉の前に何かが落ちていることに気づく。

「あれは…カード?」

希は部屋の前に落ちていたカードのところへ近づくと、カードを拾う。

(このカードにこの番号は…なるほどね。)

カードに書かれている番号を見て希は、これが何を意味するのか理解した。

そしてこのカードに気づいたのは希だけでなく…

(こ、これはツナの…)

(ここここれは!?!?!/確かツナ君の!?!?!/)

希以外にも二人ほどこのカードを見て、このカードに書いてある番号の意味について理解する。

(これで全員の部屋に置いてきた…あとはどうなるか楽しみだな。)

不敵な笑みを浮かべるリボーン、一体リボーンの思惑とは何なのであろうか!?

#標的（ターゲット） 153 「決行」

時刻は午後10時をまわる。

「あーあ…誰もいないし、なんか疲れたからもう寝よ。」

ベッドでそうぼやくと、ツナは部屋の灯りを消し、布団をくるまっ
て横になる。

そして1時間も経たないうちにツナは寝息をたてて完全に眠っ
てしまう。

そして時はツナが眠ってから4時間後、時刻は午前2時をまわる。

凜、花陽、真姫のいる部屋602号室では。

「そろそろだにや。」

凜がスマホの時計を見て呟く。

すると枕を持って花陽と真姫が起きないように、足音をたてずに部
屋から出ていく。

そして部屋から出た凜は扉をゆっくり閉めると、部屋の扉にもたれ
かかると、ポケットからカードを取り出す。

（ツナの部屋の扉のカードキー…何であんなところに落ちてたかわか
らないけどこれはチャンスだにや。）

このカードキーはリボンが部屋に入ってきた時にリボンがわ
ざと落としたのである。だが凜はこれがリボンがわざと落とした
ものだと気づいていなかった。

（確かツナの部屋は2階にあるから、エレベーターで行ってもいいけど…それだともし誰かに見つかったら面倒なことになるにや…。階段で行けば誰かの気配を感じたらすぐに逃げられるにや。じゃあさっそく行くにや。）

ツナのいる部屋まで行く方法を考えた凜はさっそく上に上がる階段を目指していく。

そして凜が部屋を出るほんの少し前…

穂乃果、海未、ことりの部屋である601号室。

「お、起きてませんよね…？」

ベッドの上で枕を抱きしめながら、ベッド寝ていることりと雪穂の様子を見る海未。だがなぜか穂乃果だけは部屋にいなかった。

（おそらく穂乃果は寝ぼけてどこかに行っただけ…あのあとカードがないか探しましたが、見当たりませんでした。おそらくリボン君が置いていったカードは1枚だけはず…）

海未はリボンがこのカードを落としたということに気づいていた。

そして海未は寝ている二人を起こさないように足音をたてないようにゆっくり歩く。

そして扉の前まで移動し、ドアノブに手をかけたその時。

「うくん？…あれ海未ちゃん…？」

ことりの目が覚めてしまう。

しかし海未はことりが起きたことに気づかず、そのまま扉を開けて部屋を出ていってしまう。

「どうしたんだろう…こんな時間に？」

こんな夜中に部屋から出ていく海未を見たことりは、何かあったのかと思ひ海未のあとを追っていく。

そして海未とことりが部屋から出ていったあと、絵里、亜里沙、にこ、希のいる603号室では。

「そろそろやね。」

希がスマホの時計を見て、そろそろ動く時だということを確信すると、希は枕とカードキーを持って部屋から出ていく。

そして部屋から出ると希、ルームキーを見つめる。

(これでツナ君の部屋に入れるんやね。ありがとうりボーン君。さてツナ君はどんな反応をするんやろ。楽しみやね。)

心の中でリボーンにお礼を言うと、希も他の人と同じくツナの部屋を目指していく。

だがまだ凜たちは知らなかった。すでにもうツナの部屋に辿りついている人物がいるということに。

それは…

「ツナ君…」

何を隠そう穂乃果であった。

海未の予想した通り穂乃果は寝ぼけてツナの部屋にやって来ていたのである。寝ぼけているとはいってもツナの部屋は穂乃果たちのある部屋より2階上にあるので普通は辿り着くはずがないのだ。なにより一番、驚くべきことは穂乃果はツナの部屋のカードキーを持っていないのにも関わらず浸入したことである。一体どうやって浸入したのであろうか？

そして今、穂乃果はツナの腕を抱き枕と勘違いしているのか、ツナの腕に絡みつき寝言を言いながら眠っていた。

そしてツナも横にいる穂乃果に気づかず…

「穂乃果ちゃん…」

寝言を言いながら眠っていた。

一体、これからどうなる!?

#標的（ターゲット） 154 「ラルの教え」

（あれは海未ちゃんと、ことりちゃん…？）

凜が部屋を出てツナの部屋に行く為の階段に向かってしていると、おそるおそるツナの部屋に行く為のエレベーターに向かう海未と、その様子を廊下に置いている170センチはあるであろう植木に、隠れて見ていることりを視界に捕らえる、二人を見た凜は廊下の曲がり角に隠れながら様子をうかがう。

（もしかして二人もツナの部屋に…どつちにしてもここでバレるわけにはいかないにや…ここを通らないと上に行く階段には行けないにや…そうだ！今こそラル教官の教えを実践する時だにや。）

凜はラルと修行したことを思い出す。

時はカルカツサファミリーとの戦いが終わった後のラルと修行でのことだった。

「今から潜入の基本を教える。よく聞いておけ。」

「はい！教官！」

「いい返事だ。潜入はまず敵に気づかれないことが第一だ。その為にもまず気配を消す特訓だ。気配を消すコツは静かに深呼吸し、自然と一体になることだ。こんな風にな。」

「す、すごいにや…目の前にいるのにまるでいないみたいだにや…」

ラルが目の前にいるのにも関わらず、全く気配を感じないことに凜は驚いていた。

そしてラルを気配を消すのを止めると、凜に命令する。

「まあこんな感じだ。やってみろ。」

「はい！」

そう言うのと凛は目を閉じて静かに深呼吸し、気配を消すことに集中する。

「自然と一体に…」

「そうだ。自然と一体になれ。自然はお前の一部でありお前は自然の一部だ。」

「凛は自然の一部…」

ラルの言ったことを復唱し、気配を消すことにさらに集中する凛。するとラルのアドバイスで何かコツを掴んだのか凛の気配がその場から消えていく。

「さすが飲み込みが早いな。あとは気配を消した状態で足音をたてずに動けるようになれるようになれば完璧だ。だが気配を消してもどうしてもバレそうになることもあるだろう。そういう時は何か音をたてるなどして敵の注意をそらし、その隙に気配を消して移動しろ。だがこれはどうしてもダメな時にしておけ、音をたてたことによって他の敵に気づかれるリスクがある。」

「はい！」

「よし。次は気配を消しながら移動をする特訓だ。あと気配消せるだけではダメだ、相手の気配を察知する方法も覚えてもらうぞ。」

こうして凛はラルから潜入の全てを教わった。

場面は再びホテル。

そして海未はツナの部屋にエレベーターの前につき、ことりもついでいく。

（だ、誰も見てませんよね…わ、私は別にツナ君と一緒に寝たいわけ

はなくて！／＼／＼ただツナ君の部屋がどんなものか見に行くだけであつて！／＼／＼何も下心があるわけでは！／＼／＼」

（エレベーター？それに何で枕を…はっ！もしかして海未ちゃん！ど、どうしよう！／＼／＼）

そう自分に言い聞かせる海未はとりあえずエレベーターのスイッチを押す。そしてここで、ことりは海未は何をしようとしたのか理解すると、ことりは顔を赤くして動揺してしまう。

（リスクは高いけど何か音をたてて二人の注意を反らすにや…そうだ！）

すると凧はズボンのポケットに手をいれると、ポケット中から包み紙に入ったアメを取り出す。

（おやつに持ってきておいたアメがあつたにや。これを壁投げて二人の注意をそらすにや。）

作戦を考えつくともまず凧は静かに深呼吸し、完璧に自然と一体となり気配を消す。

そしてアメ玉を壁に向かって投げる。

コンー！

「はっー！」

「きゃー！」

（今だにやー！）

海未とことりアメ玉か壁にぶつかった音に驚いた、一瞬の間をついで、気配を消したまま、目にも止まらぬ速さで二人の横を通りすぎると凧は安全な場所まで移動する。

そして後ろからの悲鳴に気づいた海未は…

「こ、ことり…？？」

「う、海未ちゃん！私は別にツナ君の部屋に行こうとしてたなんて思っただけよ！」

「ち、違います！誤解です！」

ことりがあることに顔を真っ赤にしながらかんとか言い訳を考える海未であつたが、枕は間に挟んでいたツナの部屋のルームキーが落ちる。

そしてルームキーに書いてある部屋の番号をことりは目撃してしまつた。

「ツナ君の部屋の番号…やっぱり海未ちゃん…」

「はあああああ！／＼／＼」

これでもう言い訳のできなくなった海未は顔を真っ赤にさせる。

こうして海未はツナの部屋に辿り着くことはできなかった。

#標的（ターゲット） 155 「押えきれない気持ち」

なんとか凜は海末とことりに気づかれずになんとか進むと、階段を登ってツナの部屋の階に辿り着く。

「はあはあ…なんとかここまで辿り着いた。あの様子だと海末ちゃんとかとりちゃんはツナの部屋まで来ることはなさそうだにや…」

この階に着いてホッとしたの束の間、凜がこの階に人の気配を感じ取る。

「人の気配がするにや…ここに泊まった人が起きたのか…凜と同じくツナの部屋を目指してるのかにや…?」

凜はラルの修行で気配を消すだけでなく、この階にいる人の気配にまで察知できるようになってしまっている。短時間でこれだけのことをできるようになっているのは凄いとしか言い様がないのだが、こんなことにこの能力を使っていることが残念である。

そして凜の言った通り、この階には他にも人がいた。

「どうとう着いたやん。ここがツナ君の泊まっている部屋がある階か…」

職員専用と書かれた扉からやってきた希。

希はリボンが他にもツナの部屋のカードキーを持っている人がいるのではないかということ予想し、職員専用の階段からこの階からやって来たのである。一番最後に出た希が凜、海末、ことりと出会わなかったのはその職員専用の階段を使ったからである。

「さて行くか。」

そして再び凜のいる地点。

「ここまで来たら突き進むだけ…あれ？」

凜がツナの部屋のカードキーをポケットから出そうとポケットの中から出そうとしたが、カードキーが無くなってしまっていることに気づいた。

「な、何でカードキーがないにや…？は！もしかして海未ちゃんことりちやんを振り切った時にカードを…どうしよう！」

カードキーを落としたことに気づいて凜は慌ててしまう。ここで引き返せばこの階にいる人がツナの部屋に浸入しようとしているのが、μ'sの誰かかもしれないと思った凜は引き返すこともできなかった。

（落ち着くにや…焦れば冷静な判断ができなくなるってラル教官も言ってたにや…考えろ、どんな最悪な状況でも打破する方法はあるにや…）

すると凜は天井に埋め込まれているエアコンを見る。

（あのエアコン…もしかしたら行けるかも…イチバチかの賭けだにや…）

そしてツナの泊まっている部屋である802号室。

「やっぱりこの方向であってたにや…」

凜はどうとうツナの部屋に辿り着く：天井から。

そう凜は廊下の天井に埋め込まれているエアコンを壊して浸入し、天井を通ってツナの部屋にやってきたのである。

そして凜はツナの部屋に設置されているエアコンを取り外すと、天井から飛び下りツナの部屋に浸入する。

「よし浸入成功だにや。：あれ穂乃果ちゃん!？」

凜はベッドでツナの腕に絡まって寝息をたてて、眠っている穂乃果を目撃して驚いた。

だが凜は穂乃果に嫉妬したのか頬を膨らませながらすぐにベッドに入り、ツナの左腕に絡みつきなから横になる。

「ツナの寝顔：ツナの匂いだにや：」

ツナの左腕に絡みついた凜は、ツナの温もりを感じる。

そして凜はしばらく温もりを感じていると、ツナと穂乃果を起こさないようにそっとツナの体の上にまたがる。

そして真剣な顔で凜は語り始める。

「ツナ。凜はツナのことを好きだにや。今でもツナの言ってくれたあの言葉、「凜ちゃんはどこからどう見ても普通の女の子で、普通に可愛いと思う」って言ってくれたこと、ずっと頭の中に焼きついてるよ。あれから凜、ずっとツナのことばかり考えて、ツナのことを考えなかった日は1日もないにや：それに知ってるんだよ、前に凜が渡したクッキー、本当は美味しくなかったってこと。家に帰って自分用のを食べてみたら美味しくなかったにや。私をがっかりさせない為に嘘ついてたんでしょ？でもそんな優しいツナだから、みんな好きになるったんだよ。自覚はないと思うけどね。」

凜は寝ているツナに向かって凜は、自分の想いを言っていく。そして自分の心臓の鼓動が段々と速くなっていくのを凜は感じていた。

「ツナの好きな人は^{私たち}、sの中にいるってリボン君は言ってた。凜は何度も考えたけどわからなかったよ：そりや凜じゃないかもしれない：でもね！／／もうこの気持ちを押しきれないにや！／／私は大好きなツナと一緒にいたいにや：!!／／結婚だつてできるな

らしたいって思ってるにや：!!／／料理は下手だけどツナの為なら頑張るにや：!!／／

凜は顔を赤くしながら、さらに自分の想いを伝える。

そして凜は自分の顔をツナの左耳に近づけると、ツナの耳元でささやく。

「大好きだにやツナ。」

そう一言だけ言うと、耳元から顔を離し今度は自分の唇をツナの唇へ近づけていく。

ツナの唇に迫り来る凜の唇！一体どうなってしまうのか!?

#標的 (ターゲット) 156 「凜と希の戦い」

凜の唇があと少しでツナの唇と重なる…と思われた時であった。ツナの部屋の扉の前に気配を感じる。

(だ、誰か来たにゃー! やっぱり凜が感じたのは^{私たち}μ'sの誰かだったんだにゃー!)

すると凜はすぐさまベッドを降りると、ベッドの下に隠れて息を潜める。

そして凜がベッドの下に隠れると、部屋の扉が開かれると、枕を持った希が入って来る。

「へー、ここがツナ君の部屋かー。広いんやね。」

希が小声で呟きながらツナの部屋をキョロキョロと見回すと、すぐさまベッドに寝ているツナと穂乃果を確認するとベッドに入ろうとする。

(あれ?もしかして凜ちゃん?)

ベッドの下からオレンジ色の髪が少しだけ見えており、ベッド下に凜がいるということに希は気がついた。

だが希は凜がいることに気づきながらも、あえて話しかけずツナを起こさないように気を使いながら、凜と同じようにツナの上にまたがる。

「可愛い寝顔やねツナ君。」

(この声…希ちゃん…)

「寝てるんなら避けられる心配もないし、こんなに無防備なら何やつても大丈夫やね。」

(の、希ちゃん何をする気かにな! ま、まさか! / /)

希はベッドの下にいる凜にわざと聞こえるように言うと言いつつ凜は希がさつき自分がやろうとしたこと…つまりツナにキスしようとしているのではないかと思ってしまう。

そして凜の予想は的中する。

「穂乃果ちゃんぐっすり寝てるし、起きる前に頂くのもありやね。ツナ君の唇。」

（や、やっぱり希ちゃん！／＼／＼）

「じゃあ、ツナ君のファーストキスを…」

「ダ、ダメにやー！／＼／＼」

ファーストキスという単語を聞いてすぐさまベッドの下から飛び出す凜。

だが希は凜がベッドの下から飛び出すだろうということを予想していたのか、ツナの体の上にまたがったままニヤニヤしていた。

（は、はめられたにや…！／＼／＼）

ニヤニヤしている希の顔を見て凜は、自分がベッドの下に隠れていたのを全てわかった上で、希が芝居うっていたということに気づいた。

「り、凜ちゃんが…な、何でここにおるん…?」

「もう演技はいいにや…」

「凜ちゃん以外にも、この部屋のカードキーを持つてる人がいたんやね。やっぱりリボン君は他の部屋にもカードキーを落としていったんやね。」

「え?あのカードキー、リボン君が落としたものだったのかにや?」

「気づいてなかったん凜ちゃん?」

「うん。そもそも凜はここに来る途中でこの部屋のカードキーを落としちゃったにや。」

「え…じゃ、じゃあどうやって入ったん…?」

「廊下に設置してあったエアコンを壊して、天井から浸入したのにや。」

「そ、それは予想外やね…」

さすがの希も天井から浸入してこの部屋から入ったと聞いて、驚いてしまっていた。

するとここで疑問が一つだけ浮上する。

「じゃあ穂乃果ちゃん一体どうやってこの部屋に入ったんだにや…?」

確かカードキーは海未ちゃんが持っているのを凜は見たんだにや…」
「そういえば、この部屋のカードキーの鍵穴のまわりになんか傷ついてたような…」

希は鍵穴になんか傷がついていたことを思い出し、凜はその言葉を聞いて穂乃果がどのようなにこの部屋に入ってきたのかはなんとなく理解するが、それはないだろうと思いついて自分の推理を否定する。

「まあ穂乃果ちゃんがどうやって入ってきたかは置いておいて…まずはツナ君の唇を…」

「ダ、ダメだにや!!／／ツナの唇は凜のものだにや!!／／」

「冗談やん。さすがに寝てる間にキスしたら、ツナ君がかわいそうやん。ツナ君の好きな人がまだわかってないんやし。」

「そ、それぐらいわかってにや!／／凜のほうこそ冗談だにや!／／」

さつき寝ているツナにキスしようとしていた凜は、希の言葉を聞いて動揺してしまう。

「その様子だとキスしようとしたんやね。」

「そ、それは…!!／／」

「まあいいか。じゃあさつきとツナ君と一緒に。」

そう言う希はツナの上にまたがった状態から、そのままゆっくりと倒れ、ツナの上で寝ることに決めた。

「ず、ずるいじゃ希ちゃん!凜もそこで寝たいにや!」

「早い者勝ち。それに知ってる凜ちゃん?男の子は胸の大きい女の子に興奮するんよ。この位置で凜ちゃんが寝ても凜ちゃんの胸じゃツナ君は喜ばんよ。」

「よ、余計なお世話だにや!ツナは胸の大きい小さいで女の子を差別なんてしないにや!それに凜の胸はこれから大きくなるんだにや!」

希に胸のことを言われて凜は反論する。

そしてこのあとも希と凜の戦いは続いたのであった。

#標的 (ターゲット) 157 「ツナの災難」

そして時刻は午前8時になる。部屋の窓から太陽の光がさしこむと、ツナは目覚める。

「う、うくん…？朝…？あれ？体が重たい…」

目覚めるとツナはすぐに体が重たいことに気づく。

そして自分の胸を上で寝息をたてている希を目撃する。

「の、希さん!? な、何でここに!?!」

希がいることに驚き、反射的に起き上がってしまったツナであったが、ここで両腕が重たいことにも気づいてしまう。

「り、凜ちゃん!? そ、それに…ほほほほ穂乃果ちゃん!?!」

凜が左腕にからみついて寝ていることに気づいて驚き、そして想い人である穂乃果が右腕に絡みついて寝ていることに気づくと、顔を真っ赤にしてツナは動揺してしまった。

「ど、どういうこと!? 何で3人がこの部屋にどうなってるの!? 鍵をかけておいたのはずなのにな!?!」

寝る前は一人であったのに、起きたらなぜかこの3人がいたこと、部屋に鍵をかけてあったのにも関わらず浸入されていたことに驚いてしまう。

(ほ、穂乃果ちゃんの寝顔…!! // // か、可愛い…!! // //)

ツナが穂乃果の寝顔を見てそんなこと思っていると、ドタドタというもの凄い足音が聞こえる。

するとツナの部屋の扉が開かれる。

「ツナ君、大丈夫ですか!? リボン君からツナ君が倒れたと聞いて… ななななにをしているんですか!? // // 」

「ツ、ツナ君!?! // // 」

「え!?! いや! 違うんだよ海未ちゃん、ことりちゃん! 俺にも何が何だ

かわからなくて！」

海未とことりが部屋に入ってくると、凜、希、穂乃果がベッドの上で一緒に寝ている光景を見て顔を赤くして動揺していた。

そしてこんな状況でさらに廊下からドタドタという足音が聞こえる。

「ツナさん大丈夫で：はあああああ!!／／／／」

「な、何やってるのよツナ!!／／／」

「こんなことをする奴とは思わなかったわよ!!／／／／」

「い、意外と大胆なのね：!!／／／／」

「ち、違うんです！誤解なんです！」

この光景を見て顔を真っ赤にして動揺する花陽、真姫、にこ、絵里に誤解だというツナだが、信じてくれるとは到底思えない。

そんな6人の後ろにニヤニヤしながら、この光景を面白そうな表情で見ているリボーンをツナは目撃してしまう。

(リボーン前の仕業かー！)

ニヤニヤしているリボーンを見てツナは、この出来事は全てリボーンが仕組んだということを理解した。

そしてリボーンが何事もなかったように去っていくと同時に、ここで海未の嫉妬が爆発し、顔を真っ赤にしながら今だに起きない3人に向かつて言う。

「希！凜！穂乃果！起きなさいー！」

「うくん…もう朝…？」

「まだ眠いにや…」

「あと5分…」

海未の叫び声で目覚める3人であるが、まだ眠り足りないのか起きる様子はない。そんな3人に怒り覚えたたのか海未はプルプル体を震わせながら叫ぶ。

「いい加減にしなさいーいー！」

「ひひひひひひー！」

「ガウ…」

海未の怒りが爆発し、ツナと真姫の肩の上に乗っているナッツが怖

がってしまおう。またこのせいでナッツは海未に対してさらに恐怖してしまっていたことを海未はまだ知らないのであった。

そして希、凜、穂乃果、そしてなぜかツナまで正座させられてしまおう。

(何で俺まで…)

自分は何もしていないにも関わらず、正座させられてしまっていることにそう思ってしまったが、仁王立ちして鬼のような形相をしている海未にツナは何も言うことができなかった。

(ど、どうしよう…ツナと一緒に寝たくてここに来たけど…その後のことは考えてなかったにや…どうしよう凜のこと嫌いになったりしてないかにや…?)

(ツナ君と寝ちゃった!／＼ツナ君と寝ちゃった!／＼)

凜はツナに嫌われてしまうんじゃないかと思い、穂乃果はツナと寝てしまっていたことに顔を赤くして顔を俯けてしまっていた。

「それで?なぜツナ君の部屋で寝てたんですか?」

「なぜって?そりやもちろんツナ君の部屋で寝たいと思ったからやん。」

「希!反省しているんですか!」

反省の色を見せない希に海未は怒っていた。だがここで希の逆襲が始まる。

「そういうえばこの部屋のカードキーを持って、入ろうとした人が他にもいたって聞いたんやけど、誰やろうね。」

「そ、それは!／＼／＼」

表情をニヤニヤさせながら希が言うと、夜中にツナの部屋に行こうとしていた海未は顔を赤くさせてしまう。

そしてこの海未の反応で花陽、真姫、にこ、絵里がジト目で海未のことを見始める。

「え?俺の部屋に?も、もしかしてマフィアが俺の命を狙ってきたとか…?」

希の話聞いてマフィアが自分の命を狙って、浸入してきたとツナは勘違いしてしまう。やはりどこまでも鈍感である。

「え!?!ツナ君がマフィアに!?!」

その一方で穂乃果も希の言葉の意味をわかっておらず、ツナの言った言葉を間に受けてしまう。

「違うにや。狙われたのはツナの命じゃなくて、ツナにく「凜!ハレンチです!」」

希に便乗して凜がニヤニヤさせながら言おうとすると、海未は顔を真っ赤にさせて凜の言葉を遮る。おそらく海未はベッドの上でツナとキスをする姿を思い浮かべたのであろう。

「え?何?」

「何って言ったの?」

「何でもありません!／＼／＼」

ここまで言ってもツナと穂乃果は凜の言っている意味を理解できていなかった。

そしてこのあと海未は説教しようにも、夜中のことをツナにバレることを恐れほとんど説教はしなかった。

そして事件?は、凜と穂乃果（穂乃果は本当に寝ぼけていた）は寝ぼけてツナの部屋に来てしまったということになった。

#標的 (ターゲット) 158 「記念撮影とお土産」

朝の騒動も終わり、ツナたちは朝食を取ったあと、帰る準備をする。帰る準備を終え、ホテルを出たあとトリボーンの提案でマフィア城の前で記念写真を撮ることになった。

—マフィア城—

「昨日は襲撃のせいでゆっくり見れなかったけど、やっぱり大きいよねー。」

「マフィアランドの象徴シンボルなんだよねー。」

穂乃果と雪穂がマフィア城を見上げて眩く。

するとトリボーンがマフィア城のことについてのことを説明する。

「マフィア城は結婚式場としても使われることもあるんだぞ。ここで永遠の愛を誓うマフィアも少なくないんだぞ。」

「「「「け、結婚!」「」」」」

「へー、そうなのか。」

「素敵! 亜里沙も結婚するならこういう場所で結婚したい!」

結婚という単語を聞いてツナ、希以外のμsのメンバーはここで結婚する姿を想像して顔を赤くし、山本は普通に感心し、亜里沙は目を輝かせていた。

そしてツナたちはマフィア城の前に整列する。

「んじゃ、撮るぞ。」

レオンを三脚カメラに変形させ、カメラのスイッチを押すとトリボーンは山本の肩に急いで乗る。そして時間差でカメラのシャッター音が鳴り写真撮影が終わる。

「あと写真が焼き上がったら、写真は後でお前らの家に送るからな。家の住所は全員知ってるから教える必要はねえからな。」

「ありがとうりボーン君。」

「何で全員の家の住所を知ってるのよ…」

リボーンの住所を知っているという単語を聞いて穂乃果は何も気にせずお礼を言うが、ここはリボーンに家の住所が知られていることに若干、恐怖していた。

「記念写真も撮ったし、次はお土産でも買いにいくか。」

「お土産か、母さんたちや炎真にも何か買って帰ろう。」

「俺は自分用に。」

「俺も野球部の奴らに買って帰るぜ。」

お土産と聞いてツナ、獄寺、山本は誰のために買って帰ろうか考える。

そしてリボーンのご案内のもと、ツナたちはお土産屋に向かう。

「み、見てください十代目!」

「あ、あれって…」

「こ、これは!」

「可愛いにやー!」

お土産屋に入ると獄寺、ツナは驚き、穂乃果と凧は目を輝かせていた。そこにあつたのは匣ボックスアニマルであるナッツ、瓜、次郎、小次郎のぬいぐるみが置いてあつたからである。

「お前らの匣ボックスアニマルのぬいぐるみの発売が決定したんだぞ。今はナッツと瓜と次郎と小次郎だけが、今後も他の匣ボックスアニマルのぬいぐるみの発売予定だぞ。」

「私これ欲しい!」

「凧も欲しいにやー!」

「私も買おうかな。」

匣ボックスアニマルのぬいぐるみを見て穂乃果、

凧、ことりは目を輝かせていた。

「こんなの発売してたんだ…」

「まあ俺が提案したんだがな。あとお前がボンゴレを継いだらボスで

あるお前と守護者のグッズの販売も予定されてるぞ。」

「俺はマフィアのボスにはならないって！」

（ツナ君のグッツ…は！私は何を!?）

（ほ、欲しいなんて思っただけじゃないんだから！）

いつものように、リボーンの発言にツツコミをいれるツナ。その一方でツナのグッツが販売と聞いて海未と真姫はもし発売されたら欲しいと思っただけで済んでいた。

「ツナ君のグッツが発売されるんだね。なんかスクールアイドルショップみたいだね。」

「いや発売されてほしくないんだけど…それよりもスクールアイドルショップとかあるの？」

「うん、秋葉原にあるんだよ。スクールアイドルグッズの専門のお店なんだ。」

「へ、へえー、そうなんだ。」

穂乃果からスクールアイドルショップというものがあると知ったツナは、明日にでも行ってみようかと心の中で思っただけで済んでいた。

ツナがそんなことを思っていると、お土産を見ていた獄寺が目の色を変える。

「へ、これは!?」

「どうしたの獄寺君？」

「大変です十代目！ここに世界の謎と不思議の幻と言われた初刊が…！」

そう言うと獄寺は世界の謎の不思議と書かれた、UMAやこの世の七不思議についての特集が書かれている雑誌を見せる。

「初刊は発行部数が少なく、マニアの中でも幻と言われているんです！」

「へ、へえ…そ、そうなんだ…」

いつになく目を輝かせる獄寺に、ツナは驚いてしまいそう言うのがやっとであった。

「このお土産には表の世界から流れついた商品も入ってくるんだ。中には限定版だとか、表の世界の店や通販じゃ手に入らねえ商品とかも

な。」

「凄いけど…本当にお土産屋なの…?」

リボンがこのお土産屋について説明すると、絵里は本当にこの店がお土産屋なのかと思ってしまうていた。

するとお土産屋の一角から花陽の驚きの声上がる。

「こ、これは！に、にこちゃん！ちよつと来て！」

「何よ花陽？どうたのよ？」

「こ、これ！伝伝よりもさらに希少な…」

「な!?わ、私でも入手することができなかった幻の…しかも3つも!」

幻のアイドルのグッズを見つけて花陽とにこは興奮してしまっていた。

「限定版の占いグッズに雑誌まで！ウチがずっと欲しかったのがこんな!」

いつもはあまり感情をこんな表に出さないし希も、目の前にある商品を見て興奮してしまっていた。

こうして全員、お土産屋を堪能したのであった。

#標的 (ターゲット) 159 「さらばマフィアランド」

そしてお土産を買ったツナたちはとうとうマフィアランから帰ることになり、豪華客船が止まっている港に移動していた。

そしてツナたちを送る為にラル、了平、バジル、ランチア、コロネロが見送りに来る。

「バジル君とお兄さんはまだ残るんだ…」

「はい。拙者は明日まで。」

ゴールデンウィーク

「ああ。G Wまでコロネロと師匠と極限に修行するつもりだ！沢田、山本、タコヘッド、卒業に向けて極限に頑張れよ！」

「は、はい。」

「うっす。」

「卒業が危なかったためえに言われたくねえんだよ…」

了平に頑張れると言われてツナと山本は普通に返事するが、勉強が苦手な了平に言われて獄寺は複雑な気分になってしまっていた。ちなみに了平はボクシングで優秀な成績をおさめていたので、高校も大卒もスポーツ推薦でいっているのである。

一方で凧とラルは

「帰っても修行を怠るなよ凧。あと、これは俺が作った練習メニューだ。お前ならこなせるはずだ。」

「はいにや教官！短い期間だったけど、色々と教えてもらってありがとうございます！ありがとうございましたにや！」

凧が敬礼しながら言う。もう会話からしてどこからどう見ても、凧とラルはどこからどう見ても師弟関係にしか見えなかった。

「お前らもツナと頑張れよ、コラ。」

「う、うん！／＼／＼頑張るよ！／＼／＼」

「が、頑張ります！／＼／＼」

「わ、私も！／＼／＼」

コロネロがツナに聞こえないぐらいの声で言うと、穂乃果、ことり、花陽は顔を赤くしながらも頑張る意気込みを見せた。希とラルと話している凧以外のメンバーは顔を赤くしたままであった。

「ランチアさんもありがとうございます。また助けてもらって。」

「」「ありがとうございます！」「」

「気にしないでいいと言ったはずだ。俺は島の護衛としての仕事を果たしたにすぎん。」

ランチアにツナとラルと話している凧以外のメンバー、雪穂、亜里沙は丁寧に頭を下げてお礼を言うと、ランチアは気にするなと言う。

「マファイアランドの護衛が終わったら、また旅を続けるんですか？」

「ああ、そのつもりだ。」

「そうですか。大変だと思いますけど頑張ってください。」

ツナはランチアに頑張れとそう一言だけ言う。というよりも、罪を償うことがどれだけ大変かということか、わからなかったので、頑張れと言うことしかツナにはできなかったのだ。

そして船が出港する時間がやって来ると、リボーンが全員に言う。

「そろそろ船が出港するぞ。早く乗れ。」

「じゃあ、もう行くね。父さんに会ったら、元気にやってるって伝えておいてバジル君。」

「はい。そのように親方様に伝えておきます。」

ツナの父である家光は忙しすぎて、帰ってくることはないのでは家光の部下であるバジルに伝言を頼むと、バジルは了承する。

そして、船に乗るとすぐに出港し、船の上から了平、バジル、ランチア、コロネロのほうを全員ではないが手を振って別れる。

こうして短かったような、長かったような1泊2日のマファイアランドの旅はこうして終わったのであった。

#標的（ターゲット） 160 「帰りの客船」

スーパードリームリゾートアイランドであるマフィアランドを後にしたツナたち。

その帰りの豪華客船の甲板にて。

「もうマフィアランドが小さくなってきた。」

「あつという間でしたね。」

「また来たいなー。」

マフィアランドから出港し、ツナ、獄寺、穂乃果は段々と小さくなっていくマフィアランドを船の甲板から見て眩く。

するとリボーンがあることを伝える。

「まだ旅行は終わってねえぞ、家に帰るまでが旅行だからな。」

「家に帰るまでが遠足みたいに言うなよ…」

「最後まで油断は禁物ってことだ。家に帰るまでに、マフィアが襲ってくるかわからねえからな。特にお前はボンゴレ十代目なんだからな。」

「俺はマフィアのボスにはならないって言ってるだろ！それに物騒なこと言うなよ！」

リボーンの手紙にいつものようにツナはツッコミをいれる。

するとここで再びリボーンがある提案する。

「まだ町に着くまで3時間くらいある。この船には温水プールがあるから、遊んできたかどうか？さつき見てきたが、人はほとんどいなかったぞ。水着も無料でレンタルしてしな。」

「温水プール！行きたい！行きたい！」

「おもいつきり泳ぎたいにゃ！」

「俺も体、動かしてえな。」

温水プールと聞いて穂乃果、凜、山本は興味を示す。

（プールということは水着…!!／／ツ、ツナ君の前で肌をさらすなんて…!!／／／）

その一方で海未は、想い人であるツナの前で水着の格好になることに恥ずかしさのあまり顔を赤くしてしまっていた。

そして花陽は…

「プールか…」

「どうしたの花陽ちゃん？プールは嫌だった？」

「嫌というわけじゃないんですけど…あんまり泳ぐのは得意じゃなくて…」

「よかったら、俺が教えてあげるよ。一緒に泳ぐ練習しない？」

「え!?!／／／」

まさかツナが教えてくれると展開になり、花陽は顔をほんのりと赤くしながらも、少し笑顔になり喜んでしまっていた。

そんなことを花陽が思っているとも知らずツナはさらに続ける。

「俺も中学の時とか全然泳げなかったし、泳げない人の気持ちはわかるよ。大丈夫だよちゃんと手を繋いでてあげるから。」

「な、ならお願いします…!!／／／ず、ずつと離さないでください…!!／／／」

「ごめん花陽ちゃん。最後のほう聞きとれなかったんだけど。」

「い、いや!!／／／何でもありません!!／／／」

ずつと離さないでくださいという言葉の部分で聞こえなかったツナは花陽にその部分について尋ねるが、花陽は顔を赤くしたまま何でもないと言う。

だがツナが教えるだけでなく、手を繋いでくれると聞いて穂乃果たちが黙っているはずもなく…

「ツ、ツナ君だけに任せるのもアレだよね！」

「そ、そうだよ！」

「ここはみんな花陽ちゃんに教えようよ！」

「そ、そうね！今でだってみんな協力しあってきたんだし！」

「え!?!」

ツナと花陽が二人つきりになることを恐れて穂乃果、凜、ことり、絵里は必死になって二人つきりになることを阻止しようとする。そして二人つきりになるチャンスがなくなりそうになり、花陽は戸惑って

しまう。

「大丈夫だよ。俺一人でも。」

「いえ！ここは全員の協力が必要かと！」

「え…でも…」

「いいですから！」

必死に二人つきりにさせるのを阻止しようとする海未にツナは少し戸惑ってしまっていた。

「また修羅場やね。」

「ツナさんって、本当に凄いやね。」

「また面白そうなことになってきたな。」

「本当だね。」

いつものように希、亜里沙、リボン、雪穂はこの光景を見守る。

はたしてこの修羅場、どうなる!?

#標的（ターゲット） 161 「凜の教え」

温水プールに移動するツナたち。そして更衣室でそれぞれ水着に着替える。

ツナ、獄寺、山本、リ先に着替えてプールサイドで待っており、リボーンはすでにプールでサンングラスをかけて、レオンを變形させたマットタイプの浮き輪の上でくつろいでいた。

「自分が言い出したこととは言っても、プールで俺が泳ぎを教えるなんてなー。そういえば中2の時もみんなに

教えてもらったけ。」

「そういえば、そんなこともありましたね。」

「でも本番はまさかの平泳ぎだったよな。」

ツナ、獄寺、山本は中学時代の時にプールでクロールの練習をしたこと、せつかくクロールができるようになったかと思えば、本番の平泳ぎになったことを思い出していた。

中学時代の出来事を思い出していると、水着に着替え終わった穂乃果たちがやってくる。

「お待たせー！ツナ君！」

「あ…!!／／／」

オレンジ色のビキニを着た穂乃果がプールサイドを走りながらやって来る。穂乃果のビキニ姿にツナは顔を赤らめながら見とれてしまう。

「ほ、穂乃果！走ったら危ないですよ！」

「海未ちゃん、どうして後ろに隠れてるの？」

白のビキニを着たことりの背中に隠れながら、青いビキニを着た海未が穂乃果に向かって注意する。後ろに隠れているのはツナに自分の水着姿を見られるのが恥ずかしいからである。

すると…

「ツナ！」

「り、凜ちゃん!？」

「凜!てめえいつの間に!離れる!」
猫女

後ろから気配を消し、黄色いビキニを着た凜がツナに抱きついてくるとツナは顔を赤くする。

それを見た獄寺が水着姿であるにも関わらずどこからかダイナマイトを取り出す。

「り、凜ちゃん!／／／／」

「急に大胆に!?!／／／／」

「凜!ハレンチです!／／／／」

「ちよつと凜!／／／／どうしたのよ!!／／／／」

「ウチは気づかれるのに:どうしてなん?」

凜の行動に緑色のビキニを着た花陽、穂乃果、海未、赤色のビキニを着た真姫は動揺し、希は凜がツナに気づかれずに抱きついていたことに疑問を浮かべていた。

すると凜がツナから離れると。

「どうだったにや?全然、気づかなかったかにや?」

「うん:でもどうしたの急に?」

「ちよつと気配を消して、ツナを驚かせてみようかと思っただけにや。どうだったにや?」

「ぜ、全然気づかなかった:」

ツナは背後から抱きついてきた凜に全く気づかなかったことに驚いてしまっていた。

(ツナの肌の温もりを感じられて嬉しいにや、ツナって以外にがつちりしてるにや!／／／／)

なんだかんだで凜はツナの体の温もりを感じて、心の中で喜んでしまっていた。

「にしてもすげえな星空。全く気配を感じなかったぜ。よかったら俺にも教えてくれよ。」

「いいけど、急にどうしたのにや?」

「気配を消せたら、授業で先生に当てられなくてすむんじゃないか」と

思つてよ。」

「あ！それは思いつかなかつたにや！天才だにや！」

「しようもな……」

「何、考えてるのよ……」

「気配が消せても、姿が消えるわけじゃないと思うんだけど……」

ピンク色のビキニを着たにこ、水色のビキニを着た絵里、灰色のビキニを着た雪穂が山本と凧の会話を呆れた表情で言う。

「まずは静かに深呼吸するにや、それから自然と一体になるにや。コツはゴゴゴゴ……シーンって感じだにや！そうすればうまくいくにや！」

（山本が俺に泳ぎを覚えてくれた時と同じなんだけどー！凧ちゃんやっぱり山本とそっくりだー！）

凧の教えが中学時代に泳ぎを覚えてもらった時の山本と同じことにツナは驚いてしまっていた。

「ゴゴゴゴ……シーンか……こんな感じか？」

「できてる!?!」

「何で今のでわかるんですか!?!」

「この二人、波長が似てるのね……」

「それにしても凄すぎよ……」

「スピチチュアルやわ……」

なぜか今の凧の教えで理解し、気配を完全に殺すことができてしまっていたツナ、海未、絵里、真姫、希、は驚いてしまっていた。

「私も教えて！私も授業中に当てられたくない！」

「穂乃果ちゃん……授業中いっつも寝てるよね……」

「じゃあ意味ねえだろ……」

「気づいてないのかな……?」

（穂乃果ちゃんって本当に天然だけど……そこがまた可愛いなー。）

ことりが穂乃果が授業でいつも寝ているというのを聞いて獄寺、花陽は呆れてしまい、ツナはそんな穂乃果にも可愛いと思ってしまうのであった。

このあと頑張ったが穂乃果は気配を消せなかった。

#標的（ターゲット） 162 「爆弾発言」

「いづくにやー!」

凜がプールの飛び込み台から飛び降りると、プール内に水しぶきが上る。

「ぶはっ! 気持ちいいにや! 穂乃果ちゃんたちも早く早く!」

「よーし! いづくよー!」

凜が飛び込み台の上にいる穂乃果に向かって言うと、穂乃果は勢いをつけて飛び込み台から降りていく。そして再び、プールに水しぶきが上がる。

「うわー 勇気あるよね、凜ちゃんと穂乃果ちゃん。あんな高いところから迷いなく降りるなんて。」

「穂乃果は昔から高い所が好きなんだよね。」

「そのせいでどんな目にあったことか…」

ツナ飛び込み台から何の迷いもなく飛び降りる凜と穂乃果を見て呟く。そしてことりと海未は子供の頃に穂乃果と木に登って、あとで大惨事になったことを思い出していた。

一方で絵里と希は

「負けないわよ希!」

「こつちもやん!」

さつきらビーチバレーで遊んでおり、さつきからビーチボールが高速で行き来していた。

「すっげえ… 水の中で動きにくくなってるのに…」

「お姉ちゃんも、希さんも頑張っつてー!」

ツナはビーチバレーしている希と絵里を見て驚き、黒いビキニを着た亜里沙は応援していた。

「全く、どいつもこいつも子供ね。」

「それよりもご先輩、足届いてないっすよ。」

「どう頑張っつても届かねえだろ。」

「あきらめも肝心よ。」

「うるさいわね！余計なお世話よ！」

プールサイドでビーチチェアでサングラスをかけて寝そべり、さつきからビーチチェアの先に足を伸ばそうと奮闘するにこを見て、山本、獄寺、真姫が言う。

「どうしよう…泳ぎの練習…みんなで教えるって言ってたけど…」

「まだ時間はあるし、そんなにすぐじゃなくてもいいですよ。」

「あ…そう？」

花陽が泳ぎの練習をすぐにやらなくてもいいと言ったので、ツナもまだすぐにやらなくてもいいかと思ってしまう。

すると雪穂がツナに小声で話しかけてくる。

「ツナさん。」

「どうしたの雪穂ちゃん。」

「お姉ちゃんの水着姿、どうですか？」

「な!?／／／」

雪穂が表情をニヤニヤしながら言うと、まさかそんなことを言われるとは思ってもみなかったツナは顔を赤くして驚いてしまう。

「ゆ、雪穂ちゃん!?／／／何言ってるの!?／／／」

「だって大好きな、お姉ちゃんの水着姿を見て何も思わないなんてツナさんならありえないと思って。」

「そ、それは!／／／」

ツナは雪穂に追い討ちをかけられて、さらに顔を赤くしてしまっていた。

そしてツナと雪穂が小声でコソコソと話していることに、獄寺と海未が気づく。

「十代目どうかしたんですか？」

「さつきから何か話していますが…あれ？ツナ君、顔が赤いですよ。」

「な、何でもないよ!?気にしないで！」

「ま、まさか!／／／ハレンチなことを話してたとか!？」

「いや！違うよ海未ちゃん！」

「最低…」

「そんなこと考えてたのね…」

海未の発言にツナは両手をぶんぶんと振って否定するが、にこと真姫は冷たい目でツナを見ていた。

「おいてめえら！十代目に妙な言い掛りつけてんじゃねえ！」

「ツナさんはそんな人じゃないよ…」

「そうだよ。」

「獄寺君…花陽ちゃん…ことりちゃん」

自分のことを庇ってくれる3人にツナは感動するが、雪穂の言葉を意識してしまい穂乃果の水着姿を見てちよつとだけやらしいことを考えてしまっていたので、申し訳ない気持ちになる。

「じゃ、じゃあ何を話してたんですか!？」

「い、いや…!?それは…その！」

海未に問い詰められ、ツナは答えに困ってしまう。そしてあまり答えるのに時間がかかると怪しまれてしまうので、ツナが出した答えは…

「ほ、ほら！μ、sってみんな可愛いよねーって…」

「！！「な!？」！！」

「あ…」

ツナは追い詰められてμ、sのことを可愛いと言ってしまふ。そしてその発言に海未、ことり、真姫、にこ、花陽は顔を真っ赤にしてしまっていた。

「きゅ、急に!!／／／／」

「変なことを!!／／／／」

「言わないでください!!／／／／言わないでよ!!／／／／」

「ぎゃー……」

「十代目……」

恥ずかしさのあまり、気が動転した海未と真姫に突き飛ばされてツナはプールに落とされるのだった。

#標的 (ターゲット) 163 「獄寺と真姫の理論」

そしてなんやかんやで花陽の泳ぎの練習が始まり、ツナと花陽はプールの中に入る。ちなみに雪穂と亜里沙も一緒泳ぎに行つてしまつていた。

「じゃ、じゃあ始めようか…」

「は、はい…大丈夫ですかツナさん？」

「だ、大丈夫…」

海未と真姫に突き飛ばされて、ツナの顔はちよつとだけ顔が腫れてしまつていた。

「それで穂乃果たちは、結局遊んだままですか…」

「ま、まあ全員で教えるのもアレだし…」

今だに遊んでいる穂乃果たちを見て、海未とことりが呟く。

「とにかく始めようぜ。泳ぐ時はスイーとウンツパウンツパってやればいいんだぜ。」

「え、えつと…」

「あんたも!?!」

「だからその教え方は何なんですか!」

「この野球馬鹿!もうちよつと考えながら言え!」

山本がクロールの動きをしながら、さつき凜から

気配の消し方を教わつた時のような教え方で言うと、花陽は戸惑つてしまい、にこ、海未、獄寺はツツコミをいれてしまつていた。

そして山本に任せておけないと思つたのか、ここで獄寺が立ち上がる。

「まったく!野球馬鹿に任せておけねえ!十代目見ててください!俺が手本を見せてやります!」

(ま、まさか…)

獄寺の言葉に、ツナは嫌な予感がしてしまう。

すると獄寺は眼鏡をかけ、どこからかホワイトボードから取り出すところに色々と図を書いていく。そして学校の先生が授業などでよく使う指示棒を使って説明を始める。

「いいか耳の穴かっぽじって、よく聞いとけよ。まずうまく泳ぐには重力と浮力の重心がだな…」

(やっぱり出た！獄寺君の理論指導！)

「え、えっと…」

「さつきよりまともなのですが…」

「全然わかんない…」

「あなたのまわりには、まともに教えられる人はいないわけ!？」

獄寺の理論指導にツナはやっぱりと思ってしまう、花陽、ことりは獄寺の言っていること、ホワイトボードに書かれていることの意味がわからず、頭から煙をあげてしまっていた。

そしてにこは山本と獄寺がちゃんと教えられていないことにツッコミをいれる。

するとここで真姫が立ち上がる。

「見てられないわね。」

「んだと?」

「あなたのその教え方じゃダメだって言ってるのよ。」

(やっぱり真姫ちゃんってすごい…あの獄寺君に一步も引かない…でも真姫ちゃんならうまく教えられるかも…)

ツナは真姫ならうまく教えられるであろうと期待していた。

だが…

「ここが間違ってるわ。ここをこうしないと。」

(図-!?)

獄寺の書いた図の一部を消して、書き直す真姫を見てツナはツッコミをいれてしまっていた。

「いやー！てめえのほうが間違ってる。ここはさつきのままでいいんだよー!」

「何よー!ここはこうじゃないと、辻褄があわないって言ってるでしょー!」

「お前のその理論はアテにならねえ！」

「何ですって！あんたの理論のほうアテにならないわ！」

「んだと!？」

「何よ!？」

「ここで獄寺と真姫は火花を散らし、お互いの理論が正しい、正しくないの喧嘩が始まってしまっていた。

「あ、あの二人とも落ち着いて…」

「そうですね！そもそも花陽に泳ぎを教えるんじゃないんですか!？」

「まず理屈がわかってねえと、できるもんもできねえだろうが！」

「そうよ！花陽、待ってなさい。今すぐこいつよりも正確な理論で、すぐに泳げるようにしてあげるから。」

花陽と海未が件している獄寺と真姫に言うが、二人とも聞く耳を持たない状態である。

「そこまで言うなら俺の理論とお前の理論、どっちが正しいか勝負だ！」

「望むところよ！」

そう言うのと獄寺はホワイトボードの表面、真姫はホワイトボードを裏面に自分の理論を書いていく。

「お？なんか勝負が始まったぞ。」

「この二人…頭が良すぎて逆に教えるのがダメね…」

「花陽ちゃん、練習しよっか…」

「はい…」

獄寺と真姫の対決を見て、山本、にこ、ツナ、花陽が呆れた表情で
呟く。

結局、ツナが花陽を教えることとなったそうです。

#標的 (ターゲット) 164 「自信を持って」

山本と獄寺の教え方ではダメだったので、結局ツナが教えることになり…

「じゃあ手を繋いでてあげるから、とりあえずゆっくりやってみよつか。」

「は、はい…!!／／／」

ツナがそう言うと、花陽は両手をおそろおそろ前に出すとツナが花陽の両手を優しく握ってきた。

(ツ、ツナさんと…!!／／／て、手を…!!／／／)

「どうしたの花陽ちゃん?顔が赤いよ?」

「だ、大丈夫です…!!／／／」

花陽はツナと手を握っていることに、ドキドキしてしまったのか顔を赤らめてしまっていた。

そしてそれと同時に、ツナと手を握っている花陽に、希以外のμsのメンバーからも凄い殺気が送られていた。

その殺気を感じとったのか、さつきまで赤かった顔が急に真っ青になってしまう。

(こ、怖いよー!だ、誰か助けてー!)

「花陽ちゃん…本当に大丈夫…?顔が赤くなったり真っ青になったりしてるけど…?」

ツナは顔が赤くなったと思ったたら急に真っ青になってしまったという花陽に気づき、心配していた。

そしてそれと同時に…

(なんか凄い殺気を感じるのになぜだろう…?)

花陽に向けられていた殺気に気づいたはいたが、なぜ花陽に殺気が送られているのかというのはいかなかった。

そしてようやく泳ぐ練習が始まっていく。ツナが花陽の手を引つ

張っていく。

「その調子だよ。」

「プハッ！」

「さつきより、少しだけど距離が伸びたね。」

「す、すいませんツナさん…中々うまくならなくて…」

「気にしないでいいよ花陽ちゃん。少しずつ上手にやっついていけばいいんだし。俺なんてここまで上達するまでもっと時間はかかってたし、花陽ちゃんは凄いなと思うよ。」

（本私の為に泳ぎの練習に教えてあげようかって言ってくれただけでも優しいのに、中々上達しない私に嫌な顔もしないで教えてくれて…!!／／本当にツナさんって優しいな…!!／／／）

花陽はいつものように、どこまでも優しいツナに顔を赤らめてしまっていた。

「一旦、休憩にしよっか。」

ツナがそう言うのと二人は一旦プールサイドに上がり、休憩に入るこよにした。

20分ほど休憩すると、再び泳ぐ練習を始めていく。

「じゃあ、さつきの続きからいこっか。」

「は、はい。」

「あ、そうだ！ちよつと早く上達できるかもしれない方法を教えてあげるよ。」

「上達できるかもしれない方法？それって一体？」

「自信だよ。」

「自信ですか…？」

「うん。俺も中学の時に泳げなかった時にリポーンに言われたんだ。お前に足りないものは自信だって。だから花陽ちゃんも自信持っていこうよ。」

「自信…」

「あ、ごめん！急に偉そうに変なこと言っちゃって！」

「そ、そんなことないです。むしろそんなこと言ってもらえて嬉しいぐらいで…そんなツナさんだから私…！／／／」

「花陽ちゃん?」

「はっ!／＼／＼な、何でもないです!／＼／＼」

好きだということを言いかけそうになった花陽は、ツナの言葉で我に帰る。

そして自信を持ってというツナの言葉で花陽は、メキメキと上達していき、とうとう泳げるようになってしまっていた。

「凄いよ花陽ちゃん。とうとう泳げるようになったね。」

「ツ、ツナさんのおかげで…あ…」

「花陽ちゃん!」

ここで練習の疲れが出たのか、体に力が抜けていき花陽は倒れそうになるが、なんとかツナは花陽を自分の胸の中で受け止める。

「大丈夫!?花陽ちゃん!」

(ツ、ツナさんの体が!?!?!はああああ!?!?!)

ツナの体を直に感じて、花陽は顔を真っ赤にさせてしまっていた。

そして花陽は頭からボンツ!という音と共に煙をあげて気絶してしまった。

「は、花陽ちゃん!?!ど、どうしたの!?!」

ツナは突如、気絶した花陽を見て驚いてしまった。

そしてこのあと希以外の⁴、sのメンバーがさつきよりも嫉妬したことは言うまでもない。

こうし本当の意味で1泊2日日常的の旅は終わったのであった。

#標的 (ターゲット) 165 「ミナリンスキー」

1泊2日のマフィアランドの旅も終わり、ゴールデンウイーク G W 3日目の午後。

— 秋葉原 —

「やっぱり人が多いなー。」

歩いている人たちを見ながら、相棒であるナッツを肩に乗せているツナが歩きながら呟やっていた。

なぜツナが秋葉原にいるかというところ、マフィアランドの旅で穂乃果がスクールアイドルショップをといるものがあるということを知っている。この秋葉原にやって来たのである。

「スクールアイドルショップってどこだろう…?」

だが肝心のスクールアイドルショップがどこにあるかわからないでいた。

「場所を教えてください。たとえばよかったですか…でもなー、なんか気が引けるよなー…友達のグッツが販売している場所を教えてくださいな。」

ツナが複雑な心境でツナがそんなことを思っていると、店の宣伝でチラシ配りをしている女性がツナにチラシを渡してきた。

「よろしくお願いします。」

「あ、どうも。」

ツナは軽く会釈しながら一言だけ言いながら、チラシを受け取る。そしてチラシに書いてある記事を見ながら再び歩いていく。

「へー、漫画喫茶か。行ったことないけど、面白そうだなー。」

ツナがチラシに書いてある内容を見ながら呟いていると、再びチラシ配りをしている別の女性がツナにチラシを渡してきた。

「よろしくお願いします。」

「あ、どう…え…?」

「あ…」

ツナはさきほどと同じように軽く会釈しながら、チラシを受け取る

い。相変わらず鈍感な男である。

そしてことりが落ち着くと、ここでツナが提案する。

「そうだ！今からことりちゃんのバイト先、遊びに行つていいかな？」

「ええ!？」

まさかツナの口から遊びに行つてもいいかなんて言われるなんて予想外だった為、ことりはめっちゃくちや驚いてしまっていた。

さらにツナは続ける。

「いやー、メイド喫茶つて行つたことなかったし、ことりちゃんのバイトしているところを見てみたいなーって思っちゃつて。あ！嫌だつたら別にいいんだよ！」

「そ、そんなことないよ！全然いいよー！」

「本当に？ありがとうことりちゃん。」

「あ、でもまだチラシが…」

せつかくツナが遊びに来てくれるというのに、手にはまだチラシが残っており、それを見てことりは少し表情を曇らせる。

「貸して。」

「え?」

「俺もチラシ配り手伝うよ。」

「え、でも…」

「こつちからお願いさせてもらつてるんだし、これくらい手伝うよ。」

そう言うツナはことりの持つているチラシを半分ほど、取るとチラシ配りを始める。

(やっぱり優しいなツナ君…!!／／)

ことりはチラシを配っているツナを見ながら、ほんのりと顔を赤らめながらツナの優しさを再認識するのであった。

#標的(ターゲット) 166 「初めてのメイド喫茶」

ツナはことりと一緒にチラシ配りを手伝う。チラシ配りを終わる時間がかかると思われたが…

「かわいいー。」

「ガウ?」

ツナの肩に乗っているナッツのおかげで女性からの人気があり、チラシは次々となくなっていく。その一方でことりは男性から人気があり、チラシが次々になくなっていく。

そして全てのチラシがなくなる。

「ふう終わった。」

「ありがとうツナ君、手伝ってくれて。ナッツちゃんもありがとう。」

「ガウ♪」

ツナとナッツにお礼を言うとき、ことりはナッツの頭を右手で撫でると、幸せそうな表情になっていた。

「気にしなくていいよ。それよりさすがミナリンスキーって呼ばれる伝説はメイドさんだね。あつという間にチラシがなくなつてたし。」

「そういうツナ君だって、あつという間になくなつてたよ。」

「俺じゃなくて、ナッツのお陰だよ。俺はことりちゃんみたいに魅力があるわけじゃないから。」

「そ、そんなことないよ! ツナ君はとっても優しいし、かつこいいよ!」

「え…あ、ありがとう…」

ことりは超^{ハイパー}死ぬ気モードで自分を助けてくれた時のこと、みんながツナの優しさや強さに惚れていく姿を思い出しながら言う。その言葉にツナは驚いたのか、目を丸くしてしまっていた。

「あつ! きゅ、急に変なこと言つてごめんね! チラシ配りも終わった

し行こっか！」

「え、うん…」

自分のことを優しくてかつこいいと言ってくれた衝撃が抜けないまま、ツナはことりの案内のもとことりの働いているメイド喫茶に向かう。

そしてメイド喫茶に着き、店内に入る。

「ここがことりちゃんの働いているメイド喫茶…」

ツナは初めて入るメイド喫茶に緊張と戸惑いを隠せず、店内とキョロキョロと見渡していた。

「お帰りなさいませ、ご主人様。」

「え!?!/!/」

ことりがツナのほうを振り向いて、とびっきりの笑顔でそう言うと、ツナはドキツとしてしまいツナは顔を赤らめてしまっていた。

そしてことりに案内されツナは席に座る。

「自分で行きたいと言ってなんなんだけど、メイド喫茶って初めて来るからすっごい緊張してる…」

「そんなに緊張しなくていいよ。」

「あ、ありがとう…それよりもよかったの？店内にナッツを入れて。」
「うん。今はあんまり人もいないし、店長さんにもちやんと許可はもらってるから。私の友達で、チラシ配りに協力してくれたって言ったから、快く承諾してくれたよ。」

「な、ならいいんだけど…それにしてもことりちゃんは何でこのアルバイトを始めたの？やっぱりメイドに憧れてたとか？」

「ううん。町でやってみないかって誘われて、無理って言ったんだけど、やってみたらすっごく楽しくて、気がついたらミナリンスキーな

んて呼ばれるようになって…」

「やっぱり凄いつてことりちゃん…」

「ガウ…」

ことりの話を聞いて、改めてツナとナッツはことりの凄さを再認識してしまっていた。

「それには私には何もなかったから…」

「何もない?」

「うん…ムsを結成した頃、まだメンバーが穂乃果ちゃんと海未ちゃんだけだった頃にこのアルバイトを始めたんだ。何かが変わると思つて。私には穂乃果ちゃんや海未ちゃんと違って何もなかったから…」

そう言うところりは少し表情を曇らせ、顔を俯けながら語つていく。

「そうかな?別に何もなかったっていいと思うよ。」

「え?」

「別に何もなかったって、ことりちゃんはことりちゃんだし。」

「で、でも…私はツナ君みたいにあんな凄い力があるわけじゃないし…」

「俺からすれば、ことりちゃんのほうが何倍も凄いよ。伝説のメイドつて呼ばれて、スクールアイドルをやつて、たくさんのお客さんに笑顔を届けてるんだから。そういう俺は昔つから変わつてないんだ、勉強も運動も苦手で、確かにあの姿になれば強くなれるけど、それを武器に生きていこうと思つてない。あの力を使う時は友達を護る為に使うつて決めてる。そう考えたら俺は何も変わつてないし、特にこれといつて何もないんだ。それにリボーンが言つてたよ、変わらないつてことはむしろ凄いことなんだつて。」

代理戦争が終わつてリボーンが一旦いなくなつて帰つてきた時に言つていた言葉を、今度はツナがことりに言う。

「だから何もないなんてことはないよ、たとえ何もなくなつてことりちゃんは俺の友達だよ。俺だけじゃなくて穂乃果ちゃんたちや獄寺君たちだつてそう言つてくれるはずだよ。」

「ツナ君…」

「あ、ごめん！急に变なこ言っちゃって！」

「ううん、気にしないで。」

謝るツナに、首を横に振りながらことりはそう答える。

(ツナ君は自分に何もないうって言つてたけど、自分では気づいてないだけで、ツナ君に凄い力があるのを私は…いやみんな知ってるよ。)

#標的 (ターゲット) 167 「メイドことり」

メイド喫茶で働くきっかけを聞いたツナは、とりあえずジュースとケーキを注文した。

そしてチョコレートパフェとオレンジジュースをことりがお盆に乗せてやって来る。

「お待たせしました。チョコレートパフェとオレンジジュースです。」
「ありがとうございます、ことりちゃん。やっぱりメイド服そのかっこう似合ってるよね。本当のメイドさんみたい。」

「あ、ありがとうございます!!／／／」

「俺の家にもことりちゃんみたいなメイドさんがいたらなー。」

「ええ!?!／／／」

「そしたら母さんも少しは楽できると思うんだけどなー。」

ツナが突如、自分みたいなメイドさんがいてくれたらと言ったことにことりは驚きの声をあげてしまっていた。

最後に言ったツナの言葉はことりには聞こえておらず、ツナの家のメイドになったことを想像してしまう。

「コーヒーをお持ちしましたご主人様。」

「ありがとうございます、ことり。」

マフィアランドの象徴であるマフィア城シンボルみたいな城の部屋の一角で、メイド服姿のことりが大量の書類が置かれて、書類に目を通してあるツナのところにコーヒーをお盆に持ってやって来ていた。

「コーヒーを置くと、ことりはツナが書いてある書類を覗きこむ。」

「まだお仕事をされてるのですか?」

「まあね。色々仕事が貯まってさ。」

「無理なさらないくださいね。」

「ありがとうございますことり。いつもメイドとして俺の為に色々頑張ってくれてるよね。」

『そ、そんな！わ、私はメイドしてご主人様のサポートをしているだけで！』

『そんなことないよ。ことりのお陰で色々助かってるよ。何かお礼をしないかね。』

『お、お礼なんて！こうしてご主人様のメイドとして働かせてもらってるだけでもありがたいのに！』

「遠慮しないでいいよ。何がいいかな…そうだ！」

椅子から立ちあがるとツナは、ことりの顎を右手でくいと上げ、互いの顔を見つめあう姿勢となる。

『ご、ご主人様?!／／ま、まさか!!／／』

『そのまさかだよ。』

『い、いけません!!／／このようなところで!!／／』

『大丈夫だよ。今この部屋には俺たち以外誰もいない。完全に二人つきりだよ。だからここで何をしても問題ないわけだよ。』

『ふ、二人つきり?!／／』

『いつもありがとう、ことり。』

優しい声音でそう言うとツナは、まだ心の準備のできていないことに目を閉じながら唇を近付けていく。

そしてツナの唇とことりの唇が重なる。

『ん…』

ツナと唇が重なったことに最所は驚きのあまり目を開くことりであったが、途中で目を閉じツナとのキスを受け入れる。

そして30秒ほどキスすると、互いに唇を離す。

『もつとお礼をしてあげたいけど、ここじゃダメだね。今日は俺の部屋で一緒に寝よっか。』

『ごごごごご主人様と?!／／』

『うん。』

そう言うツナはことりを自分の部屋の連れていく。

そして二人はベッドに座ると、ツナはことりを押し倒すと、ことりの上にまたがる。

『ご、ご主人様?!／／』

『さっきのお礼の続きだよ。ことりが望むことなら何でもしてあげよ。』

『わ、私が望むこと!?!?!』

『そうだよ。やっぱりことりが望むことといったら…』

するとツナは目を閉じ集中すると、額にオレンジ色の炎が灯り、瞳の色もオレンジになり、^{ハイパー}超死ぬ気モードの状態になる。

『これか?』

『そ、それは!?!?!』

『言っただろ、こどりの望むことなら何でもやってやるって。それにお前が望むことぐらい、俺には手に取るようにわかるぜ。』

『!!?!?!』

^{ハイパー}超死ぬ気モードのツナがそう言うところには顔を真っ赤にしてしまっていた。

『今日は寝かせないぜことり。』

そしてツナの唇がこどりの唇に近付いていき、再び二人の唇が重なる。

そして妄想は終わり、ことりは我に帰る。

(私は何を考えて!?!?!確かにあの状態のツナ君はキスしたいとか思ったことあるけど!!?!?!でもこれじゃツナ君のメイドになりたいんじゃないなくて、ツナのお嫁さんになりたいみたいになって…!!?!?!)

ことりは顔を真っ赤にさせながら、自分がさっき妄想してしまったことを思い返す。

「ど、どうしたのことりちゃん!?!また顔が赤くなってるよ!?!」

「も、申し訳ございません！ご主人様！」

「ご、ご主人様!?!」

突如、ことりが自分のことをご主人様と呼んだことにツナは驚いてしまっていた。ここはメイド喫茶なのでそう呼んでもおかしくはないのだが、少なくともさつきまでご主人様とは呼んではいなかったの
で、ツナは驚いてしまったのである。

「ご、これから気をつけますので！どうかクビにしないでくださいご主人様！」

「クビって何?! 本当にどうしたの、ことりちゃん!?!」

思考回路がおかしくなったのか、ことりは現実とさつき妄想した時のことがごちゃ混ぜになってしまっていた。

このあとことりが正気に戻るまで大変だったそうです。

#標的(ターゲット) 168 「ご注文はライオン(ナッツ)ですか?」

なんとかことりも正気に戻り、再び会話を始めるツナとことり。

「ご、ごめんねさつきは…なんか気が動転しちゃって…」

「それはいいんだけど…本当に大丈夫?」

「う、うん!も、もう大丈夫!」

心配するツナの表情を見てことりは大丈夫だという意思を見せる。

(よ、よかった…何であんなことになったのか聞かれなくて…まさかツナ君のメイドになってキスをしたことを考えてたなんて絶対に言えないし…)

ツナがさつきのことについて深く聞いてこなかったので、ことりはホッとしてしまっていた。

するとナッツがことりの肩に乗ってくる。

「ナッツちゃん、もしかして心配してくれてるの?」

「ガウ。」

「ありがとう。もう大丈夫だから。」

そう言うところりは、ナッツの頭を再び撫でると、チラシ配りを終えた時と同じくナッツも幸せそうな表情になる。

「ナッツがこんなになつくなんて珍しいんだよね。普通なら俺と炎真以外にはビクビクしてるんだけど。やっぱり、sのみんなは優しいからかな?」

「でも海末ちゃんは…」

「あ…そうだったね…」

海末だけはナッツになつかないというよりも、恐怖してしまっていたことをことりとツナは思い出していた。

そしてナッツは海末の名前が出ただけで、少し体を震わせてしまっ

ていた。

するとここでツナがあることを思いつく。

「ことりちゃんがナッツと一緒に働いたらどうなるんだろう?」

「え?」

「ガウ?」

ことりとナッツは突然ツナの提案に、首を傾げながら疑問符を浮かべてしまっていた。

さらにツナが続ける。

「さつきチラシ配りをした時にことりちゃんは男性から人気があるし、ナッツは女性から人気があったから、二人が協力したら、なんか凄いことになるんじゃないかって思ってた。」

そうツナが提案すると、やってみようということになりことりは店長に許可をとって、ナッツと一緒に働くこととなった。

そしてことりはナッツを肩に乗せて、働き始める。

「お帰りなさいませ、ご主人様。」

「ガウ♪」

「な、何?!ネコ!」

「でも可愛い。」

入り口でことりとナッツが出迎えると、お客さんはナッツを見て戸惑いを隠せなかったが、それでも可愛いさは

伝わっていた。

「あれがミナリンスキー。可愛い…」

「ネコがいるなんて聞いたことがなかったけど、なんか似合ってる…」

「癒されるよねー、二重の意味で…」

ツナの予想は大当たりし、ことりとナッツと一緒に働いたことによつて男女問わずお客さんからの反応がよかった。

そしてネコというミナリンスキーがいると口コミで広がったのか、次々にメイド喫茶に人がやって来て、店内が満席になるまでになつていった。

「凄い…まさかこんなことになるなんて…」

ツナは自分で言った提案がまさか、店内が満席になるほど人気で

るとは思ってもみなかったもので、さすがにおど驚いてしまっていた。そしてなんとか店内が落ち着きを取り戻す。

「凄かったね。まさかこんなことになるなんて。」

「俺も予想外だったよ。」

「店長さんツナ君にすつごく感謝してたよ。また機会があったらナツツちゃんを連れてまた来てほしいって。」

「わかったよ。」

こちりが店長からの伝言を伝えると、ツナはそう一言だけ言う。そしてメイド喫茶に長居したので、ツナは帰る準備をする。

「じゃあ俺はそろそろ帰るから。また暇があったら遊びに来るよ。」

「うん。」

「あ！一つ、聞きたいことがあるんだけどいい？」

「何？ツナ君？」

「スクールアイドルショップってどこにあるかわかる？」

「え…わかるけど…どうしたの？」

「え!?!いや！前にスクールアイドルのお店があるって聞いたからせつかくだし行ってみようかなって思ってたさ！それにちよつとスクールアイドルについて勉強してみようかなーって思ってた！」

「そうなんだ。いいよ、スクールアイドルショップの場所は…」

ことりはツナの頼みを快く引き受け、スクールアイドルショップの場所を教える。

「ありがとう、ことりちゃん。じゃあ行ってみるよ。」

そう言うとツナはメイド喫茶を出て、スクールアイドルショップへと向かって行ったのだった。

だがツナは知らなかった、そこで新たな出会いが待っているということ。

#標的(ターゲット) 169 「謎の女性との出会い」

ことりからスクールアイドルショップの場所を教えてもらったツナは、さっそくスクールアイドルショップを目指す。

そして歩くこと10分、ツナはついにスクールアイドルショップに着いた。そこにはスクールアイドルのポスターやうちわなどのグッズがたくさん並べられていた。

「ここがスクールアイドルショップ、これ全部…」

ツナは店の奥に進みながら、たくさんあるスクールアイドルのグッズをキョロキョロと見渡していく。

「あ、μ sだ！本当に穂乃果ちゃんたちのグッズが売ってる。」
「ガウ。」

ツナとナツツはμ sのグッズが置いてあるのを見つける。

そしてツナはμ sのメンバー全員が映っているうちわを手にとった。

「穂乃果ちゃんたちって本当に有名なんだなー。せっかくだし買っていききたいけど…なんかなー…」

せっかくなのでμ sのグッズでも買っていかうかと考えるツナだったが、複雑な気分になってしまった。穂乃果たちと友達でないならともかく、知っている友達のグッズを買うのはツナにはどうしても気が引けてしまうのである。

(穂乃果ちゃんのポスターもあるんだ…可愛いけど見つかったらなんか穂乃果ちゃんだけじゃなくて、みんなに引かれそうだし…でも欲しい！)

ツナが買いたい気持ちと、買ったあとのにみんなに見つかった時に引かれるんじゃないかという気持ちになり、買うかどうか迷ってしまっていた。

「あなたもスクールアイドルが好きなの？」

「え？」

「ガウ？」

ツナが買うかどうか迷っていると、茶髪のショートヘア眼鏡をかけている女性がツナに話しかけてくると、ツナとナッツは女性のほうを振り向いた。

(綺麗な人…)

ツナは女性を見てあまりにも綺麗な人であったので、ちよつとだけ顔を赤くして見とれてしまっていた。

すると女性はナッツに気づく。

「可愛いネコね。名前はなんて言うの？」

「ナ、ナッツです。」

「へーそうなの。初めまして。」

「ガウ〜♪」

(あ…ナッツが初対面の人なのになついでる…)

女性に撫でられて幸せそうな表情をしているナッツを見てツナは、少し驚いてしまっていた。

「急に話しかけてごめんなさい。スクールアイドルのグッズを見てたあなたが目に止まっちゃったの。」

「あ、気にしないでください。」

「スクールアイドルが好きなのね。」

「い、いや…そうじゃなくて。スクールアイドルというのを最近になって知って、それで勉強してみようかなあつて思つて…」

「ええ!？」

ツナがスクールアイドルのことを最近になって知つたという事実
に女性は驚きの声をあげてしまっていた。

「いやー…もともとアイドルとか詳しくなくかつた上に、修行という
名の拷問を受けててそれどころじゃなかつたというか…」

「ご、拷問…?」

「あー今のは違うんですー気にしないでくださいー!」

「わ、わかつたわ…」

女性がわかつたと言つたが、さすがに拷問という単語に驚いてしま

い、この人はもの凄い複雑な事情を持っているのではないかと思ったのか、これ以上は詮索することはしなかった。

「凄いですよねスクールアイドルって。俺と同じぐらいの高校生でアイドルをやってるんですから。あとスクールアイドルの大会とかがあるらしいですね。」

（本当にこの子はスクールアイドルを最近になって知ったのね。じゃあ私のことも知らないってことね。）

ツナの発言を聞いて女性は、本当にツナがスクールアイドルのことを最近になって知ったこと、そして自分が誰なのか知らないということを確認した。

「ねえ、このあと予定とかある?」

「このあとですか? 特にないですけど、それがどうかしたんですか?」

「お願いがあるの。」

「お願い?」

「今日一日だけでいいの。私と一緒に買い物につきあってほしいの。ダメかしら?」

女性は両手あわせて、無理なのを承知でツナにお願いする。

「いいですよ。」

「え...?」

それに対してツナは普通に女性のお願いを了承する。

まさかお願いをあつさりと聞いてくれるとは思ってもみなかったので、女性はキョトンとしてしまっていた。

「あの? どうかしました?」

「い、いや...こんなにもあつさりとお願いを聞いてくれるとは思わなかったから...」

「あなたからは悪い感じがなくて、それで大丈夫だと思ったから別にいいかなって思っただけ。」

ブラッド・オブ・ボンゴレ
ボンゴレの血である超直感が、この女性は大丈夫だと直感したのでツナは女性のお願いを承諾したのである。

「俺、沢田綱吉っていいいます。気軽にツナって呼んでください。」

「私は綺羅...じゃなくて世羅椿姫。よろしくねツナ君。」

ツナと世羅椿姫と名乗る女性はとりあえず自己紹介をする。

だがツナは知らなかった、目の前にいる女性がかつてスクールアイドルの頂点に立ち、現在アイドルとして活動しているA―R―I―S―Eのリーダーである綺羅ツバサであるということ。

#標的（ターゲット） 170 「目撃と衝撃」

世羅椿姫と名乗った女性をアイドルのグループA—RISEのリーダー綺羅ツバサだと知らず、ツナは買い物付き合う。

そして二人は雑談しながら歩いていった。

「ツナ君は並盛に住んでるのね。」

「はい。」

「聞いたことあるわ。色々と奇妙なことが起こる町だって。」

「ら、らしいですね…」

前に真姫の家に行った時に真姫の母がツバサと同じようなことを言ったので、ツナは他人事のような顔で言った。並盛で起こっている奇妙なことはほとんど、ツナの知り合いたちが起こしているのだから。

「そういう椿姫さんは大学生なんですか？」

「まあそんなところね。」ゴールデンウィーク G Wだからこっちに戻ってきてるの。」

「そうだったんですか。」

ツナはツバサが嘘をついていることに気づかず、県外の大学に通っていて、ゴールデンウィーク G Wを利用して帰省している大学生だと思いこんでしまっていた。

（本当に私のことを知らないのね…まあすつごく助かるけど。私一人じゃ誰かに気づかるけど、ツナ君がいてくれたら私のことを椿姫さんって呼んでくれるから、それで私はそっくりさんか何かか何かに思われるしね。ツナ君、私の都合で勝手に巻き込んでごめんさい。）
声には出さなかったが、ツバサはツナを勝手に巻き込んでしまったことを心の中で謝罪した。

そんなことをツバサが考えているとは知らず、ツナはツバサの買い物に付き合っていく。

そしてツナとツバサが一緒に買い物をしているその頃…

「今日のバイトはこれで終わり。」

メイド喫茶のバイトを終えたことりが、店から出て家に帰ろうとしていた。

「今日はツナ君がメイド喫茶が来るなんて思わなかったな。バイトが早く終わったらツナ君と二人つきりでデートとか…!!／／」

ことりは歩きながら顔を赤らめ、ツナとデートしている姿を想像してしまっていた。

少し歩くと、ことりは道路の向こう側の店から荷物を持ったツナとツバサが出てきたのを視界に捕らえた。

「あ、ツナ君…と誰?！」

ツナが誰ともわからない女性とが一緒に買い物をしている姿を見てことりは驚きを隠せなかったが、すぐにツナの傍にいる女性の正体に気づいた。

「あ、あれってもしかしてA—RISEのツバサさん!? な、何でツナ君と一緒にいるの!?!」

ことりはツナの傍にいる女性が、かつてラブライブでμ'sと死闘を繰り広げたA—RISEのリーダーである綺羅ツバサがツナと一緒にいることにさらに驚いてしまっていた。

ことりが驚いていると、ツナとツバサはすぐに別の場所に移動してしまう。

「どどどどどうしよう!?! そ、そうだ! 穂乃果ちゃんたちに知らせなくちゃー!」

ことりはすぐにバッグからスマホを取りだし、LINEのアプリを開くとμ'sのグループトークの画面を開き、先ほど見た光景のことを入力していく。

『大変だよ! 秋葉でA—RISEのツバサさんがツナ君と一緒に買い物してる!』

このようにことりは入力する。
その一方でこの文章を見た穂乃果たちは。

—穂乃果の家—

「えー！?!ツナ君とツバサさんが!?!」

「ツナさん…凄すぎ…」

ことりからのLINEを見て穂乃果はめちやくちや動揺し、雪穂は有名人であるツバサと一緒にいるツナの運の良さに驚いてしまっていた。

—海未の家—

「ツ、ツナ君が!?!／／／君」

あまりに驚きの出来事に動揺したのか、海未は顔を赤らめてスマホを落としてしまう。

—真姫の家—

「ヴェエエエ!?!痛っ!」

あまりに驚きの出来事だったのか、真姫は座っていたソファアゴと引っくり返って後頭部を強打してしまっていた。

—花陽の家—

「ツ、ツナさんがツバサさんと!?!／／／」

「ど、どうしてだにや!?!／／／」

花陽と、花陽の家に遊びに来ていた凜は顔を赤くして動揺してし

まっていた。

—にこの家—

「はあ?! どういうこと?! 何であいつがA—RISEと?!」
にこにとっては秋葉にツバサがいることだけでも驚きであったが、そこにツナがいるということできさらに驚いてしまっていた。

そして買い物に出ていた絵里と希は。

「う、嘘でしょ?!」

「さすがに驚きやん…!」

絵里はことりからのLINEに驚いていた。そしていつもなら「面白そうなことになってるやん」と言いそうな希も驚きを隠せていなかった。

そして今でにないほどの修羅場が訪れようとしていた。

#標的 (ターゲット) 171 「もしかして」

ことりから連絡を受けた穂乃果たちは、すぐに家を飛び出していった。ことりがツナとツバサを尾行し、今いる位置をLINEのグループトークで随時、連絡していく。

そしてツナとツバサが動物連れ込んでもOKなカフェに入り、そして穂乃果たちもその店の近くに着き、道路を向こう側から遠目で、窓ガラスを通じてツナとツバサをこっそりと観察する。

「ほ、本当に綺羅ツバサじゃない!」

「ほ、本当だ!間違いないよ!」

「にこと花陽が言うんだから間違いわね。眼鏡で誤魔化してるけど、あれは綺羅ツバサね。」

「でもどうしてツナ君と一緒にいるんやろう…?」

にこと花陽がツナと一緒にいるのが綺羅ツバサだということを言ったので絵里は間違いないと確信し、希はなぜ綺羅ツバサがツナと一緒にいるのかということを疑問に思ってしまった。

「許せないね…」

「凜も穂乃果ちゃんと一緒にや…」

「そ、そんなに嫉妬してるの…?」

「当たり前だよ!」

「そうだよ!」

ことりがあまりに嫉妬している二人を見て尋ねると、二人とも怒ったような口調で答える。

「私のホノ太郎をあんなにナデナデしてるんだよ!」

「ずるいにゃ!」

「そっちですか!?!」

穂乃果と凜はツナがツバサと一緒にいることにも、もちろん嫉妬していたが、一番嫉妬していたのはナッツをツバサに取られたことで

あった。海未は二人が嫉妬していたポイントが違ったので驚いてしまっていた。

「どうしようツナ君がツバサさんを好きになったら…」

「だ、大丈夫よ！リボンが言ってたでしょ、ツナの好きな人は私たち、sの中にいるって。それに綺羅ツバサは本物のアイドルなのよ。アイドルは恋愛は禁止のはずだから問題ないわ。」

ことりがツナがツバサのことを好きになるのではないかという不安になってしまっていた。その一方で真姫はことりの発言を否定するが、不安を隠せていない様子であった。

一方で店内にいるツナとツバサは…

「ありがとうツナ君、見ず知らずの私に付き合ってくれて。」

「気にしないでください、どうせ暇だったんで。こっちこそご馳走になっちゃって。」

「いいのよ。色々と付き合ってくれたんだから、これくらい当然だわ。」

「あ、ありがとうございます。」

ツバサが買い物に付き合ってくれたお礼に、この店でご馳走してくれると言ったので、ツナはそう一言だけお礼を言った。

(店内にあんまり、お客さんもないし丁度よかったわ。何度か他の人に疑われたけど、ツナ君がいてくれたお陰で私の正体がバレずすんだわ。あ！そうだ、ツナ君にアレをあげちゃおうかしら。)

ツバサがツナに何かを渡すことを決意する。

その時であった、ツバサは複数の妙な視線を感じとり窓ガラスを即座に見た。

(あれは高坂さん…そしてμ、sのメンバーが全員？どうしてあんな

ところに？やっぱりアイドルの私がツナ君と一緒にいるから様子を伺っているのかしら…それにしてはすっごい不安そうな表情で見られてるような…)

ツバサは遠目であるがは視界に、尾行している穂乃果たちの存在に気づき、μ、sのほとんどのメンバーが不安そうな様子でこつちを見ていることに気づいた。

(もしかして…ツナ君と高坂さんたちは実は知りあい？ μ、sのメンバーがツナ君をに好意を寄せてるとか、それで私がツナ君といるところをたまたま目撃して、それで嫉妬してるとか…私の勝手な推測だけど…)

ツバサは穂乃果たちの不安そうな表情を見て、全く確証のない推理をするが、どこも間違っている部分は一つもなかった。

(もし仮にそうだったら面白そうね。)

「どうしたんですか椿姫さん？ さっきから窓のほうを見て？」

「ちよつと誰かに見られてる気がしたんだけど、気のせいだったみたい。」

「そうですか。」

(さてと…私の推理が正しいかどうか検証してみようかしら?)

不敵な笑みを浮かべるツバサ。 ついに動き出す。

#標的（ターゲット） 172 「尾行」

しばらくカフェでのんびりするツナとツバサ。

そしてカフェを出ると、ツバサが再びお願いする。

「ねえツナ君。もう一つだけ行きたい場所があるんだけど、一緒に来てもらっていい？」

「いいですよ。」

今度のツバサのお願いにもツナは何の違和感を感じることもなく了承し、ツナはツバサと一緒に歩いていく。

二人が移動したのを確認して、穂乃果たちも尾行を再び、開始していく。

「ねえツナ君は彼女とかいるの？」

「彼女ですか？いませんけど、それがどうかしたんですか？」

ツバサがそう尋ねてくると、ツナはいないと答え、急にそんなことを聞いてくるツバサに疑問符を浮かべてしまっていた。

するとツバサが急にツナの腕に絡みついてきた。

「っ、椿姫さん!?!／／どどど、どうしたんですか!?!／／」

「こういうの1回やってみたかったの。彼女がいらないんなら大丈夫よね。」

「そ、そうですけど!!／／」

ツナ突如、腕に絡みつかれたことに顔を赤くしてしまっていた。

するともの凄い殺気が二人に向けられ、ツナはそれは感知し体を震わせてしまっていた。

「な、なんかもの凄い殺気が…」

「そ、そうね…」

ツバサは自分の推理が当たっており、まさかちよつとツナの腕に絡

みつただけでこんなにも殺気を向けられるとは思ってもいなかったので、驚いてしまっていた。

「椿姫さん、誰かのさつき視線を感じたけど気のせいだと言っていましたけど、もしかしてストーカーじゃないですか？ 椿姫さんすごい綺麗だし。」

「え？」

「だ、大丈夫ですよ！もしストーカーだったら椿姫さんは俺が護りますから！」

「…」

ツナが急に自分のことを綺麗だと言い、自分のことを護るという男らしいことを言ったことに、ツバサは目を丸くし、驚いてしまった。

「フフッ！ツナ君って面白いのね。」

「え!?!／／／」

ツナは笑ったツバサの顔を見て、少し顔を赤くしてしまっていた。結局このままツバサの案内の元、ツバサが行きたい場所までそのままの状態に進んでいく。

その一方で尾行している穂乃果たちは。

「ツ、ツバサさんとツナ君が恋人みたいに!!／／／」

「おおお落ち着いてください穂乃果!!／／／」

「そ、そうよ!!／／／みんなも冷静になりましょう!!／／／」

ベタベタしているツナとツバサを見て動揺している穂乃果に海未が落ち着けと言うものの当の本人も動揺しており、他のみんなに落ち着けと言っている絵里も動揺してしまっていた。

「それにしてもウチのツナ君とあんなにベタベタするなんて。あれは

ウチだけの特権なのに。」

「の、希が…」

「嫉妬してるにや…」

「珍しい…」

いつもは笑ってニコニコしながら余裕の笑みを浮かべる希も、今回は嫉妬し尋常じゃないほどの禍禍しいオーラを放っており、それを見たにこ、凜、ことりは若干、体を震わせながら驚いてしまっていた。「もしかしたらお前らと同じくツバサがツナのことを好きになったりしてな。」

「こ、この声は…」

「ま、まさかりボーン君…?」

どこからかりボーンの声が聞こえてくると、真姫と花陽がキョロキョロと当たりを見渡す。

すると穂乃果たちの近くに置いてある自動販売機の上に緑色の葉っぱを頭に被り、服のかわりに植木鉢を着ているリボーンが立っていた。

「ちやおつす。」

「う、植木が喋ったにや!!」

「も、もしかして植木に宿った精霊とか!?!」

「精霊…言われてみれば…」

いつものように凜、穂乃果、絵里だけはリボーンのコスプレを見破れていなかった。

「俺はただの植木だぞ。」

「ただの植木って何よ…そもそも植木は喋らないでしょ…」

「お前ら尾行が全然なっちゃいねえな。尾行するなら俺みたいに自然に溶け込まねえとな。」

「どこが自然よ!不自然しかないわよ!」

植木のコスプレをしているリボーンに向かって、にこがツツコミをいれると、希が植木のコスプレをしているリボーンに尋ねる。

「いつからウチらのことを見てたん?」

「お前らが集まる前からだぞ。ツナがことりのメイド喫茶に遊びに

行った時からだ。」

「な、何で知ってるのー!?／＼／＼」

ことりはメイド喫茶にツナが遊びに来ていたことをリポーンが知っていたことに驚きの声をあげてしまっていた。

そしてそれを聞いて穂乃果たちが黙っているもはずもなかった。

「ことりちゃん? どういうこと?」

「ほ、穂乃果ちゃん! こ、これには理由が!」

このあと散々、穂乃果たちにことりは問い詰められました。だが、そのせいでツナとツバサを見失ってしまったのであった。

#標的（ターゲット） 173 「ツバサの正体」

そしてツナとツバサやって来たのは…

「神田明神…」

そうかつてのμsの練習場所であり、現在は雪穂と亜里沙のスクールアイドルの練習兼、ツナの朝練に使っている神田明神であった。

「神田明神なんですか？椿姫さんが来たかった場所って？」

「ちよっとお祈りしたかったことがあって。ごめなさいね、これくらい一人でできるのに…」

「大丈夫ですよ。それに神田明神には朝練で来てますし。」

「朝練って…ツナ君って並盛に住んでるのよね？いくら隣町でも結構距離はあるわよ。」

「俺の家庭教師の意向というか…とりあえず朝早く起こされて、修行させられるんです…」

「修行って…ツナ君の家って…」

「ごく一般的な家庭です。」

マフィアの十代目候補という点を覗けばという言葉をつな心の中で呟いた。

二人は階段を登っていき、本堂でお参りをする。

「椿姫さんは何を願ったんですか？」

「秘密。そういうツナ君は？」

「俺はまあ…世界平和…?」

「フフッ！ツナ君って本当に面白いのね。」

祈った内容を聞いてツバサは笑っていたが、実際のツナの願いは家庭教師のむちやくちやな教育がなくなりますようにと、世界平和以

前に自分自身の平和を願ったのである。

「じゃあ降りましょうか。」

そう言うのとツナはツバサと共に神田明神の階段を降りて行くこと
したのでが…

「わっ！あーーーーー！」

「ツナ君!？」

「ガウ!？」

ツナはいつものように足を滑らせて神田明神は階段から落ちて
いってしまった。

「いってー！」

「あれツナ君?」

「え…穂乃果ちゃん?それにみんなも?」

階段に落ちた先には、神田明神を通りかかろうとした穂乃果たちが
いた。

するとツバサとナッツが階段の上から慌てて階段を降りて来た。

「大丈夫ツナ君!？」

「だ、大丈夫です椿姫さん、いてて…」

ツナは腰をさすりながらゆっくり立ちあがる一方で、穂乃果たちは
目の前にツバサがいることに驚き固まってしまっていた。

「久しぶりねμ sのみなさん。」

「え…椿姫さん、穂乃果ちゃんたちのこと知ってるんですか?」

ツナはツバサが穂乃果たちのことを知っていることに驚きを隠せ
てない表情であった。

「ツナさん!椿姫さんじゃないですよ!その人はA—R—I—S—Eの綺羅
ツバサさんです!」

「あらいず?きらつばさ?」

「あんた知らないの!?!元スクールアイドルで第1回ラブライブの優勝
者で今はアイドルやってるのよ!」

「えーーーーー!?!」

花陽とにこがツバサの正体を話すと、ツナはまさかツバサがアイド
ルだったということに驚きの声をあげてしまっていた。

「つ、椿姫さん…じゃなくてツバサさんがアイドル!？」

「バレちゃったわね。」

「ほ、本当なんですか!？」

「ええ。ごめんなさいツナ君、あなたがアイドルとか詳しくなかったから、利用させてもらったの。」

「利用?」

「私が一人で歩いてたら誰かに私のことを気づかれる可能性あったから、あなたと一緒にいれば疑われないと思ったの。ごめんなさいね。」
「い、いやそれはいいんですが…むしろ謝るのこっちのほうというか…ツバサさんがアイドルと知らずに普通に歳上の女の子だと思って喋ってたから…」

「いいのよ。むしろこれからもアイドルとしてじゃなくて、普通の女の子として接してくれたら嬉しいわ。」

「これからって…アイドルのツバサさんと、こんな風に会うこともないと思うんですけど。」

「そうかもね。でもきつと会えるわよ。きつとね」
「?」

ツナはツバサがきつと、という言葉をも2回使ったことに首を傾げながら疑問符を浮かべてしまっていた。

「それじゃ私はそろそろ帰るわね。今日は付き合ってくれてありがとうツナ君。ナッツちゃんもありがとう。じゃあね。高坂さんたちも学校生活頑張ってるね。」

ツバサそう言うと、一人で走り去って行ってしまった。

「まさかツバサさんがアイドルだったなんて…俺、すっごい体験しちゃったんだな…」

ツナは、まさかツバサの正体がアイドルだったという事実には驚くと同時に、知らなかったとはいえアイドルと一緒に買い物をしたことの凄さを実感した。

「そういうえば穂乃果ちゃんは何でここにいたの?」

「「「「え!?!」「」」」」

まさかツナがツバサと一緒にいるという情報を聞きつけて、ストー

カーのごとくコソコソと嗅ぎまわっていたとは言えず、全員ツナの質問にどう答えようか戸惑ってしまっていた。

するとツナがズボンのポケットに何かが入っていることに気づいた。

「あれ？何か入ってる…手紙？…こんなが入ってたっけ？」

いつの間にかズボンのポケットに手紙が入っており、手紙を取り出すとツナは声に出して手紙に書いている文章を読み始める。

「えっと…ツナ君へ。この手紙を読んでいるということは私はあなたに正体をバラしていると思うわ。今日は私に付き合ってくれてありがとう。そしてあなたを勝手に利用しちゃってごめんない。お詫びといっってはなんだけど、明日のライブのチケットを入れておいたわ。もし

都合がよかつたら見に来てね。」

そして手紙の最後には綺羅ツバサという文字がサイン風に書かれており、ハートマークがついていた。

「あ、本当にライブのチケットだ…」

「う、嘘でしょ…私だって購入できなかったのに…」

「A—R I S Eのチケットはすぐに完売するのに…」

アイドル好きのことに花陽にとつて、ツナがA—R I S Eのライブのチケットを手に入れたことに驚きを隠すことができなかった。

「せっかくだし行ってみようかな。アイドルのライブとか行くのは初めてだけだ。」

こうしてツナはA—R I S Eのライブ行くこと決意するのであった。

#標的 (ターゲット) 174 「A—RISE」

ゴールデンウィーク

G W 4日目。ツナは昨日、ツバサからもらったライブのチケットを持って、チケットに書かれていた場所にやって来た。そこにはたくさんのファンたちが混雑していた。

そんな中でツナはドームを見て立ち尽くしていた。

「ここがツバサさんがライブを行うドーム…こんなに大きいんだ…」
まさかこんな大きなドームでライブをやるとは思っていなかった。
ので、ツナは驚きのあまりドームを見上げて固まってしまっていた。
「まだ時間があるけど、そろそろ行ってみようかな。」

ツナはスマホの時計を見ながら、とりあえずドームの中に入ること
にしようと考えた…その時であった。

「来てくれたのね。」

「え…?」

「こつちに来て。」

「ええ!?ちよつと!」

突如、後ろからサングラスとニット帽を被った誰かに話しかけられ、すぐにさま手を引つ張られてドームの裏口の関係者以外立ち入り禁止と書かれた扉の中にツナは連れていかれる。

そして謎の人サングラスとニット帽を取り始めた。

「ツ、ツバサさん!」

「こんにちわツナ君。昨日はどうもありがとう。ちゃんと私の書いた手紙を読んで来てくれたのね。嬉しいわ。」

「あ、どうも…ってそうじゃなくて…ここは立ち入り禁止ですよ!俺なんかが入ったら…」

「大丈夫よ。ちゃんとあなたが来ることはこの関係者は知ってるわ。」

「え…そうなんですか？でも何で…？」

「私以外のメンバーを紹介してあげようと思つて。着いてきて、ここからすぐに楽屋にいけるから。」

そう言うのとツバサは他のメンバーもいる楽屋に、ツナを案内していく。

そして楽屋の扉の前に着くと、ツバサが扉を開けるとそこには、長い黒髪でクールな雰囲気をつらつかせている長身の女の子と、茶髪のウェーブがかかったロングヘアの女の子が座っていた。

すると茶髪の女の子がツナのことについて尋ねる。

「あら？もしかしてその子が昨日言っていた子？」

「そうよ。」

「初めまして、私は優木あんじゅ。ツナ君でいいのかしら？」

「あ、はい！は、初めまして！」

ツナはあんじゅに話しかけられたことに緊張してしまっていた。

そしてもう一人の女の子も自己紹介を始めた。

「統堂英玲奈だ。よろしく。」

「よ、よろしくお願ひします！」

あんじゅと同じく、英玲奈に話しかけられてツナは緊張してしまっていた。

「そんなに緊張しなくて大丈夫よツナ君。」

「そ、そんなこと言われても！アイドルと話してるわけだし！」

ツナがあんじゅと英玲奈に話しかけられて緊張してしまっているのを見て、ツバサがクスクスと笑いながら見ている。

すると楽屋の扉のから声が聞こえてくる。

「全くだぞツナ。ボンゴレのボスになったら、他の同盟ファミリーとボスと話さなけりゃならねえんだぞ。これくらいで緊張してんじやねえぞ。」

「リボン！？お前、何でここにいるんだよ！」

「え…？ツナ君の知りあい…？というか赤ちゃんが喋ってる…？」

「どこの子かしら…？」

「奇妙だな…」

突如、現れたりリボーンにツナは驚くいてしまい、リボーンを初めて見たツバサ、あんじゅ、英玲奈は戸惑いを隠せない様子であった。「どうやって入ってきたんだよりリボーン！ここは立ち入り禁止だぞ！」

「こんなところに浸入するくらいどうってことねえぞ。それに俺の生徒であるお前が色々世話になったからな、家庭教師としてお礼を言いに来るのは当然だろ。」

「何でお前が昨日のこと知ってるんだよ！」

「家庭教師というの否定しないのか…」

リボーンが昨日ツバサと買い物をしたことを知っている口ぶりであったので、ツナは何で知っているのかとつつこんでいた。その一方で英玲奈はリボーンが家庭教師であるという部分を否定しなかったことに驚いてしまっていた。

「ちやおつす、俺はリボーン。ツナの家庭教師で殺し屋だよろしくな。」

「ヒットマン…？」

「あ！気にしないでください！」

「そ、そう言われても…」

ツバサは殺し屋と言ったりリボーンの言葉に戸惑いを隠すことができなかった。そしてそれと同時にツナの家庭は一体どうなっているであろうと思ひ始めてしまっていた。

「それでお前ら、ボンゴレに入ってみねえか？」

「リボーン！ツバサさんたちを勧誘するのは止めろって！アイドルなんだぞ！すいませんツバサさん！ライブは見に行きますんで、頑張ってくださいー！」

ツナはこれ以上リボーンの好きにさせたらとんでもないことになると思ったので、無理やりリボーンを連れて楽屋から出ていってしまった。

「な、何だったのかしら…？」

「何か知らないのかツバサ…？」

「さあ…？ツナ君ってよくわからないところがあるのよね…」

あんじゅ、英玲奈、ツバサはツナとりボーンを見て一体あれは何
だったのでしょうか？という気持ちになってしまったのであった。

#標的（ターゲット） 175 「事件」

なんとかツナはA―RISEをボンゴレファミリーに勧誘することを阻止した。

そしてリボーンに念を押したあと、チケットに書かれていた座席の番号に座ったのだが：

「1番前!」

ツバサがくれたチケットは一番前の席であり、ツナまさかこんな前の席だとは思ってもみなかった為、驚きの声を上げてしまっていた。

「ま、まさかこんな前とはなー：花陽ちゃんやにこさんが聞いたらどうなるんだろ…」

そう呟くツナであったが、今さらチケットを誰かにあげることでもできるわけでもないのです、とりあえず席に座ることにした。

そして10分ぐらいが経過すると、会場が満員になっていき、多く人たちがA―RISEの登場がまだかまだかという表情で待っていた。

そしてさらに10分経過すると会場が暗くなり、ステージ上にスポットライトが当たると、ツバサ、英玲奈、あんじゅの3人が登場すると、会場が一気に盛り上がっていった。

「今日は私たちのライブに来てくれてありがとう!今日はこの日の為に新曲を作ってきました!是非、聞いていってください!」

ステージ上でマイクを使ってツバサが言うと、さっきまで盛り上がっていた会場がさらに盛り上がっていく。

そしてツバサ、英玲奈、あんじゅはそれぞれのポジションに移動すると目を閉じて曲が流れ始めるの待っていた。そして曲が流れ始めると、目を見開くと3人はすばやく踊り始めていき、会場はさらに盛り上がっていく。

「す、凄い…」

ツナはアイドルのコンサートを生で見るのが初めてということもあり、A—RISEのダンスと歌を見てそう言うのがやつとであった。ツナはμ'sのライブをスマホで見た時も凄いと思ったが、A—RISEはμ'sとはまた違った凄さがあるのだということを感じ取っていた。

「あれがA—RISEか…中々のキレイだな。やっぱボンゴレに欲しいよな。」

「リボーン!?!お前いつの間に!?!」

ツナがA—RISEのライブに夢中になってしまっていると、いつの間にかA—RISEをボンゴレに勧誘しようと考えているリボーンが隣におり、いつの間にかいたりリボーンを見てツナは驚きの声をあげてしまっていた。

幸い、会場は盛り上がっているので誰もツナの声に反応するものはいなかった。

「お前どうやってここに!?!」

「言っただろ、こんなところ浸入するくらいどうってことねえって。俺はただあの3人をボンゴレおれたちに必要かどうか、見極めに來ただけだ。」

「だからツバサさんたちをボンゴレに勧誘するなって!」

ツナはまだツバサ、英玲奈、あんじゅをボンゴレマフィアにしようと考えているリボーンにつつこんでしまっていた。そしてその後はツナとりボーンはA—RISEのライブを大人しく見ている。

そして曲が最終曲面に入っていくその時であった。少しずつであるが、ステージ上に設置してある鉄パイプの柱がギギと音をたてて少しずつ傾き、ゆっくりと3人のほうへ傾いていき、ファンたちもツバサたちもそれにすぐ気がついていった。

「おいやべえぞー!逃げろー!」

リボーンが叫ぶと、ツバサ、英玲奈、あんじゅはすぐさまその場から逃げていくが…

「あっー!」

ツバサがステージ上の何かに足を引っかけてしまい、その場で転んでしまった。

そして鉄の柱がツバサに迫っていき、ツバサはもうダメだと思ったのか、目を閉じて動けなくなってしまうていた。

そして鉄パイプの柱がツバサに直撃する。

「ツバサ！」

ツバサが鉄パイプの餌食になり、英玲奈とあんじゅは叫ぶ。そして会場中はツバサが鉄パイプの柱の餌食になったことに、ざわめき動揺してしまっていた。

「ツバサ…」

「そんな…」

ツバサが鉄パイプの餌食になってしまい、英玲奈とあんじゅは絶望的な表情になってしまっていた。

するちステージ上から一人の声が聞こえてくる。

「いてて…大丈夫ですかツバサさん？」

「ツナ君…!？」

そこにはツバサ助けていたツナがいた。あの時ツナはとつきにステージ上に上がり、柱が落ちてくる寸前にツバサを助け出していたのだった。

「怪我とかしてませんか？」

「え…ええ…」

ツバサは自分をツナが助けてくれたことに驚いたのか、そう一言だけ言うのがやっとであった。そして英玲奈とあんじゅが無事であったという表情でツバサの元に駆け寄り、会場中にいた人たちもツバサが無事であったことに安堵の表情を浮かべていた。

「こいつは…」

リボンが倒れた鉄パイプの柱を見て何かに気づく。

一体リボンが気づいたこととは!？」

#標的（ターゲット） 176 「妙な影」

ツナのおかげでツバサがなんとか無事であった。ライブは会場の修繕に時間を要するが、2時間後には再開することになったらしい。

そしてツナは楽屋に招かれ、ツバサたちのマネージャーに今回ツバサを助けてくれたことのお礼を言われたりした。

「危なかったなー。まさか柱が倒れるなんて思ってもみなかったから…」

「本当にありがとうツナ君。あなたがいなかったら私はどうなっていたことか…」

ツバサはさきほど助けしてくれたことに、改めてお礼を言った。

「それにしても勇気があるのねツナ君。あの状況でツバサを助け出すなんて。」

「ああ。正直、私も驚いてるぞ。」

「そ、そんな大したことは…ただツバサさんが危ないと思ったたら体が勝手に動いちゃって…誰かが傷つくのは見たくなかったから…」

あんじゅと英玲奈の言葉を聞いてツナはツバサを助け出した時のことを語っていく。

すると再び楽屋の扉からリボーンの声が聞こえる。

「ちよつといいかお前ら。」

「リボーン！またお前勝手に！」

「一つ聞きてえことがある。」

「リボーン？」

ツナはリボーンがまた勝手に楽屋に入ってきたことを注意するが、リボーンの真剣な表情を見てただごとではないということに気づいた。

「お前ら誰かに恨みを買った覚えはねえか？」

「い、いきなり何言ってるんだよりボーン！変なこと言ってるんだよ!」

「俺は本気だぞ。それでどうだ？何か心当たりはねえか？脅迫の手紙が送られたとか、最近妙な気配を感じたとかねえか？」

「そう言われても…」

「特に…」

「何もないな…」

リボーンの質問にツバサ、あんじゅ、英玲奈は心当たりがないかと記憶の糸を探ってみるが、特にこれといった心当たりはなかった。

「そうか…」

「何なんだよりリボン？ツバサさんたちにいきなりそんなこと聞いて？」

「さっきの鉄パイプの柱が倒れたきた事件があっただろ。お前がツバサを助けた後に俺はその周囲を調べたんだが、あることに気づいてな。」

「「「あること？」」」

ツナ、ツバサ、あんじゅ、英玲奈はリボーンの言葉に首を傾げながら疑問符を浮かべていた。

「巧妙に細工してあったが、あの柱は倒れるように仕向けてあった。つまりさっきのは事故ではなく、誰かが人為的に倒れるように仕向けてあったってことだ。」

「な、何で!?!何でそんなことする必要があるんだよ!?!」

「さあな。A—R—I—S—Eが活躍しているのが気にくわねえ奴がいるのかもしれないし、スクールアイドル時代に負けたことを根に持っている奴がいるのかもしれないが、詳しくは俺にもわからねえ。あくまで俺の推測だ。」

「本当に私たちが恨んでる人が…」

「ありえない話じゃないわ。確かに今までそういうのを考えたことはなかったけど、私たちが恨んでいる人もいないとは言いきれないわ。」
「そうだな。ちゃんとそういう現実を受け入れないといけないのかもしれないな。」

あんじゅはリボーンの言葉を聞いて不安そうな表情になり、ツバサと英玲奈は顎に手をやり真剣に考え始める。

「このまま何も起きねえのが一番だが、とにかく気をつけたほうがいいぞ。犯人は何が目的かはまだわからねえ、まだ何かしようこのドーム内でまだ何か企んでるかもしれないねえしな。」

リボンがそう言うと、ツナ、ツバサ、英玲奈、あんじゅは真剣な表情でただ頷くだけであった。

「まさかあんなことになるとは…だがこれで作戦は成功した。あとは待つだけだ…これでファミリーの願望が実現する…」

#標的（ターゲット） 177 「行方不明」

リボーンが気をつけろとツバサ、英玲奈、あんじゆの3人に言ったあとツナとリボーンは楽屋を後にしてドームの近くの喫茶店でライブが再開するまで時間を潰すことにする。

「アイドルって大変なんだね。」

「ああ。アイドルっていうのは華やかなイメージしかねえが、実際裏では色々あるんだろ。少なくともA―R―I―S―Eはスクールアイドルからアイドルになつて間もないがドームでライブできるくらい人氣が出てきてる。それをよく思わない奴だっているってことだろ。マフィアとあんまり変わんねえのかもな。」

「マフィアと一緒にするなよ!」

ツナはリボーンがアイドルとマフィアが一緒だということをつつたのでつつこんでしまった。

「でも…ツバサさんたち大丈夫かな?」

「大丈夫だろ。これくらいで挫折するような奴らだとは俺は思わねえ。少なくともお前がいたおかげで、ツバサは怪我することはなかったんだ、このまま何もなければ今回のライブは成功すんだろ。」

リボーンはツバサたちを心配するツナにそう言うと、注文しておいたエスプレッソを飲み干すと、エスプレッソのおかわりを注文した。

そして1時間と30分くらい喫茶店で時間を潰していると、ツナのスマホに一本の電話がかかってきた。

「はい、もしもし。」

『ツナ君?』

「あんじゆさん。どうしたんですか?」

ツナのスマホにかけてきたのはあんじゆであった。ツナはツバサがさきほど楽屋で助けてくれたお礼としてLINEの教えてもらい、その時にあんじゆと英玲奈の連絡先も教えてもらったのである。

『ねえツバサを見ていないかしら?』

「ツバサさんですか？見てませんけど…どうかしたんですか？」

『ちよつとジューズを買って来ると言ってから帰って来ないの。さつきから探しているんだど、見つからないの。ツバサはいつも1時間前には楽屋で踊り確認したりするんだけど、どこにも見あたらないの。さつきから英玲奈が携帯に電話してるんだけど、全然繋がらなくて…今、スタツフさんたちが探してるんだけど、全然見あたらないの…』

「もしかしてさつきA—RISEのを狙っているっていう犯人の仕業じゃ…ツバサさんを拐ってライブをできなくさせようとしてるんじゃない…」

『でも警備の人がいるのよ。どうやって警備の人たちに見つからずにツバサを拐えるの？』

「た、確かに…」

ツナはあんじゆの意見に納得してしまう。すると二人の電話で会話を会話を聞いていたリボーンが腕を組んで険しい表情になっていたことにツナが気づいた。

「リボーン？」

「ツナ、電話をこっちに向ける。」

「え？う、うん。」

ツナはリボーンに言われてスマホを向ける。するとツナのスマホに向かつて喋り始める。

「あんじゆ、聞こえるか？」

『リボーン君？聞えるわ。』

「ドーム内に人が一人くらい入れるぐらいの箱か何かを荷台か何かで運んでいた奴とかいなかったか？」

『そういえばダンボールで運んでいるスタッフとすれ違ったわ。でもただのスタッフさんだったし…まさか！』

「ああ。おそらく犯人は劇場のスタッフに変装して、ツバサを何かで眠らせてダンボールにツバサをいれて誘拐したんだ。」

『ええ!?!』

「そんな！」

ツナとあんじゅはリボーンの推理を聞いて驚いてしまっていた。

「それでお前は犯人を見たと言ったが、どんな顔とか覚えてるか？」

『帽子を深く被ってマスクをしてたから…あ！そういうえば首筋に紫色の蝶のタトゥーが入ってたわ。』

「紫色の蝶のタトゥーだと？本当か？」

『え、ええ…確かに見たわ。』

あんじゅが犯人の特徴を聞いて口調が強くなったリボーンに驚いたのか、少し戸惑ってしまっていた。

「まさかな…噂には聞いてはいたが、まさか本当に実在するとはな…」

「何だよりボーン？犯人がわかったの？」

「ああ。犯人はおそらくイードロファミリーの仕業だ。」

「ええ!?犯人マフィアなの!?!」

『マ、マフィア!?!』

ツナはツバサを拐った犯人がまさかマフィアだと知って驚き、あんじゅはマフィアという単語を聞いて驚いてしまっていた。

「ほ、本当にマフィアなのかよ!?!」

「その可能性は高いぞ、イードロファミリーは全員、紫色の蝶タトゥーをいれ、なおかつ構成員がアイドルオタクで編成されてんだ。噂だな。」

「アイドルオタクのマフィアって…」

ツナはマフィアがツバサを拐ったことだけでも驚きであったのに、アイドルオタクのマフィアいるということを知った。

聞いて驚きを通りこして呆れてしまっていた。

『マフィアって…どういうことなの?..』

「今は説明している時間はねえ。あんじゅ、ツバサは俺たちが助け出す。なんとかライブには間に合わせる、だから警察には連絡するな。会場にいる奴らはなんとか誤魔化せ。」

『え!?!ちよつと!?!』

リボーンはそう言うと、あんじゅが状況についていけず頭が混乱しているが一方的に電話を切ってしまった。

「いくぞツナ。敵は船を使ってツバサをイタリアまで運ぶはずだ、お

そらくツバサがいるのは港だ。」

「わかった。行こうリボン。」

二人は店を出るとバイクに乗ってツバサのいるであろう港を目指していく。

ライブ開始まで残りあと40分。

標的（ターゲット） 178 「怒り」

ツナはリボーンはバイクに乗ってここから一番近くの港へ向かっていた。

「リボーン、本当にお前が言ってる港にツバサさんがいるの？」

「ああ、間違いねえはずだ。いくらうまくツバサを拐うことに成功したといっても、そのあと絶対に見つからねえ保証はねえからな。だからそんなに遠くに行く理由はないからな。」

「でも何で船だつてわかつたんだよ？」

「船ならまわりから誰にも見られねえし、もし逃げようとしても海上じゃ逃げ場がない上に、誰の助けを呼ぶことはできないだろ。」

「確かに。」

ツナのリボーンから何故ツバサを船だと拐ったということにずっと疑問に思っていたが、リボーンの説明を聞いて納得していた。

するとここで新たな問題が浮上してしまった。

「あれ？でもそのイードロファミリって構成員ってアイドルオタクなんだよね？だったら何でステージをメチャクチャにしたんだろう？」

「犯人の狙いはライブを強制的に中止させて、ライブが再開する間にツバサを拐うのが目的だったんだろ。犯人はA|R|I|S|Eを憎んでいたんじゃないかって、逆に好きだったから推しであるツバサを自分だけの物にしたいとでも思ったって考えるのが自然だな。」

「そんなことの為にツバサさんを…」

ツナは犯人のツバサを拐った理由を知って怒りを覚えてしまっていた。そしてツナはバイクの速度をさらに上げてツバサがいるであろう港へと向かっていく。

そしてその頃、ツバサが捕らわれている港。この港の辺りには人がなく、よほどのことがない限り人が来ることはないであろうという場所であった。

「成功だ。とうとう念願だった日ジャップポネ本のアイドルA—RISEのリーダー綺羅ツバサを捕らえた…」

少し細い体で赤い髪の毛の男は眠らされツバサが捕らわれているであろうダンボールを見ながらそう呟いていた。

「これでフアミリーの念願が叶ったとあいつらは思っているだろうが、誰があいつらなどにツバサを渡してなるものか。ツバサはこのリーク様の物だ。これからツバサは僕と一緒に暮らすんだ。フッフ…」

興奮しているのかリークという男は顔をいやらしい表情をしながらそう呟いた。

「さて後は船で運ぶだけだ…」

「間に合ったか!？」

「だ、誰だ!？」

リークが船でツバサを運んで逃げよう思ったその時、後ろには額にオレンジ色の死ぬ気の炎を灯し超ハイパー死ぬ気モードになっているツナと、その隣で腕を組んで仁王立ちしているリボンがいた。

「き、貴様はライブの時の!？」

リーク突如現れたツナとリボンに驚きの声をあげてしまっていた。

そして驚いたのも束の間、リークはツナの正体に気づいてしまった。

「その死ぬ気の炎と紋章はボンゴレ!?それに最強の赤ん坊まで!?なぜここに!?!」

リークは二人の正体に気づいて驚いていたが、ツナがボンゴレギアに灯っている大空の死ぬ気の炎を逆噴射させ、一瞬でリークの懐に入りこみ腹部パンチを与える。

「グボオ!?!」

そしてリークは腹を両手で抱えながら、片膝をついてそのまま動かなくなってしまうていた。

そしてツナは置いてダンボールの所まで移動すると、中を開けると寝息をたてているツバサを抱えて救いだした。

「ツバサ! ツバサ!」

「う、うくん…?」

「よかった目が覚めたか…」

ツナは眠っているツバサをさすりながら名前を呼ぶと、すぐにツバサは目を覚まし、安堵の表情を浮かべていた。

「へ!?ツナ君!?何でここに!?!というか額が燃えてる!?そもそも何で私はこんなところに!?!」

ツバサはツナがここにいること、そして超死ぬ気モードで額が燃えていること、なぜ自分がここにいるのかということなど色々わからなくなり混乱してしまっていた。

「あそこにいる男は、お前を自分だけの物にしようと警備員に変装してお前を拐ったマフィアだ。そして俺はあんじゅからお前がいけないと連絡を受けて、助けに来たんだ。」

「マ、マフィア!?!」

ツバサはマフィアが自分を拐ったことに驚きを隠すことができなかった。

「で、でも何であの男がマフィアだって知って…それにその姿は一体…?」

マフィアが自分を拐ったことにも驚いていたが、ツバサは一番驚いていたのは超死ぬ気モードの状態のツナであった。

「僕のツバサから離れるボンゴレ。」

リークはツナの一撃を受けながらも、腹部を押えながらゆっくり立ち上がっていく。おそらくツバサを取られたくないという思いが、痛みを上回ったのであろう。

「どうやらそいつは精神が肉体を凌駕してるらしいな。厄介だぞツナ。」

「ああ、わかってる。」

確かに腹部に決まった一撃でも倒れないリークを見てリボンがそう言うと、ツナはボンゴレギアに死ぬ気の炎に灯し戦闘体勢となった。

「たとへボンゴレであろうと、僕のツバサは渡さないぞ！」

「ツバサはお前の物じゃない！ツバサは俺の友達で、多くの人に笑顔や希望を届けるアイドルだ！それを自分のくだらない私欲に為に拐うお前とは違う！」

「黙れ！お前に私の気持ちが変わるはずもない！」

「鉄パイプに細工してライブを中止にしたような奴の気持ちなんてわかりたくもない。それに…お前が鉄パイプに細工したせいでツバサがどんな目にあつたのかわかっているのか!？」

「ぼ、僕だってあれは予想外の事態だ！仕方がないだろう！」

「仕方がないだ?!俺が助けに入らなかつたらツバサはアイドルとして活動できなくなつてたかもしれないんだぞ！アイドルといたつてツバサは俺と年の変わらない女の子だ！どんな理由があろうと女の子を危険な目にあわせていいはずがないだろ！」

ツナはリークがやった行いに今まで溜め込んでいた怒り爆発させていく。

(私の為に怒ってる…こんなツナ君、初めて見るわ…)

ツバサが初めてツナが怒っているのを見て、驚いてしまっていた。

「俺は絶対にお前を許さない！」

真姫の時と同じくツナは怒りで額の死ぬ気の炎を荒ぶらせていく。

#標的（ターゲット） 179 「VSオタク」

「ナッツ！カンビオ・フォルマ形態変化！」

ツナはリングからナッツを出すと、カンビオ・フォルマ形態変化させた。そしてボンゴレギアの腕のパーツが変化していく。

「僕はたとえ相手がボンゴレであっても負けない！」

そう言うとりークは懐から、アイドルの応援グッツであるペンライトを取り出すと、ペンライトに雷の死ぬ気の炎が灯ると、死ぬ気の炎が刀の形となっていく。

「ペンライト型ソード、らいと雷斗セイバー。」

「ペンライトにツナ君と同じよう炎が……」
「やはり死ぬ気の炎を扱えるのか……まさかペンライトに炎を灯せるとはな……」

ツバサはリークの持っているペンライトに炎が灯ったことに驚き、ツナはペンライトに死ぬ気の炎を灯すことができることに驚いていた。

「だが中々の純度の炎だ。油断はできないな……」

「ツナ君……」

「安心しろツバサ。すぐにこいつを片付ける。お前にはアイドルとしてたくさんの人に夢や希望を与える役目がある。そして俺の役目はお前とお前の夢や希望を護ることだ。俺の誇りにかけてな。」

「え!?!/!/」

ツバサはツナの力強い言葉にツバサは少し顔を赤らめてしまっていた。

ツバサがそうなのも知らずツナは左手で右腕を握り、右手を開くと標準をリークに定めていく。

イクス「Xカノン！」

ぼうちいせん「防雷斬！」

そして弾丸と化した死ぬ気の炎がリークに向かっていくが、リークは雷斗セイバーを回転させてシールドを作りXカノンの攻撃を防いでいく。

「やっぱり一筋縄ではないかないか…」

「この程度で僕のツバサへの愛が打ち破れるとでも思ったのかボンゴレ！今度はこっちの番だ！」

そう言うとペンライト灯っている刀の形となっている死ぬ気の炎がツナに向かって一直線に伸びていき、ツナを襲っていくがツナはその場から一步も動かさず首を右に傾げるだけで攻撃を回避した。

「油断したな！」

そう言うリークは懐からもう一本、ペンライトを素早く取り出すとききほど同じく雷の死ぬ気の炎の刃をツナに向かって一直線を伸ばしていくと、ツナの顔に攻撃が直撃していく。

「ツナ君！」

「どうだボンゴレ！これが僕のカッパ！ボンゴレといっても所詮は子供！僕の前では無力だ！あとは最強の赤ん坊お前だけだ、お前を倒して僕の念願が成就する！」

「俺はお前みたいな格下なんて相手にしねえぞ。第一、俺は沈黙の掟で特殊弾以外撃てねえ。だがお前は俺の生徒を舐めすぎだぞ。」

リークがそう言うと、直撃したはず雷の死ぬ気の炎がどんどん凍っていく。そこにはリークの攻撃を右手で握りしめていたツナがいた。

「零地点突破初代エディション。」

「ほ、炎が凍った!?!」

「これがお前の実力か？こんなものなら拍子抜けだぜ。」

「いきがるなこの餓鬼！だったらこれだ！」

するとリークは凍っていないもう一本のペンライトに死ぬ気の炎を集中させていく。

「これが僕のツバサへの想いだー！ー！」

リークが叫ぶと雷斗セイバーに雷の死ぬ気の炎が一点に集中していき巨大な刀を作り出していき、それを空をかかげていく。

「これで終わりだ、ボンゴレ！喰らえ！天盧籠太刀ノ雷！」
あめのこたち
いかづち

そしてリークは高くジャンプすると、そのまま巨大な刃と化した雷の死ぬ気の炎の灯ったペンライトを両手で握っておもいきりツナに向かって降り下ろした。

だが

「なに!？」

「零地点突破改白刃取り。」

ツナは巨大な刃と化した死ぬ気の炎を、未来でミルファイオーレファミリーの六弔花の一人で幻術を使う四刀流の剣士である幻騎士の太刀筋を受けた時のように、零地点突破改の構えでリークの一撃を受け止めていた。

そして額の大空の死ぬ気の炎が不規則にノッキングし始め、雷の死ぬ気の炎がツナに吸収されていき、額の炎とボンゴレギアの大空の死ぬ気の炎が大きくなっていく。

一方でペンライトの死ぬ気の炎が消えていった。

「あの一撃を受け止めた上に、死ぬ気の炎を吸収して力を変えたのか!？」

「俺はお前より強い剣を知っている。その程度の剣は俺には通じない。」

そう言うツナはボンゴレギアに灯っている大空の死ぬ気の逆噴射させると、再びリークの懐に入るとききより強烈をパンチを腹部に決める。

「グボオ!？」

「お前はアイドルオタクとしてより、人間としてやり直してこい。」

そう言う今度こそリークは地面にうつ伏せになり、気絶してしまった。

#標的（ターゲット） 180 「新たな強敵」

イードロファミリーのリークとの戦いが終わり、ツナ無事ツバサを護ることができた。

「ツバサ大丈夫か？あの男に変なこととかされてなかったか？」

「大丈夫よ。それよりツナ君って一体何者なの…？も、もしかして超能力とか…？」

「それは…」

さつきまでツナとリークとの戦いに呆気にとられてしまっていたツバサだったが、ここでツナの正体について尋ねると、ツナは少し暗い表情になって黙ってしまっていた。

するとリボーンが代わりにツナの正体について話し始めた。

「ツナはボンゴレファミリーっていう世界最強のマフィアの時期ボス候補なんだ。」

「ツナ君が!?さっきの男が驚いてるのはそんな凄いマフィアのボス候補だったから…」

ツバサはリボーンからツナの正体を聞いて驚きながらも、さきほどリークがツナを見て驚いていた理由を納得した。

するとツナは目を閉じると額と炎が消え、ボンゴレギアがただの27と書かれた手袋になり超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態からノーマル状態に戻っていた。

「ツバサさんはこれからもただの女の子として接して欲しいって言ったから、俺もツバサさんとは普通の友達としていたかったら…すいませんツバサさんは自分の正体をちゃんと話したのに黙ってて…」

「謝る必要なんてないわ。私のこと2度も護ってくれてありがとう。また飯ができちゃったさわね。」

「飯なんて思わなくて大丈夫ですよ！お、俺はただ護りたいものを護っただけなんですから！」

「フフッ！ツナ君って本当に面白いのね。私、ツナ君のことますます

気にいっちゃったわ。」

「え!？」

ツナはツバサが急に变なことを言ったことに驚いてしまっていた。「それより早くドームに戻らねえとライブが始まるぞ。」

「本当だ! ツバサさん俺がバイクでドームまで送りますから、早く!」
ツナはこの後、ツバサをバイクに乗せて急いでドームに向かった。幸いツバサの顔はヘルメットで隠れていた為、ツナの後ろに乗っているのがツバサだということは誰にも気づかれることはなかった。

そしてドーム会場の裏口。

「ツバサ!」

「あれ? あんじゅさん、英玲奈さんどうしてここに?」

バイクでドームの裏口の入りになぜかツナが来るとわかっていたかのようにあんじゅと英玲奈が待っていた。

「俺があんじゅに連絡したんだぞ。ツバサを奪還したってな。」

「いつの間に…」

ツナはいつの間にかあんじゅに連絡していたことに驚いてしまっていた。

「ごめんなさいあんじゅ、英玲奈。心配かけて…」

「謝る必要はない。ツバサが無事でなによりだ。」

「そうよ。だからそんな暗い顔しないで。」

暗い表情になりながら謝るツバサを、あんじゅと英玲奈は責めることなく優しい口調でそう言う。

「ありがとうツナ君、またツバサを助けてくれて。」

「私からもお礼を言うぞ。ありがとう。」

「そ、そんな! 頭を上げてください!」

深々と頭を下げて謝るあんじゅと英玲奈を見て、ツナは両手を振りながらそう言った。

そしてライブ開始まで残り時間があとわずかとなってしまう。

「ライブ頑張ってください。」

「ええ、今日は色々ありがとうございます。じゃあね。」

「!?!?!」

そう言うのとツバサはツナに近づくと、ツナの頬にそっとキスをした。

まさキスされるなんて思ってもみなかったツナは顔を真っ赤にしてみまい、あんじゅと英玲奈もその光景に驚きを隠すことはできなかった。

「高坂さんたちに伝えてもらえるかしら。ラブライブでは負けただ、恋愛は負けないって。」

「ああ。ちゃんと伝えておくぞ。」

ツバサにキスされたことで頭が混乱している為、リボンがかわりにツバサの伝言を伝えることを了承した。

「行きましょうあんじゅ、英玲奈。」

「え、ええ……」

「あ、ああ……」

今だにツバサがツナにキスしたことに衝撃を受けているあんじゅと英玲奈にそう言うと、二人は衝撃が抜けてないまま、ドーム内に入ってしまった。

そしてこのあとライブが行われたのだが、ツバサがライブ一番前にいたツナに何度もウインクを送っていたという。

#標的（ターゲット） 181 「送られた写真」

A―RISEのライブが終わってツナとリボーンはドームから出て、バイクに乗って家に帰ろうとしていた。

「やっぱり凄かったね、ツバサさんたちライブ。」

「だな。やっぱりボンゴレに必要なだよなあいつら。」

「まだ諦めてなかったのかよ！ツバサさんたちはアイドルなんだぞ！」

この後に及んでまだツバサ、英玲奈、あんじゅをマフィアにしようと考えていたリボーンにツナは叫んでしまった。

「ツナ、ママさんが穂むらの和菓子が食べたいって言ってたぞ。」

「え？母さんが？」

「ああ。だからお前が行って買ってこい。俺は先に帰ってるからな。」
「ちよつと待ってってリボーン！」

リボーンはツナの制止も聞かずに、相棒のレオンを翼に変形させて空を飛んで帰って行ってしまった。

「まあいいか…」

想い人である穂乃果に会えるということもありツナは、バイクに乗り、穂むらを目指していく。

バイクに乗って20分、ようやく穂むらに到着した。

「そういえば穂乃果ちゃんのお母さんにまた、なんか色々と言わそうだなー…」

ツナは今まで穂むらに來るたびに、穂乃果の母に付き合うこととか結婚のことについてなどと、色々と言われてきたことが頭に過ってしまった。ツナ自身、穂乃果と付き合えることはなにより嬉しいことで、むしろ結婚したいと思っているのだが、あんな風言われるとどうしても恥ずかしいのである。

そしてツナはおそろおそろ穂むらの中に入る、そこには穂乃果の母はいなかったが、そこには少しやつれながら店の手伝いをしている穂乃果がいた。

「あ、ツ、ツナ君!?君いらっしやい…」

「穂乃果ちゃん。こんにちわ。ちよつと母さんが穂むらの和菓子が食べたいつて言つてたらしいから、買いに來ただけど、大丈夫?」

「う、うん!?だだ、大丈夫だよ…!」

(あれ?何でだろう…?穂乃果ちゃんがさつきから目をあわせてくれないような…というかいつもより元氣がないような…)

ツナは明らかに穂乃果に何かがあつたであろうと気づくが、一体何があつたのかまではわからなかつた。

「ツナさん。」

「あ、雪穂ちゃん。お邪魔してるよ。」

「あのツナさん…これ本当なんですか…?」

「え?」

そう言うくと雪穂は穂乃果のスマホのLINEの画面をツナに見せると、そこにはリボンから送られたツバサがツナの頬にキスしている写真が送られており、写真の下にはラブライブでは負けただけど、この戦いでは負けないぞつてツバサが言つてたぞという、リボンのメッセージがあつた。

(リボン…!いつの間に!じゃあ母さんが穂むらの和菓子を食べたいつて言つてたのは嘘か…!写真を撮られた上に穂乃果ちゃんに見られた…最悪だ…!)

「これ合成とかじゃないですよね…?」

「え、えつと…そ、それは…」

雪穂に尋ねられて、ツナはどう言い訳しようか必死に考えるが、こ

れといった言い訳が思いつくことはなかった。

「アイドルのツバサさんにあんなことされるなんて…ツナ君って凄いな…でもツナ君と私はずっと友達だよ…ずっとね」

「穂乃果ちゃん！違うんだ！これは！」

ツナはなんとかして誤解が解こうと必死になるが、やはり思いつかなかった。

そしてこのリボーンの送った写真とメッセージは穂乃果だけでなく、もちろん他のメンバーに送られていたということも言うまでもない。

#標的（ターゲット） 182 「やってみないか？」

ツバサにキスされたことを誤魔化そうと脳をフル回転させて言い訳しようとするツナを雪穂は見えていられなくなったのか、違う話題を話し始めてくれた。

「それにしてもツナさん凄いですよね。倒れてくる鉄パイプの柱からツバサさんを救ったんでしょ。」

「ええ!?何で知ってるの!?!」

「ネットのニュースが上がってますよ。アイドルの窮地を救った謎の青年っていう見出しで。ほら。」

そう言うとき雪穂はスマホを見せると、そこにはツナがツバサを鉄パイプの落下から護ったことについて取り上げられていた。

「うわっ本当だ!こんなことがあったんだ!」

さつきまでツバサにキスされたことに動揺してしまっていた穂乃果であったが、ネットのニュースを見て驚いてしまっていた。

「ツバサさんの助けるなんて、さすがツナ君だね。」

「え!?////そ、そうかな!?!////」

ツバサを助けられたことを穂乃果に褒められて、ツナは後頭部に右手をやり、顔を少し赤くしながら照れてしまっていた。一方で雪穂もいつものように話している二人を見て安堵の表情を浮かべていた。

すると穂むらの入り口から、穂乃果の母が帰ってくる。

「ごめんねー、回覧板を届けに行くだけだったのについて話しこんじゃって…あら?ツナ君じゃない。いらっしやい。」

「あ、どうもお邪魔しています…」

穂乃果の母が帰ってくると、ツナは軽く会釈をしながらそう言うのと、いつものように結婚の話をし始めるのだらうと思ってしまう。

だが穂乃果の母から告げられたのは別の話であった。

「あー丁度よかったわ!ねえツナ君、明日って予定とかあるかしら?」「予定ですか?特にありませんけど。」

「そう。お願いがあるんだけどいいかしら?」

「お願い?」

「明日、穂^ウむら^チでバイトをお願いをしてほしいの。ダメかしら?」

「バ、バイト!?!」

穂むらでのバイトをお願いをされるとは思ってもおらずツナは驚きの声をあげてしまい、穂乃果と雪穂も驚いてしまっていた。

「最近、ちよつと人手が欲しいと思つててね。誰かいい人はいないかと思つてたのよ。ツナ君はとっても素直だし、いいんじゃないかって今思つたんだけど。」

「で、でも!俺、和菓子どころか、料理もできないし…」

「大丈夫よ。ちよつと店番してくれたり、物を運んでくれたらいいの。それに何かあつたら私と穂乃果もいるから安心して。」

(え…それつて穂乃果ちゃんと一緒に働くつてこと!?!//)

ここでようやくツナは穂乃果と一緒にバイトすることになるということを理解すると顔を赤くし、穂乃果をチラッと見ると穂乃果もツナと一緒にバイトするということを理解したのか少し顔を赤くしてしまっていた。

「どうかしら?ちゃんとバイト代も出すわ。」

「え…じゃあやってみようかな…?」

「本当に!?!ありがとうツナ君。」

ツナがバイトしてくれることを了承すると、穂乃果の母とても明るい表情になった。

「ツナ君がいてくれて良かったわ。あ!これでツナ君がウチで働けるようになったら、穂乃果と結婚して穂^{この}むら^店を経営できるし、さらに子供ができたら跡取りもできるし穂^ウむら^チも安泰だわ。」

「け、結婚!?!//」

「こ、子供!?!//」

結婚と子供という単語を聞いてツナと穂乃果は顔を真っ赤にし、将来二人で穂むらを経営する姿を想像してしまっていた。

とにもかくにもツナのG^{ゴールデンウイーク}W 5日目は和菓子屋でのアルバイトをすることになったのであった。

#標的 (ターゲット) 183 「バイト前日」

ゴールデンウィーク
GW 最終日、ツナは和菓子屋穂むらにてアルバイトをすることが決定した。

そしてツナは一応、穂むらで和菓子を買おうと、バイクに乗って家の帰ろうとしていた。

「なんかごめんねツナ君。急にお母さんが無理、言っちゃって…」

「大丈夫だよ。どうせ明日も暇だったし、それに将来的にも役に立つしぎ。」

「将来的ってツナさん…それはお姉ちゃんへのプロポーズってことですか？ 将来一緒に穂むらを経営しようっていう。」

「い、いや!! // // そうじゃなくて!! // // 将来、就職した時のことを考えたらアルバイトは大事という意味で! // //」
「!? // //」

雪穂がニヤニヤしながらそう言うと、ツナは顔を真っ赤にしながらい言いつけるが、穂乃果はただただ顔を真っ赤にさせたまま俯いてしまっていた。

「と、とにかく!! // // また明日ね!! // //」

顔を真っ赤にしながらかう言うのと、ツナは恥ずかしさのあまりバイクのスピードをかなりだして自分の家に帰って行ってしまった。

「も、もう雪穂! // // 変なこと言わないでよ! // //」

「いいじゃん別に。実際、ツナさんと穂むらを経営していけたらいいって思ってるんでしょ?」

「そ、それは…!! // //」

雪穂の言葉に穂乃果は再び、顔を赤くしながら俯いて黙ってしまった。

「それでお姉ちゃんどうするの?」

「どうするって？何が？」

「さっきのリボン君が送ってきた写真とメッセージだよ。A—R—I
SEのツバサさんがツナ君のことを好きになったんだよ？」

「そりゃ驚いたけど…でも相手がアイドルだからって負けるわけには
いかないよ。」

「よかった。さっきまで世界が終わったみたいな顔してたのに。元氣
が出てなによりだよ。」

「だ、だって…!!／／あのツバサさんがキスしたんだよ!!／／ア
イドルは恋愛がダメだって絶対にわかつてはずなのに…それなのに
キスしたんだもん…!!／／／」

「まあ…そうだよ。スクールアイドルならともかく、本物のアイド
ルにキスさせたんだしね。一体ツナさんってどういう星のもとに生
れたんだろ…μ sのみんなを知らず知らずのうちにとんどん落と
していった上に、本物のアイドルを落としていったんだし…」

雪穂は次々に恋愛フラグを建てていくツナの凄さを改めて凄いと
思ってしまった。

そしてツナが家に帰った頃。

「お、帰ったかツナ。」

「お、帰ったかじゃないだろ！リボン！お前騙したな！」

「あれれー？何のことー？」

「とぼけるなよ！お前が送った写真のせいで、大変だったんだぞ！」

「そうか。まあいいじゃねえか、明日、穂むらでバイトすんだろ。穂乃
果と一緒に働けてよかったじゃねえか。」

「何で知ってるんだよ！」

先に帰ったはずのリボンが、穂むらでアルバイトすることを知っていたことにツナはツツコミをいれてしまった。

「あ、もう気づいているかもしれないねえが、ツバサがお前にキスした写真は穂乃果以外のメンバー全員に送ったからな。」

「ちよいな、何してるんだよ!?!」

穂乃果以外にもツバサにキスされた写真を送っていたことを知ってツナは驚いてしまった。

その夜、穂乃果以外のメンバーから最低だとか、ずっと友達だよなどという文章が送られて、フォロワーが大変だったという。

#標的 (ターゲット) 184 「バイト当日」

そしてバイト当日。時間は午前9時55分、ツナは穂むらにやって来た。

「よし・5分前には着いた。」

ツナは穂むらでの初めてのアルバイトということもあり、気合が入っている様子である。

そしていつもなら緊張することもなく穂むら入っていたツナだが、いざ働くとなると緊張してしまい、おそるおそる中へと入っていく。

「お、おはようございます。」

「あらツナ君。おはよう。」

「きよ、今日はよろしくお願いします。」

「そんなに緊張しなくていいのよ。そんな難しいことをやるんじゃないから。」

緊張して顔が強張っているツナを見て、穂乃果の母は笑顔でそう言った。

「お母さーん!」

「どうしたの雪穂?」

「あ、雪穂ちゃん。」

「あ!ツナさん、来てたんですか。おはようございます。」

ツナが来ていることに気づいて、雪穂は軽く頭を下げながら挨拶した。

「それでどうしたの雪穂?穂乃果がどうかしたの?」

「聞いてよお母さん、お姉ちゃんったら今日ツナさんがバイトしに来る日だっていうのにまだ寝てるんだよ。何度も起こそうとしたんだけど全然起きなくて。」

「しょうがないわね…昨日あれだけツナ君が来るんだーって言ったのに…」

「アハハ…」

雪穂から穂乃果がまだ寝ていると聞いて、穂乃果の母はため息をつき、ツナは苦笑いしてしまっていた。

「悪いけどツナ君、穂乃果を起こしてくれない？」

「ええ!?俺が!？」

「ツナ君が行ってくれれば、起きると思うのよ。私は今から準備とかしないといけないから。」

「で、でも女の子の部屋に勝手に入るのは!」

「いいのよ。起きない穂乃果が悪いんだから。よろしくねツナ君。」

「ちよつと!待ってください!まだ俺は!」

穂乃果の母はツナの制止も聞かずに、そのまま奥の厨房に入っ
てしまった。

「なんかごめんなさいツナさん。お姉ちゃんがだらしくなつて。」

「大丈夫だよ、まあGゴールドデンウィーク Wだしダラダラしちゃうし。」

「ツナさんも大変ですよね。付き合い初めて、デートとかでも寝坊し
そうだからお姉ちゃん。」

「つつつつ付き合う!?／／デデデデート!?／／」

付き合うとデートという単語を聞いただけで、ツナは顔を真っ赤に
して動揺し始めてしまっていた。

「おおおお俺とほほほ穂乃果ちゃんか!?／／」

「お、落ち着いてくださいツナさん!」

「あーご、ごめん!」

(付き合うとデートっていう単語を聞いただけで、こんなに動揺する
なんて…)

雪穂に落ち着けと言われて、ツナはなんとか落ち着きを取り戻し
た。まさかここまで動揺するとは思ってはいなかった雪穂は若干、引
いてしまっていた。

「で、でも穂乃果ちゃんって…好きな人がいるんだよね…」

「へ?」

「なんかね穂乃果ちゃんの好きな人って、とっても優しくって、その人と
いるとありえないことがたくさん起こって楽しくいんだって…」

「そ、そうなんですか…」

「あー！思い出したら気になってきたー！やっぱり音ノ木坂学院同校の人なのかな?！」

「ツナさん…音ノ木坂学院ウチの学校は女子校ですよ…」

「あ…」

両手を頭をやりながら叫ぶツナに、音ノ木坂学院が女子校であることを伝えると、ツナは音ノ木坂学院が女子校であるということを思い出した。

「雪穂ちゃん知らない!?穂乃果ちゃんの好きな人!？」

「え…まあ…知ってます…けど…?」

「本当に!?やっぱ穂乃果ちゃん、妹の雪穂ちゃんには言ってたんだー。」

（いや…一目瞭然ですツナさん…）

「でも誰なんだろうなー…」

「まあ…ヒントぐらいなら教えてもいいですよ。」

「本当に!？」

雪穂が穂乃果の好きな人のヒントを教えてくれると言ったので、ツナはとつても明るい表情になり、ヒントはまだかまだかという顔になっていた。

「お姉ちゃんはツナさんたちと出会うまで、男の子と遊ぶことなんてほとんど…というかなかったんですよ。」

「え?じゃあ穂乃果ちゃんの好きな人って俺たちの中にいるってこと…?」

（さすがに言い過ぎたかな…でもこれで気づくはず…）

「俺たちってことは…獄寺君!?山本!?炎真!?ディーノさん!?白蘭!?お兄さん!?バジル君!?ランチアさん!？」

ツナは自分の友達や知りあいを次々とあげていく。

そしてさらには…

「案外フウ太とかリボンとか…まさかナッツとか…」

（ナッツちゃんは動物ですよツナさん…確かにお姉ちゃん好きだけど…）

しまいには人間どころか、動物が出てくるという次第になってしまっていた。

「やっぱりわかんないよー!誰なんだろうー!?!」

自分のまわりにはモテる友達や、イケメンな人がいるせいか、穂乃果が誰のことを好きなのかわからなくなってしまう。そうではなくともツナはわからないでいたかもしれないが…

(何で自分の魅力に気づかないんだろう…)

ツナと穂乃果が付き合うことになるのは、当分先になるなとそう思う雪穂であった。

結局、穂乃果の好きな人はわからないままツナは雪穂と一緒にまだ寝ている穂乃果を起こしに、部屋に入っていく。

「うくん…ホノ太郎モフモフ…」

「もうお姉ちゃんってば!」

「アハハ…」

穂乃果はナッツをモフモフしている夢を見ているのか、枕を抱いて少しヨダレを垂らして眠ってしまったっており、そんな穂乃果の寝顔を見て雪穂は呆れた表情になり、ツナは苦笑いしてしまっていた。

「私の力じゃ無理です。ツナさんお願いします。」

「ええ!?雪穂ちゃんがこれだけやっても起きないんだから無理だよ!」

「大丈夫ですよ。穂乃果ちゃん大好きだよって言えば絶対に起きますから。」

「な!?／／／」

雪穂が表情ニヤニヤさせながらそう言うと、ツナはいつものように顔を真っ赤にさせてしまう。

「じゃあお目覚めのキスを…」

「ダダダダメだって雪穂ちゃん!!／／／さすがにできないって!!／／／」

「でもいずれすることになるんだし、その為の予行演習だと思えば。」
「ダ、ダメだって!!／／／穂乃果ちゃんには好きな人がいるんだかし!／／／そんなことできないよ!!／／／」

ツナは雪穂の提案にさらに顔を真っ赤にしてしまう。そしてツナはナッツの力を借りて穂乃果を起こそうということを思いつき、ボンゴレギアに死ぬ気の炎を注入すると、相棒のナッツがボンゴレギアの中から出てきた。

「ガウ♪」

「穂乃果ちゃんナツツだよ…つてこれで起きるわけ…」

「え!?どこ!?!」

「起きた!?!」

雪穂が何度も何度も叫んでも起きなかったのにも関わらず、穂乃果はナツツがいると聞いて目をカツと見開き、もの凄い勢いで起きると、即座にナツツを視界に捕らえるとツナからナツツを一瞬で奪い自分の元へ抱き寄せていく。あまりの一瞬のことにツナと雪穂は啞然としてしまった。

「本当にホノ太郎だー!夢じゃなかったんだー!」

「ガウウ…」

「やつと起きたねお姉ちゃん。ツナさん来てるよ。」

「え!?!」

ナツツを抱き寄せてモフモフしてる穂乃果に、雪穂がそう言うのと、自分の目の前にツナがいることに気づいて驚きのあまり固まってしまった。

「おはよう穂乃果ちゃん。」

「な、何でツナ君が私の部屋に!?!」

「いや…穂乃果ちゃんのお母さんが起こしてきてくれてって言われたから起こしにきたんだ。」

「そうなんだ…つて!もうこんな時間!雪穂!何で起こしてくれなかったのー!?!」

ツナから話を聞いた穂乃果はベッドの側に置いてある目覚し時計を見て驚くと、雪穂に文句を言った。

「何度も起こしたよ!それなのにお姉ちゃんが全然起きないだから!お姉ちゃんが早く起きないからツナさんが来ちゃったんだよ!とにかく早く着替えて!もうお母さんも準備始めてるんだから!」

「は、はーい!」

雪穂が穂乃果への不満を爆発させると、穂乃果はナツツを連れたまま慌ててベッドから降りるち、そのまま部屋から飛び出し着替えに行っていた。

「もう…お姉ちゃんってば。本当にだらしなんだから…」

(妹との雪穂ちゃんのほうがお姉ちゃんみたい…)

ツナはため息をつきながら、部屋の入り口を見つめる雪穂を見て、雪穂の立場が上だということを悟った。

「ツナさんも大変ですね。お姉ちゃんにと本当に付き合うことになったら。」

「そ、そうかな?」

「スクールアイドルとしてステージじゃすつごく輝いて見えるけど、実際家ではいっつもあんな感じなんですから。」

「でも穂乃果ちゃんにはいいところはたくさんあるし、欠点なんて人間だったらあって当然だと思うよ。前にも言ったけど、俺のほうが欠点だらけの人間だし。」

「ツナさん、お姉ちゃんのが好きだからって甘いんじゃないんですか?」

「え!?お、俺は本当のことを言っただけだよ!だってスクールアイドルを始めて学校を救おうって言い始めたのは穂乃果ちゃんなんですよ?」

「そうですね…」

「やっぱり凄いや穂乃果ちゃんって。俺だったら学校が廃校になるって聞いても絶対にそれを阻止しようなんて思わないよ。俺はみんなといられれば別にどんな学校でもいいとか…そこが俺の居場所だというか…とにかく音ノ木坂学院を救ったのは穂乃果ちゃんだけの力じゃないけど、穂乃果ちゃんは凄いと思うよ。」

「ツナさんはやっぱりお姉ちゃん一筋なんですね。」

「そうでもないよ。昔、俺にも好きな人がいたよ。もうフラれちゃったけどね。」

「え…?」

雪穂は穂乃果を好きになる前に、好きな女の子がいたという事実に驚いてしまった。

「その子と穂乃果ちゃん、なんか似てるんだよね。だから俺、穂乃果ちゃんのこと好きになったんだ。」

「そ、そうだったんですか…」

「でも一つだけ違うところがあるんだよね。前好きだった子は何だろう…太陽みたいな暖かい存在で、穂乃果ちゃんは全てを包容してくれる大空みたいな存在なんだ。」

ツナかつての想い人である京子と、現在の想い人である穂乃果の違いを語った。

(あれ?なんかボンゴレの守護者の使命みたいになってる…)

マフィアになりたくないにも関わらずツナは、つい京子と穂乃果の違いについての説明をボンゴレの守護者の使命で言ったことに自分で驚いてしまった。

「なんかツナさんって変わってますよね。」

「え?そうかな?」

「はい。だからこそお姉ちゃんを任せられるのはツナさんしかいないと私は思ってます。だからお姉ちゃんのこと幸せにしてあげてください。」

「え!?!//その!!//」

いつもならこういうことは表情をニヤニヤさせながら言う雪穂が真面目な顔で言ったのでツナは戸惑ってしまったのだった。

#標的（ターゲット） 186 「クラスメイト」

穂乃果も起きて準備が完了したことで、さっそくアルバイトが始まる。

「穂乃果が寝坊したせいで遅れちゃったけど、さっそく始めるわよ。まずは材料を運びね。ツナ君と雪穂は今から言う材料を奥にいるお父さんのところまで運んでもらうわ。」

「は、はい。」

「はーい。」

穂乃果の母に使命を言い渡され、ツナは緊張しながら返事し、雪穂は慣れているのか何も普通に返事をしていた。

「穂乃果は店の清掃ね。」

「えー!?何で私だけ掃除なのー!」

「寝坊したペナルティよ。文句言っていないで、さっさと始めるわよ。ツナ君、雪穂、こっちに来て。」

そう言うと穂乃果の母は、ツナと雪穂を連れて奥の厨房に入ってしまった。

一方で穂乃果は水の入ったバケツとモップを用意して店内の掃除を始めていく。

「確かに寝坊したのは悪いけど、何で私だけ…ホノ太郎もそう思うでしょ?」

「ガウ?」

穂乃果は自分だけ掃除ということにブツブツと文句を言うと、肩に乗っているナッツに同意を求めるがナッツは穂乃果の言っている意味を理解しておらず疑問符を浮かべるだけであった。

文句を言いながらも穂乃果は、30分ほどで掃除を終わらせる。

「よし終わったー。」

掃除が終わって一息つくつと、店にショートカットの赤い髪の女の子と、ポニーテールの紫色の髪をした女の子と、おさげの茶髪の女の子が入ってきた。

「あーヒデコ、フミコ、ミカ！どうしたの？」

「遊びに来たんだよ穂乃果。つて猫！」

「かわいいー。」

「もしかして穂乃果の家で飼ってるの？」

穂乃果の肩に乗っているナッツを見た、ヒデコ、フミコ、ミカと呼ばれた少女たちはナッツに興味を示す。

「ううん違うよ。これは…」

「穂乃果ちゃん。お母さんが手伝って欲しいことがあるって言ってるよ。」

「え？本当に？」

ナッツのことを説明しようとするつと、ツナが厨房のほうから出て来て、穂乃果の母から伝言を伝える。

そして奥から出てきたツナを見て、ヒデコ、フミコ、ミカはまさかと思ってしまうつていた。

「あれ？穂乃果ちゃんの友達？」

「うん。同じクラスメイトのヒデコとフミコとミカだよ。私がsを結成した時からずっと応援してくれてたんだ。」

「へーそうなんだ。初めまして、沢田綱吉です。気軽にツナって呼んでください。」

穂乃果から3人のことを聞くと、ツナはすぐに自己紹介をした。

そしてヒデコが3人を代表してツナに尋ねる。

「あ、あのーも、もしかして！」

「え？何？もしかしてどこかで会ったことがある？」

「そうじゃなくて！ツナ君は…穂乃果の彼氏…？つていうことではないの…？」

「か、彼氏!?!?!」

彼氏という言葉聞いて、ツナと穂乃果は顔を真っ赤にしてしまった。

「ち、違うよ!!／／／俺と穂乃果ちゃんは恋人同士そういう関係じゃないよ!!／／／ただの友達で!!／／／」

「そ、そうだよ!!／／／ツナ君は私の友達だよ!!／／／今日は穂ウむらチにバイトに来てるだけで!!／／／」

顔を真っ赤にしながら二人は両手を前に出して首を横にブンブン振りながら、自分たちは付き合っているわけではないと否定する。

(と、友達か…)

(そ、そうだよね…私とツナ君は友達…)

二人はお互いのことを友達だと言ったことに、心の中でショックを受けてしまっていた。

「こ、これは両想いって言うこと…?」

「穂乃果にもとうとう彼氏が…」

「ビッグニュースだよ!学校みんなに知らせなくちゃ!」

さっきの二人のわかりやすいの反応でミカ、フミコ、ヒデコはツナと穂乃果が両想いだということに気づき、小声でヒソヒソと話しながら興奮してしまっていた。

後日、穂乃果に彼氏ができたという噂が音ノ木坂学院で流れてしまふということをつなと穂乃果は知るはずはなかった。

#標的 (ターゲット) 187 「常連客」

穂乃果のクラスメイトであるヒデコ、フミコ、ミカは穂乃果を遊びに誘うのと、ミカが家の人に穂むらの和菓子を買ってきて欲しいと言われてやって来たのだそうだ。

「はい。どうぞ。」

「ありがとうございます。」

穂乃果の母が和菓子を袋に包んでミカに渡すと、ミカはお礼を言いながら和菓子を受け取る。

「はい、お釣だよ。」

「ありがとうツナ君。」

今度はレジからツナがお札と小銭をミカを渡すと、ミカは再びお礼を言った。

「ツナさんレジできるんですね。」

「夏祭りで屋台を出した時にレジを使ったことがあったから。」

中学の時に借金返済の為に夏祭りを屋台の販売してから、次の年から小遣い稼ぎの為に屋台を出して、その時にレジをツナは使えるようになったのである。

「やっぱりツナ君をバイトに選んでよかったわ。ツナ君、高校卒業したら穂むらで働かない？もちろん穂乃果と一緒に。」

「ほ、穂乃果ちゃん?!?!?!」

「お、お母さん!!?!?!」

「ま、まさか親が公認してるなんて…」

「もうこれは…」

「できてる…」

穂乃果の母の誘いにツナと穂乃果は顔を真っ赤にしてしまっていた。そしてツナが穂乃果の母の誘いを受けたことに驚きフミコ、ミカ、ヒデコは小声でコソコソ話しあっていた。

「お、お母さんいい加減にしてよ!!?!?!」それにツナ君はマフィ…

「穂乃果ちゃん!?!お姉ちゃん!?!」あ…」

「……?」

穂乃果がマファイアのボスと言いそうになったので、ツナと雪穂は慌てて叫び、マファイアのボスという言葉を遮って誤魔化した。

ツナと雪穂の慌てように穂乃果の母、ヒデコ、フミコ、ミカは疑問符を浮かべてしまっていた。

すると穂むらに新たな客が入ってくる。

「お? ツナじゃねえか? 何やってんだ?」

「デイーノさん!」

「「キヤーラー?」」

突如入ってきたデイーノにツナは驚き、デイーノのあまりのかつこよさにヒデコ、フミコ、ミカは悲鳴をあげてしまう。

「デイーノさん、何でここに!?!」

「何って? 穂むらの和菓子を買いにきたただけだ。そういうツナこそ何やってんだ? まさか花嫁修行ならぬ花婿修行か?」

「ち、違いますよ!!／＼／＼」

表情をニヤニヤさせながら言うデイーノにツナは顔を赤くして、否定する。

「ん? こいつら誰だ?」

「私のクラスメイトです。」

「へーそうなのか。俺はデイーノだ、よろしくな。」

「ヒ、ヒデコです!」

「フ、フミコです!」

「ミ、ミカです!」

あまりのデイーノのイケメンオーラに、3人は緊張してしまっていた。

「あらデイーノさん、いつもいつもありがとうございます。」

「こちらのほうこそ。」

そう言うデイーノはショーケースに並んでいる和菓子を見て、何を買おうか顎に手をあてて考え始める。

「え、いつも…?」

「デイーノさんは穂むらの常連なんですよ。」

「よく買いに来てるよね。」

「え…そうだったんだ…」

デイーノが穂むらの常連客であることを雪穂と穂乃果から聞いて、ツナは驚いてしまった。

するとフミコが興奮しながらツナに尋ねる。

「ね、ねえツナ君！あのすっごいイケメンの人とどういう関係なの!」

「え？デイーノさんのこと？デイーノさんと俺は家庭教師が同じで、いわゆる兄弟子みたいな感じ？でも穂むらの常連客だなんて知らなかったな。」

「デイーノさんだけじゃないよ、他にツナ君の知りあい^{ウチ}で穂むらの常連がいるよ。」

「本当に!?!もしかしてリポーン!?!」

「ううん違うよ。」

「僕だよ。」

「へー白蘭か…って白蘭!?!」

「「キヤーーー?」「」」

ツナはいつの間にか後ろにいた白蘭にびつくりし、ヒデコ、フミコ、ミカはデイーノの時と同じく白蘭を見て悲鳴をあげる。

「やつほー綱吉君、穂乃果ちゃん、雪穂ちゃん。それとヒデコちゃん、フミコちゃん、ミカちゃん。」

「ええ!?!何で私たちの名前知ってるの!?!」

「ど、どこかで会ったことあったっけ!?!」

「お、思い出せない!?!」

(確か平行世界の共有する白蘭さんの能力^{ちから}…だったっけ?)
(あいつやっぱり知ってたんだ…)

初めて会ったはずの白蘭に名前を知られていたことに3人は驚いてしまったが、穂乃果とツナは白蘭の平行世界^{パラレルワールド}を知識を共有できる能力^{ちから}のを知っていたので冷静であった。

するとデイーノが白蘭に和菓子を選び終わり、白蘭の話しかけてくる。

「よお、白蘭。お前も穂むらの和菓子を買いにきたのか?」

「まあね。穂むらの和菓子は僕もジエツソファミリーも好きだからね、あとユニちゃんもね。」

「ああ、キヤツバローネもこの和菓子は全員好きだぜ。」

白蘭とデイーノが穂むらの和菓子のことについて、話しているとデイーノがヒデコ、フミコ、ミカのほうを向くと。

「どうだ美しきセニョリータたち。この後、暇なら俺とお茶でもどうだ？」

「「ええ!?!」」

「えー。デイーノ君より僕と一緒にお茶でもしようよー。楽しいよー。」

「「ええ!?!」」

デイーノと白蘭からお茶の誘いを受けたことにヒデコ、フミコ、ミカは驚いてしまう。

「何だ白蘭?このセニョリータたちに先に声をかけたのは俺だぜ。」

「やだなー。デイーノ君じゃこの子たちを楽しめさせられなさそうだから言っただよ。」

「ど、どうしよう…」

「私たちの為に二人が争って…」

「私たちの為に争わないで!」

デイーノと白蘭の火花を散らしている光景を見て、ヒデコ、フミコ、ミカは勘違い?してしまっていた。

「なんか変な戦いが始まって…」

「でもμ、sもいつつもあるな風に争っていますよ、ツナさんを争だ…「雪穂!!／／／」」

「え?どうしたの穂乃果ちゃん?」

「な、何でもないよ!!／／／」

「?」

雪穂がいつもμ、sのメンバーが誰がツナの心を自分の物にするか争っていると言おうするのを穂乃果は慌てて遮った。

結局、ヒデコ、フミコ、ミカはデイーノと白蘭の両方とお茶をしたのだった。

#標的 (ターゲット) 188 「さらなる誤解」

「ふう。まさかディーノさんと白蘭が穂むらに來るなんて思わなかったなー。」

「あの二人は本当によく来てくれるのよ。二人とも穂むら^{この店}ごと買ってもいいって冗談を言うのよ。面白い人たちよねー。」

(いやお母さん…冗談じゃないです…)

ツナはおそらくこの店を買うほどのディーノと白蘭には財力があ
ると思った。少なくともディーノはフウ太にランキング能力で調べ
て欲しいと言った時には、アツタシユケースの中に大量に札束を積み
たものを持ってきていたことをツナは鮮明に覚えていた。

「ねえツナ君、ディーノさんと白蘭さんは独身なのかあしら？」

「え？独身だと思いますよ。特に結婚したって話は聞いてませんか
ら。」

「そうなのね。雪穂、丁度良かったじゃない。」

「丁度良かったって…まさか私がディーノさんか白蘭さんと結婚する
とか言うんじゃないよね…？」

「もちろんよ。だって穂乃果はツナ君と結婚するんだし、雪穂しかい
ないじゃない。」

「お、お母さん!!／／／当たり前のようにツナ君と結婚する話をしな
いでよ!!／／／ツナ君は好きな人がいるんだよ!!／／／」

「そ、そうですよ!!／／／穂乃果ちゃんだって好きな人がいるんです
よ!!／／／」

「…」

さらっと結婚するのが当たり前のように言ったことに、穂乃果とツ
ナは否定するが、雪穂と穂乃果の母が両想いだということをおわかつて
いるので、呆れた表情で「本当に何で気づかないんだろう」と思いな

がら、二人のことを見ていた。

すると穂むらに新たな客が入ってきた。

「こんにちわ。」

「遊びに来たよ穂乃果ちゃん。」

「海未ちゃん、ことりちゃん。いらっしやい。」

やって来たのは海未とことりであった。

そして海未とことりがやって来たことに、ツナはすっごい気まずくなっていた。理由はツバサにキスされた写真をリボンが送ってからLINEで会話したが、直接会うのが初めてだからである。

「や、やあ海未ちゃん、ことりちゃん…」

「ハ、ハレンチです!!／／まさかアイドルと!!／／あんなことをしてるなんて!!／／／」

「だ、だから！あ、あれは誤解で！」

「じゃあ、ということがあったら、アイドルとあんなことになるんですか!!／／／」

海未にツナが話しかけた瞬間、先日のツバサにキスされたことについて言わてしまった。一応、LINEで誤解をいいたつもりであったツナだったが、今だに疑われていたのであった。

「何かあったのツナ君？」

「い、いや何でもありません！気にしないでください！」

ツバサからキスされたことについて知らない穂乃果の母は、何かあったのかと尋ねるがツナは何でもないと言って誤魔化した。

するとさつきからツナと視線をあわせようとしないうことが、ツナに尋ねる。

「そ、それよりツナ君は何で穂むらにいるの？」

「花嫁修業ならぬ、花婿修行よ。ツナ君が将来、穂乃果と一緒にこの穂むらを経営する為のね。」

「な!？」

「へ!？」

「お、お母さん!!／／／」

「誤解をくような言い方はしないでください!!／／／」

ことりの質問にツナではなく、穂乃果の母が答えると花婿修行だと聞いて海未とことりは驚きを隠すことができなかつた。そしていつものように穂乃果とツナは顔を真っ赤にしてしまっていた。

「アイドル一人では飽きたらず、ほほほ穂乃果のお婿さんになろうなんて!!／＼／ツナ君!あなたは最低です!」

「だから誤解だつて海未ちゃん!」

「大丈夫だよツナ君:前にLINEで言った通り私と友達だよ:?:」

「ことりちゃんも!話を聞いて!俺はお母さんにバイトをしてみないかって言われて、穂むらでバイトしてるだけであつて!」

「そうだよ!海未ちゃん、ことりちゃん!ツナ君は何も悪くないよ!」

穂乃果の母の発言によって少しおかしくなつてしまっている海未とことりにツナと、ツナのこと可愛そうだと思つた穂乃果が弁解する。

「お、お母義さんですか:」

「もうそこまで関係が:」

「いや違うから!」

ツナはお母さんと言つたつもりだったが、海未とことりにはお母義さんと聞こえてしまつていた。いつもならこんな風には聞こえることはないのだが、ツバサとの一件と、穂乃果の母の発言によつてそう聞こえてしまつていたのである。

結局、誤解は解けるどころか、さらに大変なことになつてしまつてのだった。

#標的（ターゲット） 189 「宣戦布告」

結局、誤解の解けぬまま海未とことりは帰って行ってしまった。

「はあ最悪だ…誤解を解くどころか…余計誤解を招いちやう形になった…」

「心中お察ししますツナさん…」

「ごめんね、ツナ君。海未ちゃんのことりちゃんには後でちゃんと
言っておくから。」

穂乃果と雪穂が誤解が解けなかったことにながっくりしてしまっ
ているツナに、同情してしまっていた。

「青春ねー。私もあんな時代があったわね。」

さっきのやりとりを見て穂乃果の母は海未とことりがツナのこと
を好きだということを気づくと同時に、学生時代のことを思い出して
いた。

「さあ仕事の続きよ。ツナ君、今度は私と一緒に車に乗って和菓子
届けに行くのを手伝ってもらおうわ。」

「は、はいー！」

「穂乃果と雪穂は店番をお願いね。」

「うん。」

「頑張っつてねツナ君。」

「う、うん！頑張るよ。」

ツナは穂乃果に頑張れと言われたことが嬉しかったのか、少し強め
の口調で返事をした。

「お姉ちゃんそれじゃダメだよ。いってらっしやいあ・な・た？じやな
いと。」

「あ、あなた!?!?!」

雪穂がいつものように表情をニヤニヤさせながらそう言うと、ツナ
と穂乃果もいつものように顔を真っ赤にさせてしまった。

「あらそれはいいわね。じゃあその後にいってらっしやいのキスを
…」

「キ、キス!?!?!」

雪穂に続いて、穂乃果の母も表情をニヤニヤさせながらそう言う
と、ただでさえ真っ赤なツナと穂乃果の顔がさらに真っ赤なただけ
でなく、耳も真っ赤になり、頭から煙をあげてしまっていた。

雪穂と穂乃果の母によっていじられたが、ツナは和菓子を届けに行
く手伝いに出掛けた。

「もう！雪穂とお母さんもいつもいつも、余計なことを言うのー！」

「お姉ちゃんとツナさんを結ばせようと協力してあげてるだけだよ。」

「そんなこと言ってるけど、本当は楽しんでない…？」

「そんなことないって。本当に協力してるって。」

そう雪穂は言うが、穂乃果はその言葉を信用できず、ジト目で雪穂
の顔を見ていた。

すると新たに穂むらに誰かが入ってくる。

「「あ、いらつしやいませ…えい！」」

「こんにちわ高坂さん。それと雪穂ちゃんでよかったかしら？」

ツナと雪穂がその人物を見て驚いてしまっていた。穂むらにやっ
て来たのは、A—R—I—S—Eの綺羅ツバサであつたからである。ツバサ
はツナと買い物した時のように眼鏡かけるなどして、一般の人にバレ
ないような工夫をしていた。

「ほ、本物!？」

「ツ、ツバサさん!?!な、何でここに!?!」

ツバサが穂むらにやって来たことに、雪穂と穂乃果は驚きを隠すこ
とができなかった。

「今、大丈夫かしら？」

「だ、大丈夫です！お母さんはツナ君と一緒に和菓子を届けに行つて
ますし、お父さんはいますけど奥の厨房にいるんで大丈夫です！」

「ツナ君が？もしかして穂むらでアルバイトでもしてるの？」

「は、はい…そうですね…」

「まさか高坂さんの家にバイトしてたなんて。それに今はいないの
ね、残念。でもいいわ、今日はあなたに用があつて来たの。」

「私に？」

「ええ。私の言ったこと伝わってるかしら？ラブライブでは負けただけ

ど、恋愛は負けないって言ったこと。」

「はい、リボーン君から聞いてます。あ！リボーン君っていうのは…」
「知ってるわよ。ツナ君の家庭教師で、殺し屋ヒットマンでしょ？」

「え？リボーン君のことを知ってるってことは…ツナ君のことも…？」

「ええ。ツナ君がマフィアのボス候補だっていうことも知ってるわ。」

「やっぱりツバサさんも…その…ツナ君のことが好きなんですか…？
ツナ君に…キ、キスしてたし…」

「ええ!?!?!／／な、何で知ってるの!?!?!／／」

「リボーン君がツバサさんが、ツナ君にキスした瞬間の写真を撮って送ってきたんです。」

「い、いつの間に…!!?!?!／／」

まさかそんなことになってると思ってもいなかったの、さすがのツバサも顔を赤くして少し動揺してしまっていた。

「でもいいわ。いざればレテたことかもしれないし。それでね今日はあなたに…いえ、あなたたちsに改めて宣戦布告しにきたの。」

「せ、宣戦布告…?」

「ええ。私はツナ君が好きなの、もちろん恋愛的な意味で。ツナ君はマフィアから拐われそうになった、私のことを助けてくれたの。そしてその姿に私は惚れちゃったわ。だから私はアイドルとかじゃなくて、一人の女の子としてあなたに勝負を挑むわ。高坂さん…いや穂乃果。誰がツナ君を自分の物にするか勝負よ。」

「え、ええ!?!」

穂乃果はまさかツバサからこんな風に宣戦布告されるとは思っていなかった為、驚きを隠すことができなかった。一方で雪穂もツバサの宣戦布告に驚いてしまっていた。

「あ、あれ!?!というか何で私たちがツナ君のことを好きなことを、ツバサさんが知ってるの!?!」

「ツナ君と私が買い物している時に、あなたたちμ、sが私たちのあとをつけているのを見て、その時にもしかしてμ、sのみんながツナ君のことを好きなんじゃないかって。」

「バ、バレてたんだ…」

「まあ確証のない推理だったわ。でも今の穂乃果の発言で、それが確証に変わったわ。」

「そ、それより！本当に大丈夫なんですか…？アイドルは恋愛禁止で…そんなことツバサさんは絶対にわかってるはずなのに…」

「そうね、バレたら問題になるわね。それでも私はツナ君を自分だけの物にしたいと思ってる。たとえアイドルを止めさせられることになるかわかってても。」

「ツバサさん…わかりました。それがツバサさんの覚悟だっていうなら、私も負けません。」

「さすがね。あなたならそう言うと思ってたわ。これからよろしくね穂乃果。」

「はい！…じゃないくて…うん！ツバサちゃん！」

こうして穂乃果とツバサはただの女の子として、恋のライバルとして競うこととなった。

一方でその頃ツナは…

(ま、まさか配達先が…こんなんでなあ…)

配達先の場所に驚いてしまっていた。その場所は真姫の家であったのだ。

そして真姫の家の中に、ツナは穂乃果の母と一緒に和菓子運ぶと真姫の母が出迎えて来たのだ。

そして出迎えたのは真姫の母だけではなく…

「…」

ジーンとプレッシャーを放ちながらツナのことをずっと見ている真姫と、遊びに来ていた花陽と凜がいたのであった。この3人がプ

レッシュヤーを放っている理由はわかっていた為、ツナは3人と目をあ
わせられない状況であった。

まさかの修羅場、ツナはどうなる!?

#標的 (ターゲット) 190 「軽蔑と脅迫」

和菓子届け先が真姫の家だったことにツナは、どんな顔をすればいいかわからないでいた。真姫一人でも大変なのに、さらに花陽と凜がいるので本当にどうすればいいかわからなくなってしまうていた。すると真姫の母がツナに話しかけてくる。

「あらツナ君。もしかして穂むらでアルバイトしてるの?」

「え、ええ…まあそうです…」

「穂むらウチの大切な従業員なのよー。」

「あら。そうなんですか?」

何度か真姫の母と面識があるのか、穂乃果の母はその後も喋り続けていく。

すると真姫の母が提案してくる。

「立ち話もなんですし、中でちよっとお茶でもどうですか?」

「今は仕事中ですし。さすがに。」

(よ、よかった…)

今すぐこの場から1秒でも早く逃げたいツナにとって、この言葉はすごくありがたく、これで帰れると思いきやホッとした。

が…

「と思っただけど、お言葉に甘えさしてもらおうかしら。」

「え!?!」

「ここでもまさか穂乃果の母の考えが変わってしまい、ツナは驚きのあまり、固まってしまった。

「大丈夫よツナ君。ちよっとだけだから。」

「え…で、でも…」

「今日は真姫だけじゃなくて、花陽ちゃんと凜ちゃんがいるの。せつかくだからツナ君も少しゆっくりしていいって。」

「え…いや…だから…その…」

ツナは顔中から大量の汗を流しながら、なんとか言い訳しようとしたが結局、中に案内されてしまっていた。

穂乃果の母と真姫の母は別の部屋で話をする事になり、そしてツナはリビングで真姫、花陽、凜と話す事になった。

「あ、あの…」

「最低。どこの誰だが知らないけど、話しかけないでもらえる？」

(帰りたい…)

もの凄い蔑んだ表情で、辛辣な言葉を真姫が吐くと、ま1分も経つてもいないにも関わらず、ツナはすでに心が折れそうになってしまっていた。

「ま、真姫ちゃん！さすがに言いすぎだよ！」

「いいのよ別に。こんな最低な男にはこれくらいが丁度いいわ。えつと…名前はなんて言ったっけ？」

「あ、あの…真姫ちゃん…？」

「気安く話しかけないでもらえるかしら？汚れるわ。名前もないただの最低男。」

(超帰りたい…)

次々と真姫の口から放たれる辛辣な言葉に、もうツナは心が折れてしまっていた。これにはさすがの凜と花陽も顔を引きつらせてしまっていた。

こんな異様な状況の中で、凜が切り出す。

「ツナ。あの写真はどうかにかにや？」

「ど、どういうことって言われても…」

「凜は…いや凜たちはツナの口から直接、真実を聞きたいだけだにや！だから正直に答えるにや！もし正直に答えなかったら、ラル教官から教わった暗殺術をツナに使わなくちゃいけないにや…」

「どういうこと!?!嘘をついたら殺されるってこと!?!そういうことなの!?!」

切ない表情になりながら恐ろしいことを言う凜に、ツナはめっちゃくちゃ驚いてしまっていた。

「ツナさん！正直に答えてください！私たちはツナさんの殺されると

「ころは見たくないんです！」

「脅迫?！」

花陽が切ない表情で脅迫してきたことに、再びツナは驚てしまっていた。

「仮に死んでも大丈夫よ。私の家は病院だから。あんたみたいな地獄に落ちることが確定しているゴミクス以下の男でも、あんたの汚れた魂は私たちの中で永遠に生き続けるわ。だから安心して逝きなさい。」

「なんか辛辣な言葉が段々とエスカレートしてるんだけど!?というか安心して要素が一つもないんだけど!?というか何で俺、勝手に殺されての!?もう殺されてるよね!?死んでるよね!？」

段々とエスカレートとしていく真姫の辛辣な言葉と、殺されることが前提の発言に驚くと同時に恐怖してしまっていた。

このあとちゃんとツバサにキスされたことについて、ツナはちゃんと正直に話したのであった。

#標的 (ターゲット) 191 「誤解が解けて」

ツナは正直にツバサがマフィアに拐われそうになったところを助け出したということの花陽、凜、真姫に伝えると、3人は助けてくれたお礼にツバサはツナにキスしたのだということを理解した。

(マフィアに拐われそうになったことはあの姿を見たってことね
…あれは^{ハイキ} sでも3人しか知らない秘密なのに…)

超 死ぬ気モードの状態のツナを自分と、

ことりと絵里以外に知られたことに真姫はあまり面白くなかった。

「どうしたの真姫ちゃん？」

「な、何でもないわよ!! // // アイドルを拐ったのがマフィアだったってことに驚いてただけなんだから!! // //」

真姫は顔を赤らめていつものようにツンデレな態度をとった。ようやくいつもの真姫に戻ってツナは内心ホツとしていた。

「で、でもアイドルにキスされるなんて…!! // // わ、私もそれくらい大胆になったほうが…!! // //」

「何か言った花陽ちゃん？」

「な、何でもないですツナさん!! // // 気にしないでください!! // //」

顔を赤くしながらそう言う花陽の姿を見て、ツナは真姫の時と同じくホツとしていた。

その一方で凜はさっきの話を聞いて嫉妬したのか、少し頬を膨らませてツナのことを見ていた。

「どうしたの凜ちゃん？」

「何でもないにゃー!」

「?」

そう言う凜はそっぽ向いてしまい、凜のなぜ怒っているのかわか

らずツナは疑問符を浮かべていた。それでも超直感でいつもの凜が戻ったことを感じとったのか、ホツとしていた。

「ツナのことネット上でニュースになってたことは知ってたけど、まさか裏でそんなことがあったなんてね…」

「ま、真姫ちゃんか…俺の名前を…やっぱり覚えてくれてた…」

「あ、当たり前じゃない!!／／／な、何泣いてんのよ!!／／／」

「だって…色々と言われて…俺もう心が折れそうで…」

「わ、悪かったわね!!／／／あんだがアイドルをたぶらかして、あんなことをさせたと思つてのよ!!／／／」

「ええ!？」

真姫はあんな辛辣な言葉を言った理由に、ツナは驚きの声をあげてしまった。

「そ、それに!!／／／私がツナのことを忘れるなんて絶対じゃないんだから…!!／／／」

「え?何か言った真姫ちゃん?」

「う、うるさい!!／／／いちいち気にしなくても大丈夫なんだから!!／／／」

真姫は顔を赤くしながら、ツナに助けられた時のことを思い出しながら小声でボソボソとそう言うと、ツナは何か言ったかと尋ねるが、いつものようにツンツンしてしまった。

「ツナー!」

「ちよ!?!／／／凜ちゃん!?!／／／」

「ちよつと凜!!／／／」

「り、凜ちゃん!?!／／／」

さつきまでそっぽ向いていた凜がツナに涙目になりながら抱きついてきた。ツナは凜が抱きついてくるとは思つてもみなかったので避けることができなかった。

そして花陽と真姫も凜がこんな大胆な行動に出るとは思つてもみなかったのか、顔を赤くしながら驚いてしまっていた。

「さつきはごめんやー!あんなことを言つて、そつけない態度をとつちやつて!」

「い、いや気にしないで！大丈夫だから！」

「凜はツナのこと嫌いになんてならないにや！世界で一番大好きだにやー！」

「「え!?!／／／」」

凜の発言にツナ、花陽、真姫は顔を赤くしてしまっていた。

そしてつい勢いで告白的なことを言ってしまった凜は顔を真っ赤にしてしまっていた。

「い、今のはその!!／／／何でもないにやー!!／／／」

「あいだだだだだ！凜ちゃん絞ってる！絞ま…」

恥ずかしさのあまり凜は抱きついた状態からそのまま、ツナの首を絞めてしまい、数秒後ツナは呼吸できず泡を吹きながら意識を失ってしまった。

凜の手によってツナは死ぬことはなかったが、凜によって倒されてしまったのであった。

#標的（ターゲット） 192 「母は語る」

ツナは凜の攻撃によって気絶させられたが、ツナは5分程度で目覚めた。そして穂乃果の母と真姫の母の話は終わり、ツナは穂むらに帰ることとなり、家の玄関にて花陽、凜、真姫、真姫の母に見送られる。「ごめんなさいツナ君。話してたらつい長くなっちゃって。」

「い、いえ…大丈夫です…」

「どうしたのツナ君？顔色が悪いわよ？」

「だ、大丈夫です…」

凜に首を絞められたことによって、少しだけ顔色の悪くなっているツナを見て穂乃果母が心配するが、ツナは右手で首をさすりながら大丈夫だと答えた。

「ツナ君。バイト頑張ってるね。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

「これは別の話になるんだけど、これからも真姫のことをよろしくね。」

「え？」

「ちよつとママ!!／／何言ってるのよ!!／／」

急に真姫の母が自分の娘についてよろしくと言ったことにツナは少しだけ驚き、真姫は顔を赤くしながら急に変なことを言い出した母親にそう言った。

「真姫はあなたから貰った花をずっと大切にしているのよ。今もちゃんと部屋の中に置いて、毎日水を入れかえてるのよ。」

「ち、違うわよ!!／／あれは綺麗な花だったから枯らすのがもったいないって思っただけよ!!／／別に特別な意味があったわけじゃないんだから!!／／」

「それと日記にはあなたのことがたくさん書いてあったわ。ツナ君のことをいっつも考え「それ以上は言っちゃダメー!!／／」

真姫が書いている日記の内容について真姫の母が言おうとすると、真姫は母の言葉をツナに聞えないように大きな声で叫んだ。

そんな真姫のことをお構いなしに、真姫の母は話を続けていく。

「あとは、綺麗な星空の下で一緒に…」な、何でそれも知ってるのよ!!
／／／これ以上言ったら怒るわよ!!／／／」

「ま、真姫ちゃん日記でそんなことを…」

「もう実現した時のことを…」

「ち、違うわよ!!／／／」

日記に書いている内容を聞いて凜と花陽はコソコソと話したが、真姫には聞こえており二人に顔を赤くしてしまっていた。

そして途中から話についていけないツナは困惑してしまっていた。

「えつと…これは…」

「ツナ君って人気者なのね。」

「え？俺が？どういう意味ですか？」

「そのままの意味よ。」

穂乃果の母が顎に手をやり微笑みながらそう言うが、ツナはその言葉の意味ができず首を傾げながら疑問符を浮かべていた。

「じゃあそろそろ帰りましょうか。穂乃果と雪穂を待たせちゃってるし。帰って花婿修行の続きね。」

「だ、だから違いますって！花婿修行じゃなくてただアルバイトですってー！」

「『花婿修行?!』／／／」

穂乃果の母とツナの会話の中で花婿修行という言葉がでてきて凜、花陽、真姫は驚いてしまった。

「花婿修行ねえ…そうだわ真姫。あなたツナ君にはいつもお世話になってるんだし、ツナ君の家で花嫁修行してくればいいじゃない。」

「な、何言ってるのよママ!!／／／何で私がそんなことをしなくちゃいけないのよ!!／／／」

「ねえツナ君。将来西木野総合病院で真姫と一緒に働いてみない？」
「え？」

「無視しないでよ!!／＼／＼それに勝手に話を進めないでよ!!／＼／＼」
勝手に話を進めていく母に、真姫は顔を真っ赤にして叫んでいた。
そしてこの後、真姫の母はツナに「考えておいてね」と言われると、
「はあ…」としか返事ができなかった。

そしてツナは穂乃果の母と共に車で帰っていったのだった。

「もうママ！変なことばかり言わないでよ！」

「でもツナ君となら結婚してもいいって日記に書いてたじゃない。」

「そそそそそそんなこと書いてないわよ!!／＼／＼」

「凜、真姫ちゃんの日記、見てみたくなつたにや。」

「真姫の部屋の引き出しに入ってるわ。」

「さっそく見に行くにや！行こうかよちん。」

「え!?!さすがに…」

「いやー！ー！！／＼／＼見ないでー！！／＼／＼」

真姫の母が日記のある場所を教えると、凜は花陽の手を握ってそのまま部屋に向かってダッシュしていき、真姫は二人のあとを顔を真っ赤にしながら追いかけていたのだった。

ちなみに日記にはツナのことについて、たくさん書かれていたのだったが、そこに書いている内容については…秘密である。

#標的 (ターゲット) 193 「穂乃果の父」

真姫の家への配達を終えたツナは穂むらに戻ってきた。

「ただいまー。」

「あ、お帰りツナ君。お母さん。」

「お姉ちゃん。そこはお帰りなさいあ・な・た?じゃないと。」

「な!?!/!/」

穂むらに帰って来るなり早々、雪穂にいじられてツナと穂乃果は顔を真っ赤にしてしまう。

すると穂乃果の母が穂むらの時計を見て、「あ、もう昼なのね」と呟いた。

「そろそろ昼御飯にしましょうか。ツナ君もいっぱい食べてね。」

「ええ!?!そ、そんな!悪いですよ!」

「遠慮しなくていいのよ。もともこのアルバイトに誘ったのは私なんだから。」

「け、けど…」

「それに穂乃果と雪穂を花見に誘ってくれたり、遊園地に連れていってくれたりしたんでしょ。ウチの娘たちがこれだけお世話になったんだから、母親としてこれくらいのご飯を食べてもらおうわ。」

「じゃ、じゃあ…お言葉に甘えさせてもらいます。」

こうしてツナは穂乃果たちと一緒に昼ご飯を食べることになった。

「いただきます。」

両手をあわせて合掌すると、3人はご飯を食べ始める。机の上にはご飯とみそ汁、卵焼きに漬物が並べられていた。

「ごめんなさいねツナ君。簡単な物しかなくて。」

「そ、そんなことないですよ!第一、ご馳走になってるのは俺のほうなんですから!」

「でもこうやって毎日、ツナ君が私たちと一緒にご飯を食べられる日が来るかもしれないわね。」

「!!／／／」

穂乃果の母がそう言うと、ツナと穂乃果はただただ顔を赤くして俯いてしまった。

するとツナは穂乃果の母に尋ねる。

「そういえばお父さんは一緒に食べないんですか？」

「あの人はいつも私たちの後に食べるのよ。」

「そうなんですか。俺がいたから気を遣ってるか、俺のことをあまり良く思われてないのかと思ってたから…さつき和菓子/materialを運んで時に挨拶してもずっと黙ったままだったから…」

「あの人は昔からああいう人なのよ。それに照れてるのよ。」

「照れてる？」

「ええ。穂乃果にツナ君みたいな素敵な彼氏ができて、どういう顔をしていいかわからないだけなのよ。」

「か、彼氏って!?!／／／」

「お母さん!!／／／まさかツナ君が私の彼氏だってお父さんに言ったの!?!／／／」

「ずっと前に言ったわよ。それで今日、あれが将来、穂乃果と結婚相手のツナ君よ。ツナ君のことを見てどう思うかってって尋ねたら、ツナ君なら問題ないって言ってわよ。」

「認める認めないという以前に、俺と穂乃果ちゃんは別に付き合ってるんじゃないんです!!／／／」

「そうだよお母さん!!／／／嘘、言わないでよ!!／／／」

穂乃果の母は穂乃果の父に、ツナと穂乃果が付き合っていると聞いたことを聞いて、二人は顔を真っ赤にさせながら否定した。

「でもよかつたじゃないですかツナさん。ドラマとかで結婚相手の父親が娘の結婚相手のことを認めないシーンとかありますけど、ウチのお父さんはツナさんのことを認めますから何も問題はないですね。後はツナさんの家族の人がお姉ちゃんのことを認めれば、お姉ちゃんと結婚できますね。おめでとうございませう。」

「雪穂ちゃん!!／＼／＼勝手に話を進めないでよ!!／＼／＼」

「もう式場のこととか考えたほうがいいわね。1年なんてあつという間なんだから。今からでも予約とか可能かしら?電話で聞いてみればわかるかしら。」

「勝手に話を進めないでよお母さん!!／＼／＼」

「本当に勘弁してください!!／＼／＼お願いですから!!／＼／＼」

真面目に結婚式場のことについて考え始めた母の姿を見て、穂乃果とツナは顔を真っ赤にさせながら電話しようとする母を阻止する。

余談ではあるが、このあと式場に電話するのを諦めさせるまで本当に大変だったのだという。

#標的 (ターゲット) 194 「ツナの父親」

ツナと穂乃果はなんとか結婚式場に電話をすることを阻止することに成功した。

そして今度は穂乃果の母がツナに尋ねる。

「逆に聞きたいんだけど、ツナ君のお父さんは何やってるの?」
「え!」

ツナはまさかここで自分の父親のことについて聞かれるとは思ってもみなかったので、驚きの声をあげてしまっていた。世界最強のマフィアボンゴレファミリーのNo. 2ですと答えられるはずなかったので、ツナには残された選択肢は一つしか残っていなかった。

「えつと…南極で石油を掘ってる泥の男…?」

「え…?」

(もつとマシンな言い訳とかないんですかツナさん…)

前にまだマフィアのボスを隠していた頃に穂乃果に自分の父親が何の仕事をしているのかと聞かれた時の言い訳をすると、穂乃果の母は唾然としてしない、この言い訳を初めて聞いた雪穂はちよつと呆れてしまっていた。

「いやそもそも俺、父さんは死んだしたものだと思つてたし…」

「ええ!? そうなの!」

「うん…もちろん違うけどね…ただ父さんが仕事に行く前に俺が消えて星になったとでも伝えておいてくれて、母さんに言ったのが真相だったっていう話だったんだ…」

穂乃果は蒸発したという話を初めて聞いて驚いてしまうが、ツナはちゃんと蒸発していなかったということを伝えた。

「そもそも南極で石油って取れるのかしら…?」

「さあ…ただ中学の時に届いた絵ハガキに、氷の大地とペンギンが写ってて、そこにもうすぐ帰るって書いてあったから、取れるんじゃないや」

ないんですか…？たぶん…」

ツナは中学時代に父、家光からの手紙のことを思い出しながら語る。今だに家光が何であんな絵ハガキを送ってきたのかは謎のままである。

「まあ俺の父さんに比べたら、穂乃果ちゃんのお父さんのほうが立派ですよ。穂乃果ちゃんのお父さんのが優しいし、とつても真面目だし。」

「優しいって…ツナ君さつきお父さんは黙ったままだって言ってよね？何でわかるの？」

「何でって言われても…なんとなく…なんかすつごく温かい感じがしたから。」

ブラッド・オブ・ボンゴレ
ボンゴレの血である超直感ですでにツナは穂乃果の父のことを少しではあるが、見透かしていた。

「変わってるわねツナ君。あの人ってあんな感じだから、ちよつと怖いっていう人が多いんだけど。」

「そうですか？俺は全然怖いなんて思いませんよ。それに比べて俺の父さんは…はあ…」

穂乃果の父と自分の父である家光を比べて、ツナはため息をついてしまった。

「ツナさんってお父さんのこと嫌いなんですか？」

「嫌いなわけじゃないんだけど…なんか色々帰ってきたら騒がしくなるというか…2年ぶり帰ってきた息子に対しての最初の会話が、朝4時ぐらいに俺の部屋に入ってきて飯取りに行かないか？だからね…」

「ツナ君のお父さんって変わってるのね…」

「普通じゃない…」

この話を初めて聞いた穂乃果の母と雪穂は、あまりのことに驚きを隠すことができなかった。

「ウチの居候に酒飲ませたり、帰ってくるなり寝てばかりで…寝るのはいいんだけど、せめて布団をしいてちゃんとした格好で寝て欲しい…あとは…」

ツナは自分の父である家光の不満を次々に語っていく。
家光の不満を聞いて穂乃果、雪穂、穂乃果の母は本当にツナはお父
さんのことを嫌いじゃないの……?と違ってしまっていたのだった。

#標的 (ターゲット) 195 「二人で店番」

お互いの父親のことを話し終えたところで、昼食を食べ終わる。

「ご馳走さまでした。」

両手をあわせてごちそうさまでしたと3人は言うと、食器を片付け始める。

「ありがとうございます。とっても美味しかったです。」

「ありがとうツナ君。」

昼食をご馳走になったことにお礼を言うと、穂乃果の母も美味しかったと言われたことにお礼を言った。すると

雪穂が「あ!」という声をあげた。

「どうしたの雪穂ちゃん?」

「お互いのお父さんの話をしてたから忘れてた!」

「忘れてた?」

雪穂が忘れてていたという言葉に対して、ツナは何のことかわからず疑問符を浮かべていた。

そして雪穂は頭をかかえながら忘れていたことについて叫ぶ。

「せっかく昼ご飯と一緒に食えることになたのに、ツナさんにお姉ちゃんがあくん? って言って食べて食べさせてあげないとって言うの忘れてた!」

「雪穂ちゃん!?／／」

「雪穂!!／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

忘れていたとあってもっと重要なことで、自分たちとは関係のない話だと思っていなかった為、油断してしまっていた。

「大丈夫よ雪穂。まだおやつのあるわ。それにやるんなら、ただ食べさせるんじゃないよ、口移しで食べさせるのが一番よ。」

「あ！その手があつた！さすがお母さん！」

「さすがじゃないでしょ雪穂!!／／／」

「俺たちに何をさせようとしてるんですか!!／／／」

口移しと聞いて穂乃果とツナは顔を真っ赤にして、雪穂と穂乃果の母にツツコミをいれる。

そして穂乃果の母が二人が顔を真っ赤にしているのを微笑みながら見て、落ち着いたのを見計らうと、昼からの日程について話す。

「朝はバタバタしたけど昼から少しゆっくりいきましようか。やることはまだあるけど、大変なのは午前中でだいたい終えたから。とりあえずは穂乃果と一緒に店番をお願いできる？誰かお客さんが来たら、私を呼んで。」

「は、はい。」

そして穂乃果の母の指令通り、ツナは穂乃果と一緒にレジの前に立って、店番することとなった。

「ごめんねツナ君…ウチに来てから迷惑ばかりかけちゃって…」

「め、迷惑って?」

「ほら私のことを起こしたり…雪穂とお母さんが…その…!!／／／結婚の話とかたくさんしてきて…!!／／／」

「だ、大丈夫だよ!!／／／気にしてないから!!／／／」
両手を前の出しながらそう言うツナであるが、完璧に意識しすぎてしまっていた。

「ほ、穂乃果ちゃんは…高校卒業したら穂むらを継ぐの?」

「まだわかんない。別に穂むらを継ぐが悪いわけじゃないんだけど…」

ツナは高校卒業したあとのことについて尋ねると、穂乃果は俯きながらそう答えた。

すると穂乃果は顔をモジモジさせながらいい始める。

「で、でも…!!／＼／＼もし穂むらを継ぐならツナと一緒に経営しているのも悪くないかなって私は思ってるよ…!!／＼／＼」

「え!?!／＼／＼」

「い、いや!!／＼／＼結婚の話じゃなくて、従業員として一緒に働くっていうことだよ!!／＼／＼」

「だ、だよねー!!／＼／＼」

恥ずかしさのあまり結婚してツナと穂むら経営していくのではない、従業員として一緒に働くという意味に変えて誤魔化した。

(そ、そんなわけないよな…)

(私のバカー！何で従業員って言ったのー!?)

ツナと穂乃果は顔を俯かせて心の中で後悔しまっていた。するとツナの左手の甲と穂乃果の右手の甲が触れてしまう。

「あ…!!／＼／＼」

そして二人は同時に手の甲が触れた部分に顔を向けたあと顔を上げると、互いに見つめあう形になってしまっていた。

そしてしばらく二人はキスする前のように、お互いの顔を長い時間見つめしまっていた。

そんな幸せな時間が続いていると…

「こんにち…わっ!」

「あ、亜里沙ちゃん!?!／＼／＼」

タイミング悪く穂むらに亜里沙がやって来てしまい、ツナと穂乃果は顔を赤くして慌ててしまった。

「す、すいません！また出直してきます!」

「亜里沙ちゃん!!／＼／＼違うから!／＼／＼」

「出直さないでいいから!!／＼／＼」

亜里沙は二人がキスする前だと勘違いしてしまい、穂むらから出て行こうとするが、ツナと穂乃果は慌てて亜里沙を呼び戻した。

このあと亜里沙の誤解を解くのに時間がかかったのであった。

#標的 (ターゲット) 196 「ようやく」

「はい、雪穂。貸してくれてありがとう。」

亜里沙は雪穂に一枚のプリントを渡す。亜里沙は授業の復習をしていたらしいのだが、授業で使ったプリントで書き忘れたところがあつて雪穂からプリントを借り、それを返しにきたらしい。

「ごめんなさいツナさん、穂乃果さん：私が空気を読まなかったせいで…」

「違うからね亜里沙ちゃん!?!?!/本当に誤解だからね!?!?!/」

「そうだよ!?!?!/亜里沙ちゃんが謝ることなんて一つもないんだよ!!/!/」

暗い表情をしながら謝る亜里沙を見て、穂乃果とツナは亜里沙が何も悪くないということを伝えた。

「それにしてもツナさんが、穂むらでアルバイトしてたなんて：知らなかったです。」

「アルバイトじゃなくて、花婿修行だよ。将来、お姉ちゃんと結婚して穂むらで一緒に働く為の。」

「ハラショー!」

「雪穂!?!?!/亜里沙ちゃんに嘘を教えないで!?!?!/」

亜里沙は花婿修行と聞いて、両手を顎に置き驚いた。いつものように雪穂がウソを教えたことに、穂乃果は顔は顔を真っ赤にし、ツナも黙っていたが顔を赤くしていた。

そしてこれ以上、雪穂にいじられるのは勘弁だと思ったのかツナは話題を変える。

「そ、それにしても亜里沙ちゃん真面目だね。」 ゴールデンウィーク G Wなのに勉強し

てるなんて。」

「はい。普段から予習復習はちゃんとやってるんです。それに ゴールデンウィーク

G Wが終わったらテスト週間が始まりますから。」

「あ…」

「嘘でしょ…忘れてたの…?」

テスト週間と聞いてツナと穂乃果は思わず声をあげてしまった。二人ともテストのことを完璧に忘れていたようである。テストのことを忘れていたことに雪穂は信じられないという表情で二人を見ていた。

「そ、そういえばおれのがっこう並盛高校もゴールデンウィークG Wが開けたらテスト週間だった…」

「わたしのがっこう音ノ木坂学院も…」

「あの大丈夫ですか…?」

「大丈夫じゃない…」

「ツナさん、穂乃果さんは卒業がかかっているんですね…?」

勉強が苦手なツナと穂乃果にとつて、次のテストはお先真つ暗な状態であった。卒業のことについて亜里沙が尋ねると、二人は「うん…」と一言だけ返事をするが、顔を下に俯けて暗い表情をしたままだった。

そしてこの話題はあまり良くないと思ったのか、亜里沙はずっと聞きたかったことについて尋ねる。

「あ、あのツナさん…A—R—I—S—Eのツバサさんにキスされた写真を見たんですけど…アレは本当なんですか…?」

「い、いやアレは!!／＼／」

「あの写真を見てから、お姉ちゃんの元気がないんです…なんかすっごい衝撃的だったらしくて…」

「ええ!? そうなの!？」

暗い表情させながら絵里のことについて語る亜里沙の話を聞いて、ツナは驚きの声をあげてしまっていた。その一方で穂乃果と雪穂は絵里がツナのことを好きだということを知っているのです、そりやそうなるだろうな—という表情で亜里沙の話を聞いていた。

（ん? でも何でだ? 何で絵里さんがツバサさんにキスされて元気がないんだ…? そりや驚くことだけど…絵里さんだけじゃない…海末ちゃんもことりちゃんも、花陽ちゃんも、凜ちゃんも、真姫ちゃんも色々に変になってたし…それをいつたら穂乃果ちゃんも…）

ここにきてようやく違和感に気づくツナであったが、結局のところ

なぜそのようになったのかまでは気づくことができないのだった。

#標的 (ターゲット) 197 「女好きとやきもち焼き」

亜里沙は用事を終わるとすぐに帰ってしまった。

「絵里ちゃん大丈夫かなあ…?」

「さあ…どうだろう…?」

亜里沙から絵里のことを聞いて、二人は心配してしまっていた。

「あの…思っただけ…? 何で絵里さんが元気なくなるんだろう?」

「え!」

「確かに、俺がツバサさんに…その…!! / / キスされたこと…凄い衝撃的なのはわかるよ。ツバサさんはアイドルなわけだし。でもだからって、何でそれで絵里さんが元気なくなったんだろう?」

「え、えっと…」

「そ、それはですね…」

ここでツナが違和感に気づいてしまい、穂乃果と雪穂は絵里がツナのことを好きだということは口が裂けても言えないので、何か言い訳を考え始めた。

「あーそうか! わかった!」

(と、とうとう気づいた!?! ど、どうしよう!?!)

相づちをうちながら絵里が元気がない理由がわかった様子のツナを見て、穂乃果と雪穂は焦ってしまった。

「絵里さんツバサさんのファンだったから、それで元気がなくなってたんだ。」

「へ?」

ツナの的はずれな答えに穂乃果と雪穂はキョトンとしてしまっていた。しかしここで絵里が好きだということは言うはまずいので…

「たぶんそうだよ!」

「お姉ちゃんの言う通りですよ!」

「あ、やっぱり?」

穂乃果と雪穂はツナの考えが正しいということ、全面主張し、これ以上ツナに他の答えが出るのを阻止した。

(やっぱり俺の考えは正しかったんだ…ということは絵里さんだけじゃなくて、穂乃果ちゃんたちもA—RISEのファンだったから、変な感じになってたんだ。)

結局ツナは穂乃果たちが動揺したり、おかしくなってしまったことに気づいていなかった。

すると穂むらの扉が開かれる。

「あ、本当にバイトしてたんだねツナ君。」

「うっひょー！マジでμ sの高阪穂乃果じゃん！」

「炎真君!?!それに加藤ジュリーまで!?!」

穂むらにやって来たのは、シモンファミリーのボスである炎真と、眼鏡をかけ、カンカン帽かけている青年がいた。この男はシモンファミリーの一員である加藤ジュリーであった。

「あ、炎真君。久しぶりだね。」

「花見の時からですね。」

「久しぶり穂乃果ちゃん、雪穂ちゃん。」

炎真、穂乃果、雪穂は久しぶりの再会に喜んでいた。

「それでそっちの男の子は誰？」

「僕のファミリーの一員だよ。」

「どうも。加藤ジュリーです。まさかμ sの穂乃果ちゃんに会えるなんて光栄だわー。」

「私のこと知ってるの？」

「もっちゃん。可愛い女の子は誰だろうと何だろうと全員チェック済みだからねー。μ sもA—RISEも俺はどっちも好きだぜ。」

「もしかしてこの人…可愛い子には目がないとかそういう人ですか…？」

「ま、まあね…でも悪い人じゃないから大丈夫だよ。」

この発言からジュリーが女好きだということに気づいた雪穂は、ジュリーのことをツナに尋ねた。

「それにしても俺がバイトしてるのを知ってるようだったけど、何で

知ってるの?」

「リボーン君がみんなに言ってたよ。ツナ君が彼女である穂乃果ちゃんの家にあるバイトしに行ってるって。」

「リボーン、何言ってるんだよ!?!?!」

「ど、どういうこと!?!?!」

リボーンが勝手にそんな嘘を言っていたということに炎真から聞いて、ツナと穂乃果は顔を真っ赤にしてしまっていた。

「ツナ君、穂乃果ちゃんと付き合ってたんだね。知らなかったよ。」

「やるじゃんボンゴレ。」

「ち、違うから!!!!／／俺は穂乃果ちゃんとは…「花見の前から付き合ってるんですよ。」ちよ!?!?!」

ツナの言葉を遮って、雪穂が表情をニヤニヤさせながら

二人が花見の前から付き合っているということをお教えた。

するとジュリーの興味が雪穂に移る。

「それにしても君も可愛いよねー。名前はなんて言うのー?」

「え?私?高阪雪穂ですけど。」

「やっぱ穂乃果ちゃんの妹だったんだねー。ねえねえこの後、俺と一緒にお茶でもどう?」

「え、えっと…」

突然のジュリーの誘いに雪穂は戸惑ってしまった。

すると再び穂むらの扉が開かれ、そこに黒髪で、スタイルのいい女性が恐ろしい人相で立っていた。

「ジュリー!」

「げっ!?!アーデル!?!な、何でここに!?!」

「他のみんなから聞いている。ボンゴレのアルバイト先にいる、スクールアイドルに会えると言ってたとな。」

「だからってここまで追いかけて来るか普通!?!」
「まったくこれから雪穂ちゃんとお茶でもしようかと思ったのによー。」

「何だと!?!」

「やべっ!」

ジュリーはうつかり失言してしまい、慌てて口を両手で塞ぐが、

アーデルの怒りはマックスになってしまっていた。

「な、何…あの本気の本気で怒った時の海未ちゃんみたいな人…？」

「僕のファミリーの一員のアーデルだよ。僕たちの母親みたいな存在なんだけど、ジュリーが他の女の子と何かあると色々やばいんだ…」

「え!?!それってジュリーさんと、アーデルって言う人ってまさか!?!」

炎真からアーデルのことを聞いて穂乃果は怒った時の海未と似たような雰囲気を感じたのか若干恐怖してしまい、雪穂は二人の関係を知って驚いてしまった。

「雪穂ちゃん。また時間があったら俺とお茶でもしようぜ。」

「あ、待てジュリー!」

ジュリーは素早く穂むらから退散すると、アーデルはジュリーを追いかけて行ってしまった。

あまりの一瞬の出来事に、ツナ、炎真、穂乃果、雪穂は

ただ啞然していたにだった。

#標的（ターゲット） 198 「さらに大胆に」

アーデルがジュリーを追いかけて行ったあと、炎真はみんなの為に和菓子を買っていき、並盛にある民宿へと帰っていった。

「なんか恐ろしい人だったね…」

「まあね。中学の時も高校の時も肅清委員会っていうのを立ち上げるぐらいだったからね。俺もよく炎真君と一緒に屋上に何回も吊るされたりしてたし。」

「ええ!?!」

「え? 何を驚いてるの?」

屋上で吊るされたと聞いて、穂乃果と雪穂は驚きの声を上げるが、ツナは何かおかしなことを言ったかという顔をしていた。

「驚きますよ! 普通そんなことされたら!」

「え? そうなの? 並盛高校はウチのがっこうトンファーを持った理事雲雀恭弥がいるし。その理事長の前で群れたり、校則違反したら噛み殺される

んだけど…」

「…」

ツナは中学の時の先輩である、ボンゴレファミリーの雲の守護者である雲雀恭弥のことを語る。雲雀は高校を卒業して、理事長に就任した。

そしてツナから並盛高校のことについて聞いた、穂乃果と雪穂は驚きのあまり何も言えなくなってしまうていた。

「並盛高校って普通じゃない…そもそも理事長がそんな人なのに問題になるらないの…?」

「無駄だよ穂乃果ちゃん。雲雀さん…理事長の名前で俺の一つ上の先輩なんだけど…」

「ええ!? 理事長ってそんなに若いんですか!?!」

理事長がツナの一つ上の先輩だという事実を聞いて、雪穂は驚きの声を上げてしまった。

そしてさらにツナは続ける。

「雲雀さんは並盛の実権を握ってる人だから。だから誰も逆らえないんだ。病院の医院がおつもいっきり頭下げるぐらいだしね。」

「ツナさんのまじ並盛町ってどうなってるんですか!？」

「うーん? 独裁政権? あ、よくよく考えてみれば、雲雀さんがいる限り、並盛にある学校は廃校になるなんてありえないと思う…: どうか絶対そうだね。」

「一体どんな人なんだろう…?」

「会いたいような…: 会いたくないような…:」

ツナの雲雀の凄さを聞いて、穂乃果と雪穂は雲雀に会ってみたい気持ちと会いたくないような複雑な気持ちになってしまっていた。

すると穂むらの扉が再び開かれると、入ってきたのは希であった。

「こんにちわー。」

「希ちゃん! / 希さん!」

「ツナ君? 何でここにおるん? というかその格好…:」

「穂ぬらこでバイトしてるんです!」

「何で早口なん?」

雪穂にまた花婿修行だと言われと思ったのか、ツナは早口で答えた。

しかし…:

「もしかして花婿修行とか?」

「こな! / / /」

逆に希にそう言われてしまい、ツナと穂乃果は結局、顔を真っ赤になっちゃった。そんな二人を見て雪穂は表情をニヤニヤとしながら「実はそうなんですよー」と言い、結局ツナが早く答えた意味はなかった。

そして話題はあのことになる。

「そういえばちゃんと見たよ。ツナ君がツバサさんにキスされたあの写真。」

「い、いや!! / / あ、あれは!! / /」

「恥ずかしがらんでええんよ。むしろ燃えてきたから。アイドルから

宣戦布告されたんやし、ウチは絶対に負けるつもりはないんよ。とい
うわけでツナ君、今からウチとデートでもどう?」

「ええ!？」

まさかここで希からデートに誘われると思わなかったので、ツナは
驚きの声を上げてしまった。希はあの写真を見ても動揺するどころ
か、さらに大胆になっていた。

「ダメだよ希ちゃん!!／＼／ツナ君は今日はアルバイトに来てる
んだよ!!／＼／」

「しようがないなー、じゃあアルバイトが終わった後でええよ。」

「い、いや…だから…」

「そういう問題じゃないよ!!／＼／」

希のデートの誘いにツナは困惑してしまい、穂乃果は顔を赤くしな
がらデートを阻止しようとした。

「遠慮せんでもええんよツナ君。」

「遠慮してないんですけど…というか俺に断る権利はないんですか…
?」

「ないに決まってるやん。」

「何ですか!？」

「あ、デートが終わったらウチの家に泊まりに来てもええよ。前みた
いに一緒に晩ご飯でも食べようやん。」

「前みたいにな…?」

「い、いや!穂乃果ちゃん!あれは!」

希が前にツナが希の家で真姫と一緒に晩ご飯を食べたことを語る
と、穂乃果は動揺してしまい、想い人の前である穂乃果の前でそのこ
とを言われたのでツナは慌てて言い訳をした。

結局この後もツナはいつもより大胆になった希に色々と誘われた
のであった。

#標的（ターゲット） 199 「バイト終了」

ツナはなんとか希の勧誘を断ることに成功した。

「ふう…なんとか断ることができた…というか希さん前より大胆になつて大変だった…」

ツナは前より大胆なつた希の対応に、少しであるが疲労の表情を見せていた。

「はあ…お姉ちゃんもあれぐらい大胆だったら…まあ無理か…絶対に…」

「ちよ、ちよつと雪穂！そこまで言う!？」

「じゃあさっきの希さんみたいにな、ツナさんをデートに誘ったりできるの?」

「うっ…そ、それは…」

ジト目でそう言う雪穂に、穂乃果は何も言うことはできなかった。

（まあツナさんはお姉ちゃんのことが好きだけど、あんな風に積極的に誘惑され続けたらさすがのツナさんも心変わりするかもしれない…リボン君があのお写真を送ったことでお姉ちゃん以外の人たちも大胆な行動に出るかも…リボン君もツナさんとお姉ちゃんが両想いなものを知ってるのになんな写真を送って…絶対に楽しんでるよねリボン君…まあ見てて面白いのは私も同じだけど…）

雪穂はさらに大胆なつた希の行動を見て、雪穂はツナのこれからの恋路について真剣に考えていた。

そしてこの後もバイトは続いていき、あつという間に時間が過ぎていき、バイト終りの時間を迎えた。

「お疲れ様ツナ君。今日は手伝ってありがとう。助かったわ。」

「こちらこそありがとうございました。色々勉強になりました。」

「あら。それは将来、穂^ウむら^チに嫁ぐつてという意味かしら?」

「ち、違います!!／／／社会のことを知れたという意味です!!／／／

ツナは表情をニヤニヤさせながら言う穂乃果の母に対して、顔を赤くしながら否定した。

「で、でも…!!／／／また穂むらでバイトができたらなんて思ってます…!!／／／」

「え!?!／／／」

穂乃果はツナが顔を赤くしながら自分の願望を言ったことに、驚くと同時に顔を赤くした。

「まあ！これからも穂むらで穂乃果と一緒に働きたいだなんて。もしかしてプロポーズ？」

「ツナさん大胆ですね。」

「誰もそんなこと言ってませんけど!?!／／／」

「雪穂もお母さんもいい加減にしてよ!!／／／というか雪穂はお母さんがツナ君の言葉を改ざんしてたの気づいてたでしょ!!／／／」

結局最後の最後まで穂乃果の母と雪穂にいじられて、ツナと穂乃果は顔を真っ赤にしてしまっていた。

「あ、それとこれ少ないけどバイト代ね。」

「ほ、本当にいいんですか？」

「当たり前じゃない。ちゃんと働いてくれたんだから。遠慮しないでいいのよ。」

「そ、そうですか…じゃあ…」

そう言うツナは穂乃果の話バイト代に入った、茶封筒を両手で受け取った。

そしてツナはバイクに股がり、ヘルメットを着用しバイクのエンジンかけた。

「じゃあね穂乃果ちゃん。」

「うん。またねツナ君。」

そう互いに一言だけ言うと、ツナはバイクを走らせて並盛にある自分の家路へと帰っていった。

「さて、早いけど晩ご飯の準備でもしましょうか。」

そう言う穂乃果の母は穂むらの中に入っていった。

その一方で穂乃果はツナが見えなくなったあとも、微塵も動かずただただ立ちつくしていた。

「お姉ちゃん? どうしたの?」

「決めたよ。」

「え? 何が?」

「今から^{みんな}μsを集めてツナ君のことについて改めて聞こうと思う。そして今日のツバサちゃんの宣戦布告されたことをみんなに話そうと思うんだ。」

そう言うと穂乃果は自分のスマホを取り出して、LINEの回グ
ループトークの画面を開く。

『今からウチに来て欲しい。ツナ君のことについて話があるんだ。』

#標的（ターゲット） 200 「恋の緊急会議」

ツナが帰ったあと穂乃果はμsのメンバーを全員、招集した。そして20分ぐらい全員集合し、穂むらの客間にて会議が始まる。

「今回、集まってもらったのは他でもない。μs^{私たち}が想いを寄せてツナ君のことで話がある。」

「何ですかその口調…?」

「というか何で司令座り…?」

いつものと違う口調と、長机に両肘をつけて司令座りをしている穂乃果に海未とにはは呆れてしまっていた。

「それでツナのことで話があるって言ってたけど何なのよ穂乃果?早く言いなさいよ。」

「そんなに気になるん真姫ちゃん?」

「ち、違うわよ!!//私だって暇じゃないんだから、さっさとして欲しいだけよ!!//」

「成程ね。帰ってこの日記にツナ君のことを書きたいんやね。」

「な、何で私の日記を持つてるのよ!?!//」

「凜が持ってきたにゃ!せっかくだからみんなに見てもらおうと思っただにゃ!」

「見せなくていいわよ!!//」

凜が日記を持ってきたことを言うと、真姫は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしまった。

そして真姫の日記の内容を穂乃果、海未、ことり、絵里は目撃してしまった。

「こ、これは…!?!//」

「ツナ君のことが…!!//」

「デートのプランまで…!!//」

「しかも卒業した後のことまで…!?!//」

「な、何勝手に見てるのよ!!／＼／＼」

真姫は3人に日記の内容を見られたことに恥ずかしくなって、日記を奪うと両腕でホルルドし取られないようにし、全員を睨んでしまっていた。

「そ、それで穂乃果ちゃん、ツナさんのことで話があるって言ってたけど…?」

これ以上真姫の日記のことに触れるのが可哀想だと思ったのか、花陽は今回のことについて尋ねた。

「あーそうだった! えつとね今日ツバサさん…じゃなくてツバサちゃんが穂むら^{ウチ}に來たんだけどね…」

「「「ツバサちゃん!」」」

いつも穂乃果はツバサさんと呼んでいるが、ここに来て急にちゃんづけで呼んだことに一同は驚きの声を上げていた。

そして穂乃果はツバサに宣戦布告されたこと、マフィアに連れ去られそうになったところをツナに助けられたことを話すと、一同は驚きのあまり声を出すこともできず、開いた口が塞がらない状態であった。

「ということなんだ…」

「それってたとえアイドルを止めることになろうとも、ツナを自分の物をするってこと…?」

「アイドルからの宣戦布告…本気なんだね…」

(まさかツナ君のあの姿を知る人が私たち以外に…)

(しかも相手は本物のアイドル…)

にこと花陽はアイドルからの宣戦布告の意味を理解し、絵里、ことは超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態のツナを知る人物がまた増えたことに真姫と同じく複雑な感情を抱いていた。

「それで今日集まってもらったのはツバサちゃんの宣戦布告のことを話したいと思ったのと、みんなツナ君のことをどう思ってるのか改めて聞きたかったんだ。」

「そりゃウチはツナ君と付き合って、結婚するつもりやけど。」

「ちよつと! どうなりたいかじゃなくて、どう思ってるのか聞いている

「ただけど!? ツナ君のことを好きなのかどうか聞いているの!」

自分と願望を言う希に、穂乃果がツツコミをいれる。

「ウチはツナ君のこと大好きやん。世界で1番。そういうみんなはどうなん?」

「「「「え!?／＼／＼／＼／＼」」」」

希はツナのことを好きだと答えると、逆にツナのことを

どう思っているのかと尋ねると希以外はツナのことを好きだと言うのが恥ずかしくなったのか、顔を赤くして俯かせてしまい、黙ってしまった。

「その様子やとツナ君はウチと付き合うことになりそうやね。」

「ち、違うよ!!／＼／＼ツナ君と付き合うのは私だよ!!／＼／＼」

「違うにや!!／＼／＼ツナの付き合うのは凜だにや!!／＼／＼」

「私だってツナ君と付き合うよ!!／＼／＼」

「ちよつと勝手に話を進めないでよ!!／＼／＼私だってツナ君のことを…!!／＼／＼」

「わ、私は…!!／＼／＼」

「その…!!／＼／＼」

「わ、私は別に関係ないわ!!／＼／＼せいぜい頑張りなさいよね!!／＼／＼」

「そ、そうよ!!／＼／＼私には関係ないんだから!!／＼／＼」

穂乃果、凜、ことり、絵里は希の言葉に反抗できたが、海未、花陽、にこ、真姫は自分の想いを言うことができなかったのだった。

#標的（ターゲット） 201 「噂」

長かったような短かったようなGゴールデンウイーク Wも終わり、並盛高校も音ノ木坂学院もテスト週間を迎える。

穂乃果と雪穂は学校に登校する為、一緒に通学路を歩いていた。

「あー…今日からテスト週間かー…嫌だなー…」

「お姉ちゃん卒業かかってるんだから、もう少しやる気出さなきゃ。」
「それはそうだけど…はあ…」

雪穂に言われて卒業がかかっていることを自覚する穂乃果であったが、どうにもやる気が出ずもの凄い嫌な顔をしながらため息をついていた。

歩くこと20分、音ノ木坂学院の校門の前に着くと他の生徒たちが穂乃果の前に現れる。

「高坂先輩、おめでとうございます。」

「これから頑張ってください。」
「え…？」

急に後輩たちからお祝いの言葉を言われて、何の事かわからず穂乃果はキョトンしまった。そして何でそんなことを言われたのかわからず穂乃果が後輩たちに何のことか尋ねる前に、後輩たちは学校の中へと走って行ってしまった。

「な、何のことだろう…？」
「さ、さあ…？」

後輩たちがなぜあんなことを言ったのか二人にはわからず、疑問符を浮かべてしまった。

この後も穂乃果は何人かの生徒にお祝いの言葉を言われたり、穂乃果を見てコソコソと話している生徒がいたりしたが、穂乃果は何のことかわからないまま自分の教室へと向かっていった。

「おはよう海未ちゃん、ことりちゃん。」

「おはようございます穂乃果…」

「今日も元気だね…」

「ええ!?どうしたの二人とも!?!」

穂乃果が教室に入って二人に挨拶した瞬間、二人とも世界が終わったと言わんばかりの表情になっており、それを見た穂乃果は驚きの声を上げてしまった。

「昨日わざわざ^{みんな}集めたのはこういうことだったのですね…本当はもうできていたと…」

「でもおめでとう…これからもお幸せにね…」

「だから何のこと!?!話が全然見えて来ないよ!」

「とぼけないでください!もう学校中に噂になってるんですよ!穂乃果に彼氏ができたって!」

「えー!?!?!?!?!」

まさかそんな噂が流れているとは思いやらなかつた穂乃果はメチャクチャ驚いてしまった。

「な、何でそんな噂が流れてるの!?!私、ツナ君と付き合っていないよ!」

「でもヒデコちゃんとフミコちゃんとミカちゃんが言ってたんだよ。」

「ちよつと!嘘の噂を流さないでよ!」

穂乃果は教室の後ろでニコニコしているヒデコ、フミコ、ミカに文句に言った。

「穂乃果と一緒にバイトしてたし。」

「穂乃果とツナ君お似合いな感じだったし。」

「親も公認してたし。」

「だからって学校中に言う必要ないでしょ!」

全く反省の色を見せないヒデコ、フミコ、ミカに穂乃果がツツコミをいれる。

「でも新聞部の人にこのこと言っちゃったから、新聞部の人がこのこと載せちゃうかもよ。」

「ええ!?!早く行かなきゃ!」

ヒデコからそのことを聞いて穂乃果は急いで教室へ飛び出すと、新聞部の部室へと向かっていった。

「でもまさか穂乃果たちがこんなことになってるなんて…」

「幼馴染3人がツナ君を巡って4角関係…」

「これはこれで大ニユースだね…」

ヒデコ、フミコ、ミカはコソコソと穂乃果たちに恋愛事情について話す。

3人は穂乃果に彼氏ができたという噂が流した時に海未とことが他の生徒と違ってもの凄い落ち込んでいたのを見て、二人も穂乃果と同じくツナのが好きだということに気づいたのである。

その一方で2年生の教室では…

「ツナさんと穂乃果ちゃんが…」

「まさかそんなことになって…凜、知らなかったにや…」

「べ、別に…私には関係ないんだから…」

海未とことりと同じく花陽、凜、真姫は世界が終わったと言わんばかりの表情をしており、3人から覇気を感じられない状態にあった。

そんな3人を見てクラスの女子たちがコソコソと話し始める。

「どうしたのあの3人…？ 凄い落ち込んでるよ…？」

「なんか高坂先輩に彼氏ができたっていう噂を聞いてから、ずっとあんな感じなの。」

「もしかして高坂さんの彼氏にあの3人が恋してたとか!？」

「待って！ 確か3年の園田先輩と南先輩もあんな風に落ち込んでたって誰かが言ってたよ！」

「え!?! じゃあもしかして…」

この後、穂乃果に彼氏ができたという噂は嘘だと言うことがちゃんと学校中に伝わったが、並盛高校のツナ君と穂乃果、海未、ことり、花陽、凜、真姫の7角関係とい学校新聞にて掲載されたのであった。

#標的(ターゲット)202 「家庭教師(かてきよー)志願」

とりあえず授業が終わって、アイドル研究部部員はテスト週間に入り部活がテストが終わるまで停止になるので、アイドル研究部部室に集まり掃除をした。

そして掃除を終えると、全員椅子に座って休憩する。

「はあ…それにしても今日は散々だったわ…」

「でも私たちがツナさんのことが好きだっていうことが学校中に…」

「もうないとは思いますが、ツナ君が音ノ木坂学院このがっこうに来るようなことがあつたら大変なことになりますね…」

真姫、花陽、海未が今日一日を振り替えりながら呟いた。その後、同級生や後輩などに色々ツナとの恋愛事情について聞かれて、雪穂と亜里沙以外はちよつと疲れているのである。

「それよりも今日からテスト週間ですよね。」

「あー！言わないで！」

「聞きたくないにゃ！」

亜里沙がテストの話題について触れると、勉強が苦手な穂乃果と凜は両手で両耳を押えながら、机にうつ伏せになっていた。

「いい加減、現実をみなきやお姉ちゃん。」

「凜もよ。卒業がかかっているとは言っても、ちゃんと勉強してないと後が大変よ。」

雪穂と真姫が、机にうつ伏せになっている穂乃果と凜にそう言うが、二人とも机にうつ伏せたままである。

するとアイドル研究部の部室の扉が開かれる。

「お邪魔するよー。」

「遊びにきたわよ。」

「みんな元気にしてる?」

「希ちゃん！にこちゃん！絵里ちゃん！」

希、にこ、絵里が遊びに来て、穂乃果はバツと起き上がると明るい表情になった。

「遊びに来てくれたの？」

「卒業式の時にたまには遊びに来るって言っておいて来れなかったしね。」

「でも音ノ木坂は今日からテスト週間なんだよ。」

「え？そうなの…？」

「大学は前期と後期に1回ずつしかないから、すっかり忘れてたわ。」

ことりが今日からテスト週間だということを伝えると、丁度テスト週間だということタイミングが悪いと思ってしまうていた。

「そういえば去年もこのぐらいやったね、ラブライブに出場する条件として理事長からテストのことを言われて、穂乃果ちゃんと凜ちゃんと、にこっちにウチが勉強を教えつけた。」

希は去年のこの頃のことを思い出すが、穂乃果、凜、にこは希のワシワシMAXの被害に遭わされたことを思い出し、若干体が震えてしまっていた。

「それで？テストのほうは大丈夫なわけ？」

「大丈夫じゃない（にや）…！」

にこがテストのことについて尋ねると、穂乃果と凜は暗い顔になりながら答えた。

「しようがない。私が協力してあげようやん。」

「いや！大丈夫だから（にや）！」

希のワシワシMAXの恐怖を思い出したのか、穂乃果と凜は即答で断った。

「じゃあ希、ツナの勉強を教えてやってくれねえか。ツナもやばそうなんぞな。」

「え?!リボン君?!」

突如、部室にリボンの声が響き渡り、全員部室内をキョロキョロと見渡すがリボンの姿は見当たらなかった。

すると部室の壁の一部が扉のように開くと、椅子に座ってコーヒー

を飲んでいるリボンがいた。

「ちやおつす。」

「あ！そんなところにいたんだ！」

「前に学校を勝手に改造しないでくださいって言いましたよね！」

「え…どうなってるの…？」

「学校を改造した…？」

「本当にスピリチュアルの赤ちゃんやね…」

学校がリボンによって改造されていたこと、にこ、絵里、希は驚いてしまっていた。

「それよりさっきの話なんだが、ツナに勉強を教えてやってくれねえか。そのかわり俺が穂乃果の家庭教師かてきよーしてやる。お前は卒業がかつてるからな。並盛高校と音ノ木坂は教科書は違うが、やってる内容はほとんど同じだしな。どうだ？」

「リボン君が私に教えてくれるの!？」

穂乃果がリボンが自分の家庭教師かてきよーになってくれると聞いて明るい表情になった。穂乃果にとって希や海未が教わるのは怖いので、嬉しかったのである。

「全員ええよ。せっかくやしウチの家に来て勉強しようかなー、二人つきりふにつきりで。」

「……な!?!／／……」

二人つきりという単語を聞いて雪穂と亜里沙以外は顔を赤くして動揺してしまっていた。

「だ、大丈夫ですよ！私がツナ君を教えますから！こう見えて私もツナ君の家庭教師かてきよーとして教えたことがあるんですから！なので私の家でツナ君を教えて…!!／／／

「あ！ずるい海未ちゃん！」

「何気に二人つきりになるうとしてる！」

「そ、そんなつもりは…!!／／／

海未は穂乃果とことりに問い詰められて、顔を赤くして視線を反らしてしまった。

「う、海未ちゃんが大胆に…」

「ど、どうしよう…私たちじゃ教えられないし…」

学年が一つ下である凜と花陽はツナに教えることができない為、不安な表情になってしまっていた。

「しょ、しようがないわね！こうなったら私が！」

「にっこち、人にそんなに教えられるぐらい、勉強できたっけ？」

「うっ…」

希に指摘されて、ここは何も言えなくなってしまった。

「ま、まあ私は2年生だけど、教えてあげられないこともないし…どうしてもって言うなら…!!／／」

「真姫は卒業がかかってないとはいえ、医者を目指すんだし、人に教える余裕とかないんじゃない？私なら大学生だし、問題ないわ!!／／」

絵里は真姫にそう言いながらも、自分もツナの家庭教師になりたいという願望が出てしまっていた。

このあと色々と討論したが、結局学力がそれなりにあって、卒業がかかっていない絵里か希が適任となり、二人がジャンケンで決めることとなった。

そして結果は…

「勝った…」

絵里が勝ち、ツナの家庭教師になることとなった。

#標的(ターゲット)203 「家庭教師(かてきよー)絵里」

ツナを家庭教師かてきよーすることになった絵里は、次の日からツナの家にて勉強を教えることとなった。ちなみに穂乃果はリボーンが直々に穂むらにて教えることとなった。

「ここがツナ君の家…思ったより普通だわ…」

世界最強のマフィアボンゴレファミリーのボス候補ということであつてどんな家だということあつて、家もそんな感じだと絵里は思ってしまった。

そして絵里はツナの家のインターホンを鳴らすと、扉が

開きツナが出て来る。

「あ、絵里さん。こんにちわ。」

「こんにちわツナ君。」

「今日はすいません。わざわざ家ウチまで来てもらつて。」

「いいのよ。気にしないで。」

そう言うと二人はツナの部屋に移動し、勉強を始めていく。

「えっとテストの範囲は数学は教科書のここからここまで…国語は…」

今回受けるテストの範囲を教えていくと、絵里は首を縦に振りながら頷いていた。

「わかったわ。まずは数学からやっついていきましようか。」

「はい。」

そう言うともまず始めに数学の勉強から始めていった。

「ここはこうして…この公式に…!?!/ /」

教科書に書いてある公式を指を指そうとして体を少し動かすと、自分の体がツナの体に当たってしまい顔を赤らめてしまった。

「絵里さん？」

「だ、大丈夫よ!!／＼／＼何でもないわ!!／＼／＼」

「あ、はい。」

絵里の指導の元、ツナは数学の勉強から始めていく。

そしてこの後、国語、英語、世界史と続いていった。

「そろそろ休憩にしましょうか。」

「あ、はい。そういえば海未ちゃんも教え方がうまかったけど、絵里さんもすつごく上手ですね。」

「そ、そんな！別に大したことないわよ！」

「海未ちゃんは天使みたいな存在だけど、絵里さんは…女神ですね。」

「め、女神!?!／＼／＼」

ツナが絵里ことをの女神だと言うと、絵里は顔を赤くしてしまっていた。

「はい。俺からしたら本当に女神みたいな存在ですよ。それに美人で勉強もできて、音ノ木坂にいた時は生徒会長だったんでしょ？まさに才色兼備？でいいのかな？」

「あ、ありがとう…!!／＼／＼」

自分のことをこんなに褒められるのが嬉しかったのか、顔を俯かせて、顔を赤くしてしまっていた。

するとツナの部屋の扉が開かれる。

「帰ったわよツナ、あら？」

「あ、初めました。私、音ノ木坂大学に通っている絢瀬絵里といいます。今日はリボン君のかわりに私がツナ君の家庭教師を…」

「あらー。またツナにこんなに可愛い女の子が。またお嫁さん候補が増えたわねー。」

「お、お嫁さん!?!／＼／＼」

「母さん！また変なこと言うなって！」

にこ、花陽、凜が来た時と同じことを奈々が言うと、絵里は顔を真っ赤にし、ツナは奈々に文句を言った。

「わざわざ来てもらってありがとう絵里ちゃん。これからもツナのことをよろしくね。」

「は、はい!!／＼／＼ふつつか者ですがこれから末長くよろしくお願
いします!!／＼／＼お義母様!!／＼／＼」

「絵里さん!そういう意味じゃないです!母さんの言葉を間に受けな
いでください!!」

「はっ!?!／＼／＼」

奈々は友達としてツナがよろしくと言ったつもりだったが、絵里は
ツナのお嫁さんとしてよろしくと勘違いしてしまったのである。

そして意味をとり違えてしまった恥ずかしさと、ツナのお嫁さん
になった発言をしてしまったことで気絶してしまった。

「絵里さん!しっかりしてください!絵里さん!」

この後、絵里が目覚めるまでとてもそれなりに時間がかかったそう
な。

#標的（ターゲット） 204 「照れ隠し」

時は少し遡る。絵里がツナの家で勉強を教えている頃、穂乃果の家に家庭教師かてきよしに行っている

リボーンは…

「できたよ。あってる？」

現在、数学のテストの真っ最中であつた。

「全然違えぞ穂乃果。」

「ええ!？」

自信ありげな穂乃果であつたが、リボーンに違うと言われてしまつていた。

「実はこの問題は、こうやって解くと簡単なんだぞ。」

「あ！本当だ！凄いリボーン君！」

「まあな。俺は超一流の家庭教師だからな。」

ツナが間違えればいつも蹴りをいれたり、爆破したりするリボーンだが、相手が女性ほのかということもあり、めちやくちや優しく教えていた。

そして一通り勉強を終えると、休憩に入ると穂乃果の母が差し入れを持ってきた。

「ありがとうねリボーン君でよかったかしら？穂乃果に勉強を教えてくれて。」

「気にするな。いつもツナが世話になっているしな、これくらい当然だぞ。」

そう言うとりボーンはあらかじめ持ってきておいたコーヒーを飲み始める。

（本当に何者なのかしらリボこの子？…ツナ君の家庭教師って言っていたけど…でも穂乃果も雪穂も何の違和感を感じてなかったし…私がおかしいのかしら…？）

穂乃果の母はリボーンの存在にもの凄い違和感を感じてしまつて

いた。

(それに本当に赤ちゃんなのかしら…？喋り方といい、コーヒを飲む仕事草といい…見ためは赤ちゃんなのに…まるで中身は大人みたい…)

「どうかしたのか？」

「な、何でもないわ。勉強頑張つてね。」

そう言うのと穂乃果の母は、そそくさと部屋から出ていった。

「どうしたんだろうお母さん？何かあったのかな？」

「さあな？」

穂乃果の母の様子が少しだけおかしいと感じた穂乃果とリポーンであったが、この後も気にせずテスト勉強を続けていった。

(そういえばツナ君と絵里ちゃんどうしてるかな…？)

「ツナと絵里が気になんのか？」

「へ!?!/いや!/」

「ツナのが好きなんだから、気になるのもしょうがねえよな。」

「だ、だから…!?!/」

反論しようとする穂乃果であったが、本当のことなので言い返そうにも言い返すことができなかった。

「安心しろ穂乃果。たとえツナと絵里に何かあつて、結ばれるようなことがあつても、ツナの愛人にしてもらえばいい。」

「あ、愛人!?!/」

「ツナならお前らs全員とツバサを含めた10人くらい幸せにしてくれるはずだぞ。俺が保証するぞ。」

「ダメだよ!!/ /愛人なんて!!/ /それにツナ君は絶対に心に決めた女ひとの子以外の人と付き合うことなんて絶対にしないよ!!/ /」

愛人という言葉に惑わされそうになってしまった穂乃果であったが、なんとか持ち直した。

「何であんなダメツナに惚れたのかは知らねえが、穂乃果も大変だな。」

「ツナ君はダメツナなんかじゃないよ!」

「いいやダメツナだ。」

「ダメツナじゃない！」

リボーンのダメツナ発言に穂乃果はむきになってしまった。

「もう！何でツナ君のことそう言うの!?!リボーン君はツナの家家庭教師なんですよ！」

「本当のことだからだ。だがあんなツナだからこそ多くの仲間がツナを信じられるんだぞ。」

「え…?」

「俺もツナに出会ってなければ、お前たちとこうして出会うこともなかったからな。」

「え?どういうこと?」

「簡単な話だ。ツナに出会ってなければ俺は数年前に死んでたんだ。」

「え…」

「まあ救われたのは俺だけじゃねえけどな。コロネロもユニもラルも俺と同じ運命にあっただ。だがツナはそんな運命に抗って、俺たちを救ってくれたんだぞ。」

「…」

あまりの出来事に穂乃果は驚きのあまり、何も声を出すことはできなかつた。

「俺としちまったことが、つい余計なこと喋っちまったな。今の話を言ったことはツナには言うなよ。」

「もしかして恥ずかしいの?」

「そんなじゃねえ。」

「あ！誤魔化した。」

「誤魔化してねえぞ。」

(ツナ君のことをダメツナなんて言ってるけど、誰よりもリボーン君がツナ君のことわかってるんだ…本当は照れくさいだけなんだね。)

ほんのちよつとだけリボーンの意外な一面がわかって穂乃果はクスクスと笑ってしまった。

リボーンは穂乃果に笑われたのが、少し悔しかったのか少し反撃にでた。

「そういえばツナが穂乃果ちゃんって可愛いよなーって言ってたぞ。」

「え!?!／＼本当!?!／＼!」

「冗談だぞ。」

「あー!リボン君の嘘つき!」

この後も、リボンにいじられてしまう穂乃果であった。

#標的（ターゲット） 205 「勉強場所」

そして場面は戻り、再びツナの家。一度は気絶した絵里であったが、意識を取り戻した後は再びテスト勉強を始めた。

そして時刻は午後7時をまわり、絵里は帰り自宅をする。

「今日はありがとうございました絵里さん。」

「お役に立てて良かったわ。明日もまたこの時間に来るわね。」

「あ、そのことなんですけど絵里さん。ちよつと

提案があるんですけど、いいですか？」

「提案？」

「はい。いくら隣町といっても、絵里さんが家^{ウチ}まで来るのは大変だと思うんですよ。だから俺が音ノ木坂の図書館かどこかで勉強するほうが絵里さんに負担がないと思うんですよ。」

「でもそれじゃツナ君に負担が…」

「大丈夫ですよ。俺、バイクに乗れますから。」

「あ、そうなの？」

「はい。すみません、家^{ウチ}に来る前に思いついたらよかったですけど…」

「大丈夫よ。気にしないで。あと場所のことなんだけど…!!／／／」

ツナが謝ると、絵里が顔を赤くしながらモジモジとし始めた。

「その…!!／／／家でテスト勉強しない…?／／／」

「え?絵里さんの家ですか?いいんですか?」

「え、ええ…!!／／／ツナ君がいいんなら…!!／／／」

「じゃあ、お願いします。」

こうしてツナが次の日に、テスト勉強をする場所は、絵里の家になった。

「あ、それと絵里さん。今から家まで俺がバイクで送りますよ。」

「ええ!?／＼だ、大丈夫よ!!／＼」

まさかここでツナからそんなことを言われるとは、思ってもみなかった絵里は顔を赤くして動揺してしまった。

「わざわざ家^{ウチ}まで来てもらって、教えてもらったんですから、これくらいしますよ。それに絵里さんの家、知らないから、ここで送ってあげば絵里さんの家がわかるし。あ！嫌なら全然いいんですよ！」

「じゃ、じゃあ…!!／＼その…!!／＼お、お願いするわ…!!／＼」

顔を赤らめながらも、絵里はツナにバイクで送ってもらうことを了承した。

そして絵里はツナの後ろに乗り、家まで送ってもらうことになった。

(こ、これがツナ君の…男の子の背中…!!／＼)

前にことりがツナとバイクで二人乗りした時と同じように、絵里もツナの背中中の温もりを感じていた。そしてツナと密着したことでよって、心臓の鼓動が早くなっていることに、絵里は気づいていた。

「絵里さん。」

「…／＼」

「絵里さん！」

「はっ!!／＼ごめんなさい!!ボーツとしてたわ!!／＼そ、それで何!?／＼」

「もう音ノ木坂に入ったんですけど、絵里さんの家はこっちでいいのかなって…」

「え、ええ!!／＼大丈夫よ!!／＼」

絵里は顔を赤くしながら、慌ててそう答えた。

この後もツナは絵里の案内の元、絵里の家を目指して行った。そしてバイクで移動すること20分、絵里の家に到着した。

「ここでもいいんですか?」

「ええ。ありがとうツナ君。」

そう言うのと絵里はヘルメットを取り、バイクから降りた。

「じゃあまた明日ね。」

「はい。明日もよろしくお願いします。」

そう言うツナが、バイクのハンドルを握って帰ろうとした。
が…

「お姉ちゃんに…ツナさん？」

「あ、亜里沙!? どうしてここに!?!」

「どうしてって…雪穂の家で雪穂と一緒にテスト勉強してたんだけど…そういうお姉ちゃんこそツナさんの家に行ってたのに何で…はっ!もしかしてお姉ちゃん…!ツナさんと付き合って…!?!」

「二亜里沙!?!/!/!/亜里沙ちゃん!?!/!/!/」

亜里沙の勘違いに絵里とツナは顔を真っ赤にしてしまった。

(ど、どうしようお姉ちゃんがツナさんと付き合うことになって、とっても嬉しいけど…でも他のみなさんが…)

完璧に二人が付き合っていると勘違いしている亜里沙であったが、もの凄い複雑な気持ちになってしまったのであった。

#標的（ターゲット） 206 「嘘つき」

その後、ツナと絵里は亜里沙の誤解を解いた。

そして次の日。ツナが絵里の家に来てテスト勉強する日である。

絵里は大学が授業の終えて、家に帰ろうとしていた。

—音ノ木坂大学—

「希、今日は先に帰るわね。」

「どうしたんエリチ？なんか用事でもあるん？」

「え……ま、まあそんなところよ……!!と、とにかく先に帰るから！」

多少ギクシヤクしながらも絵里は、走って校門から出て家に帰ろうとした。

「あ、絵里さん。」

「ツ、ツナ君!？」

なぜかツナが音ノ木坂大学の校門の前で待っていた。

「ど、どうして音ノ木坂大学に!？」

「今日は学校が終わっちゃって。それで絵里さんの家に行っただんですけど、まだ帰ってなかったから迎えに行こうかなって来たんです。よかったですあ入れ違いにならなくて。」

「そ、そう……」

絵里はツナの話を聞いて顔を少し引きつらせてしまっていた。

なぜかという……

「あれ？ツナ君やん。」

「あ、希さん。」

希がすぐ後ろにいたからである。絵里は希にツナが自分の家に来ることを、伝えてはいない、というよりも伝えればどのようなことになるか簡単に想像がつくからである。

「どうしたん？エリチに勉強を教えてもらうんじゃないん？」

「はい、そうですよ。でも絵里さんが家^{ウチ}まで

来るのは大変だから、俺が絵里さんの家に行ってテスト勉強することになったんです。」

「へえーそうなん。それは知らなかったわー。エリチとがツナ君がそんな約束してたなんて。」

希が絵里のほうを向いて表情をニヤニヤさせながら、そう言うと、絵里はただただ黙って顔を赤くして顔を俯かせることしかできなかった。

すると希と絵里の友達がやって来た。

「おーい絵里ちゃん、希ちゃん。」

「あれ？この子誰？」

「二人の友達？」

「いいや、ウチの彼氏なんよ。」

「希!?!?!希さん!?!?!」

希が友達の質問にそう答えると、ツナと絵里は顔を真っ赤にさせてしまった。そして傍にいた希と絵里も彼氏と聞いて驚いてしまった。いた。

「ちよつと待つてください希さん!!?!?!俺たちが付き合ってますよね!?!?!勝手にそんなこと言わないでもらえます!?!?!」

「もうダーリンだったら。照れんでええのに。二人っきりの時はあんなことやこんなことまでしてくれるやん。」

「照れてません!!?!?!それから俺のことをダーリンって呼ばないでください!!?!?!」

勝手に嘘をついた上に、彼女面し、さらに自分のことをダーリン呼ばわりしている希にツナは顔を赤くしながら叫んだ。

「希!!?!?!嘘を言わないの!!?!?!ツナ君が困ってるでしょ!!?!?!」

「どうしたんエリチ?もしかして嫉妬してるん?」

「し、してないわよ!!?!?!」

「人の彼氏に手を出そうなんて、エリチがそんなことするような人と

は思わなかったわー。」

「そこまで言っていないし、何で私が悪役みたいになってるのよ!!／＼／＼いい加減、ツナ君の彼氏顔するの止めてもらえるかしら!?!／＼／＼」
「どいうわけでウチの家でテスト勉強しない? ウチがツナ君につきつきりで家庭教師かてきよしてあげるよ、もちろん二人つきりで。」

「え!?!」

「ちよつと希! 最後まで私の話を聞きなさいよ!」

この後も、希と絵里によるツナの争奪は続いていった。

そして音ノ木坂大学ではツナ、希、絵里の三角関係の噂が流れるのあった。

#標的 (ターゲット) 2007 「同じだった」

なんとか絵里は希を諦めさせ、ツナにバイクに乗せられて自分の家まで移動した。

そして絵里の家の中に入った。

「お邪魔します。」

「ただいま亜里沙。今、帰ったわよ。亜里沙?」

いつもなら「おかえりお姉ちゃん」と言って迎えて来るのだが、その亜里沙がいないことに絵里は疑問を感じていた。

「どこか行ったのかしら?」

すると玄関の横の棚に、一枚のお姉ちゃんへと書いてある封筒が置いてあるのをツナは気づいた。

「絵里さん、手紙がありますよ。」

「あら本当だわ。」

そう言う絵里は、亜里沙からの手紙を黙読する。

お姉ちゃんへ

今日は家で勉強する予定だったけど、雪穂の家で勉強するね。ツナさんと勉強、頑張ってるね。

亜里沙より

(亜里沙!?!?!/?/変に気を遣うようになって:?!?!/?)

いつもこんな風に気を使わない亜里沙がこんなことしたこと絵里は驚くと同時に、顔を真っ赤にしてしまった。

「何て書いてたんですか?」

「な、何でもないわ!!?!?!/雪穂ちゃんの家でテスト勉強するって書いてあっただけよ:?!?!/」

「そうですか。」

絵里は慌てて誤魔化すが、ツナは何も違和感を感じず、この後絵里

の部屋に移動して、テスト勉強を始める。

「じゃあ昨日の続きから始めましょうか。」

「はい。」

昨日ツナの家で勉強した時と同じように、二人はテスト勉強を始めていった。

そして勉強を始めて3時間半ほどで、とりあえず勉強は終わり、時刻は7時40分になり、外は暗くなっていた。

「ツナ君。どうぞ。」

「ありがとうございます。」

絵里がコップにジュースを注ぐと、ツナは一言だけお礼を言うと言った。
ジュースを飲んだ。

（そ、そういうえば男の子を家に招くなんて初めてよね…!!／／／しかもそれが初恋の相手…!!／／／）

今さらではあるが絵里は、家に男の子を初めて招いたことを意識した。

「絵里さん、今日もありがとうございます。」

「え!?ええ。どういたしまして。ツナ君の役に立ててなによりだわ。」

「こんなに平和に勉強できたのは何年ぶりかなー。」

「平和って…勉強よね?」

「普通は平和なんですよけど、俺の場合は違います…間違えるたびにリボーンに蹴られたり、爆破されたりしてるんで…しかも中1の頃からそうなんで…」

「それは平和じゃないわね…」

ツナからリボーンの教育を聞いて、絵里は顔を引きつらせてしまっていた。

するとここで絵里はあることに気づく。

「待って…なら穂乃果が危ないんじゃない?」

「大丈夫ですよ。リボーンは女の子にそんなことは絶対にしないんです。女の子にはすっごい甘いんです。」

「そう…なら安心ね…」

ツナから穂乃果が大丈夫だということを聞いて内心安心すると同

時に、ツナが可哀想だと思つてしまった。

「テストといえば、音ノ木坂にいた頃、穂乃果たちがラブライブに出場したいって理事長に言つてたのを思い出すわ。その時に理事長からテストで不合格にならなかつたら、出てもいいって言われてみんな必死に勉強してたつて希から聞いたわ。」

「絵里さんは最初から入つてたんじやないんですか？」

「私は最後のほうだったわ。希と一緒に入つたの。」

「そうだったんですか。俺はみんなでやろうと決めてμ'sを始めようと言つたのかと思つてました。」

「でも私はスクールアイドルを始めた時、生徒会長として私は反対してたわ。」

「え!? そうだったんですか!？」

「ええ。むしろ穂乃果たちとは敵対してたようなものだったわ。」

「想像もつかない…反対してたのにμ'sに…?」

「まあそうでしょうね。あの頃の私は傷つくこと恐れて、壁を作つてずっと逃げたわ。友達と言える人は希だけだけ。でも穂乃果たちとμ'sをやつて、そのお陰で私は変わったわ。」

「…」

あまりの意外な絵里の過去を知つて、ツナは驚このあまり何も喋ることができなかつた。

「急に暗い話になってごめんさい。私つたらつい。」

「わかりますよ。」

「え?」

「俺もそうでした。中学時代、勉強も運動できなくてダメツナって呼ばれて…俺はダメツナって呼ばれるのが嫌で、どんなことからもずっと逃げてました。でもリボンに出会つて、気づかされました。俺は一度でも死ぬ気でやろうとしてなかつただけなんだつて。」

（ツナ君も私と同じ…希が自分の気持ちを理解してきれたつていう意味わかつた気がするわ…）

絵里はツナの話聞いて、希の言つていた言葉の意味を理解した。すると急に部屋の明かりが消え、真っ暗になる。どうやら停電のよ

うである。

「きゃー」

暗いところが苦手な絵里は悲鳴を上げると、すぐに何かに乗まった。

そして数秒ほどで部屋の明かりがつく。

「え、絵里さん…!?!?!」

「え…!?!?!」

突然の停電で怖くなって、絵里はツナに抱きついてしまっていた。事故とはいえツナに抱きついてしまった絵里、一体どうなる!?!

#標的 (ターゲット) 208 「亜里沙の提案」

一瞬の停電によって、絵里はツナに抱きついてしまっていた。

(どどどどどうしよう…!!／／私ったらついツナ君に…!!／／／
そ、それに体が動かない…!!／／／)

事故とはいえ突然のこんなようになって、絵里は顔を真っ赤にし、ツナに抱きついたまま身動きが取れない状況になってしまった。

「絵里さん…!!／／あの…!!／／／」

「このままでいさせて…!!／／／」

「え…!?!／／／」

「もう少しあなたの…!!／／ツナ君の温もりを感じたいの…!!／／
／それに私はツナ君のこと…!!／／／」

「絵里さん…?」

自分に抱きついたまま離れようとせず、いつもと様子のおかしい絵里にツナは違和感を感じていた。

すると絵里の部屋の扉が開かれた。

「お姉ちゃん。今帰った…お姉ちゃん!?!」

いつものようにタイミンク悪く、雪穂の家でテスト勉強をしに行っていた(絵里とツナを二人つきりにさせたくて雪穂の家に行っていたというのが真実であるが) 亜里沙が帰ってきた。

そして妹あひこにこのようなところを見られてしまった絵里は恥ずかしさのあまりボンツ!と音をたてて

気絶してしまった。

「絵里さん!?!」

「お姉ちゃん!」

突然気絶した絵里にツナと亜里沙は驚き、この後ゆすったりするが

すぐには目を覚ますことはなかった。

30分後、絵里は目を覚ましてさっきの出来事について亜里沙に話した。

「何だそういうことだったんだ。要するにお姉ちゃんが停電に驚いて、ツナさんに抱きついていただけだったんだね。」

「も、もう亜里沙!!／＼／わざわ言わないで!!／＼／」

「でも意外でした。絵里さんが暗いのが苦手だったなんて。」

「他の人には言わないでね:!!／＼／」

「大丈夫ですよ。絶対に言いませんよ。」

想い人^{ツナ}に自分の弱点を知られてしまつて恥ずかしさのあまり顔を赤くしてしまつた絵里だが、ツナ

はこのことを他言しないということを約束した。

そしてツナは絵里と亜里沙に見送られながら、バイクに乗つて、並盛にある家に帰つていった。

「事故とはいつても、お姉ちゃんがツナさんに抱きつくことができるなんて。よかつたねお姉ちゃん。」

「だ、だから:!!／＼／」

亜里沙の言葉に反論しようとする絵里だったが、反論するこちらはできなかつた。あの時、事故でツナに抱きついてしまつたといつても、ツナの温もりを感じたいと思ひ離れたくないと思つてしまつた自分がいた。

「明日からは雪穂の家に泊まつて、勉強しようかな。」

「亜里沙!!／＼／そういう気遣いはいいの!!／＼／」

「でもテストは来週だから、金曜日はツナさんを家に呼んで泊まり込みで、勉強できるんじゃない?」

「そ、それは:!!／＼／」

絵里は亜里沙の提案にまんざらでもなさそうな様子であつた。

「亜里沙の奴。いい提案するじゃねえか。これは面白いことになりそうだな。」

そこには絵里の家の近くで、穂乃果の家庭教師^{かてきよ}を終えて、ツナの様子を見に来ていたりボーンがいた。そして亜里沙の提案を聞いてリ

ポーンは、不敵な笑みを浮かべていた。

「それにこの写真も、^{あいつら}μsに送ってやるか。」

リポーンがスマホを取り出すと、アルバムのアプリの中に以前ツバサがツナの頬にキスされた写真の横に、絵里がツナに抱きついた写真があった。

再び起こる嵐の予感!? 一体どのような展開になってしまうのか!?

#標的（ターゲット） 209 「絵里からの誘い」

ツナが絵里のところに、通い始めて4日が経過した。

「今日はここまでにしましょうか。」

「あ、はい。今日もありがとうございました。」

ツナは今日もいつものように絵里の家で、テスト勉強をしていた。そしてテスト勉強も終わった。

すると絵里の脳裏に亜里沙の言葉がよぎる。

『でもテストは来週だから、ツナさんを家に呼んで金曜日は泊まりこみで勉強できるんじゃない？』

（わ、私はなんてことを!!／／／で、でも…!!／／／）

絵里は想い人を自分の家に連れて来ることを迷っていたが、何度も亜里沙のあの言葉が自分の脳裏に何度もよぎってしまった。

「絵里さん？」

「な、何かしら!?!／／／」

「いや…様子が変だったから…」

「だ、大丈夫よ!!／／／ちよつと考え事してただけだから!!／／／」

「そうですか…ならいいんですけど…」

これ以上、ツナに何も聞かれなかったことに絵里はホツとしてしまった。

少しほど沈黙が続くと、絵里が話を切り出した。

「あ、あのツナ君…!!／／／」

「何ですか絵里さん？」

「あ、明日のことなんだけど…!!／／／」

「明日ですか?もしかして明日は都合が悪いとかですか?」

「そ、そうじゃないの…!!／／／その…!!／／／」

「絵里さん?」

「明日から土曜日まで家に泊まってテスト勉強しない…!?!／／／」
「え!?!」

急な絵里の誘いにツナは驚くと同時に、戸惑いを隠すことができなかった。

「明日は金曜日で、明後日は土曜日で休みだからテスト勉強もいっばいできるから…!!／／ご、ごめんなさい変なことを言っちゃって!!／／ツナ君も休みぐらいは家でゆっくり勉強したいのに!!／／」
「…して…?」
「え!？」

「どうして俺の為にそこまでしてくるんですか？絵里さんだって休みの日ぐらいゆつくりしたいはずなのに？」

「そ、それは…!!／／」

絵里は自分の為にそこまでしてくれる絵里に、ツナは疑問に思ってしまった。そしてツナの問いに絵里は好き^{ツナ}な人^{ツナ}といたいからとは言えず、迷ってしまった。

すると絵里の脳裏にマフィアランドで自分を助けてくれたツナがよぎった。

「そ、そりゃツナ君は前に私を助けてくれたし…!!／／その恩返しみたいなもので…!!／／」

「気にしないでいいんですよ！別に俺は恩を売る為じゃなくて、俺は絵里さんを護りたいと思っただけなんですから！」

絵里からマフィアランドのことを聞いたツナは、両手を前に出して気にしないでいいと主張した。

「それだけじゃないわ…!!／／本当はただ…ただ私はツナ君と一緒に…!!／／」

絵里は顔を恥ずかしさのあまり真っ赤にさせながらも、それでも勇気を絞り出して、ツナに本当の気持ち伝えようとする。

だが…

ピンローン！

ここで絵里のLINEのスマホの通知が鳴り、この数秒後にツナのスマホのLINEの通知が鳴った。

「あ、LINEだ。誰からだろう？」

LINEの通知がきたことに気づいたツナは勉強道具を入れてい

た、学校指定のバッグからスマホを取り出してLINEのアプリを開いた。その一方で絵里はこのタイミングでLINEが来たことに嬉しいような、嬉しくないような複雑な気分になっていたが、とりあえず絵里もスマホを取り出してLINEのアプリを起動した。

「リボーンからだ。」

「あら私もリボーン君からだわ。」

ツナと絵里のスマホにLINEをしてきたのは、どちらもリボーンであった。二人はリボーンからのLINEを黙読していく。

ちやおつす。元気でやってるか？

なんか絵里の家で泊まり込みで、勉強するらしいな。

せつかくだから俺が穂乃果たちを誘っておいてやったぞ。じゃあ頑張れよな。

超一流の家庭教師リボーン

既読7：42

「何で知ってんだよりボーン!? 穂乃果ちゃんの家で勉強教えに言っただんじやないのかよ!？」

ツナはリボーンからのLINEを見て、ここにリボーンはいないがつつこんでしまっていた。その一方で絵里は波乱の予感がしてしまい、内心ハラハラとしていた。

すると再び二人のスマホにLINEが届いた。

そういえば、たまたま面白い写真が撮れたからお前らにも送っておくぞ。

既読7：45

リボーンのLINEの文章の下に、以前ツナがツバサにキスされた写真を送った時とように、そこには絵里がツナに抱きついた写真が映っていた。

「どこがたまたまだよ!!／／いつの間と撮ったんだよ!?!／／」

「ぎ、最悪だわ…!!／／／しかもお前らにもってことは他の人にも…!!／／／」

「はっ!!／／／」

絵里はリボーンのLINEの文章に、お前らにもというところで絵里がツナに抱きついた写真が穂乃果たちにも送られていることに気づき、ツナも絵里の言葉でこの写真が穂乃果たちに送られたことに気づいていた。

この後、色々あったのは言うまでもなかった。

#標的（ターゲット） 210 「勉強合宿の始まり」

リボーンのLINEのせいで、ツナは絵里の家に泊まらざるおえない状況になってしまった。

そして金曜日。μ'sのメンバー全員がツナよりも先に絵里の家に集まっていた。希以外、絵里のことを殺気を放ち睨んでいた。

「え、えっと…」

「絵里ちゃん。あの写真はこういうこと？そもそも何でツナ君が絵里ちゃんの家にいるの？」

「そ、それは…」

「言わないと私のスタームルガーP85が火を吹くよ。」

「穂乃果!？」

どこからか穂乃果が拳銃を取り出すと、絵里は恐怖のあまり後退りしてしまっていた。もちろん他のメンバーも後退りしていた。

「ほ、穂乃果!？何でそんな物を持っているんですか!？というか本物なんでしょうか!？」

「本物だよ。リボーン君が貸してくれたんだ。もし絵里ちゃんが口を割らないようならコレを使えって。」

「そこまでしますか普通!？」

「大丈夫だよ、弾は入ってないから。安心して海未ちゃん。」

弾が入っていないと聞いて全員ホッとするが、そのことをバラしてしまったので意味はなくなってしまった。

「こうなったらラル教官から教わった、敵を自白させる方法を実践するにや。絵里ちゃん覚悟するにや!」

「わかったわ!ちゃんと話すから!だから落ち着いて!」

これ以上は隠すのは無理だと思ったのか、絵里はツナが自分の家にいたこと、そしてツナに抱きついたことについて包み隠さず正直に話した。

「どうやら本当みたいだにや。」

「凜…どこでそんなことを覚えたの…?」

絵里が尋ねると、凜は絵里の脈に手をやって絵里が本当のことを言ったかどうか確認していた。

「ようするにエリチはツナ君と二人つきりになりたかっただけなんやね。そしてツナ君とイチヤイチャしたかっただけだったと。」

「変な言い方は止めてもらえる、希!?!/」

「照れんでええんよ。ウチだってツナ君とそういうことしたいし。」

「希!ハレンチですよ!」

「あれー?さりげなくツナ君を自分の家に誘って二人つきりで勉強しようと思ったのはどこの誰やったけー?」

「そ、それは…!!/」

希の言葉に海未は反論することができなかった。

「それで…?何でにこちゃんがいるわけ?」

「何?悪いわけ?」

「別に。ただにこちゃんは勉強が苦手だったじゃなかったけ?」

「何?自分は頭がいいアピールでもしてるわけ?」

「ふ、二人とも喧嘩はダメだよ…落ち着いて。」

花陽が火花を散らしながら喧嘩している、にこと真姫を止める。ちなみに、にこが絵里の家に来た理由はツナに会う為と、晩ご飯作りである。

すると絵里の家のインターホンが鳴った。どうやらツナがやって来たようである。

「あ、来たみたいだね。私が出て来るよ。」

「待つてことりちゃん。私が出て来るから。」

「凜が出て来るにゃ!」

「待つて私が出て来るわ!あんたちじゃ不安だわ!」

「いや私が!」

ここでことり、穂乃果、凜、真姫、海未が誰がツナを出迎えるか争い始めてしまった。

「じゃあウチが行って…」

「」「」「絶対ダメー!」「」「」

希がツナを迎えに行くと言った瞬間、全員希が玄関に向かおうとするのを、阻止した。

すると絵里の部屋の扉が開く。

「お邪魔します。あ、みんなもう来てたんだ。」

「ツ、ツナ君！どうやってここに!?!」

「どうやってて？亜里沙ちゃんがどうぞって言ってくれて入っただけですけど…それがどうかしたんですか…?」

「そ、そう…」

ツナが勝手に家に入ってきたのだと思ってしまった絵里であったが、ちゃんと亜里沙が代わりに出迎えてくれたと聞いて納得した。

「あ、絵里さん。亜里沙ちゃんから伝言です。今日から雪穂ちゃんの家に泊まって勉強しに行くって伝えておいてって。」

「な!?!」

また亜里沙が変に気を遣ったことに、絵里は驚いてしまった。

こうして波乱の勉強が始まろうとしていた。

#標的 (ターゲット) 211 「どちらが」

ツナもやって来たことにより、さっそく勉強を始めていく。にこだけは夕飯を作る為に、スーパーに買い出しに行った。

「じゃあ、始めよつかツナ君。」

「の、希さん!!／／／離れてください!!／／／」

開始早々、希は抱きつきながらツナの家庭教師をし始めた。いつものツナなら希が抱きつく瞬間にボンゴレブラッド・オブ・ボンゴレの血である超直感で希が抱きつこうとするのがわかるのだが、今回はそれがわからず抱きつかれてしまっていた。どうやら希はツナに抱きつく方法を見つけたようである。

「ちよつと希!!抱きつく必要はないわよね!」

「絵里の言う通りです!そもそも希は凜を教えるはずですよね!」

絵里と海未が希に文句言うのと、他のメンバーも希に文句を言っていたが、希には馬耳東風であった。

そしてなんとか希を引き剥がし、いつも通り絵里がツナかてきよーの家庭教師かてきよーをすることになった。

だが…

(勉強しずらいわ…)

希ほど危険性?はないのだが、やはりツナを教える絵里が気になるのか、希以外、妙なプレッシャーを放ちながらジト目で絵里のことを見ている。

そしてしばらくして、ツナたちは休憩に入った。

「それにしても穂乃果ちゃん。随分、勉強したんだね。ほとんど全問正解してたし。」

「えへへ。リボーン君がわかりやすく教えてくれたんだ。リボーン君すっごく優しく教えてくれるんだよ。」

「やっぱり穂乃果ちゃんには甘かったのか…」

穂乃果とことりの会話から、リボーンが穂乃果にすつごく優しく教えてもらったと聞いて、ツナはリボーンが女の子には甘いということを改めて認識した。

「少なくともリボーン君は海未ちゃんの何十倍も優しかったなー。」

「ええ!?どこが!?リボーンは死神とか悪魔とか魔王とか、あらゆる闇の生物よドス黒い存在だよ!それに比べたら海未ちゃんなんて天使よりも優しい存在だよ!というか海未ちゃんは天使なんて言葉では片付けられないよ!」

「ええ!?天使は絶対じゃないよ!海未ちゃんは鬼だよ!鬼!」

「!?//」

海未の存在について言い争うツナと穂乃果であったが、一方で当の本人はツナに天使より優しいと言われて、顔を赤くして黙ったままであった。

そして討論が終わると、ツナは花陽のほうを見て、ずっと思っていたことを話し始めた。

「そういえば花陽ちゃんって眼鏡かけるんだね。知らなかったな。」

「もともと眼鏡はかけてたんですが、μ'sを始めた時に眼鏡からコンタクトに変えたんです。眼鏡かけてるとライブとかで踊ってる時に、眼鏡が落ちちゃうから。」

「へー、そうだったんだ。花陽ちゃんが眼鏡をかけてるところって始めて見たから。」

「へ、変ですか…?」

「ううん、そんなことないよ。とっても似合ってるよ。」

「そ、そうですか…!!//」

眼鏡をかけていても、ツナに似合っていると言われて花陽はよほど嬉しかったのか、花陽はほんのり顔を赤らめていた。

「でもどちらかといえば俺は眼鏡かけてない、花陽ちゃんのほうが好きかな。あー!別に眼鏡かけてる花陽ちゃんが、変だとかじゃなくいいよ!眼鏡かけてる時の花陽ちゃんも可愛いけど、眼鏡かけてないほうがもっと可愛いっていう意味で!」

「か、可愛い!?／＼／＼」

「は、花陽ちゃん!?どうしたの!?!」

ツナに可愛いと言われて、花陽は顔を真っ赤にして気絶してしまった。だが心なしか花陽は幸せそうな表情で気絶していた。

「かよちゃん!しっかりするにや!」

「花陽ちゃん!どうしたの!?!」

「どうしてじゃないわよ!どう考えてもツナのせいでしょ!」

「ええ!?俺!?!」

真姫に花陽が気絶した理由が自分にあると言われて、ツナはめっちゃくちや驚いてしまった。

余談ではあるが、花陽はこの勉強会が終わってから、生涯を終えるまで眼鏡をかけずにいたという。

#標的（ターゲット） 212 「全員で夕食」

しばらくするとにこが買い出しを終えて、絵里の家に戻ってきた。そしてにこはカレーを作り始めた。

「うわー。相変わらずいい匂いだなー。花見あのとぎの時はビアンキのポイズンクッキングで大変でそれどころじゃなかったらなー。」

「そういえば、そんなこともあったねー。」

ツナと穂乃果は花見の時の料理対決のことを思い出していた。あの時はポイズンクッキングによって充滿した毒素によって会場がパニックになってしまい、料理対決どころではなかった。

「あー。もうすぐお米が。早く炊けないかなー。」

「相変わらずね花陽…」

「かよちゃんは本当に米が好きだにやー。」

一花陽は炊飯器の前でキラキラと目を輝かせながら、お米が炊けるのは今か今と待ちわびており、そんな花陽を見て絵里と凜が呟いた。

そしてカレーも完成し、ご飯も炊けると、全員いただきまーすの声と共にカレーを食べ始める。

「美味しい。にこさんのカレー本当に美味しいです。花見の時は食べられなかったけど、ここで食べられて嬉しいです。」

「ま、まあ…!!／／こ、このくらい当然だわ…!!／／」

「やっぱり料理のできる女の子っていいですよ。やっぱりにこさん、いいお嫁さんになれますね。こころちゃんたちの面倒とかもうまいいし。」

「な!?!／／」

にこが以前にツナの家に来た時のことを言われて、当の本人はあの時と同じく顔を赤くしてしまった。

「な、何で私があんなたのお嫁にならなくちゃいけないのよ!?!／／」

「誰もそんなこと言ってますんけど!？」

勝手にここに勘違いされて、ツナはめっちゃくちや驚いてしまった。「り、凜だつて料理はできるようになるにや!だから安心してほしいにやー!」

「え!?!り、凜ちゃんは料理はできるから大丈夫だよね…!?!」

凜は料理苦手であることを気づいていないとツナは今だに思っているの、挙動不審になりながら嘘をついた。

(もう…ツナは優しすぎるにや…!!／／)

以前プレゼントしたクッキーが美味しくないと感じてるにもかかわらず、自分を傷つけまいとするツナの優しさに凜は顔を赤くして、心臓の鼓動が早くなつていった。

そして夕食を食べ終わると、ことりがあることを思い出した。

「そういえばこんな風にみんなが集まって夕食を食べるなんて、合宿した時以来だね。」

「そうやね。あとラブライブの決勝の前日も音ノ木坂学院がっに泊まってみんなでご飯を食べたよね。」

「楽しかったよねー。」

ことりが合宿した時のことについて思い出すと、希と穂乃果も合宿のことについて思い出した。そして他のメンバーも、合宿の時のことについて話し始めた。

すると海未がつい合宿のことに夢中になりすぎて、ツナが話のついていけずに置いてけぼりになっていると思つたのか、ツナのほうを向いて話し始める。

「すいませんツナ君。つい話しすぎちゃって…ツナ君!?!」

「が、合宿…合宿…」

海未が叫び声を上げると、ツナは顔を真っ青にして合宿という言葉、念仏のように何度も何度も繰り返し返し呟いていた。

「ちよつとどうしたのよ!?!顔が真っ青じゃない!」

「ご、ごめん真姫ちゃん…心配させちゃって…」

「べ、別に心配してるわけじゃ…!!／／」

「いや…合宿と聞いたら中3の頃から始まつた夏休み恒例ボンゴレ式

恐化合宿のことを思い出しちゃって…それを思い出したら震えが止まらなくて…」

ツナがそう言うと、やっぱり全員ツナと私たちはなんか違うと思っ
てしまったのだった。

#標的（ターゲット） 213 「穂乃果の悪意なき復讐」

ツナたちは夕食を食べ終えて、片付けを終えた。

「うくん。美味しいー。」

「あ！お菓子だにや！凜にも頂戴！」

「いいよ。」

凜があらかじめ持ってきておいた、お菓子^{ポッキー}を食べて見て頂戴と言うと、穂乃果は凜にポッキーをあげた。

そして

「夕飯も食べ終えたし、何して遊ぶ？」

「何を言っているのですか穂乃果！今日集まったのはテスト勉強する為なのですよ！私たちに遊んでる暇なんて

ないのですよー！」

「だってえ！勉強ばかりしてるから、少しくらい遊びたいよー！」

「いいですか穂乃果！学生の本分は勉強です！何度も言いますが私たちは高校3年生なんです！そんなことを言う暇があったらですね…！」

子供のように、駄々をこねる穂乃果に海未はいつものようにくどくどと説教を始めていた。海未が穂乃果にお説教する光景を見て穂乃果はもの凄く、嫌そうな顔しながら聞いており、他のメンバーは苦笑いしていた。

「そうだよね。やっぱり勉強のほうが大事だよね。」

そう言うとツナは透明なケースに入ったトランプを見ながら呟いた。まだ開封されておらず、おそらく新品の物だと思われる。

「ト、トランプですか…？！」

「うん。勉強ばかりじゃ息が詰まると思ったから、気分転換になるかなって思ってたってきたんだ。トランプなら人数多くてもできるし。でも考えてみれば俺たちは3年生だし、こんなことしてる場合じゃないよね。」

「え、えつと…！」

これを穂乃果が提案すれば再びお説教であったであろうが、想い人であるツナがせっかく用意してくれたとあって、海未は顔中から大量の汗を流しながらツナに何も言えなくなってしまうた。

すると海未はグーの形にした右手を、口の前に移動させてゴホンと咳払いした。

「ま、まあ…ツナ君の言う通り勉強ばかりでは息が詰まっちゃいますし…いいかもしれませんね…!!／／／」

「え…でも学生は勉強が本分ってさつき海未ちゃん言ってたよね…？」

「い、いえ…!!あまり勉強をしすぎるほうが帰って毒になるかもしれないし…!!／／／せっかくツナ君が私たちの為にと用意してくれましたから…!!／／／」

「そ、そう…？」

「そ、そのかわりちよつとだけですからね…!!／／／」

「ま、まあ海未ちゃんがそこまで言うなら…」

ツナは若干、海未の様子が変だということには気づいたが、せっかくやろうと言っているので特にこれ以上、深く聞くことはしなかった。一方で穂乃果たちはツナに甘い海未をジト目でジーツと見ていた。

するとツナは全員の為にお菓子でも買ってこようと言い出し、近くのコンビニに向かっていった。

そしてツナがいなくなったのを見計らって、穂乃果たちは海未を問い詰める。

「海未ちゃん？ツナ君に甘くない？」

「そ、そんなことはありません…!!」

「さつき私に言ってたのは何だったの？」

「あ、あれは穂乃果にだけ言ったことで、別にツナ君には関係ないわけですから…」

穂乃果が問い詰めるも、海未は視線を反らしながら言い訳をして、逃げようとしていた。

これ以上、海未を問い詰めても言い訳して逃げるだろうと思ったの

か、希が言う。

「まあこれ以上、問い詰めるのも可哀想やん。それくらいにしとこうやん。海未ちゃんがツナ君のことをどれくらい好きかわかったんやし。」

「へ、変な言い方しないで下さい希!!／／／」

希が表情をニヤニヤさせながら言うのと、顔を真っ赤にさせながら叫んだ。

すると穂乃果が突然、相槌を打って叫び始めた。どうやら何かを思いついた。

「あ!そうだ!」

「どうしたの穂乃果ちゃん?」

「いいこと思いついたんだ花陽ちゃん!」

「いいこと?」

「うん!このトランプの勝負で負けたらみんなのいる前で、ツナ君に告白するっていうのはどう?」

「「「「こ、告白!?!／／／」」」」」

穂乃果が告白という言葉を口にするのと、希以外全員顔を真っ赤にしてしまった。

「面白そうやね。ウチはええよ。」

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ!!／／／何でそうなるのよ!?!／／／」

「あら?もしかして真姫ちゃん告白するのが怖いん?」

「そ、そんなんじゃないわよ!!／／／というよりも何で告白そんなことしなくちやならないのかって聞いているのよ!!／／／べ、別に私には関係ないけど:!!／／／」

「そうです!!／／／何で告白そんなことをする必要があるんですか!?!／／／」

「いやー。これくらいやったほうが盛り上がるからいいかなー、なんて思ってる。」

海未になぜ告白しないといけないのか、尋ねられると穂乃果は照れることもなく、平然と答えた。

(もしかして穂乃果ちゃん…)

「ここにきて、ことりがなぜこんなこと言い始めたのかということに

ついで気づいた。そう、海未はババ抜きに弱いのである。超つくほどに。

今、穂乃果のささやかな復讐が始まろうとしていた。

#標的（ターゲット） 214 「ババ抜き」

穂乃果の提案により、ババ抜きで負けたらみんなの前でツナに告白するということが決定した。

「い、一応賛成したけど…!!／／／」

「こ、これで負けたらツナに告白…!!／／／」

「し、しかもみんなの前で…!!／／／」

「や、やっぱりどうかしてるわよ…!!／／／」

「だ、誰か助けてー…!!／／／」

一応、穂乃果の提案に賛成したものの絵里、凜、にこ、花陽は顔を赤くしながら、ツナに告白しなければならなくなったことを考えていた。

「みんな大丈夫?」

「大丈夫なわけではないでしょう!!／／／大体、何で穂乃果もことりも平然としているんですか!?!／／／負けたら告白しないといけないんですよ!?!／／／」

「わかってるよー。私もことりちゃんも緊張してるよ。ねーことりちゃん。」

「うん。勿論だよ。」

修学旅行先の旅館や海外のライブでホテルに泊まった時にババ抜きを行った時に、海未はポーカーフェイスができない為、ババ抜きに弱いことを知っている二人は余裕であった。

「怪しい…二人ともまさかイカサマにするつもりじゃないんですか?」

「し、しないよ!ね?ことりちゃん!」

「そ、そうだよ!」

嬉しい^{ツナ}人に告白するといふのにもかかわらず全然緊張していない穂乃果とことりを見て違和感を感じてしまった。別にイカサマをするつ

もりはないのだが二人ともつい、挙動不審になってしまったのである。

そんな怪しい様子の二人を海未はジト目で見続けていたが、ここでタイミングがいいのか悪いのかツナがコンビニから帰ってきた。

「ただいまー。」

「「「「きや!!／／／」」」」

「え!?ど、どうかしました!?!」

ツナが部屋に入ってきた瞬間、穂乃果、ことり、希以外は負けたらツナに告白しなければならぬということを考えていたので、その告白する相手が現れてつい悲鳴を上げてしまった。

そしてこの後、全員輪になると、ツナは裏返しにしたトランプを、みんなに一枚一枚配っていく。そしてトランプを配り終わると、全員トランプの中身を確認していき、同じは数字の物は手札から外していった。

(あ、俺にジョーカーがまわってきた。)

ツナはジョーカーが自分の手札にあることを確認した。

そして準備が整い、ババ抜きが始まる。

「まずは凜ちゃんからだね。」

「よ、よーし…」

花陽は自分の手札を凜のほうに向けると、凜は花陽がジョーカーを持っているのではないか?と思ったのかおそろおそろ手札を引いた。幸い凜はジョーカーを引くことはなく、スペードの2とダイヤの2が揃い、手札を減らすことができた。

そして凜から時計回りに、花陽、絵里、穂乃果、真姫、ことり、にこ、希の順に回っていき、次は海未の番になり、ツナの手札をおそろおそろ引いた。

(あ、ジョーカー引いちゃった…ええ!?)

ツナはジョーカーを引いてしまった海未のほうを見ると、海未は最早世界が終わったかのような顔をしており、誰がどう見ても海未がジョーカーを引いてしまったということがまるわかりであった。

(わかりやすっ!?!ここまでわかりやすい人がいるとは思わなかった

…)

あまりにわかりやすい反応にツナはちよつとだけ引いてしまった。その一方で穂乃果、ことり以外のメンバーは勝てる!と思った同時に、穂乃果がなぜ負けたらみんなの前でツナに告白するということを理解した。

そしてこの後もババ抜きは続いていき、次々と手札がなくなっていく、残るはツナと海未だけになってしまい、お互い手札が2枚ずつという状況になっていた。

(どうして…どうしていつも私が最後まで…まるで私のジョーカーがどれなのかわかっているのかよう…でもみんなイカサマなんてしてる様子はなかったですし…)

こんな状況であつても、海未はなぜみんなが自分のジョーカーに誰も引かないのか、わかっていなかった。

(こ、これでもし負けたらツナ君に告白…!!／／／一体どうすれば…!!／／／ずっと前からあなたのことが…!!／／／って!!／／／そうじゃなくて…!!／／／)

「あの海未ちゃん…?」

「は、はい!!／／／何ですか!?!／／／」

「いや…俺の番だから、引きたいんだけどいいかな…?」

「はっ!／／／すいません!／／／」

そう言うとき海未は2枚のカードを、何回かシャッフルさせると、ツナのほうをに向ける。

「じゃあ…取るね…」

ツナは右のトランプを取ろうとすると、海未はもの凄い嬉しそうな表情になり、このトランプがジョーカーであることがまるわかりな状態であった。そしてツナは試しに左のトランプを取ろうとするともの凄い絶望的な表情になってしまい、そっちがジョーカーでないということがまるわかりであった。

(やっぱりわかりやすすぎる…どうしよう…)

やっぱりわかりやすすぎる海未の反応を見て、ツナはここで右のトランプを取ろうするのがなんか悪いと思い始めてしまった。

そしてツナが取った行動は…

「あ…ジョーカー…」

「え…?」

ツナは海未が可哀想だと思ったのか、わざとジョーカーのトランプを取った。まさかツナがジョーカーを取ると思ってもみなかったので、穂乃果は驚いてしまった。

そしてこの後、海未はツナのハートの8を引いてツナに勝利した。

「か、勝った…ようやく勝てた…今まで全然勝てなかったのに…」

ツナがわざとジョーカーを引いたことに気づいていなかったが、バ抜きで初めて勝てたことに海未は感動で涙を流してしまっていた。

「ま、まさかこんなことになるなんて…」

「ツナ君の優しさを計算にいられてなかった…」

ことりと穂乃果は予想外の海未の勝利を隠すことはできなかった。

「でも海未ちゃん、もう少しポーカーフェイスしたほうがいいよ。最後は全然わからなかったけど、それ以外はすごいまるわかりだったよ…」

「え…?」

ここでツナが海未にアドバイスすると、海未は目を丸くして驚いてしまった。

（今で勝てなかったのは表情に出てたから…じゃあもしかしてツナ君は私の為にわざと負けた…?）

ツナのアドバイスを、自分の為にツナがわざと負けてくれたということに気づいた。

（本当にどこまでも優しいのですから…!!／／最後以外はと言っていましたけど、本当は最後まで顔に出てたんでしょ…!?／／こんなただのババ抜きでも私の為に…!!／／）

ただのババ抜きであるにもかかわらず、ここまで気を遣ってくれるツナに顔を海未は顔を赤くしてしまった。

だがこのツナのアドバイスを、もう一つの謎が解けてしまった。

（ともかくツナ君が負けてたのですから告白する必要はなくなつて…ん?まさか穂乃果が告白をするということを提案したのは私が負け

るのがわかっていたから…?)

ツナのアドバイスによって穂乃果がみんなの前で告白しようと言
い出した理由を理解すると、海未からドス黒いオーラが溢れ出てき
た。

「穂乃果？」

「は、はい！」

ドスの聞いた声で穂乃果を呼ぶ海未。いつもと海未と違うとい
うこと、そして自分がみんなの前で告白させようとした意味を海未が理
解したことを理解した。

「ちよつとお話があります。すぐに終わりますので、ちよつと私と一
緒に外へ出てもらえますか？」

「さ、さあ！気分転換も終わったし勉強を…」

「穂乃果？」

「はい…」

この後、穂乃果は海未とちよつとだけお話しただけという。

#標的 (ターゲット) 215 「感謝」

海未とちよーっただけお話したあと、勉強を再開するツナたち。途中にこが買い出しの時に買っておいた材料で夕食を作ってあげたりと、気をきかせてくれたりした。

そして時刻は夜11時30分をまわり、テスト勉強も終了しあとは寝るだけとなった。

しかしここで問題が発生してしまった。

「後は寝るだけですけど…俺はどこで寝よう…?」

ツナの寝る場所である。もともと絵里の家にツナだけが

泊まりにいく予定だったのが、リボーンのせいで大人数になってしまった為、男であるツナがどこで寝るかという問題が発生してしまっ

た。「本当はエリチはツナ君が同じベッドで寝る予定やったんやろうけど。」

「希!!//変なこと言わないでくれる!?!//」

「さすがにそんなことはしませんよ!!//」

いつものように表情をニヤニヤさせながら希が言うと、二人は顔を真っ赤にさせながら否定した。だがもしツナだけが絵里の家に泊まっていれば、絵里がそんなことをしようと考えたかもしれない。

「しようがないわね。亜里沙の部屋を使わせもらおうかしら。」

「成程ね。亜里沙ちゃんの部屋でウチとツナ君がベッドで寝ればいいんやね。これなら何も問題ないわけやね。」

「どこが問題ないよ!?!//」

「問題しかないよ!!//」

「何、一緒に寝ようと考えてるのよ!!//」

「そうだにゃ!!//」

さりげなく亜里沙の部屋でツナと一緒に寝ようとする希に対して、
にこ、穂乃果、真姫、凜は全力で阻止する。

「とりあえず私の部屋と亜里沙の部屋を使って別れて寝ましょう。亜里沙には後で許可をもらおうわ。」

「あ、俺は1階のリビングのソファでいいですか？さすがに女の子のいる部屋に俺がいるのもアレですから。」

「遠慮せんでもええんよツナ君。少なくともウチと凜ちゃんと、穂乃果ちゃんはマフィアランドに行った時に一緒に寝たんやし、問題ないやん。」

「あ、あれは希さんたちが寝ぼけてただけですから!!／／／事故ですからしょうがないことであって!!／／／」

マフィアランドのホテルで目覚めたら3人がいたことを思い出し、ツナは顔を真っ赤にした。特にあの時の想い人の寝顔を思い出して。

とりあえずこの後、絵里は亜里沙にLINE部屋を使わせてもらっていいかどうか許可を取った。するとすぐに返信が返ってきた。

『全然いいよ。せっかくだしお姉ちゃんとツナさんが一緒に寝てみたら？じゃあお休みなさい。』

11:48

「あ、亜里沙!!／／／また余計なことを!!／／／」

「どうしたんですか絵里さん?」

「な、何でもないわ!!／／／」
「?」

こうして亜里沙の許可も取れ、絵里の部屋に絵里、穂乃果、ことり、花陽、凜が寝ることになり、亜里沙の部屋で海未、真姫、希、にこが寝ることが決定した。

そしてここでツナが気をきかせて、穂乃果と凜の為にボンゴレギアからナッツを出した。

「ガウ。」

「ホノ太郎！／凜丸！」

大好きなナッツが出てきて、二人は目をキラキラと輝かせていた。「前に一緒に寝たいって言って二人とも寝れなかったからどうかなって思ったんだ。ナッツ、今日はこの二人と

一緒に寝てくれる？」

「ガウ。」

ツナがそうお願いすると、ナッツは首を縦に振りながら二人と寝ることを承諾した。

そして寝る準備が整うと、それぞれ部屋に移動していく。

「おやすみツナ君。寂しかったらいつでも来てもええよツナ君。ウチがツナ君が喜ぶようなことたーっぶりしてあげるから。」

「絶対に入って来ないですよ！！／／入ってきたらタダじやおかないんだから！！／／」

最後に希と真姫からそう言われたが、ツナは黙ったまま少し顔を赤くしながら1階へと降りていった。

そして全員、各部屋にて眠り始める。そして3時間ほど経過して全員が完全に寝静まった頃、絵里だけは途中で目が覚めてしまった。

「変な時間に目が覚めちゃったわね…」

部屋の時計を見ながらそう呟くと、絵里は喉が乾いたので一階の台所へと向かっていった。そして冷蔵庫からお茶を取り出し、飲み終えると絵里はリビングのソファで寝息をたてて寝ているツナの様子を見に行った。

「よかった。普通に寝てるようね。」

他人の家なので寝れてないんじゃないかと少しだけ心配していた絵里は、ツナが普通に寝ていたのを見て安心した。

「マフィアの十代目って聞いた時は驚いたけど、こうして見るとどこにでもいる男の子なのよね。」

ツナの寝顔を見て、絵里は微笑みながら呟いた。

「でもいざという時はとっても強くて、カッコいい王子様…！！／／」
そしてマフィアランドでの超死ぬ気モードのことを絵里は顔を赤くしながら思い出した。

「不思議よね。あなたと出会って、わたしは、Sは
全員ツナ君のあなたことを好きになって。わたしは、Sだけじゃない、ツバサさ
んまでツナ君のあなたこと好きになっていったのよね。」

絵里はツナと出会ってからのことを思い出した。

まだ出会って1ヶ月ぐらいとはいえ、たくさんの出来事があったこ
とを。

「ツナ君あなたに出会えてよかったわ。スクールアイドルとしてじゃなく
て、ただの女の子として過ごす楽しさを、そして恋を教えてください。
感謝してもきれないわ。」

寝ているツナにお礼を言うと、絵里は顔をツナの耳元まで近づけ
た。

「おやすみツナ君。」

そう一言だけ言うと、絵里はツナの頬にそっとキスして自分の部屋
に戻っていくのであった。

こうして勉強合宿は幕を閉じた。

#標的（ターゲット） 216 「家出」

勉強合宿も終わって、次の日の日曜日は各々自分の家で勉強をし、並盛高校も音ノ木坂学院も月曜日から水曜日にかけてテストは行われた。

穂乃果もツナ結果はいつもより良かったようである。

そしてテスト3日目が終わって、ツナ、獄寺、山本は下校していた。

「じゃあね山本、獄寺君。」

「おう！またなツナ。」

「失礼します！十代目！」

途中の道で山本と獄寺と別れると、ツナは家へと足を進めていく。

そして10分ほどで家に着いた。

「ただいまー。」

「お帰りツナ。テストはどうだった？」

「いつもよりは手答えはあったよ。」

「そう、なら良かったわ。あ！そうそう！お客さんが来てるわよ。」

「お客さん？誰だろう？」

奈々からお客さんが来ていると聞いて、ツナは疑問符を浮かべてしまった。

そして2階^{うえ}に上がって自分の部屋の扉を開けようとするが…

（一体誰だろう…？まさかリボーンの新しい知り合いとかじゃないよなー…）

またリボーンのマフィア^{変な知り合い}関係者じゃないかと思いつなは、部屋の扉を開けることに少し迷ってしまったが、それでも部屋の扉を開けた。

「お、帰ったかツナ。」

「お邪魔しています。沢田さん。」

「ユニー！」

部屋にいたのはいつものようにカップに注いだエスプレッソを飲

んでいるリボンと、ジツリヨネロファミリーのボスであるユニであつた。

「お久しぶりです沢田さん。花見の時以来ですね。」

「久しぶり…それよりも何でユニが家ウチに？」

「そ、それは…」

「ユニ？」

なぜここにいるのかということを探ねると、ユニは表情を暗くし、顔を俯かせて黙ってしまった。

するとリボンが代わりに、ユニがここにいる理由を答えた。

「家出してきたらしいぞ。」

「家出!?マジで!?本当なのユニ!?!」

家出と聞いてめちやくちや驚いたツナは、本当かどうかユニに尋ねると、ユニは黙ってコクリと首を縦に振った。どうやら本当に家出てきたらしい。

「で、でも何で家出なんてして来たんだよ…?」

「昨日のことです。ジツリヨネロファミリーと有効を結んでいるファミリーとの会談があつたんです。その時に相手のファミリーの一人の女性がYのことを気にいったようで、会談が終わったあと食事に誘つたんです。そしたらYはまんざらでもない反応して…だからおもいきつて家出てきたんです!」

(マジか…まさかユニがここまで大胆なことをするなんて…)

頬を可愛らしく膨らませながら家出をしてきた理由を語るユニ。

それを聞いたツナはユニの大胆さに驚いてしまった。

「で、でも…ファミリーのみんなが心配するんじゃない…」

「ちゃんと書き置きはしてきました。1週間ほどで帰ると。」

「そ、そうなの…?ならいいけど…」

ちゃんと書き置きしたと聞いて、ツナは少しではあるが安心した。

「それにしてもよく一人で来たよね…?」

「家出前日にユニから連絡があつてな。だから俺が協力してやった。」

「お前までユニの家出に協力してたのかよ…」

「まあな。だが普段はジツリヨネロファミリーのボスとして頑張つて

んだ、たまにはそんな肩書きを忘れてただの女の子として過ごさせてやるのも悪くないだろ。」

「まあ確かに…」

「お前は世界最強のマフィアのボスという肩書きは俺が絶対に忘れさせねえけどな。」

「相変わらず俺には厳しいなおい！」

わかっていたとはいえユニと自分への態度が全然違うリボンにツッコミ入れた。その光景を見てユニはクスクスと笑っていた。

「まあとにかくだ。ユニは1週間、家に泊まることになったからな。ママンの許可は取ってるぞ。」

「母さん本当に人が良すぎ…」

居候が5人もいるのにも関わらず、ユニを泊めることに何のためらいのない母に驚いてしまうが、ユニを一人するのも可哀想なのでツナは自分の家のほうが良かったのだと思った。

そして次の日、音ノ木坂学院、穂乃果のクラス。

「えー、今日から1週間、特別体験生として二人の生徒がやって来ることになったー。みんな仲良くするようにー。」

「初めまして、ユニといいます。イタリアから来ました。この通り日本語は話せるので、普通に話してもらった大丈夫です。ですが日本の学校のことにはよくわかりませんので、色々と教えてもらえたら助かります。これから1週間よろしくお願いします。」

なんとユニが音ノ木坂学院に1週間だけ特別体験生としてやって来たのであった。

そしてもう一人は…

「さ、沢田綱吉です…よろしくお願いします…」

なぜか音ノ木坂学院であるにも関わらず穂乃果たちのクラスにい

るツナであった。ユニはともかく、男であるツナがいることにクラス中の人たちがざわつき始めた。

(いくらユニ為とはいっても、まさか男の俺が音ノ木坂学院に来ることになるなんてなー…)

自己紹介が終えて、心の中でツナは嘆いてしまった。

はたして二人は音ノ木坂学院での学校生活を送ることができるのだろうか!?というよりなぜこんなことになったのか、その理由は次回!

#標的（ターゲット） 217 「こうなった経緯」

突如、音ノ木坂学院で学校生活を送ることになったのか。それは昨日の夜に遡る。

「まあ、せっかく日本こっちに来たんだ。ユニお前を音ノ木坂学院の特別体験生として転入させるようにしておいたぞ。ちなみに穂乃果と同じクラスだぞ。」

「本当ですか!? ありがとうございますおじさま。」

「お前いつの間に…」

音ノ木坂学院に行けるとわかってユニは嬉しい表情になる一方でツナはリボーンの手際のよさに驚いてしまっていた。

「え…でもユニって俺より年下じゃないの…?」

「大丈夫だ、書類は偽造した。問題ねえ。」

「問題しかないだろ!」

書類を偽造したと聞いてつつこむツナであったが、何を言っても無駄だと思ったので、これ以上は何も言うことはしなかった。

「まあ、よかったじゃん。穂乃果ちゃんたちと一緒になら大丈夫だし。」

「何言ってるんだツナ? お前も行くんだぞ。」

「へ…?」

「ユニの護衛だ。もう手続きはすんである。」

「いやいやいやいや! そう言う問題じゃないだろ! 音ノ木坂学院は女子高だぞ! 俺が行けるわけないだろ!」

「問題ねえ。ちゃん理事とことりの母長には俺から話をつけてある。ユニは日本の学校が初めて不安だろうから、知り合いのツナと一緒に行くって言ったら、「ツナ君なら大丈夫ね」って言って、喜んで了承してくれただぞ。」

「何で了承してるんですか…前に音ノ木坂学院がっこに入れてくれただけでも奇跡みたいなものだったのに…」

いくら自分がユニの知り合いとはいえ、女子高に自分を入れること

を許可した理事ことりの母長と音ノ木坂学院は大丈夫なのかと思ってしまった。「というか俺じゃなくていいだろ！クロームなら女の子だし、護衛もできるだろ！」

「忘れのか？ユニは予知能力を持ってるんだぞ。その力を狙う奴らもいるかもしれないねえしな。だからお前をユニと一緒に音ノ木坂に行くようにさせたんだ。」

「理由はわかったけど…女子高に1週間かー…」

自分がユニの護衛の為に行くことに納得はしたものの、女子高に1週間、過ごすというものはもの凄い大変なんじゃないかと思っただけである。

「すいません沢田さん…私のせいでこんなことになってしまっ…」

「ううん、大丈夫。まあ、なんとかなるよ…多分。」

半分自信はなかったが、今まで死地に比べれば、大丈夫だなと、そう思うことにしたツナであった。ある意味女子高の中で過ごすのは、ある意味死地といえれば死地であることには間違いはないのだが。

そして場面は戻り、音ノ木坂学院。ホームルームH Rが終わった後の10分の休憩の間に、音ノ木坂学院に来た理由をユニは話した。

「というわけわけで、音ノ木坂学院に特別体験生として私と沢田さんが来たんです。」

「嫉妬で家出ですか…」

「ユニちゃん大胆だね…」

「本当…」

ユニから事情を聞いた海未、穂乃果、ことりは色んな意味で驚いてしまった。一応この会話はユニがジツリヨネロファミリーのボスであること、予知能力のことを知っている穂乃果、海未、ことりだけに

話している。

「というわけでまあ…よろしく…男の俺がここにいるなんて戸惑うかもしれないけど…」

「そんなことないよ。ずっとツナ君と一緒に勉強できたらいいなーって思ってたもん！むしろ嬉しいよ！」

「え!?!/!/」

一緒に勉強たらいいと想い人に言われて、

ツナは少しだけ顔を赤くしてしまった。

「とりあえずこれからよろしくお願いします。」

「うん!よろしくねユニちゃん!」

「わからないことがあったら、頼ってください。」

「私たちがサポートするよ。」

「ありがとうございます。」

快く歓迎してくれた3人に、ユニはお礼を言った。

すると穂乃果のクラスの前に人集りができる。

「あれがイタリアから来た女の子と、高坂先輩の彼氏…?」

「かわいいー。」

「意外と普通な人だー!」

「初めて見た…」

「え!?!/!/」

いきなりツナを見て彼氏だと言いだめた、女子生徒たちの声を聞いてツナと穂乃果は顔を真っ赤にしてしまった。

この後、ユニとツナ目当ての女子生徒がたくさん集って大変だったという。ちなみに穂乃果の彼氏が学校に來ていると流したのは、何を隠そうヒフミトリオであった。

#標的（ターゲット） 218 「進路」

10分間の休憩を終えて、まず1時間目の授業から始まった。1時間目は総合の授業であり、進路のことについてであった。

「もうお前らは高校3年、進路のことを決めなくちゃならない時期だ。というわけで今日の総合の授業はについてだ。今からプリントを渡すから、現段階で考えてる自分の進路について書いていってくれー。一応、このプリントは授業終わった後に提出してらうからなー。」

そう言うと穂乃果たちの担任である、山田博子先生が進路についてのプリントを配っていく。

そしてプリントを配り終わると、山田先生はツナとユニに言う。

「沢田とユニは音ノ木坂学院には1週間しかいないが、一応提出してもらうからな。」

「はい。」

「わかりました。」

山田先生に言われて、ツナとユニは返事をした。

「あと友達と相談するのは全然構わねえが、友達が行くって言うから同じ進路にするとかはナシだぞ。自分の進路だからな、ちゃんと決めるよ。後わかんねえことがあったら遠慮なく先生に相談しろー、いいなー?」

山田先生がそう念を押すと、生徒たちは、はいと返事をした後、仲のいい友達の席へ移動し、進路のことについて話し始めた。

そしてツナとユニは、穂乃果たちと一緒に進路のことについて話し始めた。

「進路かー…やっぱり進学かなー…?」

「ツナ君、進学するんだ。私はてっきりボンゴレファミリーを継ぐつて、書くんだと思ってた。」

「書かないよ！それだけは絶対に！俺は継ぐ気はないからね！」

穂乃果に勝手にボンゴレファミリーを継ぐと思われたことにツナは驚いてしまった。

「穂乃果さんは、実家が和菓子屋だと花見の時に聞ききましたが、家業を継がないんですか？」

「う〜ん…別に家を継いでもいいとは思ってるんだけど…でも他に道があるんじゃないかと思ったりしてるんだよね…あ！そうだ！ユニちゃんの予知能力でわからない？私が将来どうなってるか!？」

「え…?」

「穂乃果…」

「穂乃果ちゃん…ユニちゃんの予知のうりよくに頼るのはさすがにダメだと思
うよ…」

「ハハハ…」

穂乃果の無茶な願いに、ユニは戸惑ってしまい、海未とことりは呆れてた表情になっていた。ツナはただただ苦笑いすることしかできなかつた。

するとツナは海未とことりの進路のことについて尋ねた。

「海未ちゃんと、ことりちゃんはどなの？進路とか決まってるの？」

「私は実家を継ぐつもりです。私の実家は日本舞踊なので。」

「私はファッション関係の大学に行くつもりだよ。」

「二人ともちゃんと進路のことについて考えてるんだね。やっぱり凄いなー。」

二人の進路先について聞いて聞いて、ツナはただただ感心した。

「ユニちゃんはマフ…じゃなくて…その…ジョーロファミリー？を継ぐの？」

「穂乃果ちゃん、ジョーロファミリーじゃなくてジツリヨネロファミリーだよ。」

「そう！それ！」

「はい。私は最初からそのつもりです。さすがにジツリヨネロファミ

リーを継ぐとは書けないので、イタリアにある大学を何個か書くつもりです。」

ツナがジツリヨネロファミリーだということを伝えると、穂乃果はツナを指をさして答えると、ユニはそれが可笑しかったのか、クスクスと笑いながら自分の進路について答えた。

「穂乃果ちゃんはまだ決めてないからアレだけど、海未ちゃんは実家を継ぐことが嫌だと思わないんだね。」

「ええ。稽古は厳しかったですが、家元を継ぐことが嫌だと思ったこととはありません。」

「凄いなー。じゃあもし家を継がなかったら、海未ちゃん、このプリントになんて書いてたんだろう?」

「そうですね…家を継がなかったら私は…」

ツナに言われて海未は顎に手をやりながら、考え始めた。

(ツナ君のお嫁さん…でしょうか?)

ツナの問いについて考えた結果、海未の出した答えはツナのお嫁さんになることであった。

そして数秒後…

(って!!//何でこんなことを!?!//別に家を継いでもツナ君と結婚はできて…!!//そうじゃなくて!!//進路のこと考えるのに、何でツナ君と結婚することを私は考えてるんですか!?!//)

海未は自分がなぜツナのお嫁さんになりたいということを考えてしまったことが恥ずかしくて、顔を真っ赤にさせていた。というよりも最早、進路というよりはただの願望である。

「海未さんらしい進路ですね。素敵ですね。」

「な!?!//」

ユニの発言から、海未は自分の今考えていたことを読まれたのかと思っただのか、恥ずかしさのあまり顔をさらに赤くしてしまった。

「え?もしかしてユニ、わかったの?海未ちゃんの進路のこと?」

「本当に!?!私、知りたい。」

「私も。」

「ダメです!!//そ、それだけは!!//」

海未が家を継がなかったら、何と書いてたかということユニが理解したのを聞いて、ツナ、穂乃果、ことりは興味を持ったが、海未に阻止されてしまった。

このあと、海未はプリントにツナ君のお嫁さんと書いてしまったが、すぐに消したのであった。

ちなみに穂乃果はツナ君と穂むらの経営、ことりはツナ君の専属のメイドとプリントに書いたが、すぐに消したのだった。

#標的(ターゲット)219 「音ノ木坂学院臨時英語教師」

1時限目の総合の授業が終了し、次は英語の時間となった。そして10分間の休憩に入っていた。

「次は英語かー。俺、英語は特に苦手なんだよなー。」

元々ツナは勉強は苦手だが、その中でも英語の授業は特に苦手なのであり、もの凄い嫌な表情になっていた。

するとことりがずっと気になっていたことを、呟いた。

「そういうえばユニちゃんのそうだけど、ツナ君の知り合いには外国の人が多いけど、全員日本語が上手いよね。」

「はい。他の国の同盟ファミリーとの会談があったりするので、多くのマフィアは他の国の言語を喋れる人が多いんです。それと初代ボンゴレファミリーのボスで、沢田さんの先祖であるボンゴレ^{ファミリー}I世が日本好きだったというのも影響しているんです。」

「ツナ君のご先祖様ってボンゴレプリーモって名前なんだ。」

「違うよ穂乃果ちゃん。プリーモっていうのはイタリア語で1世、つまり初代のことをいうんだよ。」

「へー、そうなんだ。」

ボンゴレプリーモの本当の意味教えてると、穂乃果はそう言いながら納得した。

「ちなみにユニは、どれくらい話せるんですか？」

「私は8カ国語ですね。」

「『『8カ国!?!』』』」

8カ国と聞いて、穂乃果、海未、ことり、そしてツナまでもが驚きの声を上げてしまった。

「ちなみにボンゴレ独立暗殺部隊である、ヴァリアーは16カ国喋れるそうですよ。」

「そ、そんなに!?! どうしようマフィアになるには、そんなに勉強しなくちやいけないんだね…」

「穂乃果ちゃん!?! 何か変なことを考えてないよね!?!」

表情を暗くさせて、心なしかがっくりしているような穂乃果を見て、ツナは穂乃果がマフィアになろうと考えているのではないかと思ひ、驚きの声を上げた。

そうこうしているうちに、授業開始のチャイムが鳴り、全員席に着き始めた。

すると廊下から、聞き覚えのある声が聞えてきた。

「いでっ! 音ノ木坂学院の廊下も滑るな!」

「あ、あれこの声って…」

廊下から聞えてくる声を聞いて、ツナはもしかしてと思ってしまった。ツナだけでなく、穂乃果、海未、ことり、ユニ、そしてヒデコ、フミコ、ミカの3人もツナと同じことを思っていた。

そして教室の扉が開かれ、そこに現れたのは…

「つたく。初日、早々しまらねえぜ。」

「やっぱりディーノさん!」

「「「「きゃー!」」」」

眼鏡をかけ、英語の教科書を右手に持ったディーノであった。ディーノが教室に入った瞬間、クラス中から悲鳴上がった。

「今日から1週間、お前らの英語の担当になったディーノだ。よろしくな。」

「すっごいイケメン!」

「外人!?!」

「1週間といわず、ずっといてー!」

ディーノのあまりのかっこよさに、クラス中の女子たち騒ぎだしてしまった。

「やっぱりディーノさんだ。前は穂むらにに来てくれたけど、今回は音ノ木坂学院に来てくれたんだ。」

「でもどうして音ノ木坂学院に来たんでしょう。…?」

「もしかしてツナ君と、ユニちゃんと関係あるのかな?」

「そうだと思います。おそろくりポーンおじさまの意向でしょう。」

ユニはディーノが音ノ木坂学院に来たのは、自分の護衛の為にリポーンが、ディーノの派遣したのだということを理解した。

「んじやまあ、さっそく授業を開始して…」

「ディーノ先生つてどこの出身なんですかー!？」

「いくつですかー!？」

「趣味とかありますー!？」

「彼女とかいるんですかー!？」

「お、おい…お前ら…」

クラスの女子たちが、次々とディーノのことについて質してきて、当の本人も戸惑の様子を隠せなかった。そしてまりの質問攻めに、授業どころではなくなってしまうていた。

「やっぱディーノさん、女子から人気あるなー。」

「そういう沢田さんも、モテてますよね。私、知ってますよツナさんを好きだという女性を。」

「え？俺が？誰に？」

「9人の女神…」

「ユニちゃん!？」

「ダメです!!／／それ以上は!!／／」

「そうだよ!!／／それを言ったらツナ君の好きな人に悪いよ!!／／」

ユニが、sのメンバーが好きだということを言いそうになったので、穂乃果、海未、ことりは慌ててユニの言葉を遮った。9人の女神と聞いてもなお、ツナは誰のことかわからず、疑問符を浮かべていた。

そして結局、英語の授業があまり進まないまま終わってしまった。

そしてなんとか授業が終わったあと、人の少ない場所に移動してディーノと話す。ディーノはリポーンの命令でユニの護衛として来たということ伝えた。

「やっぱりそうだったんですね。わざわざありがとうございます。」

「気にすんなユニ。俺も丁度、仕事が貯まって気分転換したかったと

ころだったんでな。穂乃果、授業終わったら、和菓子を買いに穂むらおまえのいえに行くからな。」

「いつもいつも、ありがとうございます。お母さんが喜ぶなー。」

(完全にディーノさんは穂むらの常連になってる…)

また穂むらに和菓子を買いに行く聞いて、ツナはディーノが穂むらの和菓子をどれだけ気にいつているか?と

思ってしまった。

「そうだった。リボンから、お前ら二人に渡す物があるんだった。ほらよ。」

そう言うときディーノは、ツナとユニに綺麗に畳まれたエプロンを渡した。

「エプロン?」

「今日の5、6時間目に調理実習があるからこれを二人に渡したおいてくれて、リボンに言われてな。ボンゴレが特殊な素材で作った、防弾エプロンだ。」

「そこまで!?!」

「家庭科の授業ですよね!?!」

「普通のエプロンにしか見えない…!」

「あ、ありがとうございます…!」

ディーノから防弾エプロンと聞いて、ツナ、海未、ことりは驚きの声を上げてしまった。ユニは複雑な気分になりながら、エプロンをくれたことにお礼を言った。

「後その…家庭科の授業にも臨時の教師が来ることになってるんだ…俺たちがよく知ってる人物が…」

「ま、まさか…」

ディーノの言葉にツナはもの凄い嫌な予感がしてしまった。たぶんあの人物だということに…

#標的（ターゲット） 220 「昼休み」

午前の授業が終わり、昼休みを迎えた。ツナとユニは穂乃果たちと、校庭にて昼食を食べていた。

「うくん。今日もパンが美味しい！」

「本当に毎日毎日、昼食は決まってパン…よく飽きませんよね…」

「ええ!? そうなの!?!」

毎日、パンばかり食べていると聞いてツナは驚きの声を上げてしまった。

「美味しいですね、このパン。」

「でしょ! さすがユニちゃんわかってる! これ私のイチオシのパンなんだ!」

「イチオシも何も、そのパンしか食べてないよね穂乃果ちゃん…」

穂乃果がイチオシと言ったことに、ことりはツツコミをいれた。

「あー! 本当にツナとユニちゃんだにや!」

「う、噂は本当だったんだ…」

「本当にどうなってんのよ…」

ツナたちの前から凜、花陽、真姫が手に弁当持ちながらやってきた。

「凜さん、花陽さん、真姫さん、お久しぶりです。」

「久しぶりだにや! ユニちゃんが音ノ木坂学院に來たって聞いた時は驚いたけど、会えて嬉しいにや!」

「はい、私も凜さんに会えて嬉しいです。花陽さんも真姫さんも元気そうでなによりです。」

「まあ嬉しいけど…それよりも何でツナがいるのよ! 噂にはなってるから知ってけど!」

「まあ…そうなるのよね…」

真姫の正しい反応にツナが呟いた。

するとツナが音ノ木坂学院にいることを説明した。

「ということなんだ。」

「ユニちゃんこのがっこの護衛の為だったんだ。だからディーノさんも音ノ木坂学院に…」

ツナとユニが音ノ木坂学院に来た理由、そして臨時教師としてディーノがいた理由を花陽は理解した。

「それにしても嫉妬で家出なんて…」

「それにしてもユニちゃんにも好きな人がいたなんて、初めて知ったにや…」

ユニに好きな人がいたということに、凜と真姫は驚いてしまった。

「いくらユニの護衛の為だとはいっても、ツナが来なくてもいいじゃない…!!／／もつと他にいたでしよ!!…／／／／」

「ツナに会えて嬉しいクセに。」

「凜!!／／／変なこと言わないでくれる!!／／／」

「まあ音ノ木坂学院しよに来るなんて思いもよらなかつたけど、でも俺もみんなに会えて嬉しかったよ。」

ユニの護衛とはいえ、音ノ木坂学院しよに

来て穂乃果たちがいるとは、自分だけ学校生活を送ることに不安を感じていたツナであったが、最早そんな様子も見られなかつた。一方でユニも日本の学校生活で多少、不安なところがあつたがその様子は今は見られなかつた。

「とてもいい学校ですよね、音ノ木坂学院って。生徒の人みなさんとっても初めての学校生活で、右も左もわからない私を色々とサポートしてくれて。」

音ノ木坂学院の校舎を見ながら、ユニはそう呟いた。

「ねえユニちゃん！アルパカ見に行こう！」

「アルパカですか…?」

「音ノ木坂学院このがっこってアルパカいるんだ。」

「うん！すつごくモフモフしてて可愛いんだよ！」

アルパカがいると聞いてユニとツナは驚くと、ことりはそのアルパカが可愛いということを主張した。

「花陽ちゃんがアルパカの世話をしてるんだよ。」

「そうなんだ。花陽ちゃん凄いな。」

「そ、そんな!!…／＼／＼大したことはないですよ!!…／＼／＼」

穂乃果から花陽がアルパカの世話をしていると聞いて、ツナは花陽のことを誉めると、花陽は顔を赤くしてまんざらでもない表情であった。

この後、ツナとユニは穂乃果たちの案内のもと音ノ木坂学院にいるアルパカを見に行った。ユニはアルパカになつかれたが、なぜかツナだけは噛まれてしまったのであった。

#標的(ターゲット)221 「音ノ木坂学院臨時家庭 科教師」

昼休みが終わって、ツナたちは家庭科室に集合した。

そして2時間が終わった後に、ディーノが言っていたように家庭科の授業にも臨時の教師がやって来た。

「臨時家庭科教師のビアンキよ。よろしく。」

「やっぱりビアンキか…わかつてはいたけど…」

自分の予感が当たってツナは絶望的な表情になってしまった。穂乃果、海未、ことり、ユニも花見の時の大惨事を思い出して、どうなるのだろうか?と思えば不安の様子を

隠せていなかった。その他の生徒はビアンキを見て美人だとか、今日は臨時教師が多いなどヒソヒソと話していた。

「今日はロールケーキを作るわ。材料と作り方は黒板に書いてある通りよ。わからないことがあったら私に聞きなさい。」

((聞いたらもう終わり…))

聞いたらどんなに美味しく仕上がっていても、全てが終るのでツナたちは、絶対に自分たちの力だけでなんとかしようと心に誓った。「それと最後に私から料理を作るのに大切なことを教えてあげるわ。それは愛よ!」

目をカッと見開いてビアンキがそう言った。

さらにビアンキは続ける。

「当たり前だとか、普通だとか、何を言っているの?とか思うかもしれないわ。でも愛の力は偉大よ。この時間だけでもいいから、好きな人の為、いない場合は家族でもいいわ。自分の大切な人のことを思いながら作ってみほしいの。」

そう言うと、生徒たちはビアンキの言葉に感激したのか拍手を送った。これにはツナたちもビアンキに拍手を送った。

そして調理実習が始まった。ツナとユニはヒデコ、フミコ、ミカと共に調理を初めていく。

「ユニちゃんは料理とかできるの?」

「はい。大丈夫です。」

「ツナ君は?」

「えつと…俺は全然…」

ヒデコが料理ができるかどうか二人に尋ねると、ユニはできると答えるが、ツナはできないと答えた。

「まあビアンキ先生が言っただように、愛の力があれば大丈夫だよ。穂乃果を想う気持ちがあれば。」

「そうだね。穂乃果を俺の彼女にしてやるんだ!と思う気持ちがあれば大丈夫だよ。」

「ち、違うから!!／／誤解だから!!／／」

ミカ、フミコが表情をニヤニヤさせながらそう言うと、顔を真っ赤にしながら否定した。顔を真っ赤にしたツナを見てユニはクスクスと笑っていた。

「名前を聞いただけで顔が真っ赤ね。まだまだ子供ねツナ。」

「う、うるさいよビアンキ!!／／」

「あれ?ツナ君ってビアンキ先生と知り合いなの?」

「ま、まあね…」

殺し屋であり、ポイズンクッキングの才能があるということを使うのはまずいと思ったのか、ツナはビアンキのことを3人に詳しく言わなかった。

その一方で穂乃果、海未、ことりはツナのことを考えすぎてしまっていて、このミカやフミコの言ったことは聞えていなかった。

するとヒデコがユニに尋ねる。

「ユニちゃんは、好きな人とかいないの?」

「私ですか?いますよ。だからその人のことを考えながら作ろうと思っってます。」

「へー、そうなんだー。どんな人なの？」

「年上？年下？」

「えつとですね…」

フミコとミカが尋ねると、ユニはγのことを話していった。

「年下なのにツナとは大違いね。」

「よ、余計なお世話だよ！」

ビアンキにそう言われて、ツナは反論した。

だが想い人の名前が出るだけで顔を真っ赤に對して、好きな人のことを聞かれても動揺せず^{ほのか}に答えるユニを見て、少し自分が情けなく思ってしまった。

そして全員ロールケーキが完成し、完成したロールケーキを食べていると。

「沢田さん、このロールケーキすごく美味しいです！」

「あー本当だー！これすっごく美味しい！俺たちが作ったのこんなに美味しいかったんだー！」

「違ふよツナ君。それはビアンキ先生が作ったのだよ。さつきビアンキ先生が自分の作ったロールケーキを、みんなに配ってたよ。」

「な!？」

ミカからこのロールケーキがビアンキが作った物と聞いて、ツナは衝撃の顔になってしまった。

ビアンキは作った料理が全て毒料理になるポイズンクッキングであるが、その中には食べ瞬間はもの凄く美味しいのだが、時間差でポイズンクッキングが発動する、3時間殺しがあるのだ。

そして3時間後、この調理実習を受けた生徒は全員、ビアンキのポイズンクッキングの餌食となるのだった。

#標的（ターゲット） 222 「新たなメイドの誕生」

ツナとユニが音ノ木坂学院にやって来て、なんやかんやで3日目を迎えた。

授業が全て終わって、放課後の時間となった。

「穂乃果ちゃん、海未ちゃん。今日はバイトがあるから先に帰るね。」

「バイトってメイドカフェの?」

「うん。」

「そういえば、花見の時間におじさまがそんなことを言っていましたね。」

ユニは花見の時に、リボーンがことりのプロフィールを言っていたことを思い出した。

「もしよかったらユニちゃんも、来てみる?」

「いいんですか?」

「うん。全然いいよ。」

「じゃあ、お言葉に甘えてもらえます。」

「ユニも行くなら、じゃあ俺も。」

ユニが行くと言ったので、一応ツナも護衛ということもありことりのバイト先に行くことを決意した。

「じゃあ私も!」

「穂乃果あなたはダメです。」

「えー!?!何で!?!」

「生徒会の仕事があるからに決まっていますでしょう。ことりは昨日のうちにならんと、今日の分の仕事を終わらせているんですから。」

「ちよ、ちよつとだけ…」

「ダメです。」

なんとかツナたちと一緒に遊びに行こうと海未を説得しようと頑張る穂乃果であるが海未には全く効果がなかった。

「ツナ君…」

「え、えつと…」

海未を説得するのが無理だということを理解した穂乃果は、目を潤わせながらツナに助けを求めた。突然、想い人がそんな表情で助け求めてきたので、ツナは戸惑ってしまった。

「さすがに生徒会の仕事をサボるのは…」

「ええ!? そんなあ!」

さすがに生徒会の仕事をサボるのはまずいと思ったので、ツナがそう言うのと穂乃果は絶望的な表情になってしまった。

(な、なんだろう…もの凄い心が痛い…)

絶望的な表情になって穂乃果を見てツナは、もの凄い心を痛めてしまった。

そして心を痛めつつも、ツナ、ユニ、ことりはメイド喫茶へと足を進めて行った。

そして音ノ木坂学院から歩くこと、15分。秋葉原にあることりのメイド喫茶に着いた。店内に入ると、ツナとユニは椅子に座り、ことりはメイド服に着替えにいった。

「ここがメイド喫茶なんですか…」

初めてのメイド喫茶にユニは辺りをキョロキョロを見回していた。

「そっか。ユニはメイド喫茶とか初めてなんだよね。」

「はい。日本にメイド喫茶というのがあるのは、聞いたこちがあつたんですけど…そういう沢田さんは来たことあるんですか?」

「まあね。でも来たことあるのは一度だけなんだけどね。穂乃果ちゃんたちに出会わなかったら、メイド喫茶に来ることなんてなかったかな。」

そしてしばらく会話していると、二人の前にメイド服を着たことりがやって来た。

「お待たせ。ツナ君、ユニちゃん。」

「とつても素敵です。ことりさん。」

「ありがとうユニちゃん。」

「やっぱりことりちゃんにはメイド服そのかっこうが似合ってるよね。ことりちゃん可愛いから何着ても似合ってるけど、メイド服そのかっこう一番可愛いよ。」

「!!／／／」

初めてツナがメイド服姿の自分を見た時と、同じようにまた可愛いと言ってもらえたことに、ことりは顔を真っ赤にしてしまった。するとユニがことりに尋ねる。

「メイド喫茶でアルバイトしているのは、ことりさんだけなんですか？」

「うんそうだよ。でも一回だけ穂乃果ちゃんと、海未ちゃんもメイド喫茶でアルバイトしたことあるんだよ。」

「穂乃果ちゃんがメイド喫茶で…ということは穂乃果ちゃんもメイド服を…」

「ツナ君？何か言った？」

「な、何でもないよ!!／／／気にしないで!!／／／」

「?。」

少しだけ顔を赤くし、挙動不審な様子 of ツナにユニとことりは疑問符を浮かべていた。

「あーそうだ！ユニちゃんもメイド服着て、私と一緒に働いてみない？」

「え…？私がですか…？」

突然のことりの提案にユニは戸惑いを隠すことができなかった。がこの10分後

「お帰りなさいませ、ご主人様。」

ユニはメイド服を着て、メイド喫茶で働いているのであった。

のちに秋葉原にてユニは、幻のメイド通称ユニリンスキーと呼ばれるのであった。

#標的（ターゲット） 223 「意外な展開」

ユニの活躍よって、前にことりとナッツと一緒に働いた時のように店は大繁盛となった。途中、ツナはトイレにてこっそりとボンゴレギアからナッツを出し、ナッツも二人と協力し、ナッツは再びメイド喫茶に大きく貢献した。

そして店も一旦落ち着き、メイド喫茶での、ことりのバイト時間も終わった。

「お疲れ様ユニちゃん。どうだったメイド喫茶でのバイト？」

「最所は何をするか不安でしたが、やってみたらすごく楽しかったです。」

「よかった。急に私が提案したから、どうかと思っちゃったから…」

ユニがメイド喫茶のアルバイトを楽ししいと、言ってくれたことに安堵の表情を浮かべた。

「それとツナ君。店長さんがものすごく感謝してたよ。またお店に貢献してくれて、ありがとうって。」

「い、いや…俺は別にお客さんとして来ただけというか…ナッツを貸してあげたぐらいだったし…」

ことりから店長からの感謝の言葉を聞いたツナであったが、自分は特にこれといって何もしていないので、ちよつと複雑な気持ちになつてしまった。

するとメイド喫茶に新たに人が入ってきた。

「よう。お前ら。」

「ディーノさん！どうしてここに？」

メイド喫茶に入って来たのは、ディーノであった。ディーノがこのメイド喫茶に入って来た途端、メイド喫茶にいる女性たちがザワザワと騒ぎ始めた。

「穂乃果と海未に聞いて、お前らがここにいて聞いてな。俺もリ

ボーンからユニの護衛として来たからな。けど先生の仕事とかあつて遅れちまつてな。」

「そうだったんですか。」

「にしてもユニどうしたんだその格好？メイド服なんて着て、もしかしてメイド喫茶で働いてたのか？」

「はい。ことりさんに誘われたので、せっかくだからやってみたんです。そしたらとっても楽しくて。」

「そうか。似合ってるぜ。」

「ありがとうございます。」

「まあとにかくだ。ツナ交代だ。ユニの護衛のは俺たちキャツバローネフアミリーに任せろ。」

「え…でも…」

「ツナに任せつきりっていうのも、悪いからな。こういう時ぐらい兄貴分に任せろ。」

「デイーノさん…ありがとうございます。じゃあよろしくお願いします。」

ツナは軽く頭を下げながらデイーノにお礼を言うと、ユニの護衛の交代を了承した。

「私、もう少しメイド喫茶で働きたいんですけど、いいですか？」

「おう、いいぜ。それでツナとことりはどうすんだ？」

「どうするってまだ時間があるし…」

デイーノにこの後のことを聞かれたツナであったが、デイーノがユニの護衛をしてくれるということもあつて、この後の予定が何も無くなつてしまった為、この後のことを何も考えていなかった。

「がここでツナがあることを思いついた。」

「そうだ！ことりちゃん！俺の家に来ない？」

「ええ!?!?!」

「まだ時間あるし、そういうえばことりちゃんは俺の家に来たこととかなかったし、どうかなって思ったんだけど。あ！無理ならいいんだよ！」

「ううん!!?!?!全然、大丈夫だよ!!?!?!むしろ行かせてください

!!／／／

「あ、あ…そう…う…ならいいんだけど…？」

自分の家に遊びに来ないかと誘っただけで、こんなに必死な様子になってしまっていることを見て、ツナは少しだけ引いてしまった。

「ならロマーリオに頼んで、お前らをツナの家まで送って行ってやるよ。ロマーリオたちもユニの護衛で来てるからよ。」

「すいませんディーノさん。何かから何までお世話になっちゃって。」

「気にすんな。それよりユニは後で俺が家まで送って行ってやるからな。」

「わかりました。じゃあユニ、頑張っつてね。」

「はい。おじさまには大丈夫だと伝えてもらえますか？」

「うん、わかったよ。じゃあ行こっかことりちゃん。」

「う、うん…!!／／／」

こうしてことりは、ツナの家に遊びに行くことになったのであった。

余談ではあるがディーノがメイド喫茶に来たことによつて、さらにこのメイド喫茶は大繁盛となったのだという。

#標的（ターゲット） 224 「まさかの展開」

急遽、ことりはツナの家に行くことなり、ディーノの部下であるロマーリオに連れられて、ツナの家に着いた。

そして玄関に入った途端、

「あらあ！またツナに可愛いらしいお嫁さん候補が！」

「お、お嫁さん!?!?!」

「母さん！また変なことを言うなよ！」

いつものように奈々がそう言うと、ことりは他のメンバーと同じく、顔を真っ赤にしてしまっていた。

そしてツナの部屋に案内すると

「君がことり君か？いつもツナがお世話になっているねえ。」

「何やってるんだよ…」

「アハハ…」

作り物の髭とハゲのズラを被り、昔ながらお父さんのコスプレをして新聞を読んでいるリボーンがいた。そんなリボーンを見てツナとことりは呆れてしまっていた。

「ディーノからユニのことは聞いてるぞ。なんかメイド喫茶で働いているんだってな。」

「いい加減、そのコスプレかっこうなんとかしろよ…」

リボーンがユニのことを話すが、昔ながらのお父さんのコスプレを止めようとしなないことのほうが気になってしまっていた。

「せっかくツナの家に来たんだ、今日は泊まっていけことり。」

「ええ!?!?!」

「何、言ってるんだよ！たぶん母さんことだから、許可してるんだろうけど、ことりちゃんが迷惑だろ！」

まさかツナの家に泊まっていけと言われて、ことりはめちやくちや動揺してしまっていた。今までも二度、ツナと泊まったことはあったが、他のメンバーのメンバーを差し置いて、自分だけ泊まったことはな

かった為、ことりは動揺したのだった。

「音ノ木坂学院まではディーノが車で送って行ってるんだから、ことりも乗せてもらえりや問題ねえだろ。」

「いやーそういう問題じゃなくて！いきなりそんなこと言われて、ことりちゃんが迷惑…」

「いいよ…!!／＼／」

「ええ!? いいの!?!」

まさかことりがリボーンの誘いを了承したことに、ツナは信じられない表情になってしまった。

「決まりだな。服はビアンキが作ったのが、あるからそれを着れば問題ないはずだ。」

「ほ、本当にいいの!?!無理してないことりちゃん!?!」

「ううん。全然いいよ。せつかくりボーン君が誘ってくれたから。」

「そ、そう…? ならいいけど…」

意外にもことりが自分の家に泊まることに、何の躊躇いがなかったことにツナは驚いていた。

が

(ど、どうしよう!!／＼／偶然とはいえツナ君の家に泊まることになっちゃった!!／＼／今までもツナ君と一緒に過ごしたことがあったけど、あの時はみんながいたけど…今日は私だけ…!!／＼／正確に言えばリボーン君たちもいるけど…!!／＼／でもツナ君を好きな私たちの中では、ツナ君と二人っきりで泊まるのは私だけ…!!／＼／)

といった具合に、心の中ではツナの家に泊まることができることに興奮しまくっていた。

「ことりちゃん…? なんか顔が緩みまくってるけど…大丈夫…?」

「へ!?!／＼／」

ツナに顔が緩みまくっていることりを見てそう言うと、ことりは慌てて顔を両手で覆って緩みまくっている表情を隠した。

こうしてことりがツナの家に泊まることになるのであった。

#標的（ターゲット） 225 「ユニの予言」

急遽ツナの家泊まることとなったことり。しばらくすると、デイーノの車に連れられてユニが帰ってきた。

そして

「いやーやっぱママンの料理は美味しいよなー。」

いつものようにデイーノも一緒に晩御飯をぐ馳走になっていた。

「デイーノさん…ご飯がこぼれてます…」

「げ!? 本当だ! 何でだ!?!」

そしていつものようにデイーノは、ご飯粒や他の食材を机にこぼしてしまっていた。ことりは部下がいないと運動神経が激減してしまうことを知らないのです、ただ驚いてしまっていた。

「未来の記憶で知ってはいましたが…まさか本当だったとは…」

未来のユニじぶんが記中過去のユニじぶんに送って記憶の中に、デイーノの部下のいない運動神経のなくなってしまうシーンがあつたが、実際見るのは初めてであつた。

「え?…え?…どういうこと?…」

「デイーノは部下がいねえと、ダメダメになっちなまうんだ。簡単にいえば究極のボス体質って奴だ。」

「言われてみれば…」

デイーノはもの凄い完璧な存在だと思っていたが、ここ数日音ノ木坂学院にて、よくこけたり、階段から落ちていたりする光景をことりを思い出した。

「リボーン。またお前はそういうことを…」

「一番の問題は…このことをデイーノさんが自覚してないってことなんだよね…」

「ハハハ…」

ディーノの究極のボス体質のことを聞いてから、ことりのディーノのイメージが変わってしまったのであった。

そしてご飯を食べたあと、時間が過ぎていき就寝時間になってしまった。

「あんまり広くはないけど、俺のベッド使っていいから。だからユニと一緒に寝てあげてことりちゃん。」

「うん。わかったよ。」

「じゃあおやすみ。」

それだけ言うと、ツナは1階へと降りていった。そしてことりとユニは部屋の電気を消した。

（ツナ君のベッド…!!／／／そしてツナ君の匂い…!!／／／）

こちりはツナの匂いが染み付いた布団に、ほんのちよつとだけ興奮し、顔を赤らめていた。

「やっぱり想い人のことを考えてしまうんですね。」

「へ!?／／／いや…!!／／／」

「隠さなくていいんですよ。人を好きになることは、けっして悪いことではありませんから。それに恋バナって私やってみたかったです。ことりさんは沢田さんのどんなところが好きなんですか?」

「ど、どんなところって…!!／／／普段から誰にでも優しく、でも違う一面を持ってて…!!／／／その一面がとつてもかっこよくて…!!／／／」

「そうですね。沢田さんの超死ぬ気モードを見たんですね。確かに普通の女性が超死ぬ気モードを見たら沢田さんの虜になりますよね。」

「ユニちゃんも見たことあるんだ。」

「はい、知っています。いつも眉間にシワを寄せ、祈るように拳を振るう沢田さんの姿を…」

「眉間にシワを寄せて…祈るように拳を振るう…」

ユニの言ったことをことりが復唱すると、自分を助けてくれてた時のツナを思い出していた。そしてユニの言ったとおりであることに気づいた。

「沢田さんはマフィアに不向きな人です。ですがそんな沢田さんだか

「らこそ、多くの仲間が信頼し、命を張り、ことりさんたちのように沢田さんの魅力に惹かれていくんです。」

「…」

「すいません。私ばかり話してしまつて。」

「ううん、大丈夫だよ。まだ時間はあるし、色々と話そう。」

「はい。」

こうしてユニとことりは女子トークを続けていった。

そして話して1時間ほどが経過した。

「そろそろ寝よつか。」

「そうですね。あ！最後に一つだけいいですか、ことりさん。」

「何？ユニちゃん？」

「昨日、ことりさんたちのことを予知をしたんです。そのことを教えようと思ひまして。」

「私たちのこと？」

「はい。正確に言うと、沢田さんとことりさんたちと、そしてA—R I S Eの綺羅ツバサさんとの恋路のことです。」

「ええ!？」

まさかユニの見た予知が、恋のことだとは思わなかつたのでことりは驚きの声を上げてしまったが、夜中だったので慌てて両手で口を塞いだ。

そしてユニは予知で見たことについて話す。

「沢田おおぞらさんは春の訪れと共に、10人の女神の一人と永遠の愛を誓う。

これが私の予知で見た未来です。」

「そ、それって…!?!／／／プロポーズ…!?!／／／」

「おそらくそうです。ですが沢田さんが誰と結ばれるかまでは、わかりませんでした。」

（じゃ、じゃあいづれツナ君と10人のうちの一人と結婚するってこと?!?!／／／）

ことりはユニの予言の内容を聞いて衝撃を受けた。

果たしてこのユニの予言を聞いてことりは、他に女神たちはどうなるのであろうか!?!

#標的(ターゲット) 226 「無自覚なプロポーズ」

そして翌日の午前6時。

「6時か…起きないとリボーンに何されるかわからないし起きるか…」

スマホの電源をつけて、今の時刻を確認するとゆっくりと起き上がると、制服に着替えて台所にへと向かっていく。

「おはよう。」

「おはようツナ。」

「おはようございます沢田さん。」

「遅えぞツナ。」

台所にはすでに椅子に座ったままに奈々、リボーン、ユニ、そしてブーツとしてることりがいた。

「おはよう、ことりちゃん。昨日は眠れた？」

「…」

「ことりちゃん？」

「はっ！お、おはよう！ツナ君！」

「お、おはよう…どうしたの？ブーツとして？」

「な、何でもないよ！ちょっと考え事してただけだから！」

「？」

少しだけ様子がおかしいことりを見て、ツナは疑問符を浮かべたが、特にこれ以上は詮索せず椅子に座った。

そして全員で合掌した後、朝御飯を食べていった。

「隙だらけだぞ。」

「おい、リボーン！それ俺の卵焼きだぞ！」

「さっさと食わねえお前が悪いんだぞ。」

「そんな理屈あるかよ！」

「ほら喧嘩しないの、卵焼きはまだあるんだから。」

奈々がそう言うのと奈々は追加の卵焼きを皿に乗せてテーブルに出してきたので、ツナはこれ以上何もリボンに言うことはせず、卵焼きを食べあと、味噌汁の汁を飲みこんだ。

「あれ？味噌汁いつもと味が違う。というか卵焼きも違ってたような…」

ツナはいつも奈々が作る、卵焼きと味噌汁の味が違うことに気づいた。

「今日の味噌汁はことりさんが作ったんですよ。そして卵焼きは私が作ったんです。」

「へえそうだったんだ。ありがとうユニ、ことりちゃん。」

「いえ、お世話になっていきますので、これくらいはしようってことりさんと一緒に決めたんです。ね？ことりさん？」

「うん。ツナ君の家に泊まらせてもらったし、ツナ君にはいつも色々とお世話になってるから。」

「そうだったんだ。」

いつもと味の違う卵焼きと味噌汁の原因がわかってツナは納得すると、再び箸を動かして朝食を食べていく。

（よかった。ツナ君が私の作った味噌汁を美味いしそうに食べてくれる。）

自分の作った味噌汁を美味しそうに食べてくれている様子を見て、嬉しいという気持ちと、ホツとしている感情が同時に出ていた。

そしてことりは昨日寝る前に、ユニが話してくれた予知のことを思い出した。

『おおぞら
沢田さんは春の訪れと共に、10人の女神の一人と永遠の愛を誓う。』

（ツナ君は一体10、人の中の誰を選ぶんだろう…？その前にこれを全員が知ったらどうなるんだろう…？）

ことりあれからずっとユニの言った予知のことが気になりすぎて、ユニの予知とユニの予知を全員が知ったらどうなるのかを、何度も何度も考えてしまっていた。

「ことりちゃん？」

「はっ！な、何!？」

「いや…またブーツとしてたからさ。もしかして具合が悪いの？それとも悩み事？だったら相談するけど…」

「ううん。大丈夫だよ。」

「本当に？無理しなくていいんだよ？」

「ううん、本当に大丈夫だよ。心配してくれてありがとう。それより私の作った味噌汁どうだった？」

「すつごく美味しかったよ。」

「よかった。喜んでもらえて。」

ことりは直接、味噌汁の味について尋ねると、ツナは笑顔で美味しいと言った。

「母さんの味噌汁に不満があるわけじゃないけど、俺はことりちゃんのが作った味噌汁を毎日飲みたいかな。」

「ええええええええ!?!?!」

「まあ！」

「さ、沢田さん…」

「またやりやがったな…」

ツナが突如、プロポーズじみたことを言い始めたので、ことりは顔を真っ赤にし動揺し始めてしまった。

一方で奈々はツナことりにプロポーズしたと勘違いしたのか両手に頬にやり興奮し、ユニはツナが無自覚でプロポーズ？していたことをわかってはいたものの、驚いてしまい、リボーンは少しだけ呆れてしまっていた。

「私の作った味噌汁を…!!?!?!?!?!」

「ことりちゃん!?!?!?!?!?!?!?!」

ツナのプロポーズ？を受けてことりは気絶してしまうが、いつものようにツナはなぜ気絶したのか理由がわかっていなかったのだった。

#標的(ターゲット) 227 「音ノ木坂学院の騒動」

ツナの無自覚なプロポーズによって、気絶してしまったことりであつたが、なんとか目覚めた。

そしてデイーノが迎えに来る前に、ことりはツナにある者を渡した。

「ツ、ツナ君!!／＼／＼こ、これ!!／＼／＼」

ことりが両手で小包みに入った、弁当を手渡した。

「これって弁当…もしかしてことりちゃんの手作り?」

「う、うん…!!／＼／＼」

「俺の為に?」

「う、うん…!!／＼／＼」

ツナが渡された弁当について尋ねるが、ことりは恥ずかしさのあまり首を縦に振ることしかできていなかった。

「ありがとうことりちゃん。美味しく食べさせてもらうよ。」

ツナが味噌汁の味を聞いた時の笑顔でそう言うと、ことりの表情もぱあつと明るくなった。

そしてツナの家の前に、デイーノとロマーリオが迎えに来ると、ツナ、ユニ、ことりは車に乗って音ノ木坂学院へと向かっていった。

そして車で走ること20分、音ノ木坂学院の校門前に着いた。そして車からツナ、ユニ、ことり、デイーノが車から降りた瞬間…

「きゃーーーーー?デイーノ先生よ!」

「今日もかっこいいわ!」

車から降りた瞬間、校門の近くにいた女子生徒たちがざわざわと騒ぎ始めた。

そして騒ぎはそれだけではなかった。

「ええ!?ツナ君とことりちゃん!」

「ユニちゃんは、ツナ君の知り合いで家に泊まつてるって聞いてたけど…まさか浮気!」

「ええ!?!」

ことりと一緒に登校したのを見て、勝手にツナが浮気したと多くの女子生徒が勘違いしてしまっていた。別にツナと穂乃果は付き合っていないのだが。

そしていつものごとく

「ことりちゃん?」

「こ、ことりが…ツナ君と…」

タイミング悪く、丁度、音ノ木坂学院校門の近くにいた穂乃果と海未に見られてしまっていた。

「ほ、穂乃果ちゃん、海未ちゃん…」

「違うんだよ!!／＼／これは誤解で!!／＼／」

「ことりさんは昨日、沢田さんの家に泊まったんですよ。」

「だから俺たちと一緒に登校したんだぜ。」

「ユニ!?デイーノさん!?!」

「ああああ!!／＼／」

ここでユニとデイーノがなぜツナとことり一緒に登校した理由について、詳しく説明すると、二人はまさかこの二人がバラすは思ってはみなかったもので、動揺してしまっていた。もちろんことりがツナの家に泊まったことを

聞いた穂乃果と海未が動揺しなかったわけもなかった。

そしてこの後、ツナは色んな人に言われて…

「ツナさん。お姉ちゃんに内緒にして、ことりさんと浮気してたんですか?」

「してないからね!?!というかそもそも俺は穂乃果ちゃんとは付き合っていないからね雪穂ちゃん!?!というかわかってて言ってるでしょ雪穂ちゃん!」

雪穂がいちものように、表情をニヤニヤさせながら言っていたので、絶対にわかってていることをツナは理解した。

そして次は…

「ツナさん浮気したって聞いたんですけど、本当ですか?」

「亜理沙ちゃん!違うからね!?!」

「そうなんですか？でも雪穂がそう言ってたし…」

「雪穂ちゃんの言葉を信じちゃダメだよ亜理沙ちゃん！雪穂ちゃんはわかってて言ってるからね！」

「どうせ浮気するなら、お姉ちゃんとしてくれれば…」

「何言ってるの亜理沙ちゃん!?というか何で絵里さん!？」

亜理沙の発言に意味がわからず驚いてしまったツナであるが、この亜理沙の言葉でも絵里が自分のことを好きだということに全く気づくことはなかった。

そして次は

「ツナ君、うちのことりと浮気してるって聞いたけど本当？」

ことりちゃんのおかあさん
（理）事 長にまで知られてたー!？」

「どうなのツナ君？」

「い、いや！アレは誤解なんです！」

「あら、そうだったの。」

（よかった…信じてもらえた…）

「でも本当に浮気してたら、私としては嬉しかったわ。」

「はい!？何、言っているんですか!？」

亜理沙と同じくことりの母も、意味のわからないことを言ったのでツナは驚いてしまった。だがこれでもツナは何も気づくことはなかった。

そして浮気騒動もなんとか収まり、昼休みの時間となった。今日の昼食は穂乃果たちと一緒に、教室で食べることとなった。

「はあ…やつと落ち着ける…」

そう言っていると、ことりの作った弁当の食べ始めた。

「あ！美味しい！ことりちゃんの手作り弁当！」

「ことりちゃんの…?」

「手作り弁当…?」

ついことりが作ってくれた弁当のことをツナ言ってしまう、ことりの手作り弁当という単語に穂乃果と海未は反応してしまった。

結局、昼からもツナが平和に過ごすことができなかったという。

#標的 (ターゲット) 228 「本当にいいの?」

「あー疲れた…」

廊下を歩きながら、ツナは疲労の表情になっていた。穂乃果と付き合ってもいないのに、ことりとの浮気が噂になってせいで、女子生徒に色々と聞かれたせいでツナは疲れてしまっていたのである。

するとピアノの音と、聞いたことのある歌声が聞こえてきた。

「あれ?この声ってもしかして?」

この歌声が聞いたことのある声であったので、ツナはこの歌声が聞こえてくる方向へと、足を進めていった。

「音楽室…まあピアノが聞こえてくるんだからそうだよね…」

音楽室と書かれたプレートを見上げながらそう呟くと、ツナは音楽室の扉をゆつくりと開けた。

「やっぱり真姫ちゃんだ。」

「ツ、ツナ!?何でここに!?!」

「いやー、ピアノと聞いたことがある歌声が聞こえてきたから、真姫ちゃんかなって思ったから来てみたんだだけだ。」

「そ、そうなの…」

「いやー。それにしても綺麗だよねー。」

「なななな何言つてのよ!!///急に変なこと言わないでよ!!///
/そんな言葉に惑わされたくないんだから!!///」

「え?惑わされる?ピアノの音が綺麗だっていう意味だったんだけど
:何か変なこと言ったかな?」

「ま、まぎらわしい言い方しないでよ!///勘違いしちゃったじゃない!!///」

「え?勘違いって何?」

「な、何でもないわよ!!///」
「?」

なぜ真姫が怒っているのかわからずツナは、疑問符を浮かべていた。

そして話題はピアノの話へと変わっていく。

「それにしても真姫ちゃんの歌声は前に聞いたことがあったけど、ピアノは初めて聞いたよ。俺、ピアノとか聞くこととかなかったけど、なんか凄いなー。聞いてて、心の底から癒されるというか。」

「そう？別に普通にやってるだけよ。」

「そうなの？でも俺、真姫ちゃんの歌声も好きだけど、ピアノも好きになっちゃったよ。」

「すすすす好き!?!?!/!/」

「うん、そうだよ。」

「な!?!?!/!/」

ツナが歌声とピアノが好きだと言ったのにも関わらず、真姫は顔を真っ赤にしながら、好きという言葉に過剰に反応してしまっていた。

「ピアノがわからない俺がいうのもアレなんだけど、真姫ちゃんピアノニストとかなれるんじゃない?」

「無理よ。」

「え?」

「私は西木野総合病院を継ぐことが決まってるの。大学も医学部つて。だから無理なのよ。」

「…」

真姫の家庭事情について聞いて、少しではあるが自分と似たような境遇だと思ったのかツナは黙ってしまっていた。

「本当にそれでいいの?」

「え?」

「そりゃ別にお医者さんって立派な仕事だし、真姫ちゃんならなれると思うけど、真姫ちゃんはそれで本当にいいのかなって思ってる。」

「それは…」

真姫はツナの言葉に、何も言えなくなってしまった。

「そういうツナはどうなのよ?マフィアのボスを継ぎたくないのを知ってるけど、継げるのがツナだけなんですよ。」

「まあね。そりゃ、今だってマフィアに継ぎたいとは思わないよ。でも九代目は俺に期待してる部分があつて…それに炎真君に言われたんだよね、継ぎたくないってに言ってるのに、ボンゴレの力を使ってるなんてムシがよすぎるって。確かに友達を護りたいって俺は思ってるけど、継ぎたくないマフィアの力を使つてるというのも事実だし…」

「え…あんなたちって親友じゃないの…?」

「うん、そうだよ。でも出会った頃は炎真君は俺のことが殺したいほど憎まれてたしね。まあ誤解があつただけだね。」

「そ、そうなの…?」

いくら誤解があつたとはいえ殺したいほど憎まれていたのに、ツナと炎真が親友になれていることを真姫は信じられなかった。

「まあとにかく、真姫ちゃんも諦めないでほしいんだ。真姫ちゃんには本当になりたい自分になってほしいって俺は思ってる。」

「ツナ…」

「ごめんね、なんか俺ばっかり話しちゃつて。あ！そろそろ帰らないと！また明日ね真姫ちゃん！」

そう言うツナは慌てて音楽室から飛び出して行ってしまった。

「なりたい自分か…」

この言葉が真姫の運命を変えることになるのは、ツナもそして真姫自信も知らなかった。

#標的 (ターゲット) 229 「海未の手作り弁当」

ツナとユニが、音ノ木坂学院に来てから5日経過した。

午前の授業を終えて、今日の天候が雨の為、教室にてお昼を食べざるおえなくなっていた。

そしてツナはユニと一緒に購買部にて、パンを買いに行こうとした時であった。

「ツ、ツナ君…!!／／ちよつといいですか…!!／／」

「何？海未ちゃん？」

「え、えつとですね…!!／／自分で弁当を作ってきたのですが…!!／／その…!!作りすぎてしまいました…!!／／よかったらツナ君もどうですか…!?!／／」

「な!？」

顔を赤らめながら言う海未の言葉を聞いて、まさか海未がこんな行動に出ると思ってもみなかった穂乃果とことりは衝撃的な表情になっってしまった。

「え？本当にいいの海未ちゃん？」

「は、はい!!／／」

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

「そ、それとよかったらユニも一緒に食べてください!!／／本当にたくさん作りすぎたので!!／／」

作りすぎたと言ったものの、その嘘がツナにバレるかもしれないと思っただけ海未はユニも食べないかと誘ったのである。

だが

「いえ、私はいいです。海未さんが沢田さんの為に作ったお弁当なんですから。私が食べるわけには…」

「え？俺の為？」

「ち、違います!!／／本当に作りすぎただけです!!／／」

だが、海未の考えていることが手に取るようにわかった為、ユニは弁当を作った本当の理由を言うと海未は顔を真っ赤にして否定した。そして本心バラされて顔を真っ赤にしている海未を見て、全く気づいていないツナ以外はクスクスと笑っていた。

そして海未は顔を真っ赤にしながらも、学校指定のカバンから弁当を取り出して、ツナたちの目の前に出した。

五段の重箱を。

「多くない!?!いや確かに作りすぎたとは言ってたけど、さすがに多くない!?!」

まさから段の重箱が出て来るとは思わなかった為、さすがのツナも驚いてしまった。

「重箱…」

「重箱お正月とか、運動会ぐらいでしか使うの見たことないよ…」

ことりと穂乃果もツナと同じく、まさか重箱だとは思ってもみなかったので驚いてしまっていた。

「さすがにこれを全部食べるのはきついな…みんなで食べればなんとかなるかもしれないけど…」

さすがに自分一人では、食べきれないと判断したので、結局みんなで分けて食べることとなった。

そして重箱の一番上の部分の開けると…

「こ、これって…」

ツナが弁当の中身を見ると、ハートの形のおにぎりや、ハートの形をした玉子焼きなど、ほとんどの食材がハートの形になっていた。その後も2段目以降も全部、開いていくが、他の段と食材が違うだけで、ほとんどの食材がハートの形になっていた。まさか海未がこんな弁当を作ってきたとは思いいにもよらなかつたので全員、驚いてしまっていた。

「こ、これ全部、私が!?!／／／」

なぜか一番、驚いていたのはこの弁当を作った張本人である海未であった。おそらくツナのことを思いすぎるあまり無意識にこのような弁当を作ってしまったのだと思われる。

(こ、こんな弁当を作ったら…!!／＼さすがのツナ君も…!!／＼)
この弁当を見ていくら優しいツナでも、引くのではないか、そして自分がツナのが好きだいうことに気づかれるのではないかという不安に海未は押し潰されそうになっていた。

「ハート形の食材ばかり…海未ちゃんって…」

(ああ…もうダメ…)

「海未ちゃんって意外と可愛いところがあるんだね。」

「へ!?!／＼／」

ツナは引くこともなく、ましては海未が好意を寄せていることにも全く気づいておらず、海未の予想が当たることはなかったのだった。

そしてみんなで頑張って食べ終わると…

「美味しかったー。やっぱり料理ができる女の子と魅力的だよ。海未ちゃんいいお嫁さんになれるよ。」

「お、お嫁さん!?!／＼／」

この後、海未がどうなったかは言うまでもない。

#標的（ターゲット） 230 「バレた関係」

海未がツナの為に作った大量の弁当をなんとか食べきった。

まだ昼休みの時間が終わらないので、何をして過ごそうと考えているとツナのスマホのLINEアプリに通知がきた。

「あ、LINEだ。獄寺君からだ。」

LINEをしてきたのは、獄寺であった。獄寺はツナが音ノ木坂学院に来てから、毎日調子はどうだとか、並盛高校^{がっこう}では何があったなどを報告したりしてくれるのだ。

「今日はどんなことがあったんだろ。」

『十代目！音ノ木坂学院に行つて5日目ですがお元気ですか？今日は雲雀の野郎が、並盛高校の生徒を恐喝した他校生徒の集団をボロボコしてましたね。それでその学校の校長が土下座して謝ってました。その写真をこっそり撮ったんで送ります。』

獄寺の文章の後に、他校の校長が理事長である雲雀に土下座している写真があった。

「何でこの写真を送ってるわけ!?というか相変わらず容赦ねえー雲雀さんー！」

獄寺がこんな写真を送ってきたこと、そして相変わらず容赦のない雲雀の行動にツナは驚きの声を上げてしまっていた。

「どうしたのツナ君？何が書いてあったの？」

「な、何でもないよ！今日も元気だつて！」

何て書いてあるかと穂乃果が尋ねたが、さすがにこの写真を見せるのはさすがにどうかと思つたので、何でもないと答えた。

「そういえばずっと思つてたけどツナ君つて、外国の友達が多いよね。ユニちゃんもイタリア人だし。やっぱろイタリアにあるマフ…会社だから？」

「リポーンが来てから、色々来たというか…ほとんどがリポーンの知りあいというか…」

自分の友達に外国人の友達が多い理由を答えるが、ほとんど成行きであった。

「ずっと疑問に思っていたのですが、なぜツナ君は日本人イタリアにあるはずのボンゴレファミリーのボスなのですか？」

「沢田さんのご先祖である、ボンゴレ1世フリーモは早々にボンゴレのボスを止めて、日本に隠居したんです。だから沢田さんがボンゴレファミリーのボス候補なんです。」

「じゃあツナ君って、ハーフなの？」

「そういうことになるね。」

「「えー！？」」「」

ずっと思っていた疑問について海未が尋ねると、ユニが海未の疑問に答えた。そしてユニの言葉からツナが日本人とイタリア人のハーフだという事実には3人は驚いてしまっていた。

すると再び、ツナのLINEに通知がきた。

「誰だろう…あ！ツバサさんだ！」

「「え!？」」

(ツバサ…ということは沢田さんのこと想っている女神の一人…)

まさかツバサからのLINEとは思っていなかった為、穂乃果、海未、ことりは驚き、ユニはツバサという単語を聞いて自分の予知に出してきた人物だということを思い出していた。

『元氣かしらツナ君？今日はライブだったの。ライブは大成功よ。それより今週の土曜日にライブがあるんだけど、見に来ない？もしよかったらチケットを送るわ。』

その文章の下には、楽屋にてステージの衣装を着た自分を自撮りした写真が送られていた。

「ヘーライブがあるんだ。どうしよかな…予定もないし行くなって返事を…あ！」

ツバサに返事しようとしたツナであったが、手を滑らせてスマホを落としてしまった。

すると近くにいたヒデコがスマホを拾うと、LINEの画面を目撃してしまった。

「え!?これって!?綺羅ツバサ!?何で!」

「い、いやーそれはー!」

アイドルであるツバサのLINEを持っていることにヒデコは驚き、そのことがバレてしまったことにツナは焦ってしまった。

すると再び、LINEの通知音が鳴り誰かからLINEが届いて、ヒデコがその画面を見ると驚きのあまりツナのスマホを落としてしまった。

「え、ええ…!?う、嘘でしょ…!」

「ヒデコちゃん?」

もの凄い驚いて様子を見て、ツナは自分のスマホを拾いヒデコが自分のスマホを見て驚いた理由を確認した。

そこには…

「な!?何でこれが!」

ツバサがツナの頬にキスされた写真が送られていた。

そしてその写真の下にはこんな文章があった。

『ちやおつす元気にしてるかツナ。ちよつとお前に送ろうとした写真があつたんだが、間違つて別の写真を送ってしまったな。まあその画像は消せないが、誰かに見られることはねえだろうし、問題はないよな。んじや今日もファイトだよツナ君!』

(絶対にわざとだろー!リポーン^あ一体どこで俺のこと見てるんだよ!というか最後の文を穂乃果ちゃんみたいな言い方にしてるのが、もの凄いムカつく!)

ツナはいつものようにリポーンにはめられてしまっていた。この後、ツバサとの関係がバレた上に、ツバサがツナのことを好きだということが音ノ木坂学院中^{がっ}に知れ渡つたのであった。

#標的（ターゲット） 231 「食欲との戦い」

授業が終わって、放課後の時間を迎えた。穂乃果、海未、ことりは生徒会の仕事に行ってしまった。

これからどうしようかとツナとユニが教室にて考えていると、教室の扉が開かれると凜が現れラーメンを食べに行かないかと誘ってきたので、二人は花陽と真姫と一緒に凜の行きつけのラーメン屋に向かっていた。

「私、ラーメン屋に行くなんて初めてです。」

「ユニちゃん、ラーメン屋に行ったことないのかにや!？」

「イタリアでも日本食が食べられるお店はあるんですが、普段は忙しくて、行くことができないんです。」

そう言うユニであるが、初めてのラーメン屋というかともあってワクワクしていた。

「真姫ちゃんはその時いなかったけど、前に並盛ラーメンにリポーンとフウ太と一緒に食べに行ったのを思い出すよね。」

「そういえば丁度、1ヶ月前ぐらいでしたよね。」

「そうそう、その後、ツナの家に行ってフウ太君のランキング能力で遊んだり、10年後のかよちんが現れたりしたにゃ!」

「あの意味のわからない写真が送られてきた時ね…」

以前、並盛ラーメンに行ったことについて話すツナ、花陽、凜の話を聞いて真姫は3人が空中で浮いている写真を送られた時のことを思い出した。

歩くこと10分、凜の行きつけのラーメン屋に着き、4人は店内へと入ると、椅子に座ってメニューを決め始めた。

「色々、種類があるんですね。」

「そうよ。後はメニューよって味とか、麺の固さとかに違いがあるわ。決まったらあそこで食券を買って、店員さんに渡せばいいわ。」

たくさんあるメニューを見ながらユニは、少しだけ戸惑っていたが、真姫がうまくサポートしていた。真姫も高校になって凜に誘われ

るまで、ラーメン屋に行くことがなかったので、ユニの気持ちが悪かったのであろう。

「凜はいつものしょうゆラーメンと餃子だにや！」

「俺は普通にどんこつラーメンとチャーハンかな。」

凜はいつもの頼んでいるメニューを、ツナもそんなに迷うこともなくメニューを決めた。

その一方で花陽は…

（ど、どうしよう…すぐく食べたい…けどツナさんの前だから!!／＼

／

想い人がいるからか、花陽はメニュー表を見ながら、もつと食べたいという欲求と戦っていた。花見の時と、前にラーメンを食べに行った時はまだツナのことが好きではなかったので何も問題はなかった。マフィアアランドの時にはツナのことを好きになつていたが大食い仲間がいてテンションが上がってたくさん食べてしまったが、今は目の前に想い人がいるのでどうしようかと迷っているのだ。

そして全員、メニューを決めると食券を買い、小説を店員に渡した。

「あれ？かよちん、それだけなの？」

「いつもならもつと食べるじゃない。」

「もしかして体調でも悪いの？」

「ち、違うよ！今日はこれぐらいが、気分的に丁度いいだけだから！」

あまり多く注文していないことに凜、真姫、ツナは心配するが、花陽は慌てて誤魔化した。ユニだけは花陽が我慢していることに気づき、ニコニコしながら花陽のほうを見ていた。

そして注文したラーメンが届き、全員ラーメンを食べ始めた。

「美味しいです。これがラーメンなんですね。」

初めてのラーメンに、右手で口元を押えながら、ユニは絶賛していた。

「気にいってもらえてよかったわね。」

「連れてきて正解だったにや。」

美味しそうにラーメンを食べ終わっているユニを見て、凜と真姫は小声で話していた。

「あれ？もう食べ終わったの花陽ちゃん？」

「え、ええ…まあ…」

「俺なんて半分も食べてないのに…」

ツナが花陽のほうを見ると、花陽はすでにラーメンの麺どころかスープも飲み干しており、チャーハンの皿はご飯粒一つ残っていないかった。あまりの食べる早さに他のメンバーも衝撃的な顔になっていた。

（ど、どうしよう!!／／／ついお腹が空いてたから…!!／／／でもまだ足りない…!!／／／もつと欲しい!!／／／）

花陽はつい勢いで食べてしまい心の中で後悔してしまっていた。

すると花陽のお腹が他の4人に聞えるぐらいなってしまうた。

「かよちん…」

「花陽…」

「あらら…」

（はうううう!!／／／どうしてこんな時に!!／／／）

ここで凜と真姫はなぜあまり注文しないのか理解し、タイミング悪くお腹が鳴ってしまったことにただただ苦笑いしてしまっていた。

するとツナは立ち上がり、そのまま立ち去ってしまった。

（ああ…ツナさん呆れてどこか行っちゃった…）

何も言わずにそのまま立ち去っていったツナを見て、花陽は落ち込んでしまっていた。

だがツナはすぐに帰ってくると、ツナの手には2枚の長方形の小さな紙が握られていた。

「はい、花陽ちゃん。」

「え…これって…」

「食券だよ。ラーメンの替え玉とチャーハンの大盛のね。」

「え？」

「花陽ちゃん、ずっと我慢してたんでしょ？だから買ってきたんだ。」
「で、でも…」

「また太っちゃうと思ってたんでしょ？でも食べたい時には食べなきゃ。それにダイエットしたい時には、また協力してあげるから。」

「ツ、ツナさん…!!／／／」

気を使ってくれたツナに花陽は嬉しさのあまり、少しだけ涙目になっていた。

「沢田さん、さすがですね。」

「やっぱりツナは優しいにや!」

「べ、別に…!!／／／わ、私は優しいなんて思っていないんだから!!／／

／

「?」

ユニ、凜、真姫が自分のことを褒められたが、なぜ褒められたかわからず疑問符を浮かべた。

「でもやっぱり俺はいっぱい食べている花陽ちゃんが一番好きだよ。幸せそうに食べている花陽ちゃんが。」

「す、好き!?!／／／」

「な!?!／／／」

好きという単語を聞いて花陽は顔を真っ赤にし、凜と真姫も動揺してしまった。

そしてこのあとと言うまでもなく、花陽は気絶してしまった。だがこの言葉によって、花陽は幸せのあまりお腹がいっぱいになったという。

#標的（ターゲット） 232 「喫茶店にて」

ツナたちはラーメンを食べ終えて、ラーメン屋を出ると今度はゲームセンター、ボウリング、カラオケなど様々な場所で遊んだらあと、喫茶店にてのんびりとしていた。

「楽しかったです。日本の女子高生って、こんな感じなんですね。」
色々と遊びまわってユニはご満悦の様子であり、バッグの中にはゲームセンターのUFOキャッチャーで取ったぬいぐるみが入っていた。

「ユニちゃん、歌うの上手かったよね。」

「うん。俺も初めて聞いたけど、上手かったよ。」

「何気に高得点を出してたわよね。」

「聞いてて、うっとりしたにや。」

「ありがとうございます。」

カラオケでのユニの歌声の感想を花陽、ツナ、真姫、凜が述べると、ユニは少し照れながらお礼を言った。

するとツナのスマホに電話が入った。

「あ！電話…母さんからだ。ごめんちよつと外に出るね。」

そう言うのと他のお客さんの迷惑なるので、ツナは喫茶店の外に出ていった。

「丁度よかったです。みなさんに話したいことがあるんです。」

「話したいこと？」

「今じゃないとダメなの？」

「はい。沢田さんに聞かれると少しまずいので…」

「…？」

ユニがツナに聞かれたらまずと言うと、凜、花陽、真姫は一体ユニが何を話そうとしているのかわからず疑問符を浮かべていた。

「単刀直入に言います。みなさんは沢田さんのことが好きですよね。もちろん異性として。」

「!!／／／」

まさか恋愛そのことについて言われるとは思ってもいなかったもので3人は顔は真っ赤になっていた。

「どうやら凶星のようですね。」

「ま、待ちなさいよ!!／／わ、私は別に:!!／／／」

「無理しなくていいんですよ真姫さん。自分の気持ちに素直になっってください。人を好きになることは悪いことはありません。」

「だ、だから:!!／／／」

ユニがあまりにも真っ直ぐな目でそう言ったので、真姫は反論することができなかった。

「最近、予知能力で調べたんです。沢田さんが10人の女神の誰と結ばれるのかを。」

「「な!!／／／」」

「それで私を見た予知なんです:「ま、待って!!／／／」」

ユニが予知について話そうとするが、3人は予知を聞くのが怖くなったのか、ユニの言葉を遮った。

「安心してください。誰と結ばれるかまではわかりませんでした。沢田さんが誰と結ばれるかを調べたのは本当ですが、わかったのは沢田さんがいつ告白するかということだけです。」

「そ、そうなの:!!?／／／」

「び、びっくりしたにや:!!／／／」

「そ、それで:!!／／わ、わかったことって:!!?／／／」

わかったのがツナが告白した相手ではなく、告白する時期だということがわかって3人は安心した。

「沢田おそらさんは春の訪れと共に、10人の女神の一人と永遠の愛を誓う。」

「「へ!?!／／／」」

「つまり沢田さんは春の訪に、々sの全員とA—RISEの綺羅ツバサさんの誰かにプロポーズするということです。」

「ニプ、プロポーズ!?!/」

3人が予知の内容をできていなかった為(正確に言うとは理解はしているが、あまりのことに頭が真っ白なっているだけだが)ユニがわかりやすく予知の内容について、説明した。

「ことりさんにはもう伝えていきますから、おそらく穂乃果さんと海未さんには…あ、あの大丈夫ですか…?」

「プロポーズ…!!/」プロポーズ…!!/」

「わ、私たちの誰かがツナさんと…!!/」け、けけけ…!!/」

「た、たとえプロポーズされても私は…!!/」

ユニが心配するも、予知に出てきたプロポーズという単語を聞いて花陽、凜、真姫は顔を真っ赤にしながら、顔を俯かせて動揺していた。

すると電話を終えたツナが帰ってきた。

「ごめん、電話が長くなっちゃった。ってどうしたの?」

帰ってきた途端、急に顔を真っ赤にして黙ったままの状態になっている3人を見て、ツナは疑問符を浮かべていた。一方でユニは苦笑いしていた。

するとツナは凜の顔を見てあることに気づいた。

「凜ちゃん。」

「な、何!?!/」

「動かないで。」

「ツ、ツナ!?!/」

急にツナが自分の顔を見つめながら、顔を近づけてきたので凜は動揺してしまった。花陽と真姫はツナが突然、凜に顔を近づけたことに、動揺していた。

「(み、みんながいる前で…!!/」で、でもツナが望むなら…!!/」

ツナが顔を近づけてきたので、凜は目を閉じて覚悟を決めた。

「よし取れた。」

「へ!?!/」

ツナは頬に凜が頼んでおいた、ケーキのクリームくっついていたので、人指し指で取ってあげると凜は思っていたのと違っ

たので、啞然としてしまった。

花陽と真姫も凜と同じことを思っていた。

「顔にケーキのクリームがついてたよ。でも意外と可愛いところがあるんだね凜ちゃん。」

「か、可愛い!?!/~/」

凜は可愛いという単語に過剰に反応してしまい、顔を真っ赤にしてしまった。

するとツナは頼んでおいたオレンジジュースを飲むが…

「あーごめん!間違って凜ちゃんのを飲んでしまった!」

「「な!?!/~/」」

同じのを注文していた為、ツナは間違って凜のコップを取ってしまい、それを間違って飲んでしまっていた。

(も、もしかして…!?!/~/ツ、ツナと間接キ…!?!/~/)

間接キしたのではないかと思ってしまう、凜は意識しすぎてしまい気絶してしまった。

「え!?!気絶した!?!そんなに嫌だったの凜ちゃん!?!ごめん凜ちゃん!」

いつもと違ってツナは気絶した理由がわかっていたと思われたが、結局違ったのであった。

おまけ

—音ノ木坂学院生徒会室—

「ツ、ツナ君が!?!/~/君」

「プロポーズ!?!/~/」

ツナたち遊びに行っている間に、ことりからユニの予言を聞いた穂乃果と海未も動揺していたという。

#標的（ターゲット） 233 「ユニとツバサの出会い」

そして次の日。今日は土曜日なので、学校も休みである。

「着きましたね沢田さん。」

「そうだね。それにしても今日もまた凄いなー。」

ツナとユニは現在ドームの前にいた。なぜドームにこの二人がいるかというとA—R—I—S—Eのライブを見に来たからである。前にLINEでツバサにライブに来ないと誘われた時後に、ツナがきつとユニが喜んでくれるかもと思って、ツバサに無理を言ってユニの分のチケットを手配してくれないかと頼んだからである。

「すみません沢田さん、わざわざ私の分のチケットまで頼んだだけいて。」

「まあ俺はいいんだけど…どちらかといえばツバサさんが…」

「そうですね。わざわざ見ず知らずの私の為にチケットを用意してくれたんですから…」

ただでさえチケットを無料でもらっているのに、さらにもう一枚用意してくれたことに、二人は申し訳ない気持ちになってしまった。た。

そして会場内に入り、二人はチケットに書いてある座席の番号に座った。

「また1番前…なんか悪いな…」

今回もツバサが用意してくれた席は1番前であったので、ツナはファンの方に少し申し訳ない気持ちになってしまっていた。

「私、アイドルのライブを生で見るとなんて初めてです。」

初めてのアイドルのライブにユニはワクワクしている様子であった。

そしてしばらくするとライブが始まり、ツバサ、英玲奈、あんじゅが出てくると会場中が盛り上がり始めた。

「みなさん今日はありがとうございまーす！私たちのライブ楽しんで

いってくださいーい！」

そしてツバサの言葉に盛り上がった会場が、さらに盛り上がっていった。

「凄いですね…こんなに盛り上がるものなんですね…」

「A—RISEは今すっごく注目されているアイドルだからね。」

あまりのお客さんの盛り上がりによりユニは驚くと同時に、ちよつとだけ戸惑ってしまった。

そしてA—RISEのライブが始まり、ユニは初めて見るアイドルのライブにとつてもワクワクしており、それを見たツナは喜んでもらっていたので内心ホツとしていた。

そして二人ライブが終わり、ドームを出ると、ツナのスマホのLINEに通知が来た。

『ツナ君。今日も来てくれてありがとう。この後、よかつたら楽屋にこない？一緒にいたユニちゃんも来てもいいから。』

「楽屋にこないかって誘われちゃった…ユニも来てもいいってツバサさんが言ってるけど、どうするユニ？」

「私は全然大丈夫ですよ。」

「そっか。じゃあ返信しなくちゃ。」

そう言うとツナはLINEで楽屋に行くことを伝えた。一応、念の為に会場に来ていた人に見つかると後々大変なことになるので、少し時間を置いて楽屋に行くことを伝えた。

そしてほとぼりが覚めた後、二人は楽屋へと向かっていった。あんじゅと英玲奈は気を遣ったのか楽屋にはいなかった。

「いらっしやいツナ君。今日も来てくれてありがとう。」

「今日はありがとうございます、俺だけじゃなくて、ユニの分のチケットまで用意してもらって。」

「いいのよ、ツナ君は私にとっては特別な人だから。」

「え？特別な人？」

特別な人だと言われて疑問符を浮かべるツナであったが、ツバサは何も言わずにニコニコしているだけであった。

「それとユニちゃんもありがとう、ライブに来てくれて。」

「ごちらうござありがとうございます。見ず知らずの私の為にチケットを用意してくださって。」

ツバサはライブに来てくれたくれたことにお礼を言い、ユニはライブのチケット用意してくれたことにお礼を言った。

「それと…その…すいませんリボンが勝手に写真を撮っちゃったんですど…ツバサさんがその…俺に…」

「知ってるわ。穂乃果の家に行った時に聞いたから。」

「え…そうなんですか？ていうか穂乃果って…」

前は穂乃果のことを前は高坂さんと呼んでいたのに、今は穂乃果と呼んだことにツナは驚いてしまった。

「私のほうも謝らなくちゃいけないわ。あなたのことをあんじゅと英玲奈には話したわ。マネージャーや他の関係者にはうまく誤魔化したから。」

「そうですか、わかりました。」

ツバサはユニがジツリマリヨネフアミリーアだのボスということは知らないの、ツナがファイアのボス候補だということと言わなかったが、ツナは何のことを言っているのかを理解した。

そしてこの後ユニが家出したこと、現在音ノ木坂学院に二人で通っていることや、学校での出来事などを話すなどしてしばらく雑談した。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか。」

「あ、沢田さんちよつと先に外で待ってもらえますか？ちよつとツバサさんに用があるので。すぐに終わりますから。」

「いいけど…じゃあ外で待ってるよ。」

珍しくそんなことを言うユニに、ツナはちよつと戸惑いを隠せなかったが、ツナはそのまま外に出ていった。

「それで？私に用って何かしらユニちゃん？」

「はい、あなたに伝えたいことがあります。私が見た未来を…」

「み、未来…？何を言って…」

急に変なことを言い出したユニにツバサは戸惑いを隠せない表情になっていた。

「ツバサさん、今度の休みに沢田さんをデートに誘おうとしてますよね?」

「え!?!/!/」

「その様子だと本当のようですね。」

「な、何で知ってるの!?!」

「私の一族は未来を見る能力…つまり予知能力があるんです。私も予知能力を受け継いでいるんです。」

「予知能力…?一あなたは一体何者なの…?」

自分の未来を当てた上に、さらに予知能力があるということを知ってツバサは驚きを隠すことができなかつた。

「私はジツリヨネロファミリーのボスなんです。」

「そ、それってツナ君と同じマファイアってこと…?」

「はい。」

「ええ!?!ユニちゃんって私たちと一つしか変わらないのに…」

「私は沢田さんと同じ年齢ではありませんよ。私は沢田さんより年齢は下なんです。」

「え…でもツナ君と一緒に音ノ木坂学院^{がっ}につてきつき…」

「あまり大きな声では言えないんですが…リボンおじさまが書類を偽造^{ごう}をして私を音ノ木坂学院に入れてくれたんです。」

「ぎ、偽造…」

まさかこんなユニ^{ユニ}から偽造という言葉が出るとも思ってもみなかったのか、ツバサは驚きのあまりなんともいえない表情になった。

「まだ混乱しているところもあるかもしれないけど、本題に入らせてもらいます。あまり沢田さんを待たせるわけにはいかないので。」

「え、ええ…いいわよ。」

「あまり時間がないので簡単に言います。私は沢田さんのことを穂乃果さんたち、そしてツバサさんが想いを寄せていることを知りました。そしてそのことについて予知能力である未来が見えたんです。」

「ある未来…?」

「沢田^{おぞら}さんは春の訪れと共に10人の女神の一人と永遠の愛を誓う。」

「それはツナ君が私たちの誰かにプロポーズして結婚するってことかしら？」

「はい。信じるかどうかはツバサさん次第なんです。」

「信じるわ。さっき私のことを予知したんだし、それにツナ君の友達なんだから、勿論信じるわ。」

「そうですか、ありがとうございます。では私はこれで。」

「あ！待ってユニちゃん！」

「はい？何ですか？」

「これ持っていて。」

そう言っているとツバサはユニに、2枚の色紙を渡した。

「これは色紙？」

「A—R—I—S—Eわたしたちのサインが入った色紙よ。ツナ君とユニちゃんの分もあるわ。せつかく日本に来たんだもの、お土産として持って帰って。」

「ありがとうございます。では私はこれで」

軽く頭を下げると、ユニは扉を開けてツナのところへ少し急ぎ足で向かっていった。

「大空は春の訪れと共に10人の女神の一人と永遠の愛を誓うか：フツツ！面白くなってきたわ。私も負けられないわね。」

ユニの言葉を受けて、ツバサはさらに燃えていたのであった。

#標的（ターゲット） 234 「にこの執着」

「ごめんなさい沢田さん。待たせてしまつて。」

「それは全然いいんだけど、ツバサさんと何を話してたの？」

「秘密です。女の子だけの。」

「秘密…まあいいか。」

ユニとツバサが何を話していたのか気になるツナであったが、なにか女の子同士の秘密の話をしていたのだろうと思つたのか、これ以上は何も尋ねることはしなかった。

するとツナはユニの持っている色紙に気づいた。

「その色紙は？」

「ツバサさんがくれたんです。A—RISEのサインが入つたサインだそうです。沢田さんの分もありますよ。」

「え？俺の分も？A—RISEアイドゥルのサインなんて

初めてだな。」

初めてゲットしたアイドルのサインに、ツナは少しだけ喜んでいる様子であった。

「とりあえずどこかで昼御飯でも食べようか。」

「そうですね。」

そう言うと二人は昼御飯を食べる為、どこか食べるところを探しに歩き始めた。

しばらく歩くと、絵里、希、にこの通っている音ノ木坂大学の前を通りかかった。

「音ノ木坂大学だ。ここに絵里さんと、希さんと、にこさんが通つてるんだよね。」

「ここが…」

ツナが音ノ木坂大学の説明をすると、ユニは校舎やグラウンドを見回した。

するとここでツナがあることを思いついた。

「そうだ！せっかくだし大学の食堂で食べない？」

「え？でも勝手に入るのは…」

「大学って、自由に入っているんだよ。音ノ木坂大学は女子大学じゃないから、俺も入れるし。」

「そうなんですか、じゃあ問題ないですね。」

自分たちが大学に入って問題がないとユニがわかったので、二人は音ノ木坂大学の校門をくぐって大学内にある食堂を目指していく。

「今日は土曜日だから、あまり人がいないんですね。」

「そうだね。基本的に部活の人だけだね。」

大学内を見回しながら、そんなことを話していると大学の案内図を見つけたので、それを見て食堂の場所を確認して、食堂へと向かっていった。

そして食堂へ着くと、土曜日ということもあってあまり生徒もおらず、中には一般の人もいたが、それをあわせてもあまり人はいなかった。

「あれ？あそこに座っているのってもしかして…」

すると遠目で席を見渡していた、ツナであることに気づいた。少ししてからユニもツナと同じくあることに気づいた。そこには絵里、希、にこの3人が一緒に昼食を食べていた。

「やっぱり、絵里さんたちだ。絵里さーん！希さーん！にこさーん。」

「え!?!ツナ君!?!」

「それにユニちゃんまで…」

「な、何で二人がここにいるのよ!?!」

いくら音ノ木坂大学が一般の人が出入り自由とはいえ、この二人が学校内に現れたことに驚きを隠せていなかった。

そしてツナとユニも学食を注文すると、絵里たちと一緒に昼食を食べ始めた。そしてユニが家出したことや、現在ツナと一緒に音ノ木坂学院に通っていることを話すと他の人たちと同じく、驚いていた。ちなみに絵里たちは大学の補講で土曜日ではあるが、登校していたそうである。

そして二人が音ノ木坂大学にいる理由を尋ねた。

「でも何で大学に来たの?」

「A—RISEのライブを二人で見に行つて、昼食をどこで食べようかって考えてたら、音だノ木坂大学がくの近くを通つたから、大学で食堂で食べようって思いついたんです。」

「A—RISEのライブ!? あんたたち見に行つたの!?!」

「はい。ツバサさんからチケットをもらつて。」

「とても素晴らしかったです。あんな目の前で、A—RISEのライブが見られて。」

「な!?!」

アイドル好きののこにとつて、再び本人からチケットを貰い、そして目の前の席でライブを見たことに衝撃を受けてしまった。

「今日のライブのチケット…私も応募したのに…」

「どのみち今日は補講やつたんから、どうせ行くのは無理やつたん。」

「補講そんなの休むに決まつてるでしょ!」

「そんなのつてにこつち…」

補講を休んでライブに行こうと思つたいたにこに、希だけでなく全員呆れてしまつていたが、にこのアイドルに対する情熱を考えれば、そのぐらいすると全員、心の中で思つてしまった。

「あと楽屋に呼ばれました。それでサインも頂きました。」

「何ですつて!?!」

ユニがA—RISEのメンバーであるツバサ、あんじゅ、英玲奈のサインの入った色紙を2枚をバッグから出して、にこは驚くと同時に、興味津々な様子であつた。

「ツナ! 色紙これ頂戴!」

「ええ…それはさすがにツバサさんに悪いというか…」

「じゃあ! せめてまたライブのチケットを貰うことがあつたら私に渡しなさい!」

「いや…それも…さすがに…」

「何よ! あんたアイドルに興味とかないでしょ!」

「そ、そうですけど…」

「いくらツバサアイドルを助けた恩があるとはいえ、羨ましすぎるじゃない!

ちよつとぐらいいいじゃない！」

あまり形相で必死にアツタクしてくるにこに、ツナはと戸惑ってしまっていた。この後、にこを大人しくなるまで時間がかかったという。

#標的（ターゲット） 235 「つい勢いで」

昼食を食べ終わると、ここでツナスマホに電話がかかってきた。

「あ、電話だ。リボンからだ。」

前に花陽、凜、真姫とラーメンを食べに行つた時と同じように、夕イミングがいいのか悪いのかここでリボンから電話がかかって来た。

「すみません、ちよつと席を外します。」

そう一言だけ言うと、ツナは食堂から離れて人気のない場所へと移動していった。

「もしかしておじさま…でも丁度良かった。」

「ユニちゃん？」

去つていくツナの背中を見ながら呟いたユニに、絵里は疑問符を浮かべていた。

「もしかして何か重要な話があるんじゃないユニちゃん？」

「どうしてそれを？」

「カードが言うてたんよ。今日はとても重要な話を聞くことになるつて。」

そう言うと希は人さし指と中指でタロットカードを挟んで、ユニのほうにタロットカードを見せた。

「そうですね。ならさつそく本題に入らせてもらいます。私は最近、沢田さんとsのみなさんとツバサさんのことについて予知能力で見ってみました。それであることがわかつたんです。」

「もしかしてツナ君がウチらの誰を選ぶ未来が見えたとか？」

「勘がいいですね希さん。」

「な!?!／／／」

まさか恋愛についてのことだとは思つてもいなかったので、絵里と

にこは顔を赤くしてしまっていた。

「でも沢田さんが誰を選ぶのかはわかりませんでした。沢田さんがいつ告白するかがわかりました。」

「ツナ君の…」

「告白する時期…」

「はい。沢田おおぞらさんは春の訪れと共に、10人の女神の一人と永遠の愛を誓う。」

「つまり春の訪れに、ツナ君はウチらの中の一人に告白…プロポーズするってことやね。」

「プ、プロポーズ!?!?!」

ユニの予知の内容について、希が簡潔に言うと言と絵里とにこはプロポーズという単語に反応して顔を真っ赤にしていた。

さらに希は続けた。

「そしてウチらは残された制限時間リミットは来年の春で、それまでにツナ君を落とせばええってことやね。」

「そういうことですね。頑張ってください。」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!!?!?!ユニが予知能力を持っていることやわたしたちsの解散を予知で知ってたって言ってたこもあつたけど、今言った予知は本当なんでしょうね?!?!?!」

「信じるか信じないのにはにこさん次第…としか私には言えません。それに絶対私の予知したような未来が起こるかどうかも私でさえわかりません。自慢ではないのですが今まで私は予知を外したことはありません。ですがもしかしたら外れる可能性だってあるかもしれないません。それに未来は何かのきっかけで変わるものですから。私が見た予知は枝分かれした世界の一つ…平行世界パラレルワールドの一つにすぎないのかもしれない。」

ユニが予知した未来を聞いてどうしても信じられないにこは、本当なのかどうか尋ねるが、ユニはそう言うだけであった。

「まあその予知を信じてても信じなくても、ウチのやることは変わらんですよ。ツナ君を自分の彼氏…お嬢さんにすることはね。」

「わ、私だって負けないわよ希!!?!?!」

「エリチも本気になったようやん。でも今のままじゃエリチとツナ君が結婚むすばれることはなさそうやね。エリチはツナ君に抱きついたらいいしかないんやし。」

「し、失礼ね!!／／私だってツナ君の頬にキスしたんだから!!／／」

「「え!」」

「はっ!!／／」

つい希に挑発されて絵里は、勉強合宿の時に寝ているツナの頬にキスしたことを暴露してしまうが、すぐに自分の言ったことに気づいて顔を真っ赤にして、慌てて両手で口元を隠したが、意味はなかった。

この後、キスしたことについて希にひつくく聞かれて、最終的にこのことを希がμ、sのみんなに暴露したのであった。

#標的（ターゲット） 236 「助けたら」

昼食を食べ終わると、ツナとユニは絵里、希、にこと別れ、音ノ木坂大学を後にした。

「まさか絵里さんたちに会えるとは思わなかったなー。」

「そうですね。正直、大学生なので絵里さんたちに会うことはないと思います。正直、少しでしたけど会えて嬉しかったです。」

「そうだね。昼も食べたしどうする？正直、A—R—I—S—Eのライブを見に行った後のことは考えてなかったけど…どこか行きたいところとかあるユニ？」

「そうですね…」

これからどうするか二人が話しながら歩いていると、二人の視界にたくさん荷物を持っている女性が目に入った。女性は荷物がたくさんあるせいかすごく重たい様子であり、表情が少し辛そうであった。それを見た二人はお互いに顔を見合わせると、黙ったまま首を縦に振ると女性の元に駆け寄った。

「あのよかったら荷物をお持ちしましょうか？」

「え？」

「とても重そうにしていたから、気になってしまったものですからね？沢田さん？」

「うん。だから荷物を運ぶのを手伝いますよ。」

「で、ですが…」

女性は見ず知らずの人にそんなことをしてもらうのは悪いと思っていたが、それでも二人は引く様子はなかったので女性は二人に荷物を渡した。

「ごめんなさいね。見ず知らずの私の為に。」

「気にしないでください。困っている人がいたから放っておけなかっただけですから。」

「そうですね。困った時はお互い様ですよ。」

「ありがとうございます。」

女性は二人の優しさと言葉を受けて、頭を下げながらお礼を言った。

しばらくすると女性の家に着くと、そこには大きな道場があり、ツナとユニは道場を見て驚いてしまった。

「ごめんなさいね。家まで荷物を運んでもらって。せつかくだから、家が上がって行ってくださいね。是非、お礼を。」

「そ、そんなーいいですよーお礼なんて！」

まさかお礼がしたいと言われるとは思ってもいなかったもので、ツナは慌てて両手を前に出しながらそう言った。

すると家の奥から声が聞こえてきた。

「あ、お母様。お帰りなさ…ツナ君!? ユニ!?」

「ええ!? 海未ちゃん!?」

「ここは海未さんの家だったんですね…」

突然、家にツナとユニが来たことに海未は驚き、まさかこの家が海未の家だったということにツナとユニは驚いてしまっていた。

「あなたが沢田綱吉君と、ユニちゃんでしたか。初めまして海未の母です。いつも海未さんがお世話になっています。」

「こ、こちらこそ…海未ちゃんにはいつもお世話になっています！」

「はい！私もいつもお世話になっています！」

まさかこの女性が海未の母だとは思ってもみなかったもので、ツナとユニは慌てて挨拶した。

そして二人は海未の母に家の中に案内され、畳と長机のある部屋に案内され、お茶とお菓子を用意してくれた。

「ありがとうございます。」

ツナとユニはお茶を用意してくれた海未の母に正座した状態で、軽く頭を下げながらお礼を言った。

（ま、まさかツナ君とユニが家に来るなんて…穂乃果が家出して来たことがあるので女の子^{ユニ}をもてなすのは大丈夫だとしても、同級生の殿方が私の家に来るなんてことは初めてなので一体どうしたら…!!）

（ッ）
想い人が自分の家に来るとは思ってもみなかったもので、海未は嬉しい

半面、どう対応すればいいのかわからないでいた。

「ユニさんは外国から来たと海未さんから聞いていますが、どちらの国から?」

「私はイタリアから来ました。」

「そうですか。それにしても日本語が上手なのですね。」

外国人であるユニが珍しいのか、海未の母はこの後もユニに色々質問していた。

ユニとの会話が一段落つくと、海未の母はツナのほうを向いた。

「それと沢田さん。」

「な、何ですか?」

「あなたのことはいつも海未さんから聞いています。花見に誘ったり、遊園地に連れて行ってくれたり、お世話になっていきます。」

「い、いえ! そんな大したことは! 海未ちゃんは俺の友達ですから、当然というか!」

「フフツ。海未さんも隅におけませんわね。前から沢田さんのことは聞いていましたが、こんな素敵な殿方だったなんて。今、思えば4月から稽古をする時にいつも雑念が入っているように感じていたのはそういうことだったのですね。」

「お、お母様!! // 決して私はそのようなことは...!! //」

「いいんですよ。むしろこれで日舞・園田流の跡取りもできて、この先も安泰なんですから。」

「お、お母様!?! //」

自分の母親の言っている意味を即座に理解した海未は、顔を真っ赤にしてみました。

「これからも海未さんのことをよろしくお願いしますね沢田さん。できたら末長く。」

「はい。こちらこそ末長くよろしくお願いします。」

「ツ、ツナ君!?! //」

ツナは海未の母の言葉を友達として末長くお願いしますと勘違いしており、何の違和感を感じることもなく返事をしたが、まさかそのような返事をするとは思ってもみなかったので海未は顔を真っ赤に

した。

この後、海未の母の勧めで海未が日本舞踊を見せたところ、二人は感動し、着物姿の海未を見たツナは海未に一言だけあることを言ったのだが、その一言がなんだったのか、海未がどうなったかは言うまでもない。

#標的（ターゲット） 237 「海に行きたい」

海未の日本舞踊を見たあと、海未の母が知り合いから貰ったという映画のチケットを貰い3人で見に行くこととなった。

「恋愛映画か：俺、初めてだな。」

「私は映画館で映画を見るのが初めてです。」

「れ、恋愛映画…!!／／／」

貰った映画のチケットを見つめながら、ツナとユニは呟いた。一方で海未はラブソング作曲の時に恋愛映画を見た時のことを思い出しており、顔を赤くするぐらいもの凄く恥ずかしくなっていた。

「海未ちゃんは映画とか見に行ったりとかするの?」

「私もあまり見に行くことはないですね。見に行ったことがないわけではありませんが。」

「そうなんだ。そういえば海未ちゃんと遊ぶの初めてだね。」

「え?」

「いや、いつも穂乃果ちゃんたちがいるけど、こうやって海未ちゃんただけは初めてだよね。」

「そ、そういえば…」

正確に言うとユニもいるが、ツナの言葉を聞いて海未はこんな風に1対1で遊ぶことは今までなかったことに気づいた。

「すみません。私がいなければ沢田さんとデートになっていたのに。」

「わ、私は別そのようなことは…!!／／／」

ユニがツナに聞こえないぐらいの小声ささやくと、海未は顔を真っ赤にしてしまっていた。

（今までだって恋愛文学を読んでいますし、花見で貰った景品の恋愛漫画を見ているので、耐性もできています!なにによりツナ君が目の前にいるのに、恥ずかしいところを見せられません!）

海未は心の中で自分にそう言い聞かせると、3人が見る恋愛映画の上映のお知らせのアナウンスが流れてきたので、ポップコーンとジュースを買った後、上映されるシアターに入った。

そして映画の上映が始まって、1時間30が経過してラストシーンであるキスシーンに入った。

「感動的です…」

（お、俺も穂乃果ちゃんと…ってこんな時に何考えてるんだ俺!?!／／／
／

「無理です…!!／／／やっぱり私には無理です…!!／／／」

ユニはラストシーンに涙しており、ツナは少しやましいことを考えており、海未はやはり耐えられなかったのか、目を閉じて両手で両耳を塞いで顔を俯かせていた。

そしてラストシーンであるキスシーンが終わると、エンディングの画面に流れ始めた。

「とても素晴らしかったです。」

「うん。初めてだったけどよかったですよ。海未ちゃんは…海未ちゃん…?」

海未に映画の感想を聞こうとしたツナであったが、海未は今だに両耳を塞いで、顔を俯かせたまま私には無理ですと念仏のように唱えたままの状態であった。

そんな海未を見た二人は大丈夫か?という表情になっていたが、すぐにツナが海未の肩を軽く叩きながら、スマホのメモアプリに終わったよと入力して、その画面を見せた。

「お、終わったんですか…」

スマホの画面を見て、終わったことを知って耳を塞いでいた両手を離した。

そして3人は映画館を出た。

「海未さんどうされたんですか?両手で両耳を塞いでいましたけど。」

「い、いえ…最後のシーンで…その…!!／／／男性と女性の唇が…!!

／／／む、無理です!!／／／恥ずかしい!!／／／」

「あ、いいです!それ以上、言わなくていいです!」

「これ以上、思い出さなくていいから！」

海未がなぜあの時、両耳を塞いで顔を俯かせていた理由はわかったので、ユニとツナは慌ててあのシーンのことを思い出させるのを止めた。

「この後、どうする？ 行きたい所とかある？」

「私、海が見たいです！」

「海未は私ですが？」

「いえ…泳ぐほうの海です…」

（あれ？海未ちゃんってすっかりもののイメージがあつたけど、意外に天然なところが…）

海未の意外な一面に、ユニとツナはちよつとだけ驚いていた。

「でもいいかもね。」

「確かお台場に海の見える公園があつたはずです。そこに行ってみましょう。」

ユニの提案で、お台場にある海の見える公園に行くことになった。

「ボス。どうやらボンゴレはユニと一緒にお台場にある公園に行くようです。」

『わかった。ファミリーを総動員させるぞ。なんとしてでもユニを我らのファミリーのものにする。』

その一方でユニを狙う、影が動こうとしていた。

#標的(ターゲット) 238 「海(海未)と刺客(マフィア)」

そして3人はお台場にある海の見える公園へとやって来た。休日ということもあつてカップルや、家族連れなどもいた。

「うわー綺麗です。」

どこまでも広がる海に、ユニは感激していた。

そしてツナも。

「やっぱり海って綺麗だよなー。」

「き、綺麗!?!?!」

「あ、いやー海未ちゃんのことじゃなくて!いや確かに海未ちゃんは綺麗なんだけどー!」

「はああああ!!?!?!」

結局、自分のことを綺麗だと言われて海未は顔を真っ赤にしてしまっていた。

(わ、私としたことがつい意識しすぎて:!!?!?!ツナ君は私のことを海未と呼び捨てにすることなんてないのに!?!?!これではまるでツナ君が私の:!!?!?!)

ツナは海のことを綺麗だと言っていることを頭の中ではわかってるのに、どうしても海未しゅんのことを綺麗だと言っている聞こえてしまうことに海未は、どうしても割りきることができなかった。

そして意識しすぎて海未は妄想してしまった。

『海は綺麗だよ。でも海未はもっと綺麗だよ。』

『そ、そんなこと:!!?!?!』

『恥ずかしながららないで。もっとこっちに寄って、その綺麗な顔を俺に見せて。』

『は、はい:!!?!?!』

(って私はまたこんなことを考えて!?!?!これじゃまるでツナ君が私の彼氏みたいに!?!?!/そもそもツナ君と私はまだ付き合っていない)

ないのに……ってまだって何ですか!?!?!私は何を勝手に!?!?!
ツナに綺麗と一言だけ言われただけなのに、どんだん海未はおかし
く?なってしまうていた。

そしてしばらく海を見て、公園内を散歩した後、少し早いが帰るこ
ととなった。

「今日は私たちに付き添ってくれてありがとうございます。」

「いえ。どうせ今日は予定もなかったのですから。気にしないでくだ
さい。」

「改めて海未さんのお母様に伝えておいてもらえますか? 映画のチ
ケットを頂いてありがとうございますと。」

「わかりました。」

ユニが伝言を頼むと、海未はそう一言だけ言って了解した。

「そういえば俺たちが音ノ木坂にいられるのも、あと少しになった
ね。」

「はい。あつという間でした。」

「二人が音ノ木坂に来るなんて思ってもいませんでしたが、もうあと
少ししかいないと思うと少し寂しいものです。」

音ノ木坂学院がっにいられるのも後少しだということを3人は話してい
ると、人気の少ない道へと入っていった。少し歩くと、3人の回りに
霧が立ち込める。

「霧?」

「なぜこんなところにな?」

「辺りが……」

突然、霧が現れたことに戸惑う3人であったが、少しすると霧が晴
れると、3人はなぜか海岸にいた。

「海岸!?なぜ私たちこんなところにな!?!」

「これって幻覚……」

「そのようですね……」

突然のことに海未は戸惑っていたが、ツナとユニはこれが幻覚であ
るということを理解した。

そして海岸から青色の髪の男と、その他にもたくさんの男たちが現

れた。

「ようこそ。我がファミリーの術士たちが作った幻覚空間へ。俺はフィッツサツツイオーネファミリーのアメント。ボンゴレX世^{デーチェモ}である沢田綱吉と命と、ジツリヨネロファミリーのユニを我がファミリーのものにする為に参上した。」

「マファイア！」

アメントが自己紹介と目的を聞くと、ツナはユニと海未を護る為に前に立つと、27と書かれた手袋を即座に両手にはめた。

「さつそくだが、目的を遂行させてもらう。言っておくが俺は君を見くびってはいない。君はあの虹^{アルコバレーノ}の赤ん坊であるリボーン^{アルコバレーノ}の教育を受けている

と聞いているからな。だから俺はファミリーを総動員させたのさ。さあお喋りはここまでにして、そろそろ初めようか。」

アメントがそう言うと、フィッツサツツイオーネファミリーの構成員は武器に死ぬ気の炎を灯して、戦闘体勢に入った。さすがのツナも二人を護りながら、この人数を相手にするのはきついと思っていた。

その時であった。

「おいおい、そんな女の子に、大勢で押し掛けたら嫌われるぜお前ら。」
「どうやら無事のようなお前ら。」

「なんとか間に合ってよかった…」

「ディーノさん！リボーン！ロマーリオさんまで！」

突然現れた3人に、ツナだけではなくユニと海未も驚いていた。

「き、貴様は跳ね馬…それにリボーン^{アルコバレーノ}！なぜ幻覚空間^{このぼしよ}に!?!」

突然幻覚空間現れたディーノ、リボーン、ロマーリオのほう睨みながらアメントは叫んだ。

「フィッツサツツイオーネファミリー^{おまえ}が日本に来たっていう情報が九代目からあつてな。ユニを狙ってると思ってお前らを観察してたんだ。そして狙い通り、やって来たから幻覚空間^{このせかい}を作ってる術士にちよつと話をつけて、やって来たわけだ。」

「そう言うことか…だが我らは諦めるつもりもない。」

リボーンの話聞いても、アメントは引く様子はなかった。

「だろうな。がこいつらを…俺の教え子たちを舐めんじゃねえぞ。」

リボーンがそう言うのと、ディーノは鞭に大空の死ぬ気の炎を灯し、ツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードになり額にボンゴレとボンゴレギアに大空の炎を灯していた。

「リボーン、二人を頼む。」

「命令すんな。そのぐらいお前に言われなくても、わかってるぞ。」

「そうか…」

「ツナ君…そ、その姿は一体…?」

「その話は後だ。待ってる海未、こいつらはすぐに片付ける。」

「え!?!?!は、はい…!!?!?!」

「お前は俺の友達^{誇り}だからな。俺の誇りにかけて、お前を絶対に護る。だから俺の側から離れるな。」

「は、はい…!!?!?!」

いつもと違う口調や、自分のことを呼び捨てにしたことに少し戸惑ったものの、今のツナにあまりにかっこよかったのか、そう言うのがやったのであった。

「話はすんだか?」

「ああ。」

「そうか。久しぶりの戦いだ、部下や弟分、それに元家庭教師^{かてきよ}の前にかっこ悪いところ見せられねえな!」

「いくぞ!」

「おう!」

リボーンの教え子たちの共闘!

#標的（ターゲット） 239 「高速の戦い」

「相手が誰であろうと、我らを阻むものは誰であろうと、殺れー！」
「「「ううおおおおお！」」」

アメントが命令すると、フィツサツチオーネフアミリーの構成員は一気にかかってきた。

サルト・ヴォランテ・ヴェローチ・ゴメ・ルーチェ
「光 速 天 翔 ！」

「「「グワーー！」」」
「な!？」

大空の死ぬ気の炎を纏った鞭をデイーノが素早く振るうと、アメント以外の全て人を一瞬にして倒した。

「い、一瞬…：デイーノさんはこんなに強かったのですか…！」

「まあな。キャツバローネフアミリーはボンゴレの同盟マフィアの中でも、第3勢力だからな。それにデイーノは世界最強の殺し屋ヒットマンであるこの俺がかてきよ家庭教師だったんだ。だから一番すげえのは、デイーノをここまで鍛えた俺ってことだ。」

「結局、自分の自慢話ですか…！」

リボンがデイーノのことではなく、最終的に自慢話したことに海未は若干、呆れていた。ユニとロマーリオは苦笑いしていた。

「とりあえずお前の部下は倒させてもらったぜ。後はお前だけだぜアメント。ここで退くなら、見逃してやってもいいぜ。」

「調子に乗るな！ここで退くぐらいなら、死を選ぶほうがマシだ！」

デイーノの言葉に反発すると、アメントは懐から一本の槍が出てくると、槍に赤い色の死ぬ気の炎が灯った。

アステイレー・フイアンマ・テンベスタ
「嵐 炎 槍」

「嵐属性の炎を纏った槍か…！」

「そうだ。嵐属性の炎の特徴は分解。これに触れば貴様ただではすまない。」

「当たらなければいいだけの話だ。」

「後で痛い目を見る…と言いたいところだが、俺は貴様を侮ってなどいない。最初から全力で行かせてもらう。」

「ああ、かかってこい。」

そう言うのとアメントは槍を構え、ツナも両手を腰の位置まで下げ、二人は戦闘体勢に入った。

しばらくお互い睨みあっていると、二人は一瞬にしてその場から消えた。そして次に姿を現した時には、アメントはツナに槍を向け、ツナは左腕で固定した右腕を向けて、Xカノンを発射する構えをとり、お互い再び睨みあつたまま止まったままになった。

「アメントとかいったか…思ったよりやるじゃねえか。」

「ええ。あの脚力、かなり鍛えられてますぜ。」

「ああ。だがツナのスピードはあんなもんじゃねえ。」

「え…あれが見えるんですか…?」

ディーノ、ロマーリオ、リボーンの話しぶりから、あの二人あの動きが見えている様子であつたので、海未は啞然としまっていた。

「大丈夫ですよ海未さん、私も見えなかつたので。」

「そ、そうですか…」

ユニの言葉に少し安心?した海未であつたが、それでもあの早さで動けるツナとアメント、そしてその動きが見えていたことに驚きを隠せなかつた。

(あの炎はファイアランドでカルカツファミリーやランチアさんが使っていました、ツナ君とディーノさんは初めて見るオレンジ色の炎でした…あれだけ多くの人数がいたのにあのオレンジ色の炎を使っている人はいなかつた…一体どういうことなのでしょうか…)

初めて見る大空の死ぬ気の炎に、海未は疑問を抱いていた。

そして海未がそんなことを考えていると、お互い後ろに飛び引いた。

「Xカノン!」

「飛 翔 嵐 斬!」

飛び引いた瞬間、ツナは死ぬ気の炎の弾丸を撃ち、アメントは刃と化した嵐属性の炎を飛ばした。そして二人の技がぶつかる、互い

の技を相殺した。

そして相殺した後、アメントは目にも止まらぬ早さでツナに近づいて、槍を突いて攻撃しようとする。

「そんなもの受け止めればいいだけだ。」

ツナはアメントの槍を受け止めようと、前回の戦いのように白刃取りの構えを取る。

「これは!？」

スコツピオ・サルヴァ・ピツカータ

「爆 嵐 突 き!！」

ドゴーン!

そして槍が地面に刺さると同時に、地面が爆発した。

「危なかった!！」

だがツナの超直感がある異変を感じたのか、白刃取りのすぐに構えを止めて、ボンゴレギアの死ぬ気の炎を逆噴射させて離れていた。

「よく気づいたな。それが噂に聞く超直感か。」

「槍の先端にしかけてある火薬を、嵐の炎で爆発させたわけか。」

「その通りだ。触ればいくら貴様とて、ただではすまない。」

そう言うアメントは高速移動でツナに近づくと同時に、槍で攻撃していく。そのたびに次々と爆発が起こっていったが、ツナはそれでも避け続ける。

「ツナ君!！」

「ダメです海未さん!！」

「落ち着け海未!！」

「今、行けばあんたもただじゃすまないですぜ!！」

「ですが!！」

ツナを助けようとする海未を、ユニ、ディーノ、ロマーリオが止めた。

「黙って見てろ海未。ツナは誇りかけて、お前を護るって言ったんだ。それにツナは…俺の生徒はこのぐらいでやられるタマじゃねえ。」

「リボーン君…!！」

リボーンがそう言うのと、戦いはさらに激しくなっていく。

「クソツ!ちよこまかと!！」

「そろそろか…」

「何が…な!？」

突然、高速で動いていたアメントの動きが止まり、片膝をついた。「いくら高速で動けようと足にかかる負担も多い上に、体力も消耗する。それではもう高速で動こうにも動けないはずだ。」

「くっ！俺としたことが…」

「大人しく引けアメント。お前に勝ち目はない。」

「誰が引くか!」

そう言うときアメントは負担がかかった足を無理やり動かし、ツナから距離をとると槍の先端に嵐属性の炎を集中させていくと、炎が巨大な槍の形になった。

「俺の全てをぶつけてやる！避ければ貴様の仲間も人溜まりもない！かといって受け止めれば爆発だ！さあどうするボンゴレ!」

「そうか…だったら…」

そう言うときツナは左手を後ろに下げて死ぬ気の炎を逆方向に噴射し始めた。

「だったら俺のXBUNERを見せてやるぜ。」

#標的(ターゲット)240 「XBURNER(とおき)」

「オペレーションX。」^{イクス}

『了解シマシタボス。Xバーナー発射シークエンスヲカイシシマス』
オペレーションXと呟くと、ツナのつけているXBURNER用
ヘッドフォンからアナウンスが流れ、XBURNERを発射するた
めにつけているコンタクトの画面が変わり、左右の死ぬ気の炎の出力
状況が出される。

「あ、あんなの…私は夢でも見て…」

アメントの巨大な刃物と化した死ぬ気の炎を見て、海未は絶望的な
表情になってしまっていた。

「心配すんな海未。ツナの奴XBURNERで受けて立つ気だ。」^{イクス}

「イクス…バーナー…?」

「ツナの必殺技だ。まあ見てろ、お前の惚れた男の強さってやつを
な。」^{とおき}

「こ、こんな時に言わないでください!!／／／／」

リボーンの言葉に海未は顔を真っ赤にした。

そしてツナのXBURNERの発射する準備が整った。

『ゲージシンメトリー発射スタンバイ』

「お前も全力で来いアメント。」

「言われなくともそのつもりだ!」

そう言うときアメントは巨大な刃と化した槍を両手で持つと、天にか
かげるとおもいつきりツナに向けて降り下ろした。

「嵐 帝 斬!」^{コルビール・ミカド・テンポラレ}

「Xバーナー!」^{イクス}

巨大な刃物と化した死ぬ気の炎に、ツナの右手から大量の大空の死

ぬ気の炎が発射され、アメントの技がぶつかる。

だが少しづつであるが、ツナのXイクスBURNERが

アメントの嵐コルビレ・ミカド・テンポラーレ帝 斬を少しづつ破壊していく。

「な、なに!? 私の最強の技が!?!」

「死ぬ気の炎は覚悟の炎だ。そしてこれが俺の覚悟だ!」

そして嵐コルビレ・ミカド・テンポラーレ帝 斬が破壊され、同時にアメントの

嵐アステイール・フイアンマ・テンベスタ炎 槍も完全に破壊され、XイクスBURNERがアメントが

直撃した。

「こ、この俺がー!ー!ちくしょー!ー!」

そしてアメントの叫び声と共に、ついに決着がついた。

「終わったな。」

「あああ…」

海未はあまりのことに、腰をぬかせてしまっていた。

「大丈夫かみんな? ってどうしたんだ海未?」

「はい。私は大丈夫ですけど…海未さんがあまりのことに腰を抜かせてしまつて…」

「そうか。」

「ツ、ツナ君!? // //」

腰をぬかせてしまった海未を見つけると、ツナはそのまま海未をお姫様抱っこした。

「驚かせてすまなかつたな海未。それより怪我はないか?」

「は、はい…!! // //だ、大丈夫です…!! // //」

「ならよかつた。」

(ツ、ツナ君にお姫様抱っこされて…!! // //それに顔がこんなに近く…!! // //)

突然のお姫様抱っこに海未が顔を真っ赤していると、幻覚空間が解けていき、元いた場所に戻った。

元の場所に戻ると、額の炎が消え、ボンゴレギアが27と書かれた手袋に戻り、超ハイパー死ぬ気モードの状態を解除した。

「終わったなツナ。敵を逃がしたのは気にいらねえが、一件落着だ。というわけで海未、今日はツナの家泊まりにこい。」

「ええ!?!／／／」

「何でそうなるんだよ!」

終わった途端リボーンが提案すると、海未は顔を赤くし、ツナはつつこんだ。

「マファイアおれたちの戦いに巻き込んだんだ。これくらいしたっていいだろ。というわけで、ディーノ、ロマーリオ車持ってこい。」

「わかったぜ。ロマーリオいくぞ。」

「ボス。そっちから行ったら遠回りですぜ。」

「いいんだよ。遠回りしたほうが運動になるだろ。」

「それもそうだなボス。」

ロマーリオはディーノの言っている意味を理解し、車を置いてある場所へと遠回りで行った。

「んじや海未が泊まることは決定だな。ディーノとロマーリオが帰って来るまで、海未を抱えてろよツナ。」

「何でだよ!」

「これも修行だ。マファイアになる為のな。」

「マファイアは関係ないだろ! ユニからもなんとか言ってみよ!」

「頑張ってください沢田さん。」

「ええ!?!」

ツナはまさかのユニの返答に驚きの声を上げてしまった。一方で海未はディーノ、ロマーリオ、リボーン、ユニの気遣い? に気づいていたものの、ツナにもう少しお姫様抱っこされたいという欲求があったのか、ただ顔を真っ赤にしたまま黙っていた。

こうしてアメントとの戦いは幕を閉じた。

#標的 (ターゲット) 241 「ますます」

フィッツサッチイオーネファミリーのボスであるアメントとの戦いを終えて、デイーノの車でツナの家に向かっていた。

そして海未は車の中で自分の母親に電話をかけていた。

「あ、あのお母様ですか？」

『どうしたのですか海未さん？』

「じ、実はですね…!!／／／その…!!／／／ツナ君の家に泊まることになったのですが…!!／／／」

『あらーよかったですじゃないですか海未さん！沢田さんのご家族に結婚の許可を頂けるチャンスじゃないですか！』

「お、お母様?!／／／」

『お父様には私から話しておきますから、安心してください。沢田さんのご家族にご迷惑にならないようにしてくださいね。それと日舞・園田流の跡取り、楽しみにしていますよ海未さん。』

「な!?!／／／」

自分の母親の発言に顔を真っ赤にしてしまっていたが、海未の母はそのまま電話を切ってしまった。

「どうだった海未ちゃん？」

「ただ、大丈夫でしたよ!!／／／」

「ごめんね海未ちゃん、リポーンがいきなり無茶言っで。」

「い、いえ…!!／／／明日は日曜日で学校もないですから…!!／／／」
ツナはリポーンが急に自分の家に泊まりに来ないかということを書いたことについて、海未に謝った。

ちなみにリポーンはいつものように目を開けたまま、鼻ちようんを作って寝ていた。

そして15分ほどで、ツナの家に着いた。

「ここがツナ君の家ですか。」

海未は初めて来るツナの家を見て眩いた。海未は世界最強のマフィアの十代目なので日本のヤクザが住んでいそうな家を想像していたが、普通の家だったので、意外そうな表情になっていた。

そして

「あらー！またまたツナに可愛いお嫁さん候補が！」

「だから母さん！変なことを言うのはいつも止めてくれって言ってるだろー！」

「お、お嫁さん!?／／／」

いつものようにツナの母様である奈々がそう言っていると、海未も他のメンバーと同じく顔を真っ赤にしてしまっていた。

そして晩御飯もう少しで、できるから先にお風呂でも入ってと奈々に言われて、海未は最初は遠慮したものの入ることにした。

「はい。あなたの着替えよ。」

「あ、ありがとうございます。」

ビアンキに自分の寝間着を受け取ったあとお風呂場に向かい、湯船に浸かる。

「はあ…今日マフィアの戦いに巻きこまれたと思ったら、ツナ君の家に泊まることになるなんて…」

海未は湯船に浸かりながら、天井を見上げそう呟いた。

そして超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態のツナの姿を思い出した。

（ズルすぎです…!!／／／ただでさえ優しいのに…あんなかつこいい一面があるなんて…!!／／／）

口元まで湯船に浸かりながら、お姫様抱っこされたこと思い出した。

（そしてことりや絵里、そしてツバサさんがツナ君のことを好きになった理由はそういうことだったのですね…そしてあの真姫がツナ君のことを好きになったのも、あの姿を見たと考えれば、納得できま

す。）
そして海未はことり、絵里、ツバサだけでなく真姫がツナの好きに

なった理由が、^{ハイパー}超死ぬ気モードが原因だということを理解した。

(私はどうしたらよいのでしょうか!?!?!/ツナ君のことを好きになつてから私はいつもツナ君のことばかり考えてしまつていて:!!/!/コスプレ大会の時はツナ君に自分のことを見てもらいたい一心で、露出の多い服を着て:!!/!/スクールアイドル^{ミューズ}をやつた時できえそんなことをしたことがなかったのに:!!/!/でもそのぐらいツナ君のことが好きで、そしてあの姿を見て私は前よりもますますツナ君のこと好きになつている自分がいて:!!/!/)

海未はさらにツナのことを好きになつてしまつていることに気づいてしまつた。

そして以前、デイナーの車の中で電話した時に、自分の母親が言つていたことを思い出した。

『それと日舞・園田流の跡取り、楽しみにしていますよ海未さん。』
「な、なぜこの言葉を急に!?!?!/!/本当にいつも私はなぜこういうことばかり考へてしまうのですか!?!」

自分の母親の言葉を思い出して、海未はつい叫んでしまつた。
するとお風呂の扉が開かれた。

「どうしたの海未ちゃん! 叫び声が聞えたけど!」
「ツツツツツツ、ツナ君!?!/!/」

ツナがたまたまお風呂場の近くにいたこと、そしてお風呂という密室で叫んだことで声が反響したことによつて、海未に何かあつたのではないかと思つたツナをがやつて来てしまつた。

そしてツナは海未の裸を目撃し、海未は自分の裸体をツナに見られてしまつたのであつた。

そしてこの後どうなつたかは、ここでは語らないでおこう。

#標的(ターゲット) 242 「二つの疑問」

お風呂場での騒動があったあと、晩御飯を食べ終わると海未はツナと一緒にツナの部屋にて二人つきりになっていた。ちなみにユニはお風呂に入り、リポーンはお風呂場での騒動を知って、わざと1階^{した}でゆっくりとコーヒーを飲んでいる。

(き、気まずい：!!／／)

お風呂場での事件?のせいで、晩御飯の時もお互い顔を

見ることができず、視線を反らしていた。もちろん会話などできていない。

(俺はなんて最低なことを：!!／／海未ちゃん怒ってるよなー：!!／／)

(まさかあんなことになるなんて：!!／／で、ですが私があんなことと騒動して叫んでしまったから、あんなことになって：!!／／そもそもツナ君は覗きなんてするわけがないのに：!!／／)

二人とも心の中でさきほどのことを反省していた。

しばらく黙っていたものの、ここで

「あ、あの海未ちゃん!」

「は、はい!」

「さ、さつきはごめん!お、俺の早とちりでさつきは：!!／／」

「い、いえ!!／／私のほうこそすいません!!／／お風呂場で叫んでツナ君を心配させた私のほうも悪かったものですから!!／／」

勇気を出してツナがさつきのことについて謝ると、海未も挙動不審になりながら答えた。とにかくさきほどのことについては、一件落着となった。

そしてツナはアメントの戦いの時に聞いてきたことを思い出した。

「そういえば、まだ海未ちゃんの疑問について答えてなかったよね。

俺のあの姿について。」

「え…あれはつい驚いて聞いてしまったので…別に無理に答えなくて

も…」

「いや。ちゃんと言うよ。もうマフィアランドの時にも巻き込まれたんだし。本当なら全員にちゃんと話さなきゃいけないんだけど、あの姿を見てない人に説明するのは難しいからさ。かといってあの姿を見せる為にみんなも集めるのもアレだし。とにかく話すよ。」

未来の世界に行った時に京子やハルにボンゴレファミリーの十代目ことを隠していたことを思い出したのか、海未に正直に話した。

「まあこんなところかな。」

「そうなんですか。（まさかりボーン君のレオンから出てきたものだったんで…）」

もちろんツナの力にも驚いてはいたが、一番驚いたのはあの力がリボーンの相棒であるレオンが吐き出したというものだということであった。

こうして超^{ハイパー}死ぬ気モードのことについて

話すとユニがお風呂から上がったので、ツナも入りに行った。

そしてしばらくユニと話した後、海未はもう一つ気になっていたことを尋ねた。

「あの…!!／／前にことりからユニの予知に聞いたのですが…!!／／その…!!／／／」

「私の予知のが本当かどうかということですか？」

「い、いえーべ、別に信用していかないわけではなくて！」

「隠さなくていいんですよ。いくら私が予知能力がある

といっても信用するなんて普通無理ですから。一応、お答しますが、正直に私にもわかりません。未来は何かのきっかけで変わるものですから。それに私の予知がが外れたことがありませんが、外れないという保障もありません。」

「そうですか…」

「だから海未さんの頑張り次第では、海未さんとツナさんが結婚することもあるってことです。」

「わ、私とツナ君が結婚?!／／／」

結婚と聞いて海未は最大限まで顔を真っ赤にしてしまう海未。

この後ツナのベッドでユニと一緒に寝て、あまりに意識すぎて寝付
けず、なんとか寝れたと思ったらツナと結婚した夢を見たのだとい
う。

#標的（ターゲット） 243 「長いようで短い」

日曜日、時刻は午前8:00となった。朝御飯を食べたあと、海未はすぐに帰ることを決意した。

「もう帰るのか海未？」

「はい。いつもならもっと早く起きて稽古している時間ですので。大丈夫だとは思いますが、お母様やお父様を心配させたくないものですから。」

「そうか。じゃあツナにバイクで家まで送っていつてもらえ。」

「ええ!?!?!」

「今回フィッツサツチイオーネファミリーの奴らはユニを狙ってきたが、それでもマファイアの戦いに巻き込んだことには変わりはない。せめてもの償いだ。」

「で、ですが:!!!」

「それに残された時間は長いようで、短いぞ。」

「な、何がですか:??」

「ツナとおまえらs、そしてツバサのことだ。ユニの予知のことは聞いてんだろ? 1年という期間は長いようであつという間だ。あんまりとやかく言うつもりは

ねえが、うかうかしてる時間はねえぞ。」

「リボーン君:」

「ま、ただの家庭教師の戯言だ。別に忘れていいからな。」

そう言うとりボーンはツナの部屋を出ていくと、1階へと降りて行った。

（残された時間:）

そして海未はツナのバイクの後ろに乗って、自分の家まで送ってもらったこととなった。

(これがツナ君の背中…!!／／／とても温かい…!!／／／)

ことりや絵里と同じく、海未は想い人の背中ツナの温もりを感じていた。

「海未ちゃん。」

「は、はい!!／／／何ですか!?!／／／」

「いや…さつきからずっと黙ってるから大丈夫かなって思っちゃって…?」

「い、いえ!大丈夫です!」

「ならいいんだけど…そういうええいつもなら稽古して言ってたけど…」

「はい。幼少のから朝は早く起きて、毎日稽古しています。」

「え?じゃあスクールアイドルスズをやってた時も…というか海未ちゃんって弓道部の所属してるって言ってなかったっけ…?」

「はい。今はスクールアイドルスズは解散はしたので、以前より弓道部の活動に出ることが多くなりました。」

「ということは日本舞踊の稽古とスクールアイドルの活動と弓道部を同時にしてたってこと…?」

「そういうことになりますね。」

(海未ちゃんってすげー!)

自分もリポーンに無茶苦茶な修行という名の拷問を受けることはあるが、それでもそれだけのことをこなしている海未の凄さにツナは驚いてしまった。

「弓道部って試合とかあるの?」

「はい。でも音ノ木坂学院はそんなに強くない…」

「そっか。でも試合があったら俺、応援に行くよ。」

「お、応援に!?!／／／」

「あ…もしかして嫌だった？ごめん！無神経なこと言っちゃって！」

「い、いえ！そういうわけではなくて！まさか応援に来てくれるとは思ってもみなかったものですから…」

「そうだったんだ…じゃあもし試合があったら、教えてよ。みんなて応援に行くから。」

「え!?そ、そうですか！ありがとうございます！」

ツナが自分の為だけに応援しに来てくれることを想像していたのか、みんなで試合を応援しに行くと聞いて少しだけ海未は挙動不審になつてしまつていた。

そしてバイクで移動すること、20分。海未の家に着いた。

「着いたよ。」

「はい。ありがとうございます。」

お礼を言うと、海未はヘルメットを脱いでバイクを降りた。

「また音ノ木坂学院がっで会おうね。」

「はい。ではまた明日。」

そう言うとツナは再びバイクのエンジンをかけて、自分の家へと帰ろうとした。

その時であった…

『1年という期間は長いようであつという間だ。あんまりとやかく言うつもりはねえが、うかうかしてる時間はねえぞ。』

海未の脳裏に、リボーンの言った言葉がふと甦つた。

そして

「あ、あの…!!//ツナ君…!!//」

「何？海未ちゃん？」

「あ、あなたに…!!//言いたいことが…!!//伝えたいことが…!!//」

「俺に？」

「はい…!!//私、前からツナ君のことが…!!//その…!!//す、すい…!!//すに…!!//」

海未は一生懸命好きという言葉をおうとするも、緊張で好きという言葉を出すことができないでいた。

すると…

「あら？海未さん帰っていたのですか。」

「お、お母様!?!?!」

タイミングがいいのか悪いのか、玄関から海未の母親が出てきた。

「あら沢田さん。もしかして海未さんを家まで送ってくれたのですか?」

「はい。さすがに並盛からここまでだと距離があるので。」

「そうですか。家に泊まらせてくれた上に送り迎

えまで。ありがとうございます。」

「このくらい当然ですよ。」

「それにしても海未さんだったら、沢田さんの家に泊まるだけでなく、まさか朝帰りだなんて。私が

知らない間に成長していたのですね。」

「おおおお、お母様!?!?!わ、私は朝帰りだなんてそのようなことはけっして…!!?!?!」

「照れなくていいんですよ海未さん。」

「照れていません!!?!?!」

「朝帰りって何ですか?」

「朝帰りというのはですね…」お母様!!?!?!それ以上、言わないでください!!?!?!」

#標的(ターゲット)244 「音ノ木坂学院臨時美術教師」

そしてとうとう音ノ木坂学院での学校生活も最終日を迎えた。

まず1時間目は美術であった。

「俺は臨時の美術教師、リボナルド・ダ・ボーンチだぞ。」

(リボ山じゃなくて新しいパターンがきたー！)

最終日にてとうとうリボーンが、白い髭にベレー帽をつけてリボナルド・ダ・ボーンチと名乗り登場してきた。

(リボナルド・ダ・ボーンチ…)

(名前の由来はレオナルド・ダ・ヴィンチですね…)

(別に名前を偉人にちなまなくてよかったのでは…)

リボナルド・ダ・ヴィンチと名乗っているのがリボーンであることをわかつていることり、海未、ユニは何をやっているにだという目でリボーンを見ていた。

「あのたたずまい…凄い芸術家魂を持った人だ…」

ただいつものように、穂乃果だけはあれがリボーンだということに気づいていなかった。そして芸術がわからないのにもかかわらず、なぜか凄い芸術家だと感じとっていた。

「今日のお題はこれだぞ。」

そう言うとりボーンは黒板に『一番好きな物』と白いチョークで書いた。

「今日は自分が一番好きな物を書いてもらうぞ。食べ物でも、風景でも、好きな漫画やアニメのキャラでも、自分が恋い焦がれる人物でも、彼氏でも何でも構わねえ。とりあえず自分の好きな物を書いてみる。」

「「「はーい。」」」

クラスメイト全員が返事をした。すぐに筆を動かす人ち何を書く

か考える人たちに分れた。

「好きな物か…何を書こう？」

ツナが両腕を組んで、何を書くか悩んでいた。

するろヒデコがツナに話かけてきた。

「何悩んでるのツナ君。ツナ君が書くべきものは最初から決まってるでしょ。」

「え？」

「ツナ君の彼女にして、将来の結婚相手である穂乃果でしょ。」

「二ヶ、結婚相手!?!／／／」

ヒデコが表情をニヤニヤさせながらそう言うと、二人は顔を真っ赤にした。もちろんこれを聞いた海末とことりも動揺してしまっており、ユニはニコニコとしているだけであった。

「さすがツナ君だね。」

「熱いねー。」

「ラブラブカップルだわ。」

「フミコちゃんとミカちゃんまでいいから！そしてリボンおままで参加するな！」

フミコとミカだけでなく、いつの間にか音ノ木坂学院の制服を着替えているリボンにツナはツッコミをいれた。

そして冷やかされながらも、授業は進んでいき…

「うわあ！かっこいい！」

「ユニちゃん誰それ!？」

「私の想い人です。」

ユニは自分のファミリーである、Yを書いており、他の女子生徒からは絶賛の声が上がっていた。

（で、できたけど…!!／／／）

（な、なぜこのようなことに…!!／／／）

（あああ…!!／／／秘密だつてツナ君に言われてたのに…!!／／／）

穂乃果と海末とことりは言うまでもなく、ツナを書いていた。穂乃果は普通であったが、海末の書いたツナは一昔前のラブコメの主人公みたいな画風になっており、ことりの書いたツナはスーツを着ており

ハイパー
超 死ぬ気モードの状態を書いていた。

「穂乃果ちゃん、海未ちゃん、ことりちゃんできた？」

「うわああああ!!／／／」

「ど、どうしたの穂乃果ちゃん!?海未ちゃん!?ことりちゃん!」

ツナが海未とことりに調子はどうかと尋ねると、3人は

大声を上げながら書いていた紙を、細かく破り裂いた。

「どうか何で破ったの!?できてたんじゃ…」

「い、いえ!ちよつと目の部分が気にいらなかったものですから!!／

／／

「わ、私は鼻の部分が気にいらなかったから!!／／／

「わ、私も!!／／／」

「そ、そうなの…?ならいいんだけど…3人とも芸術家魂があるんだね…」

あまりの芸術家魂にツナは少しだけ引いてしまったが、

ここであることに気づいてしまった。

「目と鼻ってことはもしかして、3人とも好きな人を書いたってこと?」

「「そ、それは…!!／／／」」

「そりやもちろん、3人が書いたのは愛しのツ…」

「「言つちやダメー!ー!!／／／」」

「何で俺!?!」

ヒデコが表情をニヤニヤさせながら言おうとすると、なぜかツナが突き飛ばされてしまったのであった。

#標的 (ターゲット) 245 「体育倉庫」

時は過ぎていき、5時間目。

「はあ…体育か…」

ツナは体操着に着替えたツナが廊下をため息をつきながら歩いていた。

「たださえ体育は苦手なのに…それもサッカーか…」

この1週間で体育は何度かあったが、みんなの前でかつこ悪いところを見せている為、ツナは憂鬱なのであるが一番は想い人の前でかつこ悪いところを見せてしまったことが一番の原因なのである。

グラウンドに向かう為、しばらく廊下を歩いていると。

「あ、ツナさん。」

「雪穂ちゃん。」

「今から体育ですか？」

「うん。雪穂ちゃんは？」

「私は今から理科の授業です。だから移動教室なんです。」

「そうなんだ。」

二人は互いに次の授業がなんなのか確認した。

そして雪穂がいつものように、表情をニヤニヤさせながら尋ねてきた。

「それで？この1週間でお姉ちゃんと進展はありましたか？」

「ええ…!?!/!/いやあ…それは…!!/!/」

「その様子だと何もなかったみたいですね。まあわかってましたけど。」

「そんな冷たい目で見ないで雪穂ちゃん！」

自分のことをもの凄い冷めた表情で見ながら、そう言う雪穂にツナ

はツツコミをいれた。

「でも音このノ木坂学院がっこうにいるのも今日が最後なんですよ。並盛と音ノ木坂は距離がそこまで離れてませんけど、ツナさんだって受験とかで忙しくなるから、告白するのは早いうちのほうがいいと思いますよ。」

「そ、それは…」

「じゃあ、私はこれで。」

珍しくツナをいじらず雪穂はが去っていくと、ツナは雪穂の言葉を受けて少し立ち止まったまま穂乃果に告白することについて考えていたが、すぐに体育が行われるグラウンドへと向かっていった。

そして体育が始まったが…

「ツナ君！パス！」

「オ、オツケ…うわっ！いでっ！」

「ツナ君！」

「沢田さん！」

穂乃果からパスをもらうが、ツナはボールの上に乗ってしまい、そのまま滑って地面に頭を強打してしまった。

この後もボールが顔面に当たったりして、結局穂乃果の前でかっこいいところを見せることはできなかった。

そして授業が終わり、ツナは穂乃果と一緒に体育倉庫に使ったボールを籠にいれて片づけに行く。

「ツナ君、大丈夫？」

「うん…なんとか。」

強打した頭の部分さすりながら大丈夫だとは言ったものの、まだ痛みが少し残っている様子である。

そして体育倉庫に着くと、二人はボールの入った籠を所定の位置に戻した。そして教室に戻ろうと、体育倉庫を

出ようとした時…

ガチャ

「え？い、今の音って…まさか…」

「どうしたのツナ君？」

嫌な予感がしたツナは、慌ててツナが体育倉庫の扉を開けようとする

るも、開く様子がなかった。

「あ、開かない…」

「ええ!？」

「俺たち閉じ込められちゃったみたい…」

「どどどうしよう! 携帯は教室に置いてきちゃったし! もうこのまま体育倉庫で生涯を終えちゃうってこと!？」

「お、落ち着いて! 穂乃果ちゃん! 次に体育の授業で誰か来るかもしれないし、最悪放課後になれば、部活で誰か開けてくれるはずだから!」

「あ! そっか: それなら大丈夫だよね…」

どうしようと慌てていた穂乃果であったが、ツナの言葉を聞いて、すぐに我に帰った。

すると二人はあることに気づいた。

(ん? この状況って穂乃果ちゃんとまさか…)

(ツナ君とまさか…)

(二人つきりってこと!?! / /)

ここに来て二人は体育倉庫で二人つきりの状況になったということに気づいた。

少し待つと6時間目の開始のチャイムが鳴るが、誰も体育倉庫に誰も来る気配はなかった。

「誰も来ないね…」

「こりや6時間目は誰にも出られそうにないね…」

「でもこうやって授業をサボるのも悪くないかもね。」

「でも穂乃果ちゃん、授業中寝てること多いよね。特に座学の時とか。」

「もう言わないでよ! 本当のことだけど…」

頬を可愛らしく膨らませて言うが、実際本当のことなので、すぐに膨らませていた頬をすぐに戻した。

そして体育のマットの上に二人は座って話し始めた。

「最初、ツナ君とユニちゃんが驚いたけど、でも今日でいなくなるって思うと寂しいな。」

「穂乃果ちゃん…」

「あ！そうだ！せっかくだしことりちゃんのお母さんに

頼んでみよっか！このまま二人を音ノ木坂学院に通わせてあげてって。」

「いや穂乃果ちゃん…ユニはともかく、俺は絶対に無理…いやことりちゃんのお母さんならいいって言いかねないような…」

いくらことりの母がいくらいいい人でも、音ノ木坂学院（じよしことう）に自分を通わせてくれるとは思えないが、それでも許可しそうなのでツナは複雑な気分になってしまっていた。

そしてツナは気になっていたことを穂乃果に尋ねた。

「ねえ穂乃果ちゃん。好きな人とは何か進展あった？」

「へ!?!//」

「い、いや!!//あれから時間も経ったから、気になちやって!!////べ、別に言いたくなかったらいいんだよ!!//」

自分がこの状況でなぜこんなことを聞いたのかと思ひ直したツナは、慌てて前言撤回した。

「と、特にないかな!!////そ、そういうツナ君は!?!//」

「お、俺!?!//お、俺も特にこれっというた進展はなかったよ!!////」

「そ、そうなんだ!!////じゃあ!!////お互い頑張らなきゃね!!////」

「そ、そうだね!!//」

相変わらず鈍感である二人は、今だに両想いだということに微塵に気づいている様子はなかった。

そしてこの後、さまざまなことを話していると6時間目の終了のチャイムが鳴った。

「チャイム鳴っちゃったね。もう少しで放課後だね。」

「そうだね。あれ？でも考えてみれば、俺たちがいなくなったら普通心配して探しに来る気がするけど。少なくとも誰かが気づくと思うんだけど。」

「細かいことはよくわからないけど、授業を休めたからよかったよ

ね。」

「そんなに勉強が嫌なの穂乃果ちゃん…？まあ俺も嫌いだからアレさけどさ…」

穂乃果の発言に若干、呆れてしまうツナであったが、自分も勉強が嫌いなので穂乃果の気持ちをわからないわけでもなかった。

「うーん！あー気持ちいい！」

ずっと座っていたせいか体に負担がかかっていたので、穂乃果はおもいつきり両腕を伸ばした背伸びした。

背伸びした後、穂乃果は体育倉庫の扉に近づいた。

「案外、私たちが話してる間に開いて…ないね。」

「ははっ。さすがに開いてたら気づくよ。」

「それもそうだよね。きゃー！」

「わっ!？」

もしかしたら扉が開いているのではないかと思った穂乃果は扉を確認して開いていないことを確認した後、再び体育マットの上に座ろうとしたが、つまずいてしまった。

そして…

「え!?!／／／」

穂乃果がツナの上に覆い被さってしまうという状況になっていた。

（ほ、穂乃果ちゃんの体が…!!／／／肌が…!!／／／つて俺は何を考えて…!?!／／／）

穂乃果は今、体操着を来ている為、いつもより露出が多い為、ツナは穂乃果の体をじかに感じている。

そして黙ったまま、どうこうとする感じが見られない穂乃果に違和感を覚える。

「穂乃果ちゃん…？」

「ねえツナ君。さつき好きな人と進展があつたかつて聞いよね？」

「え…う、うん…そうだけど…」

「どうやら進展はあつたみたい。たつた今…!!／／／」

「え!?!／／／」

「あのね…!!／／／私ずっとツナ君のことが…!!／／／」

「ほ、穂乃果ちゃん!?／／／」

ツナの上に覆い被さったまま告白しようとする穂乃果。

一方でツナはま、まさか…と思っってしまった。

そして

「ツナ君！穂乃果ちゃん！大丈夫…えええ!?／／／」

「リボン君から体育倉庫で二人の声が…ってな、何やっているんですか!?／／／」

「海未ちゃん!?／／／ことりちゃん!?／／／」

タイミング悪く、ここでことりと海未がやって来てしまい、告白どころではなくなってしまう。

「あなたたち、授業に来ていないと思ったたらこんな破廉恥なことを!?／／／体調を崩して保健室にいたという話は嘘だったのですね!!／／／」

「え!?誰がそんなことを!?ま、まさか…!?」

ここで誰も自分たちを探しに来る様子がなかったのは、裏でリボンが暗躍していたのだということをつなはここで理解した。

そしてさらに…

「海未ちゃん、ことりちゃんどうしたの…はあああああ!!／／／」

「かよちゃんどうしたのか…にやああああ!!／／／」

「何よどうしたのよ…な!?／／／さ、最低!!／／／」

ここでさらにタイミング悪く、花陽、凜、真姫がやって来てしまった。

こうして音ノ木坂学院に体育倉庫にて、ツナと穂乃果が授業をサボってまでイチャイチャしていたという噂が流れてしまったのであった。もちろん体育倉庫に鍵をかけたのも、その噂を流したのは誰かということはないだろう。

#標的（ターゲット） 246 「最後のHR（ホームルーム）」

リボーン戦略によって、ツナと穂乃果は6時間目の授業が保健体育の補習になってしまった。結局、リボーンのせいで告白は有耶無耶になってしまった。

そしてツナとユニは音ノ木坂学院での、最後のHRホームルームを受けた。

「えー。お前らも、もうわかっていると思うが沢田とユニが音ノ木坂学院にいられるのは

今日は最後だ。というわけで二人からの別れの挨拶だ。」

担任の山田先生がそう言って教壇から離れると、ユニが教卓の教卓の上に乗って別れの挨拶を始める。

「1週間という短い間ですが、本当にお世話になりました。みなさんと過ごした音ノ木坂学院での学校生活はとても楽しくて、私にとって最高の思い出になりました。短い間でしたが、私はみなさんと過ごした日々を絶対に忘れません。私は音ノ木坂学院のこと、そしてみなさんが大好きです。本当にお世話になりました。」

ユニが涙目になりながらそう言うのと、クラス中から拍手が起こり、ユニとの別れを惜しむあまり涙している生徒も多くいた。

「うう…ユニちゃん…グスツ…」

「穂乃果…気持ちばかりですが…」

「ティツシユれ使って穂乃果ちゃん…」

「あ、ありがとうことりちゃん…グスツ…」

特に穂乃果は涙を流すだけでなく、鼻水を流しており、海未とことりは少しだけ引いてしまっていた。そして穂乃果はことりから貰ったティツシユを使って、涙と鼻水を吹き、その様子を見ていたツナとユニはどういう反応していいのかわからず、苦笑いしてしまっていた。

そして次はツナと出番となったが…

(どうしよう…なんて言おう…)

ユニの別れの挨拶でもの凄い感動的になった後の出番だったので、あまりにも薄い内容の別れの挨拶も言えない状況になってしまったので、ツナは少しだけ困ってしまっていた。

(そんな感動的な内容にならなくても、音ノ木坂学院このがっこうで感じたこと、見たことをそのまま言ったらいいか。)

そう心の中で決意すると、ツナは教壇の立つと別れの挨拶を始めた。

「えー。あまりこういうのは苦手なんですけど正直、男の俺が音ノ木坂学院このがっこうに来るなんて思ってもみなくて…まあみんなも男の俺と一緒に学校生活を送るなんて戸惑ったと思いますけど、それでもとっても楽しい学校生活でした。正直、みんなと別れたくない気持ちもあります。まあどんなに言っても俺は並盛に戻らないといけないし、別れの挨拶でこんなことを言うのもアレなんですけど、並盛町は隣町なので会おうと思えばすぐに会えるので、もしよかったら並盛に遊びに来てください。とにかくこの1週間、とっても楽しかったです。俺もユニと同じで音ノ木坂学院このがっこうとみんなが大好きです。本当にありがとうございました。」

そう言うと再び、クラス中から拍手が起こった。

するとヒデコが…

「穂乃果のことが世界で一番大好きですって、言わなくていいのーツナ君?」

「それは今、関係ないでしょヒデコちゃん!?!/!/」

ツナはヒデコの言葉に顔を真っ赤にしてしてしまい、この一言でクラス中が爆笑した。

こうしてツナとユニの音ノ木坂学院での学校生活は幕を閉じた。この後、二人の為にクラスのみんながお別れ会を開いてくれたのだという。

そして音ノ木坂学院での学校生活が終わって、ユニもイタリアへと帰って、また並盛高校での学校生活が始った。

「はあ…今日も疲れた…」

並盛高校に戻ったのはいいが、それはまたハチャメチャな生活が再び始まることを意味しており、ツナは並盛高校から下校してからグツタリとしていた。

「ちよつと前まで音ノ木坂学院で平和な学校生活を送っていた日々が懐かしいよ…」

「マフィアに平和な日々なんてないからな。あるのは血で血を洗う戦いだけだぞツナ。」

「だからマフィアに話を繋げるのは止めろって！」

「それよりユニからメールが届いたぞ。ちゃんとγと仲直りできたみたいだぞ。」

「そうなんだ。よかった。」

「あと、γからお前へのメッセージがあつたぞ。」

「γから？」

リボンがスマホを見せると、そこにはメイド服姿のユニの写真があり、その下にはγからのメッセージがあつた。

『ボンゴレ、姫に何を教えた？もしかしてお前の趣味とかじゃないだろうな？』

と怒りのメールが送られていた。

「いやいや！俺のせいじゃないから！」

「お前の趣味だって、さつき送つといたぞ。」

「勝手に返事するな！」

こうしてまたハチャメチャな生活に逆戻りしたツナ。

音ノ木坂学院に戻りたいと後悔したいと思うまで、時間がかからなかったという。

6月篇

#標的（ターゲット） 247 「ツバサ襲来」

6月に入り一番始めの休み。ツナはいつものように家でのおんびりしていた。すると家の玄関のインターホンが鳴った。

「ツナー。ちよつと今、手が離せないのー。代わりに出てくれない？」

「わかったー。」

一階したの台所から奈々がそう言ったので、ツナはゆつくりと起き上がると、階段を降りて玄関に向かうと玄関の扉を開けた。

「はい。どちら様です…ええええ!?!」

「こんにちわツナ君。」

「ツ、ツバサさん!? な、何で家うちに!?!と、とりあえず早く上がってくださいー!」

自分の家にアイドルツバサが来ているところを一般の人に見られたら、大変だと思ったツナはツバサをすぐに自分の部屋へと招いた。

「ごめんなさいね、急に来ちゃって。ツナ君を驚かせてみたかったの。」

「い、いえ! 大丈夫です!」

大丈夫だと言うツナ。今までマフィア関係者が家に来たことはあっても、アイドルが家にやって来るなんて初めての経験であったので、もの凄い緊張しているのか自分の部屋なのにも関わらず正座していた。

「意外と普通の家なのねツナ君の家って。マフィアのボス候補だって聞いてたから、もっと怖い人たちが家にたくさんいるのかと思ってたわ。」

「そう考えなくなるのもわかりますけど…俺の家はこの通り普通の家です…外見だけは…」

「外見だけ?」

外見だけという言葉にツバサが疑問符を浮かべたが、ツナはこの家にはヤグザなんかよりも恐ろしい居候（せんざい）がいると思っただが、あえてそのことは言わずに心の中に留めることにしようと思っただ。

そして本題に入る。

「それでツバサさん…何で家（うち）に？」

「今日から少しの間、仕事が休みなの。だからツナ君をデートに誘いに来たの。」

「へーそうなんですか…ってデデデデート!?／／／」

一瞬デートと聞いて普通に聞き流していたが、時間差でデートという単語の意味を理解し、驚きのあまり腰をぬかしてしまっていた。

「あら。そんなに驚くことかしら。」

「お、驚きますよ!!／／／デートに誘われたことなんてないんですから!!／／／というかつバサさんはアイドルなんですよ!!／／／そんなことしたら…」

「わかってるわよ。」

「へ!？」

「わかってるからこそ、ここに来たの。ツナ君とデートする為に。」

「で、でも何で俺と…!？」

「何でって。私はツナ君のことを異性として好きだからよ。女の子が男の子をデート誘う理由って他にあるかしら？」

「ええええええええええ!!／／／」

まさかツバサが自分のことが好きだということ、そして突然の告白に、顔を真っ赤にしながら驚きの声を上げてしまった。

「ツバサさんが俺を!?／／／え!?え!?／／／どういうこと!?／／／何で!?／／／」

「フフッ！ツナ君って可愛い。」

ツナがあまりにも動揺している姿を見て、ツバサはクスクスと笑ってしまっていた。

そしてツバサはさらに続ける。

「私のことを二度も助けてくれたし。助けてくれた時の姿がとってもかっこよかったわ。それに私のタイプは年下なの。だからツナ君は

ドストライクなのよね。」

「え!?!/ /もう:!? / /何がなんだか:!? / /」

「ツ、ツナ君!?!」

次々に好きだというアピールしてくるツバサに、耐えられなくなったのか、ツナは顔を真っ赤にして頭から煙を上げてしまっていた。

「まったく情けねえぞダメツナが。そんなんで一々、動揺してたらマフィアのボスになんてなれないぞ。マフィアは常に冷静じゃないといけないんだぞ。」

「リボン!」

「あらリボン君。ツナ君の家を教えてくださいありがとうございます。」

「気にすんな。」

「ええ!?! どういうこと!?! リボンがツバサさんに家を教えたってこと!?!」

「ああ。ツバサがツナをデート誘うという情報を手にいれてな、だから俺が教えたんだ。それとデートの準備はばっちりだぞ。」

「ま、まさかこれって…」

リボンが2枚のチケットを取り出すと、ツナはこのチケットが何のチケットであるかを理解した。

「マフィアランドのチケットだぞ。」

「やっぱり!」

「マフィアランド?」

「マフィアランドはマフィアがまっさらな気持ちで休めるように、色々なマフィアがドス黒い金を出しあって作ったスーパリゾートドリームアイランドだ。」

「それ大丈夫なの…?」

ツバサは、ドス黒い金を出しあって作っていると聞いて不安になってしまった。

「安心しろ。マフィアランドは善良なマフィアが金を出しあってる上に、強力な妨害電波で察知されないようになってる。これならお前を追ってくる奴もいねえし、マフィアランドの客のほとんどは裏社会の人間だから、お前のことを知る奴もいねえ。だから騒ぎにならずに、

ゆっくりと休めるぞ。」

「じゃあ、大丈夫ね。」

「ま、待てよ！そう言いながらも、いつつも襲撃されてるだろ！」

「大丈夫だ。前にスカルの野郎が襲撃した時に、同時にマフィアランドを狙っているファミリーの情報を吐かせた。そいつらをボンゴレファミリーが最近、監視してる。だから以前より危険性はゼロといていい。というわけだ。ツバサとデートしてこい。」

「ま、待てって！俺はそもそもデートするなんて一言も…」

「ダメなの…？」

「え…!？」

するとツバサが切なそうな表情になりながら、ツナのことをジーツと見つめ、そんなツバサを見たツナは戸惑ってしまった。

「やっぱりアイドルの私とじゃ嫌かしら…？」

「え、えっと…それは…」

結局、この後ツナは断りきれずにツバサとのデートを了承したのであった。

#標的（ターゲット） 248 「自分の与えた影響」

突然ツバサとマフィアランドデートすることになったツナ。そして港にてマフィアランド行きの船が来るのを待っていた。

「ツナ君とデート♪」

そしてツバサはツナとデートできることが嬉しいのか、上機嫌な様子で船が来るのを待っていた。

（ほ、本当にツバサさんとデートすることになるなんて…ほ、穂乃果ちゃんたちにバレたらどうなるんだろう…）

ツナはまさかツバサとデートすることになったことに、今だに信じられない気持ちになっていた。もしデートしていることが穂乃果たちバレたら、前にツバサがキスされた写真をリポーンに公開された時と同じように、大変なことになるだろうと思ってしまう。ツナにとっては世間にバレるより、穂乃果たちにバレるほうが恐ろしいのである。

「安心しろツナ。穂乃果たちには、さつきツバサとデートすることはバラしておいたぞ。」

「んな!?!」

「穂乃果たちどんな反応するかしら。」

いつものようにリポーンに先手を打たれて、ツナは絶望的な表情になっており、このデートが終わったらまたとんでもないことになりことが簡単に想像できてしまった。一方でツバサは穂乃果たちがどんな反応をするか楽しみにしている様子であった。

すると…

「ツバサー。」

「デートするという情報は本当だったようだな。」

「あんじゅ!?!それに英玲奈まで!?!」

「な、何でここに!?!」

突然港はあんじゅと、英玲奈が現れ、まさかこの二人が来るとは思ってもいなかったのか、驚きを隠せていない様子であった。

「ついでだから、あんじゅと英玲奈にもチケット送っておいてやったぞ。お前ら程よい緊張を保つ為にいつも遊んだりしないそうだが、たまにはこういうのも悪くないだろ。マフィアランドは裏社会だからA—R—I—S—Eおまえらのことを知らない奴がほとんどだ。だから人目を気にせずゆっくりできるぞ。」

「チケットを送ってくれたことには感謝するのだが…そもそもなぜ私たちの家を知っているのだ…?」

「とうか私たちがあまり遊ばないことを知ってるの…?」

「気にしちやダメです英玲奈さん、あんじゅさん…」

色々と自分たちの情報を知られていることに二人は驚きを隠せなかったが、リボンと長い付き合いであるツナはもうツツコミすることもしなかった。

しばらくするとマフィアランド行きの客船がやって来ると、全員船に乗り込むと甲板に出て景色を眺め始めた。

「綺麗…それに人目を気にせずこんなのにんびりできるなんて久しぶりね。」

ツバサは豪華客船から眺める景色を見てうっとりしていた。そんなツバサの後ろ姿を少し遠くから、見守りながら微笑んでいた。

「幸せそうねツバサ。」

「あんなツバサを見るのは久しぶりだな。」

「え…ツバサさんっていつも幸せじゃないんですか…?」

「そういう意味じゃないわ。アイドルとしてじゃなくて、ただの一人の女の子として楽しんでる姿を見るのは久しぶりってこと。」

「そ、そういう意味か…」

「でもあんなに幸せそうなツバサを見ることができるのは、きつとツナ君に出会ったおかげね。」

「え!？」

あんな幸せそうなツバサを見ることができた原因が、自分であることに驚きを隠せなかった。

「君に出会ってからツバサは変わったよ。君と出会ってから、ダンスや歌にさらに磨きがかかった。」

「ツナ君との出会いが、ただでさえ凄いツバサをさらに成長するきっかけになったのよ。」

「俺が…ツバサさんを変えた…?」

英玲奈とあんじゅから自分がツバサが及ぼした影響に、驚きを隠せず、固まってしまっていた。

「ツバサは君に特別な感情抱いている。だからこれからもツバサをアイドルとしてじゃなくて、一人の女の子として見てやって欲しい。そしてツバサの気持ちを受け止めてやってくれ。」

「ツバサさんの気持ち…」

英玲奈がそう頼むと、ツバサが家で大胆に告白してきたことをツナは思い出した。

（俺は穂乃果ちゃんのが好きで…でもツバサさんはアイドルという立場でありながら俺のことを好きだって…）

ツバサからの告白を受けて、迷ってしまうツナ。

ツナの出す答は…

#標的（ターゲツト） 249 「マフィアランド再来」

そして豪華客船に乗ってしばらくすると、マフィアランドに着いた。

「着いたぞ。」

「ここがマフィアランド…」

「思っていた以上ね…」

「本当にこれをマフィアが作ったのか…」

思っていたよりもマフィアランドが凄かった為、ツバサ、あんじゅ、英玲奈は衝撃的であった。そんな3人を見てツナはそういう反応になるよなー…という気持ちになっていた。

そして豪華客船に降りると…

「また来たのかボンゴレ！」

「スカル!?何でここに!?!」

カルカツファミリーの軍師であり、元最強の赤ん坊アルコバレーノであり、さらにリボーンのパシリであるスカルがなぜか出迎えてきた。

さらに

「真面目にやれスカルコラ！」

「コロネロまで!?!何でここに!?!」

そしていつもは裏マフィアランドにいるはずの、コロネロまで出てきた。

「可愛いわね。リボーン君のお友達？」

「友達じゃねえぞ。腐れ縁と俺のパシリだ。」

「その通りだぜコラ！」

「誰がパシリだ!おい聞いているのかりボーン！」

そうリボーンが答えるとコロネロはリボーンと頭突きあいさっを始め、スカルはパシリだということを否定するが、無視されてしまっていた。

「これはこういう状況なのだ…?」

「簡単に言うとりボーンとあのライフルを背負っているコロネロの挨拶代わりの頭突きです。スカルは…そのままの意味です…」

「そのままの意味とは何だ！否定しろボンゴレ！」

パシリという部分を否定しなかったことにスカルは怒るが、ツナからすれば正直どう言えばいいのかわからずそう言ったのである。

そしてリボーンとコロネロの頭突きを終え、A—R—I—S—Eの3人と自己紹介すると、額から煙を上げたコロネロがスカルがここにいる理由を述べる。

「こいつらが襲撃したペナルティとして、カルカツサファミリーにマフィアランドマフィアのランドの護衛兼スタッフとして働いてもらっているわけだから！」

「そういうことか…」

「それにしてもツナ。また彼女を連れてきたのか、もしかしてツバサと付き合ってるのか？」

「な、何言ってるの!?!?!」

「そうなの。ツナ君は私の彼氏なの。」

「ツ、ツバサさん!?!?!」

コロネロが表情をニヤニヤさせながらそう言うと、ツバサはツナの腕に絡みつきなながらそう言った。

「俺はてつきり絵里だと思ったんだがな。」

「あ、あれは！助けたただだから！」

「相変わらず照れ屋だなコラ。まあいい、スカル行くぞコラ！まだ護衛の仕事は終わってねえぞコラ！」

「ちくしょー！覚えてろー！」

ツナをいじり終えると、コロネロはスカルと共に護衛の仕事に戻っていった。

「さて話はすんだし、俺は入島手続きに行ってくる。お前らは遊びに行っていていいぞ。」

「そうなの?じゃあツナ君、ツバサのことをよろしく頼むわね。私は英玲奈と一緒に行動するから。」

「ツバサはデートを楽しんでくれ。」

「ええ!？」

「ありがとう英玲奈、あんじゅ。じゃあ行きましようツナ君。」

「あーちよつとツバサさん!」

ツバサは英玲奈とあんじゅにお礼を言ったあと、ツナの手を引つ張つて、マフィアランド内へと走って行ってしまった。

「本当に楽しそうねツバサ。」

「ああ、そうだな。」

「まああれぐらいやってくれるほうが、面白いけどな。」

「あれ?入島手続きに行ったんじゃないの?」

なぜかあんじゅの隣に入島手続きに行ったはずのリボーンが、隣にいた。そしてリボーンはスマホを少しいじると、すぐに懐にしまった。

「これでよし。」

「何をしたのだ?」

「さつきツバサがツナの腕に絡みついた時、こっそり写真を撮っていたのを、μ、sのLINEのグループに送ったんだぞ。これであいづらがどんな反応をするかを見るのが今の俺の楽しみなんだな。」

「悪魔か君は…」

「違えぞ。俺は殺し屋だ。」

μ、sとツバサの11角関係を楽しんでいることに、英玲奈はちよつと引いてしまっていたが、リボーンは何も言わず、ただ楽しそうな表情をしていた。

「さてと、尾行開始するか。お前らも来るか?ツバサが気になるだろう?」

「それは…」

「まあ…」

リボーンが尾行に誘うと、英玲奈とあんじゅは戸惑ってしまうが、ツバサのことが気になっているのは事実なので迷ってしまっていた。今、マフィアランドでのツバサとのデートが始まる。

#標的（ターゲット） 250 「リボーンの企み」

マフィアランド内でどのアトラクションに乗ろうかと、迷っているツナとツバサであったが…

「あの…ツバサさん…?」

「なーにツナ君?」

「あの…いつまでこの体勢で…」

さつきからずっと自分の腕に絡みついたままで、行動しており、いつまでこの体勢でいればいいのかとツナは思っていた。

「そりやもちろんずっとよ。片時も離れたくないわ。」

「ええ!?!」

「やつぱり…私とじゃ嫌…?」

「え…いや…その…」

ツナのと家と同じくツバサが切ない表情で見つめてきたので戸惑ってしまった。一方でツバサはこれがツナの弱点だということを改めて理解し、この手は使えるわねと思っていた。

（まあ…ツバサさんとデートすることはリボーンのせいであつたが知られちゃったけど…でもデートの様子はわからないから大丈夫…じゃないよな…）

いくらデートしていることを知られても、その様子まで穂乃果たちに知られることはないだろうと思いたいツナであつたが、リボーンがどこで見ているのかわからないので油断はできなかった。

そしてツナの予感当たる。

「よし。これでツバサの台詞を録音完了だ。」

「録音というか…それは盗聴というのではないか…?」

リボーン、英玲奈、あんじゅが二人のあとをつけていた。そしてリボーンは二人の会話を盗聴機にて盗聴していた。

「と…というかいつの間に…?」

「豪華客船に乗ってる時にツナの体に盗聴機を仕掛けておいた。これで穂乃果たちに音声が送れる。後はツバサの許可が降りれば問題ねえな。」

「ツナ君の許可のいらないの…?」

「生徒じゃないのか…?」

ツバサにはちゃんと盗聴このことをちゃんと話そうとしているのにも関わらず、ツナには盗聴このことを話さないことにあんじゅと英玲奈は少し引いてしまっていた。

「だが送った写真を見て、μ sの誰かがLINEしてきたらツナ君にバレるんじゃない?」

「その点は問題はねえ。ツナに盗聴機を仕掛けた時に、ツナのスマホのLINEの通知をオフにしておいた。まあそうしなくても、ツナに俺が捕らえられるわけねえけどな。」

「…」

この発言で、英玲奈とあんじゅは本当にリポこーン子は本当に家庭教師なのか…?と思ってしまうていた。

そして場面は戻ってツナとツバサは…

「ねえツナ君。」

「な、何ですか?」

「私のことツバサって呼んでくれない?」

「ええ!?そ、そんな…」

「今日だけでいいの。お・ね・が・い♡」

「わ、わかりました…ツバサさ…ツバサ。」

今度は切ない表情ではなく、甘えた声で言ったあとにウィンクしてきたので、これはこれで断ることができなかった。

「フフッ!ありがとう、ツナ!あ!アレに乗りましょうツナ!」

「え、ええ!?!ちよつとツバサさん!」

再び、ツナの腕を引っ張っていくツバサ。そしてこの後もツバサに主導権を握られながらもデートを続行していく。

そして昼になったので、近くの飲食店にて食事することにした。「やっぱりツナとのデートは楽しいわ。」

「そ、そうですか。あ、ありがとうございます。」

何も照れることなくそう言うツバサに、ツナはどうしても挙動不審になってしまっていた。デートが楽しくないわけではないが、ツバサが自分のことを好きだということはどうしても意識してしまうからである。

「ごめんなさいね。私ばかり、主導権を握っちゃって。」

「だ、大丈夫です！俺も楽しいので！」

「優しいのね。ますます好きにまっちゃいそう。」

「な!?!／／／」

そう一言だけ言っただけで、顔を赤くしたツナを見てそのあとツバサは微笑むながら可愛いと一言だけ呟いた。

すると店員がツナたちの前に現れ、ジュースの入ったコップを運んできた。

「あの…頼んでませんけど…」

「あちらのお客様からです。」

店員が指をさした先のほうを見ると、そこには二人をニヤニヤしながら見ているリボンと、もの凄く申し訳なさそうな表情になりながら、別のところを見ている英玲奈とあんじゅがいた。

（またお前か！というかここはBARじゃないんだよ！普通の飲食店なんだよ！というか英玲奈さんとあんじゅさんも尾行してたの!?!）

普通の飲食店であるにも関わらず、いきなりジュースを差し入れたってきたこと、英玲奈とあんじゅに尾行されていたことに驚いてしまった。

そしてリボンの差し入れてきたジュースを見て、あることに気づいた。

「あれ？ストローは二つあるのに…コップが一つしかない…」

店員が持ってきたジュースは一つのコップにストローが二つ入っているものであった。ツナはこれが何を意味しているのかわからず、疑問符を浮かべていた。

ツナがこの意味がわかっていないことを察したツバサは…

「店員さんの間違いじゃないかしら。別に飲めないわけじゃないし、

一緒に飲まない？」

一緒にこのジュースを飲もうと提案した。

もちろんツナは…

「それもそうですね。」

ツバサの言葉を何も疑うこともなく、ツバサと一緒にストローをすすって、ジュースを飲んだ。これがカップルのやり取りだということと、そしてこのシーンを撮られて穂乃果たちに送られるということも知らずに…

#標的（ターゲット） 251 「同じ部屋にて」

この後も、ツバサとのデートは続いていった。

そして時間はあっという間に経過していき、時刻は夜となった。夕食を食べ終えた後、リボンからホテルのカードキーを英玲奈とあんじゅに渡した。

そして…

「それでこっちが、ツナとツバサの分だぞ。」

「え…？どういうこと…？」

「どうということも何もねえ。お前とツバサは同じ部屋だぞ。」

「な、何でだよ！」

「このほうが面白いだろ。穂乃果たちがこれを聞いたらどんな反応するか楽しみだろ。」

「お前が楽しんでるだけだろ！」

ニヤニヤしながらそう言うリボンに、ツナがツツコミをいれた。

「だいたいツバサさん…ツバサがいいわけないだろ！」

「お、とうとう呼び捨てで呼ぶようになったのか。もう恋人関係そいうかんけいなったのか。」

「違うって!!／／とにかく一緒になのはさすがに問題だろ!!／／」

「私は全然平気よ。むしろ嬉しいぐらいだわ。」

「ほら全然平気だって…ええええええええ!!」

全然平気どころか、むしろ嬉しいぐらいだと言ったことにツナはもの凄く驚いており、英玲奈とあんじゅも両手で口元を押えて驚いていた。

「ツバサもいって言ってるし、よかったじゃねえか。」

「い、いや…でも…」

「そんなに嫌なら、しょうがねえな。今からコロネ口にツナが連絡し

て裏マフィアランドで一泊するって連絡するか。」

「ごめんなさい！ツバサさんと一緒にいいです！」

裏マフィアランドで一泊と聞いて、ツナはツバサと一緒にの部屋で寝ることを決意した。裏マフィアランドで一泊ということはコロネロとサバイバルすることになると理解したツナは、リボンと同じくらい恐ろしい修行を受けてボロボロになることは目にも明らかであったので、前者を選んだ。

そしてツバサと一緒に泊まる部屋に向った。

(はあ…一泊ならなんとかなるか…)

ホテルの廊下を歩きながらそんなことを考えていた。だがその期待は裏切られることになる。

ツナが二人の泊まる部屋の扉をカードキーを開けると…

「な!?!/!/」

「フフッ！リボン君ったら。」

二人で泊まる部屋であるにも関わらず、部屋の中にはベッドが1個しかなく、それを見てツナはまたリボンにはめられたことに気づき、ツバサはもの凄いい嬉しい表情になっていた。

「これで一緒に寝られるわね。」

「え!?!いや、それはさすがにまずいですって！」

「いいじゃない。愛しのツナと寝られるなんて私、幸せだわ。」

「ええええええええ!?!/!/」

アイドルとデートするだけでも恐れ多いのに、まさか一緒に寝てもいいと言われてツナは顔を真っ赤にした。

そしてツナもツバサお風呂に入ったあとに、しばらくテレビを見たり、トランプをしたりして時間を潰した。

そしてとうとう消灯の時間となった。ツナは最初、床で寝ると言っていたが、ツバサが再び切ない表情で…

「私とじゃ嫌…?」

と言ってきたので、もちろんツナはこれを断ることができずに結局、一つのベッドに二人で寝ることになった。

「じゃあ電気消しますよ。」

そう言つて電気を消して、ツバサと一緒に寝るといふことになつて緊張しているのかおそるおそる、ベッドに入り、なるべく端に移動した。

すると…

「えいー」

「え!？」

ツバサはツナをそのまま抱き寄せた。いきなりだったのでツナは抵抗することもできず、そのままツバサに抱き寄せられてしまった。

「捕まえた♡」

「どどどど、どうしたんですか!?!／／／」

「ツナの温もりを感じたいの。」

「か、感じたいって…!!／／／」

「どう? アイドルと一緒に寝るって?」

「そ、それは…!!／／／」

「私はすっごいドキドキしてるわ。正直ライブの時より緊張してる。でもこんなことするのツナだけよ。」

(や、やばいツバサさんの体が…!!／／／それにシャンプーの匂いが…!!／／／)

ツバサと体が密着していること、そしてツバサが風呂で使っていたシャンプーの甘い匂いが、ツナをおかしくしてしまっていた。

するとツバサはツナから離れると、そのままツナの体の上に乗った。

「ここには誰もいないし、何をしても問題ないわね。」

「え!?!／／／」

「大好きよツナ。」

そう言つとツバサは目を閉じて、唇をツナに近づけ始めた。

「え!?!／／／ちよ…!!／／／」

まさかキスされるなんて思つてもみなかったので、ツナは顔を真っ赤にしながら、なんとか逃れようとするもののツバサが上に乗られる為、抵抗しても何の意味をなさなかった。

すると途中でツバサは目を開けて、顔を真っ赤にしているツナを見

て眩く。

「本当、可愛いのねツナって。大丈夫よ、あなたと結ばれるまではまだ唇にはしないわ。唇にはね。」

そう言うのとツバサはツナの頬にそつとキスをした。

「じゃあおやすみ。」

そしてツバサはツナから降りて、そのまま眠りについてしまった。一方でツナはあまりの出来事に意識しすぎて、ほとんど眠りにはつかなかったという。

こうしてマファイアランドでの夜は終わっていたのであった。

#標的(ターゲット) 252 「修羅場(サプライズ)」

「おはようツナ。」

「お、おはようございます…」

ツナはマフィアランドのホテルにてツバサと同じベッドで一緒に寝たのだが、ツバサの誘惑されたのがよっぽど効いたのかほとんど眠れず、目の下には黒い隈ができてしまっていた。

そしてこの後、ホテル内の食堂にてリボーン、あんじゅ英玲奈と合流して朝食を食べたあと、もう1回部屋に戻って荷物をまとめたあと、港に向かつて船に乗ってマフィアランドを後にした。

「ツナ君、大丈夫?」

「だ、大丈夫です!」

朝食を一緒にしてから、ずっと眠そうな顔をしているツナを見て、あんじゅが心配するが、ツナはさすがにツバサにされらることを正直に話すわけにはいけないので、大丈夫だと答えた。

「ごめんなさい。私があんなことしたから…」

「あんなこと?」

「い、いやー!何でもありません!気にしないでください!」

あんなことというツバサの言葉にあんじゅと、英玲奈は疑問符を浮かべたが、ツナは慌てて何でもないと主張した。さすがに同じメンバーであっても、あの出来事を話すことはツナにはできるはずもなかった。

そしてこの後、しばらく談笑していると船のアナウンスが、もう少しで港に着くということを知らせる。

するとここでリボーンが口を開いた。

「ツバサ。」

「どうしたのリボーン君?」

「お前の為に、ちよつとしたサプライズを用意しておいたぞ。」

「サプライズ？」

「ああ。まあ、港に着けばわかる。」

サプライズだと言うリボーンは、少し表情をニヤニヤさせていた。そして港に着き、船を降りた。

するとそこには…

「ほ、穂乃果ちゃん…？それに他のみんなまで…？」

無言でただただ黙って、殺気を放っている穂乃果

たちがおり、それを見たツナは体中から大量の汗を流しながら体を震わせ、できるだけ穂乃果たちを見ないようにしていた。一方でツバサはこれがリボーンのサプライズだということに気づいていても、穂乃果たちを前にしても、動揺することもなく、いつものようにニコニコしており、あんじゅと英玲奈は今まで見たことのない穂乃果たちを見て、少しであるが恐怖していた。

「俺が呼んでおいてやったんだぞ。」

「あら、ありがとう。」

「最悪だ…」

リボーンの用意した修羅場サプライズにツバサは素直にお礼を言っていたが、

ツナは絶体絶命のピンチに

もう絶望してしまっていた。

「じゃあ行きましようか。」

「えっ!？」

ツバサはツナの腕に絡みつくと、そのまま殺気を放っている穂乃果たちの目の前までツナを連れて行く。

そして穂乃果たちの前にやってもなおツバサは笑顔絶やすことなく、一方でツナは処刑台の前に立たされている気分だったという。

そんな中で希が口を開いた。

「ツナ君、奇遇やね。それにツバサさんも。こんなところでウチのツナ君と何してるん?..」

「あらもちろんデートよ。私のツナなんだから、デートするのは当然よ。」

互いニコニコしてはいるものの、目の奥が笑っておらず希もツバサも、もの凄いプレッシャーを放っていた。

「ツナって呼び捨てに…もう恋人関係なの…?」

「違うから穂乃果ちゃん! ツバサとは別に恋人関係じゃないから!」

「「「「ツバサ!」」」」

「しまったー!」

ツバサに昨日、今日だけでいいから呼び捨てで呼んでくれと言われたので、ツナはつい呼び捨てで呼んでしまったのである。

「もうツナったら。急に呼び捨てだなんて。いくらアイドルと付き合ってからって自慢したいのは

わかるけど、それはまだ早いわ。でもツナがそう呼びたいなら…!!

／／／

「い、いや! 今のは違うんです!」

「ま、まあ昨日は同じベッドで一緒に寝たんだし…!!／／／もっと親密な関係になりたいっていい

うのもわかるけど…!!／／／

「「「ベッドで一緒に寝た!」」」」

「あ、あれは!!／／／リボーンのせいだ!!／／／

「ハ、ハレンチです!!／／／

「さ、最低!!／／／ツナが最低なのは知ってたけど、ここまでとは思わなかったわ!!／／／

「見損なっちゃわよ!!／／／このアイドルたらし!!／／／

「ちよつと待って!!／／／これには訳が!!／／／

海未、真姫、にこが顔を真っ赤にしながらそう言うと、ツナも3人と同じく顔を真っ赤にして言い訳をしようとする。

「ツ、ツナ君がツバサさんと…!!／／／

「ア、アイドルと一緒に寝たなんて…!!／／／

「し、しかも一緒にベッドに…!!／／／

ことり、絵里、花陽は二人と一緒に寝た姿を想像したのか、顔を真っ赤にしながら動揺してしまっていた。

「わ、私だって!!／／／ツナ君と寝たんだから!!／／／

「そうだにや!!／＼／凜もツナと一緒に寝たにや!!／＼／」

そしてここで穂乃果と凜はツバサに負けたくないのかと思ったのか、ここで対抗してきた。

「あら、そうだったの。でもツナは私にキスしたのよ。」

「嘘を言わないでくださいツバサさん!!／＼／キスしてきたのはツバサさんで…あ!」

ツナはここでまんまとツバサにはめられたことに気づいた。そしてここで穂乃果たちの殺気がここでさらに禍禍しくなっていた。

「なんだこの光景は…」

「修羅場どころじゃないわね、もう地獄絵図ね…」

この光景を見て英玲奈とあんじゅが呟いた。

そしてリボンも…

「まさにカオスだな。」

とニヤニヤしながらそう言ったのであった。

この後ツナがどうなったかは言わなくてもわかるであろう。

#標的(ターゲット)253 「スピリチュアルな二人の出会い」

—希の家—

「いただくぞ。」

「どうぞ。」

なぜか希の家にリボーンが来ており、リボーンは希の家にて晩御飯をぐい馳走になっていた。

「それで何しに来たん…というよりもその前に何でウチの家を知ってるん…?」

「俺に知らねえことはねえぞ。たとえばお前が今まで転勤続きだったことや、英語がペラペラだったことなものな。」

「出会った時から思ってたんやけど…その情報源は一体どこから入手してるん…?」

「企業秘密だぞ。」

「まあいいか…それより何しに来たんリボーン君?」

「ああ。明日はお前の誕生日だろ。」

「本当に何でも知ってるんやね…そうやけど、それがどうかしたん?」

「明日、並盛高校は創立記念日で休みでな。そしてお前は授業が休講になって午前で終わるんだろ。だからお前の誕生日会をツナの家で開こうと思つてな。もちろん穂乃果たちも誘つてあるぞ。」

「ウチの誕生日会を…?」

「ああ。どうした?都合が悪いのか?」

「そうじゃなくて…誕生日会なんて今までウチ初めてやから…去年もμsの活動で忙しくてそれどころやなかったし…別に嫌なわけでもないし、都合が悪いわけやないんよ。」

家族が転勤で、高校に入るまで友達がいないうち希にとって初めての誕

生日会だったので、戸惑いを隠せない様子であった。

「そうか。じゃあ行くってことでいいんだな？」

「ええよ。」

「そうか。ツナの住所は後で教えとくからな。それと明日、ツナは昼からお前の誕生日の準備で買い物に行くらしいぞ。」

「それはツナ君とデートできるチャンスってことやね。」

「まあ、そういうことになるな。」

希が不敵な笑みを浮かべながらそう言うと、リボンも同じく不敵な笑みを浮かべた。やはり同じドS同士の^{にたものどうし}なのか、こういうところでは気があつてしまう二人である。

そして次の日。

「さてと行くか…って希さん!？」

「やつほーツナ君。」

「な、何でもうここに!？」

「今日は授業が休講になって午前で学校で終わったし、別に私に秘密でもないんやし、行っても問題ないかなって思ったんよ。」

「ま、まあそうですね…」

「ウチの誕生日回に必要な物を買いにいくんやろ?じゃあウチも行くわ。」

「いや!大丈夫ですって!誕生日回のメインなんですから、家でゆっくりしてもらって大丈夫ですよ!」

「ウチの為にやってくれてるんやし、これくらいする当たり前やん。それに誕生日回までは時間があるんやから、その間はツナ君とデートできるし。」

「デ、デート!?!／／／」

「何、驚いてるん？今人気のA—R—I—S—Eのツバサさんとデートしたんやから、今さら何を動揺してるん？」

「い、いや!!／＼／＼そうなんですけど!!／＼／＼」

少し前にアイドルとデートしたものの、やはりツナにとってデートすることはたとえ相手が誰であろうと緊張するのである。

そして結局、ツナは希の誕生日回に必要な物を買に行くという名目でデートに行くことになった。

「嬉しいわー、ツナ君とデートできるなんて。」

「そ、そうですか…よかったですね…」

いつものように希はツナの腕に絡みついていた。まさかツバサに続いて希とデートすることになるとは思ってもみなかったので、ツナは複雑な気分になってしまっていた。なにより一番ツナが恐ろしいのは、デートしたことを想いの人に知られることである。

そしてなんやかんやで希の誕生日会に必要な物を買って終わって、喫茶店にてのんびりしていた。

「はいダーリン、あ〜ん。」

「あ、あ〜ん…」

喫茶店に着いて、注文をすると希が頼んだパフェをスプーンですくうと、ツナに食べさせた。

(ただでさえ希さん大胆なのに、さらに大胆になってきてる…)

ツナはいつもより大胆に攻めて来る希に戸惑いを隠せない様子であった。おそらくツバサとのデートの一件で、ただでさえ大胆な希がさらに大胆なる、きっかけになったのであろう。

するとここで希があることを提案した。

「そうや。せっかくやしウチの占いでツナ君を占ってみようか。」

「希さんの占い？」

「うん。ウチの占いはよく当たるって評判なんよ。」

「ほう。それは面白い。是非とも占ってもらいたいですね。」

希がそう言うのと二人の後ろには、青い髪でオッドアイの青年がいた。

「む、骸!？」

「クフフ、久しぶりですね沢田綱吉。」
突如、ツナたちの前に現れた骸ごと、六道骸。
今スピリチュアルな二人が出会う。

#標的 (ターゲット) 254 「眼帯少女」

「む、骸！何で喫茶店に!?!」

「今日は僕の誕生日でしてね。犬たちは僕に秘密でなにやらコソコソ用意しているようですが、バレバレなのです。だからわざと離れてこの行きつけのこの喫茶店にてチョコレートパフェを食べに来たというわけです。」

「え!?!お前の誕生日なの!?!」

骸が喫茶店に来た経緯を話すと、骸が希と同じ誕生日だという事実
に驚きの声を上げてしまった。

「僕にだって誕生日ぐらいありますよ。」

「いや…それぐらいはわかってるけど…」

「そういう君こそ、学校をサボって女性と遊んでいるとは意外でしたよ。」

「変なこと言わないでくれない!?!今日は学校の創立記念日で休みなだけで、希さんとは誕生日会で必要な物を買って来てただけだから!」

骸に勝手に学校をサボって遊んでいると思われたのが心外だったのか、ツナは弁解した。

「この人、誰なんツナ君?もしかしてマフィアの友達なん?」

「おや?そのことを知っていますか?ですが沢田綱吉と一緒にされるのは心外ですね。僕は沢田綱吉の体を乗っ取り、マフィア界を支配をする為にいる。」

「まだそんなこと言ってるの!?!」

「当然ですよ。もともと僕と君は敵同士、僕にとって君はマフィア界を支配する為の存在にすぎないのですから。」

「…」

ツナと骸の会話を聞いて、希は今まで出会ったツナのマフィアの知りあいと、あまりにも違うことを感じて、骸を警戒していた。

「クフフ、警戒していいですよ。僕はそんないい人間ではない。ですがさつき言った通り、僕は喫茶店チョコレートパフェを食べに来ただ

けですから。」

骸は希が自分を警戒していることに気づいたのか、希にそう一言だけ言うと、そのまま二人とは別の席に座った。

そしてツナと希はそのまま喫茶店を出て、商店街を歩く。

「なんか何を考えてるかわからない人やったね。マフィア界を支配するとか言ってたし。」

「まあ骸の言う通り、俺と骸は最初は敵同士でしたからね。4年前に並盛で並盛中学校の生徒が襲われるっていう事件があつたんですけど、その首謀者が骸でしたからね。」

「ええ!? そんなに悪い人やったん!？」

「はい。その時は俺を探す為に、仲間を使って並盛中学校の生徒を襲わせるような奴でしたから。それにマフィアランドにいたランチアも骸にその…弱みを握られて酷いことをさせられていましたから。」

「あのランチアさんが…」

希はあれだけ強いランチアが理由があるといっても、ランチアが骸の仲間であつたことに驚きを隠せなかつた。

本当は骸がかつていたファミリーであるエストラーネオが開発した敵の体に乗っ取る特殊弾である憑依弾によって操られていたのだが、ツナは憑依弾のことはあえて希には言わなかつた。

「でもそんな酷い人と、何であんな風に話せるん? 普通、警戒すると思うんやけど。」

「それは…」

希の質問したことにツナは齒切れが悪くなつてしまった。4年前に起こした事件は決して許されるものではないが、それでも骸も辛い過去を送っており、仲間を逃がす為に囚になつて仲間を護つたことをツナは知っていた。そして本当はもうマフィア界を支配しようとは思っていないことも。

ツナが希に骸のことをどう説明しようか考えていると

「ボス?」

「クローム!」

二人の後ろには紫色の髪で、骸と同じような髪型をしており、右目

に眼帯をしている女の子が立っていた。

「どうしたの？こんなところで？」

「骸様の誕生日会の準備に必要な物を買いに来た。」

「そうだったんだ。」

するとクロームは希のほうを見ると、あることに気付いたような顔をした。

「そっちの人は…もしかしてμ'sの東條希さん？」

「アレ？ウチのこと知ってるん？」

「いつも聞いているから。もう解散しちゃったけど、ラブライブ優勝、おめでどうございます。」

「ありがとう。クロームちゃんてええんよね？」

「はい。」

クロームがラブライブで優勝したことについて祝辞を述べると、希も笑顔でお礼を言った。

「あれがクローム髑髏か…それにボンゴレX世^{デーチモ}…」

「どうするんだ兄貴？」

「なーに問題はない。俺たちの武術と幻術がアレば仕留められないことはない。今までだってそうだっただろう？」

「それもそうだな。」

#標的 (ターゲット) 255 「気にいらない」

ツナたちは商店街から移動すると、今度は公園のベンチにて談笑していた。

「ツナ君のことをボスって呼んでることは、クロームちゃんもボンゴレフアミリーってことなの？」

希はクロームがツナのことをボスと呼んできたことから、クロームもボンゴレフアミリーの一員ではないのかと思ったので、そう尋ねるとクロームは黙ったまま首を縦に振った。

「本当に驚きやね。ユニちゃん以外にも女の子のマフィアがおったなんて。」

「私も驚いた。ボスがμ、sのメンバーと友達だったなんて。」

希はユニ以外に女の子のマフィアがいたことに驚き、クロームはツナがμ、sのメンバーと友達だということに驚いていた。

「この後の誕生日会。私も行くから。」

「ええ!?今日は骸の誕生日なんですよ!？」

「始まるのは夜からだから。そのことはもうみんなには伝えてる。それに誕生日会の準備はほとんど終わってるし、今買ってきたのはクラッカーと骸様の誕生日プレゼントだから。」

「ええ!?クロームちゃんってあの骸っていう人を知ってるん!？」

希は二人の会話から、クロームが骸のことを知っていることに驚きの声を上げてしまった。

「骸様は私の命の恩人。今も一緒に住んでる。」

「さ、様!?!それに命の恩人!?!」

さきほどツナが言っていたことと真逆で、クロームが骸のことを様付けで呼び、さらに命と恩人と言ったことに希は驚きの声を上げると同時に、少しわけがわからなくなってしまうていた。

「まあ色々あってですね。話すと長いんですけど…」

ツナが頭がこんがらがっている希にどこから骸のことを説明しよ

うか頬をかきながら考えていた。

すると辺りを公園内を濃い霧がたちこめ始めた。

「霧……?」

「まさか……」

突然現れたら霧に希は戸惑っており、ツナは前に同じようなことがあったので、この霧が何であるということを理解していた。

そして霧の中から二人の緑色の髪をし、お互い似たような顔をしている二人の男が現れた。

「誰?!」

クロームはこの霧が作ったのがあの男たちだとすぐに理解し、懐かた三叉槍を取り出して警戒し、ツナは希の前に立ち、27と書かれた手袋を両手にはめた。

「俺はジェメツロファミリーの武道家フラツタ。」

「同じくジェメツロファミリーの術士フロット。」

「マファイア!」

「その通りだ。俺たちはそこにいるクローム髑髏に用があるのさ。」

「私?」

フラツタがクロームを指をさすと、クロームは疑問符を浮かべた。

すると今度はフロットが口を開いた。

「そうさ!君の幻術の能力、そしてその美貌!俺たちが長年求めているものだ!」

「嫌!私に行かない!」

「だったら仕方がない、そこにいる女とボンゴレX世デーチモを始末して、君を手にいれるまで。」

「ここには俺の作った幻覚の空間。外からは普通の公園にしか見えないうようになっている。助けを求めることはできない。」

「それはどうでしょうか?」

「だ、誰だ!」

幻覚空間に声が木霊すると、何も無いツナたちの目の前から骸が現れた。

「骸様!」

「骸！何でここに!?!」

「この辺りから妙な炎を感じましてね。それで来てみたら君たちとクロームがいたというわけです。」

「え…う…え…う…な、なにもないところから…」

骸がここに来た経緯を話すが、希はそれより何もない場所から骸が急に現れたことに、戸惑ってしまっていた。

「骸…まさかあの六道骸か!?!ヴァインディチェ確か復讐者の牢獄を脱走したというあの!?!」

「だがお前は再び、牢獄に捕らわれていたはずだ！なぜここにいる!?!」
「クフフ。君たちの格下マフィア風情の情報網ではそんなものでしょうね。現に僕はここにいます。」

骸は敵を前にしても、何ら揺らぐこともなく不敵な笑みを浮かべるだけであった。

「ですがクロームを手を出そうとは。少し気にいりませんね。」

「ああ、同感だ。」

そう言う骸もクロームと同じく三又槍を構え、ツナは超ハイパー死ぬ気モードになっていた。

「おや？珍しく意見がありましたね。」

「そうだな。」

ツナと骸の共闘！

#標的（ターゲット） 256 「幻覚と拳」

「ではいきましようか…」

そう言うのと骸の目に書かれている数字が漢数字の一に変わり、骸が地面に向かって三叉槍の持ち手を地面に向かって軽く叩くと地面が崩れ始め、崩れた地面が宙に浮き始めた。

「じ、地面が!? きゃー!」

「ボス! 私は大丈夫だから!」

「わかった。」

クロームがそう言うのとツナは素早く希をキャッチして助けに入つた。術士であるクロームは幻覚に耐性があるので、この幻覚に対応できていた。

「大丈夫か希?」

「え!? うん…!! // //」

超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナに見つめられながらお姫様抱っこされたので、さすがの希も顔を赤くし、

いつもと頼れるお姉様から、一人の少女のような表情になってしまっていた。

「そ、それよりこれどうなってるん…? 地面が崩れて…?」

「これは幻覚だ。」

「げ、幻覚!?!」

「ああ。そして骸の六つある能力^{スキル}の一つだ。あいつは前世で六道全ての冥界を廻っていて、その冥界から六つの戦闘能力^{スキル}が使えるんだ。」

「知ってる…人間は死ぬと地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天界道にいくつていう…」

「その通りだ。今のは地獄道、永遠の悪夢により他人の精神を破壊する能力^{スキル}だ。」

ツナが骸の能力^{スキル}について説明していると、

フラッタとフロットが浮いた地面を足場にして、骸に迫っていく。

「この程度の幻術で俺たちを欺けるか！」

そうフロットが叫ぶと、自分とフラッタの幻術で作り出し、そのまま全ての幻術がそのまま骸に襲いかかってきた。

「さあこれでは見極められまい！」

「懦弱な。」

今度は骸の目の数字が漢数字の4に変わると、骸は三叉槍で全ての幻覚を消し去ると同時に、フロットの体に斬撃を与えた。一方でフラッタは骸の攻撃を避けていた。

「フロット！」

「クフフ。これこそ修羅道による格闘能力スキルです。」

「術士が…格闘だと…？」

斬られ箇所を押えながらフロットがそう言うと、今度は

クロームが三叉槍を両手でクルクルとまわすと、浮いた地面に三叉槍の持ち手の部分を突き刺した。

「やあー！」

「フロット！気をつけろ！」

フラッタが叫ぶと、幻術の火柱が上下左右に現れるが、

フロットは骸に受けたダメージで避けきることができ

ず、直撃を喰らってしまった。

「クロームちゃんまで凄すぎ…！」

あんな可愛らしいクロームしやうじよまでもが、こんな能力を使えたことに驚きを隠すことができなかった。

そしてツナは希を抱えたまま宙に浮いている地面を飛び乗っていき、クロームのところへ移動すると希を下ろした。

「希を頼むクローム。」

「うん。わかった。」

「ツナ君…！」

「心配するな希、すぐに終わらせる。だから待ってろ。」

そう言うのと再び、浮いている地面を飛び乗っていきフラッタの前まで移動していく。

「おや？君も戦うのですか？」

「お前たちばかり任すのも悪いだろ。」

「この程度の相手なら僕一人で充分ですが…まあいいでしょう。ここは君に譲ってあげますよ。」

「お喋りとは余裕だな…」

目の前で喋っているツナと骸を見てイラついたのか、フラツタは右手に晴の死ぬ気の炎を集中させていく。

そしてツナも…

「ナッツ！形態変化攻撃モード！」

「ガウ！」

ナッツを攻撃モードで形態変化させた。

「I世のガントレット！」

ツナの右腕がガントレットに変化し、ガントレットに大空の死ぬ気の死ぬ気の炎が集中していく。

「喰らえ！せいいてんこうさいけん聖天轟碎拳！」

「バーニングアクセル！」

フラツタは拳に集中させた死ぬ気の炎を拳圧で飛ばし、ツナもガントレットに集中させた死ぬ気の炎を飛ばすと両者の死ぬ気の炎がぶつかり合うも、ツナの死ぬ気の炎がフラツタの攻撃を撃ち破り、そのままフラツタに直撃した。

「グワアアアアア！」

こうしてフロットとフラツタとの戦いは幕を閉じた。

#標的 (ターゲット) 257 「やっぱりおかしい」

フラッタとフロットの戦いが終わると、骸は地獄道の幻覚を解き、ツナも超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態を解いた。そしてもといいた公園に戻ると、公園を覆っていた白い霧は消えていた。肝心のフラッタとフロットは姿を消していた。

「逃げたようですね…まあいいでしょう。さて僕はこれで帰らせてもらいますよ。クローム、楽しむのは結構ですが、あまり遅くならないようにしてくださいね。」

「はい、骸様。」

骸はそう一言だけ言うと、骸はそのまま公園を去っていき、自分の住んでいる黒曜にあるアジトへとそのまま帰ろうとすると…

「あ、あの！」

「おや？何か？」

「ウチのことを護ってくれてありがとう。」

「おや僕は君を護ったつもりはありませんよ。君がいなくなったらクロームが悲しむ。そう思っただけです。」

骸はそれだけ言うと、骸はそのまま公園を去っていき、自分の住んでいる黒曜にあるアジトへとそのまま帰って行った。

「ツナ君、クロームちゃんも。ウチのこと護ってくれて。」

「これくらい当然ですよ。希さんが無事で何よりです。」

「え!?う、うん…」

希はさきほどまで自分のことを希と呼び捨てにいたが、またさんづけで戻ったことに戸惑ってしまっていた。

(まさかツナ君にあんなかつこいい一面があつたなんて…!!／／／)

「どうかしました希さん？顔が赤いですよ。」

「へ!?／／／何でもありませんよ!!／／／」

「そうですか？でもなんかいつもと違いますね希さん。」

うまく言えないんですけど、いつもより女の子っぽいついていうか、

可愛らしいってどうか…」

「か、可愛い!?!/!/」

希は可愛いという言葉に顔を赤くして動揺した。いつもならこんな動揺することはないのだが、超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナを見た影響なのか、いつもと違った反応になってしまっていた。

「あーさっきの俺の姿は秘密でお願いします。まあほとんどの人に知られちゃってるんですけど…」

ツナがそれだけ希に頼むと、3人は誕生日会の会場であるツナの家へと向かって行った。

家に帰ってもまだ誕生日パーティーまで時間はまだあるので、ツナの部屋にてのんびりすることにした。

「そういえばあの骸^{ガイ}つて結局何者なん? ツナ君の学校の人を襲わせたりとか、クロームちゃんは命の恩人^{オンジン}つて言ってたけど、どういうことなん?」

「もともとはボスを狙ってマファイア界を乗っ取ろうとして日本にやってきたけど牢獄に囚われちゃって…その後で私が交通事故で入院した時に、精神世界を散歩してた骸様と出会ったの。」

「せ、精神世界!?!」

精神世界という単語に希は驚きの声を上げるが、クロームは黙って首を縦に振ってうなずいた。

「本当にスピリチュアルやねクロームちゃんも…それでツナ君のあの姿は何なん? なんかあの状態になってる時と今の状態の時は全然雰囲気が違うというか…もしかしてツナ君って多重人格なん?」

「そう思うのもわかりますけど…俺は多重人格じゃありません…」
マフィアランドの時の絵里と同じようなことを希が言ったので、ツナは多重人格ではないということを説明した。

すると階段から足音が聞えて来ると、ツナの部屋に母である奈々がやってきた。

「今帰ったわツナ。あらクロームちゃんいらっしやい。」

「どうも。」

奈々が挨拶すると、クロームは軽く頭を下げながらそう呟いた。

「まあ！またツナのお嫁さん候補が！」

「だから止めろって言ってるだろ母さん！」

いつものように奈々がそう言うのと、ツナもいつものようにそう叫んだ。

一方で希は…

「!!／／／」

いつもと違い、顔を俯いたまま顔を赤くして黙ったままとまってしまった。やはり超^{ハイパー}死ぬモードのツナを見てから様子が変わったようである。

「希さん？」

「な、何でもないよツナ君…!!／／／」

「？」

ツナはやっぱり希がいつもと違うと気がつくが、原因がわからないので疑問符を浮かべただけであった。

#標的 (ターゲット) 258 「餃子と爆発」

時刻は過ぎていき、最初は獄寺、山本、炎真、ハル、京子がやってきて、午後3時には絵里、ここが来て、午後4時には穂乃果、海未、ことり、凜、花陽、真姫、雪穂、亜里沙がやって来た。

「というわけで今日は希の誕生日だぞ。せーの…」

「…誕生日おめでとうー!」

リボーンの掛け声と共に全員がそう言うと、希は照れながらもホルケーキに刺さっていた蠟燭の火を息で消すと全員クツラカーを鳴らした。

「というわけだ、今日は希の為に隠し芸大会だぞ。お前ら準備はいいか?」

「…おー…」

「隠し芸?! え?! 聞いてないんだけど!」

隠し芸をやることについて全く、聞いていなかったツナはやる気満々の様子のみんなを見て戸惑ってしまっていた。

「というわけでまずはこの家の居候であり、殺し屋であるイーピンとランボの出番だぞ。」

リボーンがそう言うと、辮髪を結わえカンフー服を着たイーピンと、縄でグルグル巻きにされ、口をガムテープで塞がれたランボがみんなの前に出てきた。

(ランボがグルグル巻きにされてるイーピン!?)

「イーピンは人間爆弾の異名を持つ、殺し屋ヒットマンなんだぞ。ちなみにこのパーティーの炒飯はイーピンの特製なんだぞ。」

(何事もなかったかのように説明してるイーピン!?)

「んじやイーピン、お前の隠し芸を見せてやれ。」

リボンがそう言うといーピンは餃子を一口食べると、拳法の構えを取ったまま集中し始めた。

「餃子拳！」

そして餃子拳という掛け声と共に右腕を突き出すと、ランボが空中に浮くと、いーピンの腕の動きに連動するかのようにランボは空中で右へ動いたり左へと動いたりし始めた。

「超能力だ！」

「凄いです！」

「宙に浮いてる…」

「すごいにゃ！」

穂乃果、亜里沙、海未、凜はランボが浮いてのを見ているを見て驚いた。

「ど、どうなってるの…?」

「本当に超能力なわけ…?」

雪穂とにこは目の前で起きている現象に戸惑いを隠すことができていなかった。

みんながどうなっているのかと気になったのを見て、リボンがこの現象について説明し始めた。

「違うぞ。これは餃子拳っていつてな、餃子饅頭の臭い息を拳法で圧縮して、それを相手の鼻に直接送りこんで直接脳を麻痺させるんだ。それで脳が麻痺して筋肉が勝手に動く様はまるで筋肉が勝手に動いて、操られてるみたいになるんだ。」

「ええ!?餃子でこんな超能力みたいなことができるすか!?!」

「ある意味、超能力越えてるわね…」

「本当にツナ君のまわりってスピリチュアルな人ばかりやね…」

花陽、絵里、希はこの超能力?の原理がまさか餃子だと思わなかった為、驚きの声を上げてしまっていた。

「凜もできるかな…?」

「止めておいたほうがいいぞ。お前もラルの特訓を受けたといっても、餃子拳の餃子饅は相当の鍛錬を積んだ奴にしか食えないんだ。一般人が食ったらあの世いきだぞ。現にハルと京子が食って死にかけ

たことがあるからな。」

「そういえばそんなことあったね。」

「すぐに気を失ったので、あんまり覚えてないんですけど。」

イーピンの餃子饅を食べた京子とハルはニコニコしながらその時のことを思い出していたが、他の人たちはあの餃子饅は絶対に食べないようにしようと、心に誓った。

「でもまさかこんな凄い能力が、臭い拳法だったなんて…」

「あー！」

「やべっ！」

真姫がそう言うのとツナと獄寺は顔色を悪くした。

するとイーピンから大量の汗が出てくると、頭の部分に九つの丸い模様が現れ、それが一つずつ消えていく。

「筒子時限超爆だ！」

「ピン…えっ？と何…？」

ツナが突如筒子時限超爆弾と叫ぶと、穂乃果はツナの言っている言葉の意味がわからず疑問符を浮かべた。

「筒子時限超爆はイーピン恥ずかしさが頂点に達すると頭に九筒が現れるんだ。あの九筒が全部消えると、全身から餃子ガスを一気に噴出させて爆発するんだ。その威力は軽いクレーターができるぐらいなんだぞ。」

「「「えー……………!?」」」

リボーンが筒子時限超爆について説明すると、筒子時限超爆を知らないメンバーは驚きの声を上げた。

「真姫ちゃんが余計なこと言うから！」

「どうしてくれるのよ!?!」

「しよ、しょうがないんじゃない!まさかそんなことになるなんて思うわけないでしょ!」

真姫は凜とにこに責められるが、こればかりは誰も予想できるわけがないので真姫に責任はないだろう。

こうしている間にも筒子時限超爆のカウントは続いていき、2筒と なってしまっていた。

「やばい！もう2筒しかない！」

「ツナ君こっちだ！」

「早く！」

「わかった！」

「十代目！」

炎真と山本は庭の窓ガラスを素早く開け、獄寺はイーピンを素早く持ち上げてツナにパスすると、ツナは空に向かっておもいつきりイーピンを投げた。

そして数秒後：

ドゴオオオオオオオン！

大きな音を立てながらイーピンの筒子時限超爆が発動し、大きな爆音がしたのであった。

この筒子時限超爆を見てから、ツナの日常生活が命がけだということと穂乃果たちは知ったのであった。

#標的（ターゲット） 259 「どっちだ？」

ツナたちイーピンの筒子時限超爆をなんとか凌ぐことに成功し、希の誕生日パーティーは無事に続行される。

「んじや次はクロームだぞ。」

「え？クロームも何かやるの？」

ツナはクロームまで何かやるとは思わなかったもので、少しだけ驚いてしまっていた。

クロームはみんなの前に立つと、三叉槍を組み立て、軽く深呼吸するとクロームの体が霧の炎に包まれていく。

それを見て穂乃果たちは何が始まるとしているのかわからず、ざわつき始めた。

「ま、まさか…」

穂乃果たちがクロームがしようとしていることに戸惑い、この光景を見てツナはクロームが何をしようとしているか理解した。もちろんツナだけでなく、並盛メンバーもクロームが何をしようとするのかを理解していた。

そんな思惑が交錯する中、クロームを覆っていた霧の炎が消えるとそこには…

「ええ!?私!?!」

幻術によって穂乃果に変身したクロームが立っていた。

（いや確かに幻術それも隠し芸かもしれないけど！いくら穂乃果ちゃんたちがマフィアのこと知ってるからって、こんな誕生日パーティーで使う!?!）

ツナはまさか誕生日パーティーで幻術を使うとは思ってもよらなかったもので、驚きを隠せない様子であった。

「どどどどどどうしよう!?!これってアレだよね!もう一人の自分が現れてそれを見たら死ぬっていう…そう！トツピングタンカーってい

う奴だよね！」

「ドツペルゲンガーだバカ！」

獄寺は穂乃果がドツペルゲンガーのことをトツピングタンカーだと言ったことにツツコミをいれた。他のみんなはトツピングタンカーって何だ…？と思つてしまつていた。

「落ち着け穂乃果、これはただの幻術だ。マフィア界なら珍しくねえぞ。」

「え…そうなの？なあーんだ…」

「ただの幻術つて言わても…」

「そんなの使える人が本当に実在するかどうかわからないのに…」

「どうか何でマフィアが使えるのよ…？」

リボンがこれが幻術であることを説明すると、穂乃果はドツペルゲンガーでないとかわりホツとするが、雪穂、絵里、にこはなぜそんな能力が使えるのがこんな身の回りにいることに疑問を浮かべていた。

「私、高坂穂乃果！叶え！みんなの夢！」

「声までそっくり！というかそのまま！」

「これならこのまま音ノ木坂学院に通つても違和感全然ないわよ…」

穂乃果、真姫は姿、形だけではなく声までそっくりであることに、クロームの完成度の高さに驚いていた。

「それにしてもこれだけ完成度が高いと、どっちが本物かどうか、わかりませんね穂乃果さん。」

「やっぱりクロームちゃんは凄いです！」

「うん！そうだね！」

「亜里沙ちゃん！ハルちゃん！京子ちゃん！そっちじゃないよー！私はこっちー！」

亜里沙、ハル、京子の天然トリオが穂乃果の姿になったクロームに向かつて話しかけてしまつていた。一方で穂乃果に化けたクロームは褒められて嬉しかったのか、少し顔を赤くして照れていた。

「本当だね。このまま私のお姉ちゃんになつても問題ないかも。」

「確かにこっちの穂乃果のほうがいいかもしれませんね。」

「まわりも気づかないやろうしね。」

「もう！雪穂、海未ちゃん、希ちゃん！わかってるでしょ！」

穂乃果に化けたクロームがだどわかっていながら雪穂、海未、希がそう言っていると、穂乃果は可愛らしく頬を膨らませながらツツコミをいれた。

この後もみんなのリクエストに答えて、クロームは色んな人に幻術を見せた。途中でクロームの匣^{ボックス}アニマルで霧^{グリーフォ・デイ・ネッピエ}フクロウであるムクロウを見せたりしたのであった。

「楽しんでますねー。じゃあそろそろ私の出番ですね。」

#標的（ターゲット） 260 「殺され屋」

クロームの幻術^{かくしけい}?を終えたところで、次の隠し芸に移る。

「んじや、次の隠し芸いくぞ。」

リボーンがそう言うのと、全員次の隠し芸は何かとワクワクし始める。

がその時、ツナたちの天井の上からゴトゴトと音がし始めた。

「な、なに…?」

「天井が音が…」

「ネズミとかじやなさそうやね…」

「だ、誰かいるの…?」

「ど、泥棒でしょうか…」

ツナ、京子、希、真姫、花陽は天井から聞こえてくる謎の音に不安を隠せないような表情になってしまっていた。

「十代目!任せてください!俺が撃退します!」

「そうだにや!泥棒だろうと凜が撃退するにや!」

天井からの音を聞いても怯むこともなく、獄寺はその場から立ち上がってダイナマイトを取り出し、凜はジーグンドーの構えを取り始めた。

「んじや頼むぞ獄寺、凜。」

そう言うとりボーンの手にはいつの間にかリモコンが握られており、リモコンのスイッチを押すと天井が自動で開いた。

そして上からニット帽を被り、口から血を流した男が降ってきた。

さらにその男は心臓の辺りに撃たれた形跡があった。

「「「「「きやー!」」」」」

（あれ…?この人って確か…）

その男を見て穂乃果たちは悲鳴を上げるが、ツナはこの男に見覚え

があるのか冷静であった。ツナだけでなく並盛メンバーも同じくこの男を見て冷静であった。

「天井の上から人が!」

「し、しかも撃たれてるよ!」

「どどどどどうということ!」

「だ、誰か助けてー!」

「と、とりあえず救急車を!」

穂乃果、雪穂、にこ、花陽、絵里は突然血を流した男が天井から降ってきたので冷静ではいられなかった。

「救急車を呼ぶ必要はねえぞ。心臓が完全に止まっている。もうこいつはすでに死んでるぞ。」

「「「「え!」」」」

リボーンが男の上に乗って、撃たれた心臓の辺りに耳を近づけながらそう伝えると、穂乃果たちは全員顔を青ざめてしまっていた。

「嘘だと思うなら調べてみる。」

リボーンがそう言うと、穂乃果たちは躊躇ってしまうがそんな中、穂乃果が勇気を振り絞って男の心臓が止まっているかどうか確認した。

「本当だ…心臓が止まっている…」

そう言うたださえ青ざめている穂乃果たちの顔がさらに真っ青になってしまった。

全員は顔を青ざめている中、亜里沙が口を開いた。

「で、でも…何でツナさんの家に…?」

「さあな。そういや俺が昨日ここでコーヒを飲んでる時に、天井裏から妙な気配がしてたから一発天井にぶちこんだんだが、それとは関係なさそうだな。」

「どう考えてもあなたが犯人じゃないですか!」

「結局、あなたがやったんじゃない!」

リボーンが昨日のあった出来事を語ると、海未、絵里は犯人がリボーンだということがすぐに判明したので、おもいつきりツツコミをいれた。

「まあこいつは泥棒だったんだし問題ねえよな。後でバラして土に埋めればいいだけの話だからな。」

「何、さらつととんでもないこと言ってるのよ!」

「人が死んでるんだよ!もうちよつと危機感とかないの!」

「俺は殺し屋だぞ。殺られた奴のことなんて考えてたら、仕事になんねえからな。」

リボーンがバラして土に埋めようと言ったことに、にことことりがツツコミをいれるも、当の本人は全く反省の色は見られなかった。

「ちよつとあんたたちからも何か言いなさいよ!」

「そうだにや!人が死んでるのに何で黙ったままなんだにや!」

「え…いや…その…」

真姫と凜が文句を言うが、ツナたちは申し訳なさそうな顔をしてしまっていた。

「ここまでだな。もういいぞ、モレッティ。」

リボーンがそう言うのと、モレッティと呼ばれた男はゆっくりと起き上がった。

「「「きゃーーーーーー!」」」

死んだと思われた男が突然、蘇ったことに驚き穂乃果たちは再び悲鳴を上げてしまった。

「どうも、こんにちわ。」

「い、生き返った!?!ゾンビだ!ゾンビ!」

「だ、誰か助けてー!」

「もうイヤー!」

モレッティがこんにちわと挨拶しただけで穂乃果、花陽、絵里はおもいつきり叫び、他のメンバーもただただ黙って恐怖してしまっていた。

「落ち着けお前ら。こいつは殺され屋のモレッティだ。」

「こ、殺され屋…?殺し屋じゃなくてですか…?」

「ああ。こいつはボンゴレの特殊作業員でな。こいつはアツディーオっていう自分の意思で心臓を止めて仮死状態になる能力を持つてるんだ。」

「「「「へ…？」「」」」」

モレッツテイの能力を聞いて、穂乃果たちはキョトンとしてしまった。

「驚かせてすいません。日本に遊びに来たら、丁度私の能力を見せる機会があるとりボーンさんから聞いたので、是非とも見てもらおうと思ひまして。」

「見せなくて大丈夫だにや！」

「見せるにしても、もつと他に見せ方があるでしょ！」

「こつちが本当に心臓が止まりそうだったわよ！」

あまりにも怖いドッキリだった為、凜、にこ、真姫はモレッツテイに向かつておもいつきり叫んだ。

「で、でもその血は…？」

「これはもちろん偽物ですよ。この撃たれた傷も。」

「そうなんですか…？」

勇雪穂は血と撃たれた傷が偽物だとわかって、ホツとした。

「じゃあツナ君たちは最所から知ってたってこと？」

「うん。1回、中学の時に見せられてたから。」

「まあ今日、モレッツテイが来るのは知らなかったけどな。」

「やっぱ面白いよな、このおっさん。」

「あの時は本当にびっくりしました。」

こつとりが尋ねると、ツナ、獄寺、山本、ハルは中学時代の頃にモレッツテイが来たことを思い出しながら答えた。

「僕と笹川さんとクロームさんは高校の時に初めて見たけど、やっぱ最所は驚いたよね。」

「うん。本当に死んだんじゃないかと思ったよ。」

「私も。」

炎真、京子、クロームも同じく高校の時にモレッツテイが来たことを思い出しながら答えた。

こうしてモレッツテイによるドッキリは終了したのであった。

#標的 (ターゲット) 261 「巫女服とスーツ」

モレットイの隠し芸という名のドッキリを終えて、この後も次々に隠し芸をしていった。

今度は希に誕生日プレゼントをあげることとなった。

「んじや隠し芸も終わったし、次は希に誕生日プレゼントをあげる時間だぞ。全員、用意してきただろうな。」

「うん！もちろんだよ！」

リボンが希への誕生日プレゼントを持ってきたかどうか尋ねると、穂乃果はちゃんと持ってきたことを意思表示した。

「じゃあ、まずは私がいけます！私は希ちゃんの為に新しい巫女服を作ってみました！」

そう言うとう自分のバッグから希の為に作った、巫女服を取り出した。

「わあ！新しい巫女服や！本当にいいん？」

「うん！よかったら来てみて！」

そう言うとう希は2階のツナの部屋で巫女服に着替えて、再びみんなのいるリビングに戻ってきた。

「うわあー！綺麗！」

「とっても似合ってますー！」

「やっぱり希ちゃん、巫女服が似合うね！」

京子、ハル、穂乃果は希の巫女服を見て絶賛した。

「どうツナ君？似合ってる？」

「はい、すごく似合ってますよ。」

「そ、そう…!?!/あ、ありがとう…!?!/」

(((ん?)))

ツナに似合っていると言われて、希は顔を赤くした、それを見て穂乃果たちは、いつもと用意の違う希に戸惑ってしまった。

その中で希がいつもと反応の違う原因を理解した人物が複数いた。

(((ま、まさか…)))

そう何を隠そう超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナの

ことを知っていることり、海未、真姫、絵里であった。

あれだけ大胆で、何の躊躇いもなくツナに抱きつくような希がこんなに変わった原因は超^{ハイパー}死ぬ気モードしかこの4人はないと思っ
てしまっていた。

「さすがことりだな。それでこれがバッグに入ってたが、これも希への誕生日プレゼントか？」

「そ、それは!!／／／」

リボーンの手にはいつの間にも黒いスーツを握られており、そのスーツを見てことりは慌ててしまっていた。

ことりが急に挙動不審になったことに、穂乃果たちはこれが希の誕生日プレゼントの為に持ってきたものでなく、ツナの為に作ったプレゼントだということを理解し、ことりのことをジト目でジッと見ていた。

「あ、あれー!?!／／／自分で作ったのを、間違えて持ってきたか
なー!?!／／／」

「そうか。じゃあせつかくだし、ツナに着てもらうってのはどうだ？」

「ええええ!?!／／／」

「何でそうなるの!?!」

まさかこんな展開になるとは思わなかった為、ことりは顔を赤くしながら驚き、ツナは何で自分が着なくてはならないことに驚いてしまっていた。

結局、ツナは自分の部屋にてことりが自分の為に作ったスーツ（当
の本人は気づいていない）を着替えて、再びリビングに戻ってきた。

「またスーツを着ることになるんてなー…」

「（（（か、かっこいい…!!／／／））））」

スーツ姿のツナに穂乃果たちは全員かっこいいと思った。それと
同時にことり以外は、このスーツを持ってきたことに感謝していた。

「十代目!似合ってますよー!」

「やっぱ^{そのふく}スーツ似合うよな。」

「あ、ありがとう…」

獄寺と山本に似合っていると言われたが、ツナにとってスこのふくーツは未
来の世界で行ったチョイスや継承式の時に着てしまっているので、ど
うしてもマフィアの衣装だと思ってしまう、似合っているとされて
も素直に喜べなかつたのであった。

「それにしてもこのスーツ、俺にぴったりだね。」

「た、たまたまだよ!!／／／／／たまたまツナ君と同じサイズになちやつ
たんだよ!!／／／／／」

ことりはこのスーツをツナの為に作ったとは言えなかつたので、慌
てて誤魔化した。

一方で海未、穂乃果、花陽、絵里、凜、希は少しだけ視線を逸らし
ており、不審に思ったツナが5人尋ねる。

「ど、どうしたの…?」

「い、いえ…!!／／／／／何かいけないものを見ている気分になつてし
まって…!!／／／」

「私も…!!／／／／／」

「私もです…!!／／／／／」

「わ、私も…!!／／／／／」

「り、凜も…!!／／／／／」

「ウ、ウチも…!!／／／／／」

「何で!」

ツナはただスーツを着ているだけなのに、そんなことを言われたこ
とに驚いてしまっていた。

「全然、似合っていないわね…!!／／／／／スーツが可哀想だわ…!!／／／／／」

「そ、そうよ…!!／／／／／」

「てめえら十代目に向かって!」

「お、落ち着いて獄寺君!」

獄寺は真姫とにこはツナのスーツ姿が似合わないと言ったことに
怒ったが、ツナは獄寺を止めた。

この後も、誕生日会は続いたが穂乃果たちはツナのスーツ姿が気に
なりすぎてチラチラと見てしまったのであった。

#標的（ターゲット） 262 「最高の誕生日会」

ツナのスーツ姿にメロメロになってしまった穂乃果たちであったが（現在進行中にはあるが）それでも全員、希に誕生日プレゼントを渡した。

「みんなありがとう。ウチの為にこんなに誕生日プレゼントを用意してくれて。大切にするわ。」

希はたくさんのプレゼントを貰ったことに、お礼を言った。

するとツナの超直感が何かを感じ取った。

「!?」

「どうしたんですか十代目?」

「いや…今、骸の気配がしたような…」

「クフフ、相変わらず勘がいいですね沢田綱吉。」

「あ、骸様。」

「二二「フクロウが喋った!?!」」

クロームが両手で抱えていたムクロウが喋り始め、右目に漢数字の六に変化した。フクロウが急に喋り始めたことに、穂乃果たちは驚くと同時に恐怖した。

「ムクロウが喋ってるんじゃないやねえぞ。骸って野郎が憑依して喋ってるだけだぞ。」

「ひよ、憑依!?!ということは…!?!」

「その骸っていう人は幽霊ってことですか!?!」

絵里と花陽は憑依と聞いて顔を真っ青にしながら、憑依してる骸という男が幽霊であると思ってしまうていた。

この二人の一言に他のみんなも顔を真っ青にしまっていた。

「違うよ、骸君は幽霊なんかやないよ。普通の人間なんよ。おかしいな髪形はしてるけどね。」

「おかしな髪形は余計ですよ。それでどうでしたか、私のちよつとしたサプライズは？」

「驚いたけど、面白かったよ。正直、今までツナ君と出会ってから変なことはたくさんあったけど、憑依できる人がおるんなって思わなかったわ。」

ただ希だけは骸が普通の人間であることを知っているので、ムクロウに憑依と聞いても恐怖することはなかった。

「それで骸？何しに来たんだよ？」

「そろそろ君の体に乗っ取ろうかなと思ひましてね。」

「んな!？」

「冗談ですよ、犬がクロームに早く帰ってこいと言って少しうるさいものですから、知らせにきただけですよ。」

「犬が…わかりました。」

「では、私はこれで。」

そう言うとムクロウに浮かび上がっていた漢数字の六の文字が消えた。どうやら元の体に戻ったようである。

「ま、まさか…憑依できる人がいるとは…希はその骸という人を知っているのですか…?」

「まあね。誕生日会の前に、並盛の喫茶店にいたらたまたま出会ったんよ。」

海未が骸のことを尋ねると、希は出会っていたことを話した。

穂乃果たちが骸の憑依のことに驚いていると、庭から窓コンコンと叩く音が聞こえてきた。

「おい窓からの音がするぜ。」

「本当だ。誰だろう?」

山本がそう言うと、ツナはカーテンを開けると…

「お、ボンゴレ!おっす!」

「ジュリー!」

「何でここに!？」

「あ!前に穂むらにに来てくれた人だ!」

そこにはシモンファミリーである加藤ジュリーがいた。

ジュリーがツナの家に来たことに、炎真、ツナは驚き、穂乃果は前に穂むらに来たことを思い出していた。

とろあえずツナはジュリーを家にあげると、炎真はジュリーに尋ねた。

「なんとなく…:というか十中八九理由はわかるけど一応聞くね…:何でここに来たの…:?」

「そりやもちろん、*μs*のみんなに会いに来たに決まってるじゃん！それと雪穂ちゃんに…:あれ！そっちの子は誰!?超可愛いじゃん！」
「え?私?」

ジュリーは初めて見る亜里沙を見ると、亜里沙は首を傾げて疑問符を浮かべた。

「な、何よコイツ…:?」

「僕のファミリーのジュリーなんだ。それよりジュリー、ここに来てることをアーデルにバレたら大変なんじゃ…:」

炎真が真姫にジュリーのことを説明するが、そんなことよりもジュリーがここにいることをアーデルに知られた

らまずいと思ってしまうていた。

「大丈夫だって。バレないように上手く来たから。」

「そうか。バレないようにか…:」

「げっ!?アーデル!?!」

大丈夫だと言った矢先に、すでに庭に禍禍しいオーラを放っているアーデルがいた。そして言い訳する間もなく、ジュリーはアーデルに粛清され、それを見たツナたちは可哀想だと思ってしまうていた。

これに続いてシモンファミリーの大山らうじ、しとつぴちゃん、水野カオルそして青葉紅葉と了平が火花を散らしながらやって来た。

さらにこの後には、ディーノとローマリオ、そして闇医者であるシャマルまでやって来た。ただシャマルは穂乃果たちに手を出そうとしたところ、ビアンキにポイズンクッキングでやられてしまい、それと同時にビアンキを見てしまった獄寺がダウンしてしまった。

「あーーーーー!もう大変だー!」

「フフツ…:」

「どうしたんですか希さん？」

「こんな楽しい誕生日は初めてやから嬉しくて。今までずっと一人やったから。」

「希さん…」

「ウチ、ツナ君に出会えて本当によかった。ありがとう。」

そうお礼を言うと、希は顔をツナの頬に近づけるとそのままツナの頬にそつとキスした。

「んな!?!／／／」

「「「「「!?!／／／」」」」」」

ツナは希にキスされて顔を真っ赤にし、穂乃果たちも顔を赤くしながら驚いてしまっていた。もちろん他のメンバーも驚きを隠せない様子であった。

「ツナ君、大好き。」

キスした後、希はツナに抱きついた。ようやくいつもの希が戻ってきた。

こうして希の誕生日会は幕を閉じた。

#標的(ターゲット)263 「リボーンと少女の出会い」

希も誕生日会から4日が過ぎて、6月14日になった。

6月は梅雨の季節ということもあり、今日は雨が降っており、ツナも並盛高校から帰るとすぐに、自分の家にてリボーンの勉強していた。

「今日はここまでだぞ。」

「お、終わったー…」

そしていつものごとくツナの体はリボーンによってボロボロになっており、ツナはその場で倒れこんでしまっていた。

「だいぶ、成績が上がってきたがまだまだだな。マフィアのボスになるには力だけじゃダメだからな。頭もガツチリと鍛えねえとな。」

「だから何でもマフィアに繋げるのは止めろって!」

リボーンが頭の部分を人さし指で軽く叩くと、ツナはいつものようにツツコミをいれた。

するとリボーンがツナの部屋に飾ってあるカレンダーを見てあることに気づいた。

「なあツナ。」

「何だよりボーン?」

「今日は6月13日だよな?」

「そうだけど…どうしたんだよ?今日は何かあったっけ?ま、まさか…ボンゴレ式のイベントの日とかじゃないよな…?」

「そうじゃねえ。そういうえはあいつの誕生日だと思ってな。」

「あいつ?今日、誰かの誕生日だったけ?」

「お前は知らねえ奴だぞ。俺がお前の家庭教師としてやって来る前にイタリアにいた時に知り合った奴でな、いっつも寂しそうにベランダ

から外を見ててな、だから俺が話相手になってやったんだ。」

「へー、いいところあるじゃん。」

リボーンがそんなこととしていたことを知って、ツナは感心した。

「それでその子は今どこにいるの？」

「さあな。親がホテルを経営してて、その影響で世界中をまわってるって言ってたからな。ただ分かれる時に、次は日本に行くって言ってたぞ。どこかは知らなかったようだがな。」

「そうなんだ。じゃあその子と出会ったのが、6月13日だったってこと？」

「違えぞ。その日がそいつの誕生日だったんだ。」

「誕生日か、それでその子は名前は？」

「小原鞠莉だったぞ。」

「え？日本人なの？」

「いやハーフだぞ。父親がイタリア系アメリカ人で、母親が日本人だったんだぞ。」

「それで日本人の名前なのか…」

ツナはリボーンが言っていた鞠莉という少女が、イタリアに住んでいるにも関わらず、日本人の名前だということ納得した。

「もっと教えてよ、お前が出会ったその鞠莉ちゃんって女の子のこと。」

「しようがねえな、まあたまにはいいか。」

ツナが頼むと、そう言うとりボーンは鞠莉という少女との出会いを話し始める。

時はまだリボーンがディーノを家庭教師かてきょうしていた頃に遡る。

「暇だなー。パパもママも遊んじやいけないっていうし…」

ブロンドで金眼の少女がホテルの屋上のベランダから、イタリアの町を頬を膨らませ、不満そうな顔をしながら

見ていた。

「何だお前、そんな不満そうな顔して?」

「だ、誰?」

声がるほうに少女が向くと、レオンを翼に変形させて宙を浮いているリボーンがいた。

「ちやおつす。」

「チャオ!…つす?」

リボーンがちやおつすと言うと、少女であるイタリア語の挨拶の言葉であるチャオで挨拶するが、リボーンのちやおつすの挨拶の仕方疑問符を浮かべた。

「ベイビーが空を飛んで喋ってる…」

「ベイビーじゃねえぞ、俺はリボーン。殺し屋ヒットマンだぞ。」

「ヒットマン…?」

「殺し屋って意味だぞ。」

「殺し屋!」

少女はヒットマンという単語の意味がわからず首を傾げるが、リボーンが殺し屋だということを説明すると少女は驚きの声をあげた。

「も、もしかして私の命ライフを!」

「まあな。」

「ええ!」

「冗談だぞ。空を散歩してたらたまたま、屋上で不満そうなお前を見つけただけだぞ。」

そう言うとりボーンは、少女のいるところへ移動すると翼を元に戻すとレオンは元の姿に戻り、リボーンの背中から帽子の上に移動した。

「Oh! Funny!面白い!今の何?」

「こいつは俺の相棒のレオンだ。レオンは一度、見た物なら何でも変形できるんだぞ。」

「すごい！もつと見せて！」

レオンが何でも変形できると聞いて少女は、興味を持ったのか目をキラキラ輝かせた。

「面白いやお前の名前聞いてなかったな。」

「私？鞠莉！小原鞠莉！」

これがリボンとイタリアで出会った少女、小原鞠莉との出会いであった。

#標的（ターゲット） 264 「約束」

「それで鞠莉、お前何で一人で町を眺めてたんだ？友達はいねえのか？」

「友達はいるんだけど、パパとママが遊んじやダメだっていうの。」

「そいつは大変だな。そりやさつきみたいなのに、不満そうな顔になるわけだな。」

リボーン鞠莉がはさつきまで不安そうな顔していた顔を理由を理解した。

「何回か脱走しようとしたけど、お手伝いさんとかにすぐに見つかつてすぐに連れ戻されちゃうの。」

「世界中のホテル経営者の娘だもんな。お前は何かあったら、一大事だからな。」

「ウォー！ベイビーなのによく知ってるのね！」

「ベイビーじゃねえ、殺し屋ヒットマンだって言ってるだろうが。」

今だに赤ん坊扱いされていることが気にいらなかったので、再度自分が殺し屋ヒットマンだということを

鞠莉に意識させた。

「リボーンは殺し屋ヒットマンなのに、こんなところで私と話してていいの？」

「気にすんな、今日はプライベートだ。それに最近ヒットマンは殺し屋としての仕事よりは、家庭教師の

仕事がメインだ。」

「家庭教師もやってるの？」

「ああ。ディーノって奴を立派なマフィアのボスにするように依頼されてな。今はそのディーノ奴の家庭教師かてきよーしてるんだ。」

「マフィア!?マフィアってあの!?!」

「そうだぞ。お前もボンゴレファミリーに入ってみるか？」

「ヴオンゴレ？パスタのこと？」

「違えぞ。ボンゴレファミリーは世界最強のマフィアのことだぞ。ちなみにイタリアのマフィアだ。」

「Really!?!世界最強のマフィアがこのイタリアにあるの!?!」

「ああ。」

「ねえ、もつと教えて！マフィアのこととか、リボーンのこととか！もつと知りたいの!！」

「しようがねえな。」

「というわけで、俺は鞠莉にボンゴレファミリーのことを教えただ。」

「お前、そんな小さな女の子にマフィアのこと言ったのかよ！しかもボンゴレファミリーに勧誘してるし!！」

「いいだろ別に。」

「よくないだろ!！」

「まあその時は鞠莉も子供だったし、さすがに覚えてないだろ。それに俺の話を楽しそうに聞いてたぞ。」

「まあ楽しそうにしてたんならいいけど…」

ツナはいつも寂しそうにしていた鞠莉が、マフィアの話であっても楽しそうにしていたのならいいと思っただが、それでも複雑な気分になってしまっていた。

「でも逆に覚えてたら、どうするんだろう…？まさか本当にボンゴレファミリーに入るとか言わないよね…」

「さあな。仮に覚えてたとしても、もう会えるかどうかもわかんねえしな。」

「それもそうか。世界中を移動してるって言ってたしね。それでそれから、鞠莉ちゃんのところへは行ったの?！」

「ああ。何回かボンゴレファミリーの最新情報技術を使って、鞠莉に偽物のロボットを影武者を作って遊びに連れて行ったこともあるぞ。覚えてるだろ、ビアンキと俺との結婚式で使った俺の偽物のロボット。」

「ああ…アレね…」

リボーンがそう言うと、ツナは中学の時にビアンキが勘違いして開いたリボーンとの結婚式の時のことを思い出した。

「そーういや別れの日にした約束、覚えてんのか鞠莉の奴。」

「約束?」

「実はな…」

するとリボーンは再び鞠莉とのことを語り始める。

「今日はお前の誕生日だろ。お前への誕生日プレゼントだ。」

「リボーン…センキュー!」

鞠莉はリボーンに渡されたプレゼントを見て、最高の笑顔でお礼を言った。

だがすぐに鞠莉の表情が暗くなった。

「それとリボーン…」

「何だ?」

「明日から日本に行くことになったの…だから今日でリボーンとお別れなの…短い間だったけど、とっても楽しかったよ。」

「日本か…」

「リボーン?」

「今はまだだが、俺もそのうち行くことになるんだ。まあ、まだ先になるだろうがな…」

「じゃ、じゃあ!もしかしたら会えるってこと!?!」

「まあ俺が日本行くまでにお前が、他の国に行かなきゃいいけどな。仮に俺とお前が日本にいても、日本も広いし、会えるかどうかもわかんねえけどな。」

「会えるよ！きつと！だから、もし会えたら…私と結婚して！リボーン！」

「お断りだぞ。」

「ええー！?!?どうして!?!」

「前にも言っただろ、俺には愛人がいるからな。結婚は無理だぞ。」

「そう…」

「だが俺の愛人になりてえって言うなら話は別だぞ。」

「本当に!?!」

「ああ。次会う時があったら、お前を俺の愛人にしてやるぞ。」

「やったあ約束よ！リボーン！」

「ああ。約束だぞ。」

「ていう約束したんだぞ。」

「お前！鞠莉ちゃんと何て約束してるんだよ!?!」

ツナはまさか小さな女の子に愛人の約束してたことに、おもいつきり叫んだ。

「まあ、もう覚えてねえし、どこにいるかもわかんねえし大丈夫だろ。」

「大丈夫なのかあ…?」

リボーンはそう言うものの、ツナは不安を隠せないでいた。

場所は変わって、静岡県の淡島にそびえ立つホテルの一室。

「鞠莉（さん）！誕生日おめでとう（ございますわ）！」

ポニーテールで青い髪の女の子と、黒髪のロングヘアの女の子が誕生日おめでとうと言った。二人の近くには誕生日おめでとう、書かれたホールケーキがあった。

「センキューー！果南！ダイヤー！」

そして金眼で金髪の女の子が誕生日を岩ってくれた二人に、お礼を言った。そう、この女の子こそがリボンが言っていた鞠莉である。

そして鞠莉、果南、ダイヤは一緒にケーキを食べ始めながら、話し始めた。

「私も、もう14なのね。早いものねー。」

「その言い方だと、年寄りの会話みたいですよ鞠莉さん。」

「でも私たちも、もう来年は中3で来年は受験なんだよね。」

自分たちの年齢としのことについて3人は話していた。

そして鞠莉はあることを思い出した。

「そうね、もう14なのね…」

「鞠莉？／鞠莉さん？」

鞠莉の言葉にダイヤと果南は疑問符を浮かべた。

「昔ね、果南とダイヤと出会う前…イタリアにいた頃にいつも寂しそうにイタリアの町を眺めてた私の為に、いつも話をしに来てくれた人がいたの。リボンっていうんだけどね。それで別れる前にリボンは私と約束してくれたの、次会ったら私を俺の愛人にしてやるって。」

「あ、愛人!?!」

「うん。」

「ど、どういうことですかの鞠莉さん!?!」

「そのままの意味だけど？」

「いやいや！普通、そこは結婚の約束とかじゃないの!?!」

「結婚して言ったんだけど、俺には愛人がいるからって無理だって言われたの。だから愛人なの。」

「ええっと…」

愛人と聞いて、ダイヤと果南は反応すればいいのかわからなくなっ
てしまっていた。

リボーンは覚えていないだろうと言っていたが、鞠莉はリボーンと
の約束を覚えていたのだった。

#標的（ターゲット） 265 「アルパカ脱走事件」

ある日、早朝の並盛町。

「ふわあ…」

学ランを来て風紀と書かれた腕章を巻いて、あくびをしながら並盛町を歩いている青年がいた。この男は並盛町高校の理事長で、ボンゴレファミリー雲の守護者、雲雀恭弥である。現在、雲雀は並盛町のパトロールを行っている。

しばらく並盛町をパトロールして、学校に向かおうとしたその時であつた。雲雀の視界にある物が目と写る。

「アルパカ…?」

それは二匹のアルパカであつた。なぜこんなところにアルパカがいるのかわからず雲雀は、疑問符を浮かべてしまっていた。

それから2時間が経過した、音ノ木坂学院の穂乃果たちの教室では。

「「アルパカがいなくなったー!」」

教室から穂乃果、海未、ことりから驚きの声が上がっていた。

「本当なのヒデコ!」

「うん。今朝、先生が音ノ木坂学院に來たらアルパカがいなくなつたのを感じたらしい。」

「でもなぜいなくなったのでしょうか…まさか誰かが拐ったとか…?」

「ううん。なんかアルパカ小屋の木が古くなって、自然に壊れて

たつて。だからアルパカが自分の意思で、逃げ出し可能性が高いんだつて。それで今もどこにいるかわからないんだつて。」

「そうなんだ…」

「ことり…」

「ことりちゃん…」

あのアルパカたちに思い入れがある、ことりはヒデコの話聞いて、暗い表情になってしまっていた。ことりがあのアルパカたちを好んでいることを知っている穂乃果、海未はことりのことを心配していた。

「とりあえず学校を終わったら、みんなで探そうよ！」

「そうですね。私も心配ですし。」

「穂乃果ちゃん、海未ちゃん…ありがとう！」

ことりは自分のことを心配して、気を遣ってくれた二人にお礼を言った。

場面が再び戻って、並盛町の並盛高校。

「えつと…これは…」

「どういうことつすかね…？」

「さあ…？」

なぜ並盛高校のグラウンドにちよつとした小屋が作られており、そこにアルパカがいることにツナ、獄寺、炎真がいることに驚きを隠せていなかった。

「何言つてんだ、どう見てもアルパカだろ。」

「んなことはわかつてんだよこの野球馬鹿！何で並盛^{ウチのがっこう}学校にアルパカがいるのかわからないから驚いてんだよ！」

山本はアルパカがいることに全く違和感を感じておらず、ただ笑っていた。相変わらず天然な山本に獄寺はツツコミをいれた。

「今日、パトロール中に見つけたんだよ。」

「ひ、雲雀さん!？」

いつの間にかツナたちの後ろには雲雀がおり、雲雀が来たことに全く気づかなかった為、ツナは驚いてしまっていた。

「え…じゃあ雲雀さんがこのアルパカを…？」

「そうだよ。何か問題でもあるの？」

「い、いや何でもありません！」

「そう。じゃあ僕は仕事があるから。」

それだけ言うと、雲雀はその場から去ってしまっていた。

「まさか雲雀の野郎が連れて来たとはな…まあ納得できねえこともないけどよ…」

「やっぱ雲雀って面白いよな。」

獄寺、山本は雲雀が連れてきたことに納得していた。

一方でツナはこのアルパカを見て、ある違和感を感じてしまっていた。

「うくん…？」

「どうしたのツナ君？」

「いや…このアルパカ見たことあるっていうか…というか知ってるんだけど…いやでもな…」

ツナはこのアルパカの正体に気づいていた。そうこのアルパカは音ノ木坂学院のアルパカだということに気づいてはいたものの、あのアルパカが音ノ木坂学院から、この並盛がここまで来られるのか？と疑問に思ってしまった。

「二応、後で穂乃果ちゃんに連絡してみようか…」

この後、ツナは穂乃果にアルパカの写真を撮って、LINEで送ったのであった。

#標的 (ターゲット) 266 「居場所判明」

音ノ木学院ではアルパカのことは先生からも伝えられた。

「えー、お前らも知っているとと思うが音ノ木坂学院のアルパカがいなくなった。一応、役所の人に連絡して探してもらってるが、もしお前らも見つけたら学校に連絡してくれ。」

穂乃果たちのクラスの担任である山田博子先生が、朝のH Rホームルームにてアルパカの話題を話した。

すると穂乃果のスマホのLINEの通知音が鳴った。

「おーい高坂、ちゃんとマナーモードにしとけよ。」

「す、すいませーん…」

先生に注意されて穂乃果はカバンの中にあつたスマホを取り出して、すぐにマナーモードにしようとするがLINEの相手が想い人だとわかってLINEを開いて、送られてきた内容を見た。

「あー…」

「穂乃果！ H Rホームルーム中ですよ！」

「いたんだよアルパカが！並盛高校に！」

「何を言っているんですか…？」

「ほらー！」

そう言うと穂乃果はツナから送られてきたLINEを海未に見せた。

『これ音ノ木坂学院のアルパカじゃない…？』

ツナのLINEの文章の下には、二匹のアルパカの写真が写っていた。

「ほ、本当ですね…」

海未は穂乃果のスマホの画面を見て、まさかこんな形でアルパカが

見つかるとは思ってもみなかった為、驚きを隠せない様子であった。
この後、このツナのLINEにてクラス全員だけではなく全校生徒に知られることになった。

そして時間は一気に経過していき放課後、理事長に穂乃果、海未、ことりは集まっていた。

「それでどうだったのお母さん？アルパカは？」

「並盛高校に確認したら特に怪我もしてなくて、普通に元気でやっているそうよ。それにしても面白いわね、まさかアルパカが並盛まで行ったなんてね。それもあなたたちの大好きな並盛高校ツナくんのところにいるなんて。」

「お母さん!!／／／／」

「理事長!!／／／／」

ここのりの母がそう言うのと、3人は顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「並盛高校の理事長さんが親切な方でね、すぐに音ウチのノ木坂学院までアルパカを送ってくれるそうなの。」

「私、知ってる！並盛高校の理事長さんってツナ君の一つ上先輩なんですよね！」

「ええ!?そんなに若いの!?!」

「知らなかったです…」

穂乃果は以前ツナが自分の家ほむらにバイトに来た時に、並盛高校の理事長である雲雀のことを語っていたことを思い出した。並盛高校の理事長がそんなに若いことを初めて知ったことりと海未は驚いてしまっていた。

「そうなの。並盛高校の理事長は雲雀恭弥君っていうの。元々は並盛高校の風紀委員長だったんだけど、卒業して理事長に就任すると同時に風紀財団を立ち上げたの。」

「「風紀財団?」」

「並盛の秩序を護る組織で、並盛高校の風紀委員会のメンバーを中心に作られてるの。風紀財団このそしきが設立されてから並盛町の風紀が正されたらしいわ。一回だけ理事長の集まりで見たことがあるけど、雲雀恭弥かれは相当なやり手よ。」

「そんな凄い人が理事長だなんて…ツナ君たちと関わりがあるので
しょうか…?」

ことりの母から雲雀の詳細を聞くと、海未は雲雀がボンゴレファミ
リーに関わっているのではないか?という疑問が生まれた。

「そうだ。一応、あなたたちでこの後、並盛高校に行つてアルパカの様
子を見てきてくれないかしら?」

「私たちがですが?」

「ええ。なんなら星空さんと、小泉さんと、西木野さんと一緒に行つて
みたらどうかしら?これならツナ君に会う口実になるでしょ?」

「な!?!/!/」

「お母さん!!/!/気を使わなくていいから!!/!/」

ことりの母は穂乃果たちの恋愛をサポートしてきた為、穂乃果と海
未は顔を真っ赤にし、ことりも顔を真っ赤にしながら叫んだ。

こんな反応をしつつも、並盛高校に行くことを決意したのであつ
た。

#標的(ターゲット) 267 「雲雀恭弥(理事長)との対面」

穂乃果はツナはLINEで並盛高校に連絡してから、全員で並盛高校に向かった。

「あ、いた！ツナ君！」

「あ！穂乃果ちゃん！みんな！」

穂乃果が右手を大きく振りながら叫ぶと、ツナも穂乃果の声に気づいて、大きく手を振った。

「いやー、まさかあのアルパカが並盛高校まで逃げて来るなんてね。」

「俺も驚いたよ、最所見た時にどこが見たことがあるアルパカだとは思ったけど、まさか本当に音ノ木坂学院だとは思わなかったから。」

穂乃果とツナはアルパカのことについて話していると、花陽がツナに尋ねる。

「それでアルパカはどこにいるんですか？」

「グラウンドの端っこのほうだよ。そっか花陽ちゃん、アルパカ世話係だったもんね。」

「かよちんアルパカが逃げ出したって聞いた時、すっごい泣いてたもんね。」

「り、凜ちゃん！」

凜がアルパカが逃げ出した時の花陽のエピソードを語ると、想い人の目の前でそんなことを言われた為、花陽は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしてしまっていた。

「泣いたってことは、それほどアルパカのことを大事に思ってたってことでしょう？やっぱり花陽ちゃんって優しいんだね。」

「え!?／／あ、ありがとうございます…!!／／」

花陽はツナに優しいと言われて、今度は想い人に褒められた優しさ

で顔を赤くしてしまっていた。

「り、凜だつて心配してたにやー！ー！」

「え…？…そう…？」

凜は花陽がツナに褒められたことに嫉妬したのか、自分もアルパカのことを心配していたとアピールしたが、ツナは急に凜がそんなことを言い出したことに戸惑いを隠せなかったので、結局褒められることはなく、穂乃果たちは苦笑いしながら凜を見ていた。

すると…

「ねえ誰？君たち？」

「ひ、雲雀さん!？」

またしても後ろに雲雀がおり、雲雀の前で群れてしまったことにやばいという危機感に襲われた。

「雲雀って…」

「こ、この人が並盛高校の理事長…」

「若すぎでしょ…」

雲雀と聞いてことりと海未は、この男が並盛高校の理事長である雲雀恭弥だということを理解し、真姫は理事長があまりにも若いことに驚きを隠せていなかった。

すると雲雀はことりのほうを見て、何かに気づいた。

「君、もしかして南理事長の…？」

「え…はい。」

「どおり似ていると思ったよ。南理事長から君たちが来ることは聞いているよ。アルパカなら近いうちに音きみたちのがっこうノ木坂学院に風紀財団ほくたちが責任を持つて送るよ。」

「あ、ありがとうございます！」

ことりがお礼を言うのと、穂乃果たちも慌てて頭を下げた。

「まあせつかくだし、ゆっくりしていきなよ。ただ並盛高校このがっこうの風紀を乱すようなら…噛み殺す。」

不敵な笑みを浮かべ、殺気を放ちながら懐からトンファーを取り出した。そんな雲雀を見て穂乃果たちの体は少しであるが震えていた。

ただ一人を除いては…

「一体、何者にや…?」

「ワオ。君面白いね。」

そう何を隠そう凜であった。一方で雲雀は、凜の素質を見抜いたのか凜に興味を抱いていた。

「僕と戦うにはまだまだ実力不足だけど、強くなったらいつでも挑んできなよ。僕が噛み殺してあげるよ。」

そう一言だけ言うと、雲雀はそのまま町のほうへとゆっくりと歩いていった。

雲雀の姿が見えなくなると、穂乃果と凜が口を開いた。

「なんか怖い人だったね…」

「凜のこと一瞬で見抜いたにや…」

「もしかしてあの人もボンゴレファミリーに関係してるのですか…?」

「まあね。でも本人はそれを否定してる。あの人は集団で行動するのが嫌いだからね。」

「それなのに風紀財団という組織が作るって、よくわかりませんね…」

「それは俺も同感…」

海末の意見にツナは同感した。

そして真姫がずつと言いたかったことを口にした。

「それよりも何で理事長が武器なんて持つてるのよ!おかしいでしょ!」

「そりや敵を噛み殺す為というか…おそらく雲雀さんは黒曜にいる骸と戦いに行っただんだと思う…」

「本当にあの人、理事長さんなんですよね!?!」

ツナの発言に花陽は本当に雲雀が理事長なのか信じられなくなっていた。

「まあしようがないよ…雲雀さん凄い戦闘^{バトル}狂^{マニア}だし…」

このツナの発言で穂乃果たちは唾然としてしまっていた。穂乃果たちはこれで音ノ木坂学院がもの凄く平和であること、そして並盛高校が普通とは違うことを理解したのであった。

#標的（ターゲット） 268 「アルパカとの再会」

雲雀^{理事長}出会ったあと、ツナはグラウンドの端っこにいるアルパカのところにまで穂乃果たちを案内した。

「よかったあ…本当にいたー…」

アルパカに再会できたのかよっぽど嬉しかったのか、花陽は涙目になりながら頭の部分を撫で始めた。

「ハハハ。やっぱり花陽ちゃんって本当にアルパカのが好きなんだね。」

「花陽ちゃんはアルパカ使いだからね！」

「アルパカ使い…?」

穂乃果のアルパカ使いという初めて聞く言葉に、ツナは疑問符を浮かべた。

するとツナたちのいる場所に野球ボールが転がってきた。

「おーい！取ってくれー！」

「あ、山本だ。」

遠くから山本が右手を振りながらボールを取ってくれと叫ぶと、ツナはこの声の主が山本だということに気づいた。

「よーし！凛が投げるにやー！」

すると凛が転がってるボールを拾うと、大きく振りかぶってボールをおもいっきり投げる。すると野球ボールは

山本を追い越して、ホームベースまで届いていった。まさかあんな凛がここまでのことをするとは思ってもみなかったのか、山本以外の野球部員はその場で固まって、啞然としてしまっていた。

「やっぱり凛ちゃんすげえー！」

いくら運動神経がいいといっても、女の子である凛がグラウンドの端っこからホームベースまで投げたことにツナは驚きの声を上げてしまっていた。

て海未たちも慌てて二人の後を追って行った。

ツナの提案にて並盛高校を見学することとなった穂乃果たち。果たしてどのような出会いが待っているのだろうか？

#標的（ターゲット） 269 「さらなる共通点の発覚」

ツナの提案で穂乃果たちは並盛高校を見学していくことになった。

「よーし！到着！」

「はあはあ…!!／／／」

ツナは穂乃果に腕を引つ張られて、そのまま校舎の前までやって来たが、走ってドキドキしているのと穂乃果と手を握っていることにドキドキしてしまっていた。

「どうしたのツナ君？顔が赤いよ？大丈夫？」

「へ!?／／いや…!!／／／その…!!／／／」

穂乃果はどこかツナの様子がおかしいと気づいて、大丈夫かと尋ねるがツナは何も答えることができず、顔を真っ赤にしながら自分の手を握っている穂乃果の手を見ていた。

ちよつとしてから穂乃果は、ツナがずっと下を見ていること気づいて、穂乃果もツナが見ているところを見ると自分がツナの手を握っていることに気づいてしまった。

「!!／／／」

穂乃果も自分が想^{ツナ}い人の手を握って握っていることにようやく気づいて、顔を真っ赤にしながら慌てて手を離れた。

「ご、ごめん!!／／／」

「だ、大丈夫だよ!!／／／こっちのほうこそ言わなくてごめん!!／／／」

穂乃果は手を握ってしまったことを謝ると、ツナも握っていたこと言わなかったことを謝った。

この後、置いてきぼりになった海未たちと合流し、職員室に行つて先生たちに理事^{ひばり}長が許可したことを伝えた。

「あんまり人いないね。」

「今は放課後だし、ほとんど部活に行つていないからね。あ、そうい

えばハルが体操クラブに入ってるけど、行ってみる？」

「行く行く！」

「ハルちゃん体操クラブだったんだね。」

「私も興味があります。」

「私も気になります。」

「私も別にいいわよ。」

ツナがハルが体操クラブに入っていることを伝えると、穂乃果、ことり、海未、花陽、真姫はハルの部活の様子を見に行くことを決意した。

「私ちよつとお手洗いに行ってくるから、先に行つてて。」

「わかった。体育館の場所はわかる？」

「わかるわよ。グラウンドから見えたんだから。」

「そっか。もし迷子になったら連絡してね、すぐに行くから。」

「ま、迷子なんてならないわよ！バカじゃないの！」

この年齢で迷子になると言われてツナは、真姫はそう言い返すとそのままトイレに向かつて行つた。

トイレから出ると真姫は体育館に向かう為に、体育館へ向かう為、廊下を歩いていると途中で音楽室と書かれたプレートが視界に入つたので、寄つてみることにした。

「誰もいないわねよね…」

真姫は音楽室の扉を数センチだけ開け、誰もいないことを確認すると音楽室に入った。すると一台のピアノが目にとまると、ピアノの前まで移動した。

「ちよつとならいいわよね…」

そう呟くと、真姫は椅子に座つて深呼吸をするとピアノを弾き始めた。数分ほど弾くと扉が開き、扉の開く音を

聞いて真姫は驚き演奏を中断して、扉のほうを向くとそこには獄寺が立っていた。

「な、何であんたがここに…？」

「そりゃこつちの台詞だ。何でてめえが並盛高校に…そりゃやてめえらのがっしょう音ノ木坂学院のアルパカが逃げて来たって言つてたな。」

獄寺は真姫に並盛高校（こ）にいる理由を尋ねようとしたが、途中で音ノ木坂学院のアル・パカが逃げ出したことを思い出した。

「で？そういうあんたは音楽室に何か用？」

「下手なピアノが聞こえてきたから、どんな奴が弾いてんのかと思つて見にきたただけだ。」

「どういう意味よ？」

「そのまま意味だ。バカのお前にもわかるように、もっとわかりやすく教えてやろうか？」

「いいえ、結構よ。バカのあんたの説明なんて聞く価値もないわ。」

「なんだと？」

「何よ？」

真姫と獄寺は会つて早々、互い毒を吐いた。相変わらずこの二人は犬猿の仲である。

「そんなに下手だつていうなら、どこが下手だったのか言ってみなさいよ。」

「サビの部分を間違えてただろ。本当はミのはずなのに、ファで弾いてただろ。」

「な!？」

真姫まさか獄寺が答えられるとは思つてもいなかったので、驚きの声を上げてしまつていた。

「俺もガキの頃にやつてたからなピアノ。城でよく親父がピアノの発表会をよく開きやがったからな。」

「し、城つて…」

真姫は獄寺がピアノをやつていたことにも充分驚いていたが、一番驚いたのは城に住んでいたことであつた。

「あんたがピアノをやつてたなんてね…」

「ガキの頃の話だ。もうやつてねえけどな。」

「本当に私とあんたつて似ているところがあるわよね…」

「こつちはいい迷惑だがな。」

「それはこつちの台詞よ！」

二人はまたしても共通点が見つかつて、迷惑そうな顔をした。この

二人は頭が良くて、家が金持ちで、素直じゃなくて、ピアノをやっているという共通点があり、案外恋人同士になってもおかしくないのかもしれない。

「まあいい。下手だろうとピアノが好きなら、諦めんじゃねえぞ。」

「え？」

「俺は十代目に忠誠を誓った。だからもうピアノをやる気はさらさらねえ。だがお前は俺とは違う。だから諦めんよ。」

そう言うと、そのまま獄寺は音楽室を出てどこかへ行ってしまった。

「諦めるなか…」

以前ツナが音ノ木坂学院に来た時にもピアノのことを言われたので、真姫は再び家の事情のことを思い出してしまった。

すると真姫はカバンからスマホを取り出すと、メールのアプリを開き、ピアノコンクールのお知らせのメールをしばらく見つめたのであった。

真姫はしばらくスマホの画面を見つめていると、再び音楽室の扉が開かれた。

「あ、ここにいたんだ真姫ちゃん。」

「ツ、ツナ!? な、何でここに!?!」

「いや真姫ちゃんが全然来ないから、迷っちゃったのかと思って、探しにきたんだけど…」

「ちよつとピアノを弾いてたの。悪かったわね心配させて。」

「ならいいんだけど…」

ツナは真姫が体育館に来ない理由がわかって、ホツとした。

『真姫ちゃんには本当になりたい自分になって欲しいと思ってる。』

『下手だろうと何だろうとピアノが好きなら諦めるんじゃないやねえぞ。』

真姫は脳裏に以前ツナが音ノ木坂学院がっこうに来た時に言った言葉と、さきほど獄寺の言っていた言葉が急に浮かんだ。

「ねえツナ。」

「何? 真姫ちゃん?」

「私がピアノをやるって言ったたらツナは応援してくれる?」

「え?」

「前に音ノ木坂学院がっこうに来た時に言ってたじゃない。真姫ちゃんには本当になりたい自分になって欲しいって。」

「ああ…そういえば言ったねそんなこと…」

ツナは真姫に言われて、頬を人さし指でかきながら自分をそんなことを言ったことを思い出した。

「そりやもちろん、応援するよ。でも何でそんなことを聞くの?」

「別に。ただ聞いてみたのかわつただけよ。」

「そっか。」

真姫がそう答えると、ツナはこれ以上、深く聞くことはせずにそう一言だけ呟いた。

すると真姫は顔を赤くしながら喋り始める。

「ね、ねえ…!!／／ツナ…!!／／」

「何?」

「今度ピアノのコンクールがあるの…!!／／よかつたら見に来てくれない…!?!／／」

「ピアノコンクール?」

「そ、そうよ!!／／わ、悪い!?!／／」

「いや悪いも何もないけど…いいよ全然。」

「ほ、本当に!?!／／」

「うん。」

ツナが来てくれることを了承すると、真姫は、ぱあつと明るい表情になった。

「ということは穂乃果ちゃんたちも来るんだよね。」

「来ないわよ。」

「え?」

「急に仕事が入ってパパが来れなくなってチケットが1枚余ったの。だからツナを誘ったのよ。」

「え?何で俺なの?別に他の人でもよかつたんじゃ…」

「そ、それは…!!／／」

ツナはなぜ自分だけを誘ったことに疑問を抱くと、真姫は再び顔を赤くしたまま、言葉に詰まってしまっていた。そして昨日の出来事を思い出した。

時は遡り昨日。真姫の家。

真姫はリビングのソファにて、のんびりテレビを見ていた時であった。

「真姫、ちょっといい？」

「何？ママ？」

「今度のピアノのコンクール、パパが急にその日に仕事が入って来られなくなったの。」

「そう…」

真姫はせつかくのピアノコンクールに、父親が来られないと知って暗い表情になってしまっていた。

「せつかくだから、誰か誘ってみたら？」

「それもそうね。誰にしようかしら？」

チケットが1枚しかないので誰にしようかと真姫は考え始めるていると、真姫の母がここであることを思いついた。

「そうだわ、ツナ君を誘ってみたらどうかしら？」

「な、何でツナを誘わなくちゃいけないのよ!?!?!」

「いいじゃない。ツナ君にはいつもお世話になってるんだし。なにより真姫の愛してやまない人なんだから。」

「あ、愛してやまないわけじゃないでしょ!?!?!」

「あらあらそんなに舞い上がっちゃって。」

「舞い上がってないわよ!!!!」

「もう少し正直にならないと、ツナ君は振り向いてくれないわよ。」

「人の話を無視しないで話を進めないでよママ!!!!」

結局、真姫はいつものように母の手に踊らされてしまったのであった。

「き、気まぐれよ!!／＼／＼別に深い意味はないんだから!!／＼／＼」
「え!?ちよつと!真姫ちゃん!」

真姫は正直に本音を言うことができなかつた為、いつものように誤魔化した。そしてそのまま顔を赤くしながら早歩きで音楽室を出て穂乃果たちのいる、体育館へと向かって行ってしまった。一方でツナは勝手に音楽室から出ていってしまったことに驚き、急いで真姫を追いかけた。

そして体育館に着くと

「こ、これは一体…?」

「どういう状況…?」

二人が体育館に着くいて早々、その場で立ちつくして啞然としてしまった。

なぜなら…

「はい!次は腕立て伏せ10セットです!」

「な、何でこんなことになったんでしょうか…」

「どうか何で私たちまで…」

「ハル!穂乃果!無駄口を叩かない!」

「は、はい!」

そこには檀上の上に立って、なぜか体操部の部員全員と穂乃果たちを指導していた海未がいたからである。

そしてこの後も海未の指導は続いていたのであった。

#標的（ターゲット） 271 「風邪」

6月のとある金曜日、その日は大雨であった。

「あ…傘忘れちゃった…」

ことりが音ノ木坂学院の玄関にて鞆の中に入れてある折り畳み傘を取り出そうとしたのだが、肝心の折り畳み傘を忘れてしまったようである。

「どうしよう…今日は穂乃果ちゃんも海未ちゃんも今日は用事があるって、先に帰っちゃったし…」

今日は用事があると言つて、二人は生徒会の仕事を早めに終わらせて帰ってしまったので、二人を頼ることもできない。自分の母は音ノ木坂学院の理事長をしている為、まだまだ仕事が終わるまで時間がかかってしまう。さらにこの雨はすぐにやむ様子もないので、ことに残された選択肢は一つしかなかった。

「走って帰るしかないか…」

そう呟くと、鞆を頭の移動させて傘の変わりにしてそのまま大雨の中、走って家に帰っていった。

そして次の日。

「ゴッホ…ゴッホ…」

「大丈夫、ことり？」

金曜日に大雨の中、走って家に帰ったのが悪かったのかことりは風邪をこじらせてしまった。そんなことりを見て、ことりの母の心配そうな表情でベッドで寝ていることりを見守っていた。

「病院にはなんとか行けたけど困ったわ…この後、大事な仕事があるのよね…誰かにことりの看病を頼もうかしら…」

ことりの母もどうしても外せない仕事がある為、誰かことりの看病をしてくれる人は誰かいないかと考え始めた。10秒ほど考えていると、ことりの母は誰にことりの看病を頼むかを思いついた。

「ことり、携帯借りるわよ。」

「うん…」

ことりの母はベッドの近くあったことりのスマホを借りると、部屋から出るとスマホのアプリからLINEを起動すると、無料電話からとある人物に電話した。

「あ？もしもし？…ことりの母です。ちょっと事情があつてことりのスマホからかけてるんだけど実はね…」

そして5分後。ことりの母は再び部屋に戻って来ると、ベッドで寝ていることりに伝える。

「今、私の知り合いにことりのことを伝えたら、ことりのことを看病してもいいって言ってくれた人がいたわ。」

「本当に…？」

「うん。それよりごめんねことり。こういう時に傍にいてあげられなくて。」

「ううん…私のほうこそごめんね…昨日、私が傘を忘れてなかったらこんなことにはならなかったのに…」

自分の変わりに看病してくれる人がいると伝ええると、親でありながら娘の傍にいてあげられないことを謝ると、ことりも昨日のことについて謝った。

そして20分ほど経過すると、ことりの家のインターホンが鳴つ

た。

「どうやら来てくれたみたいね。」

インターホンの音を聞くと、そのまま玄関に向かうと、少しして戻ってきた…

「ことりちゃん、大丈夫?」

ツナと一緒に。

「ツツツツツツ、ツナ君!?!/」

まさか自分の家に想い人が来るとは思ってもみなかったことで、顔真っ赤にしながらめちやくちや動揺してしまっていた。そしてなぜ母が自分のスマホを借りた理由を理解したのだった。

(ど、どうしよう!!/ね、熱が上がっちゃう!!/)

「だ、大丈夫!?!ことりちゃん!?!」

来て早々、ことりが顔を真っ赤にしたのでツナは風邪が悪化したのかと思つて慌てて心配してしまっていた。思ったよりも面白い反応をする娘の姿に、ことりの母は苦笑いしてしまっていた。

「ごめんなさいねツナ君。休日と呼んで、いきなり娘の看病をお願いしちゃつて。」

「大丈夫ですよ。どうせ暇してましたから。それにことりちゃんどもだちが風邪って聞けば看病しに来るのは当然ですよ。」

「ありがとう。ツナ君に頼んでよかったわ。これならことりを任せられるわ。」

「はい。ことりちゃんのごことは俺に任せてください。」

「ま、任せる!?!/」

ことりの母はツナに自分の娘の看病を任せられるという意味でそう言い、ツナはそういう意味だと理解して任せてくださいと答えたが、ことりはツナ君になら娘をお嫁さんとして任せられると勘違いしてしまい、再び顔を真っ赤にしそのまま気絶してしまった。

「え!?!ちよつとことりちゃん!?!しっかりして!」

「こ、ことり!」

ツナとことりの母は急に気絶したことに慌ててしまったが、気絶していたことりはとても幸せそうな表情で気絶していたという。

#標的（ターゲット） 272 「専属の執事」

10分後にことりは目覚めた。娘がとりあえず目が覚めたのを確認すると、仕事に行く準備をし、玄関にてことりの母は財布から5000円札を取り出して、ツナに手渡した。

「お金をツナ君に渡しておくわ。ことりが何か食べたいつて言った時に使つて。後、台所にお粥があるから。」

「わかりました。」

「後、これ私の携帯番号。なるべく早く早く帰るつもりだけど、もしことに何かあつたら連絡して。」

「はい。じゃあ後は任せてください。」

「ごめんなさいね。ツナ君に任せつきりで。」

「大丈夫ですよ。気にしないでください。」

「ありがとうございます。じゃあ行つて来るわね。」

そう言うことりの母は玄関を出て、仕事に向かつていき、扉が完全に閉まったのを確認した後、再びことりの部屋に戻ると、とりあえず熱を計った。

「どう？熱は下がった？」

「ううん…全然…」

「そっか。まあ今は安静にすることが大事だからね。あ！そういえばお母さんが、お粥作つてたつて言つてたけど食べる？」

「うん…」

ことりが弱々しい声でそう答えると、ツナは台所に行つてことりの母が作つておいたお粥を電子レンジ温めて、台所からお盆とスプーンを探した後、お盆にお粥の入った皿とスプーンを乗せて、ことりの部屋に戻った。

「どう？食べられそう？」

「なんとか…」

「わかった。じゃあ俺が食べさせてあげるよ。」

「えええええ!?／＼／」

まさかツナが食べさせてくれるような、夢のような展開が起こるとは思ってもみなかった為、顔を真っ赤にしてしまった。

そして断る間もなくツナはスプーンにお粥を掬い、ことりの口元に近づけていった。

「はい。あーん。」

「あ、あーん…!!／＼／」

「どう?美味しい?」

「う、うん…!!／＼／美味しいよ…!!／＼／」

ツナ君が食べさせてくれたからという言葉を、グツと押えこみながら、ことりは美味しいと答えた。

「よかった。じゃあもう1回、口を開けて。」

「え…!?／＼／その…!?／＼／」

ことりは自分で食べるから大丈夫だよと言うつもりであったが、このままツナに食べさせてもらいたいという気持ちが強くて、結局断ることができずこの後もお粥が半分ぐらい無くなるまで、ツナに食べさせてもらった。

だがことりはこれ以上、ツナに食べさせてもらうのが恥ずかしくなってきた。しまった。

「も、もう大丈夫だよ!!／＼／自分で食べられるから!!／＼／」

「そう?無理しないでね。」

そう言うとツナはスプーンを皿に置いて、そのままお粥の皿をことに渡すところはお粥を食べ始めた。ツナに食べさせてもらったおかげか、少しであるが食欲が戻ったようである。

しばらくしてことりはなんとか、お粥を食べ終えた。

「よかった。食欲が少し戻ったみたいだね。」

「う、うん…!!／＼／」

「あ、ご飯粒ついてるよ。」

「!?／＼／」

そう言うとツナはことりの口元についている、ご飯粒を人さし指で取ると、そのご飯粒を食べた。その仕草にことりは顔を真っ赤にして

しまった。

「じゃあ次は薬を飲まないかね。」

「う、うん…!!／＼／」

この後、ことりは病院で渡された薬を飲み、再びベッドの上で横になった。

「ことりちゃん、他に何か食べたい物とかない？」

「大丈夫だよ…ありがとう…」

「何かあったら遠慮なく言ってね。いつもことりちゃんはメイドとしてお客さんの色々の要望を答えてるけど、今日は甘えていいんだよ。今日の俺はことりちゃんの専属の執事だから。」

「わ、私専用の執事…!!／＼／」

ことりはいつもはツナの専属のメイドの姿を想像しているが、この言葉でツナが自分の執事をやっている姿を想像して顔をほんのりと赤くしてしまった。

「じゃあさっそくお願いがあるんだけどいいツナ君…!?!／＼／」

「うん。いいよ。」

「私の手を握っててくれない…!?!／＼／」

「手を?。」

「うん…!!／＼／」

「いいよ。」

手を握ってくれという要望に疑問符を浮かべたが、それでも両手でことりの右手を握った。

「これでいい?。」

「うん…!!／＼／こうしてると安心するの…!!／＼／」

「そっか。じゃあこのまま握ってあげるよ。」

笑顔でそう言うと、30分後にスウスウと寝息をたてながら眠ってしまった。

そして時間は経過していき、4時間後。

「う、うくん…」

寝ていたことりが目覚めると、部屋にある時計を見て時間を確認した。

「あれ？ツナ君は…？」

部屋の中を見てもツナの姿が見当たらないことに気づくが、右手に温もりを感じた。そこには両膝を床について眠ったまま、ことりの右手を握っていたツナがいた。

「ことり…ちゃん…」

「もしかしてあれから…ずっと…？」

ことりは眠ってもなお、自分の手を握っていたツナを見て、あれからずっと自分の手を握っていてくれたということを確認した。

さらにツナは寝言を続ける。

「大丈夫だよ…俺がずっと傍にいるから…この手を離さないから…」

「ツナ君…!!／／／」

眠っても自分のお願いを護り続けたツナの優しさに、ことりは顔を赤くしたのだった。

#標的 (ターゲット) 273 「進んだ関係」

自分の右手を握ったままのツナをことりをしばらく見つめていると、ことりの部屋の扉が開かれた。

「ただいまー。ごめんね遅くなってことり。」

「あ、お母さん。」

「あら顔色がだいぶよくなったわねことり。あらツナ君は眠ったままのようね…」

「うん。手を握ってて欲しいって言ったたら、私が寝てる間ずっと手を握っててくれたの。」

「本当に優しいのねツナ君は。ことりたちがツナ君のことを好きになるのもわかるわ。」

「うん、ツナ君は本当に優しいんだよ…!!／／」

ことりがずっと手を握っていたことを伝えると、ことりの母はみんながツナのことを好になった理由を理解した。

「後、A—R—I—S—Eのツバサさんもだったかしら。」

「ええ!?お母さん知ってたの!?!」

「ええ。前に音ノ木坂学院がっに来た時に生徒たちが話しているのを小耳にしたの。その時はまだ信じてなかったんだけど、今本当だって確信したわ。」

ことりの話は前にツナとユニが音ノ木坂学院に来た時に、全校生徒の間で噂にツナとツバサとの関係が噂になったことを思い出した。正確にいえばあの噂になった原因はツバサがツナの頬にキスしている写真を、ヒデコがツナのスマホを拾った時にリポーンが送ったのが原因である。

二人が話していると、ツナの目が覚めた。

「う、うくん…あれ俺眠って…はっ!やばい!ことりちゃんか!」

「ツナ君。」

「あ!ことりちゃん!大丈夫!?ごめん、俺寝ちやってて!」

「大丈夫だよツナ君。完全には治ってはないけど、だいぶ楽になった

から。」

「そ、そっかあ…」

つい寝てしまったツナは慌ててことりを心配するが、だいぶ楽になったと聞いてホッとした。

「ありがとう、ツナ君。ことりのことずっと看病してくれて。」

「あ、お母さん。帰ってたんですか…すいません看病を頼まれておきながら寝てしまつて…」

「そんなことないわ。ことりからツナ君がちゃんと看病してくれたことはちゃんと聞いてるから。」

ツナは看病の途中で寝てしまったことを謝るが、ことりの母はそんなことないと言ってくれた。

するとここでことりの母があることを思いついた。

「あ！そうだね、せつかくだし家ウチに泊まつていつて！」

「えええ!」

「お、お母さん!?!?!」

ことりの母の提案に、ツナはシンプルに驚き、ことりは顔を真っ赤にした。

「看病してくれたお礼よ。」

「で、でも…」

いくらことりの母がいいと言っても、躊躇してしまうツナであったが、ここでツナのスマホにLINEが入った。このタイミングでLINEの通知が来たことで、誰がLINEを送って来たか想像できままつていた。

そしてLINEを開くと…

『ちやおつす。ことりの看病のお礼に泊まることになったらしいな。ママンの許可は得てるぞ。ちなみにこのこと、お前がことりを看病し
てことは穂乃果たちも知ってるから安心しろ。』

「やっぱり！しかも穂乃果ちゃんにまで連絡してるし！」

「えええ!?!」

穂乃果にまで連絡したと聞いて、ことりは驚きの声を上げてしまつた。

結局、ツナはことりの家に泊まることとなった。この後すぐに晩御飯をご馳走になる。

「ありがとうございます。俺もご馳走になっちゃって。」

「いいのよ。せっかく泊まってくれたんだから。」

ツナはことりの母に晩御飯をご馳走になったことに対してお礼を言った。

とりあえず食べようと思ったツナであったが、ことりのことが心配になった。

「あ、大丈夫ことりちゃん？一人で食べられる？無理ならさつきみたいに食べさせてあげるけど。」

「ツ、ツナ君!?!?!」

「まあ!」

ことりはツナに母親の前で食べさせてくれたことを言われて、恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にし、ことりの母は自分がない間にそんな関係になっていたことに嬉しそうな表情になっていた。

「私がない間にそんなことをしてたのねー。嬉しいわー。ことりとツナ君がそんな密接な関係になってたなんて。」

「お母さん!!?!?!」

「密接な関係ってどういうことですか?」

「それはもちろんこい:「言っちゃダメー!!?!?!」」

ことりは母親が余計なことを言う前に、大きな声を出してことりの母の言葉を遮った。この後、ことりの母は穂乃果の母のように色々と言われて大変だったという。

#標的（ターゲット） 274 「ピアノコンクール」

翌日。ツナは玄関でことりに見送られる。

「私の為に看病してくれて、本当にありがとうツナ君。」

「気にしないで。こっちこそ泊めてもらってありがとう。」

ことりは看病してくれたこと、ツナは家に泊めてくれたことにお礼を言った。

「それより本当に大丈夫？体調が悪いなら、また来るけど。」

「ううん、大丈夫だよ。昨日、飲んだ薬が効いて、だいぶ体調もよくなったから。それに今日はお母さんもいるから。」

「わかったよ。じゃあお大事に。」

そう言うのとツナはことりの家の前に泊めておいたバイクのところまで行き、並盛とは逆方向にバイクを走らせていった。

「あれ？ツナ君の家ってあっちのほうじゃ…？」

ことりツナのバイクが並盛とは全く逆の方向に走っていたことに、疑問符を浮かべた。

なぜツナが並盛に帰らなかったかというと…

「着いた。ここがピアノコンクールの会場。」

今日は真姫が出るピアノコンクールの日だったからである。前に真姫が並盛高校に来た時に、父親が急な仕事が入ってピアノコンクールに来れなくなってチケットがあ余った為、真姫はツナを誘ったのだった。

駐車場にバイクを止めると、真姫とあらかじめ約束していた集合場

所へと向かっていった。

「あーいた。」

ツナは自分の視界に真姫と真姫の母を捕らえると、二人の所まで小走りで行く。

「遅いわよツナ。」

「え？時間には間に合ってるはずだけど…」

時間内にはちゃんと間に合ったはずだが、真姫に遅いと言われてポケットからスマホを取り出して時間を確認するが、ちゃんと集合時間には間に合っていた。

さらに真姫が続ける。

「間に合っても、レディを待たせるなんて常識はずれよ。まあ今回は許してあげるわ。」

「そ、そうなんだ…ごめん…」

真姫を待たせてしまったことにツナは

謝ると同時に、もし穂乃果と付き合うことになったら待たないように気をつけようと心の中で思った。

暗い表情になっているツナを見て、真姫の母が微笑みながら話しかけた。

「気にしなくていいのよツナ君。真姫ったらツナ君が見に来るからってはりきりすぎちゃって、1時間前に来ちゃっただけなんだから。ツナ君は何も悪くないわ。」

「そ、そんなわけないでしょ!!／／／大事なコンクールなんだから余裕をもって来ただけなんだから!!／／／」

「それよりツナ君。前に西木野総合病院（うちのびょういん）で真姫と働かないって言ったけど、どうかしら？考えてくれたかしら？」

「ええつと…それはですね…その…」

「勝手に話を進めないでよ!!／／／後、勧誘しないで!!／／／」

まさか穂むらでバイトで和菓子我真姫の家に届けに行った時に聞かれたことを聞かれるとは思ってもみなかったので、ツナは戸惑ってしまい、真姫は顔を真っ赤にしながらかツツコミをいれた。

「少し落ち着きなさい真姫。いくらツナ君がことりちゃん（ちやん）の看病し

て、その後、家に泊ったって知って嫉妬するのもわかるけど。」

「し、してないわよ!!／＼／＼それに何でママが知ってるのよ!!／＼／＼」
「真姫のスマホを見たのよ。ツナ君がことりちゃんにお粥を食べさせてる写真とか色々あったわね。」

「んな!?まさかりボーン…!?」

真姫の母の言葉を聞いて、リボーンが自分がお粥を食べさせている写真をいつの間にか撮影し、それを穂乃果たちに送ったという事実を今ここで知った。

そうこうしていると開演時間15分前になった。

「そろそろ行くわ。」

「あ、真姫ちゃん。」

「何よ?」

「これを持って行って。」

ツナはポケットからお守りを取り出し、真姫に渡した。

「こ、これって…お守り…?」

「うん。真姫ちゃんがピアノコンクールに出るって知ったから、京子ちゃんに教わって作ってみたんだ。真姫ちゃんが嫌じゃないなら持って行って。」

「あ、ありがとう…!!／＼／＼」

「頑張つてね真姫ちゃん。」

「い、言われなくてもわかってるわよ!!／＼／＼」

そう言うとき真姫はツナの作ったお守りを持って、会場内へと入っていった。

#標的 (ターゲット) 275 「考えてくれませんか？」

ツナは真姫の母と一緒に、会場内に入って席に座って、ピアノコンクールが始まるの待つ。

「真姫ちゃん、大丈夫かな？」

「大丈夫よ。真姫はあなたに褒められて、いつも一生懸命してたんだから。」

「え？それってどういう…？」

「フフツ。それは秘密よ。」

「はあ…」

真姫の母は想い人であるツナの為に頑張っていたとは言えなかった。これで、これ以上は何も言わなかった。

するとツナは真姫の母がさつき、西木野総合病院で働いてみてみないかと聞かれたことを思い出して、あることを訪ねた。

「真姫ちゃんは、家業の西木野総合病院を継がないといけないって聞いたんですけど本当なんですか？」

「ええ、本当よ。それがどうかしたの？」

「いや別に…気になったというか…その…」

「何か言いにくそうね。大丈夫よ、正直に話しても。」

「そうですね。じゃあ単刀直入に言わせてもらいます。」

そう言うとツナは軽く深呼吸した後、真剣な表情で言いたかったことを真姫の母に伝える。

「真姫ちゃんの将来のことを考えてくれませんか？」

「真姫の将来…？」

「はい。前に音ノ木坂学院に行った時に真姫ちゃんのピアノを聞いたんです。俺、ピアノとか全然わからないんですけど、聞いてて凄いて思いました。」

「…」

「その時にピアノリストになれるんじゃないかって俺、言ったんです。でも真姫ちゃんは暗い表情で病院を継がないといけないうって言ったんです。本当はピアノをやりたいんだろうけど、病院いへのこともあって諦めようとしてるんです。そちらにも色々と事情があるし、正直勝手なことを言っているのは充分承知です。それでも真姫ちゃんの将来について考えて欲しいんです！お願いしますー！」

ツナは真姫の母に頭を下げて、真姫の将来について考え直してくれないかとお願ひした。突然のお願ひに真姫の母は少し戸惑ってしまっていた。10秒ほどすると真姫の母はツナに尋ねた。

「どうして?」

「え?」

「どうしてそこまでツナ君は、真姫の将来のことを考えてくれるの?」

真姫の母はわからないでいた。いくらツナが娘の友達とはいえ、自分の娘の将来のことについて考え、頭まで下げてくれるのかを。

その問いについてツナは答える。

「似てるんです。」

「似てる?」

「俺も先祖が作った家業を継がないといけなんです。でも俺は継ぎたくないって思ってた。後継者は俺しかいなくて。しかも血統を重んじてるから他に継げる人がいなくて…だから真姫ちゃんには後悔して欲しくないんです。」

「そうだったの…」

「すみません！別に西木野総合病院のことを否定してるわけじゃないんです！医者が立派な仕事だっことは知ってます！俺はただ真姫ちゃんにはなりたい自分になって欲しいと思ってるだけなんです！」

ツナは慌てて、西木野総合病院のことを悪く思っていないということを伝えると同時に謝罪した。

「本当に不思議な人ねツナ君って。」

「え…?」

「いくら似てる境遇があるっていつても、他人の将来のことについてここまで考えてくれる人なんていないと思うわ。」

「そうですか？俺はただ真姫ちゃんに夢を諦めて欲しくないって思っただけなんですけど…」

「でもこれでよくわかったわ。真姫がどうしてあなたのことを気にかけるのか。」

「え？それってどういう…」

ツナが真姫の母にどういう意味なのか、尋ねようとしたツナであったが突如、客席が暗くなった。どうやらピアノコンクールが始まるらしい。ピアノコンクールが始まる間は喋るわけにはいかないので、ツナは黙って姿勢を正してステージのほうを向いた。

そして弾幕が上がるとステージの中央にピアノが置かれており、ステージの横から赤いドレスを着た真姫がピアノの近くまで移動すると客席に一礼した後、椅子に座って演奏を始めていった。

（真姫ちゃんがすっごく生き生きしてる…やっぱりピアノが好きなんだな。）

ツナは演奏を聞きながら、真姫が生き生きしながらピアノを弾いているの感じとっていた。

演奏が終わり、真姫は椅子から立ち上がって一礼すると、客席から拍手が送られ、無事真姫の演奏は終了したのであった。

#標的 (ターゲット) 276 「また来てくれる?」

ピアノコンクールも終わり、ツナは会場の外にて真姫の母と一緒に真姫が戻って来るのを待っていた。

「やっぱり俺好きです。」

「ええ!？」

「え…? 何で驚いてるんですか…? 真姫ちやの弾くピアノが好きなのがそんなに驚くことですか…?」

「ああ…そういうことね…? ごめんなさい勘違いしちゃったわ。」

真姫の母はいきなり好きだと言ったので真姫むすめにいきなり告白したのかと思っただが、ピアノのことだとわかって安心した。

「あ、演奏前にツナ君がお願いしたことなんだけどね。西木野うちのびょういん総合病院を経営してるのは夫のほうなの。」

「あ…そうなんですか…?」

「でもツナ君の言葉で、真姫の将来のことについてももう少し考えてみようと思っただわ。だから夫ともちゃんと話し合ってみるわ。」

「あ、ありがとうございます!」

真姫の母の言葉にツナは表情を明るくし、深々と頭を下げた。

すると会場からドレス姿から着替え終わった真姫が会場からやって来た。

「お待たせ…って何、頭下げてるのよ?」

「ツナ君がね、娘さんを僕に下さい。必ず幸せにしてみせますって言ってきたのよ。」

「二な!?! / /」

真姫の母を間に受けて、二人は顔を真っ赤にしてしまっていた。そんな二人の反応を見て、口元に右手に手を当ててクスクスと笑っていた。

「ツ、ツナ!! / / 私がない間にそんなことを!?! / /」

「ち、違うから!! / / そんなこと一言も言っていないから!! / /」

真姫が本当にそんなことを言ったのかと尋ねると、ツナは両手を前に出しながら慌てて否定した。

二人が落ち着くと、ツナはさきほどの真姫の演奏の感想を述べる。「さっきの演奏すっごくよかったよ。真姫ちゃん輝いてたよ。」

「こ、これくらい当然よ!!／／ちゃんど練習したんだから!!／／／」それに綺麗だったよ。真姫ちゃんのドレス姿。」

「な!?!／／／」

「まあ!」

演奏だけではなくピアノを演奏してる時の自分の姿のことを言われて真姫は顔を真っ赤にし、真姫の母は両手を頬に当てて喜びの声を上げた。

「きゅ、急に変なこと言わないでよ!!／／／」

「あ…ごめん。あんまり綺麗だったから。まあ真姫ちゃんは元々可愛いから、今更こんなこと言うのもアレだよね。」

「!?!／／／」

真姫は想い人^{ツナ}から褒められまくられて、何も

言うことができず、顔を真っ赤にしてただただ黙ってしまっていた。

「それじゃ俺はそろそろ帰るね。」

「待ってツナ!」

「え?何?」

真姫は帰ろうとツナを引き止めると、ツナもその場で止まって、再び二人のほうを向いた。

そして再び顔を赤くし、もじもじし始めながら話す。

「ま、またピアノコンクールがあったら…!!／／／来てくれる…!?!／／／」

「もちろんだよ。俺、真姫を応援するって前に言ったからね。またピアノコンクールがあったら呼んでね。」

そう言うとツナは会場の駐車場に置いてある自分のバイクのところへ走っていった。

ツナの姿が見えなくなると真姫の母が口を開いた。

「行っちゃったわね。でもツナ君を呼んだのは成功だったわ。あんなに真姫のことを考えてくれたんだもの。」

「どういうこと?」

「真姫が演奏する前に私に頭を下げてお願いしてきたのよ。真姫ちゃんの将来について考えてくれませんか、真姫ちゃんにはなりたい自分になって欲しいんですって。」

「ツナ:…何で私の為にそこまで:?!?」

「本当よね。ツナ君も家業継ぎたくないのに、家業を継げるのは自分しかないって言ってたのに、まず自分のことよりも真姫たにんの心配してるんだから。」

「そうよ:…ツナはいつも自分のことよりも他人の心配ばかりして:…本当にバカなんだから:…」

「でも真姫はツナ君のそんなところに、惚れちゃったんじゃないの?」

「そ、それは:!!//」

母の言葉に真姫は反論しようにも反論できず、顔を赤くしたまま黙ってしまっていた。

「さてそろそろ帰りましょうか。今日の晩御飯は赤飯ね。」

「な、何言ってるのよ!!//別になんかめでたいことがあったわけじゃないでしょ!?!//」

「あら?ツナ君とめでたいことがあったなんて、私は言ったかしら?もしかしてツナ君と何かあった?」

「!?!//」

真姫は、母に対して反論できず恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしまっていた。

こうしてピアノコンクールは終了し、真姫のなりたい自分になる為の戦いの火蓋は切られたのであった。

#標的（ターゲット） 277 「リボーンからの妙案」

6月も終わりに近づいていき、並盛高校も音ノ木坂学院も再びテスト週間へ突入する。

—アイドル研究部部室—

「もうテストだにや…」

「前やつと乗りきったのに…」

前回と同様、勉強が苦手な凜と穂乃果は嫌な顔をしながら椅子に座っていた。

「そんな嫌な顔をしたって、テストに合格できるわけではありませんよ。それに私たちは卒業がかかっているのですから。今日からみっちり勉強しますよ穂乃果。」

「凜もよ。」

「えー…」

海未と真姫がそう言うも、穂乃果と凜は嫌な顔したままで、あきらかにやる気が感じられなかった。そんな二人を見て海未と真姫は嘆息し、ことり、花陽、雪穂、亜里沙は苦笑いしながら二人を見ていた。

とその時…

「しようがねえな、ここは俺かなんとかしてやるか。」

「こ、この声は…」

ここでリボーンの声がアイドル研究部部室に響き渡ると部室の床下が開き、そこから白いを着て、天使の輪っかをつけ、弓矢を持ったリボーンが出てきた。

「俺は恋する乙女の応援する天使だぞ。」

「わあ！天使だ！」

「可愛い！」

「天使なんて初めて見たにや！」

いつものごとく穂乃果、亜里沙、凜だけはこの天使？がリボンで
あることに全く気づいていなかった。

「天井から登場したり、壁から登場したと思ったら、今度は床からとは
ね…」

「もう諦めます…」

真姫は今までのリボンの登場の仕方を思い出すと同時に、床から
現れたことに驚き、海未はいつもならリボンに音がっノ木坂学院こを勝手に
改造しないでください！と言うところであるが、もう言っても無駄
と思ったのか、リボンに何も言うことはしなかった。

「まあ天使というのは、嘘だが…」

そう言うとりボーンは、天使の衣装から目にも止まらぬ速さで着替
え、いつもの黒いスーツ姿に戻った。

「恋する乙女を応援するつてのは本当だぞ。」

「あーリボン君！」

「ちやおつす。今日はいつもツナのことを愛してやまなくてめえらに
朗報だぞ。うまくいけばツナとの距離が縮むどころか、付き合えるか
もしれねえぞ。」

「「「「!?!?／／」」」」」

「何だろう?」

「気になるね。」

リボーンの言葉に穂乃果、海未、ことり、花陽、凜、真姫は顔を赤
くしつつも付き合えるかもしれないということで、興味を持ったのか
そわそわしていた。亜里沙と雪穂はツナのことが好きではないが、そ
れでも興味津々な

様子であった。

「そ、それで…!?!?／／何なのよ朗報つて…!?!?／／」

「何だ真姫?ピアノコンクールでツナに、自分のドレス姿を綺麗だと
言われたからって、そんなに気になってんのか?」

「ち、違うわよ!!／／さっさと言わないからイライラしてるだけよ
!!／／というか何でそのこと知ってるのよ!?!?／／」

リボーンがツナにピアノ発表会で綺麗だと言われたことを知って

いたことに顔を真っ赤にしていた。

「ピアノコンクール…?」

「もしかしてあの時並盛に帰らなかったのって…」

「ツナさんに綺麗…?」

「それはどういうこと真姫ちゃん…?」

「詳しく説明してもらいましょうか…」

「え、いや…その…」

殺気を放ちながらそう言う凜、ことり、花陽、穂乃果、海未に真姫は少しだけビビってしまった。

なんとか全員が落ち着くと、リボーンが朗報について発表する。

「んじや発表するぞ。今回、今回の期末テストで、お前らの中で成績が

一番の奴がツナとデートさせてやるぞ。」

「……デ、デート!?」

ツナという言葉に衝撃的な顔になってしまう6人。

リボーンの思惑は一体!?

#標的（ターゲット） 278 「特別講師」

期末試験が近づいてきた穂乃果たちに、リボーンが成績が一番良い奴がツナとデートさせてやると言ってきた。

「ど、どういうことですか…？リボーン君…？」

「そのままの意味だぞ海未。この期末試験の成績が一番良かった奴がツナとデートさせてやるって言ったんだぞ。安心しろ、ツナにはデートとは言わずに、遊びに行くって伝えるし、デートの為に映画のチケットとかも用意してるぞ。」

海未はツナとデートできるといふことがあまりにも衝撃的だったのかりボーンの言っていることの意味がわからなくなってしまう、リボーンにもう一度、聞き返した。

「な、何でそんなことをあんたに決められないといけないのよ!!／／／／」
「そうだにゃ!!／／／／だいたいツナとデートしたいなら、自分から誘うにゃ!／／／／」

「そうだよ!!／／／／」

「お前らにツナをデートに誘える勇気があんのか？今までだって、花陽と希とツバサ以外、ツナをデートに誘おうとすることとかなかっただろうが。」

「「「「うっ…」「」」」」

真姫、凜、穂乃果が文句言うがりボーンに論破され、花陽以外は5人は何も言えなくなってしまう、花陽はGゴールデンウィーク Wにツナをデートを誘おうとして失敗したことを思い出して、少し落ち込んでしまった。

ここで雪穂が疑問を抱いた。

「でも学年が違うから、勉強の難しさが違ったりするすし、勉強が得意、不得意があるよね。」

「その点は心配ねえぞ。今回は各学年で一番成績がいい奴がツナとデートできるぞ。それに勉強が苦手な奴は俺がサポートしてやる。」

「おおーさすがリボーン君！」

「それなら凜にも可能性があるにや！」

これを聞いて、穂乃果と凜は希望を持つことができたので、明るい表情になった。

その一方で亜里沙は…

(ど、どうしよう…お姉ちゃんが聞いたら…)

姉の絵里がこのこと聞いたら大変だと思い、不安な様子を隠すことができなかった。

そんな亜里沙の心をリボーンは読心術で読み取った。

「安心しろ亜里沙。このことは音ノ木坂大学に通ってる絵里、希、ここにもちゃんと後で伝える。だから絵里もツナとデートできる可能性はあるぞ。」

「本当ですか!？」

「ああ。」

亜里沙はリボーンがちゃんと絵里にこのことを伝えてくれるという約束してくれたので、ぱあつと明るい表情になった。

ここでこもりがある疑問を抱いた。

「でも大丈夫なの？」

「何がだ？」

「だってリボーン君はツナ君の家庭教師なんですよ？それにツナ君だって卒業かかっているんだよ。」

「大丈夫だぞ。今回は獄寺にツナに勉強を教えてもらいように頼んだ。あと特別講師も呼んでるしな。」

「特別講師？」

「ああ、俺の知り合いのな。まあ特別講師については気にすんな。」

特別講師と聞いて疑問符を浮かべることを見ながら、リボーンは不敵な笑みを浮かべた。

リボーンが音ノ木坂学院に行っているその頃、ツナの家の玄関にリボーンの言っていた特別講師が来ていた。

「え、えつと…ツバサさん…？何で家ウチに…？」

ツナは慌ててツバサを家の中に入れて玄関の扉を閉めると、その場にて自分の家に来た理由を尋ねた。

「お前がいいなら時間がある時に、ツナの家庭教師をやってくれねえか？」つてリボーン君に言われたの。だから時間がある時だけ、ツナの家庭教師かてきよーをすることになったの。」

「リボーンあーいっまた勝手に…すいませんツバサさんアイドルしごとが大変なのに…」

「いいのよ。むしろツナだけの家庭教師かてきよーになれてとつても嬉しいわ。」

ツナはリボーンが勝手にツバサに自分の家庭教師かてきよーを依頼していたことにとつても申し訳ない気持ちになっていたが、ツバサは全然気にしておらず、むしろ嬉しくてしょうがない様子であった。

「まあいいか…とりあえず俺の部屋に…」

せっかく来てもらったので、自分の部屋へと案内しようと思ったその時、台所にいた奈々が玄関にやって来た。

「ツナー？友達でも来たの？」

「え、えつと…その…」

ツナはアイドルであるツバサが家に来たと言うのはヤバイと思っただのでなんとか誤魔化そうと色々と考えていると、ツバサがツナの腕に絡みつくつと、自己紹介し始めた。

「初めまして。私、ツナ君とお付き合ひさせて頂いています綺羅ツバサといます。」

「まあー！」

「え!?!?!/ちよ!?!/ツバサさん!?!/」

ツバサが自己紹介すると、奈々は両手を頬にやって喜びの声を上げ、ツナは急にツバサがそんなことを言い出したので顔を赤くしながら戸惑ってしまっていた。

「ツナったらら！こんな可愛い彼女がいたんなら、私にも言ってくれ
ばいいのにー！」

「いや!!／／／違うから!!／／／それにこの人は!!／／／」

「照れなくいいのよツナ。」

「照れてないって!!／／／」

ツナは顔を真っ赤にしながらツバサが自分の彼女ではないことを
主張するも、奈々には馬耳東風であった。

「ツバサちゃんって言ったかしら？ツナのことをよろしくね。」

どうやら奈々はツバサがアイドルであることに気づいていないど
ころか、ツバサがアイドルであるということさえ知らない様子であっ
た。

「はい。ツナ君とは、将来を共にすると決めております。こんな未熟
な私ですが、よろしくお願ひしますお義母様。」

「お、お義母様だなんて！嬉しいわ！」

「母さんもツバサさんも勝手に母を進めないで！」

この後も奈々とツバサは意気投合してしまい、結局ツナは誤解を解
くことさえもできなかったのであった。

#標的（ターゲット） 279 「どちらも」

ツバサが奈々に挨拶した後、ツナの部屋にて勉強が始まる。

「それじゃ勉強、始めましょうか。」

そう言くとツバサは自分のバッグから筆記用具と眼鏡を取り出した。

「あれ？ツバサさんって目が悪いんですか？」

「ううん。ただ家庭教師って眼鏡をかけてるイメージが私の中で強かったから持ってきたの。何事も形から入るのが大事っていうでしょ。」

「そうなんですか。」

「じゃ始めましょうか。」

ツバサは眼鏡を持ってきた理由を話すと眼鏡を装着した。一方では眼鏡を装着したツバサを久しぶりに見たツナは、ツバサの顔をジーツと見てしまっていた。

「どうしたの？」

「ツバサさんが眼鏡かけてるところを見たのが久しぶり見たからつい見ちゃって。やっぱり眼鏡かけてもツバサさんって綺麗だなんて思ってた。」

「!!／／／」

ツバサは綺麗だと言われて少しだけ顔を赤くしてしまった。さすがのツバサもこんな真っ直ぐな瞳で想い人に綺麗だと言われれば、いつものような勢いはなくなってしまった。

ツナはツバサがそんなことを思っているとも知らないまま、テスト勉強が始まっていく。2時間ほどテスト勉強を続けると、一旦休憩に入る。

「とっってもわかりやすかったです。」

「よかったわ。家庭教師なんて初めてだったから、不安だったけどそう言ってもらえるとありがたいわ。」

「やっぱり凄いですねツバサさん。勉強もここまで、できるなんて。高校の時はスクールアイドルをやってたのに。」

「スクールアイドルをやってるからといって、学業を疎かにするわけにはいかなかったから、ちゃんと勉強はしてたわ。そのお陰でテストの順位はいつも5番以内だったわ。」

「す、すげえ…」

ツバサはスクールアイドルをやっていたのにも関わらず優秀な成績であるその一方で、自分は部活も何もやっていないのに、成績があまり良くないことにツナは複雑な気持ちになってしまっていた。

するとツバサは部屋にある小さな本棚の上にCDが置いてあるのに気づいた。

「あれって、もしかしてA—RISEの？」

「はい。この前、CDショップに行った時に買ったんです。アイドルの出した曲とか買うのは初めてだったんですけど、A—RISEの曲はいい曲が多いから買ったんです。」

「ありがとう。嬉しいわ。」

ツバサはA—RISEの出した曲を買ってくれたことにお礼を言った。

「そういえば聞きたかったことあるんだけどいいかしら？」

「何ですか？」

「ツナって好きな人とかいるの？」

「え!?!/!/い、いや…!!/!/それは…!!/!/」

「その様子だというようね。」

ツナがあまりにわかりやすく、可愛い反応を見せたのでツバサはクスクスと笑いながらツナのことを見てしまっていた。

「安心して、これ以上のことは聞かないわ。ただ興味があったので。でも私のことじゃなさそうね。案外、μ、sの人たちの中の人だったりして。」

「ち、違いましたゆ!!/!/」

「プツ!ツナ君って本当にわかりやすいのね。」

ツバサがツナの好きな人がμ、sの中にいると推測すると、ツナは

顔を真っ赤にしながら否定するも、噛んでしまった。またまたわかりやすく、可愛いらしい反応を見せたのでツバサはつい笑いを堪えきれなくなってしまうていた。

「でも私は諦めないわ。たとえツナに好きな人がいても、必ずあなたを振り向かせるから。」

「!!／／／」

ツバサは真っ直ぐな瞳でそう言うと、ツナは顔を赤くしたまま何も言えなくなってしまうていた。

そして再びツバサがツナに尋ねる。

「じゃあ、もう1つだけ質問するわね。もしμ、sがアイドルなったら、ツナはμ、sとA—RISEどっちを応援してくれた？」

「え? μ、sとA—RISEをですか? うゝん…そうだなあ…」

ツバサの質問に対して、ツナは腕を組んで考え始める。

15秒ほど考えるとツナは答えを出した。

「どっちも応援しますね。」

「え…?」

「μ、sは動画でしか見たことないんですけど、でもμ、sにはμ、sにしかない魅力があつて、A—RISEにはA—RISEにしかない魅力があると思うんです。俺はどっちの魅力も好きだからμ、sもA—RISEも応援したと思います。」

「そう…」

「どうしてそんなことを聞くんですか?」

「ツナ君はスクールアイドルのことを最近知ったから知らないかもしれないけど、第2回ラブライブではμ、sとA—RISEはラブライブ出場をかけて戦ったの。でもA—RISEは負けた…」

「…」

「油断してたわけじゃないわ。むしろ心の底から負けたくないと思つて、必死に頑張ったわ。それでも負けた。別に穂乃果たちに遺恨があるわけじゃないの。ただずっとあなたに聞いてみたかったの。ラブライブで負けたA—RISEを応援してくれるのかつて。」

ツバサは第2回ラブライブでμ、sに負けたことを語った。

少しの間、互いに沈黙が続いたがツナが口を開いた。

「別にツバサさんたちがラブライブで負けたからって、俺がA―RISEを応援しない理由にはなりませんよ。」

「え!?!」

「俺はどんなことがあっても、A―RISEのことをずっと応援しますよ。たぶんスクールアイドルのことを高校の時に知ってて、ラブライブの時にμ'sに投票したとしても、それでも応援したと思います。」

「本当に…ツナって変わってるのね。」

「へ?」

「でもそういうところが好きよ。」

「ええ!?!／／／」

当たり前前のことを言っただけなのに、ツバサから好きだと言われて顔を赤くしながらツナは驚いてしまったのであった。

番外編

穂乃果のホノホノインタビューファ

イトだよ！

#標的(ターゲット) 280 「第1回 海未」

穂「穂乃果のホノホノインタビュー、ファイトだよ！の時間だよ！」
音ノ木坂学院の制服を着た穂乃果が、マイクを持ちながら喋り始めた。

リ「何だ？いきなり？」

穂「今日から色々なゲストを呼んで、私が色々質問していくって
いうコーナーだよ。」

リ「ハルのハルハルインタビューデンジャラスを穂乃果がやってる
だけじゃねえか。それにこのセットもアニメ版と同じだし、俺たちの
姿もSD版になってるしな。」

壇上も、自分の座っている座椅子も、自分たちの姿もアニメ版と一
緒だということにリボーンは気づいた。

穂「そこは小説だし、わからないから大丈夫だって。」

リ「だいたい本編はどうした。本編だとツナとデートできる奴は誰
なのかってなってるだろ。」

穂「テスト勉強の話は前にやったから、正直ネタが思いつかないか
ら、とりあえず番外編で尺を稼いで、7月にテスト結果を発表して
デート回はやるって作者が言ってたよ。だから6月篇は前回で終了
だよ。」

リ「今日はメタ発言のオンパレードだな。」

穂「とにかくもう決まったことだから。というわけで今日のゲスト
は私の幼馴染の海未ちゃんだよ！」

穂乃果がそう言うのと、壇上の真ん中にある簡易型のエレベーターか
ら海未が降りてきた。

海「こ、こんにちわ！そ、園田海未役の園田海未です！」

リ「園田海未役って何だ。園田海未でいいだろ。」

あまりに緊張したのか、海未は変な自己紹介をしてしまった。

海「す、すいません！つい…」

リ「こういう時には、ツナと結婚生活を送ってる姿を想像してみろ海未。落ち着くぞ。」

海「ツ、ツナ君と!?!?!」

穂「リボン君！それ逆効果だから！」

リボンが緊張している海未にアドバイスするも、海未は顔を真っ赤にし動揺してしまっていた。

なんとか落ち着くと改めて自己紹介し始める。

海「改めまして園田海未です。今日はよろしくお願いします。」

穂「海未ちゃんは私の幼馴染で、*tsuna*をやった時は作詞担当だったんだよ。」

リ「そういや中学時代にポエムを書いたことがあって、それで前が歌詞担当になったんだよな。」

海「なぜ知ってるんですか…?」

リ「それと今日は面白い物を持ってきたぞ。」

そう言うとりボンは一冊のノートを取り出した。そこには園田海未と書かれていた。

海「何で私のポエムを書いたノートを持っているんですか!!?!」

リ「昨日、お前の家からぬす…借りてきたんだぞ。」

海「今、盗んだって言いかけましたよね！」

リ「最近また書き始めたらしいな。ツナへの想いを綴ったポエムが載ってたぞ。さっそく読んでみるか。」

海「そ、それ以上口を開いたら、弓矢で脳天を撃ち抜きますよ!!?!」

穂「海未ちゃん、落ち着いて！」

穂乃果が今にもリボンの襲いかかりそうな海未を、押さえる。なんとかノートを返してもらうと、穂乃果が海未に質問していく。

穂「え、えつと海未ちゃんは普段、家では何をしてるの?」

海「家ですか？基本的には読書や勉強をしています。」

穂「べ、勉強…？真面目…」

海「このくらい当然です。普段から勉強していれば、テスト勉強も楽になるんです。」

穂「み、耳が痛い…」

勉強が苦手な穂乃果にとって、この海未の発言は耳が痛かった。

リ「その意見には俺も同意だぞ。ツナの奴も普段から勉強を全然せずにゲームばかりやってるからな。海未、お前からも何か言っやってくれねえか。」

海「わ、私がツナ君にですか…？そ、それは…」

穂「無理だよりポーン君。海未ちゃん、ツナ君にはすっごく甘いんだから。」

リ「その様子だとそうだな。これじゃツナと結婚して子供が生まれても、海未は子供には甘いんだろうな。」

海「そ、そんなことはありません！波未は日舞・園田流の立派な跡取りになるので、私は厳しく育てていくつもりです！」

穂「なみ…？もしかして海未ちゃん。」

海「はっ！！／＼／＼い、今のは…！！／＼／＼」

リ「まさかもうツナと結婚した時のことを考えて、子供の名前を考えてたとはな。」

海「！！／＼／＼」

リポーンがそう言うのと、凶星だったのか海未は羞恥心のあまり顔を真っ赤にして、その場で気絶してしまった。

穂「海未ちゃんーん！」

リ「これじゃインタビュー続行は不可能だな。」

穂「それもそうだね…じゃあ穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ！今日はこれで終わりだよ。叶え！みんなの夢！」

#標的（ターゲツト） 281 「第2回 ことり」

穂「穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ！の時間だよ！」
リ「まだやんのかこのコーナー。」

穂「当たり前だよ！というかまだ2回目だよ！」
リ「じゃあねえな。んで今日のゲストは誰なんだ？」

穂「今日のゲストは私のもう一人の幼馴染の、ことりちゃんだよ！」
穂乃果がそう言うと、簡易型のエレベーターと共にことりが降りてきた。

こ「こんにちわ。南ことりです。今日はよろしくね穂乃果ちゃん、リボーン君。」

穂「うん、よろしくことりちゃん！ことりちゃんは海未ちゃんと同じで、私の幼馴染なんだ。μsをやった時は衣装担当だったんだよ。そしてメイドカフェでアルバイトしてて、今ではミナリンスキーって呼ばれるほど有名な秋葉のカリスマメイドさんなんだよ！」
こ「そ、そんな…！カリスマメイドだなんて…！」

穂乃果にカリスマメイドと言われるも、ことりは謙遜してしまっ

た。
リ「ちなみにことりの将来の夢は、ツナの専属のメイドになることなんだよな。」

穂「ええ!?! そうなのことりちゃん!?!」

こ「ち、違うよ!! // わ、私はただツナ君が困った時の為に、ずっと傍でサポートしてあげたいって思ってるだけだよ!! //」

リ「もうほとんどツナの専属のメイドになりてえって言ってるようなもんじゃねえか。」

こ「はっ!! //」

ことりはリボーンの発言に対して、顔を赤くしながら、否定するも結局ツナの専属のメイドになりたいという願望が強いのか、全くと

言っつていいほど否定できていなかった。

穂「でもツナ君のメイドかー。私もやってみようかなー。」
リ「いいかもしれねえが、お前がメイドをやったら大惨事の予感しかしねえな。」

穂「何でそんなこと言うのりボーン君！私だつて海未ちゃんと、ことりちゃんと一緒にメイドカフェで働いたことだつてあるんだよ！」
穂乃果はツナの専属のメイドになろうと考えたが、りボーンからすれば大惨事の予感しかなかった。おそらく穂乃果のおつちよこちよいな部分があるのを見越してそう言ったのであろう。ことりもりボーンと同じ、気持ちだったのか苦笑いしてしまっていた。

穂「じゃあ、さつそく質問するね。ことりちゃんは衣装作りが好きだけど、衣装作りをするきっかけは何だったの？」

こ「もともとおしやれとか、コスプレをするのが好きだったから、それで衣装作りに興味が沸いたんだと思うな。穂乃果ちゃんがスクールアイドルを始めようつて言った時は、自由に衣装作りができる絶好の機会だと思つたんだ。」

穂「へー、そうだつたんだー。」

リ「俺もよく敵を欺く為によく衣装作りとかするから、お前のその気持ちがよくわかるぞ。まあ俺には到底、かなわねえがな。」

穂「確かにりボーン君のコスプレつてレベルが高いよね！全然わかんないもん！凄いよねりボーン君つて。」

リ「年季が違うからな。俺の変装は高度だからな。普通の奴に俺の変装を見破ることはできねえんだぞ。」

こ（どう見てもバレバレなんだけどなあ…何で穂乃果ちゃん、わかんないんだろう…？）

りボーンが自分の変装のことについて自慢し、いつもりボーンの変装に気づかない穂乃果はりボーンを褒めるが、ことりはからバレバレな為、複雑な心境になってしまっていた。

穂「そういえば前にりボーン君がツナ君がことりちゃんのメイドカフェに遊びに来たつて言つてたけど、何でそんなことになつたの？」
こ「私がメイドカフェの宣伝用のチラシを秋葉で配つてた時に、ツ

ナ君に出会ったんだ。それでツナ君がメイドカフェに行きたいって
言ってきたの。」

穂乃果が以前から気になっていた、ツナがことりの働いているメイ
ドカフェに行くことになった経緯を尋ねると、ツナがメイドカフェに
来た時のことを思い出しながら答えた。

こ「そしてその時に言われたんだ：！！／／俺の家にもことりちゃ
んみたいなメイドさんがいたらなーって：！！／／」

穂「ええ!? どういうことことりちゃん!? ねえ! ことりちゃんってば
!」

穂乃果は顔を赤らめながらブーツとしてしまっていることりに何
度も話しかけるも、ことりは自分の妄想の世界に入ってしまったよう
である。

「どうやらインタビュー続行は不可能のようだな。」

「ええ!? またあ!」

「仕方ねえだろ。とつとと終わるぞ。」

「はあ：穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ! の時間は終わ
りだよ。叶え! みんなの夢!」

#標的（ターゲット） 282 「第3回 花陽」

穂「みんなお待ちかね！穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ！のコーナーだよ！」

リ「誰も待ってねえだろ。」

穂「何言ってるの！きつとこの大空とスクールアイドルを見てくれる人は、このコーナーを毎回楽しみにしてるよ！」

リ「俺にはさつきと本編に戻れ！とか、いつまで続ける気だ！とか、天野先生に謝れ！とか、担当編集をまた丸坊主にさせたいのか！って思われてると思うぞ。」

穂「最後のは別の漫画であったことだよね!?そもそもこの小説に担当編集はいないよね!？」

穂乃果はリボンが全くこの小説と関係ないことを言ったので、おもしろいきりツツコミをいれた。

リ「まあ俺たちの話はこれくらいにして、さっそく始めるぞ。今日のゲストは誰なんだ？」

穂「今日のゲストは花陽ちゃんだよ！」

そう言うのと簡易型エレベーターと共に花陽が降りてきた。

花「こ、小泉花陽ですーのきよ、今日はよろしくお願いします…!」

穂「花陽ちゃんはμ'sのメンバーで、とっても綺麗な歌声で歌うんだよ！」

穂乃果が花陽のことについて話すが、花陽は緊張してしたままであった。

そんな花陽にリボンがアドバイスする。

リ「もう少し肩の力を抜け花陽。これはスクールアイドルの取材じゃねえんだ。お前は聞かれた質問に答えればいいだけだぞ。」

花「そ、そうだよね！」

リ「まだ緊張してんな…そうだ。インタビューが終わったらお前の大好きなおにぎりを食わせてやるぞ。」

花「お、おにぎり!? 本当ですか!」

花陽はおにぎりという単語に目を輝かせた。そしてこのリボーンの一言で緊張が吹っ飛んだ。

穂「じゃあ花陽ちゃんの緊張も解けたし、さっそく質問していくね。花陽ちゃんってお米が好きでおにぎりをよく食べてるけど、どれくらい食べてるの?」

花「基本的に毎日食べてるよ。朝御飯は基本的におにぎりだし、お昼のお弁当にもおにぎりは入れてるよ。」

穂「毎日、食べてるのによく飽きないね。」

リ「そういうお前だって毎日、パンばかり食べてるだろ。」

穂乃果は花陽が毎日おにぎりを食べていると聞いて、そう言うが自分も毎日パンばかり食べていることを忘れてしまっていた。

花「でも最近、食欲が出てきて弁当も多めにしてるんだけど、それでもすぐにお腹が空いちやうんだ…だからまた体重が…」

穂「そ、そんなに…?」

穂乃果はまた食欲が出てきたと聞いて、驚きを隠すことができていなかった。

ここでリボーンが提案する。

リ「いいダイエット方法を教えてやるぞ花陽。」

花「も、もしかしてボンゴレ式ダイエット…?」

リ「違えぞ。思い込みってやつだ。」

花「思い込み…本当にそんなので痩せられるの…?」

穂「ああ。花陽だけじゃなくて、穂乃果にも…というか、s全員に効果があるはずだ。」

穂「本当に!? それで! 何を思い込めば痩せるられるの!」

2年生の時に、太ってしまい痩せるまでにとっても苦労した穂乃果は、リボーンのこの話に興味津々な様子であった。

リ「ツナに「穂乃果ちゃん、花陽ちゃん最近太ってたね」って言われる姿を想像をしてみろ。そうすりゃ嫌でも食欲がなくなって、みるみる痩せられるぞ。」

穂「ツナ君に…」

花「太ってる…」

リボーンがそう言うと、穂乃果と花陽はツナに太ってねと言われる姿を想像した。二人は段々と顔が真っ青になっていき、体を震わせてしまっていた。

穂「ど、どうしよう…考えただけなのに…もの凄く食欲がなくなってきたよ…」

リ「な？俺の言ったとおりだろ。」

穂「でもこれをやると痩せるどころか…死にそんな気がしてきた…ね？花陽ちゃ…花陽ちゃん!？」

花「ツ、ツナさん…ち、違うんです！そ、そんな目で私を見ないでください！」

穂「な、何があつたの花陽ちゃん!？」

花陽は妄想しすぎたせいか、想像の中のツナに太ってたねと言われてただけでなく、さらに何かあつたようである。

花「だ、誰か助けてー！ー！ー！ー！」

穂「花陽ちゃん!?!しっかりして！」

花陽がいつものように悲鳴を上げると、顔を真っ青にしたまま気絶してしまった。

リ「どうやら刺激が強すぎて気絶しちまったようだな。これじゃインタビュー続行は不可能だな。」

穂「こ、今回はしょうがないよね…そ、それじゃ穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ！はこれで終わりだよ…か、叶え…みんなの夢…」

#標的(ターゲット) 283 「第4回 凜」

穂「穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ!の時間だにやー!」

白の猫耳と尻尾をつけた穂乃果が、タイトルコールをした。

リ「どうした穂乃果?コスプレにはまってんのか?」

穂「違うよ!今日のゲストが猫が好きで、こんな喋り方してるからこんな格好と喋り方なの!」

リ「なんだ。俺はツナに気にいられる為に、そんな格好と喋り方にしたのかと思っただぞ。」

穂「違うよ!で、でも案外よかったです!!／／」

リ(案外じゃなくて、100%鼻血を出して喜ぶだろうがな。)

リボーンは穂乃果の猫のコスプレを見れば、100%喜ぶであろうということは手に取るようにわかっていた。

そんなことをリボーンが思っているとも知らず、穂乃果は猫のコスプレを脱いで、今日のゲストを紹介する。

穂「今日のゲストは凜ちゃんだよ!」

そう言うと言簡易型のエレベーターと共に、凜が降りてきた。

凜「今日は凜の出番だにや!テンション上がるにやー!」

穂「凜ちゃんはμ'sのメンバーの中でも、というよりスクールアイドルの中でもトップクラスの運動神経の持ち主なんだよ。」

リ「スクールアイドルどころか、ボンゴレファミリーの中でも運動神経がトップの山本に匹敵するんだ。それにラルの特訓で凜の殺し屋としての才能はさらに開花した。だから凜はマフィア界の中でもトップクラスの運動神経の持ち主だと言っても過言じゃねえぞ。」

凜「なんかそんなに褒められると、照れるにやー。」

リボーンにマフィア界の中で運動神経がトップクラスだと言われ

ても、凜は何の違和感もなく、右手を後頭部にやって照れてしまっていた。

穂「それじゃさつそく質問していくね。凜ちゃんは花陽ちゃんとは幼馴染だけど、いつ知り合ったの？」

凜「それが全然覚えてないにや。たぶんかよちんとは、1歳か2歳の時に、児童館で出会ってたんだと思うな。」

穂「成る程ねー。昔の花陽ちゃんてどんな感じだったの？」

凜「かよちんは今と同じでとっても優しいにや。中学の時とか、音ノ木坂を受験する時も凜に協力してくれたり、小さい頃には博物館に行った時に、警備員さんに親と一緒にやないことがバレた時にも、助けてくれたんだよ。」

凜は昔の花陽とのエピソードを語った。

リ「ずっと気になってたんだが、お前がいつも語尾ににやをつけるようになった理由って何なんだ？単に猫が好きだけだからとは、俺は思わねえんだが。」

穂「あ！私も気になるー！」

リボーンがずっと気になっていたことを尋ねると、穂乃果も興味を抱いた。

凜「えつとね。昔、かよちんの家の倉庫の下に近所にチロちゃんという猫とその子供の猫がいたんだ。その子たちを助けてからかな？語尾ににやをつけるようになったのは。」

穂「凜ちゃんが語尾につけるようになった理由は、そういうことだったんだね。」

リ「これで謎が1つ、解明されたな。」

凜が小さいころにあったエピソードを語ると、穂乃果とリボーンは凜が語尾のにやをつける理由がわかってスッキリしていた。

だが凜は急に表情を暗くしてしまっていた。

凜「でもその時に同時に発覚したんだ：凜が猫アレルギーだってこと…。」

リ「せっかく好きだったのに残念だったな。」

凜「大丈夫だにや！凜には凜丸がいるから大丈夫だにや！」

穂「あ！違うよ！私のホノ太郎だよ！」

凜「いいや凜のだにゃ！」

穂「私の！」

凜「凜の！」

いつものようにツナの相棒であり、ボックス 匣兵器であるナッツを巡って、喧嘩を始めた。リボーンは喧嘩している二人を見て、嘆息していた。

二人が喧嘩していると、一匹の黒い猫が乱入してきた。

リ「お？なんか猫が入ってきたぞ。」

凜「可愛いにゃ！どこから来たのかにゃ？」

凜は猫に近づくと、どこから来たのかと尋ねると猫はにゃくと答えるだけだった。

リ「この辺を散歩してたら、たまたまここに辿りついたって言うぞ。」

穂「ええ!?リボーン君、動物の言葉がわかるの!?!」

リ「まあな。」

凜「凄いにゃ！凜にも教えてにゃ！」

リボーンが動物の言葉がわかると知って、穂乃果と凜は驚くと同時に、興味を抱いていた。

すると猫はそのまま、その場から走り去っていった。

凜「あ！待つにゃー！」

穂「え!?!ちよつと凜ちゃん！まだインタビューの途中だよー！」

凜は穂乃果の制止も聞かずに、そのまま猫を追いかけてそのままどこかに行ってしまった。

リ「凜がどこかに行っちゃったから、インタビュー続行は不可能だな。」

穂「もう！凜ちゃん自由すぎだよー！」

リ「お前も人のこと言えねえだろうが。まあいい、とつと終わるぞ。」

穂「はい。じゃあ穂乃果のホノインタビューファイトだよ！はこれで終わりだよ！叶え！みんなの夢！」

#標的（ターゲット） 284 「第5回 真姫」

穂「はい！穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ！の時間だよ！」

リ「今日で2年組も終わりだな。ということは今日のゲストはあいつか。」

穂「うんそうだよ！今日のゲストは真姫ちゃんだよ！」
そう言うのと簡易型エレベーターと共に、真姫が降りてきた。

真「西木野真姫よ。今日はよろしく。」

穂「真姫ちゃんはμ'sのメンバーで、作曲担当だったんだよ！そしてなによりこの大空とスクールアイドルの作者の推しなんだよ！」
リ「最後のその情報はいらねえだろ。」

リポーンは穂乃果が最後に余計な情報を言ったことに、ツツコミをいれた。

穂「そしてなにより美人で、勉強ができて、お金持ちで、歌とピアノがとっても上手なんだよ！」

真「きゅ、急に変なこと言わないでよ…！」

リ「ツンデレで、寂しがり屋な部分もあるけどな。」

真「余計なこと言わなくていいの！」

真姫はリポーンに余計なことを言われたことに対して、ツツコミをいれた。

リ「後は獄寺と似てる部分が多いよな。勉強ができるところとか、素直じゃないところとかな。」

穂「確かに！真姫ちゃんと獄寺君ってすっごく似てるよね！もしかして生き別れた兄妹とかだったたりして！」

真「何で兄妹なのよ！獄寺あんなやつと兄妹だなんて最悪だわ！」

真姫は二人に獄寺に似てる部分があると言われたことに、強く反発した。

穂「今日は真姫ちゃん宛てにハガキが届いてるよ。」

真「ハガキ？私に？」

穂「うん。真姫ちゃんはどんな人がタイプですか？つて宇宙一バカなラブライバーさんから。」

リ「大空とスクールアイドルの作者からじゃねえか。完全に真姫を狙ってきやがったな。」

真「キモチワルイ。」

リ「これで大空とスクールアイドルは今回で連載終了だな。」

リボーンは真姫のこの一言で、大空とスクールアイドルが終わるところを予測した。

リ「まあお前はツナにゾツコンだからな。ツナの以外の奴とお前が付き合うなんてありえねえよな。」

穂「それもそうだね。」

真「そ、そんなわけないでしょ!!／＼／＼そもそも何でそういう話になるのよ!!／＼／＼」

リ「その反応、ファンは喜んでるだろうが俺はいい加減見飽きたぞ。もつと他に反応はねえのか？」

真「何であんたに催促されないとイケないのよ！そもそもあんたが、そんなこと言うからこんな反応になるんでしょ！」

穂「まあまあ落ち着いて真姫ちゃん。真姫ちゃんがツナ君が好きなのはよくわかったから。」

真「今の会話から、何で私がツナのことを好きだったことになるのよ!？」

真姫は穂乃果の勝手な解釈に、ツツコミをいれた。

リ「まあ真姫をいじるのはこれくらいにするか。それでお前らはどんな風に出会ったんだ？」

真「出会いは音ノ木坂学院音楽室だったわ。ピアノを弾いてたら、急に穂乃果が音楽室に入ってきてμ，sにスカウトしてきたの。」

穂「真姫ちゃんのピアノと歌声に惚れちゃったから、さっそくμ，sにスカウトしたんだ。」

リ「それでお前はなんて答えたんだ？」

真「最初は断ったわ。でも花陽がμ，sに入ってから、凜と同時に

入ったの。」

穂「でも真姫ちゃん、sに入るのを断ってたけど、それでもファーストライブの曲を作曲してくれたんだよ。でも真姫ちゃんがいなかったら、私たちは、sとして活動できなかつたんだ。だからありがとう真姫ちゃん。」

真「お、大袈裟ね…！」

真姫は穂乃果にお礼を言われて、少し照れていた。

リ「デレデレしすぎで、口元が緩みまくってるな。」

真「なつてないわよ！」

リ「もうちよい素直になりや、ツナも振り向いてくれると俺は思うがな。」

真「ツ、ツナが!？」

リ「何だ期待したのか？お前もまだまだガキだな。」

真「し、してないわよ!!／／もう帰る!!／／」

穂「ええ!?ちよつと真姫ちゃん!まだインタビュの途中なんだから!ど!ねえつてば!」

リボーンが表情をニヤニタさせながら言うと、真姫は穂乃果の制止も聞かずに、顔を赤くしたままこの場から去ってしまった。

リ「やれやれ:今日もインタビュ失敗だな。誰のせいってわけじゃねえが。」

穂「どう考えてもリボーン君のせいだよね今回は!」

リ「そんなこと言っても、今日はもうこれで終わるしかねえだろ。」

穂「もうリボーン君つてば…」

穂乃果は全く反省してないリボーンに、ちよつとだけ怒ってしまった。
ていた。

穂「穂乃果のホノホノインタビュファイトだよ!今回はこれで終わりだよ!叶え!みんなの夢!」

穂「穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ!の時間だよ!」
り「今日から大学生組だな。今日のゲストは誰だ?」

穂「今日のゲストは、にこちゃんだよ!」

穂乃果がそう言うのと、簡易型エレベーターと共に、にこが降りてきた。

に「にっこにっこにー!あなたのハートに、にっこにっこにー!笑顔をお届けする矢澤にこにこー!にこにこにー!覚えて!ラブニコ♥」

にこが両手の両手の小指、人さし指、親指を立てながらいつもの自己紹介をした。

り「お、久しぶり見たなその一発芸。花見の時、以来か。」

に「一発芸じゃないって言ってるでしょ!」

り「一発芸だけじゃ、芸能界で売れていくのは難しいぞ。仮に売れても一発芸じゃすぐに消えたりするぞ。」

に「だから!一発芸じゃないって言ってるでしょ!人の話を聞いている!?!」

にこは自分のこの自己紹介を、相変わらず一発芸扱いしているリボンにツツコミをいれた。

穂「にこちゃんはμ'sのメンバーで、ツバサちゃんからはμ'sの小悪魔的な存在だと呼ばれてたんだよ!そしてなにより、私たちの所属してる部活であるアイドル研究部の創設者であると同時に、初代部長さんなんだよ!」

穂乃果はこのプロフィールを紹介すると、さっそくににこに質問していく。

穂「にこちゃんってアイドルが好きだけど、どれくらいアイドルのグッズとかどれくらいあるの?」

に「さあ?正直ありすぎて、わからないわ。限定版とかは同じのも

複数買ったりにしてるしね。」

穂「よくそんなに買えるだけのお金があるね。」

に「さすがにそこはバイトとかして稼いだわよ。けど卒業式の時にアイドル研究部に置いてあった、アイドルのグッズを家に戻してから、部屋がグッズでいっぱいになって、正直、置場所に困ってるのよねー。」

に「こは右手を頬にやりながら、困った表情をしながらそう呟いた。するとこの悩みを聞いたリボンが提案する。

リ「んじやお前のグッズをボンゴレが保管しといてやろうか？」

に「それ大丈夫なの…？」

に「こはリボンの提案に、不安を隠せないでいた。

リ「心配すんな。ボンゴレファミリィが作った最強の金庫で保管してやる。金庫のまわりには赤外線やトラップを用意する。さらにボンゴレの超精鋭部隊を金庫の警備に当たらせる。まあお前のアイドルグッズを守る為に、たくさん血が流れて、お前のアイドルグッズはわくつきの代物になるかもしれないねえが、これなら万事解決だぞ。」

に「怖すぎるわよ！というかいくら大事な物でも、そこまでして守ってもらわないでいいわよ！」

に「こはリボンの提案に、恐怖しながらもツツコミをいれた。さすがに血が流れる、いわきつきと聞いては断らずにはいられなかったのであろう。

そして気を取り直し手で、穂乃果は次の質問に移る。

穂「じゃあ次の質問ね。にこちゃんってツナ君とはどんな風に出会ったの？」

に「ツナと？ツナは4月に虎太郎が好きなヒーローのヒーローショーが並盛のデパートであって、ここあ、こころと一緒に連れて行ったの。ヒーローショーが終って、ここあが迷子になったんだけど、その時に迷子のここあを助けてくれたのがツナだったのよ。」

穂「さすがツナ君だね。」

に「それに子供の扱いが上手くて、こころたちがすぐになついたのよね。」

リ「ツナは中学の頃からランボたちの世話をしてるせいかな、自然と子供の扱いが上手くなったからな。」

リボーンはこの妹のここあ、こころ、弟の虎太郎がツナにすぐになつた原因を分析した。

リ「それに最近じゃ子供じゃなくて女にも好かれるようになったかな。まさかA—R I S E^{アイドル}のツバサに好かれるとは俺も思ってもみなかったがな。そのせいかツバサもよくツナの奴にライブのチケツトを用意してくれたり、楽屋に遊びに来ないかって言われたりするけどな。」

に「う、羨ましすぎる…」

にこはリボーンからその情報を聞いて、もの凄い羨ましそうな表情をしていた。にこはスクールアイドル時代からA—R I S Eを応援しているが、実際に会えたのは少しだけであった為、にこが羨ましがするのも当然であった。

するとにこのスマホのT w i t t e rの通知が鳴った。そしてスマホの画面を見て、にこの表情が劇的に変わった。

穂「ど、どうしたの!?!にこちゃん!?!」

に「い、今綺羅ツバサの目撃情報が入ったのよ!こうしちやいられないわ!」

穂「え!?!ちよつと待って!にこちゃんってば!」

それだけ言うと、にこは穂乃果の制止も聞かずに、その場から走り去ってしまった。

リ「またインタビュー失敗だな。もう定番になってきたけどな。」

穂「定番って言わないでよ!」

リ「んじや、終わるか。穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ!これで終了だぞ。叶え!みんなの夢!」

穂「それ私の台詞!」

#標的 (ターゲット) 286 「第7回 絵里」

穂「穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ!の時間だよ!」
リ「このコーナーも、もう7回か。早いもんだな。それで今日のゲストは誰なんだ?」

穂「今日のゲストは絵里ちゃんだよ!」

穂乃果がそう言うのと、簡易型エレベーターと共に絵里が降りてきた。

絵「絢瀬絵里よ。今日はよろしくね、穂乃果、リボン君。」

穂「うん!絵里ちゃんはμ, sのメンバーで、音ノ木坂学院の先代の生徒会長だったんだよ!それにロシア人と日本人のクォーターなんだ!それにとっても美人で、身長も高くて、スタイルが良いんだ!」
絵「そ、そんな…!私なんて大したことないわよ…!」

リ「にこの奴が聞いてたら、恨むだろうな。」

穂乃果が絵里のプロフィールを発表すると、絵里は謙遜しながらも照れてしまい、リボンは体型を気にしているにこのことを思い浮かべながら呟いた。

穂「それに^{わたしたち}μ, sが年齢に関係なく、タメ語で話すようになったのは、絵里ちゃんが先輩禁止って提案したからなんだよ。」

リ「そうなのか。俺は穂乃果がそういう風にしようって決めたのかと思っただぞ。お前が敬語とか使うイメージがなさそうだしな。」

穂「私だってそれくらいはできるよ!」

穂乃果はリボンの言葉を聞いて、可愛らしく頬を膨らませながらそう言った。

そしてさっそく質問を開始していく。

穂「じゃあ、質問していくね。絵里ちゃんっていつから日本に住んでるの?」

絵「生まれたのは日本なの。ただ親の都合で仕事で、幼稚園の頃はロシアで過ごして、小学校の頃に日本に戻ってきて、また日本で暮ら

すことになったの。」

穂「私、絵里ちゃんが生まれたのは、ずっとロシアだと思ってた。」

絵「こういうことを話したことなかったし、そう思われるのも無理もないわ。」

リ「一応、ロシアにいたってことはロシア語は話せるってことか？」

絵「もちろんよ。」

穂「おお！確かこういう2ヶ国の言葉を話せる人をバイキンダルって言うんだよね！」

リ「それを言うならバイリンガルだぞ。ていうかバイキンダルって何だ？バイキンが入ってる樽みたいになってんだろが。」

リポーンは相変わらずどこか抜けている穂乃果にツッコミをいれ、絵里は苦笑いしてしまっていた。

穂「そういえば絵里ちゃんって、ハラショーってよく言ってるけど、あれもロシア語なの？」

絵「ええ。ハラショーはロシア語で、凄い、素晴らしいっていう意味なのよ。」

穂「へー、知らなかったー。」

リ「お前、*μ* sで一緒に活動してたのに絵里のこと全然知らねえじゃねえか。」

音ノ木坂学院の廃校阻止や、ライブ優勝で共にスクールアイドルとして活動していたのにも関わらず、絵里のことについて詳しく知らない穂乃果に、リポーンは少しだけ呆れてしまっていた。

穂「そんなことないよ。絵里ちゃんてすっかりしてるけど、暗いところが苦手なんだよ。」

リ「知ってるぞ。ツナかてきよーの家庭教師かてきよーやってる時に一瞬停電した時にツナに抱きついてからな。というかその写真を撮ったのを俺だつてことを忘れたのか？」

穂「あ！そうだったね！」

絵「!!／／」

絵里は暗いのが怖くてツナに抱きついたことをリポーンに言われて、恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしまっていた。

穂「え、絵里ちゃんって今はフレンドリーな感じだけど、μsに入る前はすごいピリピリしてたんだよ！」

リ「それも知ってるぞ。後、玩具のチョコレートを食べそうになったこともあることもな。まあこれは希から聞いた情報だけだな。」

絵「の、希…!!／／／」

絵里は希がこのことをリボーンにバラされて、恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしながら、希を少しだけ恨んでいた。

リ「後はアルパカに…」

リボーンがさらに絵里の黒歴史を話そうとした、その時…

絵「：帰る」

穂「絵里ちゃん？」

絵「エリチカ!!／／／おうちに帰る!!／／／」

自分の黒歴史を言われたこと、これ以上自分の黒歴史を言われるの恐れなのか、絵里は顔を真っ赤にしながらその場から早歩きで帰ってしまった。

穂「い、言いすぎちゃったね…」

リ「だな。今回もインタビュ―続行は無理だが、しょうがねえよな。」

穂「そ、そうだね…じゃあ、穂乃果のホノホノインタビュ―ファイトだよ！の時間は終わりだよ！叶え！みんなの夢！」

#標的(ターゲット) 287 「第8回 希」

穂「穂乃果のホノホノインタビューファイトだよ!の時間だよ!」
リ「今日はμ sのメンバー最後だな。」

穂「うん!そうだね!というわけで今日ゲストは希ちゃんだよ!」
穂乃果がそう言うのと簡易型エレベーターと共に、希が降りてきた。
希「やつほー。穂乃果ちゃん、リボーン君。今日はよろしくね。」

穂「希ちゃんはμ sのメンバーで、音ノ木坂学院の先代の副生徒会長だったんだよ。それに占いが得意で、すっごく当たるんだよ!」
穂乃果が希のプロフィールについて発表すると、希はポケットからいつも占いの時に使うタロットカードを取り出した。

希「ウチの占いはよく当たるって評判なんよ。」

リ「んじゃ、ツナがμ sのメンバーの誰と付き合うことになるのか占ってみてくれ。」

穂「ツ、ツナ君と!?!/」

リボーンが希に占いを頼むと、穂乃果は今ここでツナと付き合うのが誰なのかかわかると聞いて、顔を赤くしながら動揺してしまっていた。

希「それは占ったら面白くないやん。それにそのことについては占う必要性は全くないよ。ツナ君と付き合うことになるのはウチなんやし。」

穂「ち、違うよ!!/ツナ君と付き合うのは私だもん!!/たとえ希ちゃんの占いで、ツナ君が希ちゃんと付き合うっていう結果が出ても、私はその運命を変えるもん!」

リ「お、なかなか言うようになったじゃねえか穂乃果。見直したぞ。」

リボーンは穂乃果の言葉を聞いて、関心してしまっていた。

穂「はっ!こんなことしてる場合じゃなかった!質問しないと!」
希「ウチは運のことについてやろ?希ちゃんって運がいいけど、どれ

くらい運がいいのって聞ききたかったんやろ?」

穂「ええ!? 何で私が質問しようとしたことがわかったの!?!」

希「ここに来る前にカードが、穂乃果ちゃんがこのことについて聞いてくるって、言うてたんよ。」

リ「ピンポイントすぎるだろ。最早予知レベルじゃねえか。そのうちユニを越えるんじゃないやねえか?」

リボーンは希のあまりにも占いが的中していたので、ユニを越えるのではないか? と思ってしまうていた。

質問の問いに対して、希は顎の部分に指を当てながら答える。

希「そうやねえ…: だいたいくじとか引くと1等とか2等とか当たるし、テストの選択問題とかでも、その問題がわからなくて勘で答えたりするんやけど、それもほとんど正解したりするね。」

穂「いいなー。私も選択問題の時とか、いつも鉛筆転しで決めるけど、全然当たらないだもん。」

リ「その前にお前はちゃんと勉強することを覚えろ。」

リボーンは穂乃果のテストで選択問題の攻略法聞いて、呆れながらツツコミをいれた。

穂「そういえば希ちゃんって、スピリチュアルとかよく言うけど、スピリチュアルってどういう意味なの?」

リ「スピチチュアルっていうのは、キリスト教の用語で霊的なことを意味するんだぞ。」

穂「へーそういう意味だったんだね。」

リボーンがスピチチュアルの意味を言うと、穂乃果はスピチチュアルの意味がわかって関心していた。

穂「じゃあ最近あった、希ちゃんのスピチチュアルな出来事って何?」

希「そうやね。4月にツナ君たちに出会ってから起きたこと全てがウチにとってスピリチュアルな出来事やったね。」

穂「それは私もわかるよ!」

希の意見に穂乃果は同意するが、一方でリボーンは納得いかないような表情になってしまっていた。

リ「おい。その言い方だと、俺たちが霊的な存在みてえじゃねえか。俺たちマフィアだぞ。そここの忘れんじやねえぞ。」

希「いや…それはわかってるんやけどね…でもウチからしたらリボーン君が一番スピリチュアルな存在なんやけど…」

リ「俺のどこがスピリチュアルなんだ？俺はどこから見ても普通だろ。」

希「ええ…」

希はリボーンが自分のことを普通だと言ったことに、驚きを隠すことができていなかった。赤ん坊なのに喋り、家庭教師で殺し屋ヒットマンという時点で希にとっては霊的な存在にしか思えてならなかった。ちなみに希が次にスピリチュアルだ思っているのは、リボーンの相棒である形状記憶カメレオンのレオンである。

希「じゃあこのコーナーも終わりやつてカードも言うてるし、今日はこれで終わりやね。希のノゾノゾインタビュー、スピリチュアルやねはこれで終了やね。次回もお楽しみに。」

穂「ちよつと希ちゃん！勝手に終わらせないでよ！それに、このコーナーのタイトルを変えないで！」

7月篇

#標的(ターゲット) 288 「テスト結果」

sideリボン

前回の大空とスクールアイドルだぞ。第2回定期試験を迎えた穂乃果たち。だが勉強の苦手な穂乃果と凜はいつものように嫌な顔をしてた。だがそんな時、超一流の家庭教師兼、殺し屋であるこの俺がテストで一番いい成績だった奴を、ツナとデートさせてやると提案してやったんだ。この提案を聞いた穂乃果たちは、戸惑いつつもまんざらでもなさそうな様子だったぞ。

そして今日、全てのテストが終了して、運命のテスト結果の日を迎えるぞ。ツナとデートすることになるのは誰になるのか、楽しみだぞ。

—音ノ木坂学院アイドル研究部部室—

「というわけでは今日はお前らのお待ちかねのテスト発表だぞ。もうわかっていているとは思いますが、各学年で今回のテストの結果が一番良かった奴が、ツナとデートできるぞ。」

リボンがテスト結果の発表の前に改めて、自分が提案したことを確認した。ちなみにテストは返却された時にすぐにリボンが回収した為、自分以外の人のテストの点数を知る者はいない。

「んじゃさっそくテスト結果を発表するぞ。今回、ツナとデートできるのは…」

リボンが穂乃果たちのテストの結果をまとめた紙を取り出して、そう言う穂乃果たちはゴクリと固唾を飲み込み、今回関係ない雪穂

と亜里沙もドキドキしている様子だった。

そして結果が発表される。

「穂乃果、花陽。お前ら二人だぞ。」

「え!? 本当によったあー!」

「わ、私ですか!」

「ほ、穂乃果に負けた…? わ、私が…?」

「あ、あのお姉ちゃんが…」

二人は自分がまさか選ばれるとは思ってもみなかったのか、驚きの声を上げると同時に、歓喜していた。一方で海未は穂乃果に勉強で負けたことがよほど、信じられなかったのか、もの凄いショックを受けてしまい、雪穂も穂乃果が3人の中で成績が一番だったことが信じられずショックを受けてしまっていた。

「今回負けた奴は残念だったが、それでも結構僅差だったぞ。全員、全ての教科が90点以上だったからな。」

リボーンは惜しくも負けた人の為にそう言うが、それでもツナとデートできる穂乃果と花陽を、海未、ことり、凜、真姫は羨ましそうな表情で見ている。

さらにリボーンが続ける。

「後、一応言っておくが俺は今回、穂乃果と凜の家庭教師かてきよをしたが、俺はわからないところを教えたただけだ。その後は二人が努力して、その努力の結果が今回の結果なんだぞ。」

リボーンが誤解のないようにそう言うと、今度は亜里沙が挙手しながらリボーンに尋ねる。

「あのお姉ちゃん…音だノ木坂大学がのほうはどうなったんですか?」

「そのことなんだがな。まだ音ノ木坂大学はまだテスト期間にすら入ってねえようでな。一応、あの3人にもこのことは伝えておいたが、どういう結果になるかはもう少し先になりそうぞ。」

「そうですか。わかりました。」

亜里沙はずっと気になっていたことがわかって、納得した。

「それにしても私が1位なんて…もちろん努力はしたけど、いっつも満点取ってる真姫ちゃんに勝てるとは思ってなかったし…凜ちゃん

もツナさんとデートできるって思ったら凄い力を発揮するじゃないかって思ってたし…」

「それだけ努力したってことでしょ。」

「そうだにや。やっぱりかよちゃんは凄いにや。」

真姫と凜は、今だに自分が1位だということを信じらない様子の花陽にそう言った。

「穂乃果ちゃんも凄いね。おめでとう。」

「今回は私の完敗です。ツナ君とのデート、楽しんで来てください。」

「ことりちゃん、海未ちゃん…ありがとう。」

穂乃果は二人の祝福に、嬉しさのあまり少しだけ涙を浮かべていた。

「まあ別にツナとデートしたきや、自分で遠回しにツナをデート誘えばいいだけの話だけだな。それに、このデートでツナが穂乃果か花陽と本当に付き合うことになっても、他の奴らはツナの愛人にしてもらえればいい話だしな。」

「二二「あ、愛人!?!／／／」」

ツナのことを想っている6人は愛人という単語に反応して、顔を赤くしてしまっていた。

こうしてツナとデートできるのは、穂乃果と花陽に決定した。ツナとのデート、二人は一体どうなるのであろうか!?!

#標的 (ターゲット) 289 「デートの始まり」

その夜。明日ツナとデートすることが決まった花陽は、

「明日はツナさんとデート…!!／／えへへ…!!／／」

ベッドの上で枕を両腕でホールドしながら、嬉しさのあまり顔が緩みまくってしまっていた。

(ま、まさかツナさんとデートできるなんて!!／／どうしよう!!／／
／／これで本当にツナさんと付き合えたら!!／／)

花陽はあまりに興奮しすぎたのか、ベッドの上で枕を両腕で抱いた状態で横になると、左に転がり始めたり、右に転がり始めた。

しばらく花陽がそんなことをしていると、部屋の窓からコンコンという音がし、その音で花陽は我に返って、慌てて窓のカーテンを開けるとガラス越しに、

「ちやおっす花陽。」

「リボーン君!?!」

レオンを翼に変型させて宙に浮き、7月であるにも関わらずサンタクロースの格好をしていたリボーンがいた。

花陽はサンタの格好をしたリボーンに驚きつつも、窓を開けてリボーンを部屋の中へ入れた。

「悪いなこんな時間に。それもツナのことを考えて興奮してる時に。」
「な、何でわかったの!?!／／」

花陽は部屋の窓にはカーテンがあり、中の様子はわからないはずなのに、リボーンは自分が何をしていたか知っていることに顔を真っ赤にしながら驚きの声を上げた。

するとリボーンは懐から2枚のチケットを取り出した。

「これをお前に届けに来たんだぞ。」

「こ、これって…A—RISEのライブのチケット!?!」

「せっかくのデートだからな。俺がツバサに頼んで用意してもらったんだぞ。ツナと一緒に行ってこい。」

「ほ、本当にいいの!？」

「ああ。楽しんでこい。」

「あ、ありがとうリボン君!」

花陽はリボンがA―RISEのライブのチケットを用意してくれたことにお礼を言った。大好きなA^ァ―RI^ィSD^ドのライブを自分が一番大好きな人と見れるということは、花陽にとって最高のシユチュエーションであろう。

「ツナには、デートだったことは伏せて、それとなく誤魔化しておいたぞ。ツナは鈍いからデートなんて思っちゃいねえだろうが、花陽と一緒にライブを見に行ってくれるとは承諾してたから安心しろ。」

「うん。わかったよ。」

「じゃあ、俺はそろそろ帰るぞ。」

そう言うとりボンは花陽の部屋の窓から、レオンを翼に変型させて、空を飛んで並盛へと帰って行った。

そして次の日。とうとうツナとデートする時がやってきた。

「は、早く来すぎちゃったかな…」

花陽は集合場所にて集合場所30分前に到着するも、まだツナが来ていないのではないかという不安にかられていた。

だが、

「おーい!花陽ちゃん!」

「ツ、ツナさん!？」

すでに右手を大きく振りながら花陽のことを呼んでいるツナがいた。集合時間の30分前にも関わらず、すでに集合場所にツナがいたことに花陽は驚きの声を上げてしまった。

「ツナさん、何でもうここに？集合時間はまだ…」

「前に真姫ちゃんのピアノの発表会に行った時に真姫ちゃんが言ってたんだ。時間に間に合っても女の子を待たせるのはダメだって。だから1時間前にここに来たんだ。」

「そ、そうだったんですか。」

「でもそういう花陽ちゃんこそ、集合時間の30分前に来てるよね？」

「へ!?!//いや、私は余裕を持って行こうかと思って!!//」

ツナもなぜ集合時間30分前に来ているのかと尋ねると、花陽は顔を赤くしながら早口でそう言った。実際には、ツナとのデートが楽しみすぎて、早くに起きてしまい、家で待つのが退屈になってしまった為、集合時間30分前に来てしまったというのが真実である。

「今日はありがとう花陽ちゃん。俺をライブに誘ってくれて。」

「き、気にしないでください!!//たまたまチケットが2枚手に入っただけなんで!!//」

今回ツナはリボンから、花陽がA—RISEのライブチケットのチケットが手に入って、花陽と一緒に行かないかと聞かされてる為、これがデートだということは露程にも思っではいない。

「時間は早いけど、そろそろ行こっか。」

「は、はい…!!//」

こうしてツナと花陽のデートが始まるのであった。

#標的 (ターゲット) 290 「花陽の宣戦布告」

早く集合場所に集まった二人であったが、さっそくA—RISEのライブが行われる会場へと向かっていく。

しかし、

(ど、どうしよう!!／／な、何か会話を…!!／／)

花陽は想い人とのデートということで、もの凄い緊張してしまい、会話をままならぬ状態にあった。

ツナは花陽がそんなことになっているとも知らずに、普通に話しかけた。

「ねえ花陽ちゃん。」

「は、はい!? な、何ですか!？」

「ど、どうしたの花陽ちゃん…? 大丈夫…?」

ツナは普通に花陽に話しかけたつもりであったが、もの凄い驚いた反応を見せた為、心配してしまった。

「A—RISEのライブがこの後すぐだと思ってたら、つい緊張して!!／／それで急に話しかけられたから驚いちゃって!!／／」

「な、ならいいんだけど…」

「そ、それで何ですか?」

「花陽ちゃんって、A—RISEのライブとかって行ったことがあるのかなって。」

「実は今回が初めてなんです。今までも何回か、応募はしてみたんですけど全然当たらなくて…」

「そっか。なんかごめんね…俺なんてアイドルファンでもないのに、ツバサさんからもチケットを貰ったりして…花陽ちゃんとかにこきさんにもあげたいと思ってるんだけど、ツバサさんがわざわざ俺の為に用意してくれたから、どうしてもできなくて…」

「い、いいんですよー…そんなに気を使ってもらわなくても!」

ツナがチケットを貰っていることについて謝罪すると、花陽は両手を前に出しながら言った。

この後も他愛ない話をしていると、二人は今回A—RISEのライ

ブが行われる会場の前に着いた。着いた同時にツナのスマホにLINEの通知が来た。

『今日も来てくれてありがとうツナ君。今リボーン君からツナと花陽ちゃんが生会場の前にいるって教えてくれたから、ライブ時間までも時間があるからよかつたら楽屋に遊びに来ない?』

「リボーン俺たちのこと見てるのかよ!」

ツナはLINEの文面にリボーンが教えてくれたとあって、辺りキョロキョロと見回すがリボーンの姿はどこにもない。リボーンは世界最強の殺し屋ヒットマンである為、見つからないのはわかっているもどうしても探してしまおうのである。

「ど、どうしたんですかツナさん…?」

「いや…ツバサさんからLINEが来てたんだけど、なんか俺たちの行動、リボーンに筒抜けらしいよ…」

「そうですか…」

ツナがリボーンが自分たちのことを見ていると伝えるも、花陽は今までもリボーンがこういうことをしたことはよくあったのであまり驚くことはなかった。

「後、ツバサさんが楽屋に遊びに来ないかって言ってるんだけど…」

「ほ、本当ですか!?!」

「うん。行ってみる?」

「はい!」

花陽は楽屋に行けると聞いて、目をキラキラと輝かせた。ツナは花陽の返事を聞いてすぐにツバサに返信し、楽屋に行くことを伝えた。

そして二人はツバサのいる楽屋へと向かって行った。

二人が楽屋の中に入ると、ツバサが待っていた。

「いらっしやいツナ、小泉さん。」

「こんにちわ。ツバサさん。」

「ど、どうも!」

楽屋に入ると、ツバサが笑顔で出迎えていた。ツナは普通にツバサに挨拶するも、花陽は緊張の面持ちであった。

「今日も来てくれてありがとう二人とも。」

「いえ。今日は花陽ちゃんがこのライブのチケットが2枚当たって、俺を誘ってくれたんです。」

「あら、そうだったの。」

ツナから事情を聞くと、ツバサは花陽のほうを向いていつもよりニコニコしていた。何を隠そう今回のライブのチケットはリボンに頼まれたツバサが用意したもので、もちろんツバサはこの二人なぜここにいるかという理由はリボンから聞いている。一方で花陽はツバサがそんなことを考えているのだろうと察しており、ここで自分のついた嘘がバレるのではないかと思ひ、もの凄いドキドキしていた。

だがツバサはそのことについては一切、触れず話を続けていく。

「そういえば、この前のテストはどうだった？」

「はい。ツバサさんが家庭教師してくれました。ありがとうございました。ありがとうございます。」

「え!?! ツバサさんがツナさんの家庭教師!？」

花陽はツナの家庭教師していたことを知って驚きの声を上げると同時に、リボンがテスト週間の始めに言っていた特別講師のことがツバサのことだったということを理解した。

しばらく談笑していると、ライブの時間が迫ってきた。

「そろそろ行こうか花陽ちゃん。」

「はい。」

「あ、小泉さん。ちょっと話があるの。」

「わ、私ですか?」

「ええ。悪いけどツナは外してもらえるかしら? 今から女の子だけの秘密のお話をしたいの。」

「わかりました。じゃあ先に行ってるね花陽ちゃん。」

女の子だけの秘密のお話と聞いたので、ツナは先に観客席へと向かって行った。

「あ、あの…お話って…?」

「もちろん恋愛のことよ。小泉さんはどうしてツナ君のことが好きになつたのか聞きたくて。」

「ええ!?!／／それは…!!／／／」

「恥ずかしがらないで。ツナにも、他の人にも言ったりはしないから。」

「わ、わかりました…!!／／／」

花陽はツバサの言葉に押されて、ツナのことを好きになった経緯を話した。

「そうだったの。ツナって本当に誰にでも優しいのね。」

「はい…!!／／／」

ツナを好きになつた経緯を話して、花陽は顔を赤くして恥ずかしくなっていた。

「ツバサさんはマフィアに拐われそうになつたところを助けてもらつて、そこからツナさんのことを好きになつたんですよね…?」

「ええ。あの時のツナはとつてもかっこよかつたわ。あなたは知ってるのかしら? ツナの秘密。」

「ツナさんの秘密?」

「その様子だと知らないようね。」

「な、何ですかツナさんの秘密って?もしかしてツナさんがマフィアボンゴレファミリーのボスだつてことですか?」

「違うわ。知ってたならそのことについても話そうと思つてたけど、これ以上は言えないわ。ツナに秘密をお願いって言われてるから。まあ、sの中でもツナ君の秘密を知っている人はいると思うから、そのうち知ることにはなるんじゃないかしら? 私の勘だけだね。」

ツバサがそう言うと、花陽はツナの秘密と聞いて気になつてしまふが、本人が秘密にして欲しいと聞いたので、それ以上は追求することはしなかった。

「じゃあこのことは知ってるかしら? ツナが私たちの中の一人と、結婚するかもしれないっていうのは。」

「え!?! ユニちゃんのことを知ってるんですか!?!」

「そのことは知っているのね。A—R—I—S—Eわたしたちのライブに来た時に教えてくれたの。まさかこの予知能力を持っている子がいるなんてね。」
「そうだったんですか…」

「でも残念だけどツナは私のことを友達としては見てはくれない、異性としては見てはくれないよね。前にツナ君の家に家庭教師かてきよに行った時にわかったわ。」

「え…？」

「だからって諦めるつもりは気はさらさらないわ。ユニちゃんが予知言たタイムリミットまでにツナに振り向いて貰えばいいだけなんだから。」

「ツバサさん…」

花陽はツナに異性として見られてなくても、それでもツナに振り向いてもらえるように努力しようとするツバサに驚いていた。

そしてツバサの覚悟を見て花陽は、

「わ、私も負けません！たとえ相手がアイドルだとしても！だから私もツナさんに振り向かせてみせます！」

ツバサに宣戦布告した。花陽の突然の宣戦布告に呆気にとられるツバサであったがすぐに笑顔になった。

「ええ。こちらこそよろしくね花陽。」

「はい！」

#標的（ターゲット） 291 「花陽の好きな人」

ツバサに改めて宣戦布告した花陽は、あの後ツナと一緒にA―RI SEのライブを一緒に観賞した。

「やっぱりA―RI SEのライブは凄かったなー。新曲とってもよかったし。」

「はい！今回の新曲、最高でした！」

「それによかったねサイン貰えて。」

「はいー！」

ツナがそう言うのと花陽の手には3枚の色紙が握られていた。楽屋で宣戦布告した時にツバサから貰ったのである。スクールアイドル時代に花陽がサインをお願いしてきた時のことをツバサが覚えていたらしく、用意してくれたのだという。

「そろそろお昼だね。お昼は花陽ちゃんの好きなご飯が食べられるお店にでも行こっか。」

「そ、そんなに気を遣わないでもー！」

「別に俺はそこまで食べたい物とかないし、こうなると思ってご飯がおかわりし放題のお店とか調べてきたから。」

そう言うとツナは事前にス調べておいた、ご飯がおかわりし放題の店の情報について書かれたページをスマホを見せた。

「どうかな？花陽ちゃんならきつと喜ぶと思っただけど。」

「い、行きますー！」

花陽お店の情報を見て目をキラキラと輝かせながら、すぐにこのお店に行くことを決意した。

そして歩いて10分後。ツナが事前に調べておいたお店に着くと、さつそく昼食を食べる。

「はああああー!美味しいですー!」

「よかった。喜んで貰えて。」

ツナはいつものように幸せそうにご飯を食べている姿を見て、ニコニコとしていた。

「私の為にありがとうございますツナさん。」

「気にしないで。俺のほうこそ喜んで貰えて嬉しいよ。」

花陽はこの店を調べてくれたツナにお礼を言った。

しばらくするとツナはこんなことを呟き始めた。

「なんかデートみたいだよな。」

「へ!?!//」

「急に変なこと言ってごねんね。なんかこうやって二人つきりてこんな風に過ごすのがデートみたいに思っちゃったから。」

「そ、そうですか:!!//」

「そういう花陽ちゃんが好きなのとかはないの?」

「す、好きな人ですか!?!//そ、それは:!!//」

花陽はこのタイミングで好きな人のことについて質問をされると思ってもみなかったのか、顔を真っ赤にしてしまった。

「あーごめん!ちよつと気になっちゃって!別に言わなくて大丈夫だから!」

「います:!!//」

「え!?!」

まさか花陽が本当に答えてくれるとは思ってもみなかった為、ツナは目を点になっていた。

「その人は違う学校の人なんですけど、とっても優しい人で:!!//私が悪いのにその人は私のことを責めるどころか、謝ったんです:!!//それでその人のことを好きになって:!!//1回だけ告白しようとしたんですけど、結局想いを伝えられなくて:!!//」

花陽は前にダイエツトした時に、ツナにおぶられた時のことを思い出しながら語っていく。

だが、

(ど、どうしよう!!／＼／＼つい言っちゃった!!／＼ツナさんの目の前にいるのに!!／＼／＼何で言っちゃったのー!!／＼／＼)

花陽は全てを話した後、想い人の前であの時のエピソードを語ってしまったことを心の中でめちやくちや後悔してしまっていた。

「へーそうなんだ。その人、とっても素敵なんだね。会ってみたいな。」

(全く気づいていない!?)

だがツナは花陽の好きな人が自分だとはつゆほどにも思っていない。一方で花陽は、いくらツナが鈍感なのは知っていたが、ここまで話して全く気づいていないツナに驚いてしまった。

「その人と付き合えるといいね。」

「そうですね!」

「は、花陽ちゃん…? な、何で怒ってるの…?」

「怒ってません! 何でもありません!」

花陽は全く気づいてもらえなかったことに対して、可愛らしく頬を膨らませて怒ってしまった。

超直感という全てを見透かす力を持ってしても、乙女心は全くわからないツナであった。この後、花陽は機嫌を直してくれたそうなの。

#標的（ターゲット） 292 「穂乃果とのデート」

花陽とのデート（当の本人はデートとは思っていないが）の次の日。
「ま、まさか穂乃果ちゃんから誘って来るなんて…!!／＼／＼」

花陽とのデートが終わった日に、リボンから穂乃果が映画のチケットを手に入れたという話を聞いて、現在穂乃果の家の前で立ち尽くしていた。

そして一旦、深呼吸し覚悟を決めると穂むらの扉を開けた。

「お邪魔します。」

「あら。いらっしやいツナ君。」

「あ、どうもお母さん。」

「聞いたわよー。穂乃果のデートですって！」

「デ、デートなんて!!／＼／＼今日は穂乃果ちゃんと二人で遊びに行くだけなんですよ!!／＼／＼」

（それを一般的にはデートって言うんじゃないかしら…?）

穂乃果の母は想い人と二人つきりで遊ぶとをデートではないということをデートではないと言った

ことに呆れてしまっていた。花陽の時は意識していなかったが、想い人の時には意識しすぎておかしな発言をしてしまっていた。

「それで穂乃果ちゃんは？」

「えっと穂乃果は…その…」

「？」

穂乃果の母はツナに自分の娘のことについて聞かれると、もの凄く、申し訳なさそうな表情になってしまった。

そんな穂乃果の母の表情を見て疑問符を浮かべていると、

「お姉ちゃん！起きてよ！もうツナさんが来る時間だよ！ねえってば！」

2階から雪穂の声が聞こえてくる。どうやら穂乃果はこんな大事な時でも寝坊してしまったようである。

「理解して貰えたかしら…?」

「はい…」

穂乃果の母がそう言うのと、ツナは前にバイトに来た時と同じように穂乃果はまだ起きていないということを理解した。この後ツナはこの前と同じようにナッツを使って、穂乃果を起こした。

そして穂乃果が着替え終わって、一階へと慌てて降りてきた。

「ごめんねツナ君！寝坊しちゃって！」

「いいよ。全然大丈夫だから。」

穂乃果は寝坊したことについて必死に謝るも、ツナは全然気にしていない様子であった。

（久しぶりに穂乃果ちゃんの私服姿を見たけど、やっぱり可愛いなー。）

ツナはそんなことよりも私服姿の穂乃果が可愛い過ぎて、夢中になっちゃってしまっていた。

「もうお姉ちゃんってつてば、こんな大事な時にまで寝坊するなんて信じられないよ。」

「だ、だって！楽しみで眠れなかつただもん！」

「まあまあ。別にまだ映画の時間には間に合うから。全然大丈夫から気にしないで。」

ツナはいつものように姉妹で言い合っているのを見て、仲裁に入っていた。

「ツナさんはお姉ちゃんに甘過ぎですよ。もう少し何か言ってあげてくださいよ。」

「な、何かって…」

ツナは雪穂に言われて、穂乃果のほうを見るが、

（む、無理…何も言えない…）

ツナは私服姿の穂乃果が可愛い過ぎて、何も言うことができなないうでいた。

それを察したのか雪穂は額に手をやって、呆れてしまっていた。

「ツナさんこんなこと言った私が馬鹿でした…」

「自分で言わせておいて、それはないんじゃないかな雪穂ちゃん!？」

「まあ話はそれくらいでいいじゃない。今日は穂むらでバイトするわ

けでもないんだから。二人の初デートなんだから。」

「!!／／／」

穂乃果の母が初デートと言うと、二人は顔を真っ赤にしたまま黙ってしまった。

すると厨房のほうから割烹着を着た、穂乃果の父がやってきた。

「あ、お父さん！こんにちわ！きよ、今日は穂乃果ちゃんと映画を見に行く予定で！いや！決して変な意味じゃないんです！」

ツナは穂乃果の父が出てきて、慌ててデートではないということを手主張した。ツナの発言に対して穂乃果の父は怒ることもなく右手の親指立てると、すぐに厨房のほうへと戻っていった。おそらく二人のデートの幸運を祈っているという意味で親指を立てたのであろう。

(今の何!?!もしかして何か勘違いされてる!?!)

ツナは前にバイトに来た時に穂乃果の母が、ツナ君になら穂乃果を任せられると言っていたことを思い出し、おそらくデートの幸運を祈っているという意味で親指を立てたのだらうということを理解した。

かくしてツナと穂乃果のデートが始まるのであった。

#標的 (ターゲット) 293 「映画」

デートが始まって、さっそく二人は映画館へと向かって行く。
しかし、

「!! // //」

二人は互いに意識しすぎてしまい、顔を赤らめたまま穂むらを出てから一言も喋れていないという状況であった。

それでもツナはなんとか穂乃果に話しかける。

「ほ、穂乃果ちゃん!! // //」

「な、何?! // // ツナ君?! // //」

「きよ、今日はその!! // // いい天気だね!! // //」

「そ、そうだね!! // //」

ツナは天気の話題について話すが、今日の天気は曇りである。もちろん二人とも意識しすぎている為、今の天気が曇りだということに気づいていない。

この天気の話題が終わってから、再び沈黙が続くが、今度は穂乃果がツナに話しかける。

「ツ、ツナ君!! // //」

「な、何?! // // 穂乃果ちゃん?! // //」

「ツ、ツナ君って今、何歳だっけ?! // //」

「え、えつと!! // // 17だよ!! // //」

「そうだったんだ!! // // わ、私も同じ年齢なんだね!! // //」

「し、知らなかったなー!! // // アハハ!! // //」

今度は自分の年齢の話題になるが、お互いに年齢は一緒だということとは知っているはずなのだが、これも意識しすぎて気づいていなかった。

そしてまた再び沈黙が訪れ、

(何言ってるんだよ俺!! // // 今日、どう見ても曇りじゃん!! // // と
いか穂乃果ちゃんと俺、年齢一緒だし!! // //)

（私ったら何言ってるの!!／／ツナ君と私、同級生なのにー!!／／
／

お互い時間差で自分が言ってたことが、めちゃくちゃ変であるということに気づいた。

結局、この後話すこともなく映画館に着いてしまった。

「なんか学生が多いね。」

「基本的にテストが終わったから、学校もあんまりないから多いかもね。」

ツナが映画館に学生多い理由を推測すると、あることに気づいた。今さらであるが二人は、まともに会話することができた。

「そういえば映画を見るのはいいんだけど、何の映画なの？」

「え、えつと…!!／／それは…!!／／」

「穂乃果ちゃん？」

ツナがずっと思っていたことを尋ねると、急に穂乃果は顔を赤くし始めた。急に変な反応を見せたことにツナは疑問符を浮かべた。

そんな反応を見せながらも、穂乃果はバッグから2枚のチケットを取り出し、ツナに見せた。

「こ、これって!!／／」

ツナはチケットに書かれてある映画のタイトルを見て、穂乃果と同じく顔を赤くしてしまう。この映画は今、話題になっている恋愛映画であったからである。

「この映画ってテレビでよく宣伝してる…!?!／／」

ツナがそう尋ねると、穂乃果は顔を赤らめながらコクリと顔を縦に振るだけであった。

「も、もしかして…!!／／嫌だった…!?!／／」

「だ、大丈夫だよ!!／／」

「そ、そっか!!／／ならよかったあ!!／／」

ツナがこの映画を見に行くことが問題ないとわかると、二人はジュースとポップコーンを買った後、劇場内で映画が始まるのを待つ。最所は他の映画の宣伝や映画泥坊の映像があり、それらが終わった後に映画が始まる。

(れ、恋愛映画って初めて見るなー。一体、どんななんだろう。)

ツナは生まれて初めて見る恋愛映画に、ちよつとだけワクワクしていた。

開始から15分するとツナの手に右手に温かい感触が伝わってきた。

(な、何だろう…? な?! / / /)

ツナが自分の右手を見ると、そこにはすでに眠りにつき、左手で自分の右手をにぎっている穂乃果がいた。

(まだ映画が始まって30分も経ってないのに、もう寝てる!?! で、でも可愛い…!! / / /)

ツナは穂乃果がすぐに眠ってしまったことに驚いてしまうが、穂乃果の寝顔があまりに可愛かった為、見とれてしまう。

その後も映画も続いていき、上映開始から1時間が経過した。この1時間の間、穂乃果も起きる様子はなく、ツナは一人で映画を見ていた。途中で何度も穂乃果の寝顔を見て、その度に見とれてしまった。

だが、

「zzzz…」

ツナも途中で睡魔に負けてしまい眠ってしまった。

二人が眠ってからさらに1時間後にエンドロールが流れ結局映画を見ることはなかった。

二人が起きた時、お互いに顔を真っ赤にして動揺してしまったことは言うまでもないであろう。

#標的（ターゲット） 294 「突如現れた女性」

映画を見終えて二人は映画館を後にしたが、

「!!／／／」

二人とも映画館で目が覚めてからお互いに手を握っていたことを意識しすぎて、再び顔を赤らめたまま沈黙の時間が続いてしまった。

しばらく歩いているとちよつとした広場が見えてきた。

「ほ、穂乃果ちゃん!!／／／」

「な、何!?!／／／」

「ちよ、ちよつとあそこのベンチに座って休憩しない!?!／／／」

「え!?!／／／う、うん!!／／／」

穂乃果はいきなり話かけたことに驚いたが、それでも一緒に広場で休むことに同意した。

ベンチに座るとツナが口を開いた。

「ご、ごめんね穂乃果ちゃん!!／／／」

「え!?!／／／」

「い、いや!!／／／せつかく映画のチケットを用意してくれたのに寝ちやつて!!／／／」

「う、ううん!!／／／こつちこそごめんね!!／／／自分から映画に誘っておいて、先に寝ちやつて!!／／／」

ツナと穂乃果お互いに映画館の出来事について謝った。

「そ、それに…!!／／／」

「それに?」

「う、ううん!!／／／何でもない!!／／／ちよつとジュース買って来るね!!／／／」

「え!?!穂乃果ちゃん!?!」

穂乃果は何か言おうとしたが、すぐにベンチから立ち上がってそのままジュースを買いに走って行ってしまった。

「行っちゃった…というかジューズならさつき映画館で…まあいいか。」

ツナは穂乃果の行動に疑問を抱いたが、そのままベンチにて穂乃果の帰りを待つことにした。

(急に走って行ったけど…何かしっちゃったかな…)

ツナは穂乃果が急にいなくなったことに不安になってしまった。穂乃果はただ映画館で手を握ったことについて話そうとしたが、恥ずかしくなってしまっただけなのである。

ツナが不安な感情にかられていると、

「どうしたの？そんなに暗い表情をして？」

「え？」

ツナの前に髪色が暗めの茶髪で、ロングヘアの女性が立っていた。

「急にごめんなさい。何か暗い表情をしてるあなたが目が止まったの。隣いいかしら？」

「ど、どうぞ…」

ツナは急に現れた女性に戸惑いつつも、隣に座ることを了承した。

「それで？何に悩んだの？」

「悩んでたって…いうか…その…」

ツナは会って間もない女性に、自分の抱えている悩みを話すのを躊躇ってしまった。

そんなツナの心情を悟ったのか、女性がニコニコしながら口を開いた。

「もしかして恋の悩みかしら？」

「え!?!/!/いや:!!/!/」

「アハハ!その様子だと凶星のようね。」

「い、いや…!!/!/」

「照れなくていいのよ。話してみて、相談にのってあげるわ。」

「え、えっと…!!/!/」

ツナは自分の悩みについて話そうかまだ悩んでいたが、自分が恋に悩んでいることがバレってしまったので、女性に全てを話した。

「へー。前に好きだった人と似てて、その子のことを好きになったん

だ。」

「はい。でもその子は前に好きだった子とは違う部分もあって。でもそこがまた魅力的というか…!!／／／」

「そうなの。」

女性はツナの話の話を聞くと、今度は空を見上げて語り出す。

「懐かしいわね。私も恋してたわ。」

「そうなんですか?」

「ええ。こう見えても私、昔は仲間と組んで音楽活動してたの。」

「へーそうだったんですか。じゃあその時に応援してくれたファンの人に恋したとか?」

「ううん。恋したのは音楽活動を解散した後で、その人は私たちが音楽活動してたことは知らなかったの。たまたま町で出会って、そこからその人に恋したの。」

「その人はどうなったんですか?」

「そうねえ。その人はとっても凄いモテてたの。私と一緒にしてた音楽活動のメンバー全員がその人のこと好きになったの。」

「す、凄いですね…」

「それだけじゃないわ。アイドルの人がその人のことを好きになったの。」

「ア、アイドルが!?!」

ツナはまさか自分と同じのような人間いたことが知って驚きの声を上げてしまっていた。

「最終的には私のことが好きだって言ってくれたの。その時は嬉しかったわ。今はその人と結婚してるの。」

「ロマンティックですね。おめでとうございます。」

「ありがとうございます。」

この後はしばらく女性話していると、ツナは両手にジュースを持っている穂乃果を視界に捉えた。

「あ、すみません。今日ちょっと友達と…え」

ツナが隣に座っている女性のほうを向いたが、そこには女性の姿はなかった。ツナは慌てて辺りを見回すが、どこにも女性の姿はな

かった。

「ごめーん。ツナ君、遅く…ツナ君？どうしたの？」

「いや…さつき隣に女性が座って、話してたんだけど…いつの間にかいなくなってる…」

「私、遠くからツナ君の姿が見えてたけど、隣には誰もいなかったよ。」
（え…まさかさつきの女性は幻覚…？でもそんな感じはしなかったけど…）

ツナはさつきの女性が幻覚ではないのかと思ったが、どうしてそう思うことはできなかった。

（それにあの女性、初めて会った気がしなかったな…一体何だったんだろう…）

色々と疑問は残ったが、二人はこのまま広場を後にしたのであった。

「やっぱり今も昔も変わらないね。」

さつきの女性が、二人が広場から出ていく姿を見て呟いていた。

「Ti amo t suna. (愛してるよツナ君)」

#標的（ターゲット） 295 「帰ってきた」

謎の女性のことは何もわからないまま、ツナは穂乃果とのデートを続行していく。昼食を食べ終えると、ボウリングやゲームセンター行ったりした。

「久しぶりにきたけど、あれからスクールアイドルのグッズもたくさん増えたなー。」

現在、二人はスクールアイドルショップに来ていた。

穂乃果は久しぶり来たのでスクールアイドルショップにあるグッズを色々見ていた。

「俺もここに来たのはG^{ゴールデンウィーク}Wの時に来た以来かな。ツバサさんに会ったのもこのスクールアイドルショップだったよ。まさかあの時はツバサさんの正体がアイドルだとは思ってもみなかったけど。」

「ここでツバサちゃんとお会ったんだツナ君。初めて知ったよ。」

ツナはスクールアイドルグッズを見ながら、この場所でツバサと出会った時のことを思い出していた。

「穂乃果ちゃんはスクールアイドル^{ミューズ}を止めたけど、今どんなスクールアイドルが人気なのかって

知ってるの？」

「アイドル研究部にもスクールアイドルの雑誌があるし、雪穂もスクールアイドルをしてるから家にスクールアイドルの雑誌は持ってて、それをよく読んでるから今どんなスクールアイドルがいるかは知ってるよ。」

「そっか。アイドル研究部には雑誌とかポスターあったもんね。」

「そういうツナ君はどうなの？」

「え？」

「ことりちゃんが言ってたよ。ツナ君がスクールアイドルについて勉強しようと思ってるって言ってたって。」

「え!?!いや!まあ少しわかるなつてぐらいかな!」

ツナはまさかそのことについて、聞かれるとは思ってもみなかった為、挙動不審になってしまっていた。本当は想い人のグッズが欲しいが為についた嘘だったのであるが。

「穂乃果ちゃんはスクールアイドルミューズを続けたい気持ちとか今もあつたりするの?」

「全くないと言ったら嘘になるかな。で、sを自分たちだけの思い出にしたいっていう気持ちだったし。」

「そっか。」

「解散したおかげっていう言い方はアレなんだけど、それでもツナ君に会えてよかったかな。」

「え!?!俺!?!」

「うん!ツナ君にいますとすつこい楽しいもん!」

そう言うのと穂乃果は、急に顔を赤らめ、体をモジモジし始める。

「それに:!!//」

「それに?」

「ツナ君と一緒にいると特別な感情が芽生えるっていか:!!//その:!!//なんか胸がドキドキするとか:!!//」

「え:!!//そ、それって:!!//」

ツナは穂乃果の発言の意味について聞き返そうとするが、
ピリリリリリ!

タイミング悪く、ツナのスマホに電話がかかってきしまった。

「で、出てもいいよ!://」

「え!?!//う、うん!://」

ツナはそう言われて、穂乃果のさっきの発言が気になりつつもポケットから携帯を取り出して電話に出た。

「もしもし母さん?どうしたの?」

どうやらツナに電話をかけてきたのは母親の奈々であった。ツナは奈々に何の用でかけてきたのかと尋ねると、

「えー!?!」

ツナは驚きの声を上げてしまう。急にツナが驚きの声を

上げた為、穂乃果も体をビクツとさせていた。

「どうしたのツナ君？急に大きな声上げてたけど？」

「母さんからの電話があったんだけど…今、父さんが家に帰って来たって連絡があつて…」

「ツナ君のお父さんが？確かボンゴレファミリーのナンバー2だったよね。」

「う、うん…」

「私、会ってみたいなー。」

「ええ!？」

ツナは穂乃果が自分の父親である家光に言ったことに驚いた。中学時代に家光が家族の為に戦ってきたことを呪解したりボーン（本人は今だにアレがりボーンだということには気づいていない）から聞いてはいるものの、それでもツナにとっては家光はダメ親父という認識しかなかった。

「そうは言っても父さん…帰っても疲れて基本帰っても寝てるだけだし…」

ツナは穂乃果に家光ちちおやのだからしないところを見られるのは嫌なので、とっさに嘘をついしまった。

「そっか…会って見たかったな…」

「え…いや…」

ツナは穂乃果の残念そうな顔を見て、戸惑ってしまった。

ほのか
想い人が会いたいということ、この後、家光に会いに行くことになったのであった。

#標的 (ターゲット) 296 「家光」

穂乃果の要望で、家光に会う為にツナの家の前に来ていた。

「あ、穂乃果ちゃん。今さらだけど母さんは俺がマフィアの十代目だってことも、父さんがボンゴレファミリーのナンバー2だっていうことも知らないから。母さんは父さんの仕事は海外で石油を掘ってる男だと思ってるから。だからマフィアのこととは母さんの前で秘密ね。」

「うん、わかったよ!」

奈々の前にマフィアのこととは秘密だということを伝えると、二人は家に入っていく。

「ただいまー。」

「お邪魔しまーす。」

「おお、帰ったかツナ。」

家に入ると、オレンジ色のつなぎを着た家光が出迎えた。ツナは家光が出迎えたのは予想外ではあったが、それでも家でいびきをかいて寝ているよりはマシだったので、内心ホツとしていた。

「お?君は...?」

「は、初めまして!高坂穂乃果です!いつもツナ君にはお世話になってます!」

穂乃果が自己紹介すると、家光は顔をニヤニヤし始めた。

「何だツナ。俺のいねえ間にこんな可愛い彼女を作つて。しかも学校サボってデートしてるとは。」

「デートじゃないから!!//それに俺も穂乃果ちゃんもテストが終わって、今日は休みだから!!//」

「!!//」

ツナは家光の言葉に顔を真っ赤にしながら反論し、穂乃果は顔を真っ赤にしたまま黙ってしまっていた。

「まさか帰って来て早々、こんなめでてえことになるとはな。よーし!酒だ!一緒に飲むぞ!」

「穂乃果ちゃんに飲ませようとすんな！」

家光はツナの言葉を聞かずに、そのまま台所へと行ってしまった。

「ゴメンね穂乃果ちゃん…こんな父親で…」

「う、ううん…大丈夫…」

穂乃果は前にツナから家光のことちちおやは聞いてはいたものの、思っていたより型破りだった為、戸惑ってしまっていた。

二人が台所に行くときには大量の皿が置いてあった。おそらく家光が食べたものであろう。

「ていうか母さんは？」

「母さんなら買い出しに行っただぞ。俺が冷蔵庫の食べ物、全部食ったからな。」

「相変わらず食欲旺盛だね父さん…」

ツナは花陽やバジルもよく食べるが、自分の知り合いの中で一番食べるのは自分の父親だということを悟った。

「穂乃果ちゃんでもよかったかな？ウチのバジルから君のことは聞いているよ。」

「わ、私のほうもツナ君から聞いてます！えつと！世界中の地中に埋まったマフィアの交通整理してるって！」

（世界中の地中に埋まったマフィアを交通整理するって何!?!）

穂乃果は緊張したせいか、マフィアの仕事とずっと前に言った交通整理の話と、さっきツナが言った石油を掘っている仕事がちやちやになってしまい、支離滅裂な発言をしてしまった。ツナはその発言にめちゃくちゃ驚いてしまっていた。

「ククッ！面白ことを言うね穂乃果ちゃんは。」

家光は穂乃果のめちゃくちゃな発言がツボにハマったのか、爆笑していた。

「あー、笑った笑った。よし決めた！穂乃果ちゃんならツナを任せられる！だからツナと結婚してくれ！」

「け、結婚!?!?!」

「父さん!!?!?!いきなり変なこと言うなって!!?!?!」

「照れんなってツナ。母さんだって穂乃果ちゃんならいいって認めて

くれるはずだぞ。それに穂乃果ちゃんは若い頃の奈々にそっくりだ。
お前らなら幸せな家庭を築けるはずだ。」

「人の話を聞け!!／＼／＼」

ツナは自分の話を聞かずにどんどん話を進めていく家光に顔を
真っ赤にしながらか叫んだ。

するとここで…

「ただいまー。」

タイミングがいいのか悪いのか、両手に買い物袋を持っている奈々
が帰って来た。

しかし、

「あらー…またツナのお嫁さん候補がー!」

いつもの悪いクセが出てしまい、余計事態は悪化してしまう。

この後、穂乃果との結婚の話や家光が奈々が出会った頃の話、結婚
式、新婚旅行など話を永遠と聞かせたのであった。

#標的 (ターゲット) 297 「恒例行事」

家光と奈々から色々話を聞かされた後、穂乃果はツナの部屋に移動した。

「ホノ太郎く？ 気持ちいいく？」

「ガウ〜♪」

現在ナッツは仰向なって、穂乃果にお腹をさすられて幸せな表情になっていた。

(いいなーナッツ、穂乃果ちゃんに…って何考えてるんだ俺!?)

ツナは穂乃果に撫でられるナッツを見て羨ましいと思ってしまうが、途中で自分で思ったことのやばさに気づいてしまった。

「あ、そうだ！穂乃果ちゃんこの前、新しいゲームを買ったんだけど一緒にやらない？」

「やるやるー！」

穂乃果は新しいゲームと聞いて、興味を示した。

しばらくゲームを楽しんでいると、

「何だ？穂乃果来てたのか。」

「あ、リボン君。お邪魔してるよー。」

リボンがツナの部屋にて帰って来た。

リボンは帰って来くなり、表情をニヤニヤし始める。

「成る程な。丁度、家光が帰ってきたから父親に挨拶しにきたってところか。いい心掛けだな。」

「リボン!! // // 変なこと言うなよ!! // //」

「ち、違うよ!! // // ツナ君のお父さんに会ってみたって思ったのは本んだけど、結婚の挨拶しに来たわけじゃないから!! // //」

二人はリボンの言葉に顔を真っ赤にしながら否定した。

しかし、

「俺は確かに父親とは言ったが、義理の父親だとは言ってねえぞ。それに挨拶って言っても、俺は結婚の挨拶とは言った覚えはねえぞ。お

「前ら何を勘違いしてんだ？」

「!!／／／」

二人はリボーンの完全なる論破に、反論することができず、恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしたまま黙ってしまった。一方でリボーンは二人が勘違いしたまま反論するのがわかっていたので、勝ち誇った表情かおをしていた。

「それはそうと穂乃果聞きてえことがあるんだがいいか？」

「うん。何？リボーン君？」

「明日は音ノ木坂学院の日程はどうなってるんだ？」

「どうなってるって…確か明日は保護者会で私せいとたちは休みだったはずだけど…それがどうかしたのリボーン君？」

「じゃあ問題ねえな。並盛ツナのがっこう高校も休みだしな。」

「何だよ。もったいぶらずに言えよりボーン。」

ツナは本当のことをいつまでも言わないリボーンに痺れを切らしていた。

「明日は7月7日、七夕だぞ。」

「七夕？そういえばそうだけど…あ！そうだったー！」

「ツナ君？どうしたの？」

ツナは七夕と聞いて、叫んでしまった。穂乃果は七夕と聞いて急にいきなり叫んだ。

「もうあれから1年経ったのか…」

「そうだぞ。明日は七夕。そして七夕といえば毎年恒例の行事であるボンゴレ式七夕大会の日だぞ。」

「ボンゴレ式七夕大会？」

穂乃果はボンゴレ式七夕大会という単語を聞いて、首を傾げながら疑問符を浮かべた。

「ボンゴレ式七夕大会はおのおのが出し物をして、審査員にジャッジしてもらい点数を競い合う大会だぞ。そして1位の奴は短冊に書いた願いが叶うんだぞ。」

「願いが叶うの!？」

穂乃果はボンゴレ式七夕大会の詳細をリボーンから聞くと驚きの

声を上げた。

「ああ。ボンゴレの強大な力によって願いの達成率は100%だ。過去に1位になった奴は国王になったり、人類初の月面着陸に成功してるんだぞ。」

「すっごーい！じゃあ私も参加できるの!?!」

「もちろんだ。それにお前だけじゃねえ、μ sにA—R I S E、雪穂や亜里沙たちにもボンゴレ式七夕大会に参加してもらおうつもりだぞ。だから出し物を何にするか考えとけよ。」

「うん！」

穂乃果はボンゴレ式七夕大会の詳細聞いてやる気が出たのか、何の出し物をしようかと考え始めた。

一方でツナは、

(ど、どうしよう:!!//こ、ここはやっぱり穂乃果ちゃんと付き合えますようにって書いたほうがいいのかな:!?//)

短冊に書く願い事のことを考え、さらにその願いが叶った時のことを考えてしまい、勝手に興奮してしまっていたのであった。

波乱の予感のボンゴレ式七夕大会。果たして!?

#標的（ターゲット） 298 「穂乃果が見たもの」

リボーンからボンゴレ式七夕大会のことについて聞かされた二人。
さらにリボーンは続けていく。

「それと穂乃果。今日、泊まってけ。」

「ええ!？」

「いきなりかよ!」

リボーンの突然の提案に穂乃果は驚き、ツナはツツコミをいれた。
「この家に遊びに来たら、泊まるのが恒例だろ。」

「お前が勝手に泊まらないかって?言ってるだけだろ!それに花陽ちゃんと凜ちゃんが遊びに来た時は言わなかっただろ!」

「それでどうだ穂乃果?家光とママンは泊まってもいいって言ってるぞ。」

「人の話を聞け!」

ツナは自分の言葉を無視して、今日泊まるかどうか尋ねているリボーンにツツコミをいれた。

「わ、私はいいいけど:!!//」

「ええ!?!//」

ツナはまさか泊まることをOKしてくれるとは思っておらず、顔を赤くしながら驚いてしまった。

「む、無理しなくていいんだよ!!//」

「ううん:!!//明日、学校もないからいいかなって思ってた:!!//
//それに前から泊まってみたって思ってたから:!!//」

「え:!!?!//」

「決まりだな。ちゃんと家には連絡しとけよ。」

「う、うん！」

穂乃果はリボンに言われると、さっそくスマホを取り出すとさっそく母親に電話をかける。

「あ、もしもし？お母さん？」

『どうしたの穂乃果？』

「じ、実は今ツナ君の家にお父さんに帰って来てるって聞いたから、今ツナ君の家にいるんだけど…それでリボン君にツナ君に家に泊まらないかって言われてるんだけど…!!／＼／＼」

『やったじゃない穂乃果！せつかくだし未来のお義父さんにちやんとアピールしてくるのよ！息子さんをお嫁さんにくださいって！』

「お母さん!!／＼／＼」

『お父さんには私から言っておくから。孫の顔、楽しみにしてるわよー。』

そう言うのと穂乃果の母は一方的に電話を切ってしまった。

「まあ…電話の会話と穂乃果ちゃんのお母さん性格から考えたら返答はわかるけど、一応聞くね…どうだった？」

「うん…ツナ君の予想通り大丈夫だったよ…」

「そっか…」

ツナは穂乃果の母の性格から考えて、穂乃果が自分の家に泊まることを許可してくれるのは、火を見るより明らかであったが、念の為尋ねた。そして案の定OKしてくれたことがわかると、ツナは今頃穂むら^えらにて上機嫌になっているであろう穂乃果の母の姿を容易に想像することができた。

この後、時間は過ぎていき夕食の時間となった。二人が台所に行くとすでに家光とリボンが椅子に座っており、奈々は料理を作っていた。そして机にはこれでもかというほどの料理が並べられていた。

「わあっ！…こんなにたくさん！」

「遠慮せずいっぱい食べてね、穂乃果ちゃん。」

奈々がたくさんの料理に目を輝かせている穂乃果にそう言うと、二人は椅子に座って晩御飯を食べ始める。

「今日は本当にめでたえ日だなー。日本に帰って来て奈々の手作り料

理に食べられた上に、ツナに彼女が家ウチに泊まってくれるなんてなー。」
「彼女じゃないって言ってるだろ父さん!!／／／」

「穂乃果の両親もツナのことを認めてるし、1回、顔を合わせるのもいいかもしれねえな。」

「そうなのか?こりや挨拶しに行かないといけねえな。」

「それもそうねえ。いつも穂乃果ちゃんの家ウチの和菓子を頂いてるし…」

「リボンも余計なこと言うな!それに父さんも母さんも信じなくていいから!」

ツナはリボンと両親の言葉にツツコミを次々と入れていく。一方で穂乃果は顔を真っ赤にしたまま、顔を俯かせていた。

夕食を食べ終えるとツナは風呂に入りに行き、穂乃果は奈々が食べ終わった皿の片付ようとしたのを見て、行動に出る。

「あのお皿洗うの手伝います。」

「え?いいのよ。穂乃果ちゃんはお客さんなんだから、のんびりしてて。」

「でも…泊めて頂いてるわけですから…」

「いいじゃねえかママン。将来の為の花嫁修行だと思えば。」

「もうリボン君!!／／／」

穂乃果は花嫁修業という単語を聞いて、顔を赤くしてしまっていた。

「まあこんなこともあるだろうと思って、こんなものを用意しておいたぞ。」

「あら!」

「こ、これって…!」

そう言うとりボンが机の上にあるもの取り出すと、それを見て奈々と穂乃果は驚いてしまった。

果たしてリボン取り出したものとは!?

#標的 (ターゲット) 299 「メイド服の力」

「あー、さっぱりした。」

ツナは風呂から上がって服を着ると、タオルを首に巻いたまま台所へと向かって行った。

「母さん水頂戴…ほほほ穂乃果ちゃん!?!?!」

ツナは台所に着いた途端、顔を真っ赤にして動揺してしまった。
そこには、

「ど、どうかなツナ君…!?!?!」に、似合ってるかな…!?!?!」

メイド服姿で奈々の皿洗いを手伝っている穂乃果がいた。穂乃果はツナが台所に戻ってきたので、一旦作業を中断するとツナのほうを向いて、メイド服このいしやうが似合っているかどうか尋ねた。

「ど、どうかなって!?!?!/そ、それよりも何で穂乃果ちゃんがメイド服してるの!?!?!」

ツナは穂乃果に似合っているかどうか聞かれたものの、なぜ穂乃果がメイド服このやうなかつこうをして

いるのかわからず混乱してしまっていた。

「リボーン君が用意してくれたのよ。花嫁修業だからって。」

「リボーン！何やってるんだよ！穂乃果ちゃんにメイド服こんなふく着せて！」
「本当は嬉しいクセにな。」

「う、うるさい!!/」

ツナはリボーンの言葉に顔を真っ赤にしながら反論した。しかし想い人ほのかのメイド服姿を見て何も

思わないはずもなかった。

「いやー…若い頃デパートの喫茶店で働いてた時に奈々に思い出すなー。今の穂乃果ちゃんは若い頃あのころの奈々にそっくりだ。」

「もうっ！あなっただてば！」

家光は奈々がデパートの喫茶店で働いていた時の姿を思い出しながら、穂乃果を見ていた。一方で奈々は家光の発言に頬をほんのりと赤くしながら照れていた。

「それでどうなんだツナ？」

「ど、どうつて？何がだよ？」

「さつき穂乃果が聞いてきただろうが。メイド服このかっこうが似合ってるかどうかっつてな。男ならちゃんと答えてやれ。」

「え…そ、そうだね…!!／／／」

ツナはリボーンにそう言われると、再びメイド服姿の穂乃果のほうを見る。穂乃果は再び想い人ツナに自分の姿を見られて顔を赤くする。

「えっと…!!／／／似合ってるよ…!!／／／それにすつごくかかか…可愛いよ…!!／／／」

「あ、ありがとう…!!／／／」

ツナは勇気を振り絞って似合っているということを伝えるだけではなく、可愛いということも伝えた。穂乃果はツナの言葉に顔を真っ赤にさせながらお礼を言った。この光景を家光と奈々は温かい目で見守っていた。

「そこは俺と付き合ってください、もしくは結婚してくださいって言うところだろツナ。」

「似合ってるかどうか聞いてきたのに、その発言はおかしいだろ!!／／／それにそんなこといきなり言えるわけないだろ!!／／／」

ツナはリボーンの滅茶苦茶な発言に顔を真っ赤にしながら叫んだ。もちろん穂乃果もリボーンの発言に顔を真っ赤にしてしまっていた。

「それよりツナ。お前水が飲みたかつたんじゃねえのか？」

「そ、そうだった!」

ツナは家光の言葉で自分が何をしようとしたか思い出した。穂乃果のメイド服姿があまりにも可愛いすぎたので

すつかり忘れていたのである。

「あ、じゃあ私が用意します!」

「い、いいんだよ穂乃果ちゃん!じ、自分でやるから!気を遣わなくて大丈夫だよ!」

ツナは穂乃果が気を遣って行動しようとしてくれたので、慌てて自分でやると言った。しかし穂乃果はツナの制止も聞かずにコップに水をいれた。

そして水の入ったコップを持ってツナは前まで行くと、

「み、水をご用意しました：！！／／／／ごごごごご……ご主人様……！！／／／／」

穂乃果はメイドになりきり、顔を赤くしながらツナのことをご主人様と呼びながら水の入ったコップを渡した。

「ご、ご主人様!?!?!」

ツナは想い人^{ほのか}ご主人様と呼ばれ顔を真っ赤にしてしまった。メイド服の穂乃果がこんな近くで自分のことを、ご主人様と呼んでくれたのが嬉しかったのかそのまま昇天してしまったのであった。

メイド服の力、恐るべし！

#標的（ターゲット） 300 「泥酔穂乃果」

「これでよしと…」

穂乃果のメイド服姿に昇天したツナであつたが、なんとか意識を取り戻すと、自分の部屋に戻つて部屋を綺麗にすると、床に敷布団を引いた。今は家光が帰つて来ているので、1階したの部屋を穂乃果が使うことができない。そんなわけで穂乃果はツナの部屋で一緒に寝ることになったのである。

「ま、まさか：俺の部屋で穂乃果ちゃんが寝ることになるなんてな…」

ツナは下に引いた敷き布団を見つめながら呟いた。そしてマフィアランドに行つた時にホテルで一緒に寝た時のことが脳裏に浮かんだ。

そんなことを考えていると部屋の扉が開くと、寝巻姿の穂乃果がやってきた。

「ツナ君…」

「穂乃果ちゃんごめんねー、俺の部屋の寝ることになつて…穂乃果ちゃん？」

ツナは穂乃果の声がしたので、後ろを振り向いた。しかし穂乃果の頬が妙に赤くなつており、目が据わっていることに気づき、様子がおかしいことに気づいた。

「ど、どうしたの…？穂乃果ちゃん…？様子がおかしいけど…？」

「別に…？普通だよ。」

「いや…どう見ても普通じゃ…」

ツナは明らかにおかしいにも関わらず、妖艶な笑みを浮かべる穂乃果を見て呟いた。

「穂乃果に何があつたか教えてやろうか。」

「リボーン！何があつたんだよ！」

「穂乃果がそうなつた原因がこれだぞ。」

リボーンはオレンジ色の液体の入ったコップを見せた。

「これってオレンジジュース？」

「普通に見たらただのオレンジジュースかもしれないねえが、これは果実酒だぞ。」

「果実酒!?!ということはお酒なの!?!」

「ああ。中元で貰ったのを家光が穂乃果がにあげたんだが、それが酒だってことに気づいてなくてな。それでこうなっちまったわけだ。」
(父さん何やってんだよ! 帰るたびに災いを撒き散らしやがって!)

ツナが穂乃果がこうなってしまった原因が家光だとわかつて怒りを露にした。

「というわけだ。後がお前がなんとかしろよ。」

「おいちよつと待て「捕まえたー!」ほ、穂乃果ちゃん!?!」

ツナはリボーンが今の状態の穂乃果をなんとかしようせず、そのまま部屋を去ろうとするの見て慌てて制止しようよとするが、後ろから穂乃果に抱きつかれ身動きが取れなくなってしまった。ツナが身動きが取れないうちに、リボーンはそのまま1階へと降りて行ってしまった。

「ほほほ穂乃果ちゃん!! // // あ、あの!! // // 当たってる!! // // 当たってるから!! // //」

「当たってる? 何が当たってるの? ツナ君? ちゃんと行ってくれないとわかんないよ。」

「い、いや!! // // だから:!! // //」

ツナはこの問いに対して本当のことが言えず、顔を真っ赤にしながら戸惑ってしまっていた。

ツナがどう答えようかと悩んでいると、穂乃果が背中から離れると、

「なんか暑いね。脱いじやおつかなく。」

「え!?! // //」

寝巻の胸元をパタパタさせながら言った。穂乃果の発言と、胸元をパタパタさせた時に見えてしまったオレンジ色の下着がチラツと見えてしまい、慌てて視線を天井に向けた。

「あゝ！ツナ君もしかして見た〜？」

「みみみみみ見てないよ!!／／／」

「見たんだあ！ツナ君のエッチ〜！」

穂乃果は泥酔しているのにも関わらず、ツナが自分の下着を見たことということを見抜いていた。

「そんなエッチなツナ君にはお・し・お・き？えいつ！」

「ちよ!?／／／」

穂乃果はツナそのまま敷き布団に押し倒すと、仰向けになった状態のツナの上に股がった。そしてそのまま寝巻を肩までずらして、肌を露出した。

「ちよつと穂乃果ちゃん!?／／／な、何してるの!?／／／」

「何って？こうしたほうがツナ君が喜ぶと思っただから。」

「いや!!／／／ち、違うから!!／／／」

「見たくないの？私の身体？」

「そ、それは…!!／／／」

「やっぱり見たいんだあゝ！ツナ君ってやっぱりエッチなんだね〜！」

（悔しいけど否定できない…!!／／／）

ツナは穂乃果の言葉に反論することができず、何も言えなくなってしまう。やはりツナも男なのである。

「じゃあさつき言った通り、私がツナ君におしおきしちゃうよ〜。」

そう言うのと穂乃果は両手でツナの頬を挟むと目を閉じ、自分の唇を近づけていく。

（こ、これってキキキキキキス!?／／／どどどどうすれば…!!／／／）

突然の出来事^{キス}にツナがパニックになっている

間にもゆっくりと穂乃果の唇が近づいていく。

そして穂乃果の唇がツナの唇に後少しで近づく思ったその時、

「あれ？ツナ君？」

「ほ、穂乃果ちゃん…？」

ここで穂乃果の酔いが覚めて、正気に戻ってしまった。

しかし、

「ああああ!!／＼／＼」

今いる状況、自分の格好に気づき、さらに酔っていた時に自分がツナ何をしたかということ思い出して顔を真っ赤になり、そのまま絶してしまったのであった。

#標的（ターゲット） 301 「優勝するのは誰だ」

時は穂乃果の泥酔騒動も終わって翌日。穂乃果の酔いが覚めてからも、凄まじい気まずい雰囲気になっていたが、なんとか普通に話すことに成功した。

現在、二人はバイクに乗って音ノ木坂にある公民館に向かっていく。今年のボンゴレ式七夕大会はそこで開催されるのである。

「はい。着いたよ穂乃果ちゃん。」

「ありがとうツナ君。」

駐車場にバイクを置くと、二人は公民館の中に入った。

すでに自分たち以外のメンバーはすでに自分たち以外のメンバーはすでに公民館の一室にて、何の出し物にするか話しあっていた。A—RISEの3人だけは姿は見えなかった。

「お、来たなツナ、穂乃果。」

「あ！ツナと穂乃果ちゃんだにや！」

「十代目！お待ちしておりました！」

リボーン、凜、獄寺が二人が来たことに気づいて、全員が一斉に二人のほうを見た。

二人が来たのを見計らって、リボーンがボンゴレ式七夕大会について改めて説明し始めた。

「んじやもう知っているとは思いますが、ボンゴレ式七夕大会について改めて説明するぞ。ボンゴレ式七夕大会は七夕にちなんだ出し物をして審査員に評価してもらおう。そして1位になった奴が短冊に書いた願いが叶うぞ。」

「この行事のルールはわかったのですが、何も公民館を借りてまでやらなくてもよかったですのでは？」

「いい質問だぞ海未。普通にこの大会をやるならこの公民館を借りる必要はねえ。だがお前らの出し物を審査するのはお前らじゃねえからだ。」

「では一体誰が私たちの出し物を審査するのですか？」

「音ノ木坂にいるお年寄100人だぞ。」

「「「お年寄り100人!」「」」」

ボンゴレ式七夕大会が初めて参加したメンバーは、審査員がお年寄りだと知って驚きの声を上げた。

「な、何でお年寄りなの!？」

「その答えは簡単だぞ雪穂。マフィアにとってお年寄りとの地域交流は不可欠だからな。どの国でも地域における最も重要な長であるスポンサーだからな。彼らの信頼なくしては転落人生だからな。」

「本当に…?？」

雪穂はお年寄りの存在がマフィアにまで重要だとはとても信じられない為、ジト目になってしまう。

そんなことも気にせずリボーンは懐から人数分の短冊を取り出して、全員に見せた。

「短冊は俺が用意しておいたぞ。自分の願いはこれに書いて、俺に渡せ。どんなことでもいいぞ、ボンゴレファミリーに入りたいとか1流の殺し屋ヒットマンになりてえだとかでも全然いいぞ。」

「さりげなくマフィアに勧誘しようとするな!」

ツナはリボーンが短冊の願いにマフィアのことを書かせようしたことについてツツコミをいれた。

「この七夕大会優勝したら本当に願いが叶うんでしょうね?」

「ああ。ボンゴレの強大な力によって願いの達成率は100%だ。過去に1位になった奴は国王になったり、人類初の月面着陸に成功してるんだぞ。」

「とても信じられないんだけど…」

「それにしても真姫。お前がそんなにこの大会に執着してるとはな。そんなに叶えたい願いがあんのか?」

「そ、そんなじゃないわよ!!／／／」

「真姫さんもしかして…」

「あ、亜里沙!!／／／それ以上言ったら怒るわよ!!／／／」

「ご、ごめんなさい!!」

亜里沙が真姫がどんな願いを短冊に書こうとしているのかがなんとなく予想がついてしまった。

「どうせつまんねえ願いだろ。」

「あなたの願いよりはマシだと思うけど？どうせUMAに

会いたいだとか、そんなつまんない願いなんですよ？」

「んだと？確かにUMAにも会ってえけどな、俺にはもっと叶えねえ願があるんだよ。」

「へー。知らなかったわ。じゃあどんな願いなのかしら？」

「決まってるんだろ。俺の願いは十代目の…つと危ねえ！秘密をばらすところだったぜ。」

（絶対に右腕だー！やっぱり獄寺君の願いは中一あの時から変わってねえー！）

ツナは相変わらず獄寺の願いが変わっていないことに、

驚きを隠せていなかった。

「まあどんな願いにしようと思手だが、そう簡単に優勝できると思わねえことだな。まだ来てねえがにこ、絵里、希、そしてA—R—I—S—Eも参加するからな。」

リボンがそう言うと、ツナのことを好きな6人に緊張が走った。

はたしてボンゴレ式七夕大会で優勝して、願いを叶えるのは誰だ!?

#標的（ターゲット） 302 「海未舞う」

午後2時30分。ボンゴレ式七夕大会の開始まで30分となった。ここ、絵里、希そしてツバサ、あんじゅ、英玲奈もライブしごとを終えて公民館へとやってきた。

「ツナ（君）！」

「の、希さん!!／／ツバサさん!!／／／」

やって来て早々、ツバサはツナの右腕に絡み付き、希はツナの左腕に絡み付いた。両腕に可愛い女の子二人が密着されて顔を赤くしてしまう。

「お。ツナモテモテだな。」

「てめえら！十代目から離れやがれ！」

山本と獄寺とがいつものような反応を見せた。

しかしここでツバサは一切、獄寺に恐れることもなく宣言する。

「十代目ってことはあなたもそうなのかしら？じゃあ自己紹介しておかなきゃね。私は綺羅ツバサ。いずれボンゴレファミリーのボスになるツナ君の妻になる女よ。」

「ツバサさん!?!／／／」

「な、何言つてやがる！ふざけんな！」

「あら。私は本気よ。」

「なっ!?!」

獄寺はツバサの目を見て、ツナと結婚するということが嘘でないということがわかり、驚きのあまりその場にて固まってしまっていた。そのツバサの発言に対して希も負けじと対抗してくる。

「えー。ダーリンははウチと結婚するんよね?」

「ダ、ダーリン!?!／／／」

「もうあなたってば。私というものがありませんから浮気?」

「あ、あなた!?／＼／＼」

ツナは希にダーリン、ツバサにあなたと呼ばれて、もう何が何だかわからなくなってしまうていた。

「いい、いい加減にしてください!!／＼／＼とどうか早く離れてください!!／＼／＼」

「ツナ君が困ってるよ!!／＼／＼」

「そうだよ!!／＼／＼」

海未、ことり、花陽が顔を真っ赤にしながら言うも二人とも離れるような様子はなかった。その後、他のメンバーも無理やり引き剥がそうとし始め、ツナは美少女たちに囲まれるという男子なら誰もが憧れる状態になっていた。

「やっぱりあいつら本当に仲いいよな。」

「この野球馬鹿!あれのどこが仲良く見えるんだ!早く十代目を助けに行くぞ!」

「いつもこんな感じなのか…?」

「ええまあ…」

「大変だな…」

「もう慣れました…」

英玲奈は雪穂にこういう風になツナを取り合っているのか尋ねると同時に、雪穂と亜里沙も。

「ツバサどうなるのかしら…?」

「お姉ちゃん…」

あんじゅはリーダー^{ツバサ}、亜里沙は姉^{えり}の心配していた。

ツナの争奪戦も終わって、いよいよボンゴレ式七夕大会の本番となった。会場にはパイプ椅子並べられており、そこには100人がいた。

「本日はお忙しい中お集まりしていただきありがとうございます。お手元にある札にて判定をお願いします。」

リボンがステージ上にある丁寧語で司会を進める。

お年寄りたちは表に○の書かれたプラカードを見ながら説明を聞

いていた。

「というわけでさっそくいきましょう！」

リボンがそう言うのとステージの袖から、青色の星マークがたくさん入った着物に着替えた海未が顔を赤くしながら出てきた。

「は、初めまして！園田海未です！よろしくお願ひします！」

「最初の出番は園田海未さん。得意の日本舞踊を見せてくれるようですよ。」

リボンがそう言うのとステージ上に置かれたカセットプレイヤーの再生ボタンを押すと音楽が流れ、音楽にあわせて海未は踊っている。

「「「「おお〜！」」」」

海未の綺麗な舞いにお年寄りたちは感嘆の声を上げる。

どうやら海未の出し物は好評なようである。

「海未ちゃん綺麗！」

「海未ちゃんが日本舞踊を踊っていると、初めに見たよ。」

「日本舞踊はわかんねえけど、すげえな園田。」

「さすが海未ね。」

お年寄りだけでなく海未の舞いに、穂乃果、ツナ、山本、絵里も絶賛した。

そして海未の出し物が終わりを迎えると、さっそく審査が始まり、お年寄りたちがプラカードを一齐に上げていく。リボンがプラカードを上げたお年寄りの数を数えると、点数を発表する。

「それでは点数を発表します。ただいまの出し物の点数は…87点！」

点数が発表されると、海未に盛大な拍手が送られた。

リボンはステージ上に10から100まで書かれた黒板に海未の顔が描かれたシールを80点と90点の間に貼った。

こうして海未は好調な滑り出しを見せたのだった。

#標的(ターゲット) 303 「愛寵恋時雨(あいちよ
うこいしぐれ)」

海未は演技を終えるとステージの横へと戻っていった。

「お疲れ海未ちゃん。とっても綺麗だったよ。」

「あ、ありがとうございます…!!／／／」

海未は想い人に褒められてほんのりと顔を赤らめるが、以前のようにあまり動揺することはなかった。

だが

「ど、どうしたのみんな…?」

海未が想い人に褒められたことに嫉妬したのか、異様なプレッシャーを放ちながらジト目で海未のことを見ている穂乃果たちがわかっておらず、当の海未は視線を何で穂乃果たちがあんな目をして
いるのかわかっている為、わざと視線を反らしてあえて見ないように
していた。

「なんか園田みんなに注目されて人気者だな。さっきの踊り凄かった
もんな。」

「どう見てもそんな光景には見えないぞ…」

「山本さん相変わらずですね…」

「山本君天然なのね…」

相変わらずの山本の天然発言に雪穂と英玲奈は呆れてしまい、あ
んじゅは山本が天然であるということを理解した。

一騒動があったが次はツバサ、英玲奈、あんじゅの出番となった。
3人は出し物の準備の為、別室に移動した。再び3人が戻って来る
と、ツバサは黒の着物、英玲奈は紫色の着物、あんじゅはオレンジ色
の着物に着替えて戻ってきた。

「どうツナ?…この衣装、似合ってるかしら?」

「はい、とつても似合ってますよ。」

「フフツ。ありがとう。」

ツバサは自分の着物姿が似合っていると云われてはあつと明るい表情となった。しかしこのツナの発言にて、穂乃果たちは再びプレッシャーを放っていた。

「それよりもツバサさんたちも海未ちゃんと

同じで着物に着替えましたけど、何をするんですか?」

「それは秘密よ。見てのお楽しみ。じゃあ行きましょう、英玲奈、あんじゅ。」

「ああ。」

「ええ。」

そう言うと3人はお年寄りたちの前に移動した。さすがはアイドルということもあり、3人は大勢の人たちの前に出ても緊張している様子はなかった。

すると館内から音楽が流れ、天井から紙吹雪が舞い始め、この館内に流れた音楽を聞いてツナたちも驚きを隠せていなかった。

なぜなら…

「梅雨の時分。私の心を覆っていた雨雲を晴らしてくれた彼の言葉が数年経った今でも脳裏に浮かびます。それでは聞いてください。A—RISEで愛寵恋時雨。」

3人がこれから歌おうとしているのが演歌だったからである。リボンがイントロが流れている最中に、前振りと曲名を言うと、タイミング良くイントロが終わり3人が歌い始める。

「おお〜!」

「ええ歌声じゃ〜!」

「若いのまあ…」

お年寄りたちは3人の歌声に魅了されていた。もちろんお年寄りたちだけでなくツナたちも魅了されていた。

「さ、さすがA—RISE…」

「演歌まで歌えるなんて最高ですうう…」

特にアイドルオタクはA—RISEの歌声に感動しすぎて大量の

涙をボロボロと流していた。二人のあまりの涙の流しように、他のメンバーは若干、引いてしまっていた。

3人が歌え終わると、いよいよ審査が始まる。

「えー、A―RISEの出し物の点数は…92点!」

点数が発表されると、3人に盛大な拍手が送られた。

リボーンはステージ上に10から100まで書かれた黒板にA―RISEの3人の顔が描かれたシールを90点と100点の間に貼った。

演歌という意外な出し物を見せたA―RISE。他のメンバーは何を見せるのであろうか？

#標的（ターゲット） 304 「山本と凜の出し物」

A—RISEの出し物が終わって、ツバサさん、英玲奈さん、あんじゅさんの3人はステージの袖にいる俺たちのところへ戻ってきた。「どうだった？ 私たちの出し物？」

「はい。凄かったです。まさか演歌が歌えるなんてビックリしました。」

「アイドル界を生き抜く為に色々と試行錯誤してたの。まさかこんなところで役になるなんて思わなかったけどね。」

「アイドルのことをあまり知らない俺が、言うのもなんですけど、ライブでやってみたらどうですか？」

「そうね。でも今のお年寄りたちを全員を満足させることができなかったから、まだまだ腕を磨かなきゃね。」

俺としたことが簡単そうに言っちゃった：審査員のお年寄りたちを喜ばせることができて、全てのお客さんを喜ばせられるとは限らないの…

「すみません：アイドルのこと何もわかってないのに、言っちゃって…」

「いいのよ。あ！そうだわ！今度、私の家に来ない？ 私の歌をツナに評価して欲しいの！」

「ええ!！」

「「「「「な!」「」」」」」

ツバサさんの提案に俺だけじゃなくて、穂乃果ちゃんたちも驚きの声を上げた。

「無理ですよ！俺、音楽の知識とかありませんよ！」

「ツナが傍にいるだけでいいの。あなたが近くで見てるだけで上手くできそうなの。」

いやいや！アイドルの家に行くなんて無理だつて！世間にバレたら大変なことになるって！

とりあえず俺はツバサさんに、考えておきますと言つてなんとかその場は凌いだ。けど穂乃果ちゃんたちがもの凄い、怖い目で俺のことは見てきたんだけど…何でだろう…？

「え、えっと…次は誰だっけ？」

「次は俺と星空だぜ。」

山本がそう答えた。でも山本と凜ちゃん？俺は正直この二人が何で組んだのかわからず疑問符を浮かべた。

「俺たちの出し物が似てる部分があつてな。」

「それで二人で組むことにしたんだにや！」

俺の考えを察したのか、山本と凜ちゃんがコンビを組んだ経緯を話してくれた。一体どんな出し物なんだろう？

そんなことを言っていると、二人の順番が回ってきた。

「次は山本武さん、星空凜さんです。では、はりきってどうぞ！」

リボンがそう言うと、山本の手には刀と笹が握られていた。え？何で刀と笹？本当に何すんの山本？

すると山本は笹を凜ちゃんに渡した後、凜ちゃんから距離を取つて時雨金時を構えた。

「いつでもいいぜ星空！」

「よーしー！いっくにやー！」

凜ちゃんは山本に向かって笹をおもいつきり投げた。

超スピードで向かっていく笹を、臆することなく山本は時雨金時でまっ二つに斬った。この光景に俺と獄寺君も驚いてたけど、他のみんなとお年寄りたちは啞然としてしまった。まあ…そういう反応になるよね…

「えー。この二人の出し物は77本の笹を斬るといふ出し物です。」

リボンが何事もなかったようにそう言うと、二人は再び出し物を再開した。凜ちゃんは山本に向かって、次々と笹を投げていき、山本は飛んでくる笹を時雨金時で次々と斬っていった。お年寄りたちも最初は啞然としてたけど、もの凄い盛り上っていった。ていうかやっぱりあの二人、凄すぎるよ！

「え、えっと山本君も凄いいけど…星空さんってあんなに凄かったの…

？運動神経がいいのは知ってるけど…」

「いや…とあるお方の訓練を受けたら…殺し屋ヒットマンとしての才能が開花したんです…」

「そ、そうだったの…」

ツバサさんだも驚いてるけど、あんじゅさんも英玲奈さんも驚いてるよ！そりやそうだよね！ちよつと前までスクールアイドルとして戦ってたのに、*ム* *s*を止めてからちよつとしたら殺し屋ヒットマンとしての才能が開花したって聞いたら誰だって驚くよね！

「これが最後にやー！」

「おう！こいー！」

「よーしー！いっく…ハックツクション！」

凜ちゃんが笹を投げようとした時、くしゃみが出ちゃって、謝って笹を天井に投げてしまった。そして天井に設置されてた蛍光灯に笹が貫通して天井に刺さった!?

「おいおい星空。さすがにそっちに投げられたら、どうしようもないぜ。」

「ごめんじゃ。」

そこじゃない！そこじゃないから山本！笹が蛍光灯を貫通したことにツッコんで！凜ちゃんも舌をペロツと出して謝ってるけど、そんな軽いレベルのミスじゃないから！蛍光灯を破壊してるから！

凄い出し物だったけど、最後に凜ちゃんが蛍光灯を破壊しちゃったことで評価が下がって、70点台まで落ちちゃったんだ。

ていうか凜ちゃん成長しすぎ！

#標的 (ターゲット) 305 「爆食い」

山本と凜ちゃんのは出し物を終えて、ステージの袖へと戻ってきた。

「凜のせいでごめんじゃ…」

「気にすんなって星空。誰にだって失敗はあるぜ。」

山本は自分の失敗で落ち込んでいる凜ちゃんを一切、攻めることなく優しい言葉をかけてあげた。やっぱり山本は優しいな。

「でも凄かったけどね…ここ最近の凜ちゃんの成長には驚くことんばかりだけど…」

「本当にや!?じゃあボンゴレファミリーに入れるぐらいかにや!?」

「え、えっと…」

なんか目を輝かせながら言ってきたんだけど!?俺、マフイアのボスボンゴレになる気はないからね!

凜ちゃん!

「もしかしてツナの右腕になれるのかにや!?」

なんかさつきより目をキラキラ輝かせて言ってきたんだけど!?

「ふぎけんな猫女!十代目の右腕はこの俺だ!」

「いいや凜だにや!」

なんか勝手に獄寺君と凜ちゃんが俺の右腕の座を争い始めたんだけど!?俺はボンゴレを継ぐ気はないから!

「じゃあウチはボンゴレファミリーのボスの妻やね。」

「あら?それは絶対に譲れないわ。」

なんか今度は希さんとツバサさんまで争いを始めてきたんだけど!?

4人の騒動は続いてるけど、俺は無理やり話を続けた。

「え、えっと…次は誰だっけ…?」

「次は私の出番です♪」

「次は花陽ちゃんか。なんか嬉しそうだけど、そんなに楽しい出し物

なの？」

「はい！最高の出し物です！」

目を輝かせながらそう言う花陽ちゃん。花陽ちゃんが最高の出し物って言うってるけど、一体どんな出し物何だろう？

そんなことを俺が考えていると、花陽ちゃんの出番がまわってきた。花陽ちゃんは、それじゃ行ってきましたと俺たちに告げた後、上機嫌なままお年寄りたちの前に出て行った。

「次は小泉花陽さんの番です。」

リボンがそう言うけど、花陽ちゃんは何も用意してない。本当に花陽ちゃん何をするんだろう？

すると俺たちのいるステージの袖の方から、ローラーのついた長机が運ばれてきた。机の上にはあったのは、

「お、美味しそう…」

星の形をした大量のおにぎりだった…ま、まさか…

「今回の出し物は、ここにある星型のおにぎり77個を全部たいらげるといいう出し物です。」

やっぱりだー！どおりで花陽ちゃんが上機嫌だったわけだよ！そりゃ大好きなお米があんなに食べられるってなったら、上機嫌になるよね！というかたこれ出し物なの!?

「それでは！はりきってどうぞー！」

そう言うと手をあわせていただきます！と言った後、花陽ちゃんは次々とおにぎりをほおぼっていった。相変わらず凄い食欲だね…

「相変わらず小泉はすげえ食べっぷりだよな。成長期ってたくさん食べるとって聞くもんな。」

「いや成長期だとしても異常だと思うが…」

「むしろ食べすぎじゃあ…」

「小泉さんってあんなに食欲旺盛だったのね…」

相変わらずの山本の天然の発言に、英玲奈さんとあんじゅさんは若干呆れており、ツバサさんは花陽ちゃんの知られざる一面を見て、衝撃を受けていた。

「やはりスクールアイドルを止めてから、今まで押さえていた食欲が

爆発したのでしょうか…」

「スクールアイドルをやった時はずっと食欲と戦ってたのね花陽は…」

幸せそうにおにぎりを食べている花陽ちゃんを見て海未ちゃんと、絵里さんが考察していた。そんなに我慢しながらスクールアイドルやってたの花陽ちゃん…？

「本当に花陽はどうなるのかしら…今度、ウチのびょういん西木野総合病院で一診察してみたほうがいいかもしれないわね…」

「花陽さんそんなに悪いんですか…？」

「もしかして命に関わるの…」

なんかこっちはこっちで深刻になってるんだけど!?

確かに心配になるのはわかるけどさ!

そんなことを話しているうちにも、次々におにぎりがなくなっていく。最初は戸惑っていたお年寄りたちも、ただただ黙って花陽ちゃんが食べ終わるを見守っていた。

そして残り少なくなったその時、

「はう!」

花陽ちゃんが奇妙な声あげた。するとみるみる顔が真っ青になっていき、両手でお腹を押え始めた。あ、あれって…

「なんか顔色が…」

「ま、まさか…」

花陽ちゃんがおかしいこと希さんとにこさんも気づいた。

「お、お腹が…」

た、大変だ!早く行かないと!

俺はすぐさま花陽ちゃんのところへ走った。

「大丈夫!?花陽ちゃん!」

「す、すいません…急にお腹が…」

ど、どうしよう!と、とりあえず花陽ちゃんを別の部屋に移動させて安静にさせないと!

「ごめん!花陽ちゃん!」

「ツツツツツナさん!」

俺は花陽ちゃんをお姫様抱っこした。その瞬間、あれだけ顔が真っ青だったのに急に真っ赤になってる!?!どうしよう!急いで運ばなくちゃ!

この後、俺は花陽ちゃんは別室に運んだ。少し安静にすると花陽ちゃんは回復した。よかったあ…

ちなみに出し物は腹痛を起こしたことで点数は入らなかったんだ。でも花陽ちゃん嬉しそうな顔をしてたんだ。

何でだろう?何かあったのかな?